

文京区

原町西遺跡

— 最高裁判所旧白山宿舎地区における埋蔵文化財調査 —



2025・8

東京都埋蔵文化財センター

文京区

原町西遺跡

— 最高裁判所旧白山宿舎地区における埋蔵文化財調査 —



2025・8

東京都埋蔵文化財センター

原町西遺跡の概要

文京区白山4丁目（地番表示：126-7、住居表示：10-8）に所在する最高裁判所職員住宅跡地（白山4丁目国有地）は、2015（平成27）年に所管換がなされて2016（平成28）年に登記名義人名称が財務省に変更となりました。2023（令和5）年6月から2024（令和6）年3月まで発掘調査が行われました。

敷地面積は1,154㎡で、敷地南西に小石川植物園、北西に区立第十中学校が所在する第一種低層住居専用地域であり、文化財庭園等景観形成特別地区に含まれます（①）。原町西遺跡から東方約2kmには1797（寛政9）年に「瘡守稻荷」が移された大円寺が所在します。

文化財包蔵地（文京区 No.145）として「原町西」と名付けられました。当該地が最高裁判所の所有となったのは1950（昭和25）年で、鉄筋コンクリート造の官舎が構築される1968（昭和43）年までは、平屋の戸建て官舎が3棟所在していました。1969（昭和44）年に建築された鉄筋コンクリート造の地上3階建の建物は、各階3住戸の計9住戸の構造で、2022（令和4）年に解体されました。

最高裁判所の敷地となる以前は、白山4丁目126番に広大な敷地を所有していた阪谷芳郎（1863-1941）の敷地の一部でした（②）。阪谷芳郎は、第一次西園寺内閣大蔵大臣、東京市長、貴族院議員、専修大学学長を務めた実業家・政治家でした。阪谷は、1895（明治28）年に小石川原町の敷地を取得し、1899（明治32）年に「小石川原町邸（原町126-1）」に引っ越しました。発掘調査の対象となった「原町126-7」には、1901（明治34）年から財団法人備中館の



① 原町西遺跡調査地点と御殿堀想定推定範囲（1/50000）

「基盤地図情報」・「基盤地図情報数値標高モデル」（国土地理院）



② 1925一地形図東京近傍十一號「早稲田」

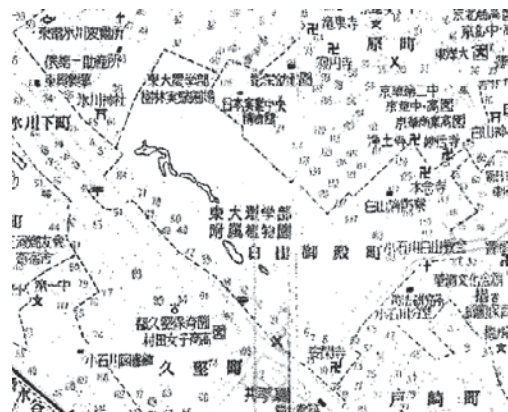
『明治・大正・昭和東京1万分1地形図集成』
柏書房1983所収、国土地理院所蔵

寄宿舍がありました。備中館は、阪谷の出身地である岡山県出身学生のために 1899（明治 32）年に設置された財団法人です。阪谷芳郎の本邸が所在した部分（126-1）は、阪谷の死後 1943（昭和 18）年に配偶者（渋沢栄一の娘）の甥の息子である渋沢敬三が代表を務める財団法人龍門社が買収しました。龍門社では、渋沢敬三が栄一の構想していた日本実業史博物館の開設に尽力しましたが、時代状況のため実現することが叶いませんでした（③）。膨大な蒐集資料は、現在立川市に所在する国文学研究資料館に「日本実業史博物館準備室旧蔵資料（渋沢コレクション）」として収蔵されています。阪谷邸は、1947（昭和 22）年には占領軍に接収され、接収解除後に本調査区部分は最高裁判所に売却されました。阪谷邸が所在した原町 126 番地には、そのほかにみずほ銀行（旧・第一銀行）あるいは日本銀行の社宅が所在するのは、それぞれに関係する渋沢敬三に由来するものと思われます。

本調査区の歴史的変遷に大きく関わるのが、南側に位置する小石川植物園の存在です。小石川植物園の前身は 1684（貞享元）年に徳川幕府が設置した「小石川御薬園」です。さらにその前身としては徳川 3 代將軍家光の四男綱吉の館林藩下屋敷が設けられた 1652（承応元）年に遡ります。1680（延宝 8）年に綱吉が 5 代將軍となり、小石川の館林藩下屋敷も小石川（白山）御殿として整備されました。1698（元禄 11）年には御殿廻りの堀（御殿堀）が構築され、本調査区から御殿堀の外周部分がほぼ直角に屈曲している状況が確認されました（④）。

1713（正徳 3）年に御殿堀が廃絶し埋められて以降は、徳川綱吉の家臣たちの拝領屋敷として推移しました。1714（正徳 4）年の時点で、原町西の北西側 2/3 は橋本家、南東側 1/3 は大前家の屋敷地となりました。

調査区南東部の大前家敷地に相当すると思われる箇所から大量の‘かわらけ’と土玉が出土しました（⑤）。18 世紀の江戸市中には、皮膚病に効用があると言われていた「笠森稲荷」あるいは「瘡守稲荷」が二箇所存在していました。一方は谷中の感応寺境内にあった「笠森稲荷」で、門前茶屋の「笠森おせん」は明和三美人と称されていくつもの浮世絵に描かれています。もう一方が小石川（白山）御殿の跡地に所在した大前家の「瘡守稲荷」でした。小川顕道（1737-1816）という小石川御薬園



③「日本実業中央博物館」と記載された住宅地図
1957 ころ『文京区住宅地図』文京区立真砂中央図書館 所蔵



④ 御殿堀外周法面の屈曲部と上水路



⑤ ‘かわらけ’と土玉が大量に出土した大型土坑

の医者が1810（文化7）年に記した『瘡家示訓』別称『瘡守土団子』という書籍には、「瘡守稻荷大明神」と記された幟や石碑、冠木門と共に茶屋の縁台に‘かわらけ’に盛られた団子が描かれています。

1698（元禄11）年に阿波徳島藩蜂須賀綱矩に命じて小石川（白山）御殿を巡る幅10間（約18m）・深さ3間（約5.5m）の水を湛えた素掘りの御殿堀が構築されました。原町西から200mほど南東の日本銀行本店原町家族寮地点で確認された御殿堀の幅は15mほどで深さは3mほどでしたが、土手などの構築物の存在を勘案すれば、ほぼ文献に記載された規模の大規模な構築物が、今回の調査によってほぼ想定された場所で確認されました。「小石川御殿図」という御殿の外周部分を描いた絵図（渋谷：第23図、289頁）によれば、御殿の北西部分すなわち今回の調査区近辺において千川上水からの取水口が描かれていましたが、絵図に描かれたように上水路が検出されました（⑥）。絵図では一つの上水路が描かれていましたが、実際には御殿堀に注ぎ込む上水路が3本確認されました。それぞれの上水路は、溝底部の高さが異なり、高い上水路から低い上水路へと時期を経て作り替えられたことが推定されました。今後周辺の発掘調査によって、千川上水の変遷が例証されるか期待されます。御殿堀は、1713（正徳3）年には埋め戻されますので、水を湛えた堀がこの地で見られたのもわずか15年ほどの短い期間のことでした。御殿堀の堆積層最下部には、粘土・砂・土の堆積物が「年縞」のように水平に堆積している状況が確認されました（⑦）。

御殿堀の掘り込みは、おおむねローム層の上面から確認されていますが、屈曲部付近では黒色土がやや厚く堆積していました。黒色土からは縄文時代前期中頃の黒浜式土器が出土しており、5m×4mほどの縄文時代の竪穴建物跡が確認されました。ただし南東側三分の一ほどは御殿堀の構築によって失われていました（⑧）。御殿堀を構築した際にも縄文時代の竪穴建物跡の黒色土は意識されていたようで、御殿堀屈曲部に設けられた階段状の構築では、黒色土部分のステップ部分にローム土を貼り付けていました（⑨）。しかし御殿堀を構築した江戸時代の人たちは、その黒色土が縄文時代の産物であるということは、当然のことながら意識していなかったと思われます。



⑥ 上水路－3（19号遺構）の断面



⑦ 御殿堀底部の堆積層



⑧ 縄文時代前期建物跡（98号遺構）



⑨ 御殿堀屈曲部上部にローム土で貼られたステップ

Summary

The former Supreme Court staff housing area is located in Hakusan 4-chome, Bunkyo-ku. Excavation were conducted from June 2023 to March 2024. The site area is 1,154 m², and it is located with Koishikawa Botanical Garden to the southwest. Bunkyo-ku No. 145 was named "Haramachi Nishi" Site. The land became the property of the Supreme Court in 1950, and three dwelling houses stood there until 1968. The three-story building, made of reinforced concrete was built in 1969 and was demolished in 2022. Before 1950, it was part of the estate of Yoshiro SAKATANI(1863-1941), who owned a vast residential land. SAKATANI was a businessman and politician who served as Minister of Finance in the first SAIONJI Cabinet, Mayor of Tokyo, member of the House of Peers, and president of Senshu University. SAKATANI acquired the land in 1895. In 1901, the dormitory of the Bityukan Foundation was located here, the site of the excavation. BITYUKAN is a foundation established in 1899 for students from Okayama Prefecture, SAKATANI's hometown. After SAKATANI's death, the part where SAKATANI's main residence was located was purchased in 1943 by the Ryumonsha Foundation, represented by SHIBUSAWA Keizo, the nephew of his spouse (SHIBUSAWA Eiichi's daughter). At Ryumonsha, SHIBUSAWA Keizo tried to open 'the Japanese Business History Museum' that SHIBUSAWA Eiichi had envisioned, but due to the circumstances of the times, this was not realized. The vast collection of materials is currently stored in 'the National Institute of Japanese Literature' in Tachikawa City as the "SHIBUSAWA Collection". The SAKATANI House was requisitioned by the occupying forces in 1947, and after the requisition was lifted, the area covered by this survey was sold to the Supreme Court.

The existence of Koishikawa Botanical Garden, located to the south, is closely related to the historical transition of this excavated area. The predecessor of Koishikawa Botanical Garden was the Kishikawa Imperial Medicinal Garden, established by the Tokugawa Shogunate in 1684. Its predecessor dates back to 1652, when the Tatebayashi Domain residence of Tokugawa Tsunayoshi was established. In 1680, TOKUGAWA Tsunayoshi became the 5th Shogun, and the Tatebayashi Domain's residence in Koishikawa was developed as the Koishikawa Palace. In 1698, a moat (Gotenbori) was constructed around the palace. In this survey area, it was confirmed that the outer perimeter of the moat was curved. After the Gotenbori was abolished and filled in 1713, it continued to be used as residences for TOKUGAWA Tsunayoshi's vassals. As of 1714, 2/3 of the northwest side of Haramachi Nishi became the residence of the HASHIMOTO, and 1/3 of the southeast side became the residence of the OHMAE. A large amount of 'Kawarake' unglazed earthenware dish, and 'Dodama' earthen balls were excavated from an area thought to correspond to the OHMAE's residence in the southeast of the excavated area. In the 18th century, there were two places in Edo city called "Kasamori Inari" Inari Shrine, which were said to be effective for skin diseases. One was "Kasamori Inari" located in the grounds of Kannouji Temple in Yanaka. The other was the OHMAE's "Kasamori Inari" located on the former site of the Koishikawa Palace. In 1698, HACHISUKA Tsunanori, who was lord of the Awa Tokushima Domain ordered the construction of a moat filled with water, surrounding the Koishikawa Palace. According to the "Koishikawa Palace Map," illustration from the Edo period, a drawing of the palace's perimeter, a water intake from the Senkawa Aqueduct was drawn in the northwest part of the palace. Gotenbori was filled up in 1713.

Kurohama-type pottery from the mid-Early Jomon period was excavated from the black soil, and the remains of a Jomon pit dwelling measuring approximately 5m - 4m were confirmed. However, about one-third on the southeast side was lost due to the construction of Gotenbori.

序 言

文京区原町西遺跡（No.145）は、小石川植物園の北側に隣接し、文化財庭園等景観形成特別地区の緑豊かな住宅地に位置します。建築されてから半世紀余りになる旧最高裁判所職員住宅跡地の再開発事業に伴って2023（令和5）年から2024（令和6）年にかけて発掘調査が行われました。

調査区からは、1698（元禄11）年に構築された徳川五代将軍綱吉ゆかりの小石川御殿の周囲に構築された御殿堀の外側法面が40mにわたって検出されました。小石川御殿は、北西から南東にかけて流れる谷端川左岸の河岸段丘にそって、北西－南東を長軸とする短辺100m・長辺400mほどの長方形を呈します。北側の一角では敷地が内側に屈折しており、本調査区からは南西－北東の堀と北西－南東の堀がほぼ直角に屈曲するコーナー部分が確認されました。御殿堀については、当センターが2018（平成30）年から2019（平成31）年にかけて調査した「日本銀行本店原町家族寮地点」を始めとして周辺の複数の地点において確認されています。

千川上水の水を引き入れた御殿堀は、わずか15年ほどで埋め立てられましたが、その跡地は武家屋敷として利用されました。こうした武家地の一角である本調査区の南東部から、大量の‘かわらけ’と土玉が出土しました。当地には皮膚病の平癒を願う人々が土玉を供えた‘かわらけ’を奉納した「瘡守稻荷」が存在したことが江戸時代の文献記録に記されていました。文献記録に記された18世紀江戸時代の習俗が、300年の時を経て地中から現れました。

また更に遡る痕跡として縄文時代前期の竪穴建物跡が見つかりました。この頃は、縄文海進として知られる時期で、文京区のこの辺りまで東京湾が広がっていました。

より新しい時代には、東京市長などを務めた阪谷芳郎邸の一部でした。

こうした様々な時代の痕跡をまとめた本書が地域研究の資料として、また埋蔵文化財に対する理解を深めるうえで地域の方々のためにご活用頂ければ幸いです。

本報告の刊行にあたり、ご協力とご指導を頂きました財務省関東財務局東京財務事務所、東京都教育委員会、文京区教育委員会をはじめ多くの方々に御礼申し上げます。

令和7年8月

公益財団法人 東京都教育支援機構
理事長 坂東 眞理子

例 言

- 1 本書は、文京区原町西遺跡（文京区 No.145）の埋蔵文化財発掘調査報告（東京都埋蔵文化財センター踏査報告 第 389 集）である。
- 2 原町西遺跡の埋蔵文化財調査事業は、財務省 関東財務局 東京財務事務所の委託を受け、公益財団法人 東京都教育支援機構 東京都埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査区所在地：文京区白山四丁目（地番表示：126-7、住居表示：10-8）
- 4 調査対象面積：1,154㎡（調査終了面積：1,154㎡）
- 5 発掘調査期間：2023（令和五）年 6 月 7 日～2024（令和六）年 3 月 31 日
一次整理期間：2023（令和五）年 6 月 7 日～2024（令和六）年 4 月 30 日（文京区白山四丁目）
二次整理期間：2024（令和六）年 4 月 1 日～2025（令和七）年 3 月 31 日（豊島区西巣鴨一丁目）
- 6 事業者との調整は、東京都 教育庁 地域教育支援部 管理課が担当した。
課長代理（埋蔵文化財担当）鈴木 徳子
埋蔵文化財担当 石井 香代子
- 7 調査担当
東京都埋蔵文化財センター 白山四丁目分室
調査研究課長代理 小林 裕
調査研究主任 五十嵐 彰
調査協力
大日本土木株式会社 東京支店（請負会社）
株式会社ダイサン（協力会社）
- 8 本報告の執筆・編集は、五十嵐が行った。第Ⅲ章 第 1 項 縄文時代の遺物記載および第Ⅴ章の縄文時代総括については、佐藤 亮太（東京都埋蔵文化財センター）による。第Ⅴ章の御殿堀出土資料については石崎 俊哉（元 東京都埋蔵文化財センター 職員）による。
第Ⅳ章の依頼原稿（1. 渋谷 葉子、2. 長沢 利明、3. 山根 洋子、4. 鬼崎 華・井口 誠一・渡邊 稜也、5. 長佐古 真也）については、それぞれを独立した論考として挿図番号・文献についても個別に扱った。
- 9 本調査については、以下で発表した。本書の刊行をもって正式な報告とする。
 - ・口頭発表
2024 年 3 月 20 日：東京都埋蔵文化財センター 遺跡発掘調査発表会
2024 年 8 月 6・7 日：令和 6 年度東京都公立学校中堅教諭等資質向上研修Ⅰ「選択研修」
2025 年 2 月 9 日：第 50 回東京都遺跡調査・研究発表会
 - ・紙上発表
2023 年 12 月 22 日発行：「遺跡だより 文京区 原町西遺跡」『たまのよこやま』第 135 号、4 頁
2024 年 3 月 20 日発行：「文京区 原町西遺跡」『東京都埋蔵文化財センター 遺跡発掘調査発表会 2023』5-6 頁

2024 年 9 月 27 日発行：「文京区白山で発掘して明らかになった江戸幕府のお堀と江戸庶民の笠森稲荷信仰」『東京の文化財』第 136 号、4-5 頁

2025 年 2 月 9 日発行「文京区 原町西遺跡」『東京都遺跡調査・研究発表会 50 発表要旨』
8・9 頁

2025 年 3 月 5 日発行「文京区白山四丁目地区（原町西遺跡）」『東京都埋蔵文化財センター年報』
第 44 号、26 頁

なお原町西遺跡については、東京都立埋蔵文化財調査センターにおいて「今月の逸品 VOL.96」として 2023 年 9 月から 10 月にかけて速報展示がなされた。

また『関東考古学フェア 2025 年カレンダー』（全国埋蔵文化財法人連絡協議会 関東ブロック加盟法人）において原町西遺跡出土資料が「11 霜月 カワラケと土玉」として写真と解説文が掲載された。

東京都埋蔵文化財センターのホームページ（<https://www.tomaibun.jp/excavation/index.html> 調査研究＞発掘トピックス＞発掘場所：原町西遺跡・2023 年度・2024 年度）において調査の進捗に応じて 7 件の情報を公開した（更新日：2023.7.28、8.30、9.29、10.31、12.26、2024.2.28、12.24）。

- 10 標高値は、T.P.（東京湾平均海面）を基準とした。

標準座標値は、南西隅を起点とした世界測地系による。[A-1] X= - 30790 Y= - 8140

南北の Y 軸にアルファベットを A から K まで、東西の X 軸に 1 から 9 までの数字を付して、30m × 45m におよぶ調査区をカバーした。

出土遺物に対する注記記号は、「HRW」である。

ガラス製品の掲載遺物一覧における「＊」は現存部分での最大長、「（）」は完形の場合の想定長、「[]」は蓋を含めた長さを示す。

- 11 挿図として使用した地図の出典は、以下の通りである。

原町西遺跡の概要①：「基盤地図情報」・「基盤地図情報数値標高モデル」（国土地理院）

原町西遺跡の概要②：1925（大正十四）「早稲田」『一万分一地形図東京近傍十一號』『明治・大正・昭和東京 1 万分 1 地形図集成』柏書房 1983 所収、国土地理院 所蔵

原町西遺跡の概要③：1957 ごろ『文京区住宅地図』文京区立真砂中央図書館 所蔵

第 1 図：東京都遺跡地図情報インターネット提供サービス（東京都教育委員会）より
該当部分を一部加工

第 5 図：基盤地図情報（国土地理院）を基に成瀬 2008「白山御殿の惣囲いについて」

『東京大学構内遺跡調査研究年報 6 2006 年度』Ⅲ -3 図「白山御殿堀範囲推定図」を加筆

Ⅳ -1 第 1 図：「（江戸全図）」（寛永 19 ～ 20 年頃、部分）白杵市教育委員会 所蔵

Ⅳ -1 第 2 図：新板江戸外絵図（寛文 11 年、部分）国立国会図書館デジタルコレクション

Ⅳ -1 第 3 ～ 16 図：御府内場末往還其外沿革図書 国立国会図書館デジタルコレクション

Ⅳ -1 第 17 図：江戸絵図 3 号（慶応年間、部分）国立国会図書館デジタルコレクション

Ⅳ -1 第 18 ～ 22 図：屋敷渡預絵図証文 国立国会図書館デジタルコレクション

Ⅳ -1 第 23 図：小石川御殿図 文京ふるさと歴史館 所蔵

Ⅳ -1 第 24・25 図：千川上水江戸府内絵図 練馬区立石神井公園ふるさと文化館 所蔵

Ⅳ -1 第 26 図：江戸水道配水図 練馬区立石神井公園ふるさと文化館 所蔵

Ⅳ -2 第 1 図：『瘡家示訓』 国立国会図書館 請求記号 851-52 コマ番号 6/28

- 12 発掘調査および整理作業・報告書作成において、多くの方々のご指導・ご協力を賜りました。

記して感謝いたします（敬称略）。

青野 誠、天野 賢一、岩淵 令治、岡崎 完樹、小川 望、小川 祐司、梶木 理央、川上 恵、菊地 可南子、
清野 利明、小林 謙一、小林 照子、櫻井 準也、斎藤 進、佐藤 方、鈴木 伸哉、竹内 オサム、
谷川 章雄、丹野 祥枝、都築 由理子、長嶋 幹也、奈良 貴史、成瀬 晃司、古河 いろは、堀内 秀樹、
水本 和美、宮前 功、両角 まり、八木橋 伸浩、山崎 裕子

原町西町会、林町南町会、文京区立第十中学校、文京区教育委員会、文京区立真砂中央図書館、
文京ふるさと歴史館、名古屋陶磁器会館、日本陶磁器意匠センター、三郷陶器株式会社、
江東区森下文化センター

本報告の挿図・観察表の作成について、縄文土器は佐藤 亮太（東京都埋蔵文化財センター）
の指導のもと森本 拓（中央大学大学院学生）、金属製品は両角 太一（大正大学大学院生、現：
信濃町教育委員会）、ガラス製品は大日向 山音（大正大学学生、現：小山市教育委員会）、陶磁
器は石崎 俊哉（元 東京都埋蔵文化財センター 職員）各氏の協力による。

- 13 出土遺物および発掘・整理調査に関わる図面・写真記録等は、東京都教育委員会で保管している。

- 14 本報告書の著作権（日本国著作権法 第 21 条～第 28 条）および編集著作権（著作権法 第 12 条
第 1 項）は、公益財団法人 東京都教育支援機構 東京都埋蔵文化財センターが保有する。

目 次

原町西遺跡の概要

Summary

序言

例言

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経緯	1
2 調査区の位置と調査の方法	1
3 調査の経緯	6
4 報告の構成	12

II 遺跡の位置と環境

1 原町西の地形的環境	13
2 原町西の歴史的環境	13
3 近世の調査区	15
4 近代以降の調査区	16

III 遺構と遺物

1 縄文時代	17
2 近世 1 面	30
3 近世 2 面	90
4 近代	210

IV 分析

1 原町西遺跡の江戸時代における土地利用（渋谷 葉子）	267
2 笠森稲荷信仰遺構に関する民俗学的考察（長沢 利明）	289
3 原町西遺跡出土の動物遺体（山根 洋子）	298
4 原町西遺跡における堆積物の特徴と産出した植物珪酸体化石（鬼崎 華・江口 誠一・渡邊 稜也）	304
5 原町西遺跡出土土玉・カワラケの実体顕微鏡観察および EDX を用いた元素分析 （長佐古 真也）	309

V 成果と課題

316

文献

330

抄録

挿図目次

第1図 原町西遺跡の位置(1/10,000)(東京都遺跡地図情報インターネット提供サービス: https://tokyo-iseki.metro.tokyo.lg.jp/map.html#main に加筆)	2	第43図 近世1面の土坑(11:1/40)	63
第2図 調査区の区分および試掘坑の位置(1/200)	3	第44図 近世1面のピット(1:1/40)	66
第3図 全遺構分布図(1/200)	4	第45図 近世1面のピット(2:1/40)	67
第4図 調査区全体写真(1/200)	5	第46図 近世1面のピット(3:1/40)	68
第5図 御殿堀に関連する調査事例(成瀬2008「白山御殿堀範囲推定図」:176頁に加筆)(1/5,000)	6	第47図 近世1面のピット(4:1/40)	69
第6図 縄文時代の遺構分布図(1/200)	20	第48図 近世1面のピット(5:1/40)	70
第7図 縄文時代の遺構(1:1/40)	21	第49図 近世1面の遺物(1:1/3)	73
第8図 縄文時代の遺構(2:1/40)	22	第50図 近世1面の遺物(2:2/3・1/2・1/3)	74
第9図 縄文時代の遺構(3)	23	第51図 近世1面の遺物(3:1/3・1/4)	75
第10図 縄文時代の遺構(4:1/40)	24	第52図 近世1面の遺物(4:2/3・1/2・1/3)	76
第11図 縄文時代の遺物(1:1/3)	25	第53図 近世1面の遺物(5:1/3)	77
第12図 縄文時代の遺物(2:1/3)	26	第54図 近世1面の遺物(6:2/3・1/3・1/4)	78
第13図 縄文時代の遺構(5:1/200)	26	第55図 近世1面の遺物(7:1/3)	79
第14図 縄文時代の遺物(3:1/3)	27	第56図 近世1面の遺物(8:1/2・1/3)	80
第15図 縄文時代の遺物(4:1/3)	28	第57図 近世1面の遺物(9:1/3・1/4)	81
第16図 近世1面の遺構分布図(1/200)	31	第58図 近世1面の遺物(10:2/3・1/2・1/3)	82
第17図 近世1面の御殿堀(1:1/160)	33	第59図 近世2面の遺構分布図(1/200)	91
第18図 近世1面の御殿堀(2)	34	第60図 近世2面の井戸(1:1/40)	93
第19図 近世1面の御殿堀(3:1/80)	35	第61図 近世2面の井戸(2:1/40)	94
第20図 近世1面の御殿堀(4:1/40)	36	第62図 近世2面の溝(1/40・1/80)	95
第21図 近世1面の上水路(1:1/80)	38	第63図 近世2面の畝間溝(1/40)	97
第22図 近世1面の上水路(2:1/6・1/50)	39	第64図 近世2面の地下坑(1:1/40)	98
第23図 近世1面の上水路(3)	40	第65図 近世2面の地下坑(2:1/40)・ 近世2面の地下室(1)	99
第24図 近世1面の上水路(4:1/80)	41	第66図 近世2面の地下室(2:1/40)	100
第25図 近世1面の上水路(5:1/80)	42	第67図 近世2面の土坑(1:1/50・1/100)	104
第26図 近世1面の上水路(6:1/6・1/50)	43	第68図 近世2面の土坑(2)	105
第27図 近世1面の上水路(7:1/80)	44	第69図 近世2面の土坑(3)	106
第28図 近世1面の上水路(8:1/6・1/50)	45	第70図 近世2面の土坑(4)	107
第29図 近世1面の井戸(1:1/40)	46	第71図 近世2面の土坑(5:1/40)	108
第30図 近世1面の井戸(2:1/40)	47	第72図 近世2面の土坑(6:1/40)	110
第31図 近世1面の井戸(3)	48	第73図 近世2面の土坑(7:1/40)	113
第32図 近世1面の溝(1/40)	48	第74図 近世2面の土坑(8:1/40)	114
第33図 近世1面の土坑(1:1/40)	49	第75図 近世2面の土坑(9:1/40)	116
第34図 近世1面の土坑(2:1/40)	50	第76図 近世2面の土坑(10:1/40)	118
第35図 近世1面の土坑(3:1/40)	51	第77図 近世2面の土坑(11:1/40)	119
第36図 近世1面の土坑(4:1/40)	53	第78図 近世2面の土坑(12:1/40)	121
第37図 近世1面の土坑(5:1/40)	55	第79図 近世2面の土坑(13:1/40)	123
第38図 近世1期の土坑(6:1/40)	56	第80図 近世2面の土坑(14:1/40)	124
第39図 近世1面の土坑(7:1/40)	58	第81図 近世2面の土坑(15:1/40)	127
第40図 近世1面の土坑(8:1/40)	59	第82図 近世2面の土坑(16:1/40)	128
第41図 近世1面の土坑(9:1/10・1/40)	61	第83図 近世2面の土坑(17:1/40)	129
第42図 近世1面の土坑(10:1/40)	62	第84図 近世2面の土坑(18:1/40)	130
		第85図 近世2面の土坑(19:1/40)	131
		第86図 近世2面の土坑(20:1/40)	134

第 87 図	近世 2 面の土坑 (21 : 1/40)	137
第 88 図	近世 2 面の土坑 (22 : 1/40)	138
第 89 図	近世 2 面の土坑 (23 : 1/40)	139
第 90 図	近世 22 面の土坑 (24 : 1/40)	140
第 91 図	近世 2 面の土坑 (25)	141
第 92 図	近世 2 面の土坑 (26 : 1/40)	142
第 93 図	近世 2 面の土坑 (27 : 1/40)	144
第 94 図	近世 2 面の土坑 (28 : 1/40)	146
第 95 図	近世 2 面の土坑 (29 : 1/40)	148
第 96 図	近世 2 面の土坑 (30 : 1/40)	149
第 97 図	近世 2 面の柱穴土坑分布図 (1/200)	151
第 98 図	近世 2 面の柱穴土坑 (1 : 1/40)	152
第 99 図	近世 2 面の柱穴土坑 (2 : 1/40)	153
第 100 図	近世 2 面の柱穴土坑 (3 : 1/40)	154
第 101 図	近世 2 面のピット (1 : 1/40)	155
第 102 図	近世 2 面のピット (2 : 1/40)	156
第 103 図	近世 2 面のピット (3 : 1/40)	157
第 104 図	近世 2 面のピット (4 : 1/40)	158
第 105 図	近世 2 面の遺物 (1 : 1/3)	159
第 106 図	近世 2 面の遺物 (2 : 1/3)	160
第 107 図	近世 2 面の遺物 (3 : 1/2・1/3)	163
第 108 図	近世 2 面の遺物 (4 : 2/3・1/2・1/3)	164
第 109 図	近世 2 面の遺物 (5 : 2/3・1/2・1/3)	165
第 110 図	近世 2 面の遺物 (6 : 1/2・1/3・1/4)	166
第 111 図	近世 2 面の遺物 (7 : 1/3)	168
第 112 図	近世 2 面の遺物 (8 : 1/3)	169
第 113 図	近世 2 面の遺物 (9 : 1/2・1/3・1/4)	170
第 114 図	近世 2 面の遺物 (10 : 1/2・1/3)	171
第 115 図	近世 2 面の遺物 (11 : 1/2)	172
第 116 図	近世 2 面の遺物 (12 : 1/2)	173
第 117 図	近世 2 面の遺物 (13 : 2/3)	174
第 118 図	近世 2 面の遺物 (14 : 2/3)	175
第 119 図	近世 2 面の遺物 (15 : 2/3)	176
第 120 図	近世 2 面の遺物 (16 : 2/3・1/2・1/3)	177
第 121 図	近世 2 面の遺物 (17 : 2/3・1/2・1/3)	179
第 122 図	近世 2 面の遺物 (18 : 2/3・1/2・1/3)	180
第 123 図	近世 2 面の遺物 (19 : 2/3・1/2・1/3)	181
第 124 図	近世 2 面の遺物 (20 : 1/2・1/3・1/4)	182
第 125 図	近世 2 面の遺物 (21 : 1/2・1/3・1/4)	183
第 126 図	近世 2 面の遺物 (22 : 2/3・1/2・1/3・1/4)	184
第 127 図	近世 2 面の遺物 (23 : 2/3・1/2・1/3・1/4)	185
第 128 図	近世 2 面の遺物 (24 : 1/2・1/3)	186
第 129 図	近世 2 面の遺物 (25 : 1/2・1/3)	189
第 130 図	近世 2 面の遺物 (26 : 1/2・1/3)	190
第 131 図	近世 2 面の遺物 (27 : 2/3・1/2・1/3)	191
第 132 図	近世 2 面の遺物 (28 : 1/3・1/4)	192
第 133 図	近世 2 面の遺物 (29 : 1/2・1/3・1/4)	193

第 134 図	近世 2 面の遺物 (30 : 1/2・1/3・1/4)	194
第 135 図	近世 2 面の遺物 (31 : 2/3・1/2・1/3)	195
第 136 図	近代の遺構分布図 (1/200)	211
第 137 図	近代の井戸 (1/40)	213
第 138 図	近代の土坑 (1 : 1/40)	214
第 139 図	近代の土坑 (2 : 1/40)	216
第 140 図	近代の土坑 (3 : 1/40)	218
第 141 図	近代の土坑 (4 : 1/40)	219
第 142 図	近代の土坑 (5 : 1/40)	222
第 143 図	近代の礎石 (1 : 1/40)	223
第 144 図	近代の礎石 (2 : 1/40)	224
第 145 図	近代の排水施設 (1/20・1/80)	225
第 146 図	近代の遺物 (1 : 1/3)	227
第 147 図	近代の遺物 (2 : 1/3)	228
第 148 図	近代の遺物 (3 : 1/2・1/3)	229
第 149 図	近代の遺物 (4 : 1/3)	230
第 150 図	近代の遺物 (5 : 1/3)	231
第 151 図	近代の遺物 (6 : 1/3・1/4)	232
第 152 図	近代の遺物 (7 : 1/3・1/4)	233
第 153 図	近代の遺物 (8 : 1/2・1/3・1/4)	234
第 154 図	近代の遺物 (9 : 1/3)	235
第 155 図	近代の遺物 (10 : 1/2・1/3)	236
第 156 図	近代の遺物 (11 : 1/3)	237
第 157 図	近代の遺物 (12 : 1/3)	238
第 158 図	近代の遺物 (13 : 1/4)	239
第 159 図	近代の遺物 (14 : 1/4・1/6)	240
第 160 図	近代の遺物 (15 : 1/10)	241
第 161 図	近代の遺物 (16 : 1/5)	242
第 162 図	近代の遺物 (17 : 2/3・1/2・1/3・1/4)	243
第 163 図	近代の遺物 (18 : 1/3)	244
第 164 図	近代の遺物 (19 : 1/3)	245
第 165 図	近代の遺物 (20 : 1/2・1/3)	246
第 166 図	近代の遺物 (21 : 1/3)	247
第 167 図	近代の遺物 (22 : 1/3)	248
第 168 図	近代の遺物 (23 : 1/3)	249
第 169 図	近代の遺物 (24 : 2/3・1/2・1/3)	250
第 170 図	近代の遺物 (25 : 2/3・1/2・1/3)	251
第 171 図	近代の遺物 (26 : 1/3)	252
第 172 図	近代の遺物 (27 : 1/3)	253
第 173 図	近代の遺物 (28 : 1/3)	254
第 174 図	近代の遺物 (29 : 1/3・1/4)	255
第 175 図	上水路平面図・横断面図 (1/200・1/100)	319
第 176 図	‘かわらけ’法量散布図	323
第 177 図	土玉法量ヒストグラム	323
第 178 図	調査区屋敷割重ね合わせ図 (1/500)	325
第 179 図	遺構間接合図 (1/200)	327

表目次

第1表	98号遺構出土縄文土器掲載資料	28
第2表	遺構外出土縄文土器掲載資料	29
第3表	近世1面 陶磁器・土器掲載資料	86
第4表	近世1面 土製品掲載資料	88
第5表	近世1面 金属製品掲載資料	88
第6表	近世1面 石製品掲載資料	89
第7表	近世1面 ガラス製品掲載資料	89
第8表	近世1面 部材掲載資料	89
第9表	近世2面 陶磁器・土器掲載資料	196
第10表	近世2面 土製品掲載資料	205
第11表	近世2面 金属製品掲載資料	206
第12表	近世2面 石製品掲載資料	208
第13表	近世2面 ガラス製品掲載資料	208
第14表	近世2面 骨角製品掲載資料	209
第15表	近世2面 部材掲載資料	209
第16表	近代 陶磁器・土器掲載資料	257
第17表	近代 土製品掲載資料	259
第18表	近代 金属製品掲載資料	259
第19表	近代 石製品掲載資料	259
第20表	近代 ガラス製品掲載資料	259
第21表	近代 骨角製品掲載資料	260
第22表	近代 合成樹脂製品掲載資料	261
第23表	近代 部材掲載資料	261
第24表	包含層 陶磁器・土器掲載資料	261
第25表	包含層 土製品掲載資料	264
第26表	包含層 金属製品掲載資料	265
第27表	包含層 石製品掲載資料	265
第28表	包含層 ガラス製品掲載資料	265
第29表	包含層 木製品掲載資料	266
第30表	包含層 合成樹脂製品掲載資料	266
第31表	包含層 部材掲載資料	266

第Ⅳ章

1 原町西遺跡の江戸時代における土地利用 (渋谷)

第1図	江戸全図（寛永19～20年、部分） 白杵市教育委員会所蔵	271
第2図	新板江戸外絵図（寛文11年、部分） 国立国会図書館所蔵	271
第3図	御府内場末往還其外沿革図書 延宝年中之形 国立国会図書館所蔵	277
第4図	御府内場末往還其外沿革図書 天和年中之形 国立国会図書館所蔵	277
第5図	御府内場末往還其外沿革図書 元禄十一寅年之形 国立国会図書館所蔵	277

第6図	御府内場末往還其外沿革図書 正徳三巳年頃之形 国立国会図書館所蔵	277
第7図	御府内場末往還其外沿革図書 正徳四午年・同五未年・ 同六申年之形 国立国会図書館所蔵	277
第8図	御府内場末往還其外沿革図書 享保二酉年之形 国立国会図書館所蔵	277
第9図	御府内場末往還其外沿革図書 享保七寅年之形 国立国会図書館所蔵	278
第10図	御府内場末往還其外沿革図書 延享五辰年之形 国立国会図書館所蔵	278
第11図	御府内場末往還其外沿革図書 宝暦二申年之形 国立国会図書館所蔵	278
第12図	御府内場末往還其外沿革図書 当時之形（嘉永7年） 国立国会図書館所蔵	278
第13図	御府内場末往還其外沿革図書 延宝年中之形 国立国会図書館所蔵	278
第14図	御府内場末往還其外沿革図書 天和年中之形 国立国会図書館所蔵	278
第15図	御府内場末往還其外沿革図書 元禄十一寅年之形 国立国会図書館所蔵	279
第16図	御府内場末往還其外沿革図書 当時之形（嘉永7年） 国立国会図書館所蔵	279
第17図	江戸絵図3号（慶応年間、部分） 国立国会図書館所蔵	280
第18図	正徳4年3月晦日付 屋敷渡預絵図証文（橋本敬近・ 大前重職拝領）トレース図 国立国会図書館所蔵	280
第19図	享保18年10月8日付 屋敷渡預絵図証文（橋本敬周上地 大前房次預り）トレース図 国立国会図書館所蔵	281
第20図	享保18年11月16日付 屋敷渡預絵図証文（橋本敬周 上地土山昌紀拝領）トレース図 国立国会図書館所蔵	281
第21図	安永4年10月29日付 屋敷渡預絵図証文（土山紀時上地 鶴田初三郎・木村光休拝領）トレース図 国立国会図書館所蔵	281
第22図	寛政9年5月晦日付 屋敷渡預絵図証文（大前孫兵衛上地 小川康甲預り）トレース図 国立国会図書館所蔵	281
第23図	小石川御殿図 文京ふるさと歴史館所蔵	282
第24図	千川上水江戸府内絵図 練馬区立石神井公園 ふるさと文化館所蔵	282
第25図	千川上水江戸府内絵図（部分トレース図）練馬区立 石神井公園ふるさと文化館所蔵	283
第26図	江戸水道配水図（部分） 練馬区立石神井公園 ふるさと文化館所蔵	283
第1表	屋敷地所持者変遷	268
第2表	屋敷地所有者履歴1	269
第3表	屋敷地相對替一覧	271

2 笠森稲荷信仰遺構に関する民俗学的考察 (長沢)

第1図 大前家の瘡守稲荷(『瘡家示訓』より)	295
写真1 大円寺の瘡護稲荷	291
写真2 大円寺瘡護稲荷の土団子	291
写真3 港区の瘡護稲荷	293
写真4 港区瘡護稲荷のみふくら石	293
写真5 渋谷区清岸寺の瘡護稲荷	293
写真6 世田谷区瀬田の瘡護稲荷	293
写真7 土団子と土器皿の出土状況	295
写真8 出土した土団子	295

3 原町西遺跡出土の動物遺体(山根)

第1図 動物遺体	303
第1表 出土動物種名表	298
第2表 貝類一覧	300
第3表 魚類一覧	301
第4表 哺乳類一覧	302

4 原町西遺跡における堆積物の特徴と 産出した植物珪酸体化石(鬼崎・江口・渡邊)

第1図 柱状サンプルの採取地点	305
第2図 地点5における採取状況	305
第3図 地点6における採取状況	305
第4図 地点5・地点6の柱状図	306
第5図 各層における鉱物抽出の結果	306
第6図 各層から確認された植物珪酸体の例	307
第1表 各層の色分類と植物珪酸体の検出量	308

5 原町西遺跡出土土玉・カワラケの実体顕微 鏡観察およびEDXを用いた元素分析(長佐古)

第1図 土玉・カワラケおよび遺構内検出粘土の 実体顕微鏡画像	310
第2図 EDX分析結果1 主成分元素の二元分布図4種	313
第3図 EDX分析結果2 微量元素の二元分布図4種	314
第4図 モノグラム作成状況	315
第5図 硬化後水洗したモノグラムB2	315
第6図 モノグラム現況	315
第1表 元素分析結果	311

詳細目次（遺構記載頁）

*縄文

98号：17頁

*近世1面

【堀】 1号：30頁（18号：34頁）

【上水路】 19号：36頁、51号・70号：37頁、214号：44頁

【井戸】 218号：49頁、240号：50頁、243号・247号：52頁

【溝】 55号：52頁

【土坑】 20号：52頁、38号：54頁、41号：57頁、45号・57号・60号・115号・118号・143号：60頁、
145号：61頁、164号・166号・172号：63頁、174号～179号・183号・186号・188号：64頁、
192号・195号・198号・206号～208号・222号・226号：65頁、227号・229号・230号・236号：71頁
【ピット】 24号・52号・54号・56号：71頁、58号・59号・61号～63号・75号・76号：72頁、77号～80号：
79頁、101号：80頁、102号～104号：82頁、105号・114号・116号・117号・119号・156号・182号・184号・
185号：83頁、187号・191号・196号・197号・221号・223号～225号・228号：84頁、231号・232号・
235号・237号：85頁

*近世2面

【井戸】 87号：90頁、113号：92頁

【溝】 66号・74号：92頁

【畝間溝】 32号～37号・39号：96頁

【地下坑】 13号：96頁、42号：101頁

【地下室】 44号・216号：101頁

【土坑】 2号：102頁、3号：109頁、5号・6号：111頁、7号・8号：112頁、9号・10号：115頁、11号・12号：
117頁、14号：120頁、15号～17号・21号：122頁、22号・23号・25号・26号：125頁、27号・29号・30
号・31号・43号・47号：126頁、48号：130頁、49号・50号・65号・69号：132頁、71号・72号・81号・
90号：133頁、91号・97号：134頁、99号・100号・110号：135頁、120号：136頁、122号・125号：141頁、
126号・129号・138号～141号：143頁、142号：144頁、144号・146号～147号：145頁、148号～151号・
153号：147頁、189号・213号：148頁、217号・244号～246号：150頁、248号：161頁

【柱穴土坑】 108号・154号・155号・157号～160号：161頁、161号～163号・165号・167号・168号・171号・
173号・180号・181号：162頁、219号・220号：167頁

【ピット】 40号・46号・53号・82号～84号：167頁、85号：168頁、86号：173頁、88号：177頁、89号・
92号～96号・106号：178頁、107号：186頁、109号・111号・112号・136号・137号・152号・203号・204号：
187頁、205号・209号～212号・215号・241号：188頁

*近代

【井戸】 134号：210頁

【土坑】 28号・123号：214頁、127号・133号：215頁、193号・201号・202号・233号：217頁、234号：218頁、
239号：220頁

【礎石】 67号：221頁、73号・124号：222頁、128号：224頁、130号～132号・238号：226頁

【排水施設】 4号・199号：226頁、200号：229頁、121号：231頁

*包含層：232頁

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経緯

文京区白山4丁目（地番表示：126-7、住居表示：10-8）に所在する最高裁判所職員住宅跡地（白山4丁目国有地：第1図）は、2015（平成二十七年）年に所管換がなされて2016（平成二十八年）年に登記名義人名称が財務省に変更された。2019（平成三十一年）年には、定期借地権による「留保財産」として指定され、2021（令和三年）3月には「白山四丁目126番7（地番）地点の埋蔵文化財試掘調査」が、東京航業研究所によって行われた（東京航業研究所2021）。対象範囲に3m×4mの試掘坑を4箇所、2m×5mの試掘坑を1箇所設定して、合計58㎡が対象となった（第2図）。試掘坑1は、調査区の西側[D・E-1・2]に3m×4mで設定された。出土遺物は、磁器碗・皿、陶器碗・德利・鉢・水鉢・土瓶、播鉢、焙烙、‘かわらけ’など90点である。試掘坑2は、調査区の北側[I・J-4・5]に3m×4mで設定された。試掘坑2で確認された「煉瓦造施設並びに土管組みの排水施設」は、本調査における199号遺構に相当する。出土遺物は、縄文土器片、磁器碗・花瓶、陶器碗・德利・甕・鉢、‘かわらけ’、鉄釘など40点である。試掘坑3は、調査区の東側[G-7]に3m×4mで設定された。出土遺物は、磁器碗・皿・小杯・壺、陶器碗・德利・鉢・水鉢、‘かわらけ’、焙烙、瓦など42点である。試掘坑4は調査区の南側[B・C-4・5]に3m×4mで設定された。「多量のかかわらけが混入している」と記載されているが、2号遺構の東側上端部を掘削していることが確認された。出土遺物は、縄文土器片、磁器碗・皿・壺・花瓶、陶器碗・皿・蓋・花瓶・德利・甕・香炉・土瓶、播鉢、‘かわらけ’、焙烙、焼塩壺・焼塩壺蓋、瓦など674点である。試掘坑5は、調査区の南西部[C-3]に2m×5mで設定された。御殿堀（1号遺構）の上端部が確認された。出土遺物は、縄文土器片、磁器碗・皿・蓋、陶器碗・德利・鉢・甕、播鉢、‘かわらけ’、灯明受皿、焙烙、植木鉢、瓦など43点である。

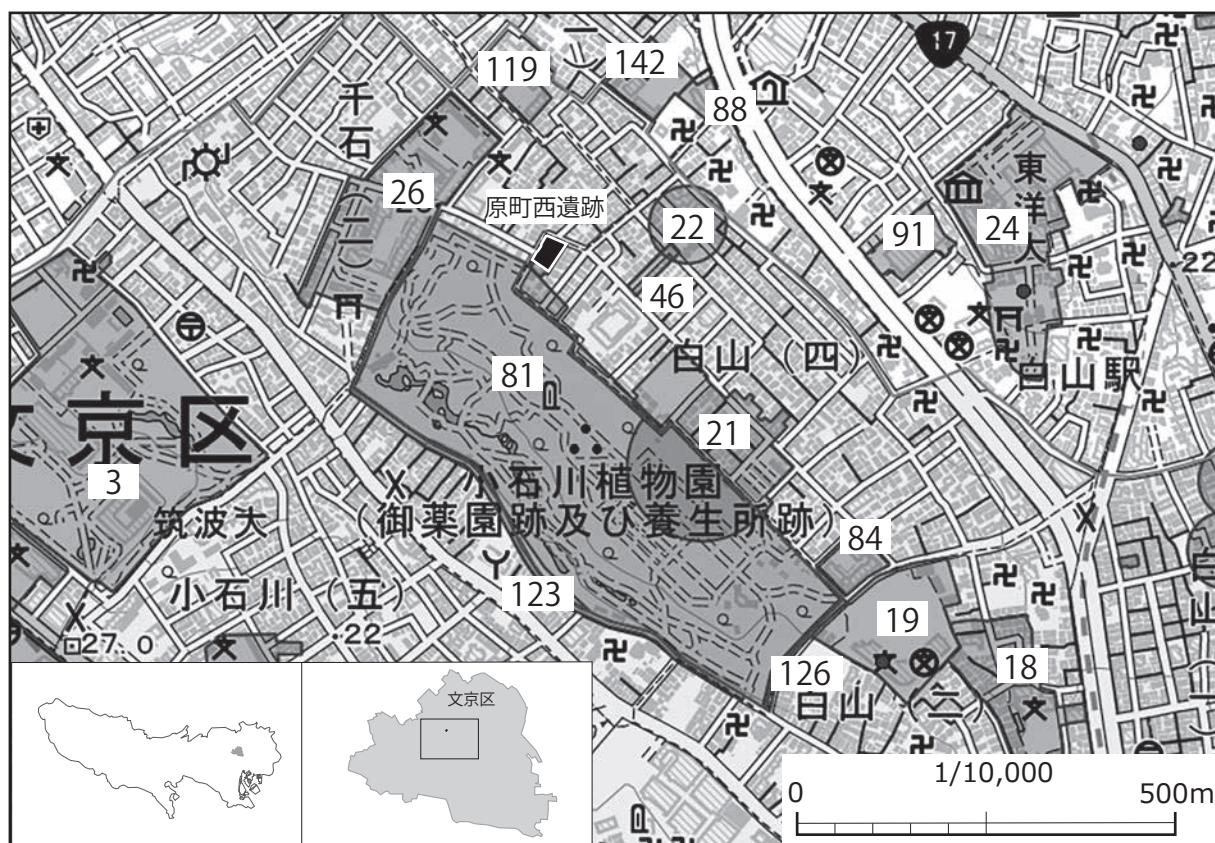
こうした成果を受けて、財務省関東財務局東京財務事務所と公益財団法人東京学校支援機構（2023（令和五）年7月からは東京都教育支援機構）において委託契約が交わされ、2023（令和五）年6月から2024（令和六）年3月まで発掘調査が行われた。

2 調査区の位置と調査の方法

調査の対象は、文京区白山4丁目に所在する最高裁判所職員住宅跡地、1,154㎡である。調査区は、北西-南東に流下する旧谷端川の左岸に立地する小石川植物園の北東部に位置する（第1図）。小石川植物園周囲の街区は、こうした地形に規定されて北西-南東と南西-北東を基軸としている。調査区の北西側と北東側は街路に面しており、南西側と南東側は住宅地に面している。北西側と北東側の街路は、千石（旧町名：林町）と白山（旧町名：原町）の境界となっており、道路の北側は千石2丁目、本調査区を含む南側は白山4丁目となる。

調査区は、都営地下鉄三田線千石駅から南南西方向に直線距離で579m、同じく三田線白山駅から西北西方向に直線距離で787m、東京メトロ丸ノ内線茗荷谷駅から北東に直線距離で803mである。

調査区の形状は、南東部26.3m、北西部37m、北東部28.5m、南東部42.5mで、やや歪んだ長方



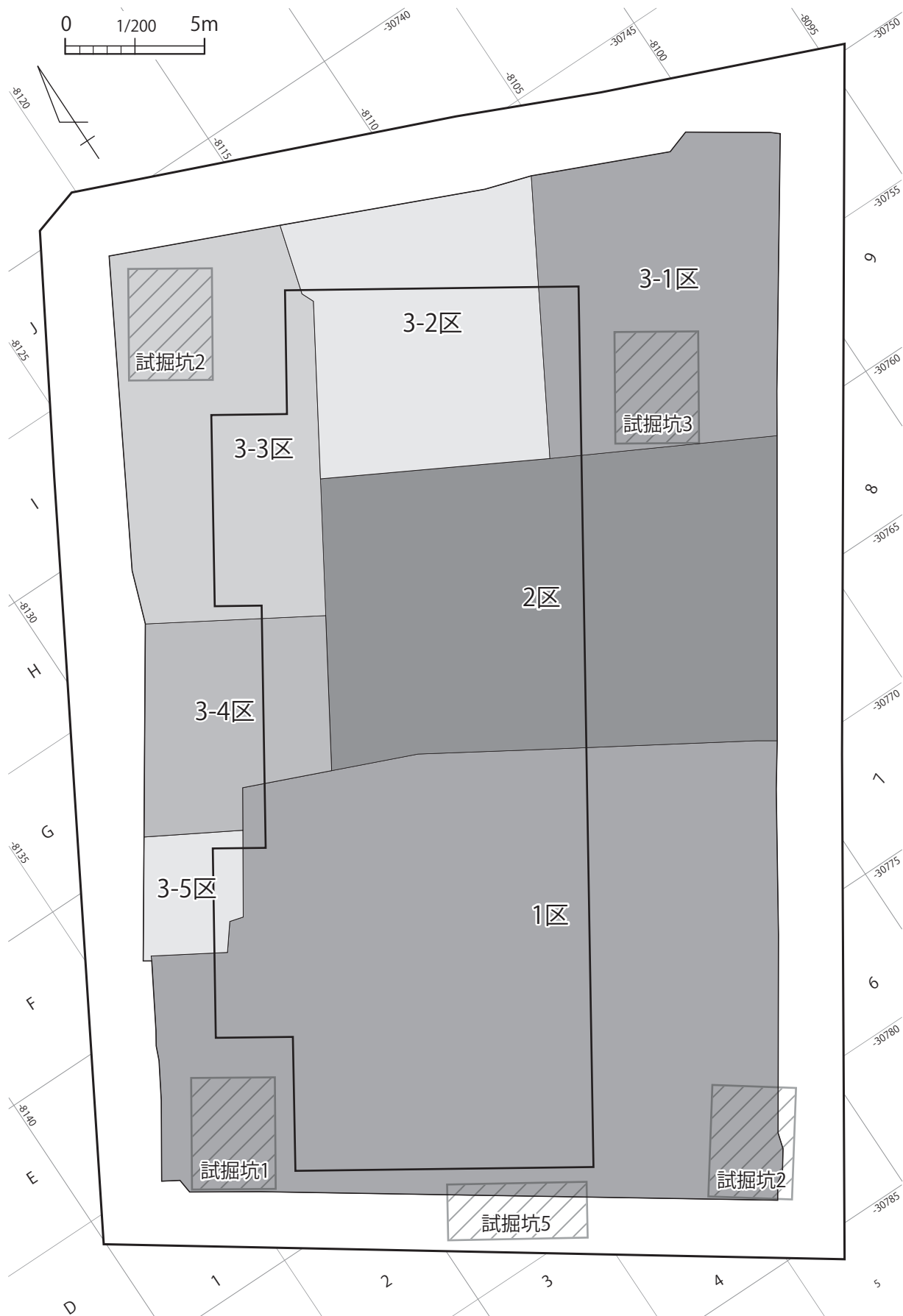
第1図 原町西遺跡の位置 (1/10,000)

東京都遺跡地図情報インターネット提供サービス：<https://tokyo-iseki.metero.tokyo/map.html#main> に加筆

形を呈する。調査区の周囲には鋼板塀が、北西部中央には出入口としてパネルゲートが設置されていた。現地には2022（令和四）年に解体撤去された最高裁判所白山宿舎のコンクリート基礎、北東部中央には直径5mの防火水槽が半円形を呈して残されていた。建物のコンクリート基礎およびコンクリート杭は、調査の都度、支障が生じた場合に撤去した。

発掘調査で発生した土壌は、外部に搬出することなく、場内で保管するように求められたために、全体を大きく3つの区画に区分して発掘調査を行なった。まず1区として南西部のおよそ1/3を調査し、次に2区として中央部のおよそ1/5、最後に3区として北東部・北西部の残り部分を調査することとした（第2図）。面積は、それぞれ1区（330㎡）、2区（170㎡）、3区（324㎡）となる。1号遺構（御殿堀）が存在しない3区については、東から順に3-1区（90㎡）、3-2区（80㎡）、3-3区（94㎡）、3-4区（45㎡）、3-5区（15㎡）と細分して順次調査した。発掘調査の範囲は、調査区の周囲を囲む鋼板塀の控単管から1mの余地を残して設定した。

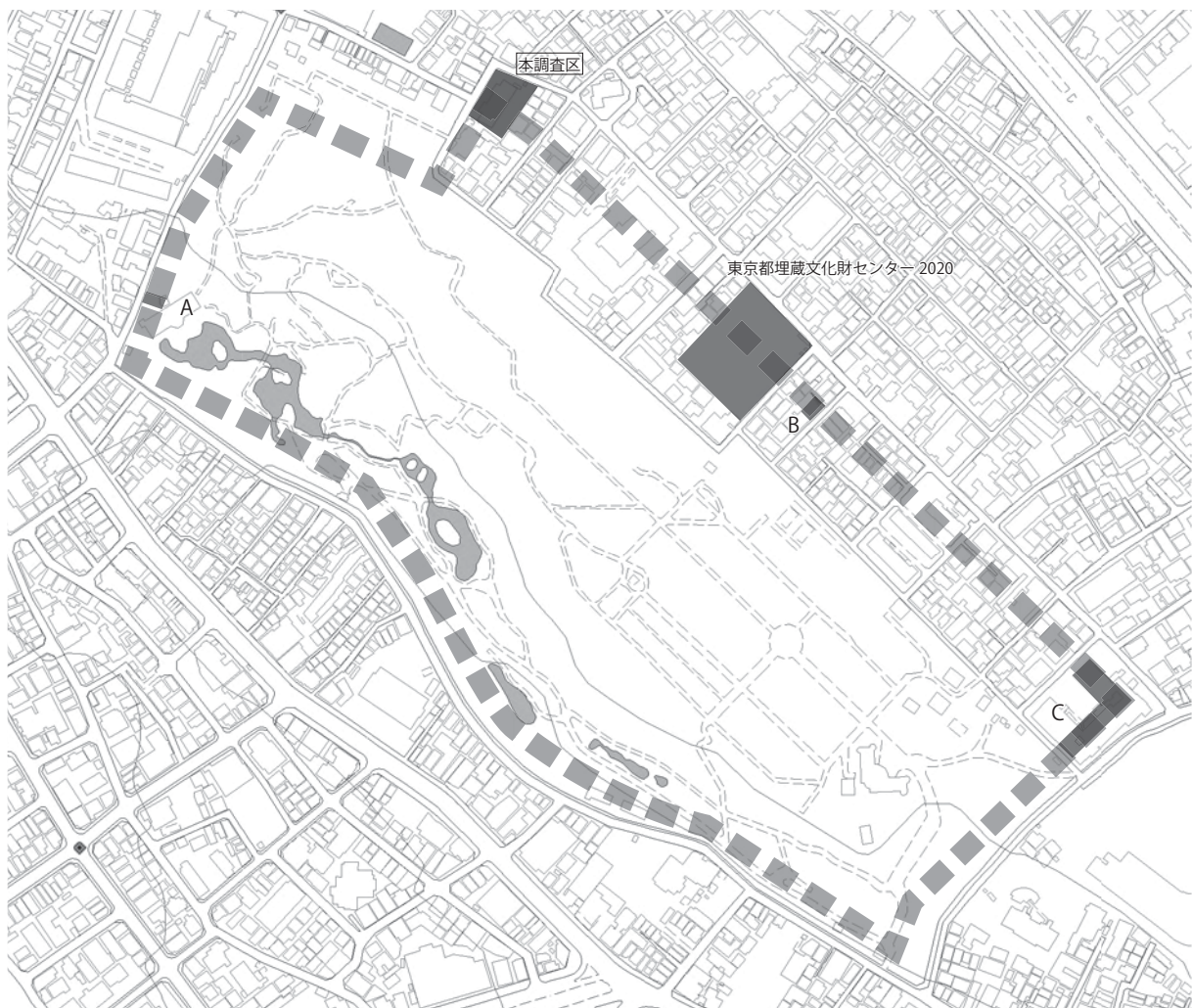
出土遺物の記録は、遺構単位での回収を基本とした。木樋に由来する鉄釘が出土した上水路（19号・70号・214号）および縄文時代の竪穴遺構（98号遺構）から出土した土器・石器・礫および遺構外から出土した縄文土器については、出土位置を記録した。膨大な「かわらけ」と土玉が出土した2号遺構および断ち割り調査を行なった井戸（87号・113号・134号・218号・240号）については、調査の都合上から出土遺物を土壌と共に仮保管した後にフルイ作業を行なって含まれている遺物を回収した。個別遺構の形状および土層断面の計測については、メタシェイプで三次元測量を行い、遺構



第2図 調査区の区分および試掘坑の位置 (1/200)



第4図 調査区全体写真 (1/200)



第5図 御殿堀に関連する調査事例 (1/5,000)

(基盤地図情報(国土地理院)を基に成瀬 2008「白山御殿堀範囲推定図」を加筆)

実測支援ソフトによるデジタル実測とアナログによる手実測を併用した。

3 調査の経緯

2023(令和五)年5月に施行者(財務省関東財務局)および請負業者(大日本土木株式会社)の担当者とそれぞれ現地で打ち合わせを行なった。調査事務所(前半)の設置工事を行なった(5月31日～6月2日)。1区(330㎡)南側より1層の除去作業を開始した(6月7日:写真-1)。鉄筋コンクリート基礎の1回目の撤去作業を開始した(6月19日:写真-2)。調査区の南東部で‘かわらけ’片が集中して出土して、後に2号遺構とした(6月21日:写真-3・4)。2号遺構の掘削作業を開始した(6月26日:写真-5・6)。試掘坑5で確認されていた1号遺構(御殿堀)の存在を確認した(6月28日:写真-7)、3号遺構において動物骨が出土した(写真-8)。2号遺構では、‘かわらけ’片および土玉などの出土資料を土嚢袋を用いて回収した(6月29日:写真-9)。コンクリート基礎の2回目の撤去作業を行なった(7月3日:写真-10)。2号遺構上層部の掘削が終了した(7月5日:写真-11)。遺物を含む残土の回収は、土嚢袋では追い付かず大型のフレキシブル・コンテ

ナに収納することにした。2号遺構の掘削作業が終了した（7月13日：写真-12）。13号遺構（土坑）を確認した（7月21日）。2号遺構の全景写真を撮影した（8月7日：写真-13）。2号遺構出土資料のフルイ選別作業を開始した（8月17日）。19号遺構（上水路-3）の直下で18号遺構（板石群）を確認した（8月21日：写真-14）。帝京大学附属中学校の中学生1名が発掘体験に参加した（8月23日）。足立区立第5中学校の中学生3名が発掘体験に参加した（8月25日：写真-15）。19号遺構（上水路-3）の掘削を開始した（8月28日）。文京区林町町内会の方々30名が御殿堀などを見学された（8月30日）。文京区原町西町内会19名が見学された（8月31日）。文京区立第10中学校の中学生10名が見学された（9月5日：写真-16）。小石川消防署による防火水槽の点検がな



写真-1



写真-2



写真-3



写真-4

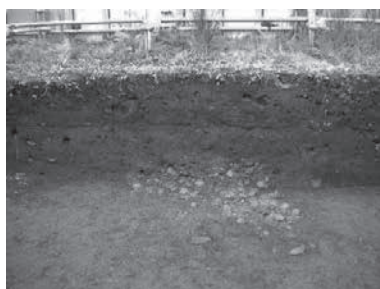


写真-5



写真-6



写真-7



写真-8



写真-9



写真-10

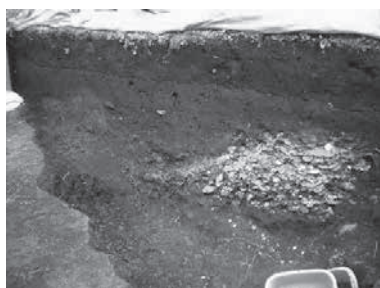


写真-11

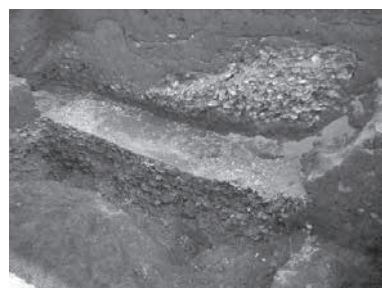


写真-12

された（9月13日）。1区の全景写真を撮影した（9月15日：写真-17）。2号遺構の断面剥ぎ取り作業を行ない（9月20日：写真-18）、午後から1号遺構（御殿堀）の埋め戻し作業を行なった（写真-19）。13号遺構（地下坑）の断ち割り作業を行なった（9月22日：写真-20、21）。2号遺構のブロックサンプルを採取した（9月25日：写真-22）。2号遺構および7号遺構の断面剥ぎ取り作業を行なった（9月29日：写真-23）。事務所（後半）の設置作業を行なった（10月6日～10日）。66号遺構（屋敷境溝）を調査した（10月7日：写真-24）。2区（170㎡）の1層除去作業を開始した（10月10日：写真-25）。コンクリート基礎の3回目の撤去作業を行なった（10月23日：写真-26）。事務所（前期）の撤去作業を行なった（10月25日）。1号遺構（御殿堀）の屈曲部を確認し（10月27日：写真-27）、2区におけるコンクリート基礎の4回目撤去を行なった（写真-28）。1号遺構（御殿堀）の屈曲部で昇降施設としてのステップを確認した（10月30日：写真-29）。70号遺構（上水路-2）の掘削作業を開始した（10月31日：写真-30）。2区における1号遺構（御殿堀）の全景写真を撮影した（11月24日：写真-31）。近隣住民を対象とした2回目の見学会を行なった。原町西町内会は20人、林町南町内会は40人、文京区の埋蔵文化財関係者は25人、区立第10中学校は20人の方々が見学された（11月28日：写真-32）。98号遺構（縄文建物跡）を確認した（12月1日：写真-33）。1号遺構（御殿堀）の底部に堆積している土壌サンプルを採取した（12月7日：Ⅳ章4節311-315頁参照）。98号遺構（縄文建物跡）の全景を撮影した（12月14日）。1



写真-13



写真-14



写真-15



写真-16



写真-17



写真-18



写真-19



写真-20



写真-21

号遺構（御殿堀）の2区における埋め戻し作業を始めた（12月15日）。3区のコングリート基礎を撤去した（2025年1月9日：写真-34）。87号遺構（近世2井戸）の上部を調査した（1月18日：写真-35）。199号遺構（近現代煉瓦構造物）（1月24日：写真-36）、200号（近現代煉瓦構造物）（1月25日：写真-37）を調査した。214号遺構（上水路-4）から鉄釘が等間隔に出土した（1月29日：写真-38）。214号遺構（上水路-4）において白色粘土を確認した（1月31日：写真-39）。3-5区（15㎡）の全景写真を撮影した。51号遺構（上水溝-1）の延伸部分を調査した（2月9日：写真-40）。3-1～3-3区の全景写真を撮影した（2月14日：写真-41）。134号遺構（近代井戸）の断ち割り調査を行なった（2月20日）。113号遺構（近世2期井戸）の断ち割り調査を行なった（2月26日）。



写真-22



写真-23



写真-24



写真-25



写真-26



写真-27



写真-28



写真-29



写真-30



写真-31



写真-32



写真-33

87号（近世2井戸）の断ち割り調査を行なった（2月28日）。パネルゲート前の3-4区（45㎡）の調査を開始した（3月5日）。239号遺構（近代土坑）の調査を行なった（3月7日：写真-42）。70号遺構（上水路-2）の残存部分を調査した（3月11日：写真-43）。3-4区の全景写真を撮影した（3月13日）。240号遺構（近世1井戸）の断ち割り調査を行なった（3月14日：写真-44）。218号遺構（近世1井戸）の断ち割り調査を行なった（3月18日）。西巣鴨作業所で二次整理作業を開始した。白山4丁目の現地では引き続き出土遺物の洗浄・注記作業を行なった（4月1日：写真-45）。財務省東京財務事務所関係者によって現地で発掘調査の終了確認がなされた（4月4日）。白山4丁目における現場作業を終了した（4月30日）。



写真-34



写真-35



写真-36



写真-37



写真-38



写真-39



写真-40



写真-41



写真-42



写真-43



写真-44



写真-45

2024（令和六）年4月から、豊島区の西巣鴨作業所で2次整理作業を開始した。白山4丁目の現地作業所で行なっていた膨大な‘かわらけ’の注記作業を行なった（写真-46）。‘かわらけ’については、最小個体数を考慮して底部が過半の資料についてのみ注記作業の対象とした。注記がなされた‘かわらけ’については、口径・底部径・高さを計測した（写真-47）。‘かわらけ’と同様に膨大に出土した土玉についても、9月から球径が計測できる資料を対象として計測作業を行なった（写真-48・49）。‘かわらけ’・土玉以外の陶磁器・土器などの資料は、実測に適した資料を抽出して通常の整理作業の手順に応じて作業を進め、2025（令和七）年3月31日に西巣鴨作業所での作業を終えた。

出土資料は東京都教育委員会管轄の五色橋収蔵庫に、記録類は三田分室に移管した。



写真-46



写真-47



写真-48



写真-49

4 報告の構成

本報告の構成は、まず大きく時代内容に従って「縄文時代」・「近世1面」・「近世2面」・「近代」とした。

「近世1面」は、本調査区のほぼ半分を占める1号遺構（御殿堀）の廃絶以前、すなわち1713（正徳三）年以前と思われる遺構群とした。「近世2面」は、同じく1号遺構（御殿堀）の廃絶以後、1714（正徳四）年以後の武家地として利用された遺構群とした。「近代」は、19世紀後半以降に構築された遺構群とした。

遺構の種別については、「縄文時代」が竪穴建物跡1基、「近世1面」が御殿堀（1号遺構）およびそれに伴う板石群（18号遺構）、御殿堀に給水する上水路4基、井戸2基、溝1基、土坑34基、ピ

ット 41 基である。「近世 2 面」は、井戸 2 基、溝 2 基、畝跡（畝間溝）7 基、地下坑 2 基、地下室 2 基、土坑 64 基、柱穴土坑 22 基、ピット 32 基である。「近代」は、井戸 1 基、土坑 11 基、礎石 8 基、排水施設 4 基である。

遺構については、検出するごとに通し番号を与えて、総計 244 遺構となった。ただし 64 号・68 号・135 号・169 号・170 号・190 号・242 号の 7 基については、欠番とした。

遺物については、材質別に磁器、陶器、土器、土製品、石製品、木製品、金属製品、骨角製品、ガラス製品、合成樹脂製品に区分して、時代（時期）別の遺構ごとに掲載した。部材については、瓦・煉瓦・碇子・衛生陶器などが該当する。上水路から出土した鉄釘は、上水路に設置された木樋に伴うもので、本来ならば部材に属するが、ここでは遺物扱いとした。掲載遺物の一覧表については、材質別に作成した。

注記作業は、自動遺物注記機を用いて行なった。膨大な数が出土した‘かわらけ’については、最小個体数を考慮して、底部の過半が残存する資料を注記対象とした。注記対象とした‘かわらけ’については、口縁部径・底部径・器高・糸切り回転方向などを計測・観察した。注記対象以外の‘かわらけ’については、1cm 以上の破片について数量と重量をカウントした。土玉については、未焼成のため水洗いはせずに直径のみを計測して、大きさ別に数量をカウントした。‘かわらけ’については、墨書あるいは穴あき・金粉付きなど特殊な資料については、破片資料も写真を掲載した。

実測作業の対象とした「抽出資料」については、実測図をスキャナーで読み込みデジタル・トレースを写真と合成した。それ以外に高台に刻印や裏印がある資料、色絵破片については、非実測資料として写真のみを掲載した。陶磁器・‘かわらけ’に記された墨書については、X 線カメラで撮影して渋谷 葉子氏に判読を依頼した。

縮尺は、実測資料が 1/3、土製品・土玉・穴あき‘かわらけ’・拓本などは 1/2 を基本とした。

遺構間接合資料の掲載は、同時代（時期）内であれば若い遺構番号箇所、時代（時期）間であれば古い時代（時期）の箇所に掲載した。

本調査区の特性を鑑み、近世の土地利用を渋谷 葉子氏、笠森稲荷にまつわる民俗学的考察を長沢利明氏、出土動物遺体を山根 洋子氏、御殿堀の堆積物を鬼崎 華氏・江口 誠一氏・渡邊 稜也氏、‘かわらけ’と土玉の胎土分析を長佐古 真也氏に報告して頂いた。

II 遺跡の位置と環境

1 原町西の地形的環境

調査区は、南西方向の小石川谷、北東方向の指ヶ谷に挟まれた舌状台地である白山台地に位置する。小石川谷は、旧谷端川^{やばたがわ}が北西から南東に流下し形成した低地で、現在は JR 大塚駅東側から後樂園に至る都道 436 号線（小石川西巢鴨線、通称千川通り）となっている。小石川植物園は、谷端川左岸の小石川谷の低地部分から崖地を経て白山台地部分に至るエリアを占めている。

調査区の標高は、25.3m である。調査区から南西方向の小石川植物園北西の綱干坂を下った植物園南西の標高は 9.8m、287m の水平距離に対して 15m 余りの落差で傾斜率 5.4% である。それに対して調査区から北東方向の区立明化小学校東側の都道 301 号線（白山祝田町線、通称白山通り）の標高は 18.6m、338m の水平距離に対して 6.7m の落差で傾斜率は 2% である。調査区が位置する場所は、北西－南東を長軸とする白山台地の小石川谷寄りに位置するが、台地横断面でいえばその最も高い頂部に当る。調査区が位置する白山台地は南西の小石川谷に対しては急斜面を呈し、北東の指ヶ谷に対しては緩やかな緩斜面を呈するという対照的な地形を示す。後述する千川上水から小石川御殿堀への給水についても、白山台地南西寄りの頂部である調査区近辺を選択して敷設されていることも周辺の地形環境を適切に反映したものと理解される。

2 原町西の歴史的環境

1947（昭和二十二）年に小石川区と本郷区が合併して文京区が成立した。1966（昭和四十一年）年に小石川林町が千石一丁目・二丁目・四丁目に、小石川原町が白山三丁目・四丁目・五丁目、千石一丁目に再編された。

調査区を中心に周辺の包蔵地について、時計回りに町名区画ごとに記載する（第 1 図）。文京区遺跡調査会あるいは文京区教育委員会が発行した報告書のシリーズ略記号として「B-○○」、東京都埋蔵文化財センターが発行した報告書のシリーズ略記号として「T-○○」とする。

白山四丁目は、本調査区から東側に広がるエリアで、小石川植物園の北東縁から本調査区の北西縁－北東縁で千石二丁目と接し、都道 301 号線（白山通り）の白山下交差点までを範囲とする。白山通り近くに位置する本念寺には、大田南畝（蜀山人）の墓地がある。白山四丁目の北西側が「原町西町会」、南東側が「上御殿町会」の範囲である。

No.145（原町西遺跡）が本報告（T-389）である。

No.21（小石川植物園内貝塚・原町遺跡）は、1994（平成六）年に徳島県職員住宅建設に伴って「原町遺跡」として発掘調査された（文京区遺跡調査会 1995：B-8）。1996（平成八）年に小石川植物園構内の一角が東京消防庁による防火施設建設に伴った原町遺跡 第 2 地点として調査された（文京区遺跡調査会 1996：B-12）。2018（平成三十）年から 2019（平成三十一）年にかけて日本銀行本店原町家族寮地点として発掘調査された（東京都埋蔵文化財センター 2020：T-351）。

No.22（原町貝塚）については、大まかな範囲が円で表現されているのみで詳細は不明である。

No.46（白山四丁目遺跡）は、日本専売公社宿舍の改築工事に伴って1980（昭和五十五）年から1981（昭和五十六）年にかけて発掘調査がなされた（白山四丁目遺跡調査会1981）。調査区周辺における最も早い時期の調査である。

No.84（白山御殿町遺跡）は、パークハウス白山御殿町（第一勧業銀行白山アパート跡地）の構築に伴って2001（平成十三）年に発掘調査が行われた（文京区遺跡調査会2003a：B-28）。御殿堀の東側で直角に屈曲する部分に該当するが、設定された5本のトレンチで御殿堀が確認されたが屈曲部は未確認である。

白山五丁目は、白山四丁目と都道301号線（白山通り）を挟んで北東側に広がるエリアで東洋大学白山キャンパス・白山神社を含む範囲である。

No.24（白山五丁目南遺跡）は、2011（平成二十三）年に東洋大学敷地内において発掘調査がなされた（文京区教育委員会2012a：B-110）。2015（平成二十七）年には新教室棟建築のために発掘調査が第2地点としてなされた（文京区教育委員会2016：B-157）。

No.91（原町東遺跡）は、2003（平成十五）年に東洋大学6号館建設のために発掘調査がなされた（武蔵文化財研究所2004）。

白山二丁目は、白山三丁目・白山四丁目の南東に広がるエリアである。小石川植物園の南東縁である御殿坂から都道436号（千川通り）と都道301号線（白山通り）に挟まれた範囲となる。

No.18（指ヶ谷町遺跡）は、1996（平成八）年に文部省文書倉庫の建築に伴って発掘調査が行われた（文京区遺跡調査会2000a：B-19）。

No.19（戸崎町遺跡）は、東洋大学京北中学高等学校（最高裁判所書記官研修所跡地）の建築に伴って2001（平成十三）年に発掘調査が行われた（文京区教育委員会2014a：B-131）。

白山三丁目は、白山四丁目の南西に広がるエリアで小石川植物園が大部分を占める。さらに南西の都道436号線（千川通り）に至る範囲を含む。

No.126（小石川植物園南遺跡）は、2011（平成二十三）年に小石川植物園周辺道路の第一期整備工事として御殿坂の北西側が「小石川御薬園跡」として報告された（文京区教育委員会2012b：B-118）。幅1.5～4.8m・長さ182mの調査区に対して現在では「小石川植物園南遺跡」という＜遺跡＞名称が与えられている。

No.123（小石川植物園西遺跡）は、2012（平成二十四）年に小石川植物園周辺道路の第二期整備工事として175mの範囲が小石川植物園西遺跡として報告された（文京区教育委員会2013a：B-127）。2014年（平成二十六）から2015（平成二十七）年にかけて小石川植物園南西側の道路整備工事として発掘調査されて「小石川植物園（御薬園跡及び養生所跡）第2地点」として報告された。（文京区教育委員会2017：B-148）。現在では、「小石川植物園西遺跡」という名称が与えられている。

No.81（小石川御薬園跡）は、2012（平成二十四）年に「小石川植物園（御薬園及び養生所跡）」として国の名勝および史跡に指定された（文京区教育委員会2012b、2023：B-147）。東京大学埋蔵文化財調査室によって断続的に調査がなされている（東京大学埋蔵文化財調査室2006、2008、2012、2019）。2016年（平成二十八）から2018（平成三十）年にかけては、公開温室の改築工事に伴って発掘調査がなされた（丹野2018、国立大学法人東京大学・文京区教育委員会2023：B-147）。

大塚三丁目は、網干坂から千川通りを越えて南西方向に向かう湯立坂を南東縁として、筑波大学付属小学校、文京区立教育の森公園（東京教育大学跡地）などが所在する。

No.3（大塚三丁目遺跡）は、2010（平成二十二）年に筑波大学東京キャンパス部分が発掘調査された（文京区教育委員会 2010a：B-98、第2地点：文京区教育委員会 2010c：B-104）。

千石二丁目は、南東側を小石川植物園の北西縁である網干坂、南西側を千川通り、北西側を都道437号線（不忍通り）で画される範囲である。区立林町小学校、区立第十中学校、簗川神社が存在する。千石二丁目の北東部側が「林町南町会」で区立第十中学校を含む。本調査区の北西および北東縁で接する。

No.26（林町遺跡）は、2002（平成十四）年にインペリアルガーデン部分（東京海上林町社宅跡地）が第1地点として調査された（テイケイトレード株式会社 2008：B-63）。エルコート千石・エルドーミ千石部分（NTT小石川林町社宅跡地）は、1997（平成九）年に第2地点として調査された（文京区遺跡調査会 2000b：B-21）。2013（平成二十五）年に第1地点南側縁辺部が、第3地点として調査された（文京区教育委員会 2013b：B-132）。2023（令和五）年に文京区立林町小学校校舎増築工事に伴って第4地点として発掘調査された（文京区教育委員会 2024：B-191）。

千石一丁目は、一行院南東側の一行院坂から北西方向のエリアで、区立明化小学校が位置し、北側の都道301号線（白山通り）沿いには都営三田線千石駅がある。

No.88（一行院跡遺跡）は、2001（平成十三）年に一行院北東側でグランフラッツ文京千石の建築に伴って発掘調査された（文京区遺跡調査会 2003b：B-30）。

No.119（千石一丁目南遺跡）は、2010（平成二十二）年に大原地域活動センターの建築に伴って発掘調査された（文京区教育委員会 2010c：B-102）。2013（平成二十五）年に第2地点として発掘調査がなされた（文京区教育委員会 2014b：B-136）。

No.142（林町東遺跡）は、2019（平成三十一）年に明化小学校の改築工事に伴って発掘調査がなされた（文京区教育委員会 2020：B-177）。

3 近世の調査区

本調査区周辺でなされてきた数多くの発掘調査によって、近世における様相も次第に明らかになりつつある。本調査区において確認された痕跡群の中でも特に特筆すべきは、小石川御殿堀の存在である。（第4図）

小石川御殿堀については、その存在が文献上では知られていたが、考古学的な発掘調査で初めて確認されたのは、1994（平成六）年の「原町遺跡徳島県職員住宅地点」（No.21）の発掘調査の時であった。ここでは、御殿堀の外周上部の部分が確認されていたが、報告では「整地遺構」と記載されており、いまだ御殿堀の遺構とは意識されていなかった（文京区遺跡調査会 1995：19頁）。

2000（平成十二）年に調査された東京大学白山構内総合研究博物館小石川分館地点（No.81）では、御殿堀の外周法面が4mほど確認された（東京大学埋蔵文化財調査室 2008）。2008（平成二十）年に刊行された報告の中で「白山御殿堀範囲推定図」（成瀬 2008：176頁）が発表されて、小石川御殿を囲む御殿堀の存在が初めて周知されることになった。

2001（平成十三）年に調査された白山御殿町遺跡（No.84）では、御殿堀東側屈曲部を含む調査

区に5本のトレンチが設定された。そこでは、外周法面と内周法面の双方が確認されたトレンチが3本(A・B・D)、内周法面のみのトレンチが1本(E)、外周法面のみのトレンチが1本(C)であった。調査区に屈曲部部分も含まれていたが、屈曲部そのものは確認されなかった(文京区遺跡調査会2003a)。

2018(平成三十)年から2019(平成三十一)年にかけて調査された小石川植物園内貝塚・原町遺跡(No.21)では、3区で外周法面が約10m、6区で内外周法面が約8m確認された(東京都埋蔵文化財センター2020)。

4 近代以降の調査区

1925(大正十四)年発行の「一万分一地形図東京近傍十一號」を見ると、「大學植物園」の北東側に位置する「原町126番」の広いエリアは「阪谷邸」と記されている。阪谷芳郎(1863-1941)は、岡山県出身の政治家・実業家で、第一次西園寺内閣大蔵大臣、東京市長、貴族院議員、日本ホテル協会会長、専修大学学長などを歴任した。

本調査区(「原町126番-7」)は、「原町126番」の北西部分で、土地台帳によれば所有主の「阪谷芳郎」から1913年に「寄付行為」によって「財団法人 備中館」に譲渡され、1950年に「最高裁判所」に買収されている。阪谷邸の本邸があった「原町126番の1」は「第一銀行小石川寮」、「第一勧業銀行小石川アパート」を経て、現在は「ドミトリー小石川」となっている。「原町126番」の南東部分(126-2・42～46)は、「日本銀行本店原町家族寮地点」として2018年から19年にかけて1,323㎡が発掘調査された(東京都埋蔵文化財センター2020)。

岡山県出身の学生寮「備中館」は、1899(明治三十二)年に設立されて、1901(明治三十四)年には当地に寄宿舎が構築された(写真-1)。1913(大正二)年に正式に資本金12,200円で「財団法人 備中館」が設立された。寄宿舎としての「備中館」は、1957(昭和三十二)年に調査区から130mほど南西の地(白山四丁目8-4)に再建され、2012(平成二十四)年に「公益財団法人 備中館」となった。

調査区該当地は1950(昭和二十五)年に最高裁判所が買収して、平屋3棟の職員住宅が構築された。1969(昭和四十四)年に鉄筋コンクリート造地上3階(建築面積287㎡)の白山宿舎が建設されて、半世紀を経て2022(令和四)年に解体された。

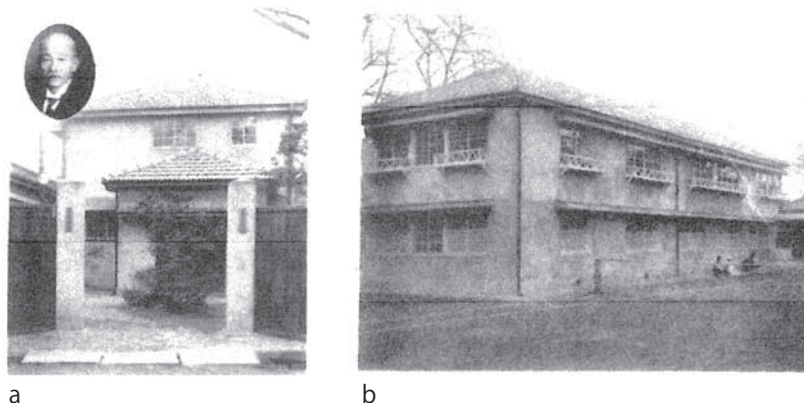


写真-1 旧・備中館(広瀬一郎1972「備中館のあらまし」『しのめ』第17号より)

Ⅲ 遺構と遺物

原町西において確認された遺構について、縄文時代・近世 1 面・近世 2 面・近代の 4 つに区分した。縄文時代については、調査区の中央から縄文時代前期の竪穴建物跡が検出された。遺構に伴う遺物は縄文土器が 147 点・石器が 1 点・小礫が 355 点である。遺構外からは縄文土器が 113 点出土した。

近世の遺構については、1698(元禄十一)年に構築されて 1713(正徳三)年に埋め戻された御殿堀(1 号遺構)を指標として、1713(正徳三)年以前を「近世 1 面」として埋立地を含む区域が武家地として利用された 1714(正徳四)年以降を「近世 2 面」とした。

近世 1 面とした遺構群は、御殿堀(板石群を含む)、上水路(4)、井戸(2:付属土坑 2 基含む)、溝(1)、土坑(34)、ピット(41)である。

近世 2 面とした遺構群は、井戸(2)、溝(2)、畝間溝(7)、地下坑(2)、地下室(2)、土坑(64)、柱穴土坑(22)、ピット(32)である。

近代の遺構は、井戸(1)、土坑(11)、礎石(8)、排水施設(4)である。

調査区全体の基本層序は、ロームブロックを主体とし下底面に黒色の炭化物ブロックが所々に含まれる固く締まった表土層が厚さ 30cm ほど堆積しており、調査区全体を覆うようなものではない。1 号遺構(御殿堀)の所在する調査区南部分では、御殿堀の埋土層が厚く堆積している。御殿堀以外の北東台地部分および北西台地部分については、表土層の下層部分は近代以降の掘り込みが大半を占めており、調査区全体を覆うような共通する層序は認められない。

ローム層上面での地形形状は、調査区の東側([H-8] 付近)および西側([E-2] 付近)ではほぼ平坦であるが、北側([I-4・5] 付近)に向けて緩やかに下り斜面となる。

1 縄文時代

98 号遺構 [G-4・5] (2 区)

・遺構(第 6～10 図)

1 号遺構(御殿堀)屈曲部から 70 号遺構(上水路)にかけて、短辺 366cm、長辺 480cm の長方形を呈する竪穴建物跡である。長軸は、北東―南西となり、北東寄りに 123cm × 118cm × 15cm の楕円形の炉址が認められた。遺構の南東部分は、1 号遺構(御殿堀)の屈曲部にあたり大きく欠損する。北東縁は 69 号(土坑)に、南西縁は 68 号(近現代土坑)で損壊する。炉址の中央部には、白山宿舎のコンクリートパイルが打ち込まれ、パイル周囲の土壌は圧搾による変成作用が認められた。炉址覆土には若干の焼土粒および炭化物、底面には赤褐色の焼土が僅かに認められた。建物跡の床面・壁面とも明確には捉えがたく、ソフトロームがブロック状に混在する堆積土から地山であるソフトローム土となる。柱穴と思われるピットは、8 基が不規則に確認された(第 7 図)。いずれもソフトロームがブロック状に混在する床面直上で確認され、径 20cm ～ 25cm、深さ 20cm ～ 50cm となる。

・遺物

縄文土器は、98号遺構から147点、遺構外から113点の計260点出土した。遺構内の出土分布傾向は、土器・礫ともに遺構中央部から南西方向に分布する（第9図）。遺構外の出土分布傾向は、地形の傾斜に応じて遺構から北方向にかけて散在する（第13図）。

遺構内出土土器については25点（第10図-1～第11図-25）、遺構外出土土器については29点（第13図-1～第14図-27）を掲載した。掲載外の出土土器を含めた260点の時期別内訳は、黒浜式（128点）、釈迦堂Z3式（14点）、花積下層～二ツ木式（2点）、加曽利E式（11点）、堀之内式（4点）、時期不明（101点）となる。（五十嵐）

出土土器（第11・12図、第14・15図、第1表）

第11図-1、2は前期前半の花積下層Ⅲ式ないし二ツ木式に比定される土器で、いずれも胎土に繊維を含んでいる。1は異原体羽状縄文が横走する土器で、内面には条痕が観察される。2は原体側面圧痕文が見られるがモチーフは不明である。

3～21は黒浜式に比定される一群である。いずれの土器も胎土に繊維を含んでいる。3は胴部破片で、胴上半部には縄文施文が見られ、胴下半部に体部文様帯をもつ。体部文様帯には幅広の半截竹管状工具により横線文が描かれる。なお、横線文が施文される施文域には地文となる縄文は見られない。このことから胴屈曲部下のみ、縄文の条が沈線に置換されているものと考えられる。体部文様帯の上端は器形変換点と概ね一致しており、胴上半部から口縁部にかけて外反する器形となるものと推測される。

4は胴部破片で、単沈線により格子目文の描かれる土器である。5は胴部破片で、半截竹管状工具による平行沈線が見られる。モチーフは不明である。

6～8は単節縄文LRが横走する一群で、6は口縁部破片、7と8は胴部破片である。9～12は単節縄文RLが横走する一群である。13は前々段反撚の縄とみられる縄文が縦走する個体である。14は無節縄文Lが、15～18は無節縄文Rが横走する一群である。15は上半部が擦り消されたように縄文施文が見られない。また、17は無節縄文Rの条間にわずかに節が見えることから附加条縄文LR+Rとした。19は胎土に繊維を含む無文の土器片である。

第12図-20と21は器面に細密な極細の無節縄文ないし貝殻条線状の条線が見られる個体である。胎土、内面調整等の特徴から黒浜式の一部としたものの、他の土器よりも繊維含有量は少ない。条は非常に細かく、巻貝ないし細密な櫛歯状工具により施文されている可能性も考えられる。

22～25は前期中葉の釈迦堂Z3式に比定される一群である。いずれの土器も胎土に繊維を含まず、金雲母を含むのが特徴である。22～24は胎土、文様も同一であり、同一個体の可能性も考えられる。外面は無節Lの縄が縦走し、内面には指頭圧痕が顕著に見られる。25は底部破片で、胎土は繊維を含まず、金雲母を多く含んでおり、外面にはLの縄が縦走している。また、底面にはカシワの葉の木葉痕が見られるが、痕跡の薄くなる木葉痕の末端には沈線で木葉痕をなぞり、強調する行為が観察される。これは、木葉痕が単なる製作時の痕跡ではなく、文様意匠として施文されたことを示していると言える。（佐藤）

縄文石器は、98号遺構の東側隅から磨石が1点出土した（第12図-26）。長さ11cm・幅6.4cm・重さ450gの亜円礫の平坦面に摩耗痕跡、端部に微弱な敲打痕跡が認められる。

遺構内からは土器片と共に小礫が多数出土した。98号遺構内において出土位置を記録して取り上げた資料が72点、出土位置を記録せずに取り上げた資料が283点で、合計355点となる。石材の内訳は、砂岩218点(61%)・チャート91点(26%)・泥岩15点(4%)・安山岩14点(4%)・流紋岩7点(2%)・礫岩7点(2%)・片麻岩2点(1%)・ホルンフェルス1点(―)である。大きさは、～1.9cm:28点(8%)・～2.9cm:196点(55%)・～3.9cm:77点(22%)・～4.9cm:31点(9%)・～5.9cm:9点(3%)・～6.9cm:10点(3%)・7.0cm～4点(1%)となり、3cm以下の小礫が過半を占める。

重量についても、～9g:206点(58%)・～19g:94点(26%)・～29g:21点(6%)・～39g:3点(1%)・～49g:9点(3%)・50g～:22点(6%)となり、9g以下の小礫が過半を占める。(五十嵐遺構外出土土器(第14・15図、第2表))

縄文土器は、113点が出土した。そのうち29点を図化し掲載した。

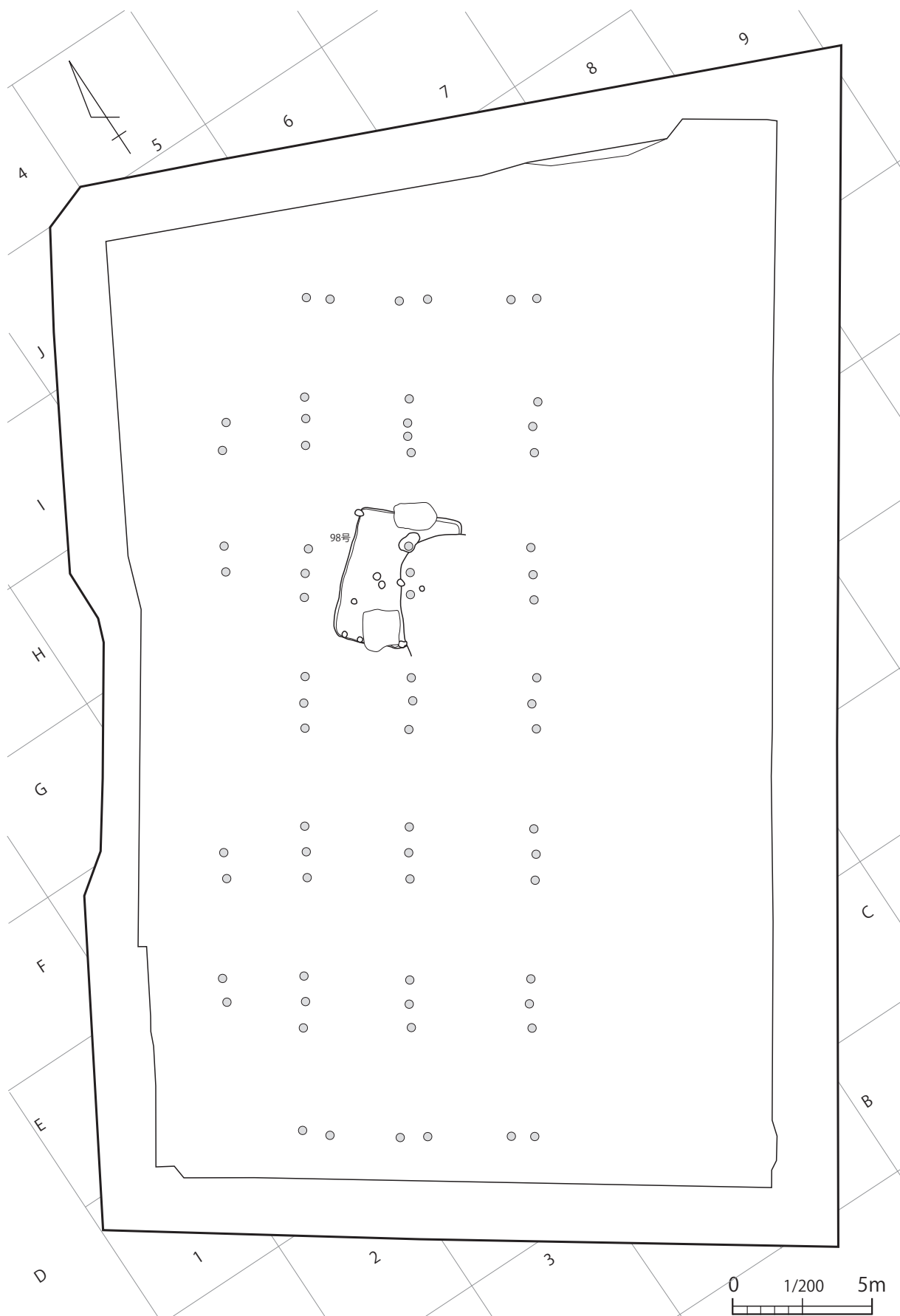
第14図-1から21は黒浜式に比定される一群である。1は深鉢形土器の頸部破片で、隆帯を持つ。隆帯上には押捺が見られる。地文は単節縄文RLが施文されている。2は半截竹管状工具による平行沈線で文様が描かれるが、モチーフは不明である。3は胴部破片で、無節縄文Lと単節縄文LRがそれぞれ斜行する。4も胴部破片で、無節縄文Rと単節縄文RLがそれぞれ横走する。5は単節縄文LRの異方向施文による崩れた羽状縄文が施文される。6～8は単節縄文LRが施文される土器で、6と7はLRが横走するが、8は縦走する。9は単節縄文RLが施文される土器で、胴部破片である。

10～20は無節縄文RないしLの縄が施文される一群である。10と11は無節縄文Rが横走する胴部破片であるが、他の無節縄文の施文されている土器と比較して、縄の圧痕が浅いものになる。12～16は無節縄文Lが施文される土器で、いずれも胴部破片である。14は結節されたLの縄で施文されるもので、胴部の張り出した部分にあたる。15は太いLの縄が使用され施文されるが、破片上半が磨り消されている。17は口縁部破片で、平縁であるが小突起が付く。器面には無節縄文Rが横走する。この他、12は縦、13、16、18、19は横方向の施文となっている。21は底部破片で、外面には単節縄文LRが施文される。

第15図-22～26・27は加曽利E式に比定される一群である。22は単節縄文LRを施文した後に、隆帯を貼り付け、また隆帯に沿うように沈線が施文され、逆U字状に垂下する文様が描かれる。23、24は単節縄文RLを施文後、丸棒状工具による2条の沈線が垂下される。25は口縁部破片で、肥厚する口縁部に単節縄文RLを施文後に、丸棒状工具により上下の横帯区画となる沈線が施文される。27は底部破片で、器面は丁寧に磨かれている。

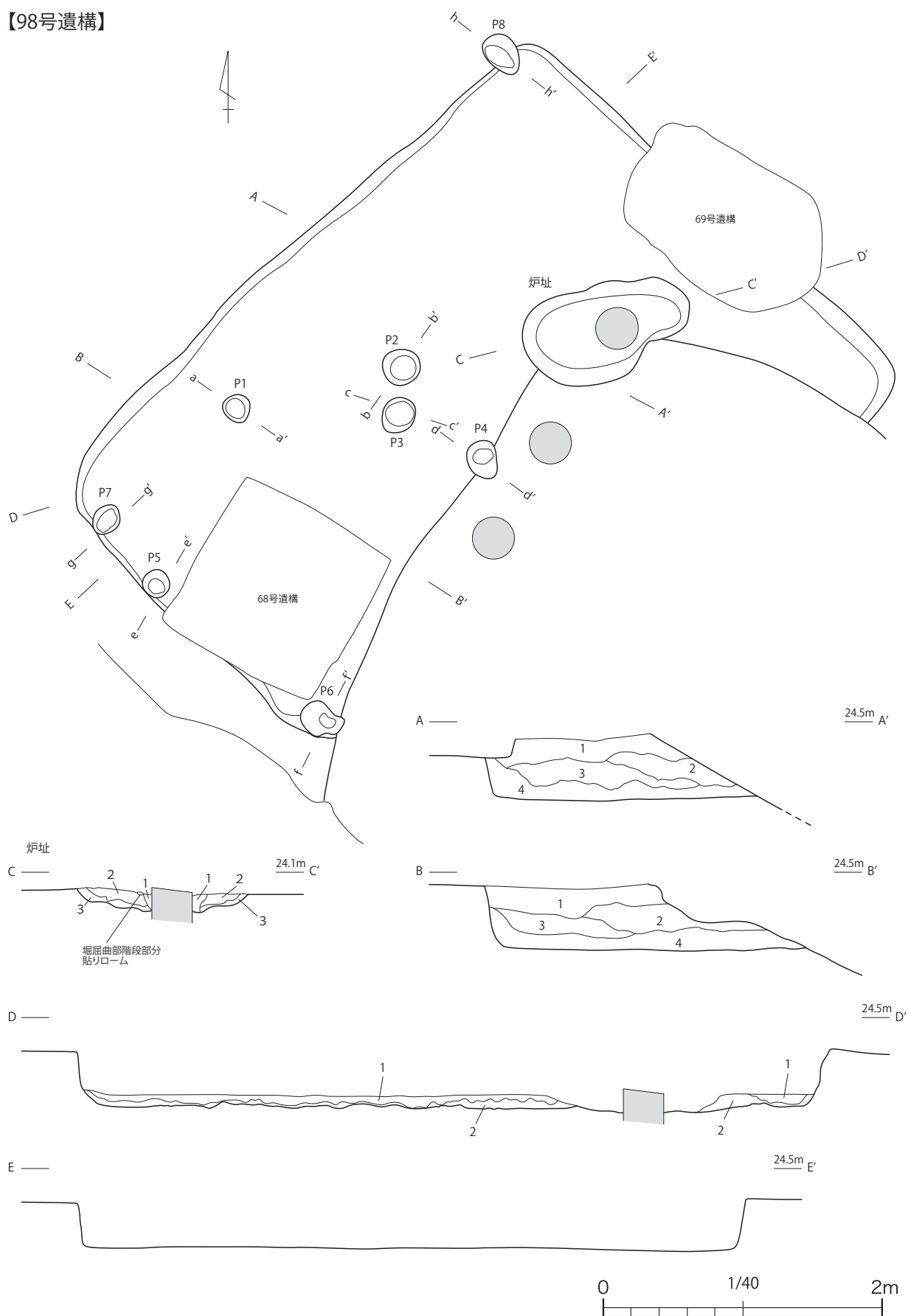
26・28・29は堀之内式に比定される一群で、26は堀之内1式下北原類型の胴部破片である。28と29は小型の深鉢の胴部破片と考えられる。28は刻み隆帯とそれに沿う単沈線、磨消縄文帯が見られる。29は丸棒状工具による単沈線で菱形ないし三角形のモチーフが描かれるものと考えられる。また、この丸棒状工具による沈線に沿うように細い沈線があるが、文様の割付線であると考えられる。

(佐藤)



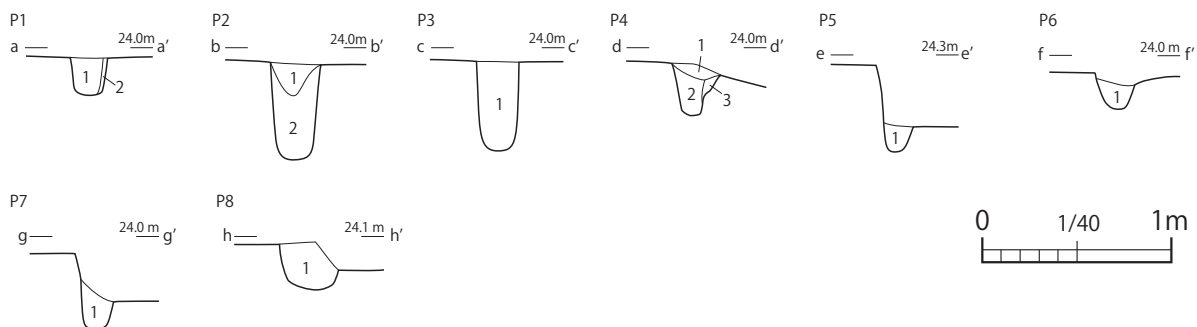
第 6 図 縄文時代の遺構分布図 (1/200)

【98号遺構】



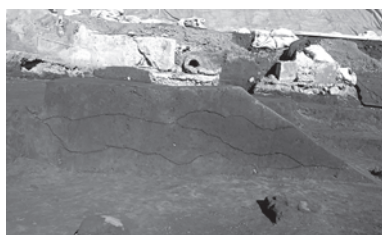
第7図 縄文時代の遺構 (1:1/40)

【98号遺構】

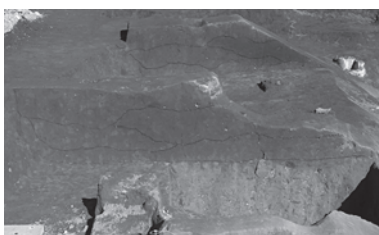


土層説明

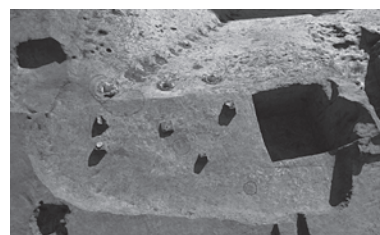
98号（黒浜住居） 東西方向セクション	1	黒褐色	粘性あり 締まりあり 径3cmソフトロームブロック40%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。1層より黒味が強い。
	3	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径3cmソフトロームブロック30%。1層に似る。
	4	黒褐色	粘性強。締まりあり。径4cmソフトロームブロック・径1mm黄褐色ローム粒10%。
98号（黒浜住居） 南北セクション	1	褐色	粘性やや強。締まりあり。ソフトローム主体。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cmロームブロック含む。
98号 炉址	1	黒褐色	粘性あり。締まり強。シートパイル打ち込みによる変成土。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒3%。径2mm焼土粒・炭化物片含む。
	3	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1cmロームブロック・にぶい赤褐色の焼土を含む。
98-1号ビット	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。
	2	暗褐色	粘性あり。締まりやや欠く。内容物なし。
98-2号ビット	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒3%。
	2	暗褐色	粘性やや強。締まりあり。ソフトローム主体。
98-3号ビット	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。上面に径1cmハードロームブロック含む。
98-4号ビット	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒3%。
	2	暗褐色	粘性あり。締まりあり。内容物なし。
	3	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1-2mmローム粒3%。
98-5号ビット	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。径1mmローム粒3%。径3cmロームブロック含む。
98-6号ビット	1	褐色	粘性やや強。締まりあり。径1cmハードロームブロック含む。
98-7号ビット	1	褐色	粘性あり。締まりあり。ラミナ状に黒褐色土含む。
98-8号ビット	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。



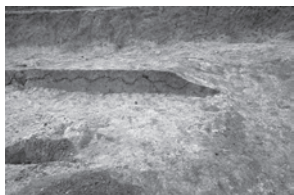
98号遺構北ベルト断面 (南西より)



98号遺構南ベルト断面 (南西より)

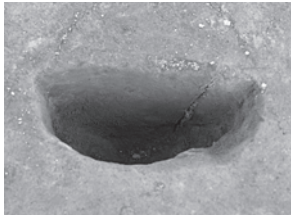


98号遺構遺物出土状態 (北西より)

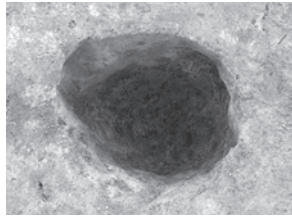


98号遺構張り床断面 (東より)

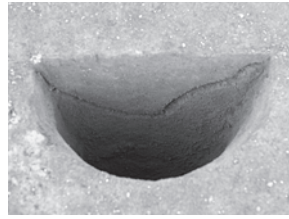
第 8 図 縄文時代の遺構（2：1/40）



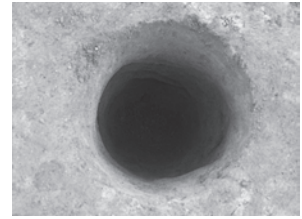
98号遺構ピット1断面(南西より)



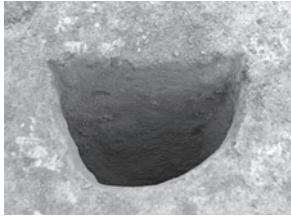
98号遺構ピット1(北より)



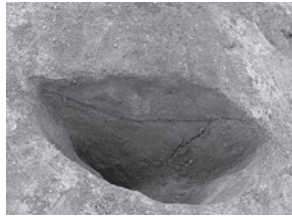
98号遺構ピット2断面(南東より)



98号遺構ピット2(北西より)



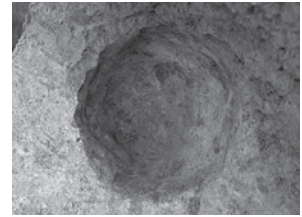
98号遺構ピット3断面(南西より)



98号遺構ピット4断面(南西より)



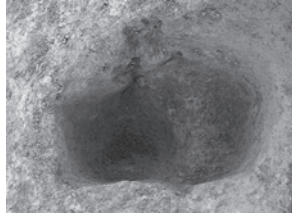
98号遺構ピット5断面(北西より)



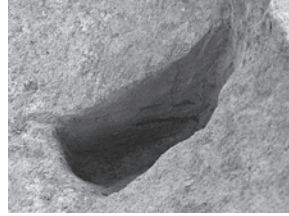
98号遺構ピット5(北より)



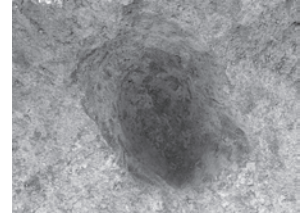
98号遺構ピット6断面(北西より)



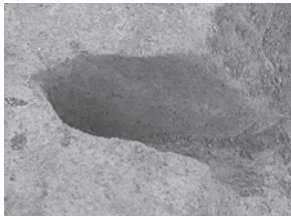
98号遺構ピット6(北東より)



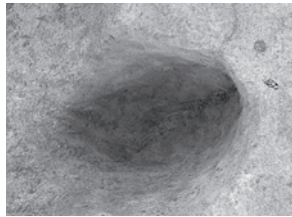
98号遺構ピット7断面(北西より)



98号遺構ピット7(北東より)



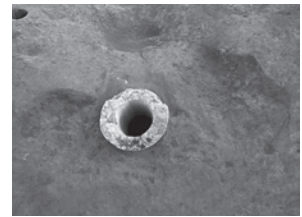
98号遺構ピット8断面(南西より)



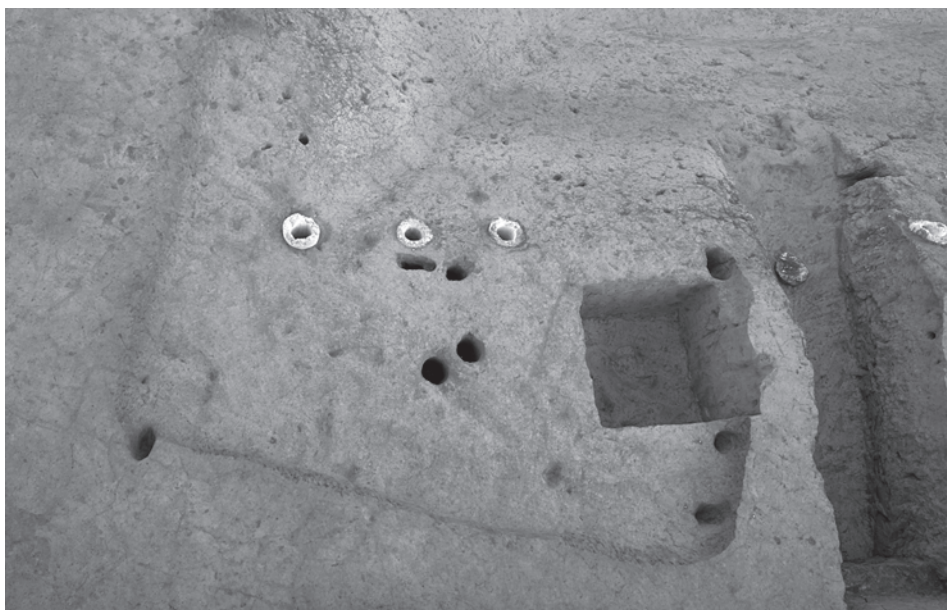
98号遺構ピット8(北東より)



98号遺構炉断面(南より)

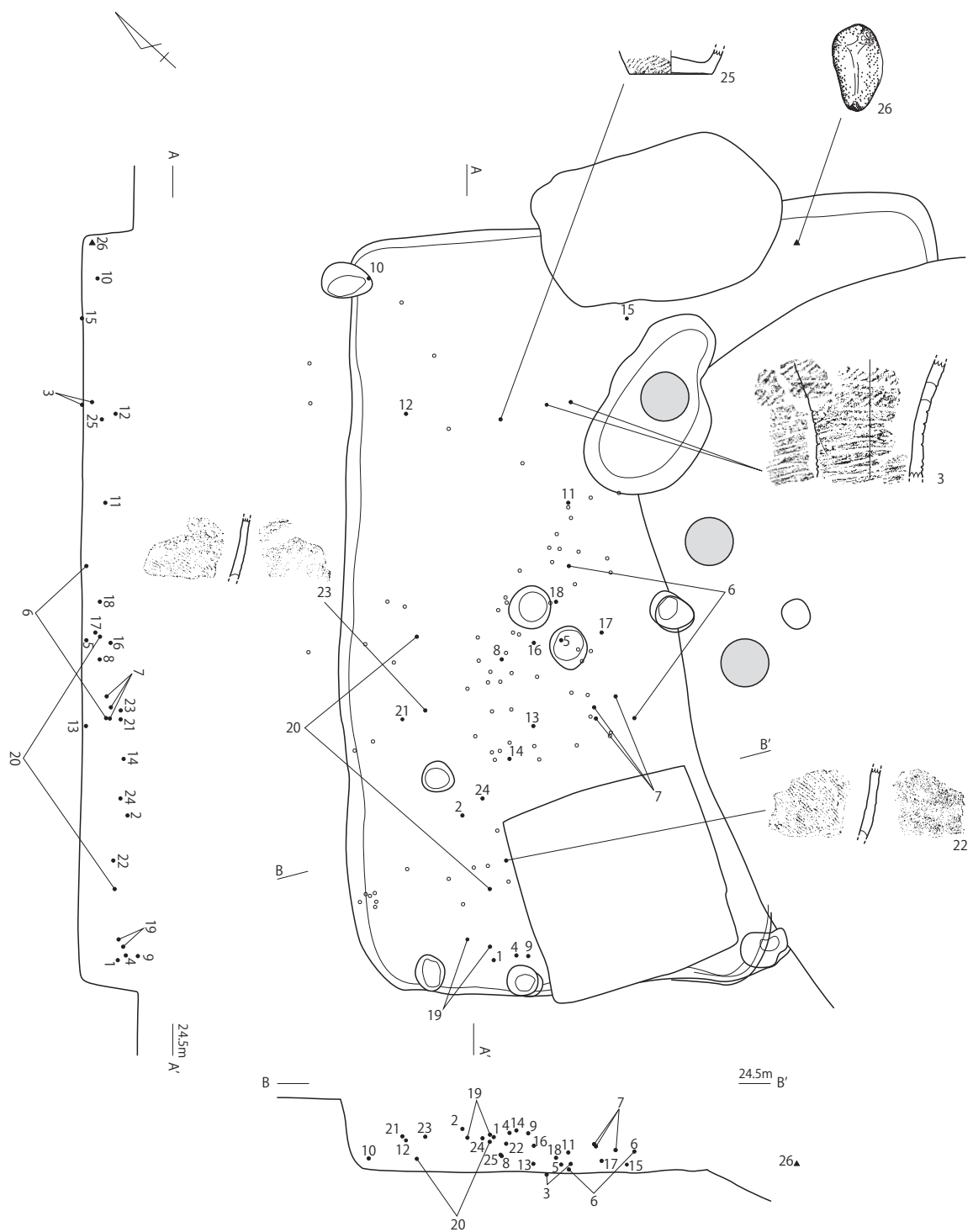


98号遺構炉(北より)

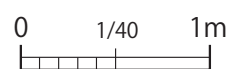


98号遺構(北西より)

第9図 縄文時代の遺構(3)

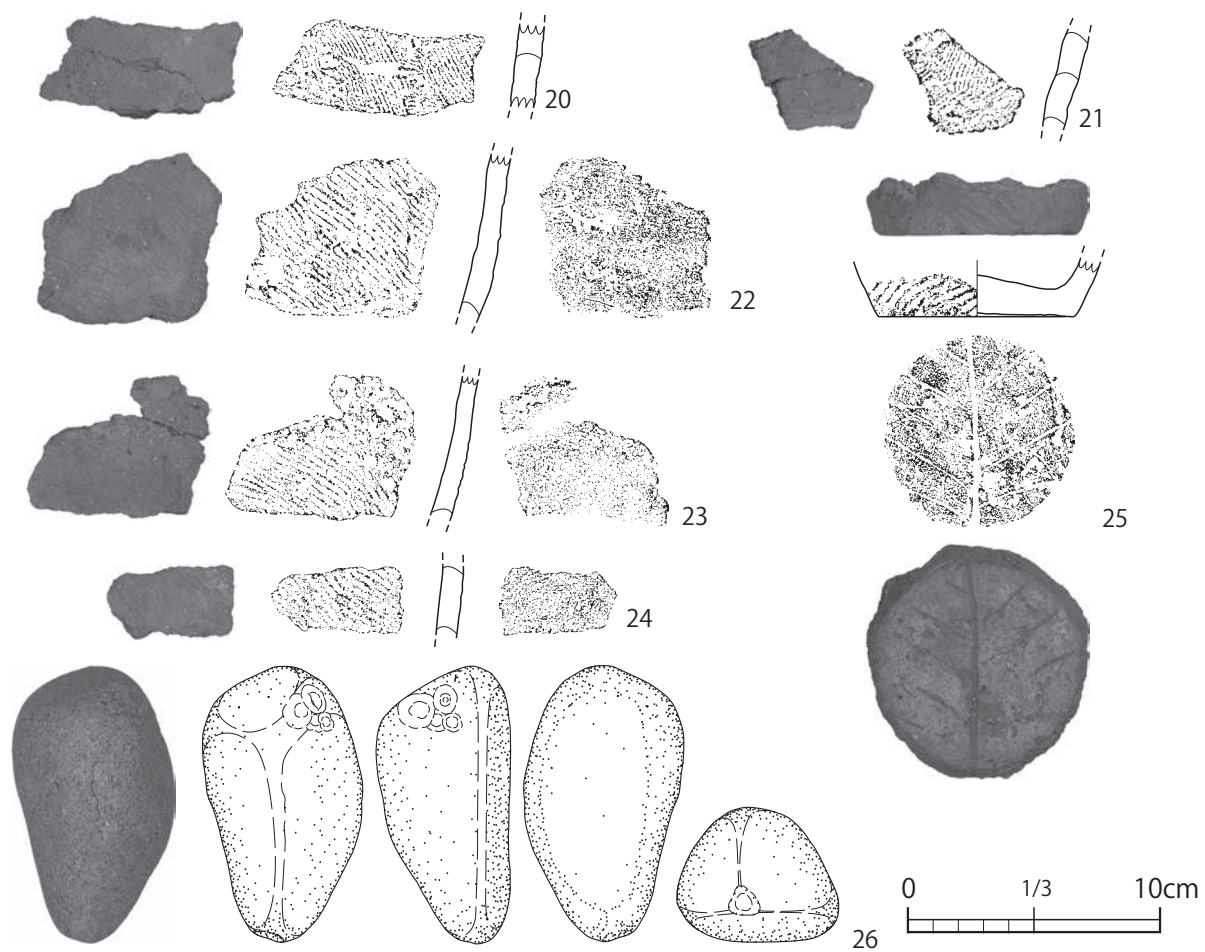


第 10 図 縄文時代の遺構（4：1/40）

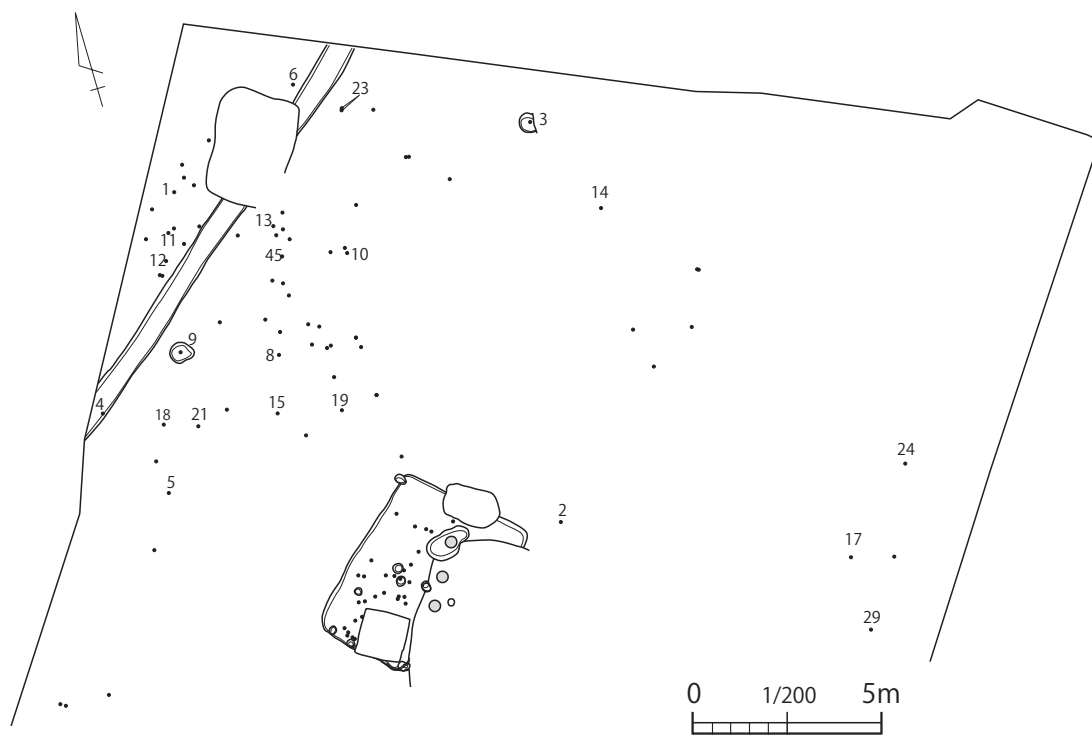




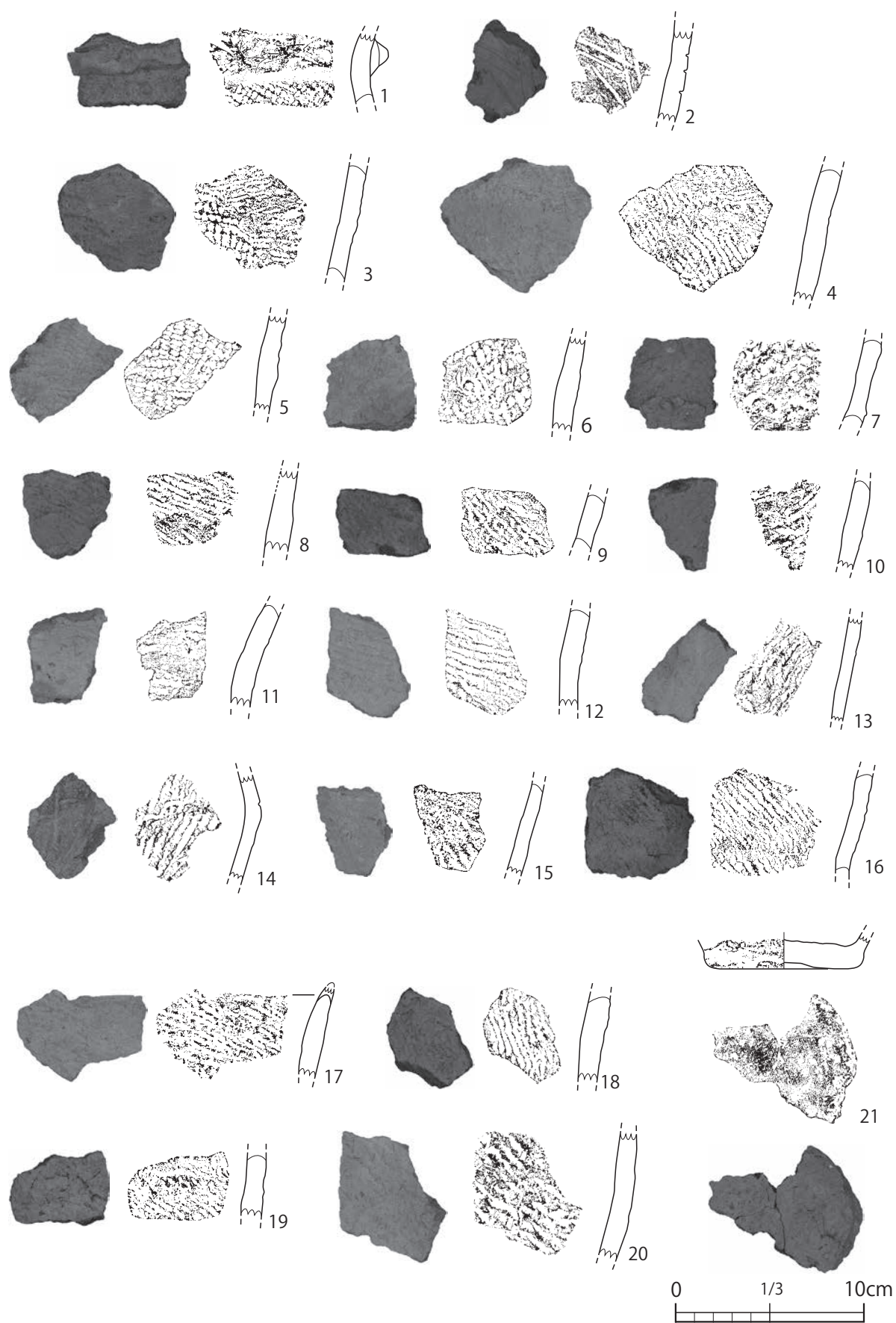
第 11 図 縄文時代の遺物 (1 : 1/3)



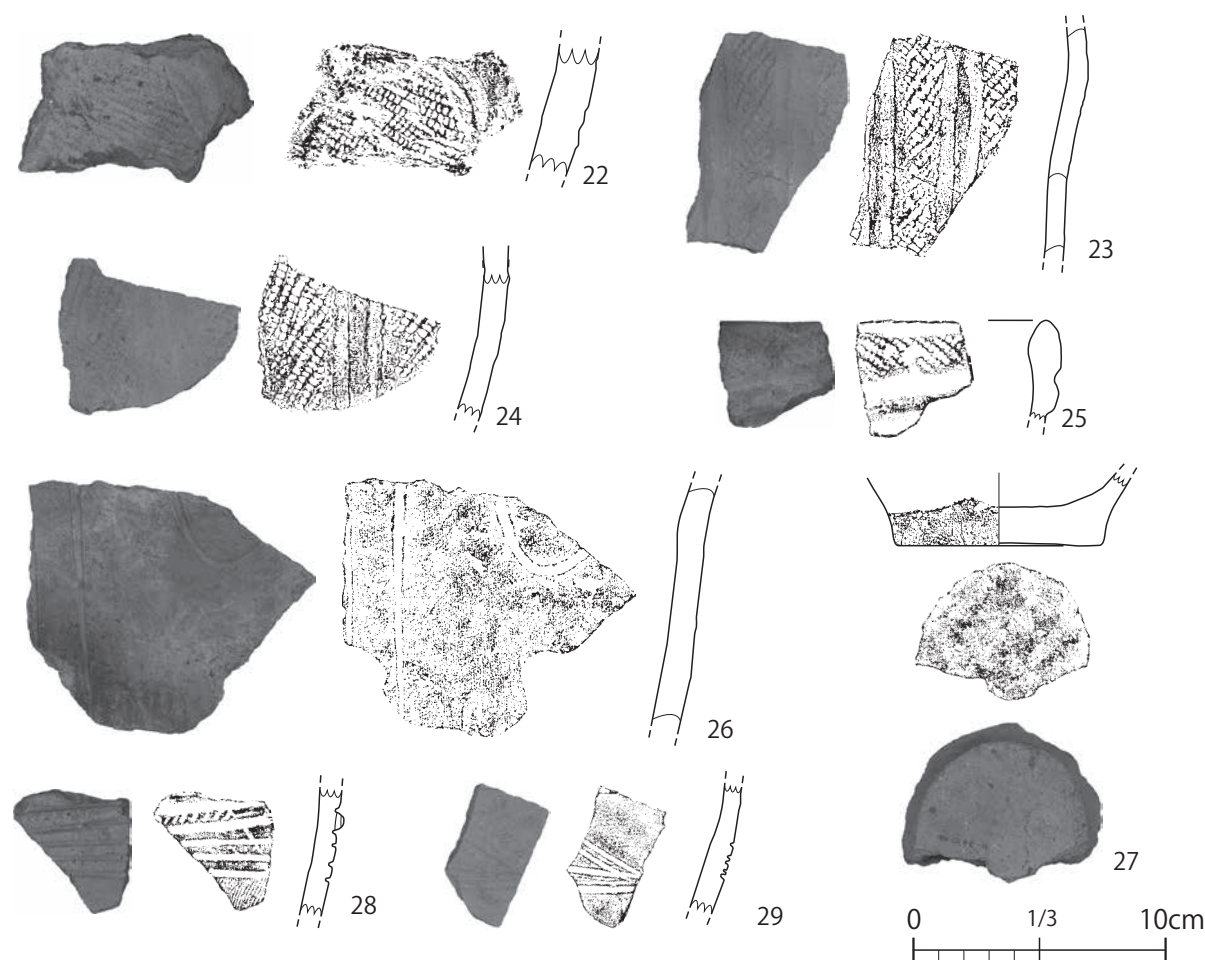
第 12 図 縄文時代の遺物 (2 : 1/3)



第 13 図 縄文時代の遺構 (5 : 1/200)



第 14 図 縄文時代の遺物 (3 : 1/3)



第 15 図 縄文時代の遺物（4：1/3）

第 1 表 98 号遺構出土縄文土器掲載資料

図版番号		出土 遺構	時期	型式	器種	部位	重量 (g)	胎土	焼成	文様／調整	色調	
											内面	外面
第 11 図	1	98 号	前期前半	花植下層～ 二ツ木式	深鉢	胴部	39.7	繊維、雲母、橙色ス コリア	不良	上半は縄文 LR（ヨコ）、下半は 0 段多条 RL（タテ）／内面条痕＋ミガキ	10YR2/2	10YR3/2
第 11 図	2	98 号	前期前半	花植下層～ 二ツ木式	深鉢	胴部	22.1	繊維、雲母、橙色ス コリア	不良	縄文 R（ヨコ）→下部に原体側面圧痕文／ 内面ナデ	5YR5/4	5YR6/8
第 11 図	3	98 号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	161.8	繊維、橙色スコリア	不良	縄文 L（ヨコ）→半裁竹管状工具による横 線文／内面ミガキ	7.5YR2/2	7.5YR6/6
第 11 図	4	98 号	前期中葉	黒浜式	深鉢	口縁 部	12.1	繊維、雲母	不良	格子目文／内面ナデ	2.5YR5/8	2.5YR5/6
第 11 図	5	98 号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	17.1	繊維	不良	半裁竹管状工具による沈線／内面ミガキ	7.5YR6/6	7.5YR2/1
第 11 図	6	98 号	前期中葉	黒浜式	深鉢	口縁 部	141.0	繊維、雲母、橙色ス コリア	普通	縄文 LR（ヨコ）／内面ヨコミガキ	10YR5/6	10YR6/6
第 11 図	7	98 号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	61.1	繊維、雲母、石英	不良	縄文 LR（ヨコ）／内面ミガキ	10YR5/4	10YR3/3
第 11 図	8	98 号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	57.8	繊維、白色粒子、橙 色スコリア	普通	縄文 LR（ヨコ）／内面ミガキ	7.5YR3/4	7.5YR6/6
第 11 図	9	98 号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	16.9	繊維、雲母	普通	縄文 RL（ヨコ）／内面ナデ	10YR6/3	10YR2/2
第 11 図	10	98 号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	27.3	繊維、雲母	普通	縄文 RL（ヨコ）／内面ナデ	10YR6/4	10YR4/4
第 11 図	11	98 号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	17.9	繊維、チャート、白 色粒子、橙色スコリ ア	不良	縄文 RL（ヨコ）／内面ナデ	5YR5/6	5YR3/4
第 11 図	12	98 号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	39.9	繊維、雲母	普通	縄文 RL（ヨコ）／内面ヨコミガキ	7.5YR5/6	7.5YR4/4
第 11 図	13	98 号	前期中葉	黒浜式	深鉢	口縁 部	11.1	繊維、橙色スコリア	普通	前々段反摺 RL（タテ）／内面ヨコミガキ	7.5YR3/3	7.5YR5/4
第 11 図	14	98 号	前期中葉	黒浜式	深鉢	口縁 部	13.0	繊維	普通	縄文 L／内面ナデ	5YR5/6	5YR5/8
第 11 図	15	98 号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	43.8	繊維、雲母	普通	縄文 R（ヨコ）／無文帯あり／内面ヨコミ ガキ	5YR4/8	5YR4/8

図版番号		出土 遺構	時期	型式	器種	部位	重量 (g)	胎土	焼成	文様／調整	色調	
											内面	外面
第11図	16	98号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	68.2	繊維、黒色粒子、橙色スコリア	普通	縄文R(ヨコ)／内面ヨコミガキ	10TR6/3	10YR2/1
第11図	17	98号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	13.8	繊維、雲母、橙色スコリア	不良	附加条縄文LR+R(ヨコ)／内面ミガキ	10YR2/3	10YR5/4
第11図	18	98号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	21.6	繊維	普通	縄文L(ヨコ)／内面条痕+ミガキ	5YR3/2	5YR6/6
第11図	19	98号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	13.3	繊維	不良	無文／内面ナデ	5YR4/4	5YR6/6
第12図	20	98号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	30.7	繊維、雲母、チャート、黒色粒子	不良	貝殻条痕状条線ないし極細の無節縄文／内面ナデ	5YR6/8	5YR4/6
第12図	21	98号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	14.5	繊維、石英、白色粒子	不良	貝殻条痕状条線ないし極細の無節縄文／内面ナデ	5YR5/6	5YR3/2
第12図	22	98号	前期中葉	釈迦堂Z3式	深鉢	胴部	48.2	金雲母、石英、白色粒子	普通	縄文L(タテ)／内面指頭押圧	2.5YR4/4	2.5YR4/6
第12図	23	98号	前期中葉	釈迦堂Z3式	深鉢	胴部	35.2	金雲母、石英、白色粒子	普通	縄文L(タテ)／内面指頭押圧	2.5YR4/4	2.5YR4/4
第12図	24	98号	前期中葉	釈迦堂Z3式	深鉢	胴部	17.5	金雲母、石英、白色粒子	普通	縄文L(タテ)／内面指頭押圧	5YR5/4	5YR5/6
第12図	25	98号	前期中葉	釈迦堂Z3式	深鉢	底部	158.8	金雲母、石英、黒色粒子、白色粒子	普通	縄文R(ヨコ)+縄文R(タテ)／底面木葉痕(カシワ)	5YR4/4	2.5YR5/6

第2表 遺構外出土縄文土器掲載資料

図版番号		出土 遺構	時期	型式	器種	部位	重量 (g)	胎土	焼成	文様／調整	色調	
											内面	外面
第14図	1	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	36.2	繊維、雲母、黒色粒子、橙色スコリア	普通	縄紋RL(ヨコ)／押圧隆帯／内面ヨコミガキ	7.5YR6/4	7.5YR7/3
第14図	2	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	20.9	繊維、橙色スコリア	不良	平行沈線／内面ミガキ	5YR4/4	2.5YR4/6
第14図	3	195号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	35.6	繊維、雲母	普通	縄文L(タテ)+縄文LR(タテ)／内面ナデ	5YR7/4	5YR6/8
第14図	4	214号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	59.4	繊維、黒色粒子	普通	縄文R(ヨコ)+縄文RL(ヨコ)／内面ヨコナデ	5YR6/6	5YR5/4
第14図	5	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	28.1	繊維、雲母、橙色スコリア	普通	縦位の非結束羽状縄文(LRタテ+ヨコ)／内面ナデ	7.5YR4/3	7.5YR4/6
第14図	6	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	32.3	繊維、橙色スコリア	不良	縄文LR(ヨコ)／内面上部ナデ+下部ヨコミガキ	7.5YR3/2	7.5YR5/4
第14図	7	247号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	27.5	繊維、白色粒子	普通	縄文LR(ヨコ)／内面ヨコナデ	7.5YR5/4	7.5YR6/6
第14図	8	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	23.9	繊維、橙色スコリア	普通	縄文LR(タテ)／内面ヨコナデ	5YR5/4	5YR6/8
第14図	9	207号	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	19.4	繊維、白色粒子	普通	縄文RL(ヨコ)／内面ナデ	5YR6/8	5YR5/5
第14図	10	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	17.7	繊維、白色粒子、橙色スコリア	普通	縄文R(タテ)／内面ナデ	5YR5/6	5YR6/6
第14図	11	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	25.3	繊維、雲母、橙色スコリア	普通	縄文R(タテ)／内面ヨコナデ	7.5YR4/4	7.5YR5/6
第14図	12	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	30.9	繊維、雲母、橙色スコリア	普通	縄文L(タテ)／内面ナデ	5YR6/4	5YR5/6
第14図	13	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	17.7	繊維、雲母、橙色スコリア	普通	縄文L(ヨコ)／末端結節あり？／内面ミガキ	2.5YR2/1	2.5YR5/6
第14図	14	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	20.5	繊維、雲母	普通	S字状結節縄文L(ヨコ)／内面ミガキ	7.5YR5/6	7.5YR7/8
第14図	15	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	15.1	繊維、雲母	普通	縄文L(タテ)／無文帯あり／内面ヨコミガキ	5YR3/1	5YR6/6
第14図	16	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	38.6	繊維、雲母、橙色スコリア	普通	縄文L(タテ)／内面タテナデ	7.5YR6/4	7.5YR6/4
第14図	17	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	口縁部	32.3	繊維、雲母	普通	縄文R(ヨコ)／口縁部に小突起あり／内面ヨコナデ	10YR6/6	10YR6/6
第14図	18	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	25.7	繊維、黒色粒子	普通	縄文R(ヨコ)／内面ヨコナデ	5YR6/8	5YR6/4
第14図	19	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	24.1	繊維	普通	縄文R(ヨコ)／内面ヨコナデ	5YR6/8	5YR6/4
第14図	20	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	胴部	43.5	繊維、橙色スコリア	普通	縄文R(ヨコ)／内面タテナデ	10YR6/4	10YR5/6
第14図	21	包含層	前期中葉	黒浜式	深鉢	底部	61.9	繊維、雲母、白色粒子	不良	縄文LR(ヨコ)／底部外面ナデ	7.5YR2/1	7.5YR6/6
第15図	22	包含層	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	100.2	雲母、黒色粒子、橙色スコリア	普通	縄文LR(タテ)→沈線／内面ナデ	2.5YR6/6	7.5YR7/3
第15図	23	包含層	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	54.2	雲母、橙色スコリア	良好	縄文RL(タテ)→縦位2条1組の単沈線／内面ヨコミガキ	2.5YR4/6	2.5YR4/4
第15図	24	包含層	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	46.9	雲母、白色粒子、橙色スコリア	普通	縄文RL(タテ)→縦位2条1組の単沈線／内面ヨコミガキ	2.5YR4/6	2.5YR5/6
第15図	25	2号	中期後葉	加曽利E4式	深鉢	口縁部	25.7	橙色スコリア	普通	縄文RL(ヨコ)→横位の平行沈線／内面ミガキ	10YR7/3	7.5YR6/6
第15図	26	19号	後期前葉	堀之内式	深鉢	底部	155.9	雲母、橙色スコリア	良好	沈線／内面ヨコミガキ	5YR6/6	5YR4/3
第15図	27	包含層	中期後葉	加曽利E式	深鉢	底部	111.97	橙色スコリア	普通	無文／立ち上がりミガキ／底部外面ミガキ	5YR6/4	2.5YR6/6
第15図	28	5・6・7号	後期前葉	堀之内式	深鉢	胴部	22.5	雲母、石英、橙色スコリア	良好	縄文R(タテ)→横位の平行沈線+刻目隆帯／内面ミガキ	7.5YR7/4	7.5YR7/3
第15図	29	包含層	後期前葉	堀之内式	深鉢	胴部	18.6	雲母、橙色スコリア	良好	平行沈線／内面ミガキ	7.5YR4/3	7.5YR7/4

2 近世1面

堀1基（板石群を含む）、上水路4基、井戸2基（付設土坑2基を含む）、溝1基、土坑34基、ピット41基の計86遺構を近世1面とした（第14図）。

【堀】

1号遺構（御殿堀）[C-3・4, D-3・4, E-3～7, F-4～7, G-5～7]（1区・2区）

・遺構（第16～19図）

北東方向に面した外縁部（北西－南東）が14m、北西方向に面した外縁部（北東－南西）が24m確認された。北西の外縁部の南西端部は44号遺構（近世2地下室）によって2mほど損壊を受けている。北東外縁と北西外縁は直角に屈曲するのではなく、やや鋭角である85°をなす。ただ底面における法面との屈曲線は、ほぼ直角を呈しており、今回の調査区部分に関して言えば北東法面の上下縁では平行性が保たれていない。

本地点から南東に250mほど離れた「日本銀行本店原町家族寮地点」（東京都埋蔵文化財センター2020）では、ローム上面での御殿堀上端幅が14mから14.5mほど、底面幅が7mから7.5mほどとなる。本地点においても同程度の規模であるとするならば、内縁部の上端はちょうど調査区南東部付近に位置することになる。内縁部の底面端は、今回の調査区範囲にぎりぎりでかかるかどうかという想定となるが、今回の調査区から御殿堀の内側法面に関する兆候を認めることはできなかった。

底面からの法面の仰角は、おおむね33°から35°であり、「日本銀行本店原町家族寮地点」と同様である。

底面の標高値は、21.4mで、上面（ローム層上面）の標高値は24.1mで、御殿堀の深さは2.7m～3mほどとなる。「日本銀行本店原町家族寮地点」における底面の標高値は20.6mで、本地点との落差は0.8mで傾斜率は0.3となり、本地点から「日本銀行本店原町家族寮地点」に向けて緩やかに傾斜している。

御殿堀の北西法面には、北西方向から御殿堀に注ぎ込むような形で3本の上水路が見出された。南西から19号遺構、51号遺構、70号遺構である。それぞれ溝底面の標高値が異なり、最も高位の上水路が51号遺構で御殿堀に開口している部分で23.5m、次に51号遺構から北東に8mほどに位置する70号遺構で22.8m、更に51号遺構から南西に3mほどに位置する19号遺構で21.8mとなる。51号遺構と19号遺構は御殿堀北西外縁に対してほぼ直交しているが、70号遺構はやや西北西－東南東に7°傾いている。それぞれの溝底面レベルの違いは、構築された時期の違いを表わしており、高位の51号遺構から70号遺構、そして19号遺構と2度の作り変えがなされたのではないかと推測する。以下51号遺構を「上水路-1」、70号遺構を「上水路-2」、19号遺構を「上水路-3」とする。それぞれ上水路の開口部分直下の法面において流下に伴う顕著な損耗は認められず、何らかの支え構造を有しながら木樋が滞水部分まで突出していたのではないかと推測される。

御殿堀法面には上面と堀の底面を昇降するためのステップを刻んだ施設が3基確認された（第17・19図）。昇降施設-Aは、19号遺構（上水路-3）の開削位置から南方向におよそ4mの長さで北西法面の中位まで確認された。昇降施設-Bは、北西法面と北東法面の屈折点から南方向におよそ



第 16 図 近世 1 面の遺構分布図 (1/200)

6.5m の長さで北東法面のやや下位まで確認された。昇降施設 C は北西法面と北東法面が屈折する折線に上面からほぼ底面までおよそ 7m の長さで確認された。最上位の 1m 余りは、98 号遺構（縄文建物跡）による黒色土層が堆積しており、その部分についてはわざわざロームブロックを貼り付けてステップを形成している。

土層の堆積は、「日本銀行本店原町家族寮地点」（東京都埋蔵文化財センター 2020）などで確認されているように、御殿堀の内縁方向から外縁方向に向けて斜めにロームブロック土と黒色土が互層をなして堆積している。すなわち御殿廃絶後に内側から外側に向けて埋め戻された状態を示す。ただし底面から 40 ～ 50cm は、粘土層と砂層の水平堆積を示す。しかしそうした状態が全体に認められるのではなく、ある部分では攪拌された状態を示す。御殿堀が滞水して機能していた当時の堆積物とみなされるが、部分的には流水の影響が及んでいたのだろう。こうした部分については、水平堆積を示す部分を選んで、2箇所から土壌サンプルを採取して鉱物および植物珪酸体化石の分析を行なった（第 IV 章 第 4 節「原町西遺跡における堆積物の特徴と産出した植物珪酸体化石」304-308 頁参照）。

・遺物（第 49 ～ 51 図）

出土資料は、磁器の碗（141 点）・皿（29 点）・鉢（6 点）・蓋（6 点）・壺（1 点）・瓶（10 点）・仏飯器（1 点）・香炉（4 点）・蓋物（3 点）・不明（5 点）、陶器の碗（62 点）・皿（24 点）・鉢（4 点）・蓋（1 点）・甕（6 点）・瓶（37 点）・水注（3 点）・香炉（2 点）・播鉢（36 点）・鬘水入れ（1 点）・土瓶（2 点）・灯明受皿（3 点）・灯明皿（1 点）・灰吹（1 点）・不明（8 点）、土器の植木鉢（1 点）・火鉢（8 点）・焙烙（20 点）・焼塩壺（1 点）・焼塩壺蓋（1 点）・土製品（2 点）・ミニチュア（1 点）・五徳（1 点）・火入れ（1 点）・不明（15 点）である。

陶磁器の実測資料は、磁器の碗（第 49 図 -1 ～ 3、4：底部銘「宣明」、5：底部銘角杵篆書、第 50 図 -6：染付碗の内外面に同様の紋様）、鉢（第 49 図 -8：「宣明年製」）、青磁鉢（水盤力）（第 50 図 -5：人物形把手）、皿（第 49 図 -6・7）、香炉（第 49 図 -10）、碗蓋（第 49 図 -9）、陶器の碗（第 49 図 -11・12）、皿（第 49 図 -14）、鬘水入れ（第 49 図 -13）、灯明受皿（第 49 図 -15）である。写真資料は、磁器の碗（第 50 図 -2・3：銘）、陶器の碗（第 49 図 -17・第 50 図 -1：丸杵篆刻）、皿（第 49 図 -18：丸杵篆刻）、蓋物蓋（第 50 図 -4：波文）である。第 49 図 -5・第 50 図 -5・6 は、中国産と思われる。本遺構出土の陶磁器の製作年代については、第 V 章において「小石川御殿堀（1 号遺構）覆土出土陶磁器の概要」（319-321 頁参照）として記されている。

‘かわらけ’（第 49 図 -16）の総数は、388 点（1,065g）で、最小個体数は 12 点である。

土製品は、人形（第 50 図 -7）である。

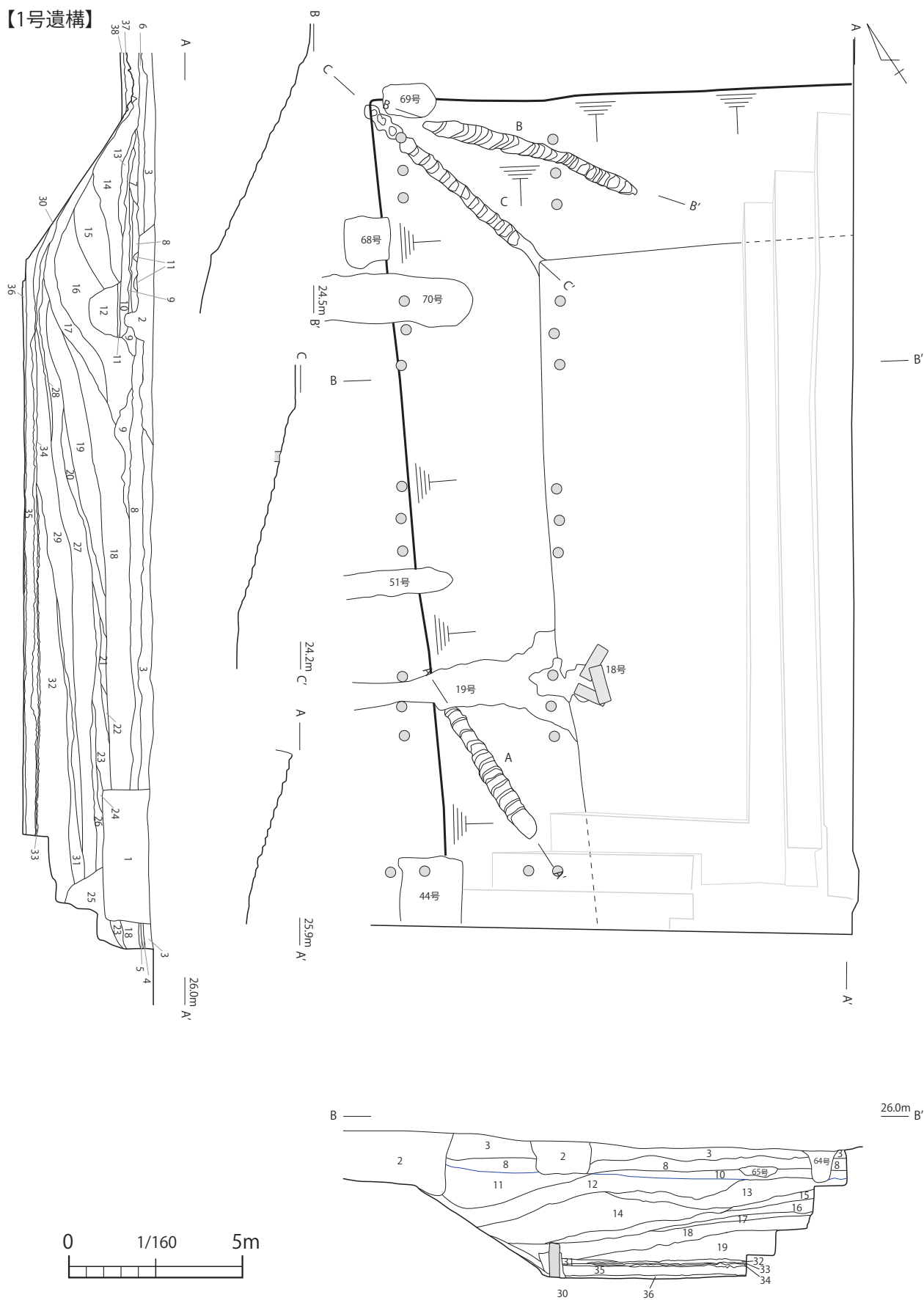
金属製品は、銭貨が 26 枚である。古寛永は 5 枚（第 50 図 -8 ～ 12）、新寛永は 21 枚（第 50 図 -13・14：「文」、15 ～ 20、21・22：「文」、23 ～ 30）である。煙管は、吸口が 2 点（第 50 図 -31、32）出土した。そのほか「帯状の銅製品」（第 51 図 -1）が出土した。複数の鉄釘（第 51 図 -8）が出土している。

ガラス製品は、両端部が欠損する黄色の筭（第 51 図 -2）である。

・部材

部材としては、軒平瓦（第 51 図 -3）、軒丸瓦（第 51 図 -5、6）、丸瓦（第 51 図 -4）である。部材である瓦を転用した砥石（第 51 図 -7）は、側面と表裏面に研磨痕跡が認められる。

【1号遺構】



第17図 近世1面の御殿堀（1：1/160）

・自然遺物

サザエが3点出土した。

18号遺構（板石群） [D-4]（1区）

・遺構（第20図）



1号遺構（北東より）



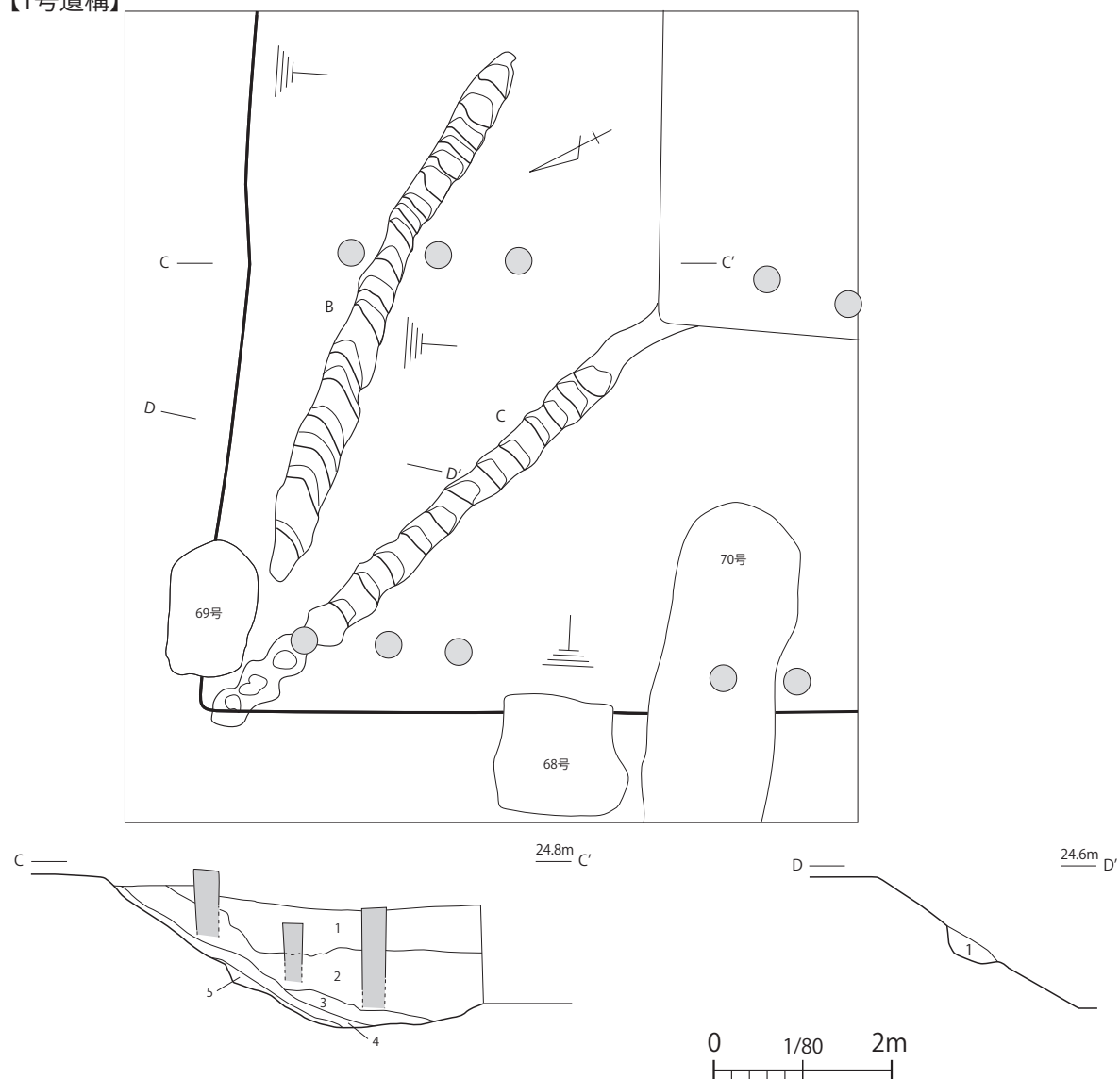
1号遺構（南西より）

土層説明

1号（東壁）	1	黒褐色	粘性欠く。締まりやや欠く。「試掘坑4」埋土。
	2	暗褐色	粘性欠く。締まりやや欠く。近現代埋土。
	3	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。モルタル片など近現代遺物含む。
	4	褐色	粘性欠く。締まり強。ローム土主体。
	5	極暗褐色	粘性やや欠く。締まりあり。
	6	暗褐色	粘性やや欠く。締まりやや欠く。
	7	暗褐色	粘性欠く。締まり欠く。径1cmロームブロック含む。
	8	黒褐色	粘性あり。締まりあり。近世遺物包含層。
	9	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。
	10	暗褐色	粘性欠く。締まりあり。径1cmロームブロック含む。
	11	黒褐色	粘性あり。締まり強。径3cmロームブロック含む。
	12	褐色	粘性あり。締まり強。ハードローム主体。白色粘土ブロック・瓦片含む。
	13	黒褐色	粘性あり。締まり強。径1-5cm明黄褐色粘土ブロック10%・径2-3cmロームブロック3%。
	14	暗褐色	粘性あり。締まりあり。上半部はロームブロック主体、下半部は黒色土主体。
	15	暗褐色	粘性あり。締まりあり。ロームブロック主体。瓦片凝集ブロックあり。
	16	明褐色	粘性あり。締まりやや欠く。ローム土の再堆積。径3-8cmロームブロック・径1-3cm白色粘土ブロック含む。
	17	極暗褐色	粘性欠く。締まり欠く。黒色土主体。径1-2cmロームブロック・径3cm灰白色粘土ブロック・砂質土含む。
	18	黒褐色	粘性やや欠く。締まりやや欠く。径1-8cmロームブロック・径1cm灰白色粘土ブロック含む。黒色土主体。
	19	褐色	粘性あり。締まりあり。径2-8cmロームブロック含む粘土層。
	20	極暗褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径3-5cmロームブロック含む。
	21	褐色	粘性あり。締まりあり。ローム土主体。
	22	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径3cmロームブロック含む。
	23	暗褐色	粘性やや欠く。締まり欠く。
	24	暗褐色	粘性やや欠く。締まりやや欠く。
	25	黒褐色	2号土坑覆土。'かわらけ'片・土玉大量に含む。
	26	褐色	粘性あり。締まりなし。やや粗粒。径3-5cmロームブロック主体。
	27	褐色	粘性欠く。締まり欠く。径1-15cmロームブロック60%。
	28	黒褐色	粘性強。締まりあり。径2-8cmロームブロック・径1-5cm灰白色粘土ブロック含む。
	29	褐色	粘性あり。締まりあり。径2-8cmロームブロック含む。
	30	暗褐色	粘性強。締まりあり。砂質土のラミナを含む粘土層。斜面部で一部砂層と粘土層のラミナが褶曲。
	31	黒褐色	粘性欠く。締まり欠く。径1-10cmロームブロック含む。
	32	暗褐色	粘性欠く。締まり欠く。径3-5cmロームブロック含む。
	33	黒褐色	粘性欠く。締まり欠く。径3-5cmロームブロック含む。
	34	黒褐色	粘性欠く。締まり欠く。径1-10cmロームブロック含む。
	35	暗オリーブ褐色～黒褐色	（粘土層）～黒褐色（砂層）それぞれがラミナを呈する。
	36	褐色	粘性あり。締まり強。ローム土および褐色。粘性強。締まりあり。粘土層が混在。
	37	暗褐色	粘性あり。締まりあり。ソフトローム主体。
	38	褐色	粘性あり。締まりあり。ローム土主体。

第18図 近世1面の御殿堀（2）

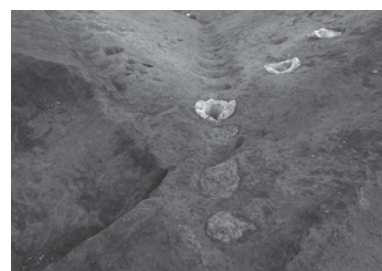
【1号遺構】



1号遺構断面(北西より)



1号遺構斜路断面(北西より)



1号遺構斜路検出状況(北より)

土層説明

1号 C	1	黒褐色	粘性欠く。締まり欠く。径1-5cm砂利・礫30%。
	2	褐色	粘性あり。締まりあり。径3-5cmロームブロック50%。
	3	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-2mmローム粒3%。
	4	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-3cmロームブロック40%。
	5	黒褐色	粘性やや強。締まりあり。径2-3cm黒褐色粘土ブロック30%。斜路覆土。
1号 D	1	黒褐色	色粘性・締まりあり。径3-5cm粘土ブロック30%。

第 19 図 近世 1 面の御殿堀 (3 : 1/80)

19号遺構の出水口に、板石が3枚重なって出土した。板石1（107cm×36cm×10cm：95.5kg）は、板石2（102cm×35cm×10cm：79.9kg）および板石3（92cm×30cm×9cm：54.1kg）の上に一部を重ねて載せられている。板石1の長軸はほぼ南北、板石2は北東―南西、板石3は北西―南東となる。平面形は、板石1を底辺に板石2と板石3がほぼ直交する三角形形状を呈する。板石3の上には、口縁部と底部を欠損する青磁花入（第52図-1）が横倒しになって出土した（8頁：写真-14, 85頁：写真-1）。

・遺物（第52図）

出土資料は、磁器の碗（20点）・瓶（1点）・蓋物（1点）・花瓶（花入：1点）、陶器の碗（3点）・皿（8点）・鉢（3点）・瓶（4点）・合子（1点）・土瓶（1点）・灰吹（1点）、土器の火鉢（2点）・焙烙（1点）である。

磁器は、青磁の花入（中蕪：第52図-1）である。中国では口頸部と基部が漏斗状に広がり、胴部に球状の膨らみを持つ花入については、「花觚」あるいは「尊形瓶」と呼ばれている（吉富2015）。底部と口縁部を欠損する。

陶器は、京都・信楽産の合子（第52図-2）である。土器は、‘かわらけ’7点（8g）である。

金属製品は、銭貨が15枚である。古寛永は、2枚（第52図-3、4）、新寛永が13枚（第52図-5～8、9・10：2枚付着、11、12、13：2枚付着、14）である。煙管は、雁首が1点（第52図-15）、吸口が1点（第52図-16）出土した。

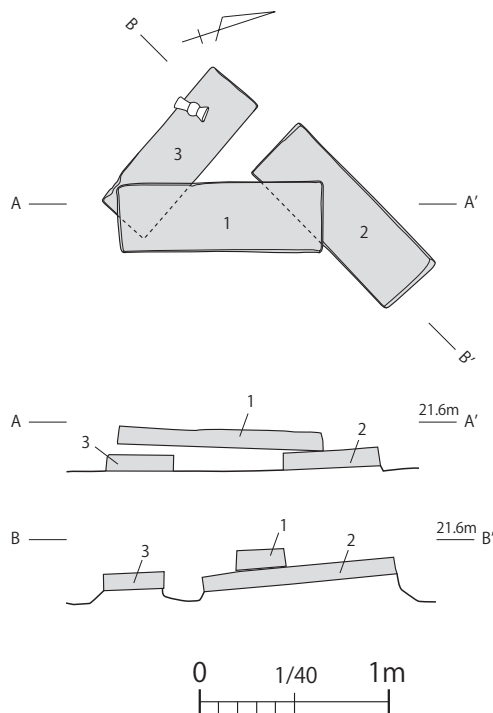
【上水路】

19号遺構（千川上水-3）[D-3・4, E-2・3]（1区）

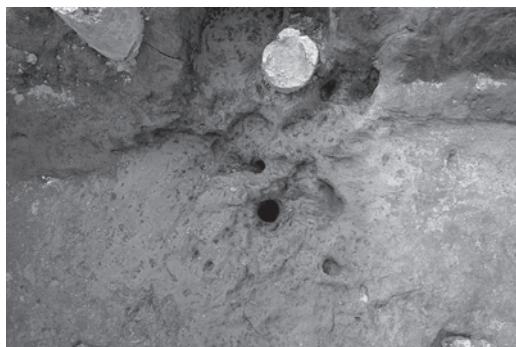
・遺構（第21～23図）

調査区南西部において北西から南東の1号遺構（御殿堀）に向けて流れ込む上水路である。13.9m

【18号遺構】



18号遺構遺物出土状態（北西より）



18号遺構（南東より）

第20図 近世1面の御殿堀（4：1/40）

× 132cm × 232cm で、中央部において 2m 弱のトンネル構造をなす。御殿堀への注ぎ口には、18 号遺構（板石群）が存在する。

・遺物（第 52・53 図）

出土資料は、磁器の碗（57 点）・皿（3 点）・蓋（1 点）・瓶（6 点）、陶器の碗（52 点）・皿（3 点）・鉢（2 点）・甕（2 点）・瓶（12 点）・香炉（5 点）、土器の火鉢（1 点）である。

磁器は、坏（第 52 図 -18）、碗（第 52 図 -19：見込み銘「道元□□」、20：銘）である。

陶器は、碗（第 52 図 -21）、三足の香炉（第 52 図 -22）である。

‘かわらけ’は、26 点（162g）である。

金属製品は、銭貨では新寛永 2 枚（第 52 図 -23、24）である。煙管は、雁首（第 52 図 -25）1 点である。そのほか鉄釘が 199 点出土した。木樋に伴う舟釘は、出土地点を記録したもので 80 点出土した（第 22 図）。10cm から 30cm、両側の幅は 50cm の間隔で出土している。出土地点を記録した 80 点の内訳は、完形（12 点）・頭部欠損（7 点）・中間部欠損（5 点）・末端部欠損（49 点）・頭部および末端部欠損（7 点）となる。完形 12 点の平均長は、159mm で五寸余りである。出土地点を記録できなかったものが、119 点ある（第 53 図）。

磁器端反碗（第 52 図 -19）は 19 世紀前半の製品で、後世の混入と思われる。

51 号遺構（千川上水 -1） [E-3・4, F-2・3]（1 区・3-5 区）

・遺構（第 24 図）

調査区北西縁から 1 号遺構（御殿堀）北西外縁にかけて、557cm × 45cm × 35cm、長軸は北西―南東となる。1 区と 3-5 区の 2 回に分けて調査した。北東側については、一部広がりをもつ。鉄釘などは、出土しなかった。

・遺物（第 54 図）

出土資料は、磁器の碗（29 点）・皿（7 点）・鉢（1 点）・蓋（1 点）・瓶（3 点）・紅猪口（1 点）、陶器の碗（18 点）・皿（2 点）・鉢（8 点）・甕（17 点）・瓶（11 点）・土鍋（1 点）・播鉢（2 点）・鬚水入れ（1 点）、土器の火鉢（13 点）・焙烙（43 点）・焼塩壺（1 点）・焼塩壺蓋（1 点）・土製品（人形：1 点、ミニチュア：1 点、型：1 点）・不明（2 点）である。

磁器は、紅猪口（第 54 図 -1）である。陶器は、碗（第 54 図 -2）、鬚水入れ（第 54 図 -3）である。

土器は、焼塩壺蓋（第 54 図 -4）、焼塩壺（第 54 図 -5）の刻印は「泉川麻玉」で隅の切れた一重の長方形枠線で囲まれている（85 頁：写真 -2）。胎土には金雲母を若干含む。1720 年代末から 1740 年代の初めにかけての製作年代が推定されている（小川 2008）。磁器碗（第 54 図 -6：銘角枠文字）は 19 世紀後半の製作年代であるが、後世の混入と思われる。

‘かわらけ’の総数は 111 点（891g）で、最小個体数は 7 点である

金属製品は、銭貨で古寛永 1 枚（第 54 図 -7）である。そのほか真鍮製「鋏」の破片が 1 点（第 54 図 -8）出土した。鉄釘が複数出土している（第 54 図 -11）。

石製品は、砥石（第 54 図 -9）である。

・自然遺物

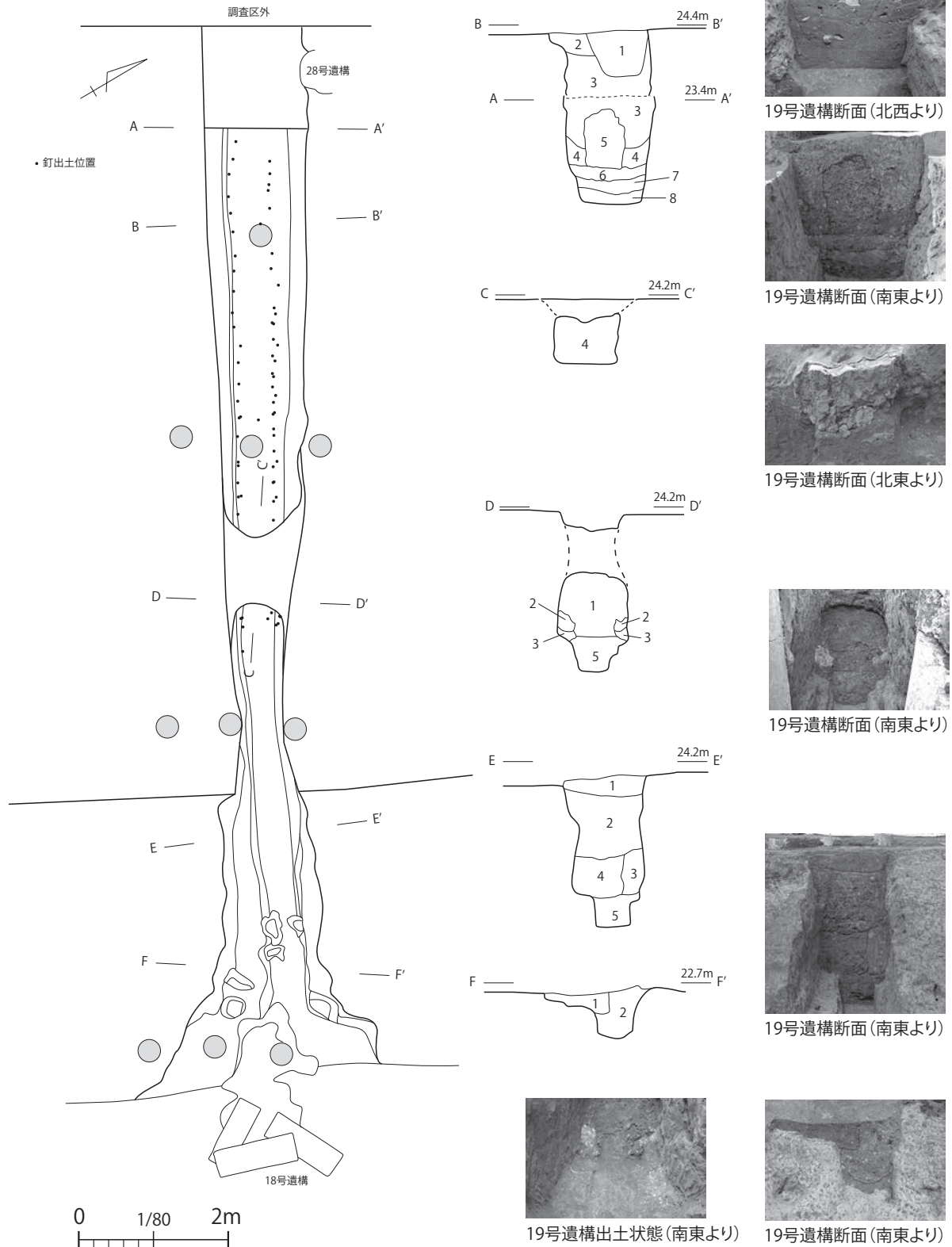
ハマグリが、10 点出土している。

70 号遺構（千川上水 -2） [F-4・5, G-3~5, H-3]（2 区）

・遺構（第 25・26 図）

調査区北西側から 1 号遺構（御殿堀）に向けて、長軸を北西－南東とする。11m × 62cm ×

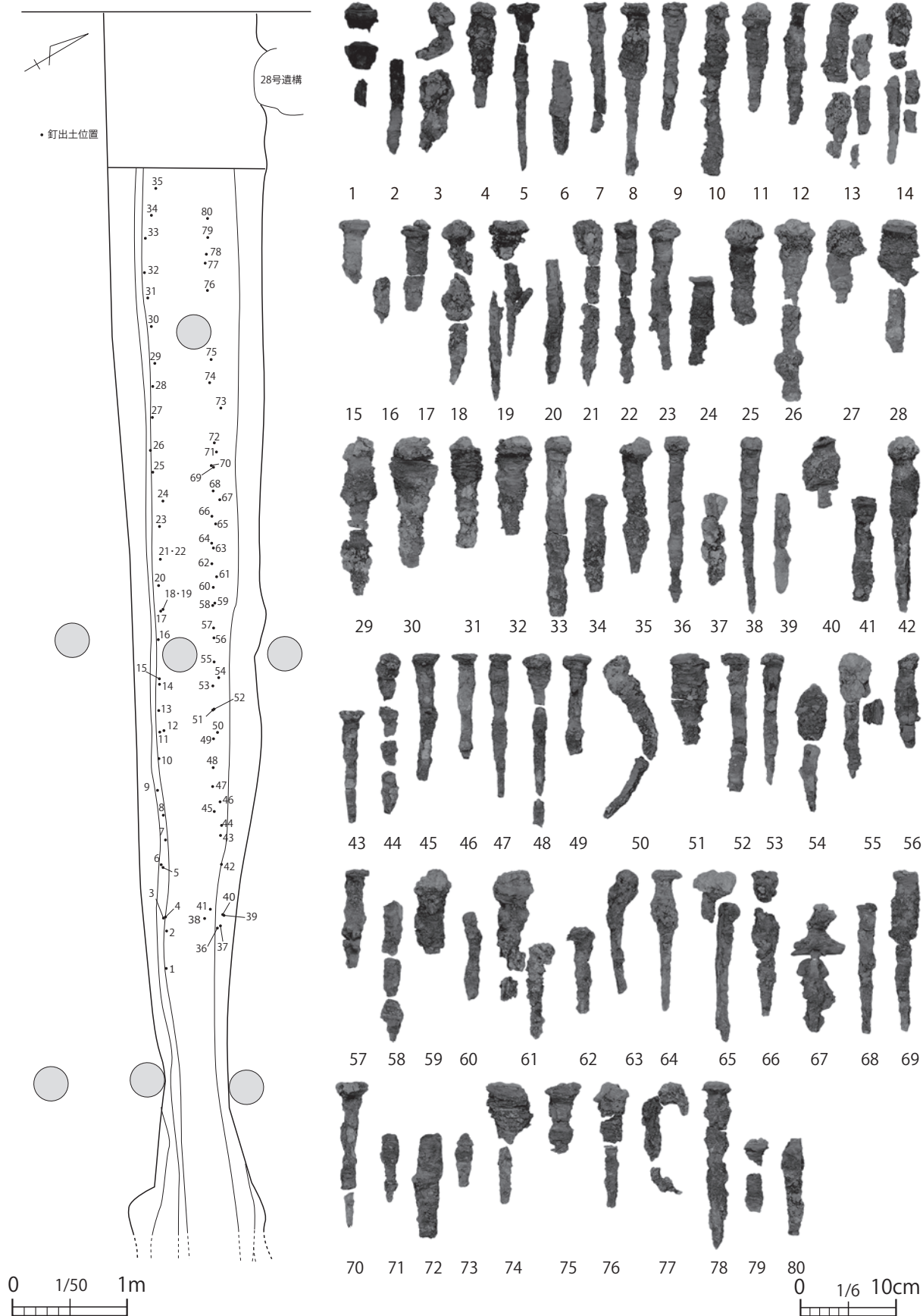
【19号遺構】



第 21 図 近世 1 面の上水路（1：1/80）

【19号遺構】

調査区外



第22図 近世1面の上水路（2：1/6・1/50）

83cm で木樋を設置したと想定される鉄釘出土位置は、上水路自体の長軸とややずれて確認された。70号遺構の長軸自体が1号遺構（御殿堀）の北西外縁に対して10°ほど北にぶれているが、木樋の設置位置はさらにそこから5°ほど北に偏っている。



19号遺構(北西より)



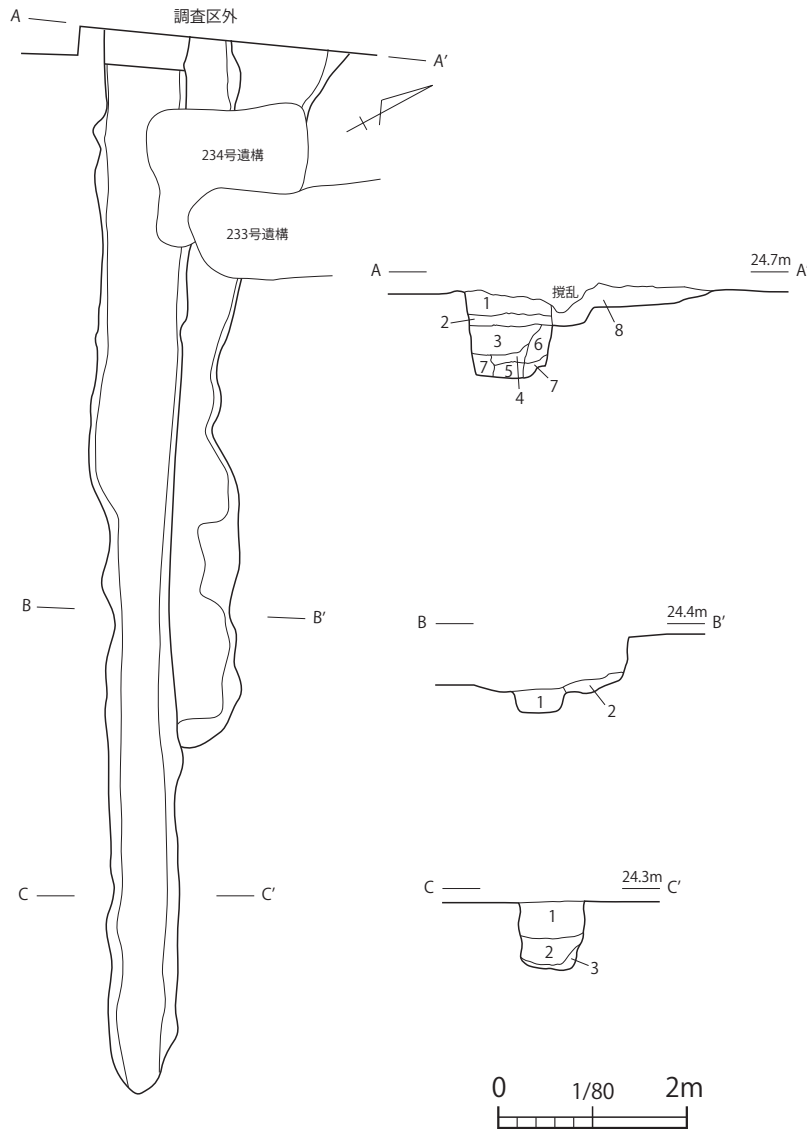
19号遺構(南東より)

土層説明

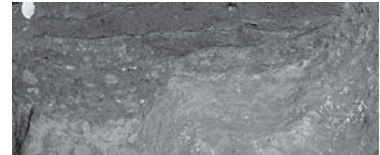
19号 B	1	極暗褐色	粘性あり。縮まりあり。径1-30mmロームブロック10%・径5mm炭化物片含む。
	2	黒褐色	粘性あり。縮まり強。径1-30mmロームブロック含む。1層とほぼ同。
	3	極暗褐色	粘性あり。縮まりあり。径5-30mmロームブロック40%。
19号 A	4	暗褐色	粘性やや欠く。縮まり欠く。小礫・草根含む。側面および底面に鉄釘残存。
	5	黒褐色	粘性やや強。縮まりあり。径1-5cmロームブロック20%。
	6	暗褐色	粘性あり。縮まりあり。ロームブロック・黒色土で構成。
	7	暗褐色	粘性あり。縮まりあり。ロームブロック主体土。
	8	暗褐色	粘性あり。縮まりあり。4層とほぼ同。
19号（トンネル部分）C・D	1	極暗褐色	粘性あり。縮まり特に最上部欠く。径5-20mmロームブロック10%・炭化物片含む。
	2	灰白色	粘性強。縮まりあり。径1cmロームブロック僅かに含む。灰白色粘土層。左は高さ30cm、右は高さ15cm。
	3	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径20-30cmロームブロック30%・径5-10mm灰白色粘土ブロック僅かに含む。
	4	極暗褐色	粘性あり。縮まり欠く。内容物は1層とほぼ同。
	5	暗褐色	粘性あり。縮まりあり。径3-10cmロームブロック主体。幅約40cm・高さ45cmの掘り込み埋土。
19号 E	1	暗褐色	粘性やや欠く。縮まりあり。径3-15mmロームブロック10%・炭化物片含む。
	2	褐色	粘性あり。縮まりやや欠く。径3-5cmロームブロック50-70%。
	3	暗褐色	粘性あり。縮まりやや欠く。径5-10cmロームブロック・黒色土混在。
	4	暗褐色	粘性欠く。縮まり欠く。径1-3cmロームブロック10%・瓦片含む。粗粒。空隙あり。
	5	褐色	粘性あり。縮まりあり。径5-10cmロームブロック主体。ロームブロックの間に灰白色粘土を混在。空隙あり。
19号（堀際）F	1	暗褐色	粘性あり。縮まりやや欠く。径3-30mmロームブロック40%。
	2	極暗褐色	粘性強。縮まりあり。粘土質土。径3-30mmロームブロック僅かに含む。

第 23 図 近世 1 面の上水路（3）

【51号遺構】



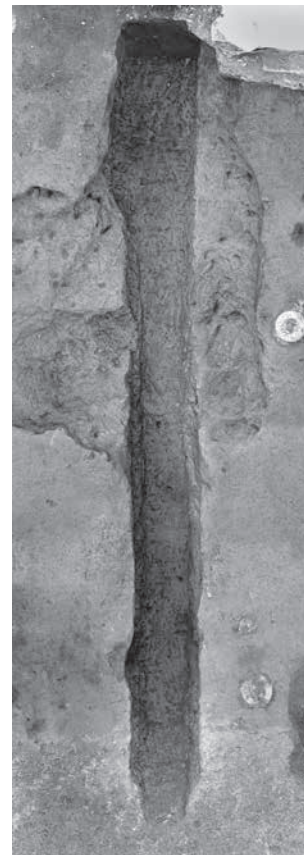
51号遺構断面(南東より)



51号遺構断面(南東より)



51号遺構断面(南東より)



51号遺構(南東より)

土層説明

51号 A	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。51号溝覆土。
	2	極暗褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径3-5cmハードロームブロック含む。
	3	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cmハードロームブロック含む。
	4	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径5-10mmハードロームブロック5%。
	5	黒褐色	粘性あり。締まり欠く。径1cmハードロームブロック3%。
	6	極暗褐色	粘性あり。締まり欠く。径10cmハードロームブロック10%。ソフトローム主体土。
	7	灰白色	粘性強。締まりあり。径3-5cm灰白色粘土主体。
	8	黒褐色	粘性やや強。締まりあり。径1-3mmローム粒3%。51号溝北側に広がる浅い掘り込み。
51号 B	1	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径2-3cmロームブロック10%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-3mmローム粒3%。
51号 C	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径2-4cmロームブロック3%。径5-20mm白色粘土ブロック10%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径5-10mmロームブロック含む。
	3	暗褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径2-3cmロームブロック30%。白色粘土ブロック含む。

第 24 図 近世 1 面の上水路 (4 : 1/80)

・遺物

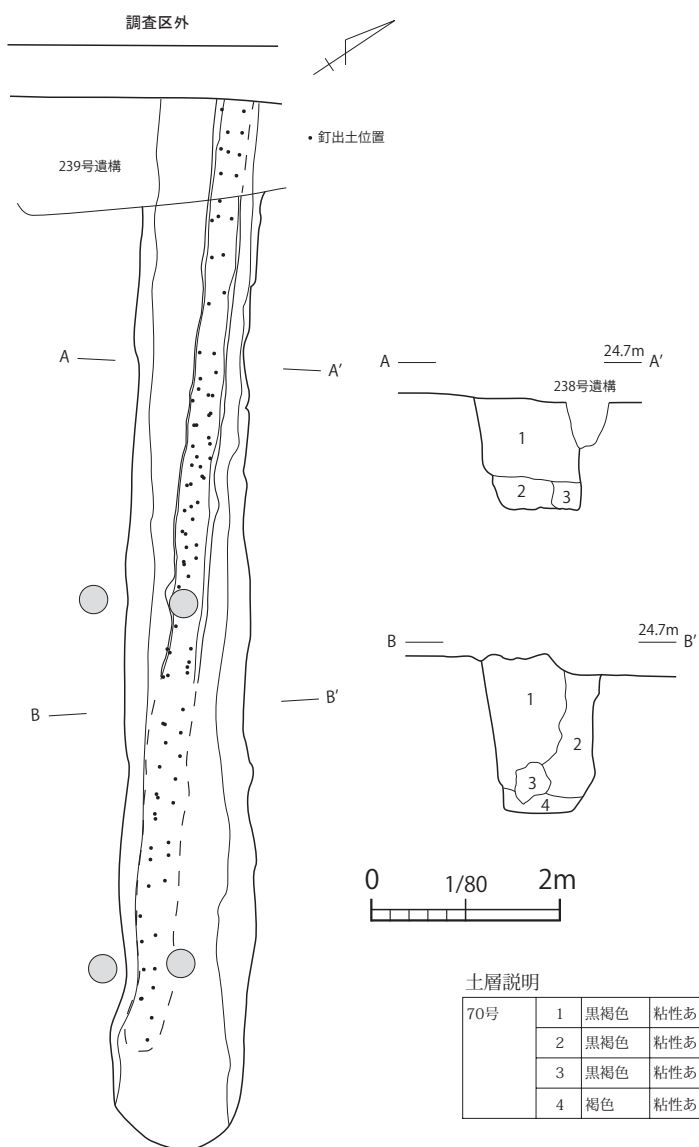
資料は、磁器碗（16点）・皿（1点）・壺（2点）・瓶（2点）・仏飯器（1点）・香炉（1点）、陶器碗（5点）・皿（3点）・鉢（1点）・播鉢（1点）・植木鉢（1点）・土瓶（1点）・火鉢（1点）・不明（2点）、土器の焙烙（4点）・不明（1点）である。‘かわらけ’は、21点（72g）である。

金属製品は、鉄釘が85本、鋸が5本出土した。

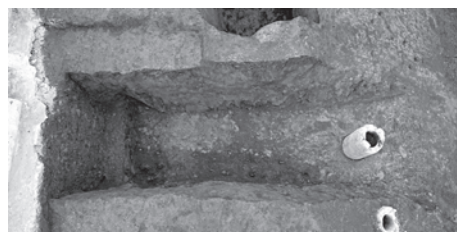
木樋に伴う鉄釘は、出土地点を記録したもので86本出土した（第26図）。出土した間隔は概ね10cmから30cm、両側の幅も20cmから30cmの間隔で出土している。粗密があり、中央部でやや密に、南東部でやや疎である。出土地点を記録した85点の内訳は、完形（4点）・頭部欠損（8点）・中間部欠損（5点）・末端部欠損（32点）・頭部および末端部欠損（36点）となる。完形4点の平均長は、108mm（三寸余り）である。その他、鋸あるいは又釘と思われるものが5点出土している。

・自然遺物

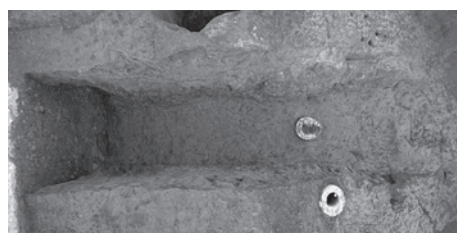
【70号遺構】



70号遺構断面（南東より）



70号遺構出土状態（南西より）



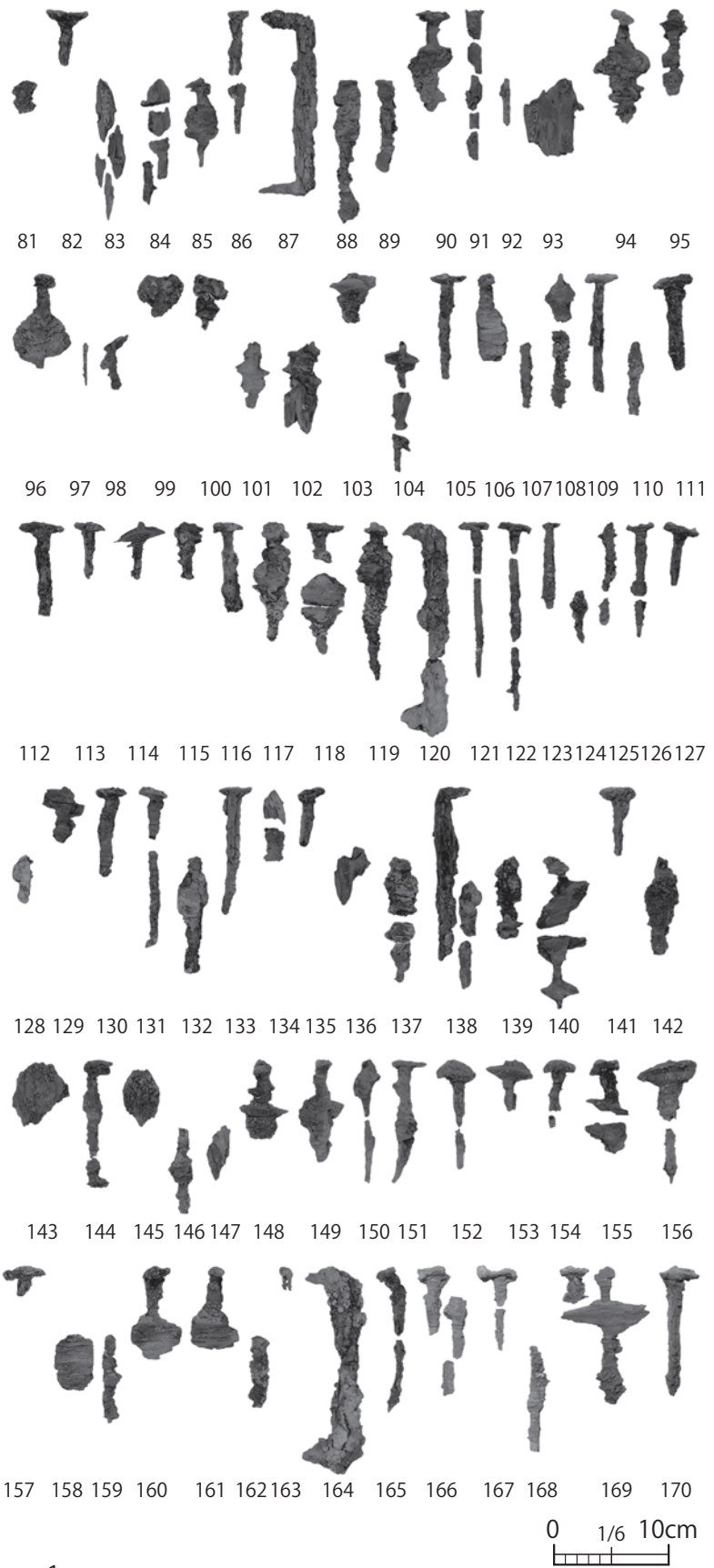
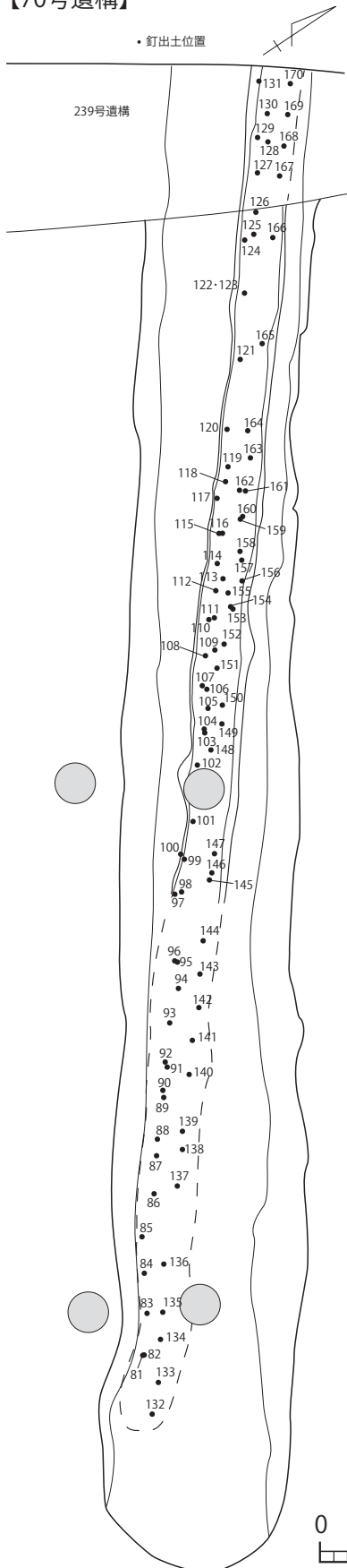
70号遺構（南西より）

土層説明

70号	1	黒褐色	粘性あり。締まり欠く。径3-5cmロームブロック30%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まり欠く。径5-10cmロームブロック20%。1層とほぼ同。
	3	黒褐色	粘性あり。締まり欠く。ロームブロック少なく空隙あり。鉄釘出土。木樋設置部分。
	4	褐色	粘性あり。締まりやや欠く。ロームブロック埋土主体。

第25図 近世1面の上水路（5：1/80）

【70号遺構】



第 26 図 近世 1 面の上水路（6：1/6・1/50）

サザエが、1点出土している。

214号遺構（千川上水-4） [H-3・4, I-4・5, J-5]（3-3区）

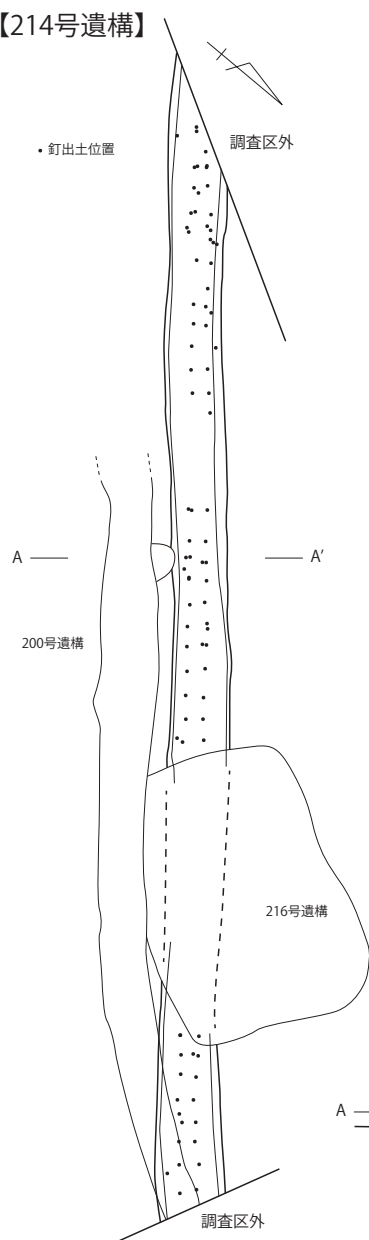
・遺構（第27・28図）

調査区の北部において長軸は北東－南西で12.3m×60cm×120cmの規模で確認された。218号遺構（近世1井戸）を切り、198号遺構（近世1地下室）に切られる。199号遺構・200号遺構（近代排水施設）とほぼ同じ位置である。水路底面からは、ほぼ等間隔で鉄釘が出土した。また木樋の継手と思われる箇所には、白色粘土が確認された。

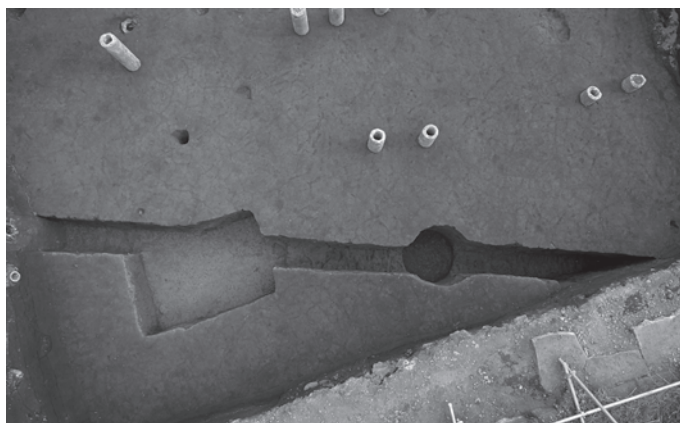
・遺物

出土資料は、磁器の碗（13点）・皿（1点）・不明（1点）、陶器の碗（4点）・皿（3点）・鉢（1点）・瓶（2点）・播鉢（1点）・灯明受皿（2点）・不明（2点）、土器の不明（6点）である。

【214号遺構】



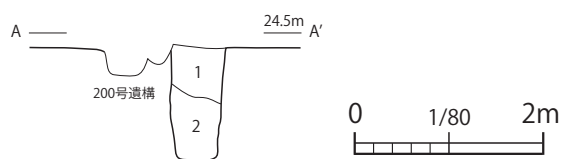
214号遺構断面（北東より）



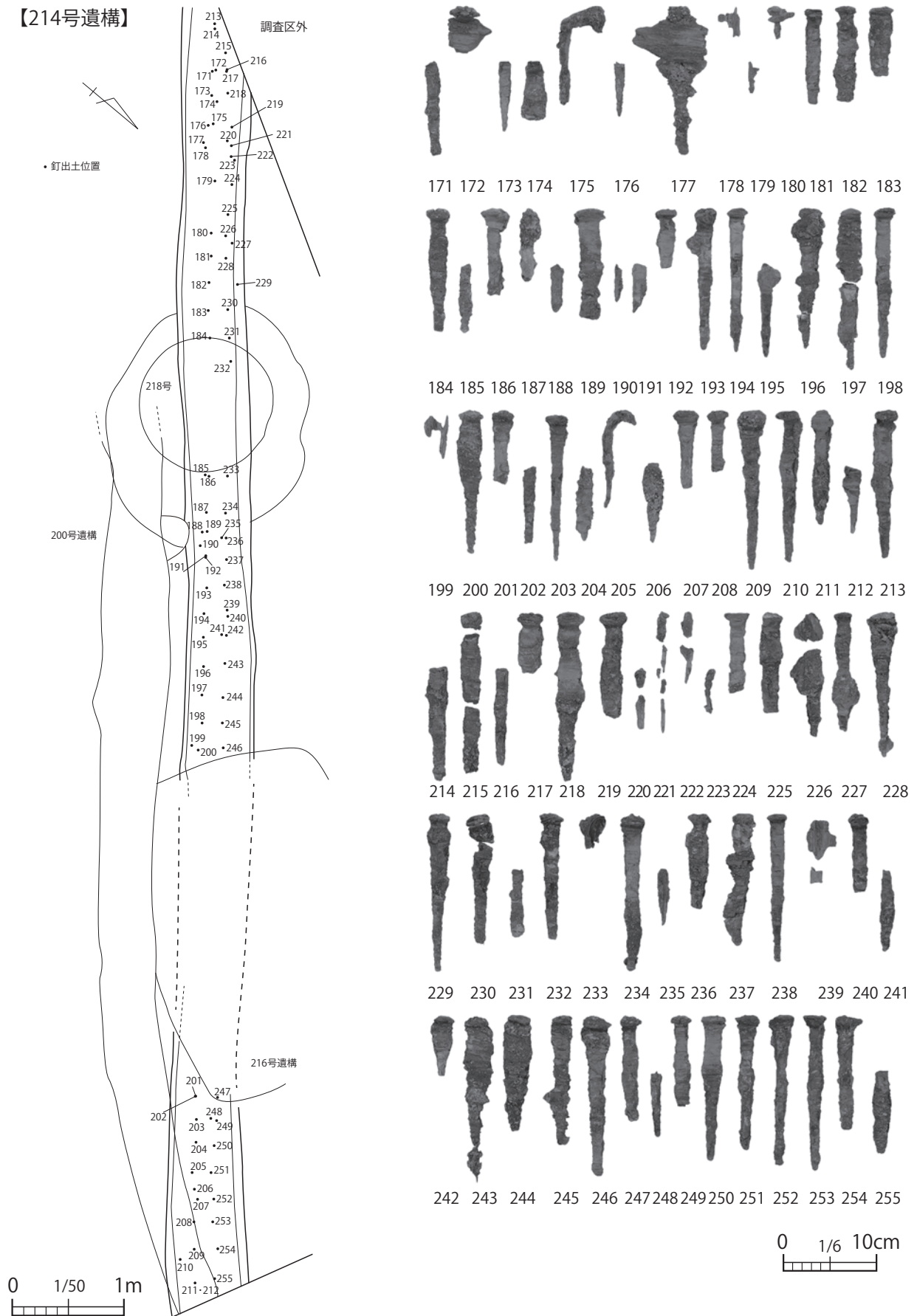
214号遺構（北西より）

土層説明

214号	1	褐色	粘性あり。締まりあり。径5-10mm白色粘土ブロック・径1-10cmロームブロック30%。
	2	暗褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径1-3cmロームブロック3%。

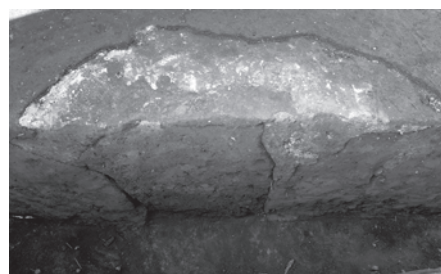
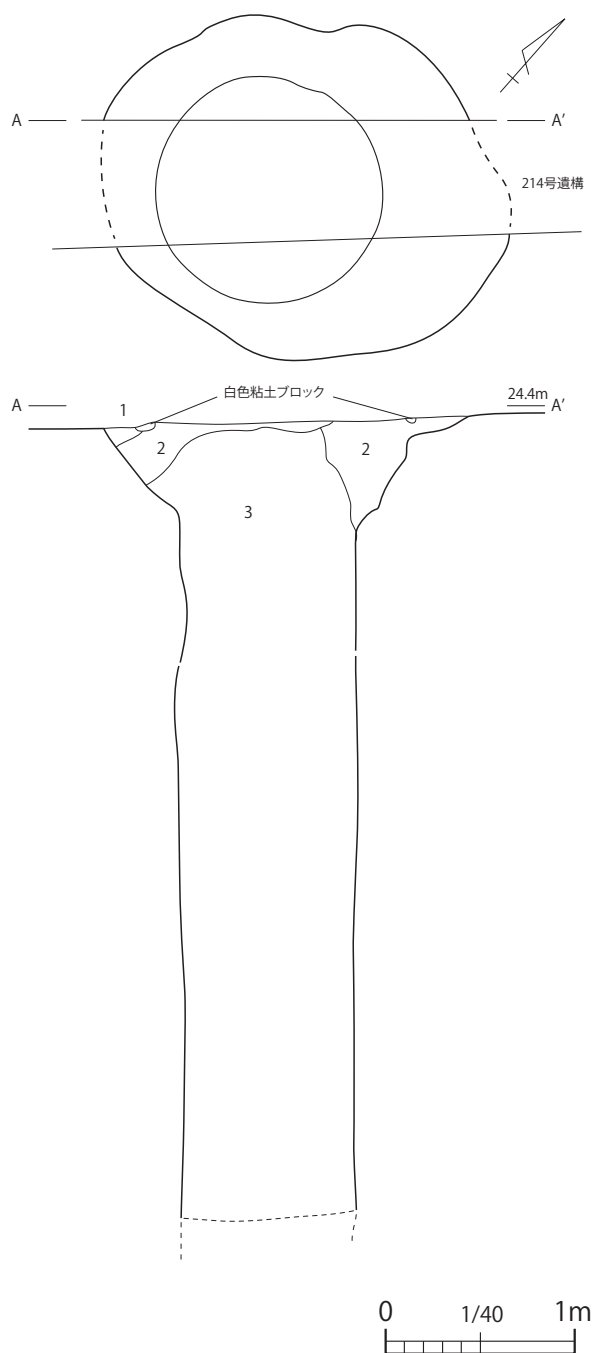


第27図 近世1面の上水路（7：1/80）

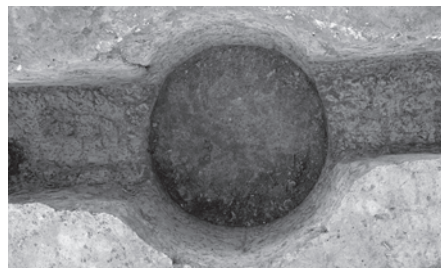


第 28 図 近世 1 面の状水路（8：1/6・1/50）

【218号遺構】



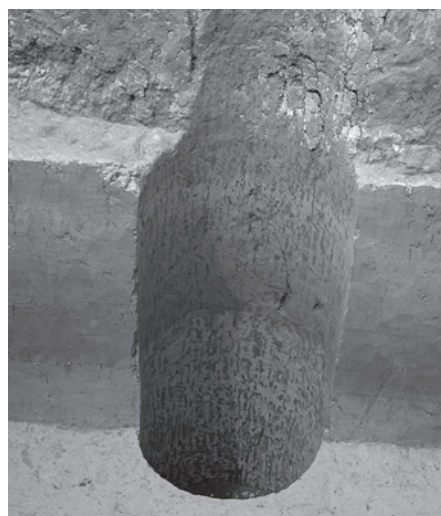
218号遺構断面 (南東より)



218号遺構 (南東より)



218号遺構断割り断面 (南東より)



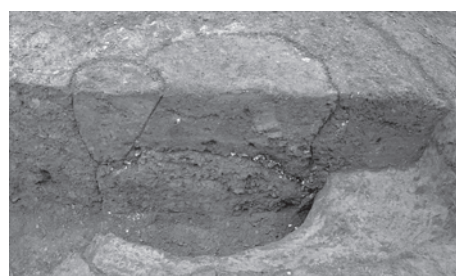
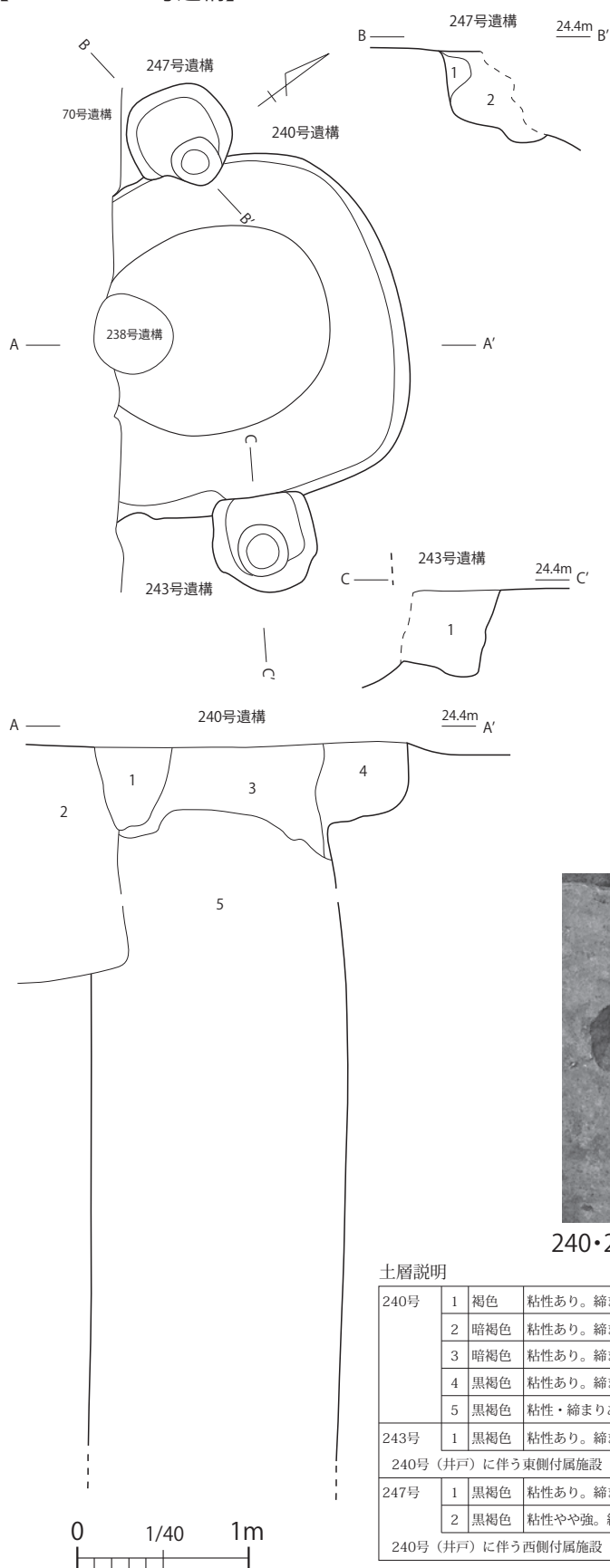
218号遺構断割り (南東より)

土層説明

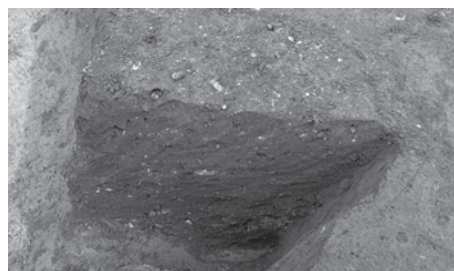
218号	1	黒褐色	粘性あり。締まり欠く。径1-8cmロームブロック30%。
	2	黒色	粘性あり。締まりあり。径5cm白色粘土ブロック・瓦片・礫片含む。
	3	極暗褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径1-5cmロームブロック含む。

第 29 図 近世 1 面の井戸 (1 : 1/40)

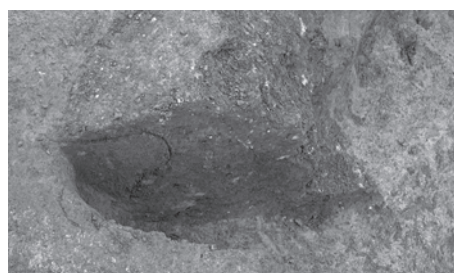
【240・243・247号遺構】



240号遺構断面(南東より)



243号遺構断面(南西より)



247号遺構断面(南西より)

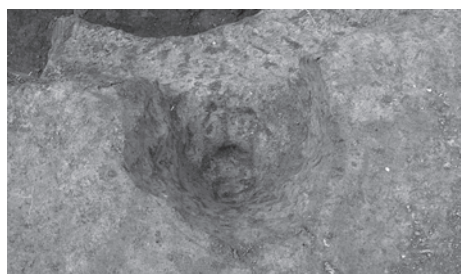


240・243・247号遺構(北東より)

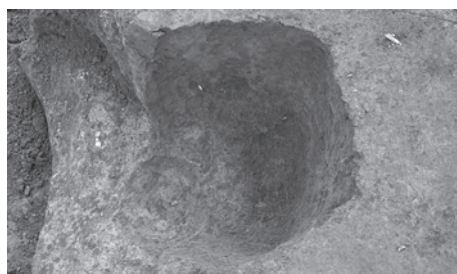
土層説明

240号	1	褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径1-5cmロームブロック70%。238号掘り方。
	2	暗褐色	粘性あり。締まりあり。70号(上水溝)埋土。
	3	暗褐色	粘性あり。締まり欠く。径20cmロームブロック・小礫含む。下底面に貝片凝集。
	4	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径1cm小礫・貝片含む。
	5	黒褐色	粘性・締まりあり。径5-50mmロームブロック・径5mm小礫・瓦片・陶磁器片含む。
243号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径2-3mm小礫、径2-5mm白色粘土ブロック、ロームブロック含む。
240号(井戸)に伴う東側付属施設			
247号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-10mmローム粒・白色粒含む。
	2	黒褐色	粘性やや強。締まりあり。径2-10mmロームブロック含む。
240号(井戸)に伴う西側付属施設			

第30図 近世1面の井戸(2:1/40)



243号遺構(南東より)



247号遺構断面(北東より)



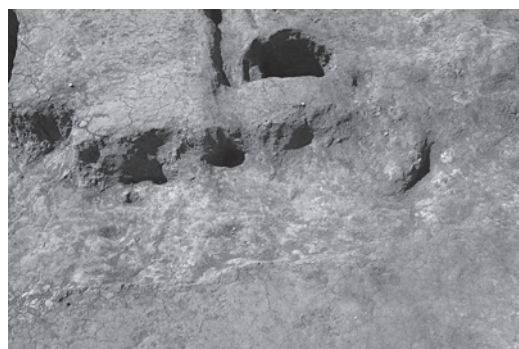
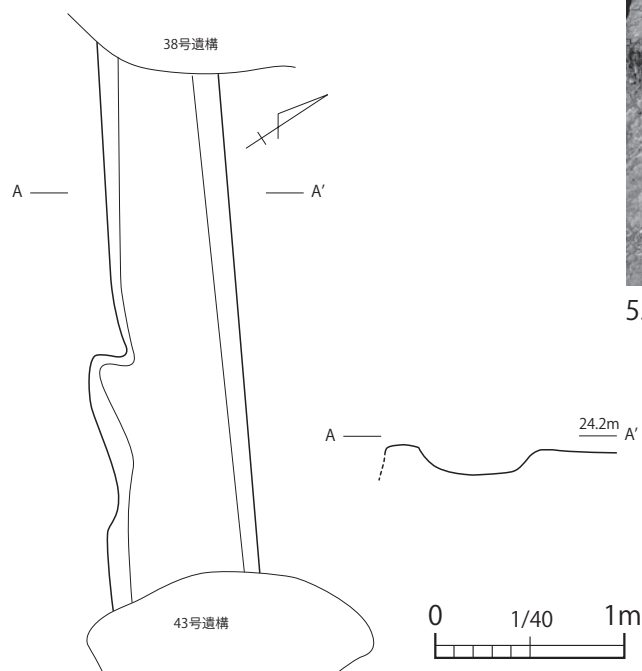
240号遺構断割り(南東より)



240号遺構断割り(南東より)

第 31 図 近世 1 面の井戸 (3)

【55号遺構】



55号遺構(北東より)

第 32 図 近世 1 面の溝 (1/40)

磁器の皿破片を円形に整えて転用品「おはじき」としている（第 54 図 -12）。

‘かわらけ’は、16 点（40g）である。

木樋に伴う鉄釘は、出土地点を記録したもので 86 点出土した（第 28 図）。出土した間隔は 20cm から 30cm、両側の幅は 20cm ほどの間隔で出土している。出土地点を記録した 86 点の内訳は、完形（24 点）・頭部欠損（18 点）・中間部欠損（2 点）・末端部欠損（32 点）・頭部および末端部欠損（10 点）となる。完形 24 点の平均長は、151mm で 19 号遺構とほぼ同じである。そのほか複数の鉄釘が出土している（第 54 図 -12）。

【井戸】

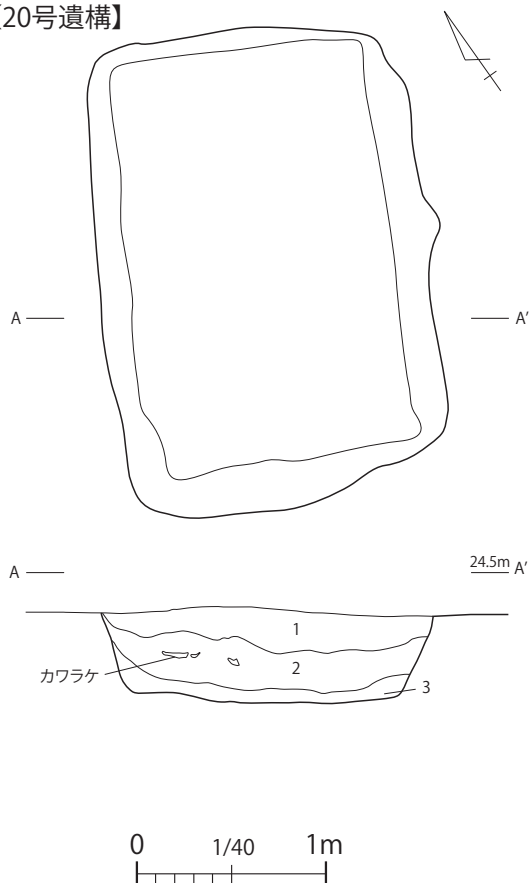
218 号遺構 [I-4]（3-3 区）

・遺構（第 29 図）

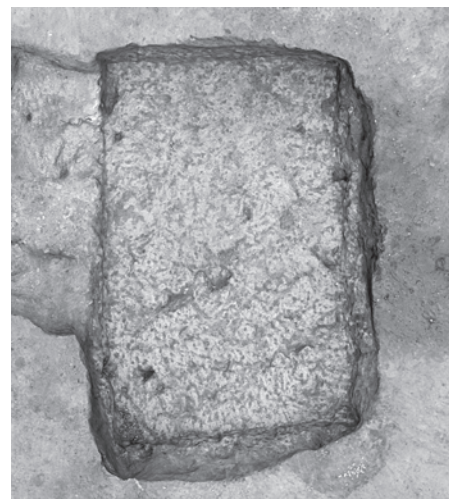
調査区北側の 214 号遺構（近世 1 上水路）に切られる。確認面は 224cm × 180cm の楕円形を呈する。確認面外縁部に白色粘土ブロックが混在する埋土がドーナツ状に堆積する。下半以下は径 94cm の正円を呈する。

・遺物（第 54 図）

【20号遺構】



20号遺構断面（北東より）



20号遺構（南東より）

土層説明

20号	1	極暗褐色	粘性あり。縮まりあり。径1-5mmローム粒3%。
	2	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径5-10mmロームブロック5%・陶磁器片含む。
	3	黒褐色	粘性やや強。縮まりあり。径1-2mmローム粒3%。

第 33 図 近世 1 面の土坑（1：1/40）

出土資料は、磁器の碗（21点）・皿（3点）・蓋（3点）・瓶（2点）、陶器の皿（10点）・瓶（3点）・播鉢（6点）、土器の焙烙（8点）・焜炉（5点）・不明（10点）である。

磁器は、蓋物蓋（第54図-13）である。‘かわらけ’は、28点（130g）である。

鉄釘が、複数出土している（第54図-15）。

・部材（第54図）

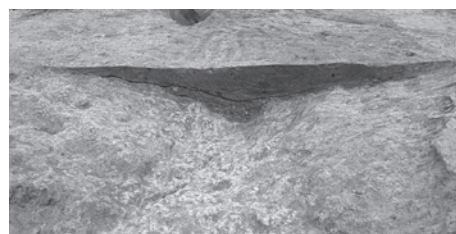
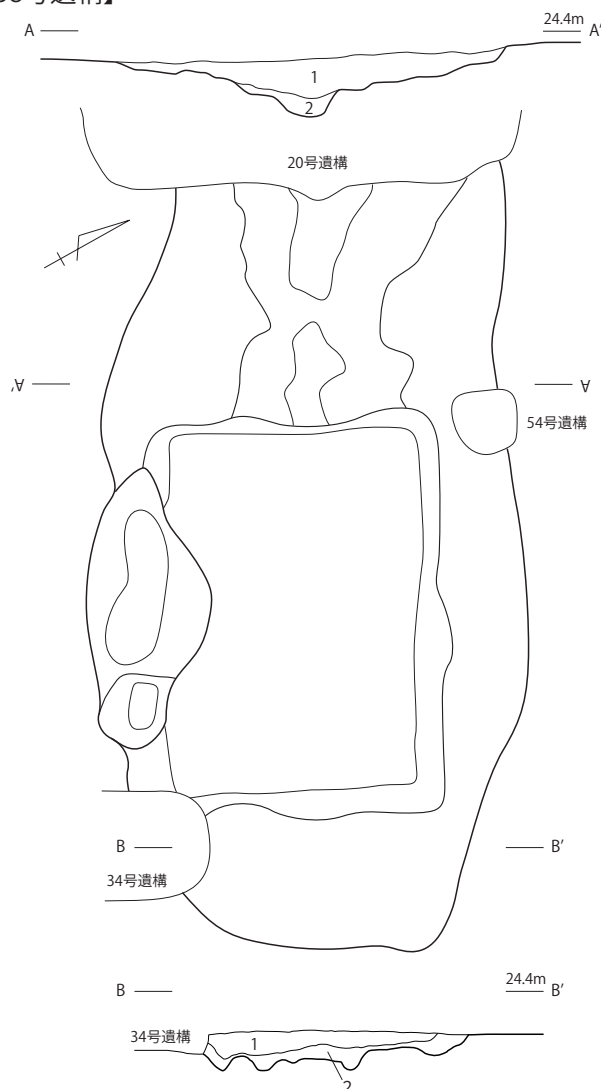
瓦は、軒平瓦（第54図-14）である。

240号遺構 [G-3・4, H-4]（3-4区）

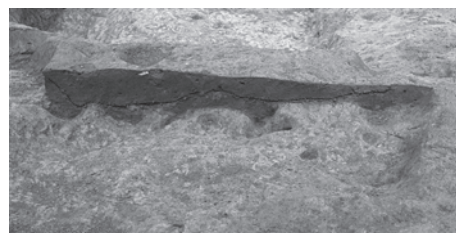
・遺構（第30・31図）

1号遺構（御殿堀）の北西外縁部、南西部分を70号遺構（近世1上水路）に切られる。南側中央部に238号遺構（近代礎石）が位置して、70号遺構（近世1上水路）および240号遺構（近世1井戸）

【38号遺構】



38号遺構断面(北西より)



38号遺構断面(南東より)



38号遺構(南東より)



土層説明

38号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒3%。
	2	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径2cmロームブロック含む。

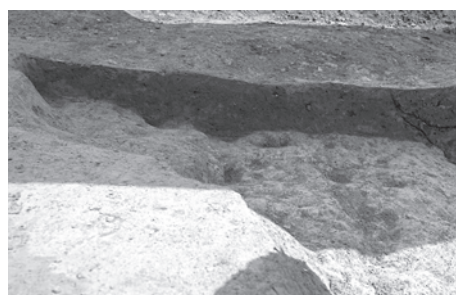
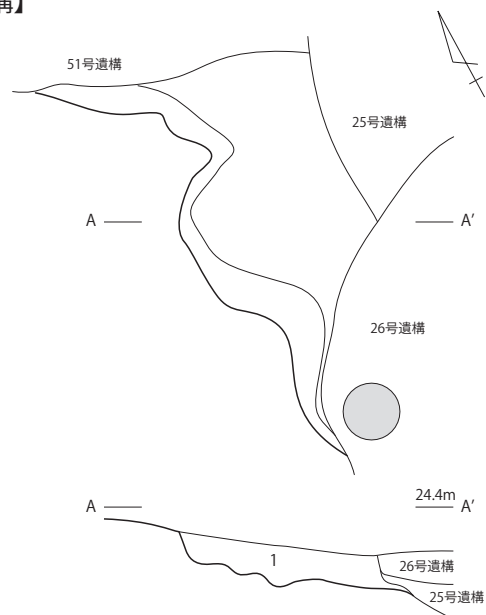
第34図 近世1面の土坑（2：1/40）

を切る。東側に 243 号遺構（近世 1 土坑）、西側に 247 号遺構（近世 1 土坑）が位置しており、本遺構に伴う付随施設と思われる。確認面は径 200cm ほどの隅丸方形を呈し、下半以下は径 150cm ほどの正円形となる。確認面から深さ 420cm ほどで掘削を断念した。

・遺物（第 54 図）

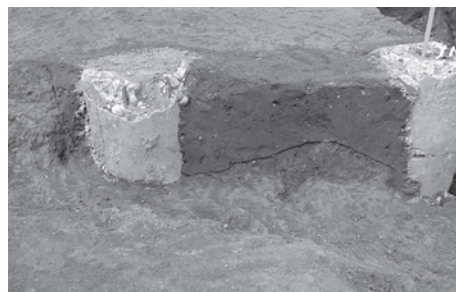
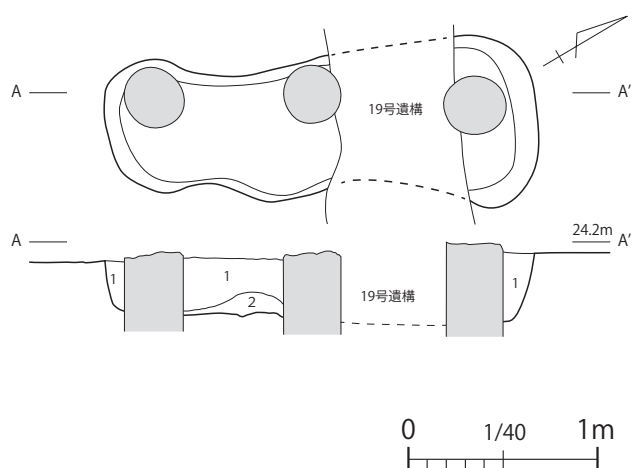
出土資料は、磁器の碗（96 点）・皿（6 点）・鉢（2 点）・瓶（3 点）・仏飯器（3 点）・香炉（1 点）・ミニチュア（1 点）・蓋物（1 点）・不明（3 点）、陶器の碗（29 点）・皿（10 点）・鉢（1 点）・瓶（14 点）・片口鉢（1 点）・擂鉢（16 点）・土瓶（2 点）・灯明受皿（1 点）・灯明皿（1 点）・不明（3 点）、土器の火鉢（38 点）・焙烙（30 点）・土製品（人形：1 点）・瓦灯（1 点）不明（4 点）である。

【41号遺構】

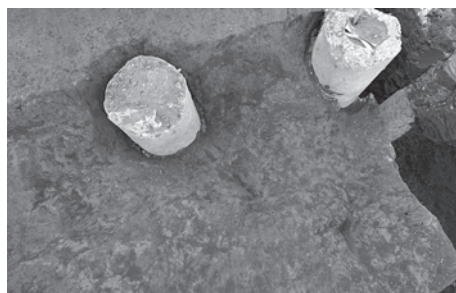


41号遺構断面(南西より)

【45号遺構】



45号遺構断面(南東より)



45号遺構(南東より)

土層説明

41号	1	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径10-50mmロームブロック10%。
45号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm 焼土粒3%。炭化物片含む。
	2	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径5-10mmロームブロック3%。径2mm炭化物片含む。

第 35 図 近世 1 面の土坑（3：1/40）

磁器は、肥前の碗（第 54 図 -16、17）、磁器碗破片の転用品おはじき（第 54 図 -22）である。

陶器は、産地不明の坏（第 54 図 -18）、瀬戸・美濃の皿（第 54 図 -19）、灯明皿（第 54 図 -20）、灯明受皿（第 54 図 -21：開口部 3 箇所）である。

磁器皿の底部銘（第 54 図 -23：「宣明年製」）は、17 世紀末から 18 世紀前半の製作と思われる。陶器碗（第 54 図 -24：「清水」）に底部刻印がある。

土器は、角火鉢（第 55 図 -1）である。‘かわらけ’は 89 点（347g）で、最小個体数は 2 点である。

金属製品：釘 11 点のほか不明鉄製品が出土した（第 55 図 -3）。そのほか「棒状銅製品」（第 55 図 -2）がある。

・自然遺物

アサリ（510 点）・ハマグリ（70 点）・シオフキガイ（8 点）・サルボウガイ（2 点）・ウミナナ類（1 点）出土している。

243 号遺構 井戸付属土坑 [G-4]（3-4 区）

・遺構（第 30・31 図）

240 号遺構（近世 1 井戸）の東側で、相対する位置に 247 号遺構（近世 1 土坑）がある。径 60cm × 50cm の略円形を呈する。底面南東部に若干の落ち込みがある。

・遺物

‘かわらけ’は、1 点（15g）である。

247 号遺構 井戸付属土坑 [G-3]（3-4 区）

・遺構（第 30・31 図）

240 号遺構（近世 1 井戸）の西側で、相対する位置に 243 号遺構（近世 1 土坑）がある。径 60cm × 55cm の略円形を呈する。243 号遺構（近世 1 土坑）と同じように底面東側に若干の落ち込みがある。

・遺物（第 55 図）

出土資料は、磁器の碗（7 点）、陶器の碗（3 点）・甕（2 点）・瓶（2 点）・不明（1 点）、土器の焙烙（2 点）・不明（8 点）である。

磁器は、碗（第 55 図 -4）である。‘かわらけ’は、10 点（65g）である。

・自然遺物

サザエが、1 点出土している。

【溝】

55 号遺構 [D-3]（1 区）

・遺構（第 32 図）

1 号遺構（御殿堀）の北西外縁直上に位置する。長軸は北西－南東（280cm）× 65cm × 15cm で、北西を 38 号遺構（近世 1 土坑）に切られる。

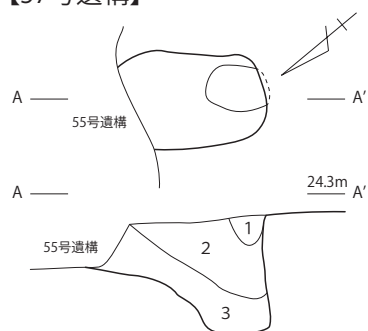
・遺物

出土資料は、陶器の瓶（1 点）である。

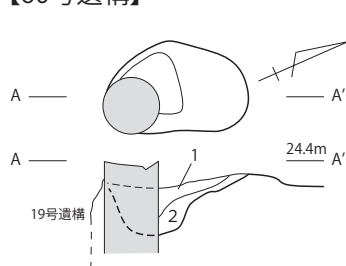
【土坑】

20 号遺構 [D・E-2]（1 区）

【57号遺構】

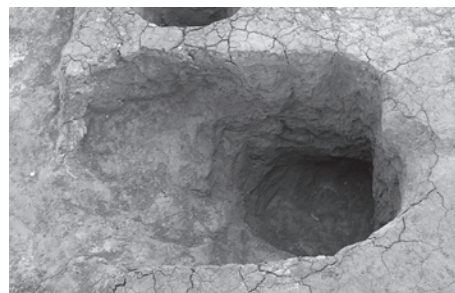
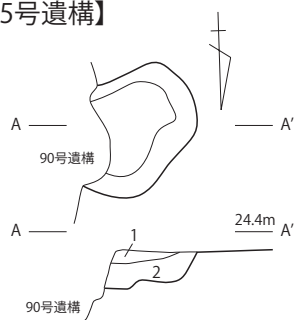


【60号遺構】



57号遺構断面(北西より)

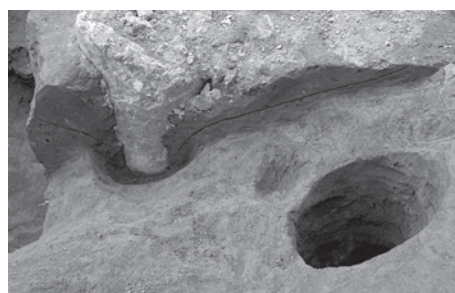
【115号遺構】



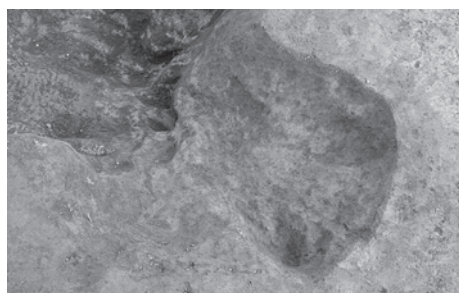
57号遺構(北西より)



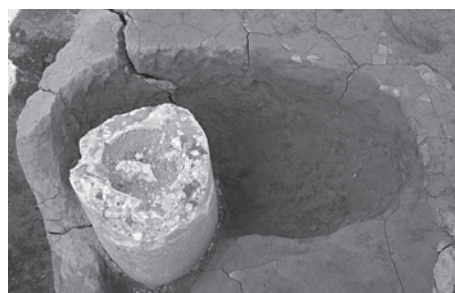
115号遺構断面(北より)



60号遺構断面(南東より)



115号遺構(北西より)



60号遺構(南東より)

土層説明

57号	1	極暗褐色	粘性あり。締まりやや強。径1cmロームブロック含む。
	2	暗褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径3cmロームブロック主体。
	3	褐色	粘性あり。締まり欠く。ローム土主体。
60号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒3%。炭化物片含む。
	2	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径5mm炭化物片含む。ローム土主体。
115号	1	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。1cmソフトロームブロック含む。
	2	暗褐色	粘性やや強。締まりあり。内容物なし。

第 36 図 近世 1 面の土坑 (4 : 1/40)

・遺構（第 33 図）

250cm × 170cm × 50cm の長方形を呈する。30 号遺構・31 号遺構（近世 2 土坑）に切られる。

・遺物（第 56 図）

出土資料は、磁器の碗（12 点）・皿（3 点）・蓋（1 点）・瓶（14 点）、陶器の碗（7 点）・皿（7 点）・鉢（5 点）・瓶（8 点）・土鍋（1 点）・片口鍋（7 点）・植木鉢（1 点）・不明（1 点）、土器の焙烙（8 点）・焼塩壺（1 点）・土製品（人形：1 点）・不明（12 点）である。

磁器：碗（第 56 図 -1）、型作りの変形皿（第 56 図 -2：銘「壽」、41 号遺構との遺構間接合個体）、白磁の瓶（第 56 図 -3）、染付の瓶（第 56 図 -4：38 号遺構との遺構間接合個体）である。

陶器は、瀬戸・美濃産の片口（第 56 図 -5）である。

土器は、板作りで無刻印の焼塩壺（第 56 図 -6）である。焙烙破片（第 56 図 -7）には、「○に一」の刻印がある。‘かわらけ’は 167 点（460g）で、最小個体数は 6 点である。

金属製品は、鉄釘などがある（第 56 図 -10）。

・部材

板材の石製品に金属製品が付着した資料（第 56 図 -8）、円盤状の板材に針金が付着した資料（第 56 図 -9）がある。

＊遺構間接合

7：磁器皿（第 52 図 -2）は、20 号遺構と 41 号遺構（近世 1 土坑）での遺構間（5m）接合である。

11：磁器瓶（第 56 図 -11）は、20 号遺構と 38 号遺構（近世 1 土坑）での遺構間（2.5m）接合である。

南東に位置する 38 号遺構（近世 1 土坑）および東に位置する 41 号遺構（近世 1 土坑）との関係が伺われる。

・自然遺物

マガキ（1 点）、アサリ（1 点）ほか、ハマグリの破片が出土している。

38 号遺構 [D・E-2・3]（1 区）

・遺構（第 34 図）

（400cm）× 200cm × 19cm の幅広の溝状を呈する。長軸は、北西－南東方向である。北西部は 20 号遺構（近世 1 土坑）に切られているが、さらに北西方向に続く 31 号遺構（近世 2 土坑）と同一の可能性がある。中央部に 218cm × 165cm の方形状の落ち込みが認められ、地下室の下底部が残存している可能性がある。

・遺物（第 56 図）

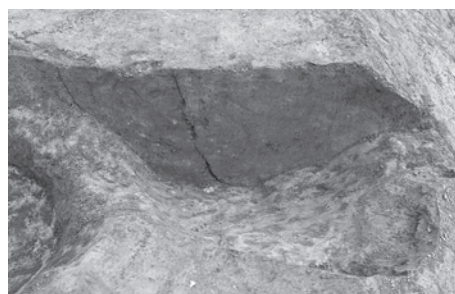
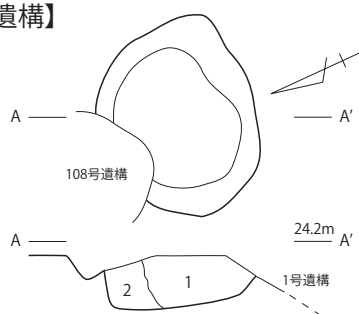
出土資料は、磁器の碗（14 点）・皿（2 点）・蓋（1 点）・瓶（4 点）・香炉（1 点）、陶器の碗（15 点）・皿（3 点）・鉢（2 点）・壺（1 点）・甕（2 点）・瓶（14 点）・香炉（1 点）・片口鉢（1 点）、土器の火鉢（2 点）・焙烙（9 点）・灯明受皿（2 点）・不明（10 点）である。

磁器は、青磁の仏花瓶（第 56 図 -11：25 号遺構（近世 2 土坑）と 41 号遺構（近世 1 土坑）との遺構間接合個体）である。

土器は、灯明受皿（第 56 図 -12）である。‘かわらけ’は、222 点（323g）である。

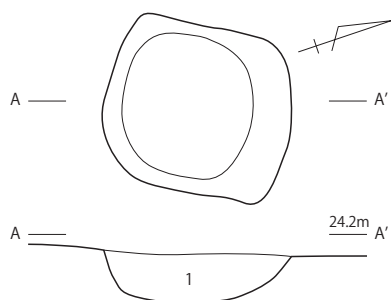
金属製品は、煙管の雁首（第 56 図 -13）、握じられた棒状の「銅製品」（第 56 図 -14）、鉄釘など（第

【118号遺構】

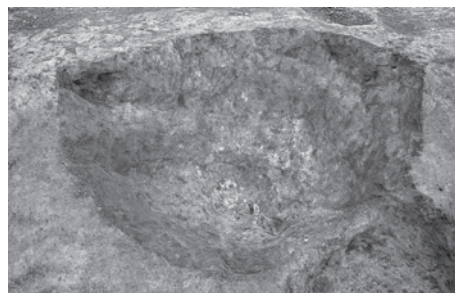
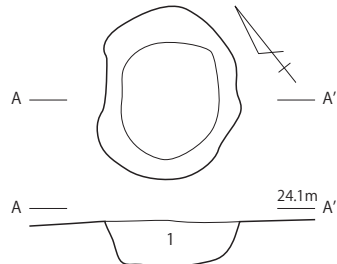


118号遺構断面(西より)

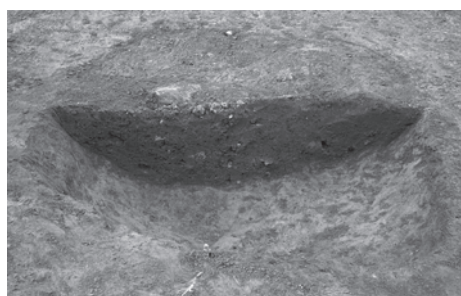
【143号遺構】



【145号遺構】



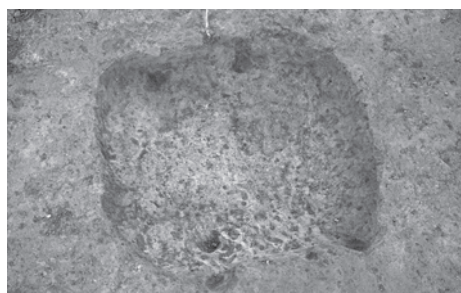
118号遺構(北東より)



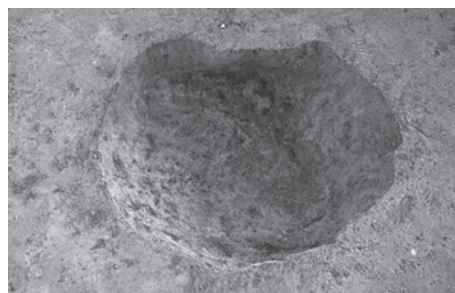
143号遺構断面(南東より)



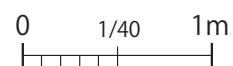
145号遺構断面(南西より)



143号遺構(北西より)



145号遺構(南東より)

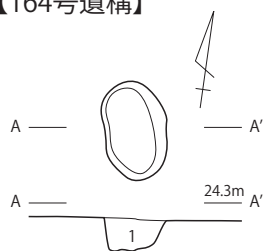


土層説明

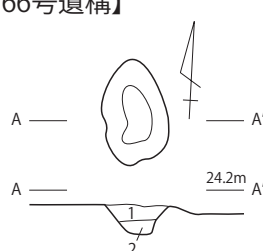
118号	1	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径2cmソフトロームブロック含む。
	2	極暗褐色	粘性あり。縮まりあり。径5-10mmロームブロック含む。
143号	1	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径1cm小礫・ロームブロック・陶磁器片含む。
145号	1	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。炭化物片含む。

第 37 図 近世 1 面の土坑 (5 : 1/40)

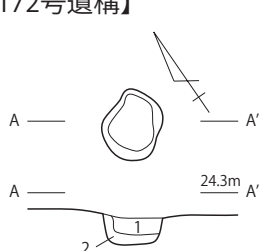
【164号遺構】



【166号遺構】



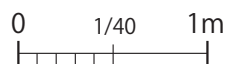
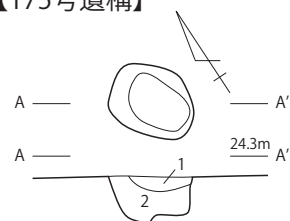
【172号遺構】



【174号遺構】



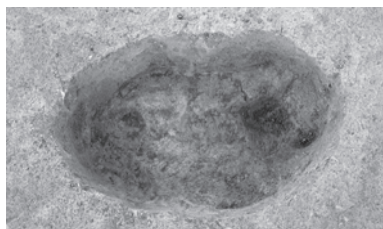
【175号遺構】



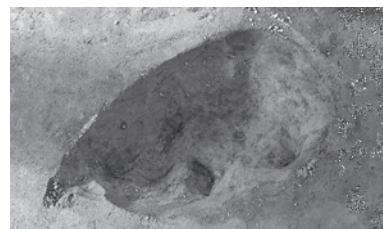
164号遺構断面(南より)



166号遺構断面(南より)



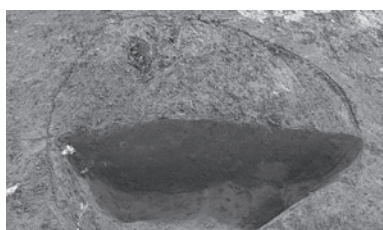
164号遺構(北東より)



166号遺構(北西より)



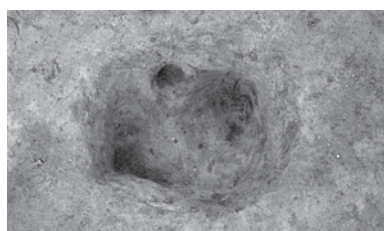
172号遺構断面(南西より)



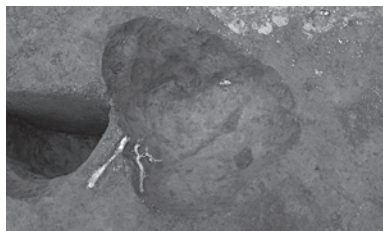
174号遺構断面(南より)



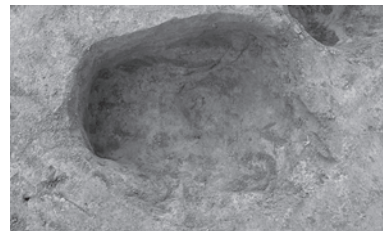
175号遺構断面(南西より)



172号遺構(北西より)



174号遺構(南西より)



175号遺構(北東より)

土層説明

164号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。
166号	1	黒色	粘性あり。締まりあり。黒色土主体。
	2	黒褐色	粘性やや強。締まりあり。径3cmロームブロック含む。
172号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒ローム粒3%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。ソフトローム主体。
174号	1	黒色	粘性やや欠く。締まりあり。径2-3mmローム粒3%。
175号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径2mmローム粒3%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。ソフトローム主体。

第 38 図 近世 1 面の土坑 (6 : 1/40)

56 図-15) がある。

＊遺構間接合

6:磁器仏花瓶(第 56 図-11)は、38 号遺構と 25 号遺構(近世 2 土坑)・41 号遺構(近世 1 土坑)の遺構間接合で、接合距離は 5.5m である。

11:磁器瓶(第 56 図-11)は、20 号遺構(近世 1 土坑)との遺構間接合で、接合距離は 2.5m である。

41 号遺構 [E-3] (1 区)

・遺構(第 35 図)

1 号遺構(御殿堀)北西外縁上、19 号遺構(近世 1 上水路)と 51 号遺構(近世 1 上水路)の間に位置する。北東部を 51 号遺構(近世 1 上水路)、南東部を 25 号遺構・26 号遺構(近世 2 土坑)に切られる。(255cm)×(94cm)×16cm で、底面も不整形を呈する。

・遺物(第 57・58 図)

出土資料は、磁器の碗(55 点)・皿(2 点)・鉢(2 点)・蓋(3 点)・瓶(1 点)・小杯(2 点)・香炉(5 点)・水滴(1 点)・花瓶(2 点)・不明(2 点)、陶器の碗(33 点)・皿(4 点)・鉢(8 点)・壺(2 点)・甕(20 点)・瓶(14 点)・香炉(2 点)・擂鉢(9 点)・不明(4 点)、土器の火鉢(12 点)・焙烙(33 点)・焼塩壺蓋(2 点)・土製品(箱庭:1 点)・五徳(9 点)・不明(12 点)である。

磁器は、坏(第 57 図-1、2)、碗(第 57 図-3～5)、碗蓋(第 57 図-7)、蓋物蓋ないしは壺蓋(第 57 図-8)、白磁水滴(第 57 図-6)である。

陶器は、碗(第 57 図-9、10)、鉢(第 57 図-11)、火鉢(第 57 図-12)、皿破片(第 57 図-16:底部角枠に篆書刻印で「寶」/「清水」)、瓶破片(第 57 図-17:釘書き「久」カ)である。

土器は、焙烙(第 57 図-13:内面に刻印あり)、焼塩壺蓋(第 57 図-14:「サカイ/花焼塩/ミナト」)である。花焼塩の蓋は、「サカイ/ミナト」の刻印が記されており、一般的に知られている「イツミ/ツタ」とは系統を異にする新知見のものである(小川 2008)。

土製品は、白色の胎土を用いた土鈴(第 58 図-1)である。‘かわらけ’の総数は 859 点(4,494g)で、最小個体数は 25 点である。

瓦製品は、平瓦の再利用品(第 57 図-15)で、全面を研磨して正方形に整形して中央に穿孔して十字の切り込みを入れている。用途は、不明である。

金属製品は、銭貨が新寛永 2 枚(第 58 図-2、3)である。煙管は、雁首が 2 点(第 58 図-4、5)、吸口が 1 点(第 58 図-6)である。鉄釘が、複数出土している(第 58 図-7)。

＊遺構間接合

6:磁器仏花瓶(第 56 図-11)は、25 号遺構(近世 2)と 38 号遺構(近世 1)・41 号遺構(近世 1)の遺構間接合で接合距離は 5.5m である。

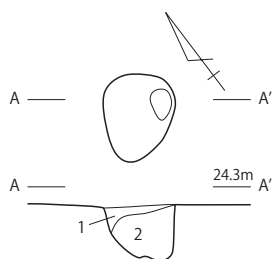
7:磁器皿(第 56 図-2)は、20 号遺構と 41 号遺構(近世 1 土坑)での遺構間(5m)接合である。

8:陶器鉢(第 57 図-11)は、41 号遺構(近世 1 土坑)と 45 号遺構(近世 1 土坑)の遺構間(4.5m)接合である。

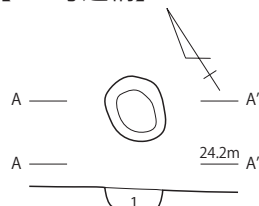
・自然遺物

ヤマトシジミが、2 点出土している。

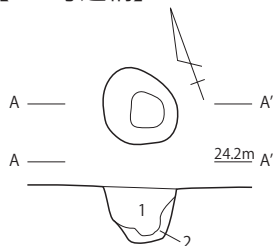
【176号遺構】



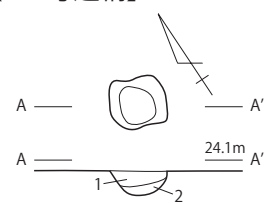
【177号遺構】



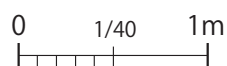
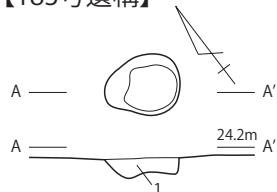
【178号遺構】



【179号遺構】



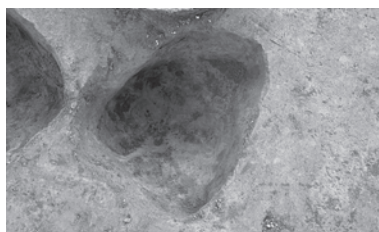
【183号遺構】



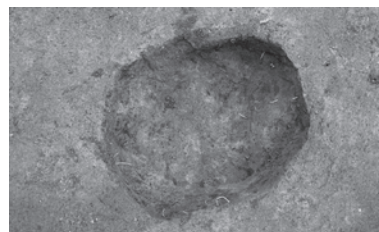
176号遺構断面(南西より)



177号遺構断面(南西より)



176号遺構(北より)



177号遺構(北西より)



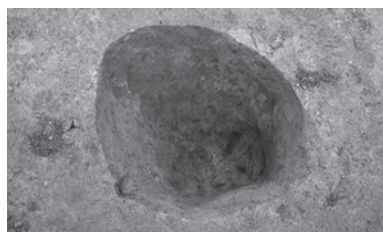
178号遺構断面(南西より)



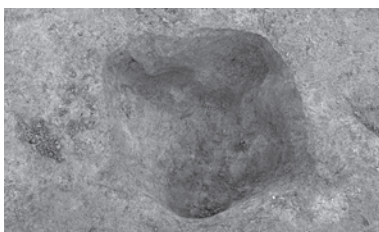
179号遺構断面(南西より)



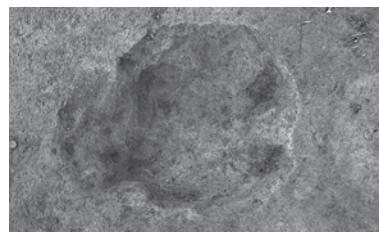
183号遺構断面(南西より)



178号遺構(南西より)



179号遺構(南西より)



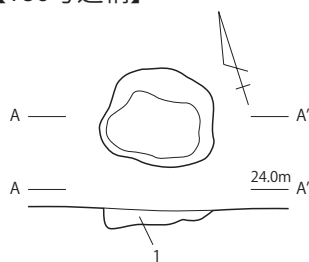
183号遺構(南西より)

土層説明

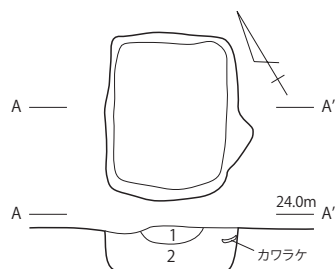
176号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。
	2	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。ソフトローム主体。
177号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。黒色土主体。
178号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。径2mm炭化物片含む。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。ソフトローム主体。
179号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。炭化物片含む。黒色土主体。
	2	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。ソフトローム主体。
183号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径2-3mmソフトロームブロック含む。

第 39 図 近世 1 面の土坑 (7 : 1/40)

【186号遺構】

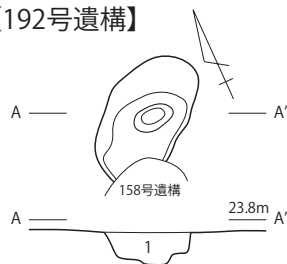


【188号遺構】

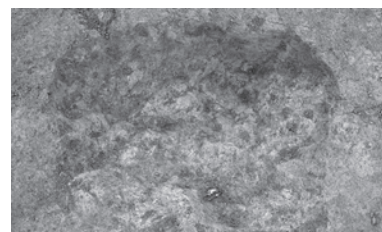
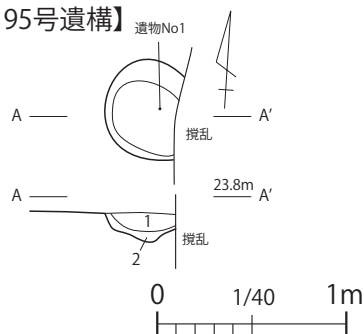


186号遺構断面(南西より)

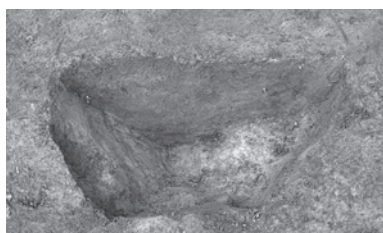
【192号遺構】



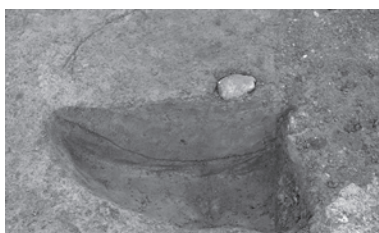
【195号遺構】



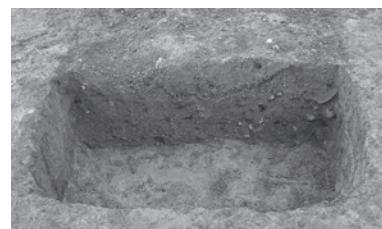
186号遺構(北東より)



192号遺構断面(南西より)



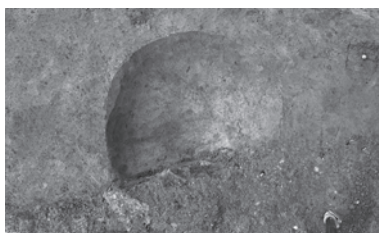
195号遺構断面(南西より)



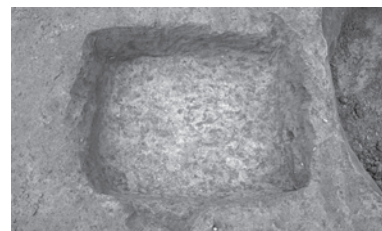
188号遺構断面(南西より)



192号遺構(北西より)



195号遺構(南東より)



188号遺構(南東より)

土層説明

186号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。黒色土主体。
188号	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。
	2	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1cm小礫・炭化物片・かわらけ片含む。
192号	1	暗褐色	粘性やや強。締まりあり。ソフトローム主体。
195号	1	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径2-3mmソフトロームブロック含む。
	2	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。ソフトローム主体。

第 40 図 近世 1 面の土坑（8：1/40）

45号遺構 [D・E-3] (1区)

・遺構 (第35図)

1号遺構(御殿堀)北西外縁部直上で19号遺構(近世1上水路)によって二分されている。230cm×90cm×28cmで、長軸は北東―南西方向である。コンクリートパイルによって欠損する。

・遺物

出土資料は、磁器の碗(1点)、陶器の碗(3点)・鉢(1点)である。

‘かわらけ’は3点(31g)で、最小個体数は1点である。

*遺構間接合

#8:陶器鉢(第57図-11)は、25号遺構(近世2土坑)と41号遺構(近世1土坑)との遺構間(4.5m)接合である。

57号遺構 [D-3] (1区)

・遺構 (第36図)

1号遺構(御殿堀)北西外縁上、55号遺構(近世1溝)の南西、43号遺構(近世2土坑)の北西に位置する。55号遺構(近世1溝)に北西部の一部を切られる。(69cm)×51cm×62cmで長楕円形を呈する。

・遺物

出土資料は、土器の不明(1点)である。‘かわらけ’は、1点(4g)である。

60号遺構 [E-2] (1区)

・遺構 (第36図)

調査区西側、19号遺構(近世1上水路)と51号遺構(近世1上水路)の間に位置する。74cm×49cm×30cmの楕円形を呈する。南側の一部をコンクリートパイルによって欠損する。

・遺物

出土資料は、磁器の碗(1点)、陶器の碗(1点)・瓶(1点)・土瓶(1点)・不明(1点)、土器の土製品(人形:1点)・不明(4点)である。‘かわらけ’は、3点(6g)である。

115号遺構 [G-7] (2区)

・遺構 (第36図)

1号遺構(御殿堀)北東外縁部上、90号遺構(近世2土坑)の西側に位置する。(75cm)×61cm×22cmで南東部を90号遺構(近世2土坑)に切られる。

118号遺構 [G-6] (2区)

・遺構 (第37図)

1号遺構(御殿堀)北東外縁部上で一部法面にかかる。北側の108号遺構(近世1土坑)に切られる。106cm×(88cm)×25cmの楕円形を呈する。

143号遺構 [G・H-7] (3-1区)

・遺構 (第37図)

1号遺構(御殿堀)北東外縁部、120号遺構(近世2土坑)とほぼ重複する。100cm×89cm×25cmの略正方形を呈する。

・遺物 (第58図)

出土資料は、磁器の碗（2点）、陶器の碗（6点）・鉢（1点）、土器の不明（1点）である。

陶器は、碗（第58図-8、9）である。

‘かわらけ’は44点（125g）で、最小個体数は1点である。

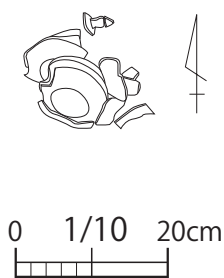
金属製品は、煙管の火皿を欠く雁首（第58図-10）が1点、鉄釘（第58図-11）が複数出土した。

145号遺構 [H-7]（3-1区）

・遺構（第37図）

調査区東部、134号遺構（近代井戸）の西方、防火水槽の南方に位置する。92cm × 71cm × 25cm で略長方形を呈する。

【198号遺構】

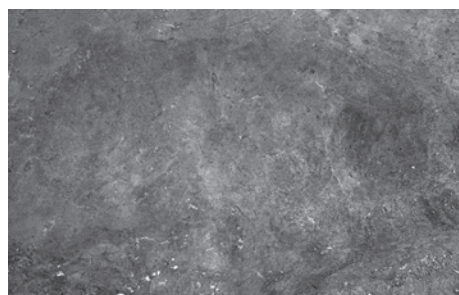
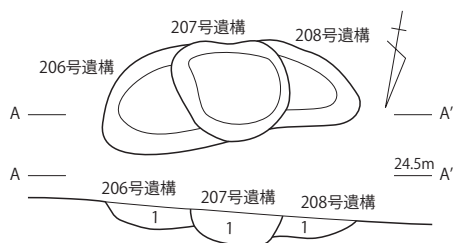


198号遺構(南西より)



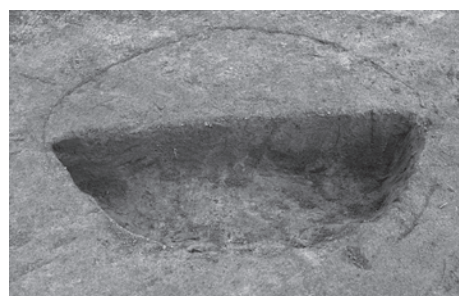
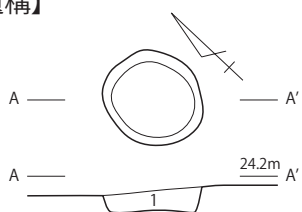
206・207・208号遺断面(北西より)

【206・207・208号遺構】

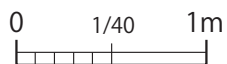


206・207・208号遺構(北西より)

【222号遺構】

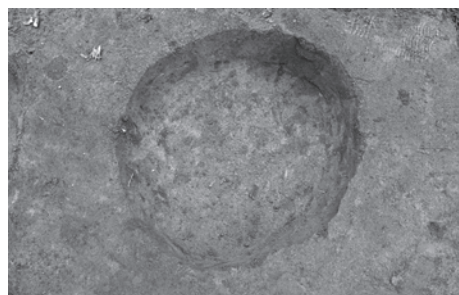


222号遺構断面(南西より)



土層説明

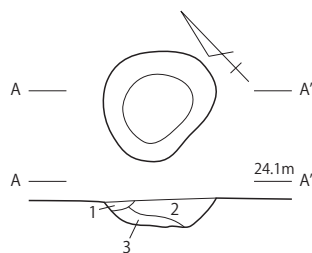
206号	1	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径5mm灰白色粘土ブロック含む。
207号	1	極暗褐色	粘性あり。縮まりあり。内容物なし。
208号	1	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。内容物なし。
222号	1	黒褐色	粘性やや欠く。縮まりあり。黒色土主体。



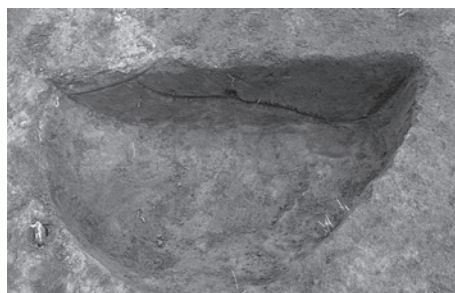
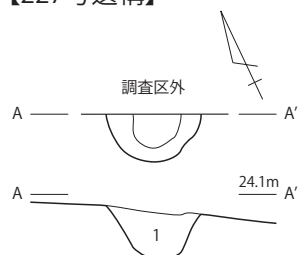
222号遺構(北西より)

第41図 近世1面の土坑（9：1/10・1/40）

【226号遺構】

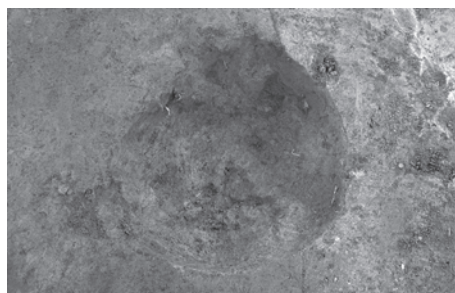
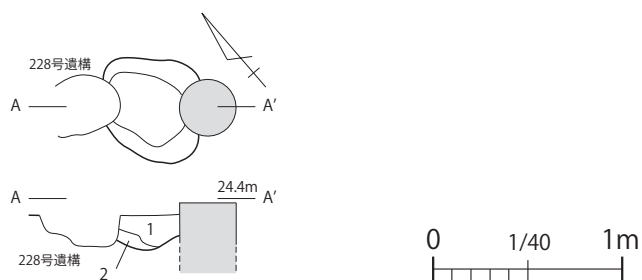


【227号遺構】



226号遺構断面(南西より)

【229号遺構】



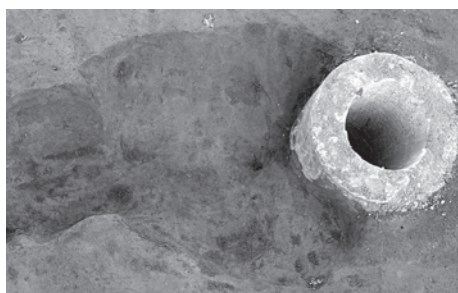
226号遺構(北東より)



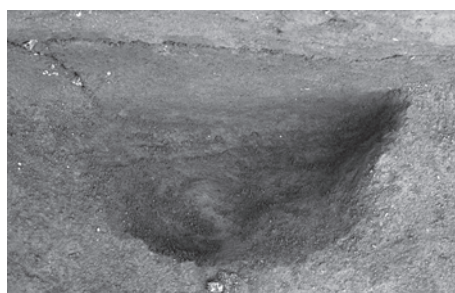
229号遺構断面(南西より)



227号遺構断面(南西より)



229号遺構(南西より)



227号遺構(南西より)

土層説明

226号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。配管溝埋土。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。黒色土主体。
	3	黒褐色	粘性あり。締まりあり。ソフトローム主体。
227号	1	黒色	粘性欠く。締まり欠く。粗粒黒色土主体。
229号	1	黒色	粘性あり。締まりやや強。コンクリートパイル周辺の変成土。
	2	暗褐色	粘性あり。締まりあり。ソフトローム主体。

第 42 図 近世 1 面の土坑 (10 : 1/40)

164 号遺構 [H-5] (3-2 区)

・遺構 (第 38 図)

調査区北東部、131 号遺構 (近代礎石) と重複し、52cm × 33cm × 28cm の楕円形を呈する。

166 号遺構 [H-7] (3-2 区)

・遺構 (第 38 図)

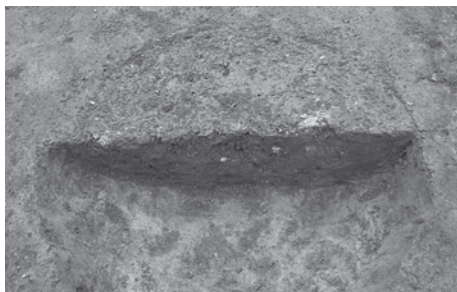
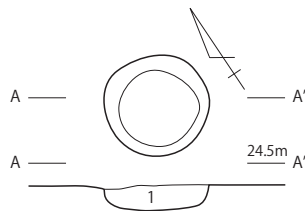
調査区北東部、156 号遺構 (近世 1 土坑) の南東方向に位置する。55cm × 34cm × 16cm の卵形を呈する。

172 号遺構 [H-6] (3-2 区)

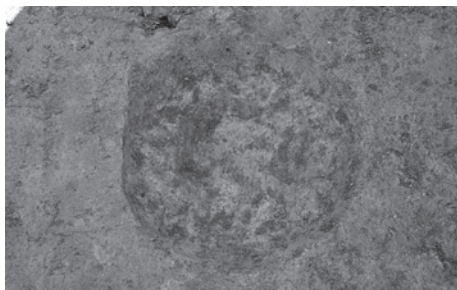
・遺構 (第 38 図)

調査区北東部、87 号遺構 (近世 2 井戸) の北東に位置する。38cm × 33cm × 14cm の不整形を呈する。

【230号遺構】

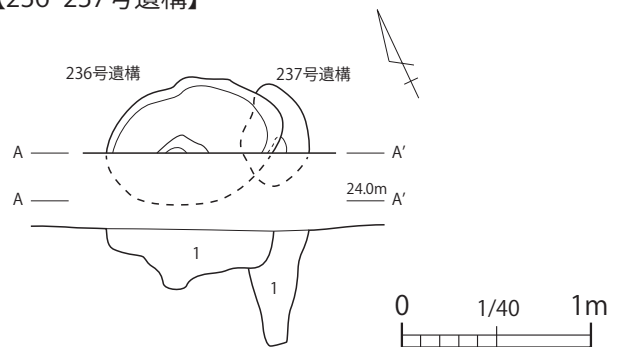


230号遺構断面 (南西より)



230号遺構 (北西より)

【236・237号遺構】



236・237号遺構断面 (南西より)



236・237号遺構 (南西より)

土層説明

230号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりやや欠く。径5mm炭化物片。径1cmロームブロック含む。
236号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりやや欠く。内容物なし。
237号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりやや欠く。内容物なし。

第 43 図 近世 1 面の土坑 (11 : 1/40)

174 号遺構 [H-7] (3-2 区)

・遺構 (第 38 図)

調査区北東部、防火水槽の南側に位置する。55cm × 48cm × 16cm の不整形を呈する。

175 号遺構 [H-6・7] (3-2 区)

・遺構 (第 38 図)

調査区北東部、151 号遺構 (近世 2 土坑) の北側、87 号遺構 (近世 2 井戸) の東側に位置する。47cm × 36cm × 25cm の楕円形を呈する。

・遺物

出土資料は、陶器の甕 (1 点) である。

176 号遺構 [H-6] (3-2 区)

・遺構 (第 39 図)

調査区北東部、175 号遺構 (近世 1 土坑) と隣接する。46cm × 38cm × 29cm の卵形を呈する。

177 号遺構 [H-6] (3-2 区)

・遺構 (第 39 図)

調査区北東部、155 号遺構 (近世 1 土坑) の北西、161 号遺構 (近世 1 土坑) の南東に位置する。36cm × 30cm × 17cm の楕円形を呈する。

・遺物 (第 58 図)

出土資料は、土器のその他 (1 点) である。

土器は、‘かわらけ’の底部を円形に整えて中央部を穿孔した再利用品 (第 58 図 -12) である。

178 号遺構 [I-6] (3-2 区)

・遺構 (第 39 図)

調査区北東部、防火水槽南西に位置する。44cm × 37cm × 29cm の楕円形を呈する。

179 号遺構 [H・I-6] (3-2 区)

・遺構 (第 39 図)

調査区北東部、防火水槽南西に位置する。31cm × 26cm × 13cm の不整形を呈する。

183 号遺構 [G-8] (3-1 区)

・遺構 (第 39 図)

調査区東部、144 号遺構 (近世 2 土坑) の南東に位置する。40cm × 32cm × 11cm の楕円形を呈する。

186 号遺構 [H-7] (3-1 区)

・遺構 (第 40 図)

調査区東部、防火水槽南側に位置する。68cm × 53cm × 10cm の不整形を呈する。

188 号遺構 [H-8] (3-1 区)

・遺構 (第 40 図)

調査区東部、134 号遺構 (近代井戸) の南西部に隣接する。89cm × 72cm × 23cm で方形を呈する。

・遺物

出土資料は、磁器の碗 (9 点)、陶器の碗 (6 点)・皿 (4 点)・鉢 (1 点)・瓶 (1 点)・搦鉢 (2 点)・

土瓶（1点）、土器の焙烙（2点）・土鈴（1点）・不明（3点）である。‘かわらけ’は26点（132g）で、最小個体数は2点である。

192号遺構 [I-6]（3-2区）

・遺構（第40図）

調査区北東部、防火水槽北西に位置する。73cm × 43cm × 16cmの楕円形を呈し、南西端を158号遺構（近世1土坑）に切られる。

195号遺構 [I-6]（3-2区）

・遺構（第40図）

調査区北東部、防火水槽北西に位置する。53cm × (37cm) × 15cmの楕円形を呈し、南東部を近代以降の防火水槽によって切られる。

198号遺構 [J-5]（3-3区）

・遺構（第41図）

径10cmほどのかわらけが複数枚重複している。当初胞衣皿と考えたが、向かい合わせでの埋納は確認できなかった。

・遺物（第58図）

出土資料は、磁器の碗（1点）・鉢（1点）・瓶（1点）、土器の土製品（動物形：1点）である。土製品は、頭部を欠損する動物形土製品（第58図-13）がある。‘かわらけ’は72点（384g）で、最小個体数は11点である。

金属製品は、鉄釘（第58図-14）がある。

206号遺構 [H・I-4]（3-3区）

・遺構（第41図）

調査区北西部、214号遺構（近世1上水路）の南東に位置する。207号遺構（近世1土坑）に切られる。(46cm) × 54cm × 12cmで楕円形を呈する。

207号遺構 [H・I-4]（3-3区）

・遺構（第41図）

調査区北西部、214号遺構（近世1上水路）の南東に位置する。206号遺構・208号遺構（近世1土坑）を切る。60cm × 55cm × 18cmの略円形を呈する。

208号遺構 [H・I-4]（3-3区）

・遺構（第41図）

調査区北西部、214号遺構（近世1上水路）の南東に位置する。207号遺構（近世1土坑）に切られる。206号遺構（近世2土坑）と同一遺構の可能性があり。(60cm) × 45cm × 10cmの楕円形を呈するものと思われる。

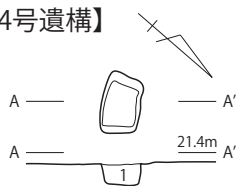
222号遺構 [I-5]（3-3区）

・遺構（第41図）

調査区北部、214号遺構（近世1上水路）の東側に位置する。53cm × 48cm × 12cmの略円形を呈する。

226号遺構 [I-5]（3-3区）

【24号遺構】

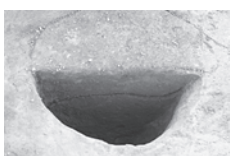
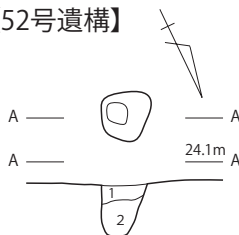


24号遺構断面(北東より)

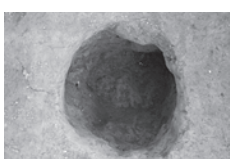


24号遺構(北東より)

【52号遺構】

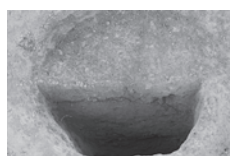
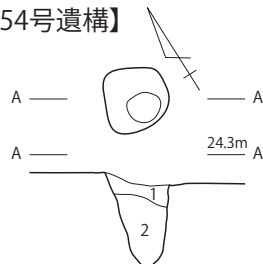


52号遺構断面(南西より)

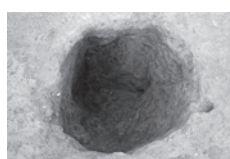


52号遺構(北西より)

【54号遺構】

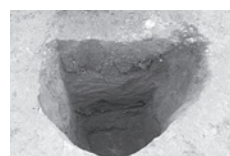
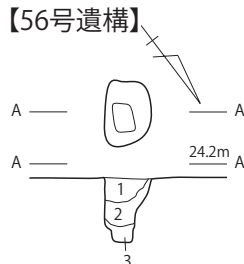


54号遺構断面(南西より)

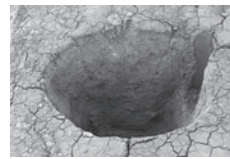


54号遺構(南西より)

【56号遺構】

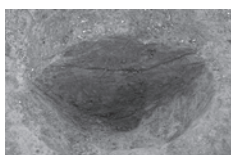
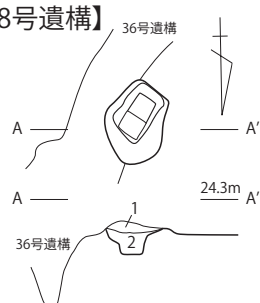


56号遺構断面(北東より)

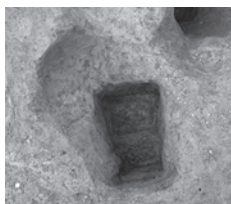


56号遺構(北西より)

【58号遺構】

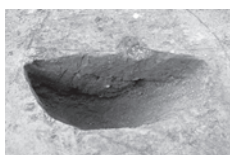
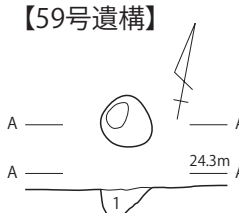


58号遺構断面(北東より)

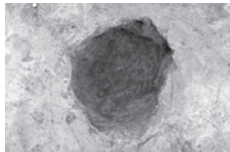


58号遺構(南西より)

【59号遺構】

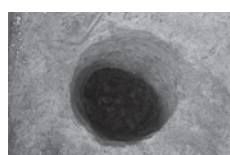
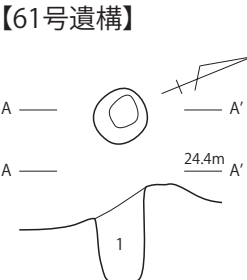


59号遺構断面(南西より)



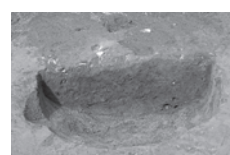
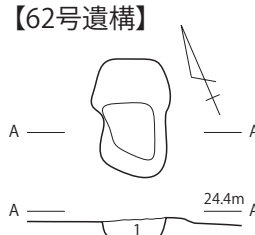
59号遺構(南東より)

【61号遺構】

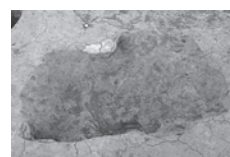


61号遺構(南西より)

【62号遺構】



62号遺構断面(南西より)



62号遺構(南東より)

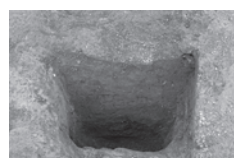
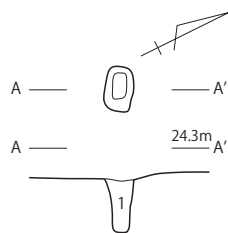


土層説明

24号	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒3%。	58号	1	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒3%。炭化物片含む。
52号	1	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径5-10mmロームブロック含む。		2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cmロームブロック含む。ローム土主体。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-3mmローム粒3%。				
54号	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径5-10mmロームブロック含む。	59号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒3%。炭化物片含む。
	2	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1-3mmローム粒3%。	61号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。内容物なし。
56号	1	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径1mmローム粒3%。	62号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒3%。炭化物片含む。
	2	暗褐色	粘性やや強。締まりやや強。径1mmローム粒3%。				
	3	暗褐色	粘性あり。締まりあり。ローム土主体。				

第 44 図 近世 1 面のピット (1 : 1/40)

【63号遺構】

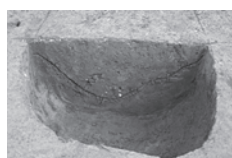
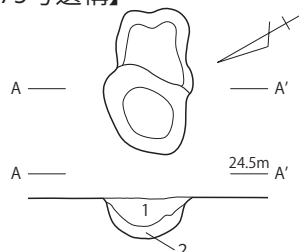


63号遺構断面(南東より)

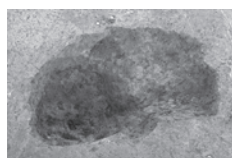


63号遺構(北東より)

【75号遺構】

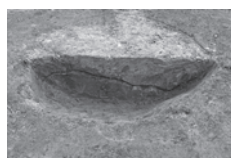
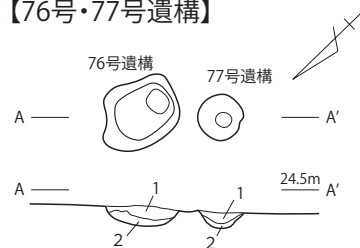


75号遺構断面(北西より)



75号遺構(南西より)

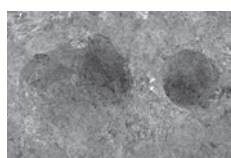
【76号・77号遺構】



76号遺構断面(北西より)

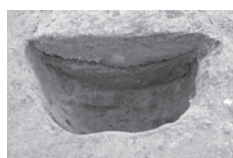
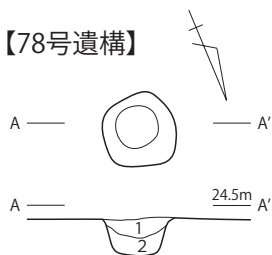


77号遺構断面(北西より)

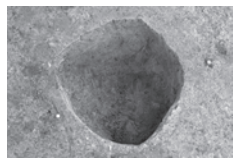


76・77号遺構(北西より)

【78号遺構】

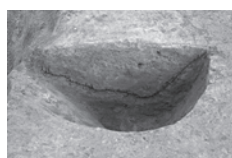
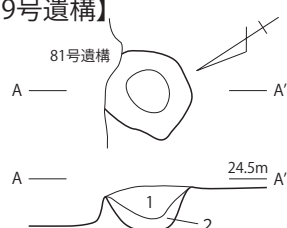


78号遺構断面(北西より)

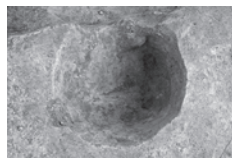


78号遺構(南西より)

【79号遺構】

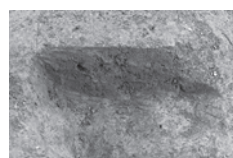
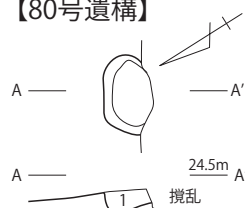


79号遺構断面(北西より)

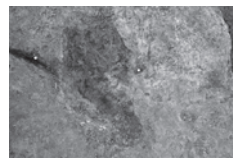


79号遺構(南西より)

【80号遺構】

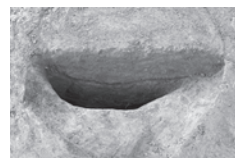
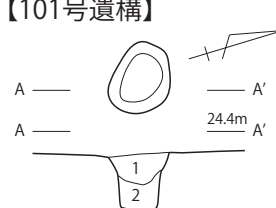


80号遺構断面(北西より)

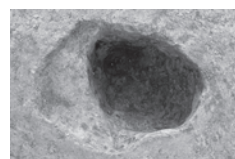


80号遺構(北西より)

【101号遺構】



101号遺構断面(南東より)



101号遺構(北東より)

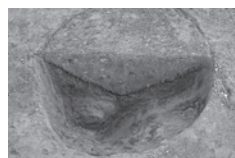
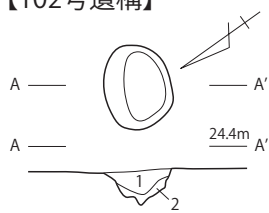


土層説明

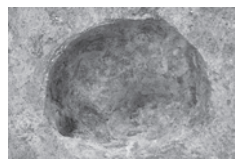
63号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-3mmローム粒3%。	78号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。暗灰黄色粘土ブロック含む。
75号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。	78号	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。内容物なし。	79号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。暗灰黄色ブロック僅かに含む。
76号	1	灰褐色	粘性やや欠く。締まりあり。径2mm橙色スコリア・炭化物片含む。	79号	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。	80号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。黄褐色ローム粒3%。
77号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径5mm暗灰黄色粘土ブロック50%。	101号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒3%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。	101号	2	黒褐色	粘性やや強。締まりあり。内容物なし。

第45図 近世1面のピット(2:1/40)

【102号遺構】



102号遺構断面(北西より)

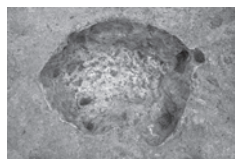


102号遺構(北東より)

【103号遺構】

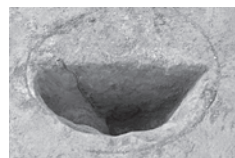
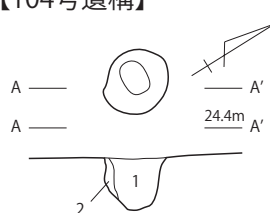


103号遺構断面(南東より)

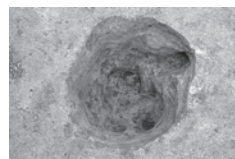


103号遺構(南西より)

【104号遺構】

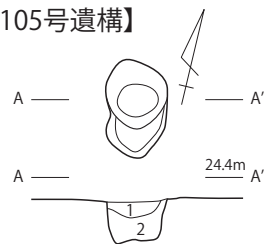


104号遺構断面(南東より)



104号遺構(北西より)

【105号遺構】

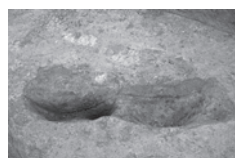


105号遺構断面(南より)

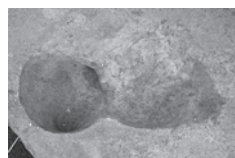


105号遺構(南より)

【114・117号遺構】

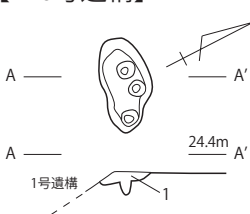


114・117号遺構断面(西より)

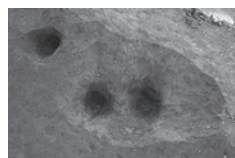


114・117号遺構(西より)

【116号遺構】

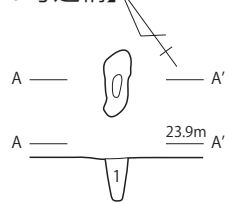


116号遺構断面(南東より)

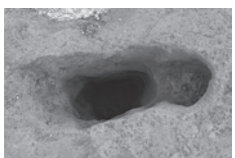


116号遺構(北東より)

【119号遺構】

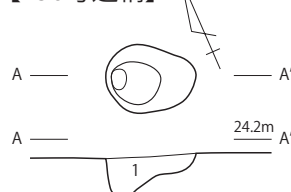


119号遺構断面(南西より)

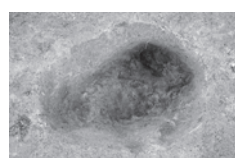


119号遺構(北東より)

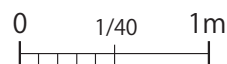
【156号遺構】



156号遺構断面(南西より)



156号遺構(北東より)

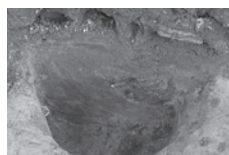
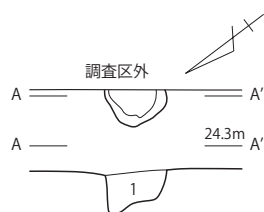


土層説明

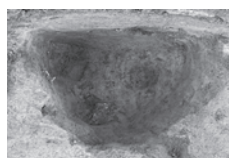
102号	1	黒褐色	粘性やや強。締まりあり。径2mmローム粒3%。	114号	1	黒色	粘性やや欠く。締まりあり。炭化物片主体。径1cmロームブロック含む。
	2	暗褐色	粘性やや強。締まりあり。内容物なし。		2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。ソフトローム主体。
103号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。層界面に酸化鉄状の凝集層あり。	117号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-2mm炭化物片30%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。炭化物片含む。		2	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。ソフトローム主体。
104号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径3-5cmロームブロック3%。	116号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒10%。
	2	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。内容物なし。		1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。
105号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒3%。	156号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm橙色スコリア3%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cmソフトロームブロック含む。				

第 46 図 近世 1 面のピット (3 : 1/40)

【182号遺構】

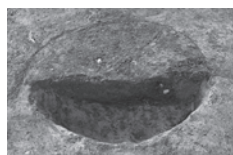
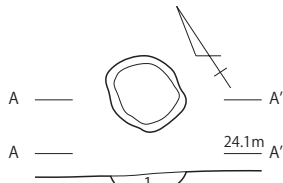


182号遺構断面(北西より)

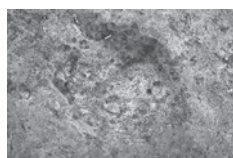


182号遺構(北西より)

【184号遺構】

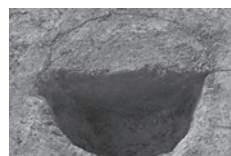
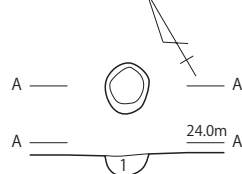


184号遺構断面(南西より)

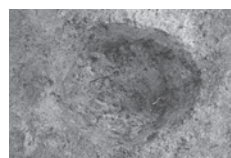


184号遺構(北東より)

【185号遺構】

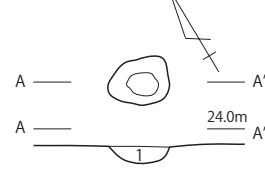


185号遺構断面(南西より)

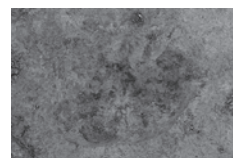


185号遺構(北西より)

【187号遺構】

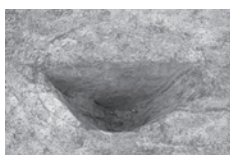
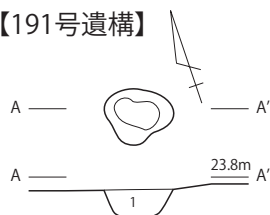


187号遺構断面(南西より)

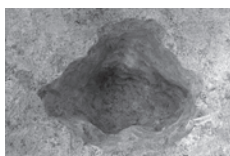


187号遺構(北東より)

【191号遺構】

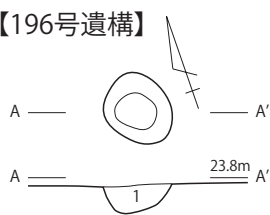


191号遺構断面(南西より)

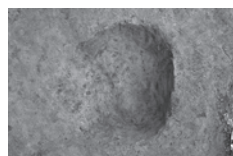


191号遺構(北東より)

【196号遺構】

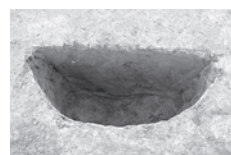
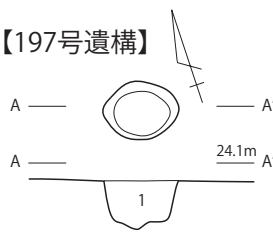


196号遺構断面(南西より)

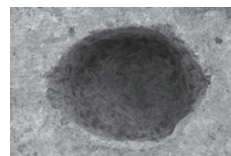


196号遺構(北西より)

【197号遺構】

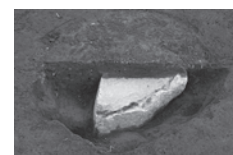
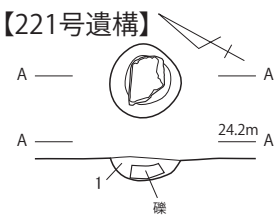


197号遺構断面(南西より)

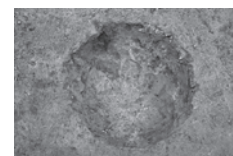


197号遺構(北より)

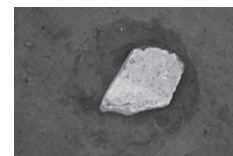
【221号遺構】



221号遺構断面(南西より)



221号遺構(南東より)



221号遺構遺物
出土状態(南西より)

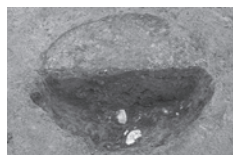
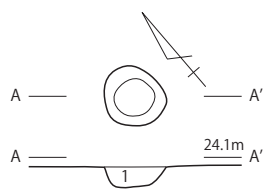


土層説明

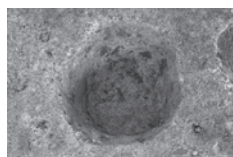
182号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。 瓦廃棄土坑底部。	191号	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。ソフトローム主体。
				196号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。漸移層主体。
184号	1	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1-2mm黄褐色ローム粒3%。	197号	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。漸移層主体。内容物なし。
185号	1	黒褐色	粘性あり。締まりやや強。径1mm黄褐色ローム粒3%。	221号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径2mmローム粒3%。
187号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。黒色土主体。				

第 47 図 近世 1 面のピット (4 : 1/40)

【223号遺構】

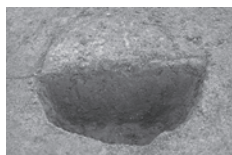
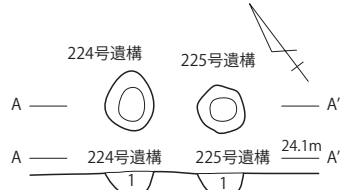


223号遺構断面(南西より)

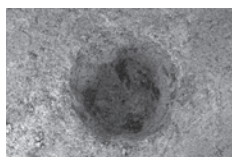


223号遺構(北西より)

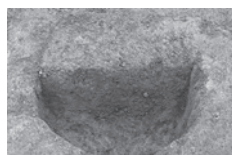
【224・225号遺構】



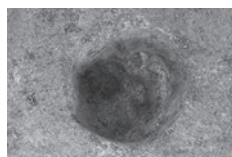
224号遺構断面(南西より)



224号遺構(北西より)

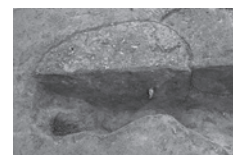
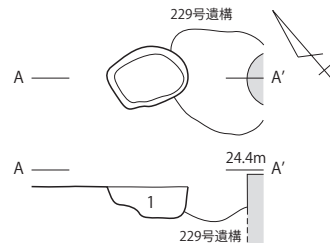


225号遺構断面(南西より)

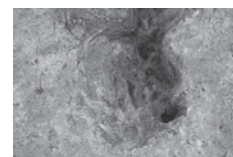


225号遺構(北西より)

【228号遺構】

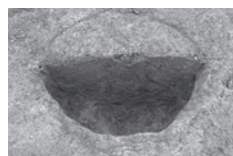
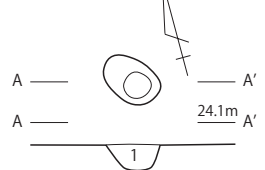


228号遺構断面(南西より)

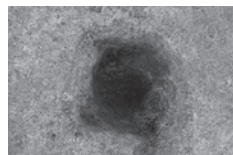


228号遺構(北西より)

【231号遺構】

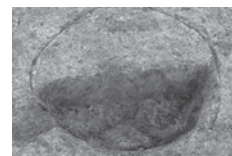
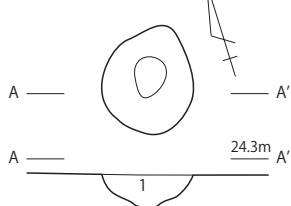


231号遺構断面(南西より)

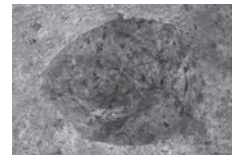


231号遺構(北西より)

【232号遺構】

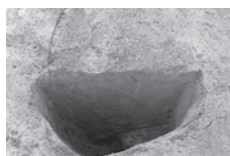
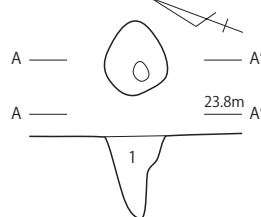


232号遺構断面(南西より)

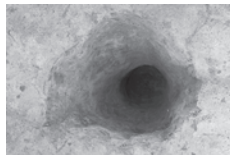


232号遺構(北西より)

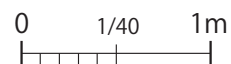
【235号遺構】



235号遺構断面(西より)



235号遺構(北より)



土層説明

223号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。径3cm小礫含む。	231号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。内容物なし。
224号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。内容物なし。	232号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-2cmソフトロームブロック含む。
225号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。黒色土主体。内容物なし。	235号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。
228号	1	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径1-2mmローム粒3%。ガラス片含む。				

第 48 図 近世 1 面のピット (5 : 1/40)

・遺構（第 42 図）

調査区北部、216 号遺構（近世 2 地下室）南東に位置する。61cm × 54cm × 15cm の略円形を呈する。200 号遺構（近代配水施設）と一部重複する。

227 号遺構 [J-5]（3-3 区）

・遺構（第 42 図）

調査区北部、北東縁に位置する。(52cm) × (26cm) × 25cm で北側部分は調査区外となる。略円形を呈すると思われる。

229 号遺構 [H-4]（3-3 区）

・遺構（第 42 図）

調査区北西縁近く、240 号遺構（近世 1 井戸）の北東に位置する。64cm × 53cm × 19cm の楕円形を呈し、北西部を 228 号遺構（近世 1 ピット）、南東部をコンクリートパイルによって損壊する。

230 号遺構 [G・H-4]（3-3 区）

・遺構（第 43 図）

1 号遺構（御殿堀）屈曲部北西に位置する。径 54cm × 13cm の円形を呈する。

・遺物

出土資料は、陶器の播鉢（1 点）である。‘かわらけ’は、1 点（3g）である。

236 号遺構 [I-7・8]（3-1 区）

・遺構（第 43 図）

調査区北東縁近く、193 号遺構（近代土坑）の南西部に位置する。南東部過半を欠損し、93cm × (40cm) × 32cm の楕円形を呈する。237 号遺構（近世 1 ピット）を切る。

【ピット】

24 号遺構 [E-5]（1 区）

・遺構（第 44 図）

1 号遺構（御殿堀）内部に位置する。34cm × 20cm × 10cm のやや歪んだ長方形を呈する。

52 号遺構 [F-4]（1 区）

・遺構（第 44 図）

1 号遺構（御殿堀）北西外縁直上に位置する。26cm × 25cm × 26cm の略方形を呈する。

54 号遺構 [E-2]（1 区）

・遺構（第 44 図）

調査区西側、38 号遺構（近世 1 土坑）の北東部に位置する。35cm × 32cm × 41cm の略方形を呈する。

56 号遺構 [D-3]（1 区）

・遺構（第 44 図）

1 号遺構（御殿堀）北西外縁直上、43 号遺構（近世 2 土坑）の北側に位置する。36cm × 25cm × 33cm の長方形を呈する。

・遺物

出土資料は、陶器の碗（1 点）・播鉢（1 点）、土器の火鉢（1 点）である。‘かわらけ’は、3 点（(8g)

である。

58号遺構 [D-2・3] (1区)

・遺構 (第44図)

調査区南西部、35号遺構・36号遺構(近世2期畝跡)に挟まれた位置にある。南東部側の一部を36号遺構(近世2畝跡)に切られる。42cm×35cm×18cmで底面に方形の掘り込みを有する。

59号遺構 [E-2・3] (1区)

・遺構 (第44図)

調査区西側、19号遺構(近世1上水路)と51号遺構(近世1上水路)の間に位置する。径28cm×14cmの略円形を呈する。

・遺物

出土資料は、磁器の碗(1点)である。

61号遺構 [E-2] (1区)

・遺構 (第44図)

調査区西側、19号遺構(近世1上水路)と51号遺構(近世1上水路)の間に位置する。径30cm×50cmの略円形を呈する。

62号遺構 [E-2] (1区)

・遺構 (第44図)

調査区西側、19号遺構(近世1上水路)と51号遺構(近世1上水路)の間に位置する。62cm×41cm×12cmの不整な長方形を呈する。

・遺物

出土資料は、磁器の碗(5点)・瓶(1点)、陶器の瓶(2点)、土器の鉢(3点)・焙烙(2点)・灯明皿(1点)である。‘かわらけ’は、1点(2g)である。

63号遺構 [D-3] (1区)

・遺構 (第45図)

調査区の南西部、35号遺構(近世2畝跡)と36号遺構(近世2畝跡)の間に位置する。24cm×13cm×27cmで長方形を呈する。

・遺物

出土資料は、磁器の小杯(1点)、陶器の瓶(1点)、土器の焙烙(1点)である。

75号遺構 [G-5] (2区)

・遺構 (第45図)

1号遺構(御殿堀)北西縁直上に位置する。98号遺構(縄文建物跡)と重複する。52cm×44cm×21cmの不整な楕円形を呈する。

・遺物

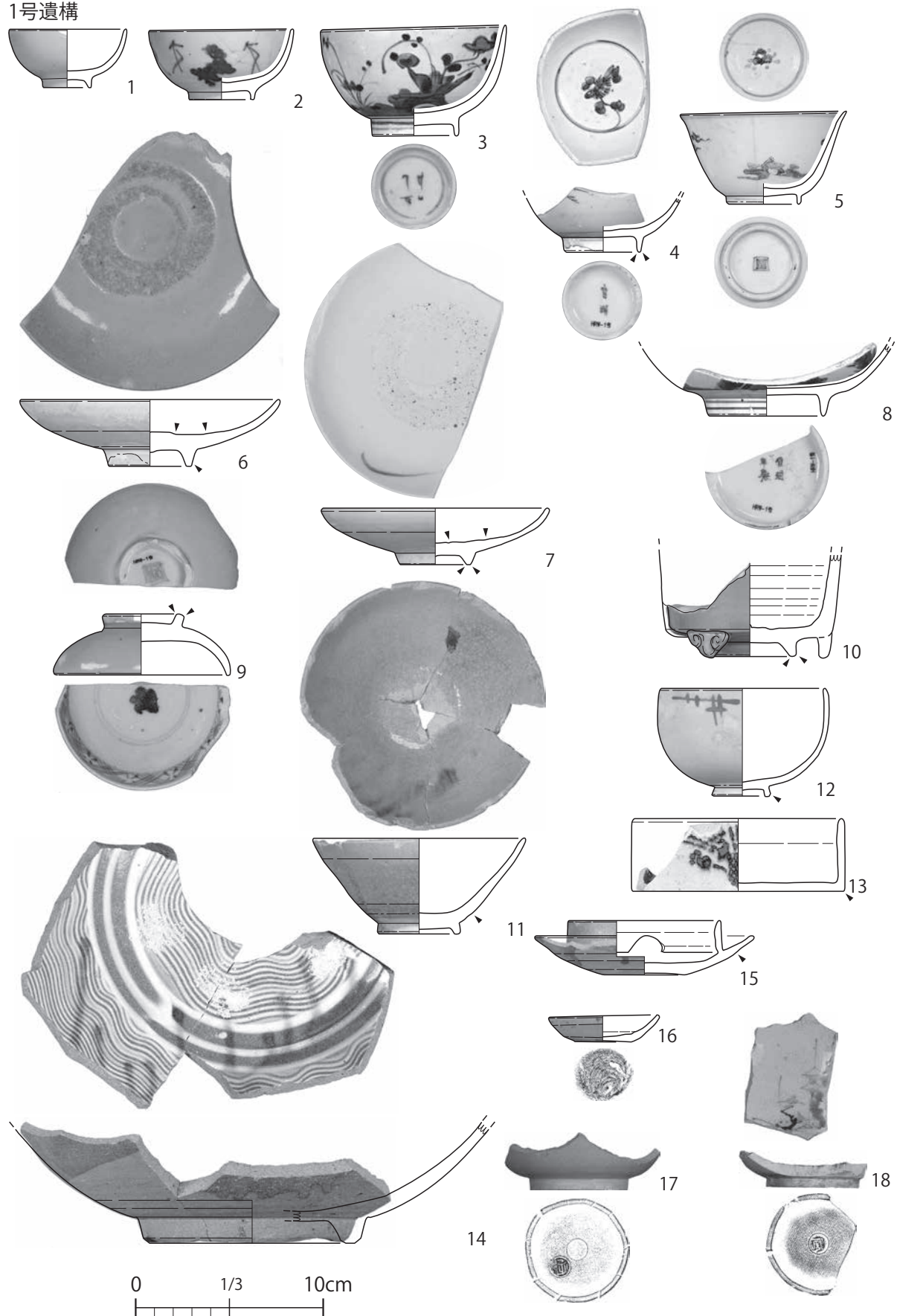
出土資料は、土器の焙烙(1点)である。‘かわらけ’は、4点(30g)である。

76号遺構 [G-5] (2区)

・遺構 (第45図)

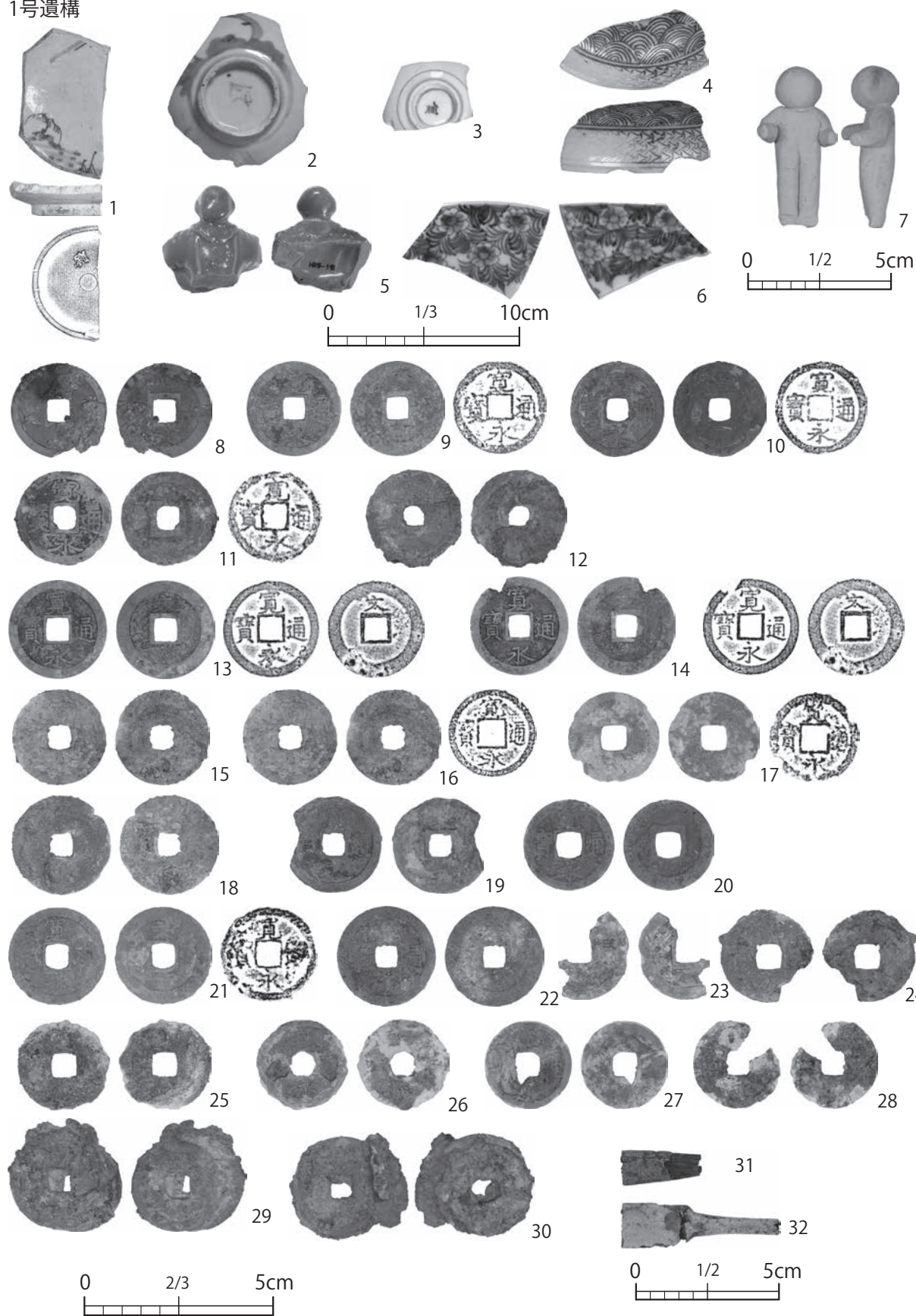
1号遺構(御殿堀)北西縁直上に位置する。98号遺構(縄文建物跡)と重複する。46cm×38cm

1号遺構



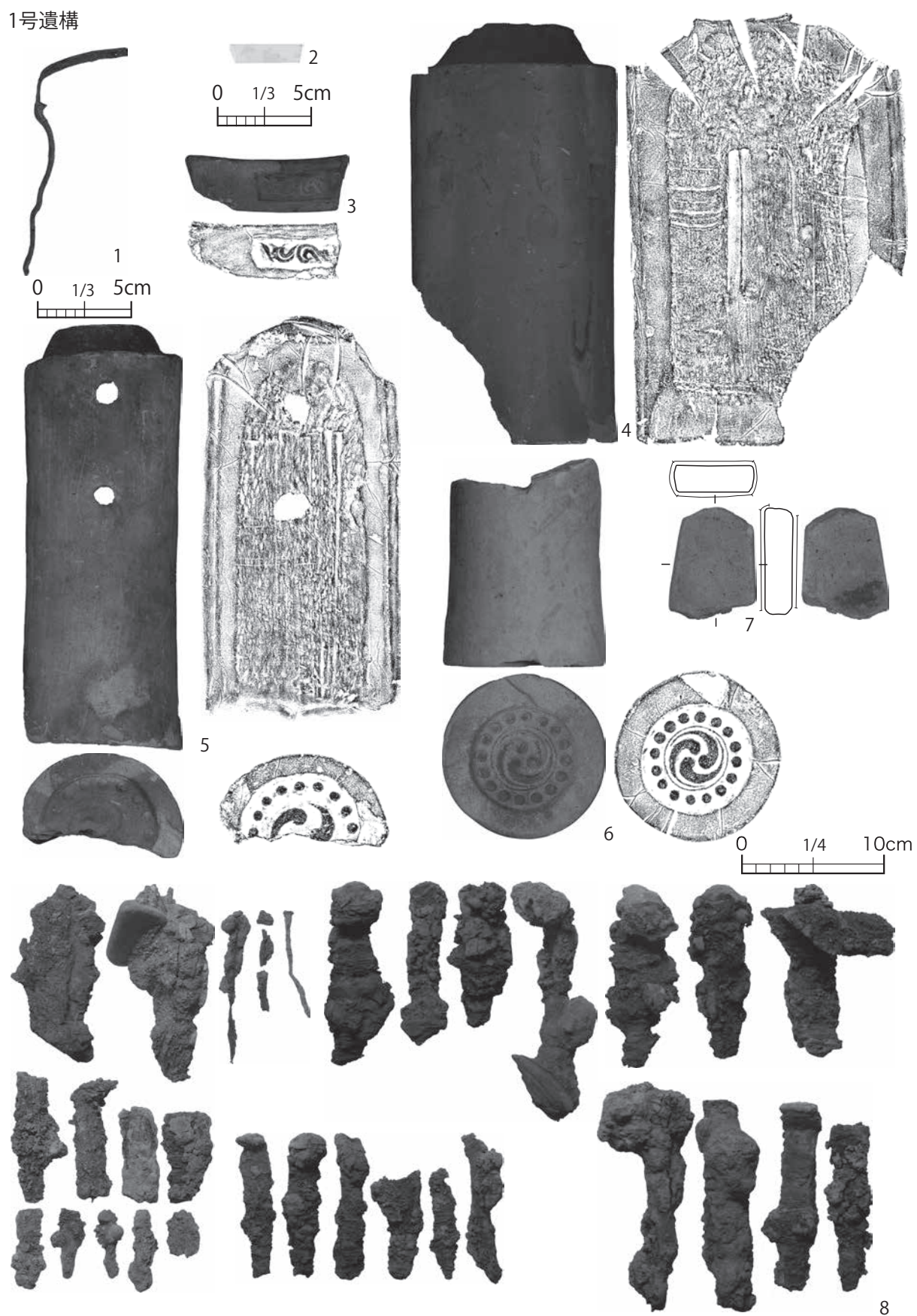
第 49 図 近世 1 面の遺物 (1 : 1/3)

1号遺構



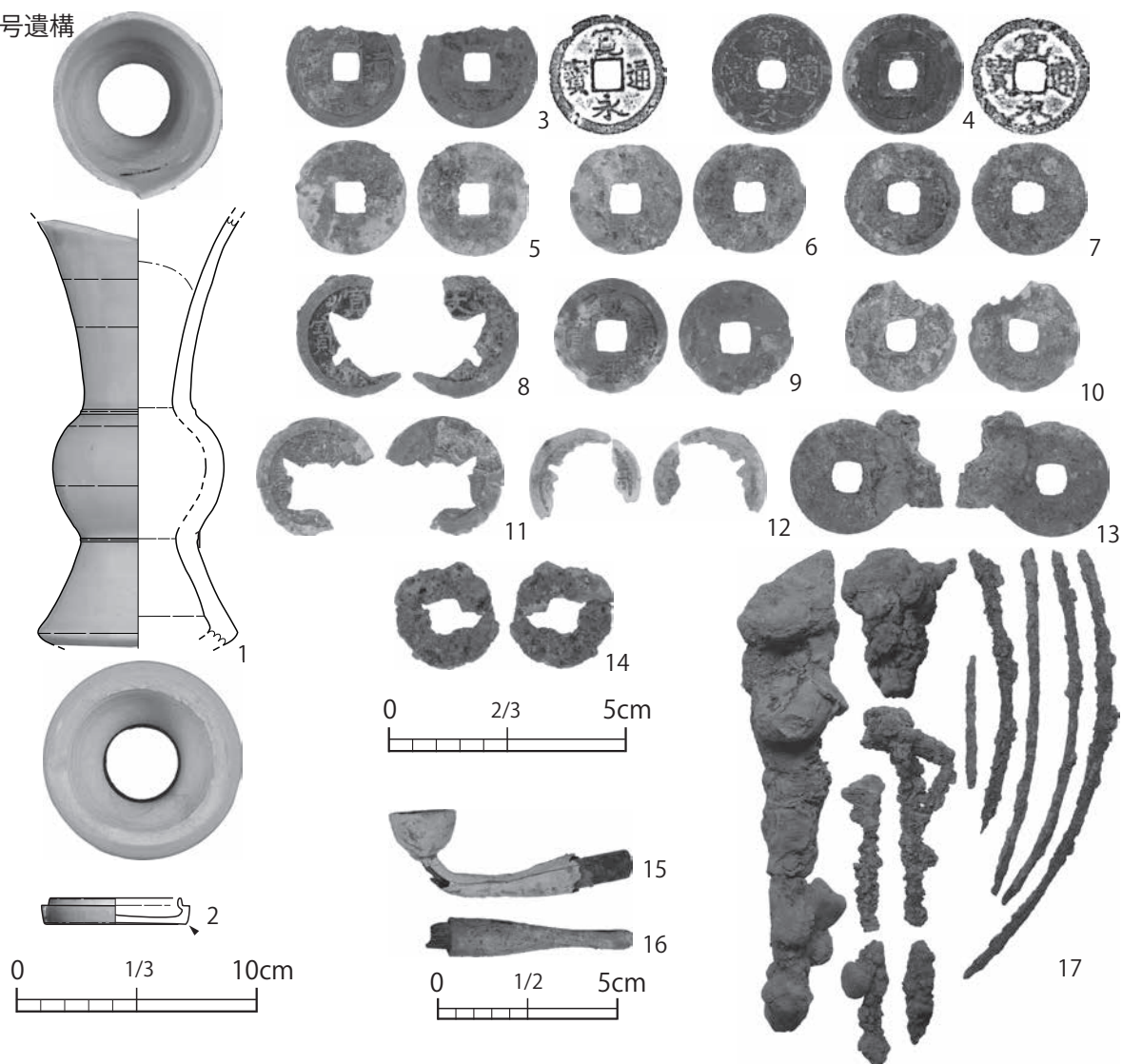
第 50 図 近世 1 面の遺物 (2 : 2/3 · 1/2 · 1/3)

1号遺構

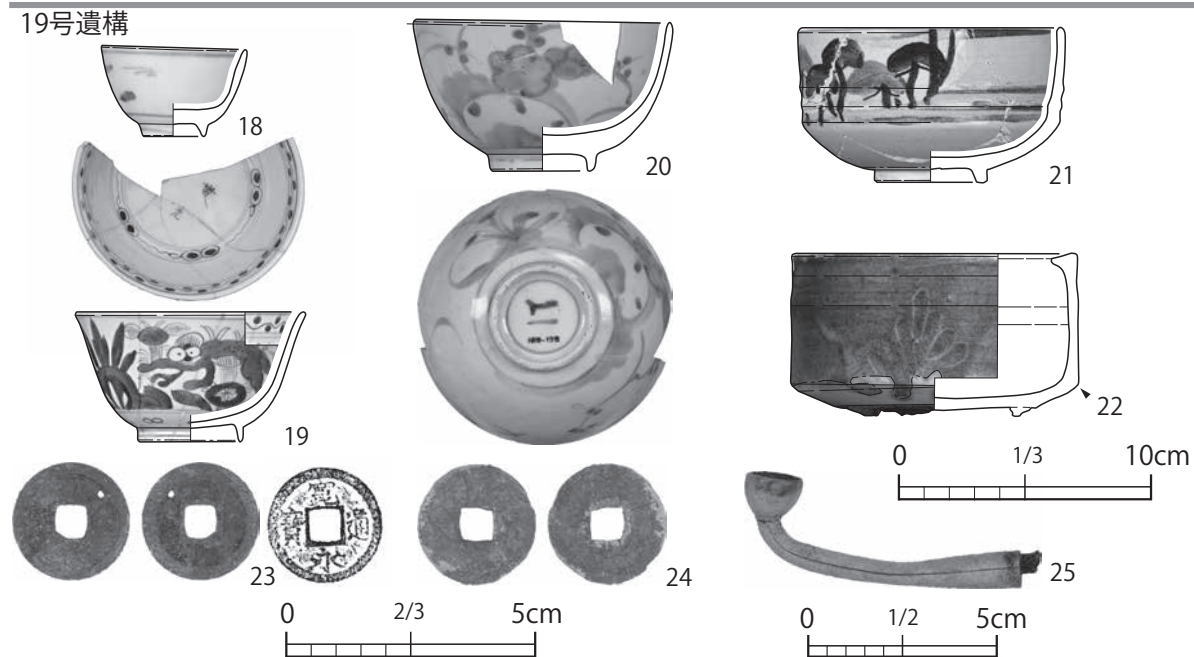


第 51 図 近世 1 面の遺物 (3 : 1/3 ・ 1/4)

18号遺構



19号遺構



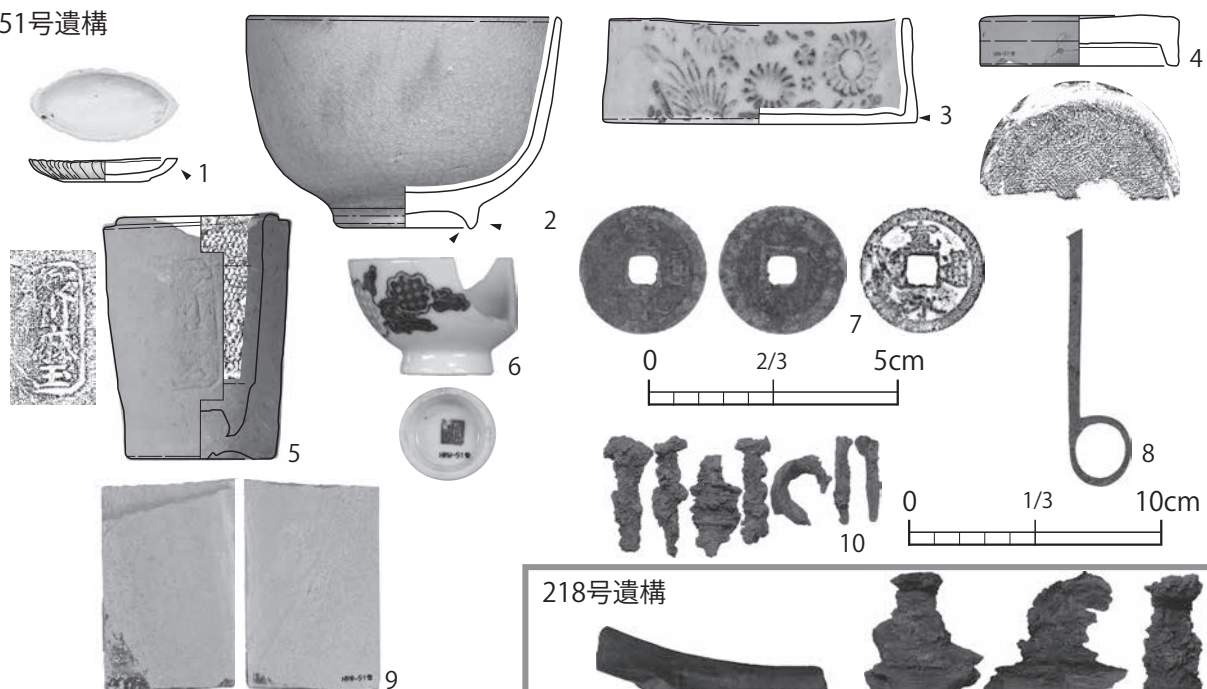
第 52 図 近世 1 面の遺物 (4 : 2/3 · 1/2 · 1/3)

19号遺構

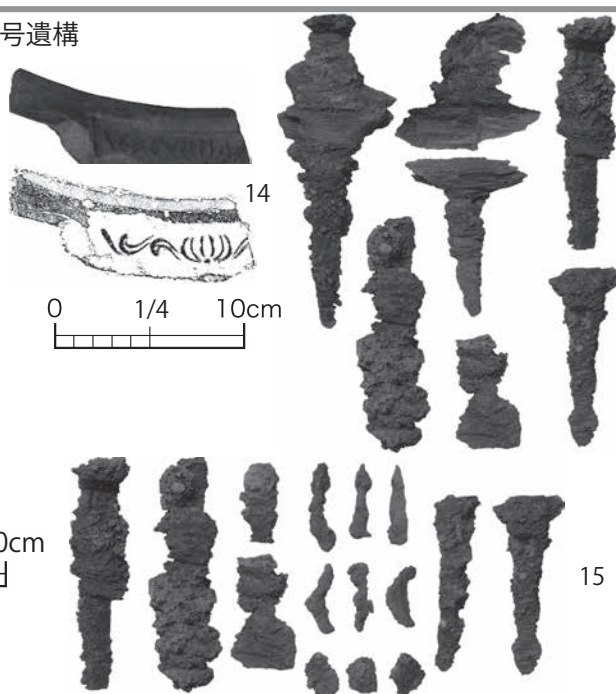


第 53 図 近世 1 面の遺物 (5 : 1/3)

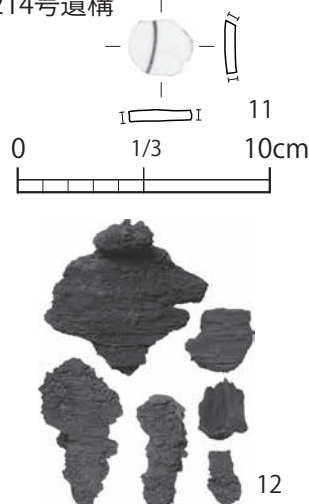
51号遺構



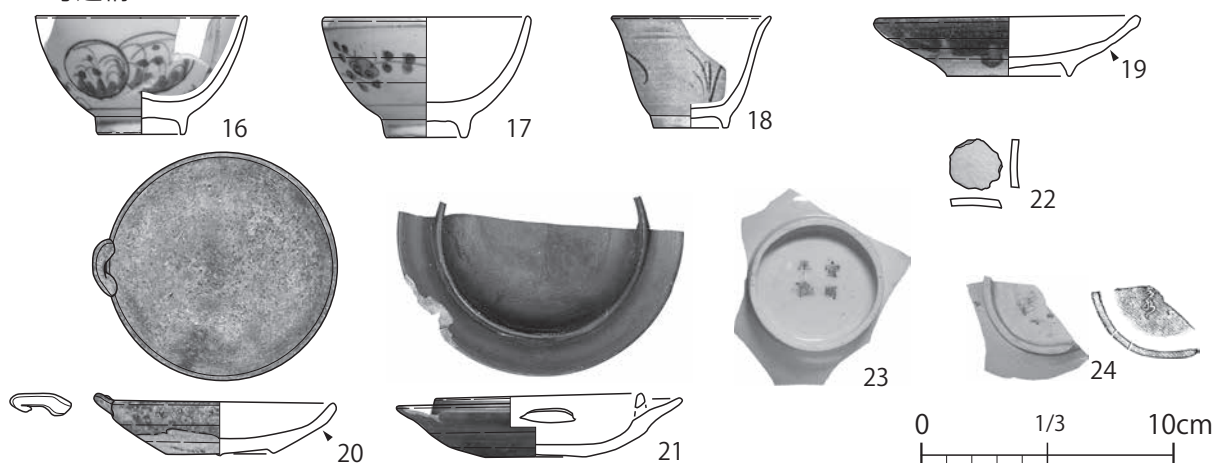
218号遺構



214号遺構



240号遺構



第 54 図 近世 1 面の遺物 (6 : 2/3 · 1/3 · 1/4)

× 10cm の不整な楕円形を呈する。

77号遺構 [G-5] (2区)

・遺構 (第45図)

1号遺構 (御殿堀) 北西縁直上に位置する。98号遺構 (縄文建物跡) と重複する。径 24cm × 9cm の円形を呈する。

78号遺構 [G・H-5] (2区)

・遺構 (第45図)

1号遺構 (御殿堀) 屈曲部直上に位置する。98号遺構 (縄文建物跡) と重複する。径 40cm × 20cm の円形を呈する。

79号遺構 [H-5] (2区)

・遺構 (第45図)

1号遺構 (御殿堀) 屈曲部直上に位置する。42cm × (25cm) × 10cm の略円形で北東部は 81号遺構 (近世2土坑) で欠損する。

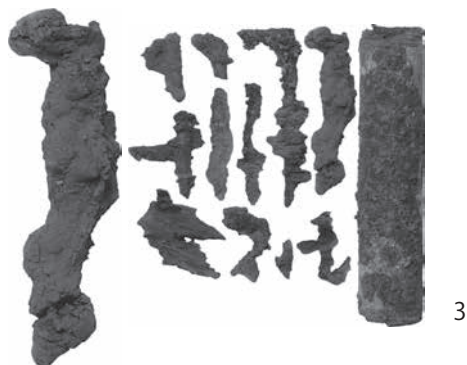
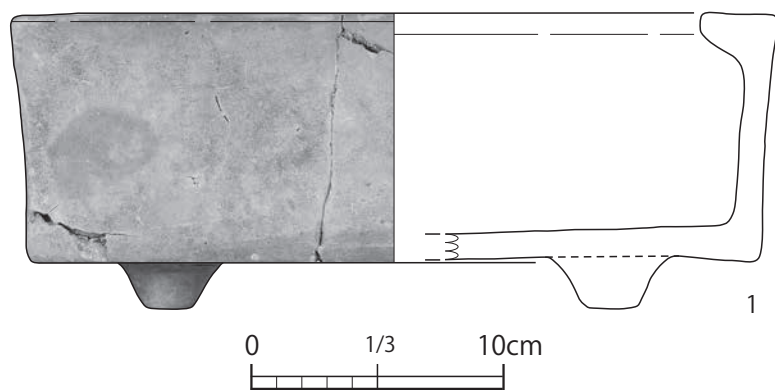
80号遺構 [G-4] (2区)

・遺構 (第45図)

1号遺構 (御殿堀) 屈曲部直上に位置する。98号遺構 (縄文建物跡) と重複する。径 40cm × 20cm の円形を呈する。

・遺物

240号遺構



第55図 近世1面の遺物 (7:1/3)

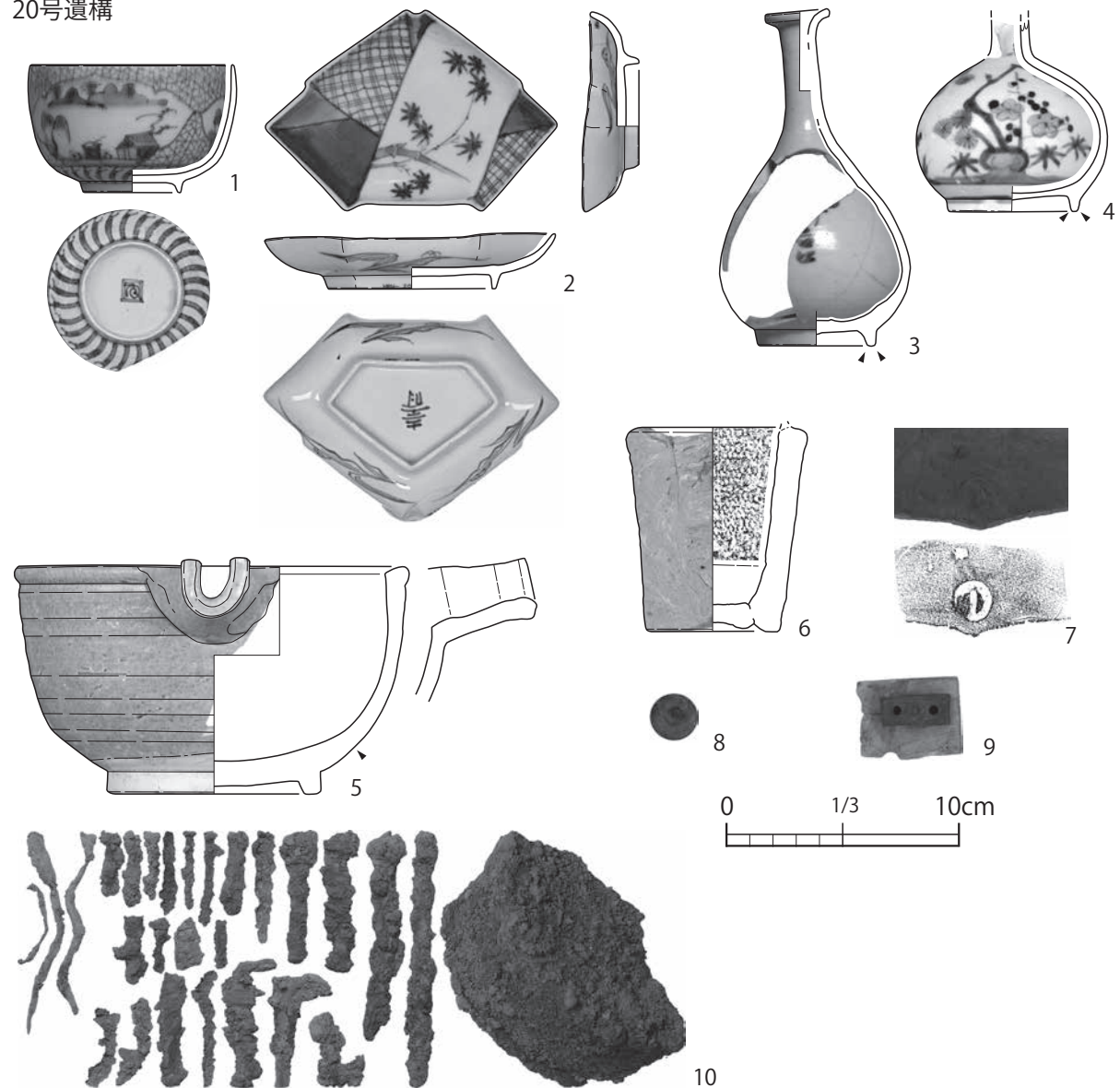
出土資料は、陶器の瓶（1点）である。

101号遺構 [G-6]（2区）

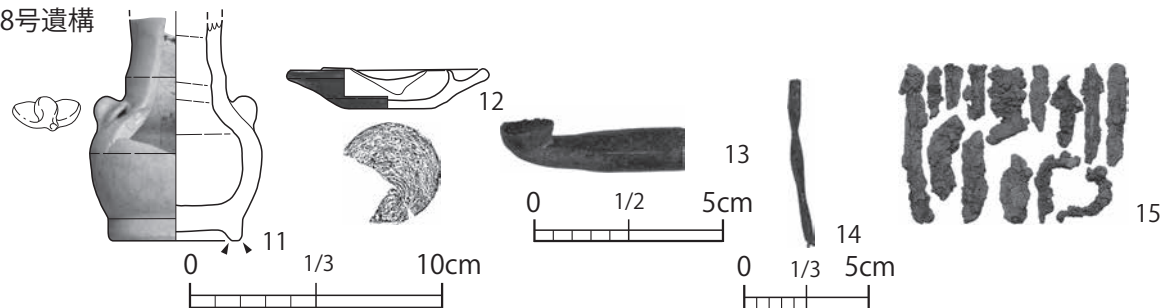
・遺構（第45図）

1号遺構（御殿堀）北東外縁部に位置する。73号遺構（近代礎石）と接する。38cm × 34cm ×

20号遺構

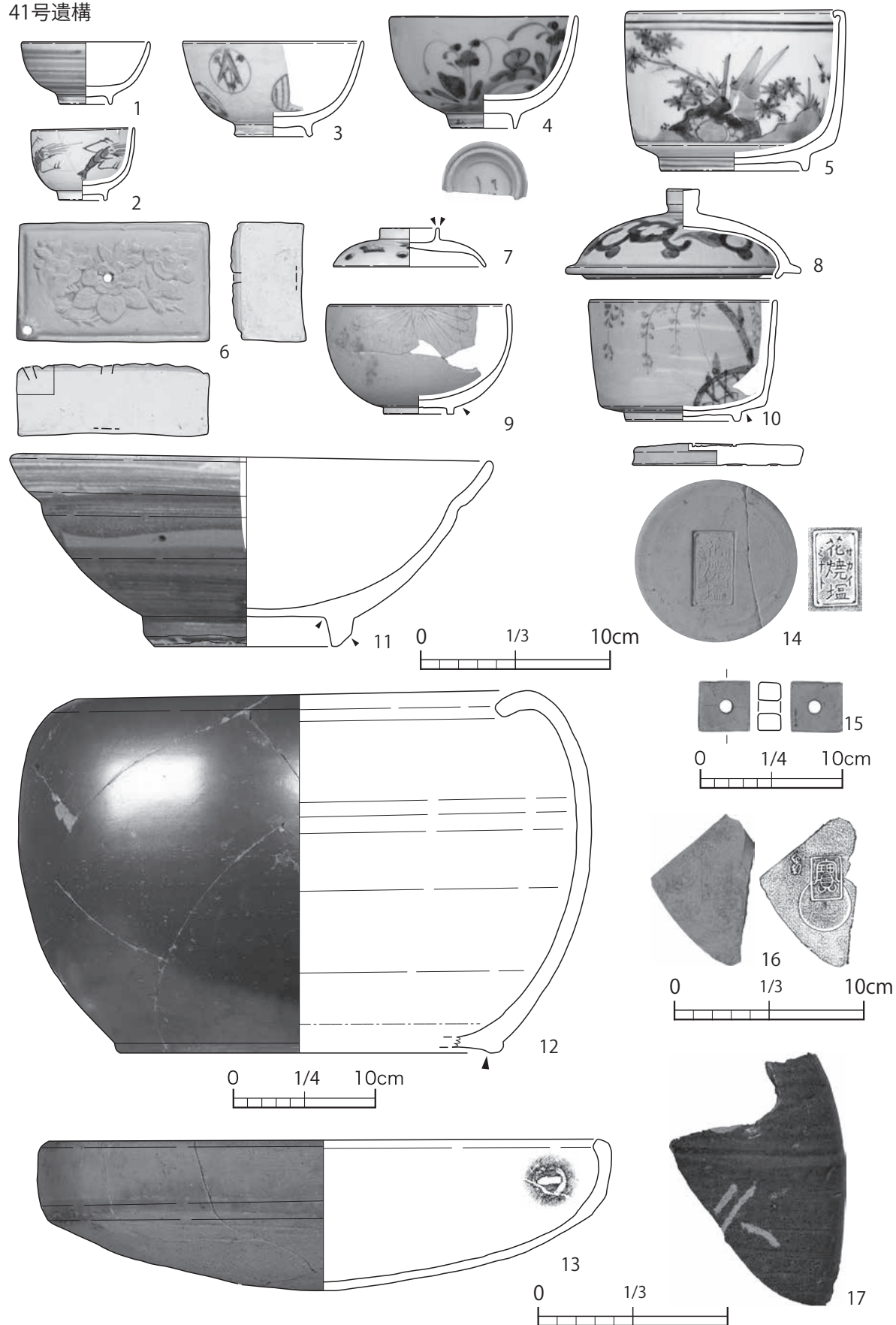


38号遺構



第56図 近世1面の遺物（8：1/2・1/3）

41号遺構



第 57 図 近世 1 面の遺物 (9 : 1/3 ・ 1/4)

30cm の略円形を呈する。

102 号遺構 [G-5・6] (2 区)

・遺構 (第 46 図)

1 号遺構 (御殿堀) 北東外縁部、102 号遺構 (近世 1 土坑) の下方に位置する。45cm × 36cm × 29cm の楕円形を呈する。

・遺物

‘かわらけ’は、1 点 (4g) である。

103 号遺構 [G・H-5] (2 区)

・遺構 (第 46 図)

1 号遺構 (御殿堀) 屈曲部の北西、98 号遺構 (縄文建物跡) の北西に接する。66cm × 51cm × 19cm の不整形を呈する。

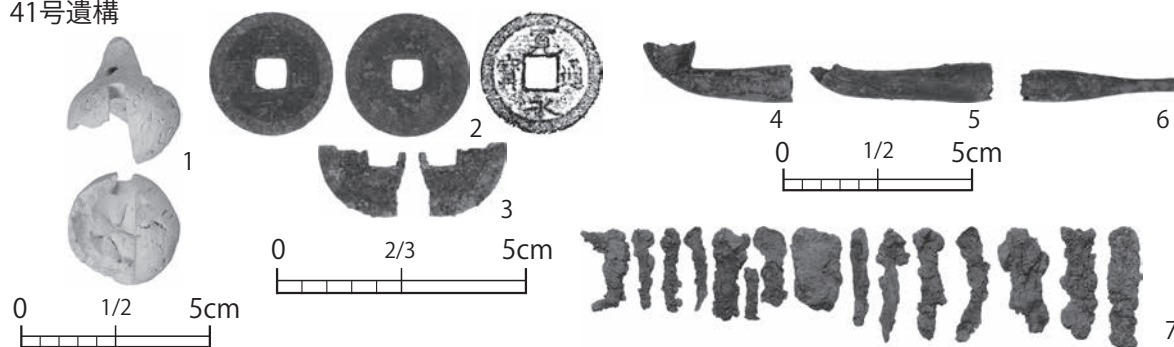
・遺物

出土資料は、陶器の播鉢 (1 点)、土器の焙烙 (1 点) である。‘かわらけ’は、3 点 (9g) である。

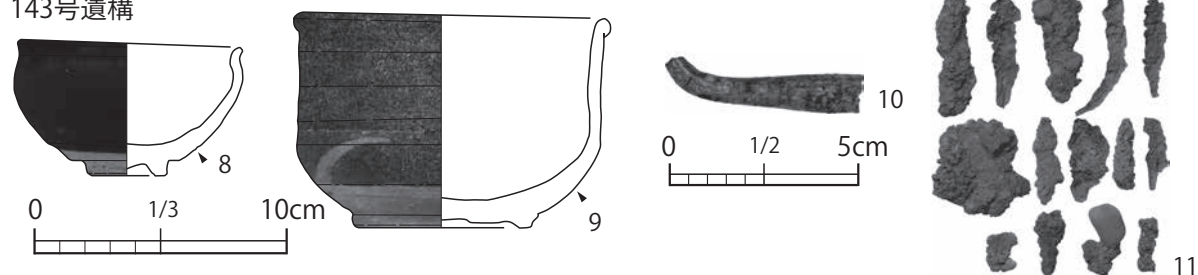
104 号遺構 [G-6] (2 区)

・遺構 (第 46 図)

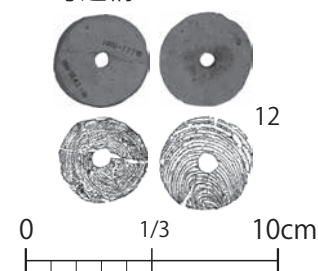
41号遺構



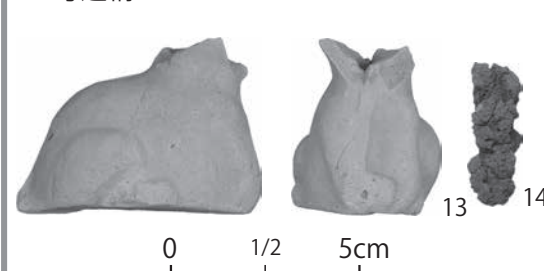
143号遺構



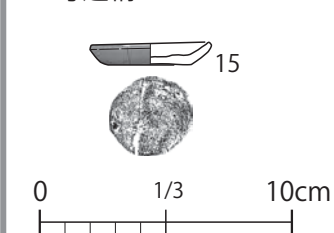
177号遺構



198号遺構



196号遺構



第 58 図 近世 1 面の遺物 (10 : 2/3 ・ 1/2 ・ 1/3)

1号遺構（御殿堀）北東外縁部の北東方向、87号遺構（近世2井戸）の南西に位置する。径33cm × 27cmの略円形を呈する。

105号遺構 [H-5]（2区）

・遺構（第46図）

1号遺構（御殿堀）屈曲部の北方向、81号遺構（近世2土坑）と重複する。52cm × 31cm × 20cmで、二つのピットが一部で重複する。

114号遺構 [F-8]（2区）

・遺構（第46図）

1号遺構（御殿堀）北東外縁上、調査区南東部、113号遺構（近世2井戸）の南東に位置する。南側の117号遺構（近世1ピット）を切る。32cm × 28cm × 15cmの略円形を呈する。

116号遺構 [F-7]（2区）

・遺構（第46図）

1号遺構（御殿堀）北東外縁部上に位置する。底部に複数のピットが認められる。51cm × (29cm) × 14cmで南西部を1号遺構（御殿堀）北東法面で欠損する。

117号遺構 [F-8]（2区）

・遺構（第46図）

1号遺構（御殿堀）北東外縁上、調査区南東部、113号遺構（近世2井戸）の南東に位置する。北側の114号遺構（近世1ピット）に切られる。(48cm) × 35cm × 10cmの略円形を呈する。

119号遺構 [G-5]（2区）

・遺構（第46図）

98号遺構（縄文建物跡）の中央南東部、1号遺構（御殿堀）北西法面上に位置する。38cm × 14cm × 22cmの楕円形を呈する。

156号遺構 [H-6・7]（3-2区）

・遺構（第46図）

調査区北東部、154号遺構（近世1土坑）の北東に位置する。46cm × 35cm × 20cmの略楕円形を呈する。

182号遺構 [G-8]（3-1区）

・遺構（第47図）

調査区南東縁、133号遺構（近代土坑）と重複する。33cm × (19cm) × 21cmの略円形を呈し、南東部は調査区外となる。

184号遺構 [H-8]（3-1区）

・遺構（第47図）

調査区東部、121号遺構（近代貯水槽）の南西に位置する。42cm × 38cm × 9cmの略円形を呈する。

・遺物

出土資料は、陶器の播鉢（1点）である。

185号遺構 [H-8]（3-1区）

・遺構（第47図）

調査区東部、123 号遺構(近代土坑)の東側に重複する。27cm × 23cm × 11cm の略円形を呈する。

187 号遺構 [H-7] (3-1 区)

- ・遺構 (第 47 図)

調査区東部、186 号遺構(近世 1 土坑)の南西に位置する。33cm × 25cm × 9cm の略円形を呈する。

191 号遺構 [I-6] (3-2 区)

- ・遺構 (第 47 図)

調査区北東部、防火水槽西側に位置する。35cm × 30cm × 15cm の楕円形を呈する。

196 号遺構 [I-6] (3-2 区)

- ・遺構 (第 47 図)

調査区北東部、防火水槽南西に位置する。39cm × 33cm × 15cm の略円形を呈する。

- ・遺物 (第 58 図)

土器は、‘かわらけ’ (第 58 図-15) である。

197 号遺構 [H-6] (3-2 区)

- ・遺構 (第 47 図)

調査区北東部、87 号遺構 (近世 2 井戸) の北側に位置する。41cm × 31cm × 25cm の楕円形を呈する。

221 号遺構 [I-5] (3-3 区)

- ・遺構 (第 47 図)

調査区北部、205 遺構号 (近世 2 土坑) と重複する。径 39cm × 11cm の円形を呈し、底面にやや大形の礫を有する。

223 号遺構 [I-5] (3-3 区)

- ・遺構 (第 48 図)

調査区北部、214 号遺構 (近世 1 上水路) の東側に位置する。33cm × 30cm × 10cm の略円形を呈する。

- ・遺物

出土資料は、陶器の皿 (1 点) である。

224 号遺構 [I-5] (3-3 区)

- ・遺構 (第 48 図)

調査区北部、214 号遺構 (近世 1 上水路) の東側に位置する。31cm × 25cm × 11cm の楕円形を呈する。

225 号遺構 [I-5] (3-3 区)

- ・遺構 (第 48 図)

調査区北部、214 号遺構 (近世 1 上水路) の東側に位置する。径 24cm × 11cm の円形を呈する。

228 号遺構 [H-4] (3-3 区)

- ・遺構 (第 48 図)

調査区北西縁近く、240 号遺構 (近世 1 井戸) の北東に位置する。41cm × 31cm × 16cm の楕円形を呈する。

・遺物

出土資料は、陶器の碗（1点）である。

231号遺構 [I-5]（3-3区）

・遺構（第48図）

調査区北部、216号遺構（近世2地下室）の南東に位置する。33cm × 21cm × 14cmの楕円形を呈する。

232号遺構 [H-5]（3-3区）

・遺構（第48図）

1号遺構（御殿堀）屈曲部の北側に位置する。57cm × 48cm × 17cmの卵形を呈する。

235号遺構 [I-5]（3-3区）

・遺構（第48図）

調査区北部、216号遺構（近世2地下室）の南東に位置する。39cm × 33cm × 44cmの卵形を呈する。

237号遺構 ピット [I-7・8]（3-1区）

・遺構（第43図）

調査区北東縁近く、193号遺構（近代土坑）の南西部に位置する。南東部過半を欠損し、西側を236号遺構（近世1期土坑）に切られる。(36cm) × (32cm) × 60cmの楕円形を呈する。



写真-1：18号遺構
青磁中無花入出土状況
(第52図-1：76頁)



写真-2：51号遺構出土
「泉川麻玉」刻印
(第54図-5：78頁)

第3表 近世1面 陶磁器・土器掲載資料

図版番号	出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ 径 (mm)	成形 技法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第49図	1	1号	磁器	碗	肥前	62	31	26	轆轤	白磁				18C代
第49図	2	1号	磁器	碗	肥前	76	38	34	轆轤	染付 こんにやく印刷		外面松・松葉 文		17C後～ 18C前
第49図	3	1号	磁器	碗	肥前	97	59	45	轆轤	染付		外面草花文	くらわんか碗 底部 銘	18C前
第49図	4	1号	磁器	碗	肥前	—	(29)	40	轆轤	染付		外面文様 見込み花文	底部銘「宣明」	17後～ 18C前
第49図	5	1号	磁器	碗	中国か	88	50	38	轆轤	染付・色絵	白 光沢あり	外面雲文他	見込み文様 底部銘角杵篆書	17C前
第49図	6	1号	磁器	皿	肥前	(137)	36	44	轆轤	青磁			波佐見 見込み蛇の目剥ぎ	18C後
第49図	7	1号	磁器	皿	肥前	(120)	30	38	轆轤	染付			波佐見 見込み蛇の目剥ぎ	18C後
第49図	8	1号	磁器	鉢	肥前	—	(39)	63	轆轤	染付		外面岩・草花 文	底部銘「宣明年製」	17後～ 18C前
第49図	9	1号	磁器	碗蓋	肥前	(92)	32		(44) 轆轤	染付 外青磁 こんにやく印刷		口縁内面文様 帯四方禪文 見込五弁花文		18C後
第49図	10	1号	磁器	香炉	肥前	—	(55)	48	(97) 轆轤	青磁			三足・輪高台 残二 足 高台微砂粒付着	17末～ 18C後
第49図	11	1号	陶器	碗	瀬戸・ 美濃	112	51	42	轆轤	灰釉 呉須絵		内面山水か	飯碗形	18C代
第49図	12	1号+ 2号	陶器	碗	京都・ 信楽	87	57	30	轆轤	灰釉・色絵	灰	外面格子・花 文		18C中～ 後
第49図	13	1号	陶器	盥水入れ	瀬戸・ 美濃	(110× 36)	39	(112× 34)	板作り	灰釉 鉄絵・刷絵		外面文様		18C中
第49図	14	1号+ 2号	陶器	皿力	肥前	—	(64)	(110)	轆轤	透明釉・緑釉 白化粧土 挿取り波文	暗褐		見込み目跡3	17C末～ 18C後
第49図	15	1号	陶器	灯明受皿	志戸呂	(116)	29	44	受部80 轆轤	鉄釉	暗褐		受け部アーチ状孔3	18C前
第49図	16	1号	土器	皿		59	14	30			淡褐		底部糸切痕 腰部や や丸気味	
第49図	17	1号	陶器	碗	肥前	—	(30)	52	轆轤	透明釉	淡灰黄褐		京焼風陶器 底部銘丸杵篆刻	17C後～ 18C初
第49図	18	1号	陶器	皿	肥前	—	(19)	52	轆轤	透明釉	乳黄白	見込み山水文	京焼風陶器 平碗 底部銘丸杵篆刻	17C後～ 18C初
第50図	1	1号	陶器	皿	肥前	—	(13)	56	轆轤	透明釉	乳黄白		京焼風陶器 平碗 底部銘篆刻	17C後～ 18C初
第50図	2	1号	磁器	碗	肥前	—	35	40	轆轤	染付		外面草花文	くらわんか碗 底部銘「□□」(太 明か)	18C前
第50図	3	1号	磁器	碗	肥前	—	(18)	27	轆轤	染付			底部銘「□」	17C末 ～18C後
第50図	4	1号	磁器	蓋物蓋	肥前	—	(22)	(96)				天井波文他		18C代
第50図	5	1号	磁器	鉢	中国力				—	青磁：緑青色	暗灰	内面蓮弁様の 凹凸		
第50図	6	1号	磁器	碗	中国力				轆轤	染付	白	内外面花文(同 一)		
第52図	1	18号	磁器	花瓶	肥前	—	(179)	—	轆轤	青磁	白		中無花入 上部内面 赤変	18C代
第52図	2	18号	陶器	合子	京都・ 信楽	54	11	58	62 轆轤	透明釉	淡黄褐			18C代
第52図	18	19号	磁器	坏	肥前	57	36	24	轆轤	染付		外面文様		17C末～ 18C前
第52図	19	19号	磁器	碗	不明	90	52	40	轆轤	染付		外面龍・唐草 文 内面口縁 帯玉・波文	非肥前 端反碗 見込み銘「道元□□」	19C前
第52図	20	19号	磁器	碗	肥前	100	60	40	轆轤	染付		外面草花文	くらわんか碗 底部銘	18C前
第52図	21	19号	陶器	碗	京都	103	61	43	轆轤	透明釉 呉須絵・鉄絵	淡黄褐	外面風景文	せんじ碗	18C中～ 後
第52図	22	19号	陶器	香炉	瀬戸・ 美濃	110	64	81	轆轤	灰釉		外面半菊文	三足	18C前
第54図	1	51号	磁器	紅猪口	肥前	59/30	9	34/12	型	白磁		外面蓮弁文		18C後～ 19C前
第54図	2	51号	陶器	碗	瀬戸・ 美濃	122	85	51	轆轤	灰釉 呉須絵	灰	外面文様	御室碗	18C前
第54図	3	51号	陶器	盥水入れ	瀬戸・ 美濃	117	42	125	板作り	灰釉 鉄絵・刷絵	淡灰	外面花文		18C中
第54図	4	51号	土器	焼塩壺蓋		75/77	20		型		淡褐		布目 金雲母若干	17C後～ 18C前

図版番号		出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ 径 (mm)	成形 技法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第 54 図	5	51 号	土器	焼塩壺		58	97	56		板作り		淡褐		体部刻印「泉川麻玉」 金雲母若干	17C 後～ 18C 前
第 54 図	6	51 号	磁器	碗	瀬戸・ 美濃	76	46	37		轆轤	染付・色絵 銅板転写 釉裏 紅		外面花文	底部銘角枠文字	19C 後～
第 54 図	11	214 号	磁器	転用品 (皿)	肥前	22	25	5		轆轤	染付		内面文様	外周斫り 皿の転用	18C 代
第 54 図	13	218 号	磁器	蓋物蓋	肥前	85	23		30	轆轤	染付		天井蛸唐草文		18C～ 19C 前
第 54 図	16	240 号	磁器	碗	肥前	(84)	47	34		轆轤	染付		外面丸文 (草 花文)・草花文		18C 代
第 54 図	17	240 号	磁器	碗	肥前	(80)	48	32		轆轤	染付	灰	外面草花文		17C 後～ 18C 前
第 54 図	18	240 号	陶器	坏	不明	(62)	45	30		轆轤	透明釉鉄 絵・白化粧土		外面草文	端反碗	18C 代
第 54 図	19	240 号	陶器	皿	瀬戸・ 美濃	103	24	49		轆轤	鉄釉	淡灰褐		高台内すす付着	18C 代
第 54 図	20	240 号	陶器	灯明皿	瀬戸・ 美濃	88	21/24	43	95	轆轤	鉛釉	淡灰褐		把手付き 碁筭底	18C 前葉
第 54 図	21	240 号	陶器	灯明受皿	瀬戸・ 美濃	111	25	40	受部 81	轆轤	鉄釉	暗褐		孔 3 だが孔 4 と思わ れる 油溝アーチ状 備前か	18C 中～ 後
第 54 図	22	240 号	磁器	転用品 (碗)	肥前	20	21	3		轆轤				外周斫り 転用品おはじき	
第 54 図	23	240 号	磁器	皿	肥前	—	(19)	52		轆轤	染付			底部銘「宣明年製」 見込み一段凹む	17C 末 ～18C 前
第 54 図	24	240 号	陶器	碗	肥前	—	(17)	(56)		轆轤	透明釉	淡灰黄褐		京焼風陶器 底部銘刻印「清水」	17C 後 ～18C 初
第 55 図	1	240 号	土器	角火鉢		300× —	117	287× —		板作り		淡暗褐			
第 55 図	4	247 号	磁器	碗	肥前	110	58	47		轆轤	染付		外面草花文		17C 後 ～18C 前
第 56 図	1	20 号	磁器	碗	肥前	87	55	42		轆轤	染付		外面区画窓絵 (風景文) / 氷 割文	腰張碗 底部銘角枠渦福	18C 後
第 56 図	2	20 号 +41 号	磁器	角皿	肥前	124× 83	24	710× 44		型作り	染付		内面葉文・よ ろけ篇文	短冊型 底部銘「寿」	18C 代
第 56 図	3	20 号	磁器	瓶	肥前	270	145	50	(82)	轆轤	白磁				18C 代
第 56 図	4	20 号 +38 号	磁器	瓶	肥前	—	(83)	54	83	轆轤	染付		外面梅紋 / 蛸 唐草文		18C 代
第 56 図	5	20 号	陶器	片口	瀬戸・ 美濃	166	102	88	204	轆轤	灰釉 (黄色)	淡灰黄褐		見込み目跡 3	18C 代
第 56 図	6	20 号	土器	焼塩壺		—	88	55		板作り		淡褐		内面布目痕顕著 胎土白粘土練込み	17C 後葉 ～18C 前
第 56 図	7	20 号	土器	焙烙		(280)	(70)	—		型		褐		底部ちりめん 内面刻印丸に「一」	18C 後 ～19C 前
第 56 図	11	25 号 +38 号 +41 号	磁器	仏花瓶	肥前	—	(88)	50	68	轆轤	青磁				18C 代
第 56 図	12	38 号	土器	灯明受皿		77	16	38	受部 50	轆轤	透明釉			底部糸切痕	18C 後
第 57 図	1	41 号	磁器	坏	肥前	67	33	27		轆轤	染付		外面篇文		18C 代
第 57 図	2	41 号	磁器	坏	肥前	54	38	24		轆轤	色絵		外面海老文		18C 代
第 57 図	3	41 号 +51 号	磁器	碗	肥前	(95)	51	40		轆轤	染付	淡灰	外面丸文 (篇 / 格子 / 草花 / 沢潟)	高台に漆喰状の付着 物	18C 前～ 中
第 57 図	4	41 号	磁器	碗	肥前	(98)	59	34		轆轤	染付		外面草花文	くらわんか碗底部銘	18C 前
第 57 図	5	25 号 +41 号 +包含 層	磁器	香炉	肥前	110	85	77		轆轤	染付		外面梅・楓文	輪高台	18C 代
第 57 図	6	41 号	磁器	水滴	肥前	102	63	39		板作り・ 型	白磁		天井椿文		18C 代
第 57 図	7	41 号	磁器	碗蓋	瀬戸・ 美濃	80	21		30	轆轤	染付		天井宝文他 内面口縁文様 帯		19C 前
第 57 図	8	41 号	磁器	蓋物蓋	肥前	100	48		124/18	轆轤	染付		外面唐草文	壺蓋の可能性あり 内面かえり	18C～ 19C 前
第 57 図	9	41 号	陶器	碗	京都・ 信楽	(94)	58	37		轆轤	透明釉 呉須絵	淡黄褐	外面半菊文 / 丸文 (二つ引 両)		18C 中～ 後
第 57 図	10	41 号	陶器	碗	京都	(98)	64	59		轆轤	灰釉 呉須絵・鉄絵	淡灰黄褐	外面藤文	筒形碗	18C 前～ 中

図版番号	出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ 径 (mm)	成形 技法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第 57 図	11	25 号 +41 号 +45 号	陶器	鉢	肥前	251	102	98		轆轤 灰釉 / 鉄釉 白化粧土 打ち刷毛目	赤褐		見込み蛇の目釉剥ぎ	17C 末 ~ 18C 後
第 57 図	12	41 号 +51 号 + 包含 層	陶器	火鉢	不明	316	256	268		板作 り・ 輪積	鉄釉		見込み重ね焼き痕 砂粒付着	
第 57 図	13	41 号	土器	焙烙		(290)	80			型			底部ちりめん 内面刻印	18C 代
第 57 図	14	41 号	土器	焼塩壺蓋		86/87	12			型力			天井銘角枠「サカイ ／花焼塩／ミナト」	17C 後 ~ 18C 前
第 57 図	16	41 号	陶器	皿	肥前	—	—	—		轆轤	透明釉		京焼風陶器 底部銘角枠篆刻「寶」 /「清水」	17C 後 ~18C 初
第 57 図	17	41 号	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	—	—	—		轆轤	鉛釉		体部連続釘書「□ (久 か)」	18C 前 ~ 中
第 58 図	8	143 号	陶器	碗	瀬戸・ 美濃	83	59	29		轆轤	鉄釉		天目碗	18C 前
第 58 図	9	143 号	陶器	碗	瀬戸・ 美濃	120	85	68		轆轤	鉄釉・鉄漿		口縁玉縁 見込み目 跡 3 胴部外面指頭痕 2	18C 代
第 58 図	12	177 号	土器	不明		35	5	37		轆轤			孔あり 底部糸切痕 円板状	
第 58 図	15	196 号	土器	皿		47	9	32					底部糸切痕	

第 4 表 近世 1 面 土製品掲載資料

図版番号		出土 遺構	種別	器種 モチーフ	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	備考
第 50 図	7	1 号	人形		56.0	27.9	両腕を曲げている
第 58 図	1	41 号	土鈴		34.4	29.5	胎土乳白 手捏ね
第 58 図	13	198 号	動物形	動物？頭なし	—	—	

第 5 表 近世 1 面 金属製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	種別	材質	長さ (銭径) (mm)	高さ (孔径) (mm)	重量 (g)	備考	
第 50 図	8	1 号	寛永通宝 (古)	銅	24.3	5.8	2.8	初鑄年 (西暦)1668
第 50 図	9	1 号	寛永通宝 (古)	銅	24.3	5.7	2.7	初鑄年 (西暦)1668
第 50 図	9	1 号	寛永通宝 (古)	銅	24	5	3.5	初鑄年 (西暦)1668
第 50 図	10	1 号	寛永通宝 (古)	銅	24.3	5.6	2.5	初鑄年 (西暦)1668
第 50 図	11	1 号	寛永通宝 (古)	銅	24.2	5.7	2.4	初鑄年 (西暦)1668
第 50 図	13	1 号	寛永通宝 (新)	銅	25.2	5.7	2.8	初鑄年 (西暦)1668 背文「文」
第 50 図	14	1 号	寛永通宝 (新)	銅	25.2	5.6	2.8	初鑄年 (西暦)1668 背文「文」
第 50 図	15	1 号	寛永通宝 (新)	銅	24.2	5.6	2.3	
第 50 図	16	1 号	寛永通宝 (新)	銅	22.8	6.4	2.2	
第 50 図	17	1 号	寛永通宝 (新)	銅	23.4	6.3	2.1	
第 50 図	18	1 号	寛永通宝 (新)	銅	25.6	5.5	2.3	
第 50 図	19	1 号	寛永通宝 (新)	銅	24.7	5.7	2.6	
第 50 図	20	1 号	寛永通宝 (新)	銅	23.2	6.5	2.4	
第 50 図	22	1 号	寛永通宝 (新)	銅	25.5	5.7	3.2	初鑄年 (西暦)1668 背文「文」
第 50 図	23	1 号	寛永通宝 (新)	銅	25	6.1	1.2	破損
第 50 図	24	1 号	寛永通宝 (新)	銅	23.4	6.3	2.3	
第 50 図	25	1 号	寛永通宝 (新)	銅	23.7	6.3	1.8	
第 50 図	26	1 号	寛永通宝 (新)	銅	23.3	6	3.6	2 枚圧着
第 50 図	27	1 号	寛永通宝 (新)	銅	22.3	6.3	1.7	
第 50 図	28	1 号	寛永通宝 (新)	銅	22.7	5.8	1.4	
第 50 図	29	1 号	寛永通宝 (新)	銅	23.4/25	6/5.5	6.6	2 枚
第 50 図	30	1 号	寛永通宝 (新)	銅	25/23	5.7/6.5	7.3	2 枚
第 50 図	31	1 号	寛永通宝 (新)	銅	25	6.3	2.2	初鑄年 (西暦)1668 背文「文」
第 50 図	31	1 号	吸口	銅	(25.3)	—	1.7	羅字あり
第 50 図	32	1 号	吸口	銅	50.3		2.7	肩あり
第 51 図	1	1 号	金具	銅	126.7	35.8	13.9	
第 52 図	3	18 号	寛永通宝 (古)	銅	24.4	5.6	1.5	初鑄年 (西暦)1636
第 52 図	4	18 号	寛永通宝 (古)	銅	24.5	5.9	3.2	初鑄年 (西暦)1636
第 52 図	5	18 号	寛永通宝 (新)	銅	23.3	6.4	2	
第 52 図	6	18 号	寛永通宝 (新)	銅	22.9	6.5	2.1	
第 52 図	7	18 号	寛永通宝 (新)	銅	23.4	6.7	1.8	

図版番号		出土 遺構	種別	材質	長さ (銭径) (mm)	高さ (孔径) (mm)	重量 (g)	備考
第 52 図	8	18 号	寛永通宝 (新)	銅	24.7	—	1.2	破片 2
第 52 図	9	18 号	寛永通宝 (新)	銅	23.1	6.5	2	2 点接合
第 52 図	10	18 号	寛永通宝 (新)	銅	25.1	5.1	1.6	2 枚圧着、破片
第 52 図	11	18 号	寛永通宝 (新)	銅	22.7	6.1	1	破損
第 52 図	12	18 号	寛永通宝 (新)	銅	—	—	1.5	
第 52 図	13	18 号	寛永通宝 (新)	銅	23.5/ —	6.3/ —	4.4	2 枚圧着
第 52 図	14	18 号	寛永通宝 (新)	銅	22.5	6.4	1	破片 2
第 52 図	15	18 号	雁首	銅	(52.2)	25.1	6.6	羅字あり
第 52 図	16	18 号	吸口	銅	50.0	—	4.9	羅字あり
第 52 図	23	19 号	寛永通宝 (新)	銅	22.7	6.2	2	
第 52 図	24	19 号	寛永通宝 (新)	銅	23.1	6.6	2.5	
第 52 図	25	19 号	雁首	銅	72.2	28.6	8.3	羅字あり
第 54 図	7	51 号	寛永通宝 (古)	銅	24.6	5.6	3.2	初鋳年 (西暦)1636
第 54 図	8	51 号	鉄	真鍮	101	—	21.1	
第 55 図	2	240 号	金具	銅	13.8	—	13.8	
第 56 図	8	20 号	金具	銅	18.8	20.2	1.6	
第 56 図	9	20 号	金具付着	銅	42.6	33.7	54.2	
第 56 図	13	38 号	雁首	銅	47.7	(13.2)	7.3	
第 56 図	14	38 号	銅線	銅	66.1	4.6	5.4	
第 58 図	2	41 号	寛永通宝 (新)	銅	24	6.1	3	
第 58 図	3	41 号	寛永通宝 (新)	銅	25.3	5.6	0.8	破損
第 58 図	4	41 号	雁首	銅	38.5	15.6	3.8	
第 58 図	5	41 号	雁首	銅	48.1	11.6	4.7	火皿部欠損 羅字あり
第 58 図	6	41 号	吸口	銅	41.4	—	2.0	羅字あり
第 58 図	10	143 号	雁首	銅	(47.0)	(9.7)	3.2	火皿部欠損

第6表 近世1面 石製品掲載資料

図版番号		出土 遺構	器種	石材	長さ 長軸 (mm)	幅 短軸 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第54図	9	51号	砥石	粘板岩	83.7	53.3	11.1	84.8	平面長方形で扁平な形態 半分が欠損している 片面が使用によりやや窪む 緻密質で硬質

第7表 近世1面 ガラス製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	器種	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚さ (mm)	重量 (g)	備考	
第 51 図	2	1 号	筭	(38.7)	9.4	5.5	6.2	色調黄色 断面方形 表面銀化 両側欠損

第8表 近世1面 部材掲載資料

図版番号	出土遺構	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	特徴	
第 51 図	3	1 号	軒平瓦	—	—	36.2	胎土暗灰 黒色粒混 石英質の微粒子含 中心飾三方割花・唐草文 (江戸式)
第 51 図	4	1 号	丸瓦	298.3	145.3	—	胎土暗灰 黒色粒含む 模骨痕顕著
第 51 図	5	1 号	軒丸瓦	296.2	110.0	—	瓦当径 111.8mm 胎土灰 模骨痕顕著 三巴 玉縁側に孔 2 つ
第 51 図	6	1 号	軒丸瓦	—	114.0	—	瓦当径 114.3mm 胎土表層灰 中心暗灰 模骨痕顕著 三巴 玉縁側に孔 1 つ
第 51 図	7	1 号	平瓦	78.3	60.7	20.0	凸面やや黒化 胎土表層灰 中心暗灰 凹面粗い布目痕 側面、表裏面に研磨痕 転用砥石
第 54 図	14	218 号	軒平瓦	—	—	37.1	胎土灰 極微細な白色粒 石英質粒疎に含む 中心飾三方割花・唐草文 (江戸式)
第 57 図	15	41 号	平瓦	35.5	35.2	16.1	全面に研磨痕 平面正方形 中央に穿孔 十字の線刻

3 近世2面

1713（正徳三）年に御殿堀が埋め戻されて武家地として利用された時期以降と思われる井戸2基、溝2基、畝間溝7基、地下坑2基、地下室2基、土坑64基、柱穴土坑22基、ピット32基の計133遺構を「近世2面」とした（第59図）。

【井戸】

87号遺構 [G・H-6]（2区）

・遺構（第60図）

1号遺構（御殿堀）の北東外縁北側に位置する。87号遺構の中央部に129号遺構（近世2土坑）が位置する。確認面から545cmで地山が白色粘土層となり、掘削を断念した。確認面では径160cmほど、中程では径106cm前後、下端近くで径128cm前後とやや末広がりとなる。

・遺物（第105～108図）

出土資料は、磁器の碗（223点）・皿（18点）・鉢（13点）・蓋（1点）・瓶（15点）・水注（4点）・小杯（6点）・紅猪口（5点）・仏飯器（16点）・香炉（8点）・片口鉢（1点）・水滴（1点）・蓋物（1点）・不明（3点）、陶器の碗（300点）・皿（48点）・鉢（19点）・蓋（2点）・壺（6点）・甕（28点）・瓶（96点）・水注（3点）・土鍋（6点）・香炉（14点）・片口鉢（7点）・擂鉢（32点）・餌猪口（1点）・杓子型容器（3点）・鬚水入れ（1点）・土瓶（2点）・不明（11点）、土器の皿（1点）・鉢（9点）・植木鉢（15点）・火鉢（173点）・焙烙（121点）・火消壺蓋（19点）・焼塩壺（18点）・焼塩壺蓋（4点）・灯明受皿（2点）・土製品（人形：16点・箱庭：10点・ミニチュア：9点）・五徳（10点）・風口（3点）・十能（3点）・型（4点）・不明（32点）である。

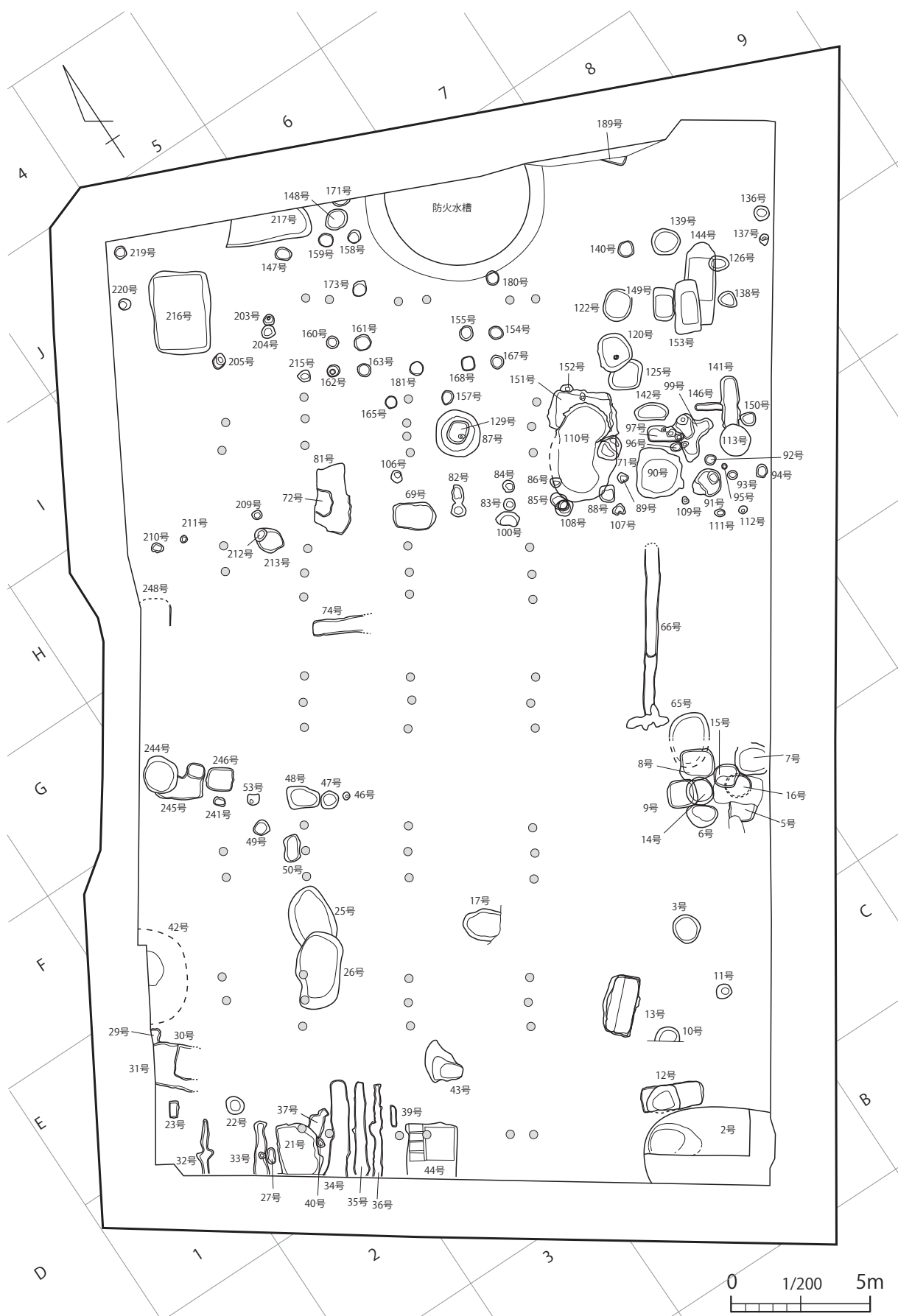
磁器は、碗（第105図-1～4、第107図-8・9：底部銘渦福）、鉢（第107図-15：「大明成（化）年製」）、皿（第105図-5：底部銘「渦福」、第107図-16：底部銘）、紅猪口（第105図-8）、そば猪口（第107図-14：「富（貴）長（春）」）、香炉（第105図-9）、片口（第105図-7）、仏飯器（第105図-6）、蓋物蓋（第108図-1）である。

陶器は、碗（第105図-10～13、14：掛分縦、第107図-5：墨書）、皿（第105図-15）、片口（第105図-17）、方角猪口（第105図-16）、徳利（第108図-2・3：釘書き「ヤマに伊」）、擂鉢（第107図-1）、花瓶（第107図-2：角杵篆刻）である。

土器は、‘かわらけ’（第106図-1～5、第107図-6：見込みに墨書「大」、7：底部に墨書「大」カ）、精製皿（第106図-6）、火鉢（第106図-7、8）、焜炉（第106図-9：受口部）、焼塩壺（第106図-10・11：共に「泉湊伊織」）、焼塩壺蓋（第106図-12）、鉢（第107図-3：底部穿孔）、灯明受皿（第107図-4）である。

‘かわらけ’は6,772点（32,474g）で、最小個体数は337点である。

土製品は、人形（第108図-5：西行）、動物（第108図-6：猿）、建造物（第108図-7：祠）、型杵（第108図-8：烏天狗、9：鍾馗）である。土玉は、穴あき（第108図-10）、楕円形（第108図-11）がある。土玉は、7,848点（14,690g）である。大きさ（直径）が計測可能な完形・ほぼ完形の土玉は3,326点（6,456g）で、計測不可の破損土玉は4,522点（8,234g）である。



第 59 図 近世 2 面の遺構分布図 (1/200)

金属製品は、銭貨が新寛永2枚(第108図-12・13)である。煙管は、雁首(第108図-14～17)4点、吸口(第108図-18・19)2点の計6点が出土した。そのほか銅製の水滴(第108図-20)がある。鉄釘など(第108図-21)が出土している。

＊陶磁器などは18世紀前半から中葉の製品が多い。焼塩壺は「泉湊伊織」の刻印を有し、18世紀中葉の時期が想定される。

・自然遺物

貝類は、アサリ(3,638点)・ハマグリ(140点)・シオフキガイ(70点)・ヤマトシジミ(87点)・サルボウガイ(14点)・サザエ(13点)・バイ(10点)・マガキ(4点)・サトウガイ(3点)・アカガイ(2点)・キサゴ類(1点)・カガミガイ(1点)が出土した。

113号遺構 [F・G-7・8] (2区)

・遺構(第61図)

1号遺構(御殿堀)北西外縁直上に位置する。北東側に位置する141号遺構(近世2土坑)を切る。径110cm×(370cm)の円形を呈する。

・遺物(第109図)

出土資料は、磁器の碗(7点)・皿(3点)・鉢(1点)・蓋(2点)・瓶(1点)・瓶油壺(1点)・カップ(1点)、陶器の碗(8点)・皿(2点)・鉢(1点)・瓶(12点)・土鍋(6点)・水鉢(1点)・不明(1点)、土器の火鉢(2点)・焙烙(1点)・焼塩壺(1点)・焼塩壺蓋(1点)・土製品(人形：2点)・不明(3点)である。

磁器は、油壺(第109図-1)、碗蓋(第109図-2)である。軟質磁器製カップ(第109図-3)は、135号遺構(近代土坑)との遺構間接合個体であるが、後世の混入であろう。

‘かわらけ’は622点(2,224g)で、最小個体数は19点である。

土玉は、1点(2g)で計測不可の破損土玉である。

金属製品は、鉄釘(第109図-4)である。

＊遺構間接合

#14：磁器カップ(第109図-3)は、135号遺構(近代土坑)との遺構間接合で、接合距離は2mである。

【溝】

66号遺構 [E-6, F-6・7] (2区)

・遺構(第62図)

1号遺構(御殿堀)内の北東部に位置する。(600cm)×20cm×5cmで北東と南西の両端部は削平により欠損する。

・遺物

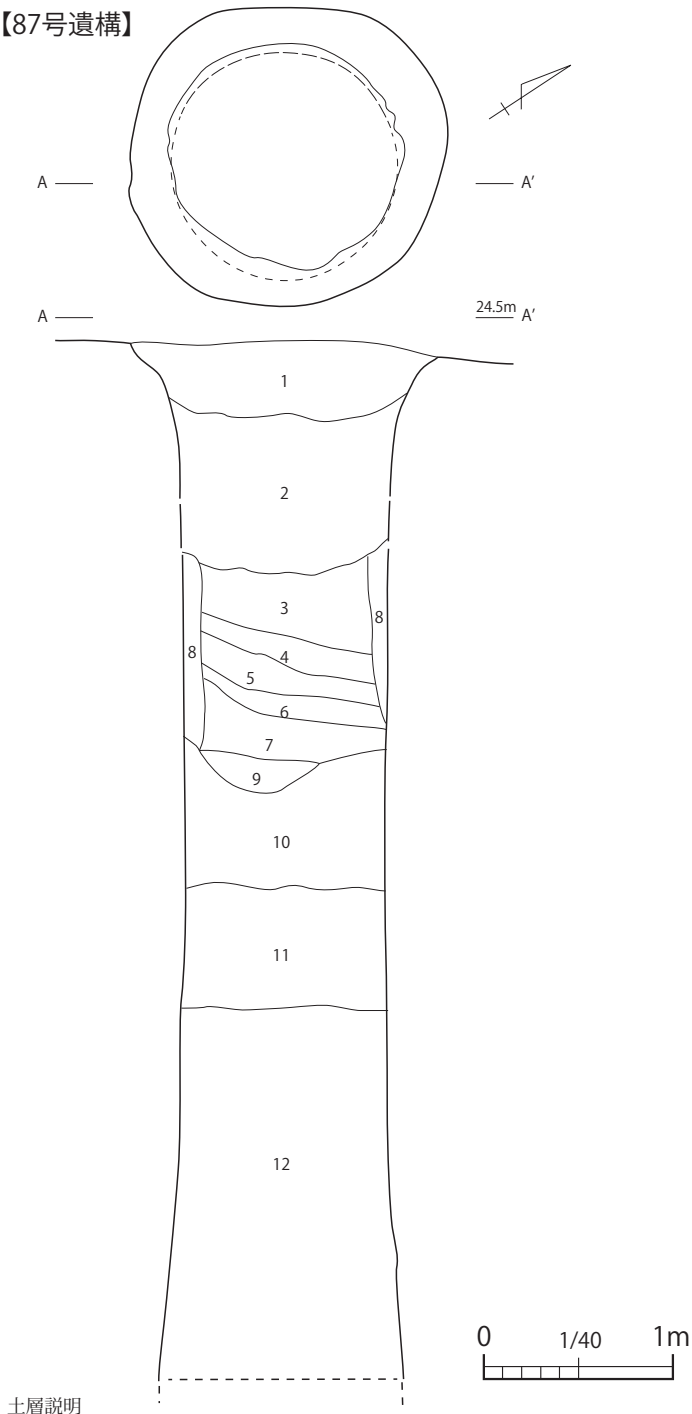
出土資料は、磁器の植木鉢(2点)、陶器の瓶(2点)、土器の甕(1点)である。‘かわらけ’は、12点(48g)である。

74号遺構 [G-4・5] (2区)

・遺構(第62図)

(174cm)×52cm×7cmで、南東部を方形の68号遺構(近代土坑)によって切られる。98号遺構(縄

【87号遺構】

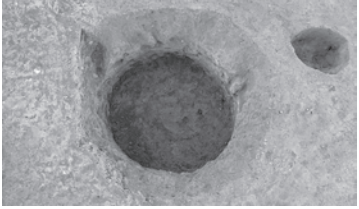


土層説明

87号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm橙色スコリア50%・小礫含む。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径1mm黄褐色ローム粒3%。
	3	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径10mm小礫含む。かわらけ片・土玉を大量に含む。
	4	極暗褐色	粘性あり。締まりやや強。径10-50mmロームブロック、径1mm炭化物片含む。
	5	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径1mm橙色スコリア含む。
	6	極暗褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径3cmロームブロック10%。
	7	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径10mm小礫含む。
	8	極暗褐色	粘性あり。締まり欠く。径10mm小礫含む。井戸枠の埋土。
	9	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。かわらけ片・土玉が凝集する。
	10	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径2-3cm小礫、炭化物片含む。
	11	黒褐色	粘性やや強。締まりあり。二枚貝片凝集ブロックあり、陶磁器片含む。
	12	黒褐色	粘性強。締まりあり。径1-2cm小礫、炭化物片含む。



87号遺構断面(北西より)



87号遺構(南東より)



87号遺構断割り(南東より)

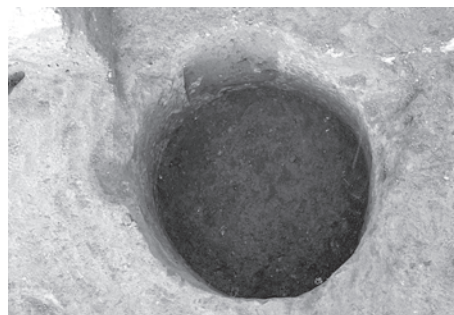
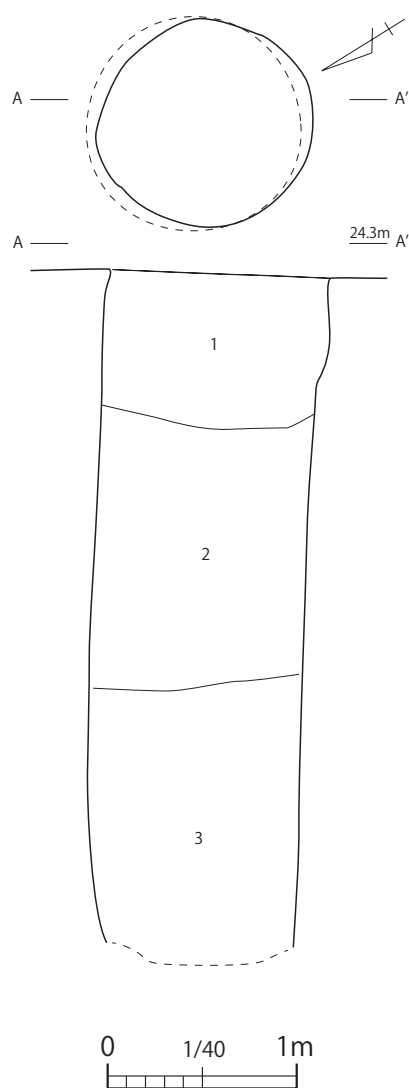
第 60 図 近世 2 面の井戸（1：1/40）

文建物跡)の南西部に位置する。

・遺物

出土資料は、磁器の碗(1点)、陶器の皿(1点)・瓶(1点)である。‘かわらけ’は、12点(51g)である。

【113号遺構】



113号遺構(南西より)



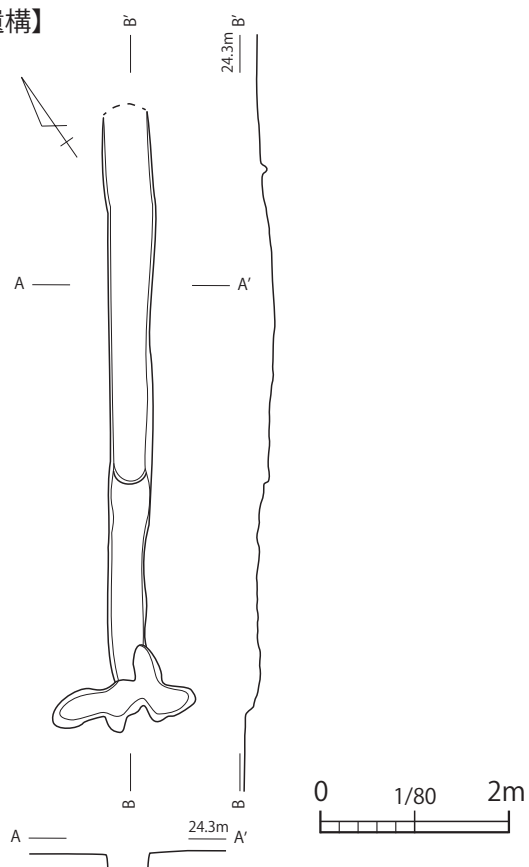
113号遺構断割り(北西より)

土層説明

113号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-3mmローム粒・小礫・炭化物片含む。
	2	暗褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径1-10mm白色粘土ブロック5%含む。
	3	極暗褐色	粘性やや強。締まりあり。径3-5mmロームブロック含む。

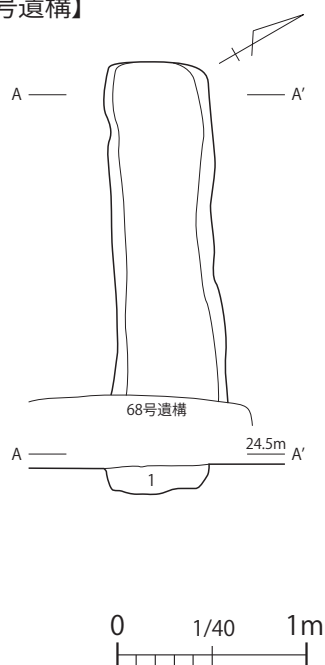
第 61 図 近世 2 面の井戸 (2:1/40)

【66号遺構】

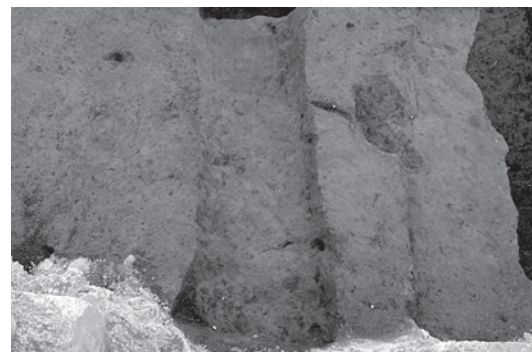


66号遺構 (北東より)

【74号遺構】



74号遺構断面 (南東より)



74号遺構 (北西より)

土層説明

74号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。かわらけ片・白色粘土ブロック含む。
-----	---	-----	--

第 62 図 近世 2 面の溝 (1/40・1/80)

【畝間溝】

32号遺構 [D-1・2, E-2] (1区)

・遺構 (第63図)

調査区西側に位置する。(194cm) × 24cm × 3cm ほどの不整形な溝状を呈し、南西部は調査区外となる。

33号遺構 [D-2] (1区)

・遺構 (第63図)

調査区西側に位置する。(190cm) × 55cm × 7cm ほどの不整形な溝状を呈し、南西部は調査区外となる。

34号遺構 [D-2・3] (1区)

・遺構 (第63図)

調査区西側に位置する。(342cm) × 84cm × 7cm ほどの不整形な溝状を呈し、南西部は調査区外となる。

・遺物 (第109図)

金属製品は、銭貨が新寛永2枚 (第109図-6・7) である。

35号遺構 [D-2・3] (1区)

・遺構 (第63図)

調査区西側に位置する。(331cm) × 69cm × 6cm ほどの不整形な溝状を呈し、南西部は調査区外となる。

36号遺構 [C-2, D-2・3] (1区)

・遺構 (第63図)

調査区西側に位置する。(328cm) × 32cm × 4cm ほどの不整形な溝状を呈し、南西部は調査区外となる。

37号遺構 [D-2] (1区)

・遺構 (第63図)

調査区西側に位置する。(110cm) × 58cm × 4cm ほどの不整形な溝状を呈し、西側は21号遺構(近世2期土坑)に切られる。

39号遺構 [D-3] (1区)

・遺構 (第63図)

調査区南西部に位置する。北西方向に位置する34号～36号遺構(近世2土坑)と並置し、一連の畝跡と判断した。

【地下坑】

13号遺構 [C-4・5, D-4・5] (1区)

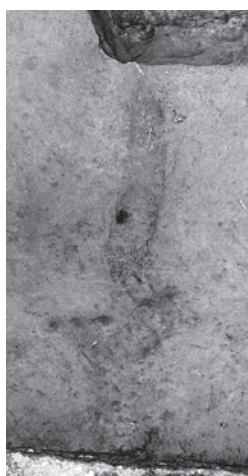
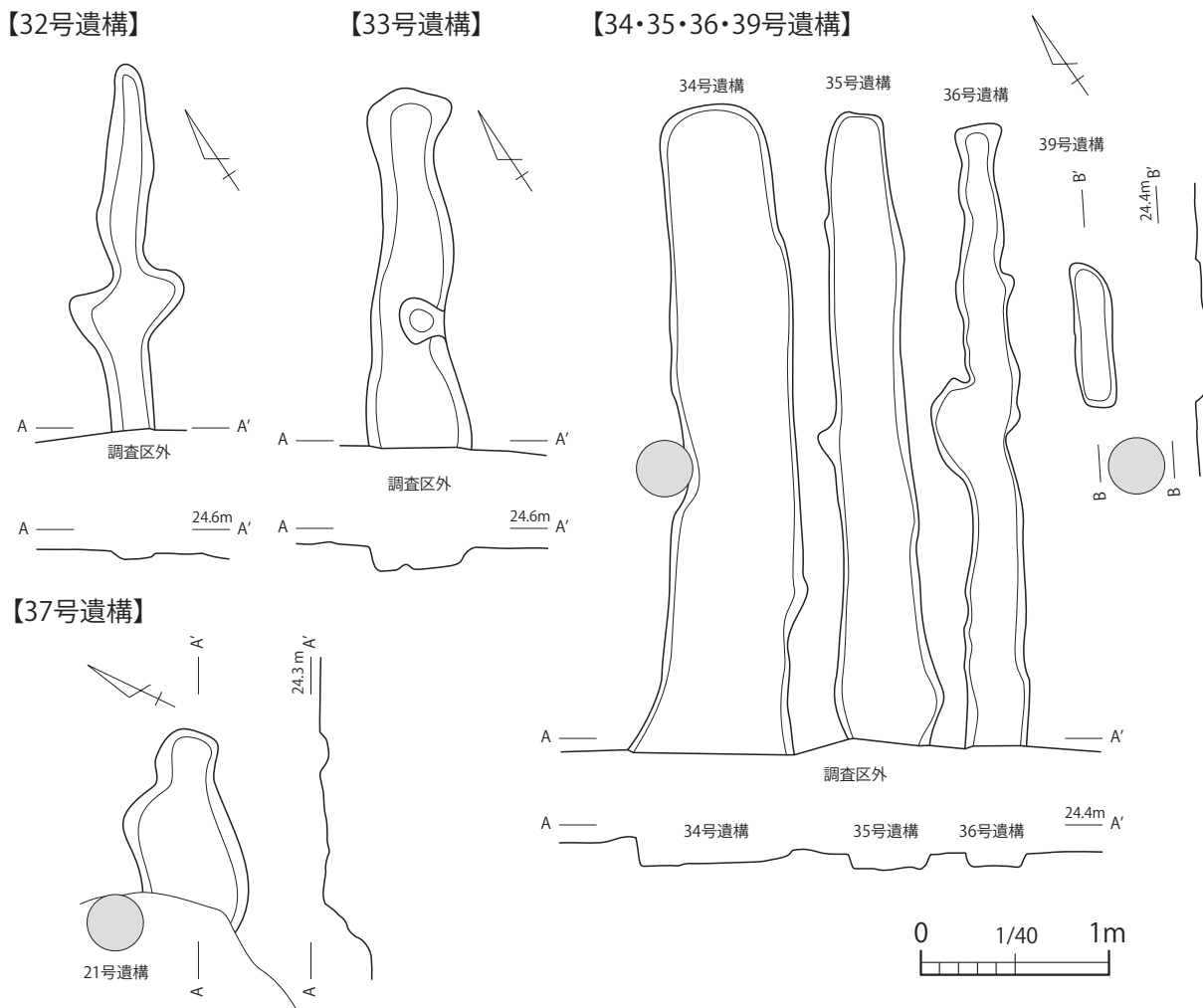
・遺構 (第64図)

1号遺構(御殿堀)内、北西方向に18号遺構(近世1板石群)、南方向に12号遺構(近世2土坑)が位置する。上部は230cm × 290cmの楕円形、下部は200cm × 140cmの長方形を呈し、深さは400cmほどで、1号遺構(御殿堀)の底面を貫いて更に続いている。1号遺構(御殿堀)の底面か

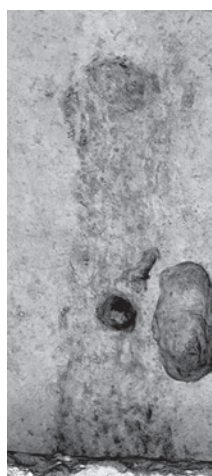
ら 1m ほど下方に空隙があり、そこから南西方向に延びるトンネル状の空間を確認したが、安全上の配慮からこれ以上の掘削を断念した。

・遺物（第 109 図）

出土資料は、磁器の碗（26 点）・皿（5 点）・瓶（1 点）・蓋物（1 点）・不明（1 点）、陶器の碗（27



32号遺構 (南東より)



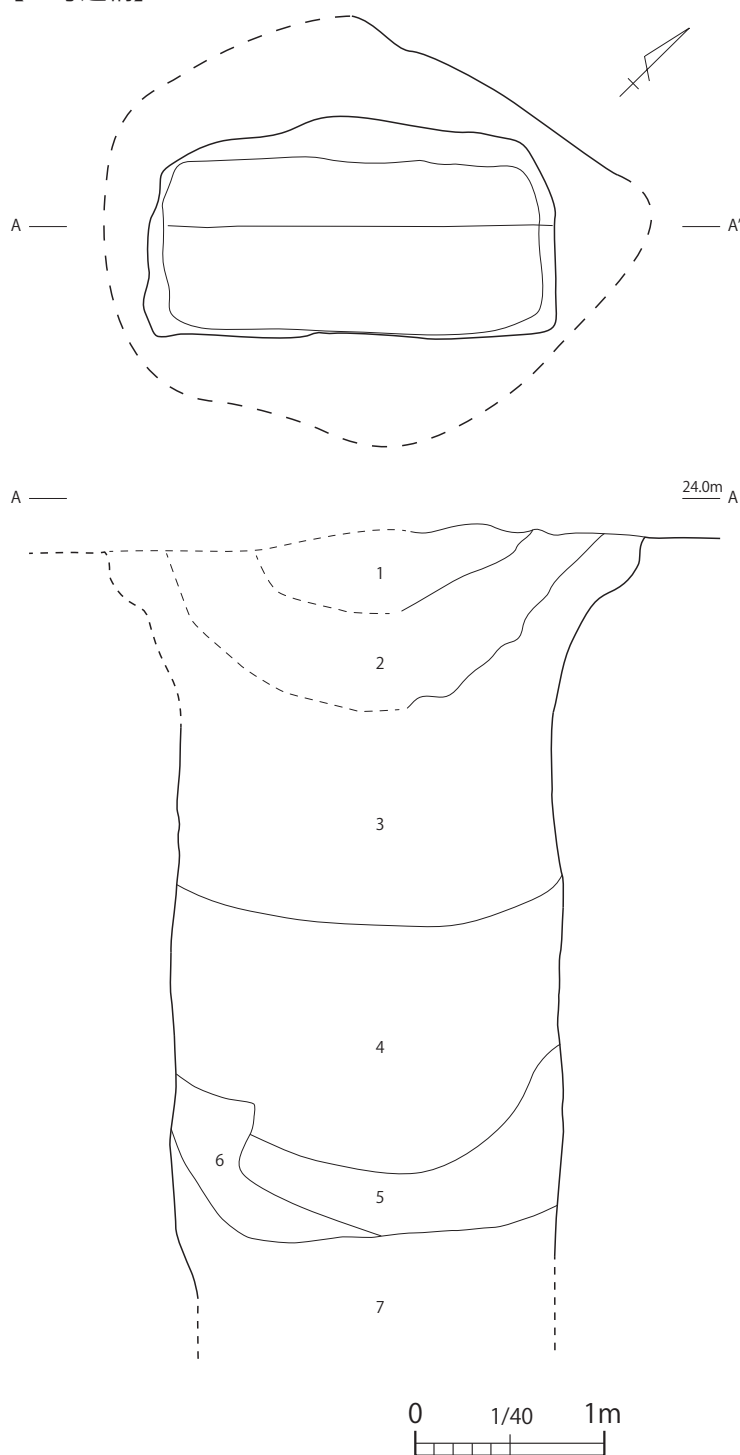
33号遺構 (南東より)



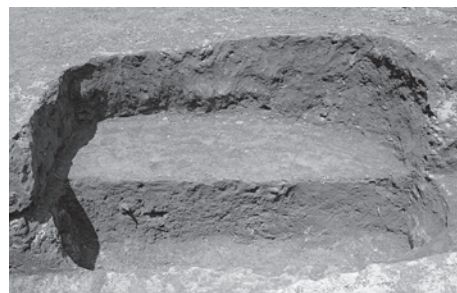
34・35・36・37・39号遺構 (南東より)

第 63 図 近世 2 面の畝間溝 (1/40)

【13号遺構】



13号遺構断面(南東より)



13号遺構断面(南東より)



13号遺構断面(北西より)



13号遺構(南東より)

土層説明

13号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。かわらけ片若干含む。
	2	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。かわらけ凝集。1層とほぼ同。
	3	褐色	粘性強。締まりあり。包含物なし。
	4	黒褐色	粘性やや欠く。締まり欠く。径5-10mmロームブロック5%。
	5	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-3cmロームブロック3%。
	6	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径2mm炭化物片・径1-5mmローム粒5%。
	7	褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径1-5mmローム粒5%。一部で空隙あり。

第 64 図 近世 2 面の地下坑 (1 : 1/40)

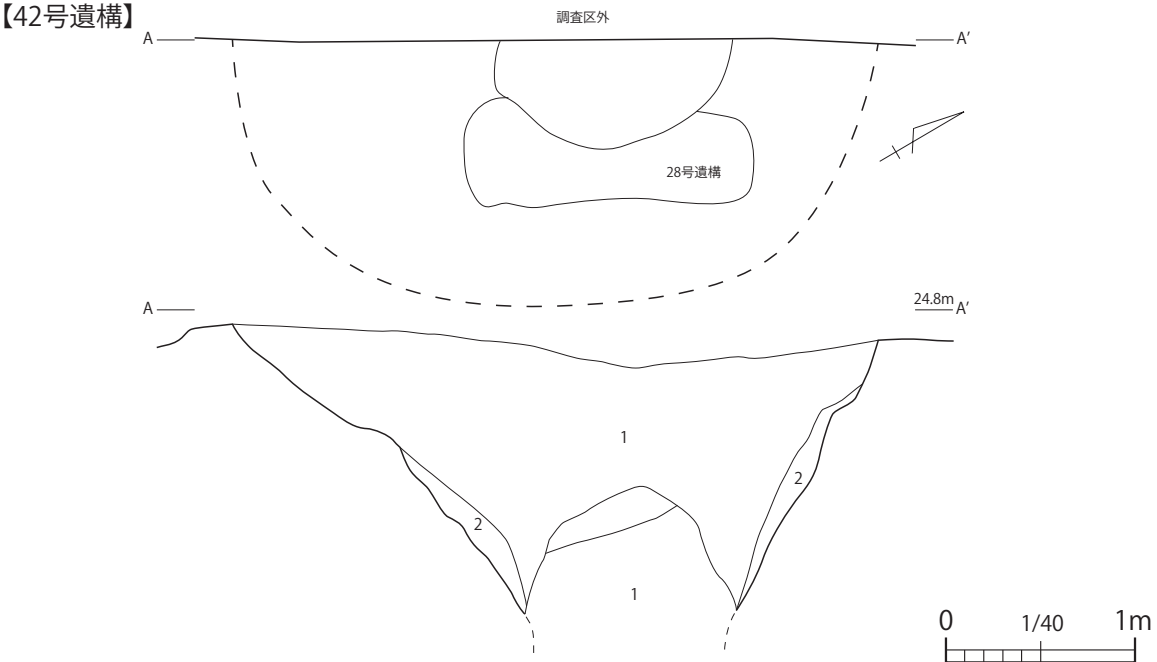
点)・皿(5点)・壺(1点)・甕(8点)・瓶(10点)・播鉢(4点)・灯明皿(2点)、土器の火鉢(9点)・焙烙(5点)・風口(1点)・瓦灯皿(1点)・風炉(1点)・不明(9点)である。

土器は、瓦灯皿(第109-8)である。

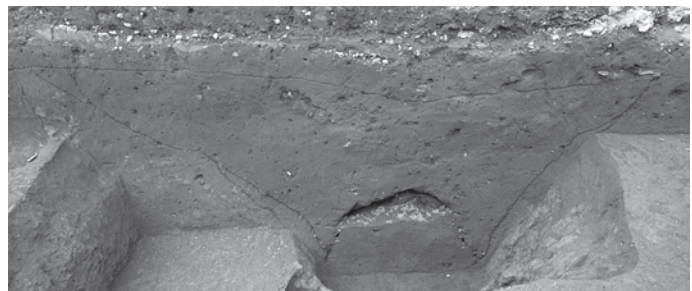
‘かわらけ’は746点(2,107g)で、最小個体数は32点である。

金属製品は、銭貨が4枚、うち新寛永は3枚(第109図-9:「元」、10:「文銭」、11)である。鉄釘(第109図-12)が出土している。

【42号遺構】



42号遺構検出状況(北西より)



42号遺構断面(南東より)

土層説明

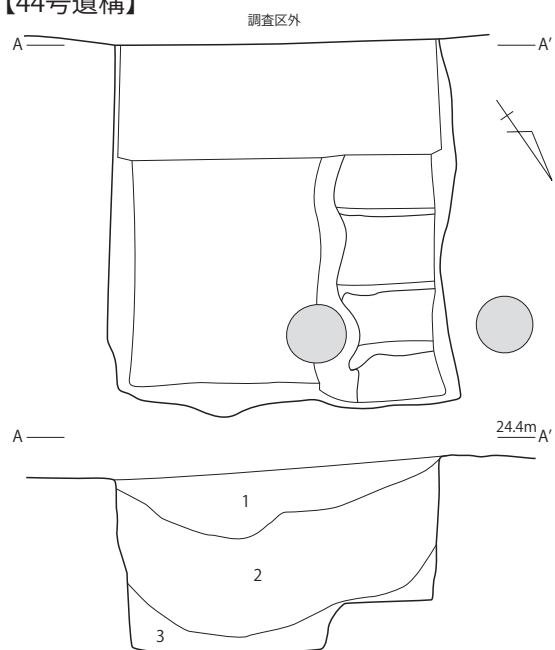
42号	1	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径1mmローム粒3%含む。
	2	暗褐色	粘性やや強。縮まりあり。ソフトローム土10%含む。

土層説明

44号	1	黒褐色	粘性やや欠く。縮まり欠く。径1-3mmローム粒・小礫・炭化物片含む。
	2	暗褐色	粘性あり。縮まりやや欠く。径3-10mmロームブロック含む。
	3	極暗褐色	粘性やや強。縮まりあり。径3-5mmロームブロックわずかに含む。
216号	1	極暗褐色	粘性あり。縮まりあり。径3mmローム粒3% 陶磁器片・瓦片・小礫・炭化物片含む。
	2	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径ローム粒3%。かわらけ片大量に含む。上面に黄褐色砂質ブロックおよび灰白色粘土ブロック含む。
	3	黒褐色	粘性あり。縮まりやや欠く。径3mmローム粒10%。
	4	黒褐色	粘性あり。縮まりやや欠く。径3-5mmロームブロック30%。

第 65 図 近世 2 面の地下坑 (2:1/40)・近世 2 面の地下室 (1)

【44号遺構】

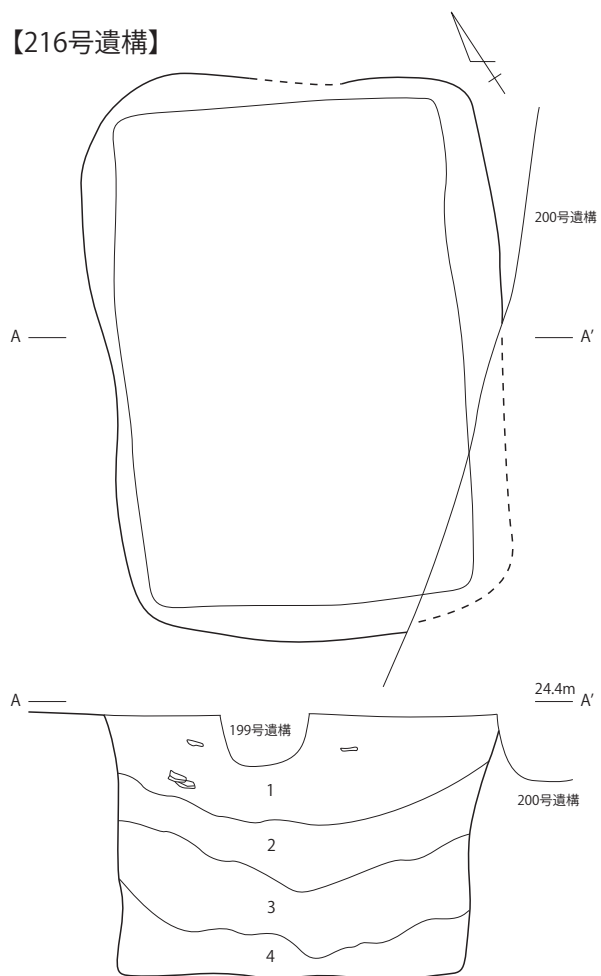


44号遺構断面(北東より)



44号遺構(北東より)

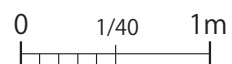
【216号遺構】



216号遺構断面(南西より)



216号遺構(北西より)



第 66 図 近世 2 面の地下室 (2 : 1/40)

42号遺構 [E・F-2] (1区)

・遺構 (第65図)

調査区北西縁、19号遺構(近世1上水路)と51号遺構(近世1上水路)の間に位置する。開口部は3m余りのロート状を呈する。調査区境に位置したため全体形状を確認することができなかったが、覆土が沈下して一部空隙が生じていたため、地下坑の可能性が高いと判断した。木製アンカーを伴う28号遺構(近代土坑)に切られる。

・遺物

出土資料は、磁器の碗(5点)・鉢(1点)、陶器の碗(1点)・甕(1点)・瓶(3点)である。

‘かわらけ’は、1点(2g)である。

【地下室】

44号遺構 [C・D-3] (1区)

・遺構 (第66図)

調査区南西縁、1号以降(御殿堀)北西外縁直上に位置し、1号遺構(御殿堀)を切る。(192cm)×182cm×97cmの方形を呈するが、南西部分は調査区外に続く。北東から南西に向けて、北西辺に沿って4段の階段が確認された。

・遺物 (第109図)

出土資料は、磁器の碗(6点)、陶器の碗(5点)・皿(8点)・鉢(1点)・甕(3点)・瓶(1点)・播鉢(1点)・不明(2点)、土器の不明(1点)である。

陶器は、碗(第109図-13)、肥前・内野山産の皿(第109図-14)である。

‘かわらけ’は、3点(19g)である。

金属製品は、煙管の吸口(第109図-15)が1点出土した。

216号遺構 [I・J-4・5] (3-3区)

・遺構 (第66図)

調査区北部、214号遺構(近世1上水路)を切り、199号遺構・200号遺構(近代排水施設)に切られる。199号遺構-a(近代煉瓦枡)と重複し、214号遺構(近世2上水路)を切る。300cm×216cm×137cmの長方形を呈する。

・遺物 (第110図)

出土資料は、磁器の碗(127点)・皿(20点)・鉢(6点)・瓶(20点)・小杯(3点)・紅猪口(2点)・仏飯器(1点)・香炉(1点)・水滴(2点)・ミニチュア(1点)・蓋物(2点)・花瓶(7点)・段重(1点)・不明(1点)、陶器の碗(108点)・皿(16点)・鉢(11点)・蓋(3点)・壺(2点)・甕(47点)・瓶(142点)・土鍋(11点)・香炉(4点)・播鉢(32点)・土瓶(3点)・蓋物(1点)・花瓶(1点)・不明(3点)、土器の鉢(3点)・火鉢(31点)・焙烙(27点)・火消壺蓋(10点)・焼塩壺(6点)・焼塩壺蓋(3点)・土製品(人形:11点・ミニチュア:2点)・灯明皿(3点)・脚付灯明受皿(1点)・秉燭(1点)・不明(32点)である。

磁器は、碗(第110図-1～4、18)、瓶(第110図-5)、掛け花瓶(第110図-6)である。

陶器は、碗(第110図-7、8)、半胴甕(第110図-9)、土鍋(第110図-10)、土瓶蓋(第110図-11)、碗蓋(第110図-14)である。

土器は、焼塩壺（第 110 図 -12）、秉燭（第 110 図 -15）、脚付灯明受皿（第 110 図 -13）である。磁器の銘資料は、碗（第 110 図 -16：広東碗 底部角杵、17：角杵渦福）である。

‘かわらけ’墨書（第 110 図 -19・20：いずれも判読不能）である。‘かわらけ’は 4,081 点（10,113g）で、最小個体数は 268 点である。

金属製品は、煙管雁首（第 110 図 -21）である。そのほか「針金」（第 110 図 -22・23）が 2 点出土した。鉄釘類（第 110 図 -26）が複数出土している。

ガラス製品は、両端部が欠損した筭（第 110 図 -24・25）である。

・自然遺物

貝類は、サザエが 7 点出土した。

【土坑】

2 号遺構 ‘かわらけ’・土玉遺構 [B-4・5, C-4・5]（1 区）

・遺構（第 67 ～ 70 図）

検出位置は、調査区の南端部で、北側に 12 号遺構が隣接するが切り合い関係は認められない。形状は北西－南東を長軸として約 4m、北東－南西を短軸として訳 3m が確認されたが、南方向の未調査区にどれほど残存しているのかについては予測できない。深さは、掘り込み面から約 2.5m、現地表面から約 3.3m を計る。北西側で確認された壁面は、ほぼ垂直を呈する。

以下では、確認から終了までの状況を記す。

6 月 16 日に 1 区の 1 層を機械による除去作業を開始し、19 日にコンクリート基礎の撤去作業を行ない、20 日から調査区南端部から遺構の確認作業を開始した。21 日には [B-4] グリッド北東部近辺から ‘かわらけ’片が集中して出土し始めた（写真 -1）。一週間掘り進めたが、‘かわらけ’と土玉の出土はとどまることなくより広く、より深く続いていた。7 月には、遺物（‘かわらけ’と土玉など）を選別する作業を断念して、完形ないしはほぼ完形の ‘かわらけ’のみを選別することにした。残りの小破片は、排土と共にすべて土のう袋に収納して後日回収した。ある部分では ‘かわらけ’と土玉が凝集しており、明らかに土壌よりも占有率が高い状況が看取された（写真 -2）。貝塚で言う「混土貝層」ならぬ「混土 ‘かわらけ’・土玉層」である。ある場合には、‘かわらけ’の上にそのまま土玉が盛られた状態で出土した（写真 -3・8）。土玉の多くは、未焼成で ‘かわらけ’上で潰れて出土したものも多かった（写真 -4・7）。7 月上旬には最初に ‘かわらけ’の出土を確認した上面から厚さ 70cm ほどの包含層が途切れて土層となったので、底が出たかと考えていたが、実はその更に下方から遺物包含層が続いていることが判明した（写真 -5）。当初は、‘かわらけ’・土玉の出土した場所が御殿堀の埋土層のために、堀を埋める際に ‘かわらけ’・土玉を集中して廃棄した埋土層の可能性も考えたが、この時点で明確に埋土層を切り込んでいることが確認されたので、‘かわらけ’・土玉を集中して廃棄した遺構として扱った。遺物を含む排出土の回収を土のう袋からフレコンバッグに変更した。一部では地表面からの掘削深度が 1m50cm 近くに及んでいたので、下層の掘削については上層の断面から幅 1m の平段（「犬走り」）を設けて掘削することとした（写真 -9・10）。7 月 11 日には、およそ 30cm の間層を挟んで下層の ‘かわらけ’層がおよそ 50cm の堆積を示すことが判明した。最終的には、掘り込み自体はさらに下方に及んでおり、埋土層の上面からは 2m50cm、地表面からは 3m20cm となった。2 号遺構の北西部では間層を介在させていた ‘かわらけ’・土玉層は、南東部で

は同一となり‘かわらけ’・土玉層の厚さは1m50cmほどである。調査区南東壁には、2021年（令和三）の試掘坑4の断面が認められて、試掘時に「同堆積土には、多量のかわらけが混入している」（東京航業研究所2021：3頁）と記載されており、‘かわらけ’・土玉層の上端部をかすめている状況が確認できた（写真-9）。

8月7日には2ヵ月弱に及んだ調査を終えて、2号遺構全体の写真撮影を行なった（写真-6）。9月20日には、2号遺構の北西部の南西壁面において上層部分および下層部分の2ヶ所、南東部の南東壁面において1カ所の計3カ所で1m×1mの範囲でエポキシ樹脂を用いた剥ぎ取り作業を行なった。9月25日には、2号遺構における‘かわらけ’と土玉の数量的な容量を把握するために南端部で50cm×50cmのブロック・サンプルを採取した（写真-11）。

土のう袋およびフレコンバッグに仮に収納した大量の回収遺物については、平らに均して乾燥したうえ（写真-12）、フルイによる回収作業を行なった。回収した‘かわらけ’片については、網袋に入れて浸水させたうえで、高圧洗浄機を用いて付着した土壌の洗浄作業を行なった。こうした作業は、8月から継続的に行なっていたが、最終的には現場での発掘調査が終了した後まで続き、終了したのは2024（令和四）年4月末日となった。2号遺構の‘かわらけ’および土玉の出土量は、テンバコで429箱となった。

・遺物（第111～120図）

出土資料は、磁器の碗（183点）・皿（31点）・鉢（2点）・蓋（5点）・瓶（14点）・小杯（1点）・仏飯器（1点）・香炉（3点）・植木鉢（1点）・急須（1点）・蓋物（3点）・不明（4点）、陶器の碗（342点）・皿（44点）・鉢（7点）・蓋（4点）・壺（5点）・甕（37点）・瓶（123点）・土鍋（8点）・香炉（3点）・播鉢（35点）・植木鉢（1点）・土瓶（18点）・尿瓶（1点）・灯明受皿（2点）・水鉢（2点）・不明（20点）、土器の皿（16点）・鉢（50点）・植木鉢（7点）・火鉢（25点）・焙烙（114点）・火消壺蓋（8点）・焼塩壺（5点）・焼塩壺蓋（2点）・灯明受皿（3点）・土製品（人形：45点・箱庭：4点・ミニチュア：3点）・五徳（2点）・風口（1点）・灯明皿（3点）・瓦灯皿（9点）・瓦灯笠（2点）・台付灯明受皿（4点）・秉燭（2点）・転用砥石（1点）・不明（272点）である。

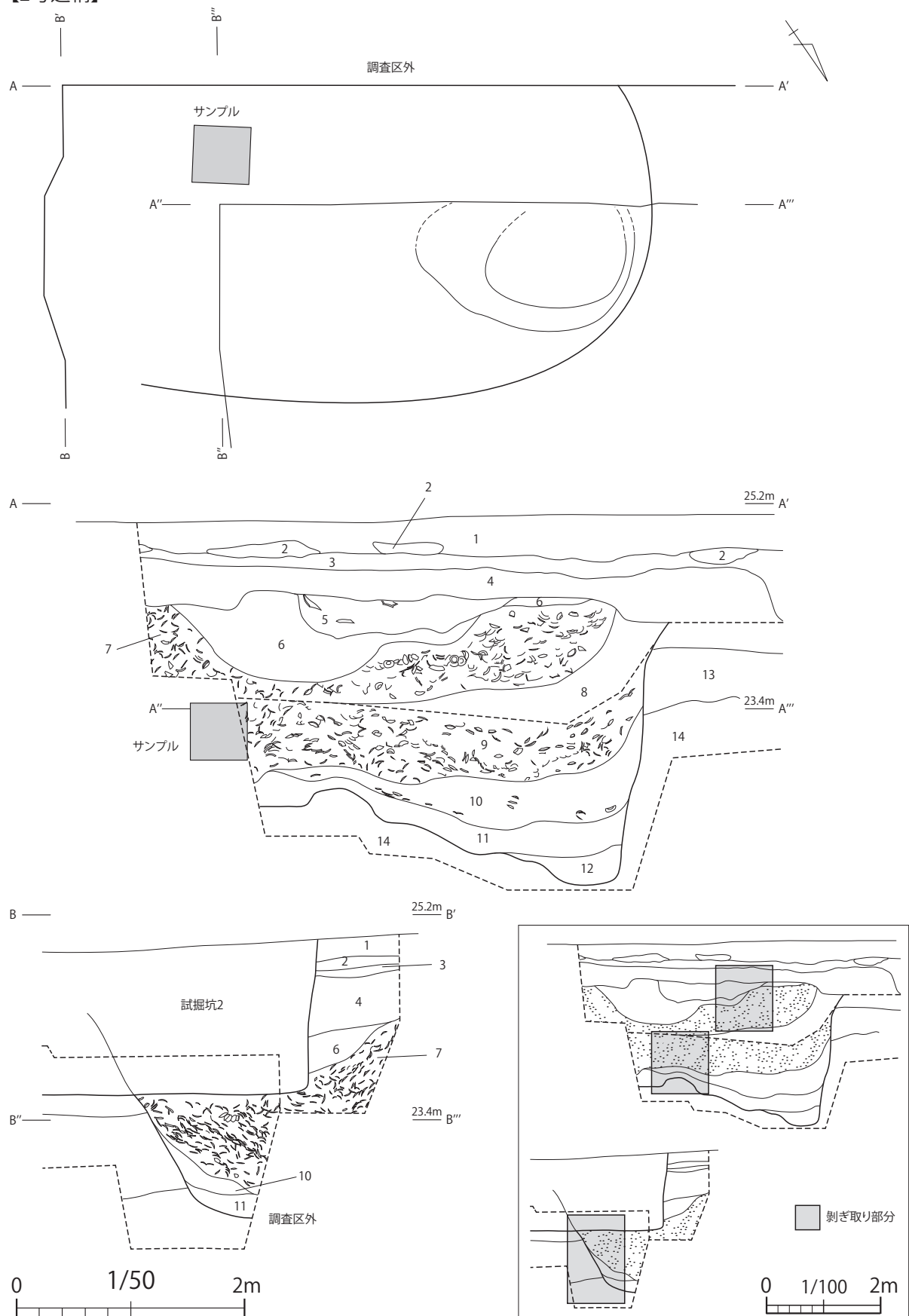
磁器は、碗（第111図-1～4）、仏飯器（第111図-5）、蓋物蓋（第111図-6）、転用品おはじき（第111図-7）である。中国産磁器として、漳州窯産の染付皿小破片、外面に彩色した色絵碗小破片が出土している。

陶器は、碗（第111図-8、9、10：遺構間接合、11）、皿（第111図-12）、灯明受皿（第111図-13）である。

土器は、膨大な量の‘かわらけ’が出土したが、サイズの異なる主な資料を提示した。小サイズは口径70～90mm（第113図-1：75mm、2・3：77mm、4：80mm、5：79mm、6：85mm）、中サイズは口径90～100mm（第113図-10：95mm、11：94mm）、大サイズは口径110～140mm（第113図-12・13：113mm、14：117mm、15：129mm、16：132mm、17：136mm）、特大サイズは口径190mm以上（第113図-18：197mm、19：198mm）となる。

他の‘かわらけ’と胎土および整形が異なる‘かわらけ’が2点出土している（第112図-5・6）。第112図-5は口径79mm・底径52mm、第112図-6は口径85mm・底径58mmで大きさ自体は他の‘かわらけ’と変わらないが、厚さが共に5mmほどで肉厚である点、胎土が肌色から白色を呈

【2号遺構】



第 67 図 近世 2 面の土坑（1：1/50・1/100）

して他の‘かわらけ’と明らかに異なる。北関東地方の中世期にみられる「白い坏形カワラケ」との関連を伺わせる（村山 2024）。

吉祥紋型押‘かわらけ’（第 112 図 -20）は、直径 5.9cm、厚さ 4mm の底部破片内面に双翼の鶴の下に蓑亀、右に松の枝葉、左に竹を配した型押しで吉祥紋を描く。いわゆる「鶴亀松竹型打文土器」である。裏面(底面)は、均整のとれた渦巻紋を描く。胎土は、他の‘かわらけ’と同様に褐色を呈する。光に反射する細かいガラス状の白色粉を微量に交える。都区内からは、新宿区四谷三丁目遺跡、港区

土層説明

2号	1	黒褐色	粘性欠く。縮まりあり。モルタル片など近現代遺物含む。
	2	極暗褐色	粘性やや欠く。縮まりあり。
	3	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。
	4	黒褐色	粘性やや欠く。縮まりやや欠く。径1cm。ロームブロック・白色粘土ブロック含む。
	5	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径1mm。黄褐色ローム粒3%。
	6	褐色	粘性あり。縮まりあり。径1-8cm。ロームブロック含む。ローム土再堆積層。
	7	黒褐色	粘性あり。縮まりやや欠く。かわらけ・土玉主体層-1。土壌よりもかわらけ・土玉の量が増える。かわらけが複数重なる場合が多い、かわらけとかわらけの間の土玉は潰れている。
	8	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。かわらけ・土玉主体層-1と2の間層。若干のかわらけ片を含む。
	9	黒褐色	粘性あり。縮まりやや欠く。かわらけ・土玉主体層-2。かわらけ・土玉主体層-1とほぼ同じ、東側では間層である8層が消失し、7層と9層が一体化している。
	10	極暗褐色	粘性あり 縮まりやや欠く。径1-3cm。ロームブロック含む。下底面にかわらけ・土玉が若干堆積する。
	11	極暗褐色	粘性あり 縮まりあり。径2-10cm。ロームブロック含む。若干のかわらけ片を含む。
	12	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。底部に若干のかわらけ片を若干含む。
	13	暗褐色	粘性あり。縮まりあり。径1-5cm。ロームブロック含む。御殿堀埋土。
	14	褐色	粘性あり。縮まりやや欠く。径1-8cm。ロームブロック含む。御殿堀埋土。



写真-1



写真-2



写真-3



写真-4

第 68 図 近世 2 面の土坑 (2)



写真-5



写真-6

第 69 図 近世 2 面の土坑 (3)

伊皿子貝塚遺跡の出土例が知られている（中野 2000）。佐賀県佐賀市における吉祥型押文の出土事例では、18 世紀第 4 四半世紀から幕末頃の所産が推定されている（三代・小出 2011）。胞衣埋納遺構との関連についても推定されている（北区教育委員会 2003）。

そのほか外面に線刻による文字らしきものが刻まれた破片（第 112 図 -21）、見込みに放射状の線刻がなされた破片（第 112 図 -21）がある。

‘かわらけ’墨書は、第 113 図 -1：「脈」カ、第 113 図 -2：「中」カ、第 113 図 -3：「□月十一日／□な花」、第 113 図 -5：見込み「こ■[]」裏「こ■■■」である。口径 200mm の大形‘かわらけ’破片（第 113 図 -4）には、外面に金箔が残る。‘かわらけ’破片（第 114 図 -14）にも、金箔が残る。

鉢形容器（第 113 図 -6）は、口縁部の三か所に穿孔を有する（209 頁：写真 -2）。焙烙（第 113



写真-7



写真-8



写真-9



写真-10



写真-11



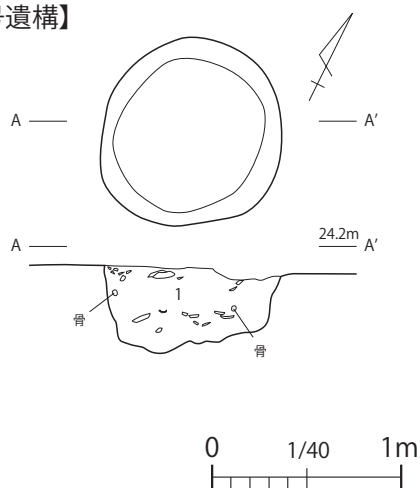
写真-12

第 70 図 近世 2 面の土坑（4）

図-7) の内面底部に「○に一」の刻印を有する。

ほかに陶器植木鉢（第 114 図 -1:刻印「因久山」）、鉢形容器（第 114 図 -2・3）,‘かわらけ’破片（第 114 図 -4:外面に線刻）、焼塩壺破片（第 114 図 -5:角枠「□湊伊織」、6:角枠「泉州□□」）、乗燭（第

【3号遺構】



土層説明

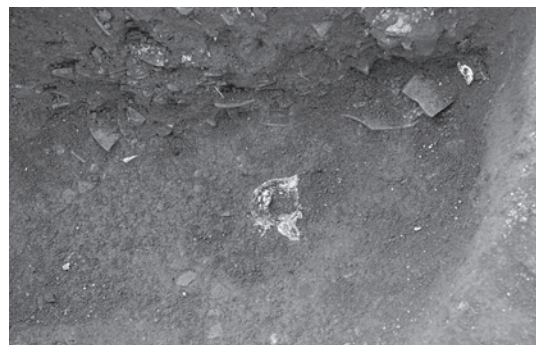
3号	1	極暗褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径2-4mm炭化物片3%、かわらけ片大量。動物骨含む。
----	---	------	--



3号遺構断面(南東より)



3号遺構遺物検出状況(東より)



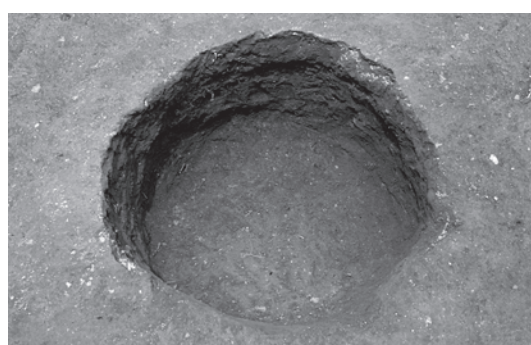
3号遺構遺物出土状態(南東より)



3号遺構遺物検出状況(南東より)



3号遺構遺物出土状態(東より)



3号遺構(南東より)

第 71 図 近世 2 面の土坑 (5 : 1/40)

114 図-7・8)、焙烙破片(第 114 図-9:刻印「○に一」)、磁器皿破片(第 114 図-10:銘「宣明」、11:銘角枠「福」)、陶器曆茶碗(第 114 図-13)、煤が付着した‘かわらけ’片(第 114 図-14)、穴あき‘かわらけ’破片(第 114 図-15)がある。磁器酒杯片(第 114 図-12:内面「記念」)は、後世の混入であろう。

‘かわらけ’墨書は、第 114 図-16・17:「中」カ、第 114 図-18:「春■■■■見」、第 114 図-19:「おんみん」、第 114 図-20:判読不能、第 114 図-21:「中」、第 114 図-22～25、第 115 図-1・5・6:判読不能、第 115 図-2:「小」、3:「八」カ、4・7・14:「中」、9:「ほう」、10～13・15～17・19・23・26～28:判読不能、18:「申」カ、20:「巳」カ、21:[]可被[], 22:[]者[], 24:「うし」、25:文字なしである。ほかに焙烙の破片(第 115 図-29:「神田西[]」)である。

‘かわらけ’の総数は 537,271 点(2,381,096g)で、最小個体数は 27,990 点である。

土製品としては、膨大な数の土玉(第 116 図-1)が出土している。穿孔のある土玉(第 116 図-2)、そろばん玉形(第 116 図-3)、アーモンド形(第 116 図-4)が若干含まれている。

土玉の総数は、136,118 点(189,227g)である。大きさ(直径)が計測可能な完形ないしはほぼ完形の土玉は 54,132 点(150,599g)で、計測不可の破損土玉は 81,986 点(38,628g)である。

土製の人形は、(第 116 図-5:首人形、6:天神胴部)、動物形(第 116 図-7:犬(273 頁:写真-1)、8～10:亀、11:鯉)、建造物(第 116 図-12:塔)である。

金属製品のうち銭貨は 96 枚である。古寛永(第 117 図-1～7)は 8 枚、新寛永(第 117 図-8、9・10・15・29:鉄銭、11～14、16～28、2～16、18～30、第 119 図-1～5、7～9、11、12:「小」、21)は 80 枚、新寛永のうち「文銭」(第 118 図-1・第 119 図-17・20)が 3 枚、「元銭」(第 117 図-12・17、第 119 図-6・10・16・18)が 6 枚、新古不明の寛永通宝が 8 枚、雁首銭(第 120 図-1～3)が 3 枚、銭種不明(第 120 図-4・5・13・15:鉄、第 120 図-6～12、14、16～19:鉄)が 16 枚ある。

煙管は、3 点出土している。雁首(第 120 図-20)1 点、吸口(第 120 図-21、22)2 点である。そのほか「鎖状の銅製品」(第 120 図-23)が 1 点、鉄釘(第 120 図-24)が複数出土している。

*遺構間接合

3:吉祥紋型押‘かわらけ’(209 頁:写真-1)は、「松の部分」の 1/4 破片(右下の白色部分)が 2 号遺構から、「亀の部分」の 1/4 破片と「鶴の部分」の 1/2 破片(残りの褐色部分)が 7 号遺構から出土して接合した。2 号遺構と 7 号遺構間の接合距離は、13.5m である(334 頁:第 181 図)。

18:陶器碗(第 124 図-21)は、12 号遺構(近世 2 土坑)との遺構間接合で接合距離 1m である。

・自然遺物

貝類は、サザエ(90 点)・ヤマトシジミ(36 点)・ハマグリ(23 点)・アサリ(20 点)・マガキ(2 点)・キサゴ類(1 点)・ウミナナ類(1 点)・アカニシ(1 点)・サトウガイ(1 点)・ハイガイ(1 点)・サルボウガイ(1 点)が出土した。

魚類は、マダラ(11 点)・マダイ(6 点)・カツオ(6 点)が出土した。

3 号遺構 [D-5] (1 区)

・遺構(第 71 図)

1 号遺構(御殿堀)内、2 号遺構(近世 2 土坑)と 5～9 号遺構(近世 2 土坑)との中間に位置す

る。103cm × 97cm × 45cm の円形を呈する。‘かわらけ’片と動物骨などが含まれる。

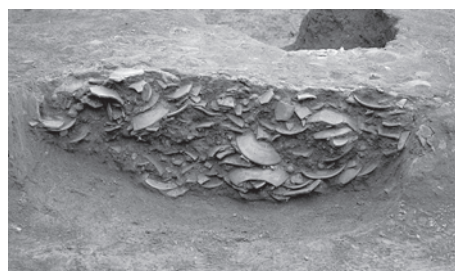
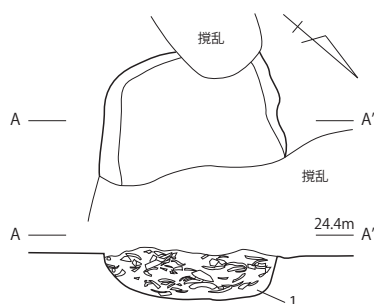
・遺物（第 121 図）

出土資料は、磁器の碗（10 点）・皿（2 点）・蓋（1 点）、陶器の碗（28 点）・皿（2 点）・鉢（2 点）・蓋（1 点）・甕（1 点）・瓶（2 点）・不明（2 点）、土器の鉢（5 点）・火鉢（1 点）・焙烙（4 点）・土製品（人形：1 点・ミニチュア 1 点）・不明（6 点）である。

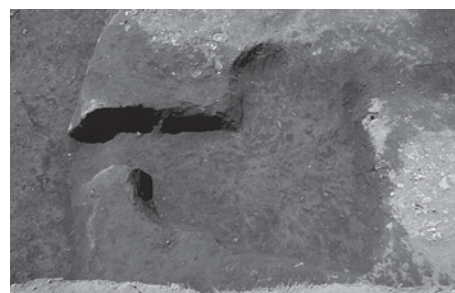
陶器は、蓋（第 121 図-7：遺構間接合# 9）である。

土器は、‘かわらけ’を 6 点示した（第 121 図-1～6）。‘かわらけ’破片（第 121 図-8）には、金箔が残る。大形の‘かわらけ’破片（第 121 図-9）には墨書と思われた痕跡が認められたが、文字とはみなされなかった。‘かわらけ’は 9,368 点（50,785g）で、最小個体数は 365 点である。

【5号遺構】

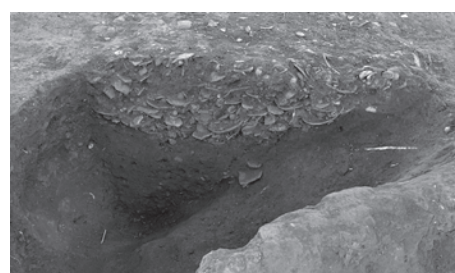
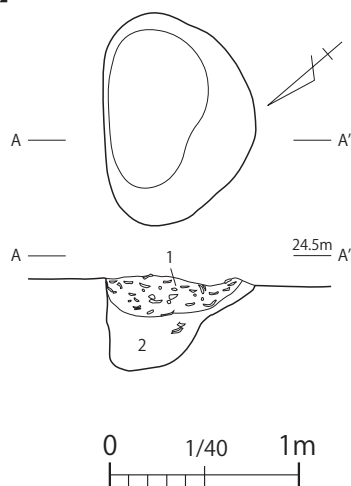


5号遺構断面(北東より)



5号遺構(南東より)

【6号遺構】



6号遺構断面(南西より)



6号遺構(西より)

土層説明

5号	1	極暗褐色	粘性やや欠く。締まりやや欠く。かわらけ片・土玉凝集。
6号	1	暗褐色	粘性やや欠く。締まりあり。かわらけ片・土玉凝集。
	2	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。径1cmロームブロック・若干のかわらけ片含む。

第 72 図 近世 2 面の土坑（6：1/40）

土製品は、動物形（第 121 図 -10：獅子頭部）である。土玉は、穿孔（第 121 図 -12）およびソロバン形（第 121 図 -13）が含まれる。土玉は、300 点（878g）である。大きさ（直径）が計測可能な完形・ほぼ完形の土玉は 105 点（359g）で、計測不可の破損土玉は 195 点（519g）である。

金属製品は、新寛永「元銭」（第 121 図 -11）が 1 枚、ほか銭種不明が 1 枚ある。

・自然遺物

哺乳類は、イヌの頭蓋骨・四肢骨などが 13 点が出土した（第Ⅳ章 308 頁参照）。

＊遺構間接合

9:陶器蓋（第 121 図 -7）は、3 号遺構と 6 号遺構（近世 2 土坑）との遺構間（4m）接合である。

5 号遺構 [D-6]（1 区）

・遺構（第 72 図）

1 号遺構（御殿堀）内、調査区南東縁近くに位置する。(99cm) × (62cm) × 25cm で北東部および南西部を欠損する。‘かわらけ’片および土玉が充填する。

・遺物（第 121 図）

出土資料は、陶器の皿（2 点）、土器のミニチュア（1 点）・不明（1 点）である。

磁器は、香炉片（第 121 図 -20：遺構間接合 # 13）である。

土器は、通常の‘かわらけ’（第 121 図 -15 ～ 19）と共に、乳白色の胎土を用いて見込みに「善光寺」の陽刻がなされた‘かわらけ’（第 121 図 -14）がある。穴あき‘かわらけ’破片（第 121 図 -21）がある。‘かわらけ’は 4,441 点（25,734g）で、最小個体数は 161 点である。

土玉の総数は、212 点（619g）である。大きさ（直径）が計測可能な完形・ほぼ完形の土玉は 96 点（346g）で、計測不可の破損土玉は 116 点（273g）である。

金属製品は、古寛永（第 121 図 -22）、新寛永（第 121 図 -23、24）である。煙管は、雁首（第 121 図 -25）が出土した。鉄釘（第 121 図 -26）が出土している。

合成樹脂製品は、櫛（第 121 図 -27）である。

・自然遺物

小型のヤマトシジミが、391 個体出土している。

＊遺構間接合

13:磁器香炉片（第 121 図 -18）は、8 号遺構（近世 2 土坑）との遺構間（2m）の接合である。

6 号遺構 [D-6]（1 区）

・遺構（第 72 図）

1 号遺構（御殿堀）内、5 号遺構（近世 2 土坑）の北西に位置する。112cm × 81cm × 49cm で楕円形を呈する。‘かわらけ’片は上半部に集中する。

・遺物（第 122 図）

出土資料は、磁器の碗（4 点）・蓋（1 点）、陶器の碗（1 点）・皿（2 点）・蓋（1 点）、土器の不明（4 点）である。

磁器は、猪口（第 122 図 -1：遺構間接合 # 16）である。

土器は、‘かわらけ’（第 122 図 -2 ～ 5）である。‘かわらけ’墨書（第 122 図 -6）は、判読不能である。‘かわらけ’は 10,484 点（60,580g）で、最小個体数は 395 点である。

土製品は、通常の土玉（第 122 図 -7）のほか、有孔土玉（第 122 図 -8）、ソロバン形（第 122 図 -9）、アーモンド形（第 122 図 -10）がある。土玉は、2,792 点（6,946g）である。大きさ（直径）が計測可能な完形・ほぼ完形の土玉は 666 点（1,958g）で、計測不可の破損土玉は 2,126 点（4,988g）である。

金属製品は、銭貨 2 枚のうち新寛永（第 122 図 -11）、銭種不明である。ほかに鉄釘（第 122 図 -12）がある。

*遺構間接合

9：陶器蓋（第 121 図 -7）は、6 号遺構と 3 号遺構（近世 2 土坑）との遺構間接合で、接合距離は 4m である。

16：磁器猪口（第 122 図 -1）は、6 号遺構と 9 号遺構（近世 2 土坑）との遺構間接合で、接合距離は 1m である。

7 号遺構 [D・E-6]（1 区）

・遺構（第 73 図）

1 号遺構（御殿堀）の内側で、64 号遺構（近代土坑）に北側の一部を切られる。（115cm）×（113cm）× 65cm で、南東部は調査区外に続く。調査区南東壁において剥ぎ取りによる‘かわらけ’層断面の保存作業を行なった。

・遺物（第 122 図）

出土資料は、磁器の碗（6 点）、陶器の碗（7 点）・甕（1 点）・瓶（2 点）・土瓶（1 点）・不明（1 点）、土器の焙烙（2 点）・ミニチュア（1 点）・不明（1 点）である。

また 5 号～7 号遺構の出土資料として、磁器の碗（14 点）・皿（4 点）・鉢（1 点）、瓶（3 点）、香炉（1 点）、蓋物（1 点）、陶器の碗（8 点）・皿（6 点）・鉢（1 点）・蓋（1 点）・甕（4 点）・瓶（7 点）・土鍋（2 点）・土瓶（4 点）、土器の皿（1 点）・鉢（1 点）・焙烙（3 点）・不明（8 点）である。

土器は、‘かわらけ’（第 122 図 -13～17）である。‘かわらけ’墨書は、第 122 図 -18～21、23～25 は判読不能で、22 は文字以外である。‘かわらけ’は 32,415 点（170,353g）で、最小個体数は 1,397 点である。

土製品は、土玉（第 122 図 -26）、有孔土玉（第 122 図 -27）、ソロバン形（第 122 図 -28）、アーモンド形（第 122 図 -29）がある。土玉の総数は、15,034 点（40,610g）である。大きさ（直径）が計測可能な完形・ほぼ完形の土玉は 5,006 点（16,767g）で、計測不可の破損土玉は 10,028 点（28,843g）である。

金属製品は、銭貨 6 枚で、古寛永（第 122 図 -30・31）は 2 枚、新寛永（第 122 図 -32～34）は 3 枚、銭種不明が 1 枚ある。ほかに鉄釘（第 122 図 -35）がある。

*遺構間接合

3：吉祥紋型押し‘かわらけ’（第 112 図 -20）は、「亀の部分」の 1/4 破片と「鶴の部分」の 1/2 破片が 7 号遺構、「松の部分」の 1/4 破片が 2 号遺構から出土して接合した。2 号遺構と 7 号遺構間の接合距離は、13.5m である。

8 号遺構 [E-6]（1 区）

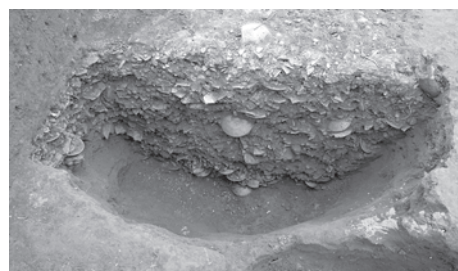
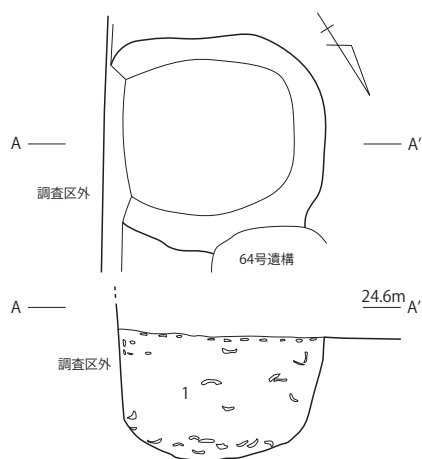
・遺構（第 73 図）

1号遺構（御殿堀）内、7号遺構（近世2土坑）の北西に位置する。120cm × 115cm × 54cm で北東部の一部を65号遺構（近世2土坑）によって欠損する。‘かわらけ’片・土玉が凝集する。

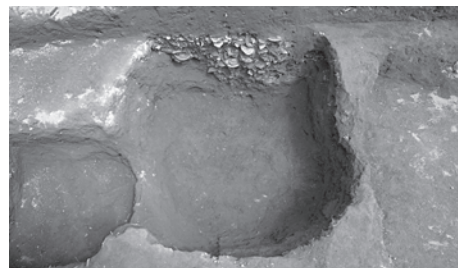
・遺物（第123図）

出土資料は、磁器の碗（10点）・皿（1点）・瓶（2点）・香炉（1点）・水滴（1点）・蓋物（1点）、陶器の碗（19点）・皿（1点）・甕（1点）・瓶（5点）・片口鉢（9点）・土瓶（1点）・不明（2点）、土器の焙烙（3点）・不明（9点）である。

【7号遺構】

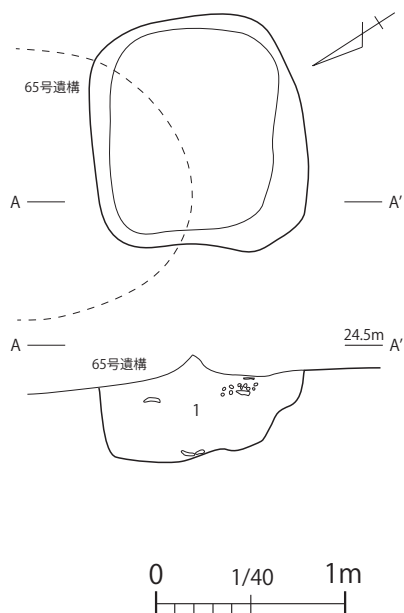


7号遺構断面(北東より)

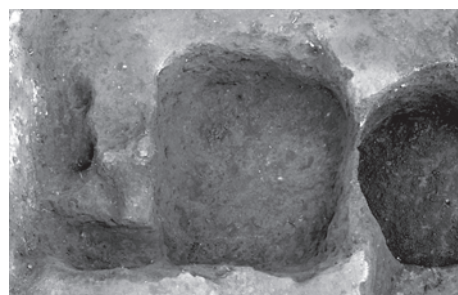


7号遺構(北西より)

【8号遺構】



8号遺構断面(北西より)



8号遺構(南西より)

土層説明

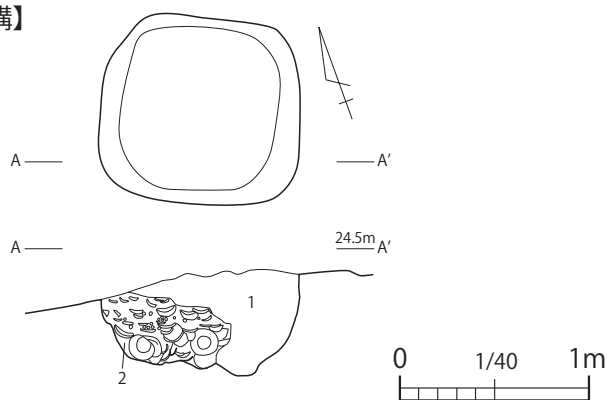
7号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりやや欠く。全体にかわらけ片・土玉が凝集。
8号	1	暗褐色	粘性やや欠く。締まりあり。かわらけ・土玉凝集層。上半部は特に土玉多。

第73図 近世2面の土坑（7：1/40）

陶器は、碗（第 123 図 -1、2）、片口（第 123 図 -3）である。

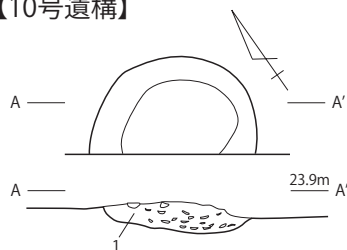
土器は、通常の‘かわらけ’（第 123 図 -4～8）である。‘かわらけ’墨書は、第 123 図 -9 の内面が「[] 為之／[] 漸行被成」、裏面が「月正月／袖崎兼太郎」である。第 123 図 -12 は、「■十六」である。

【9号遺構】

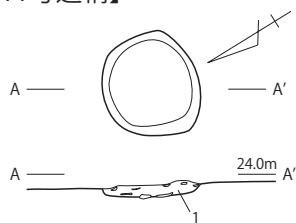


9号遺構断面(南より)

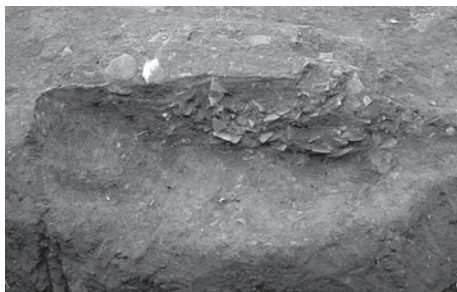
【10号遺構】



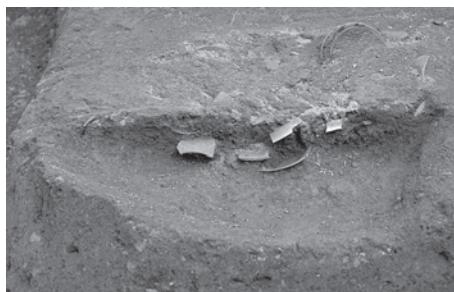
【11号遺構】



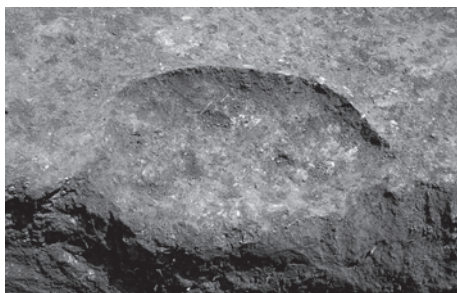
9号遺構(南西より)



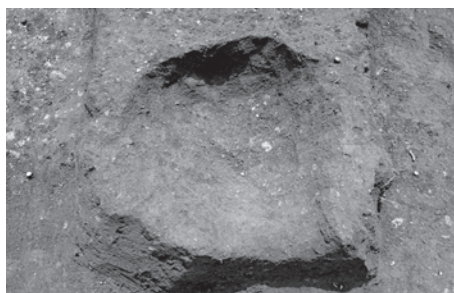
10号遺構断面(南東より)



11号遺構断面(北西より)



10号遺構(南西より)



11号遺構(北西より)

土層説明

9号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。かわらけ片若干含む。
	2	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。かわらけ凝集。1層とほぼ同。
10号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。かわらけ片凝集。
11号	1	暗褐色	粘性欠く。締まりあり。径1mmローム粒3%。かわらけ片40%。

第 74 図 近世 2 面の土坑（8：1/40）

第 123 図 -10、11 は判読不能で、第 123 図 -13 は「大」カ。‘かわらけ’は 25,469 点 (155,352g) で、最小個体数は 1,129 点である。

土製品は、土玉 (第 123 図 -14)、有孔の土玉 (第 123 図 -15)、アーモンド形 (第 123 図 -16) がある。土玉は、14,418 点 (40,250g) である。大きさ (直径) が計測可能な完形・ほぼ完形の土玉は 4,518 点 (15,562g) で、計測不可の破損土玉は 9,900 点 (24,688g) である。

金属製品は、銭貨が 6 枚で新寛永 (第 123 図 -17 ～ 21) は 5 枚、銭種不明が 1 枚ある。ほかに鉄釘など (第 123 図 -22) がある。

・自然遺物

貝類は、ヤマトシジミ (782 点)・アサリ (13 点)・サザエ (1 点)・サルボウガイ (1 点)・マガキ (1 点) が出土している。

*遺構間接合

13: 磁器香炉片 (第 121 図 -18) は、5 ～ 7 号遺構 (近世 2 土坑) との遺構間接合で、接合距離は 2m である。

15: 陶器碗 (第 123 図 -1) は、9 号遺構 (近世 2 土坑) との遺構間接合で、接合距離は 1.5m である。
9 号遺構 [D・E-6] (1 区)

・遺構 (第 74 図)

1 号遺構 (御殿堀) 内、6 号遺構 (近世 2 土坑) の北、8 号遺構 (近世 2 土坑) の西に位置する。一辺 100cm × 54cm のほぼ正方形を呈する。西側の下層に ‘かわらけ’ 片が不自然に凝集する。

・遺物 (第 124 図)

出土資料は、磁器の碗 (6 点)、陶器の碗 (13 点)・鉢 (1 点)・蓋 (1 点)・瓶 (1 点)・播鉢 (1 点)・猪口 (5 点)、土器の焙烙 (1 点)・不明 (1 点) である。

陶器は、筒形碗 (第 124 図 -1) である。陶器は、壺蓋 (第 124 図 -7) である。

土器は、‘かわらけ’ (第 124 図 -2 ～ 6) である。‘かわらけ’ 墨書 (第 124 図 -8・9) は、判読不明である。‘かわらけ’ は 7,886 点 (60,512g) で、最小個体数は 593 点である。

土製品は、土玉 (第 124 図 -10)、有孔土玉 (第 124 図 -11)、ソロバン形土玉 (第 124 図 -12) である。土玉は、4,232 点 (11,265g) である。大きさ (直径) が計測可能な完形・ほぼ完形の土玉は 1,478 点 (4,583g) で、計測不可の破損土玉は 2,754 点 (6,682g) である。

金属製品：銭貨は銭種不明が 1 枚ある。

・部材

丸瓦 (第 124 図 -13: 刻印) である。

*遺構間接合

5: 陶器筒形碗 (第 124 図 -1) は、全体の 5/6 が 9 号遺構出土で、残りの 1/6 は 9m 離れた 10 号遺構 (近世 2 土坑) の出土である。

15: 陶器碗 (第 123 図 -1) は、8 号遺構 (近世 2 土坑) との遺構間接合で、接合距離は 1.5m である。

16: 磁器猪口 (第 122 図 -1) は、6 号遺構 (近世 2 土坑) との遺構間接合で、接合距離は 1m である。

10 号遺構 [C-5] (1 区)

・遺構（第 74 図）

1 号遺構（御殿堀）内、12 号遺構（近世 2 土坑）の北東に位置する。89cm × (52cm) × 16cm で南西部を欠損する。‘かわらけ’片が凝集する。

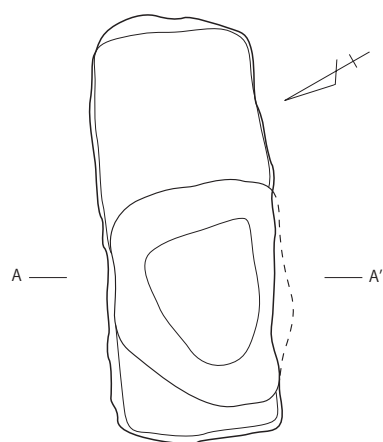
・遺物

出土資料は、磁器の碗（1 点）、陶器の碗（1 点）・皿（1 点）である。

‘かわらけ’は 1,766 点（8,164g）で、最小個体数は 66 点である。

土玉は、127 点（368g）である。大きさ（直径）が計測可能な完形・ほぼ完形の土玉は 73 点（221g）で、計測不可の破損土玉は 54 点（147g）である。

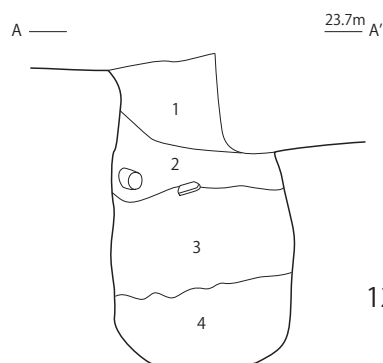
【12号遺構】



12号遺構断面(北西より)



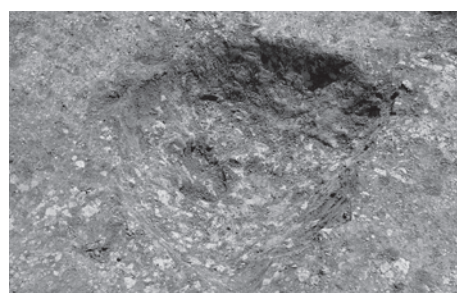
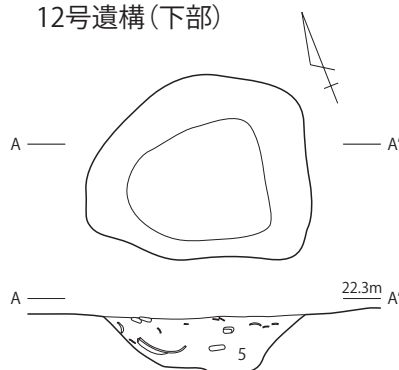
12号遺構(北東より)



12号遺構(下部)



12号遺構下部断面(北西より)



12号遺構下部(西より)



土層説明

12号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cm小礫・炭化物含む。
	2	褐灰色	粘性あり。締まりあり。かわらけ・土玉凝集。瓦片含む。
	3	灰褐色	粘性あり。締まりあり。かわらけ減少。磁器片増。貝片含む。
	4	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。かわらけ片・瓦片・陶磁器片含む。
	5	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。かわらけ片含む。

第 75 図 近世 2 面の土坑（9：1/40）

金属製品：銭貨は銭種不明が1枚ある。

＊遺構間接合

#5：陶器筒形碗（第124図-1）は、全体の5/6が9号遺構出土で、残りの1/6は9m離れた10号遺構（近世2土坑）の出土である。

11号遺構 [C-5]（1区）

・遺構（第74図）

1号遺構（御殿堀）内、10号遺構（近世2土坑）の東、3号遺構（近世2土坑）の南に位置する。径59cm×8cmの略円形を呈する。‘かわらけ’片が含まれる。

・遺物

出土資料は、土器の火鉢（1点）である。‘かわらけ’は285点（951g）で、最小個体数は15点である。

12号遺構 [C-4・5]（1区）

・遺構（第75図）

1号遺構（御殿堀）内、2号遺構（近世2土坑）の北東に隣接する。227cm×94cm×165cmで、長軸方向が北西－南東の長方形を呈する。底面には、119cm×95cm×30cmの不整形な土坑が伴う。

・遺物（第124図）

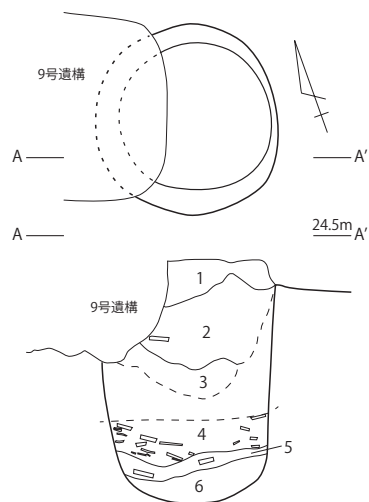
出土資料は、磁器の碗（441点）・皿（57点）・鉢（28点）・蓋（22点）・瓶（69点）・小杯（3点）・紅猪口（5点）・仏飯器（4点）・香炉（3点）・土瓶（1点）・急須（5点）・水滴（3点）・蓋物（25点）・蓮華（1点）・不明（10点）、陶器の碗（238点）・皿（64点）・鉢（33点）・蓋（27点）・壺（6点）・甕（148点）・瓶（451点）・土鍋（5点）・香炉（14点）・片口鉢（2点）・播鉢（91点）・植木鉢（12点）・餌猪口（2点）・水鉢（34点）・髻水入れ（2点）・土瓶（179点）・尿瓶（1点）・灯明受皿（6点）・灯明皿（3点）・火入れ（8点）・脚付灯明受皿（3点）・花瓶（1点）・行平鍋（1）・把手（1点）・その他（6点）・不明（45点）、土器の皿（2点）・鉢（19点）・植木鉢（78点）・火鉢（112点）・焙烙（139点）・火消壺蓋（16点）・焼塩壺（25点）・焼塩壺蓋（10点）・灯明受皿（1点）・土製品（人形：29点、箱庭：1点、ミニチュア：14点）・五徳（4点）・型（1点）・灯明皿（22点）・脚付灯明受皿（27点）・乗燭（1点）・焜炉（2点）・瓦灯（2点）・把手（1点）・その他（5点）・不明（105点）である。

磁器は、そば猪口（第124図-14：「大明年製」、白磁坏（第124図-15）、瑠璃釉碗（第124図-16）、碗（第126図-5：隅立て四ツ目結紋、6：丸に三つ葵紋）、蓋（第124図-19）、鉢（第124図-18：高台内に焼継印あり、第126図-7：遺構間接合#2）、仏飯器（第124図-20）、紅猪口（第124図-17）である。「隅立て四ツ目結紋」（第126図-5）は、大前家の家紋とされているが、大前家は1797（寛政九）年には当地の所有から離れており（268頁：「屋敷地所持者変遷」表参照）、19世紀後半の製品とされる本資料がどのようにして残されたのか、大前家と関係があるのかについては、詳細不明である。

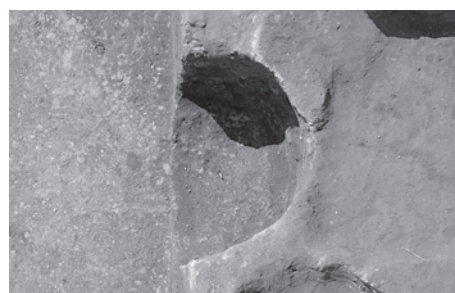
磁器の銘は、碗（第125図-23：「祥瑞立良／太□製」、24：「□」、25：「成化年製」、26：角梓篆書体、27：「富貴長春」、第126図-1：禍福力）である。磁器の色絵破片は、碗（第125図-19・22：草花文）、碗蓋（第125図-20・21：草花文）である。

陶器は、碗（第124図-21：遺構間接合#18）、捏鉢（第124図-22）、土瓶蓋（第125図-2、3）、土瓶（第125図-4）、餌猪口（第125図-15）、ぺこかん徳利（第125図-1）、水鉢（第124図

【14号遺構】

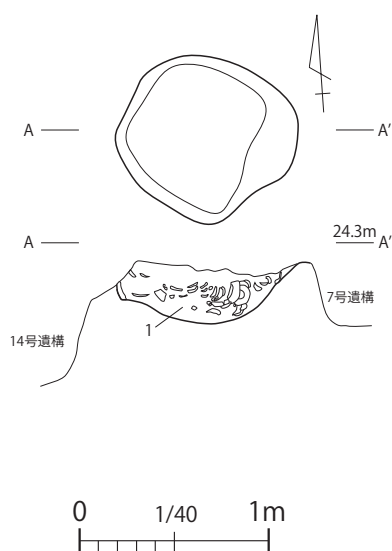


14号遺構断割り断面(南西より)

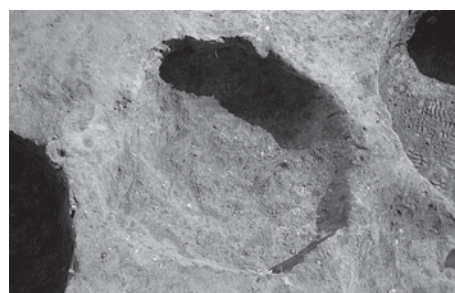


14号遺構(南東より)

【15号遺構】



15号遺構断面(南より)



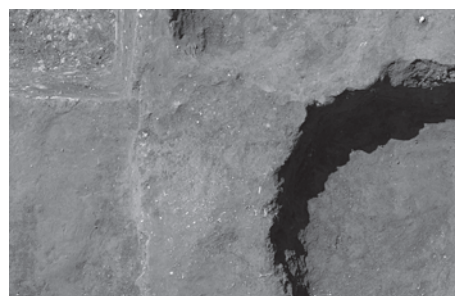
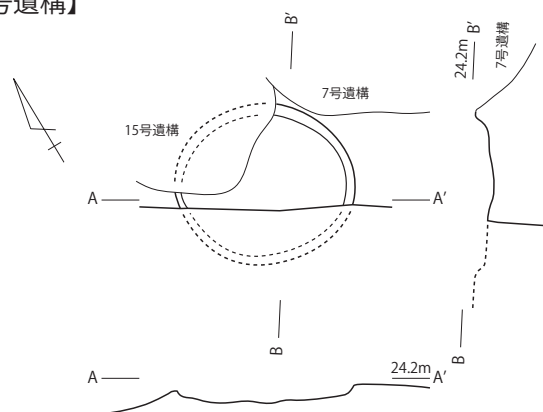
15号遺構(北東より)

土層説明

14号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。径2-3cmロームブロック含む。
	2	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径3-5cmロームブロック含む。
	3	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。貝片含む。
	4	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径2-5mmローム粒5%・径2-3mm白色粘土粒2%・小礫1-2cm1%・瓦片・かわらけ片含む。
	5	明褐色	粘性あり。締まり強。ロームブロック主体層。土団子含む。
	6	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径2-5mmローム粒25-30%・1-3cmロームブロック5%。
15号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。径1mmローム粒3%。かわらけ片・土玉凝集。貝片含む。

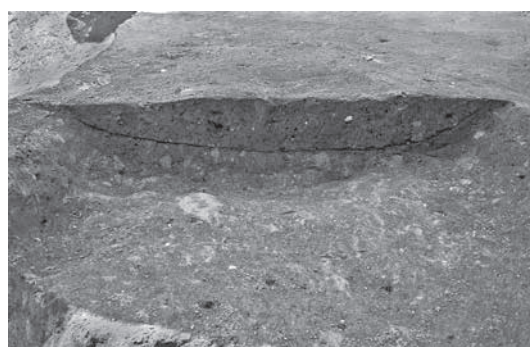
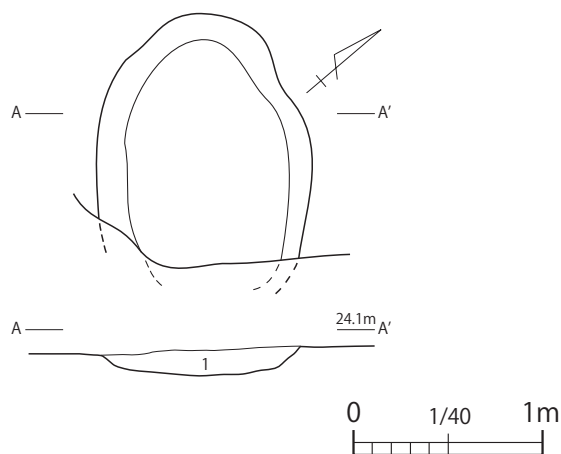
第 76 図 近世 2 面の土坑 (10 : 1/40)

【16号遺構】

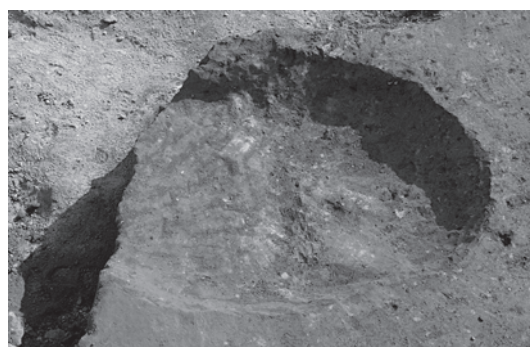


16号遺構 (南東より)

【17号遺構】



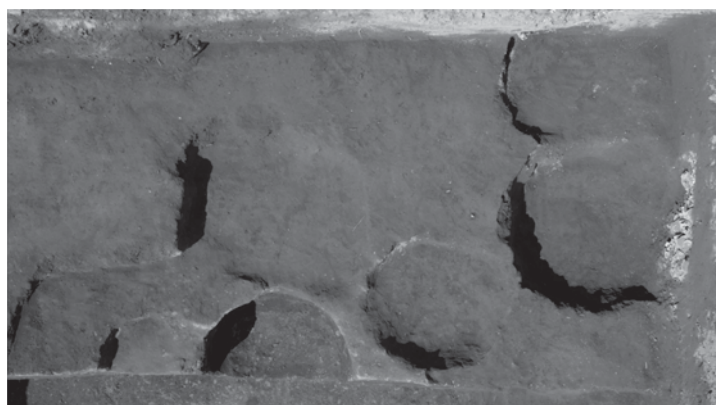
17号遺構断面 (南東より)



17号遺構 (北東より)

土層説明

17号	I	黒褐色	粘性あり。締まりやや強。径1-2cm炭化物3%。3%。かわらけ片含む。
-----	---	-----	-------------------------------------



16号・17号遺構周辺遺構群

第 77 図 近世 2 面の土坑 (11 : 1/40)

-23)、播鉢（第 125 図 -16）である。

陶器の銘は、香炉破片（第 125 図 -13：「清水」）、瓶（第 126 図 -8：釘書「舎」）である。

土器は、‘かわらけ’（第 125 図 -5～7）、焼塩壺（第 125 図 -9、11：「泉湊□□」、12：「（播）磨大極（上）」）、焼塩壺蓋（第 124 図 -8）、脚付灯明受皿（第 125 図 -10）、鉢形容器（第 125 図 -14）、植木鉢（第 125 図 -17、18）がある。「播磨大極上」の刻印を有する焼塩壺（第 125 図 -12）は、18 世紀第三四半期の年代が推定されている（小川 2008）。第 126 図 -9 は、2 号遺構でも出土している（第 112 図 -20）「吉祥紋型押‘かわらけ’」で、図案の中央の鶴亀右側の松の部分の破片である。底面には、2 号遺構出土資料と同様に渦文が刻まれている。そのほか穴あき‘かわらけ’（第 126 図 -10）がある。‘かわらけ’は 54,351 点（286,461g）で、最小個体数は 2,300 点である。

土製品は、人形（第 126 図 -11：姉様頭部欠損、14：西行頭部欠損、15：亀乗り童子）、動物形（第 126 図 -12・13：狐いづれも頭部欠損、16：鯉）、器物（第 126 図 -17：土鍋）である。土玉は、15,087 点（29,709g）である（第 126 図 -18～22）。大きさ（直径）が計測可能な完形・ほぼ完形の土玉は 4,582 点（12,084g）で、計測不可の破損土玉は 10,505 点（17,625g）である。

石製品は、粘板岩製の硯（第 126 図 -30）、泥岩製の碁石（第 126 図 -31）である。

骨角製品は、櫛（第 126 図 -32）である。7mm～9mm の直方体の骨材に 1 から 6 までの窪みを施したサイコロが出土している。

金属製品は、銭貨 4 枚で新寛永（第 126 図 -23、24：「元」、25）が 3 枚、銭種不明が 1 枚ある。煙管は、吸口（第 126 図 -26～28）が 3 点出土した。そのほか「棒状金具」（第 126 図 -29）がある。

・部材（第 126 図）

瓦は、平瓦（第 126 図 -33：菱形刻印、34：三角形刻印）、滴水瓦（第 126 図 -35）である。

＊遺構間接合

#1：焼塩壺（第 133 図 -3）は、12 号遺構と 144 号遺構（近世 2 土坑）の接合で、接合距離は今回の調査で最長の 29m である。

2：磁器鉢（第 126 図 -7）の口縁部小破片は 12 号遺構出土で、中破片は 110 号遺構（近世 2 期土坑）出土である。接合距離は、23m である。

18：陶器碗（第 124 図 -21）は、2 号遺構（近世 2 土坑）との遺構間接合で、接合距離は 1m である。

・自然遺物

貝類は、ヤマトシジミ（24 点）・サザエ（20 点）・ハマグリ（6 点）・アカニシ（1 点）・アサリ（1 点）が出土している。魚類は、マダイ（3 点）・カツオ（1 点）が出土した。

14 号遺構 [D・E-6]（1 区）

・遺構（第 76 図）

1 号遺構（御殿堀）内、6 号遺構（近世 2 土坑）の北東部に位置する。径 98cm × 128cm の円形を呈するが、西側上半を 9 号遺構（近世 2 土坑）に切られる。

・遺物（第 127 図）

出土資料は、磁器の碗（4 点）・皿（1 点）、陶器の碗（5 点）・皿（1 点）・瓶（4 点）・不明（2 点）、土器の焙烙（2 点）・焼塩壺蓋（1 点）・不明（6 点）である。

土器は、焼塩壺蓋（第 127 図 -1）である。‘かわらけ’は 141 点（2,563g）で、最小個体数は 67

点である。

土製品は、土玉（第 127 図 -2）である。土玉は、963 点（2,493g）である。大きさ（直径）が計測可能な完形・ほぼ完形の土玉は 253 点（816g）で、計測不可の破損土玉は 710 点（1,677g）である。

石製品は、砥石（第 127 図 -3）である。

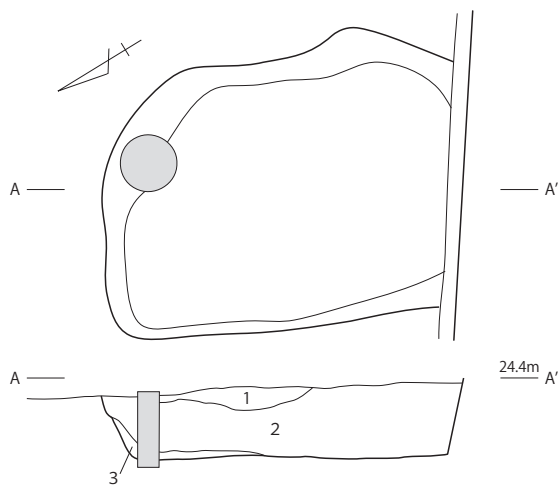
金属製品は、銭貨で銭種不明が 1 枚、鉄釘（第 127 図 -7）が複数出土している。

・部材

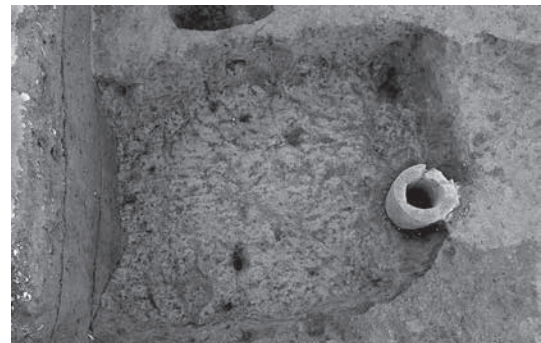
軒丸瓦（第 127 図 -4：「卍」）、滴水瓦（第 127 図 -5）、平瓦（第 127 図 -6：○記号刻印）である。

・自然遺物

【21号遺構】

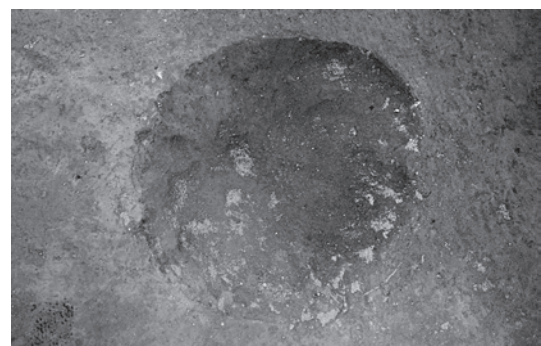
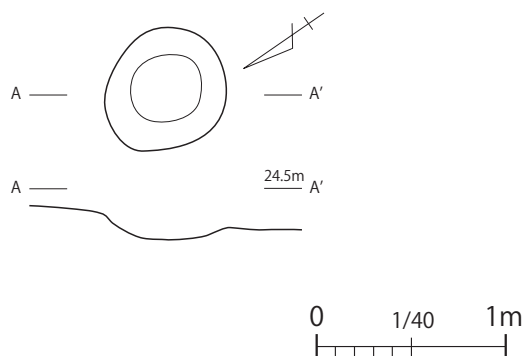


21号遺構断面(北西より)



21号遺構(南東より)

【22号遺構】



22号遺構(南東より)

土層説明

21号	1	黒褐色	粘性あり。締まり強。礫片・コンクリート片含む。
	2	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径2-3mmローム粒3%。
	3	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。ローム土主体。

第 78 図 近世 2 面の土坑（12：1/40）

貝類は、マダカアワビ（1点）・サザエ（1点）・サルボウガイ（1点）・アサリ（1点）が出土した。
哺乳類は、イヌの大腿骨（1点）が出土した。

15号遺構 [D・E-6]（1区）

・遺構（第76図）

1号遺構（御殿堀）内、7号遺構（近世2土坑）の西側、8号遺構（近世2土坑）の南側に位置する。
90cm × 84cm × 31cmの略正方形を呈する。‘かわらけ’片が充填する。

・遺物（第127図）

出土資料は、磁器の皿（1点）・瓶（1点）、陶器の碗（4点）・蓋（1点）・不明（1点）である。

陶器は、壺蓋（第127図-17）である。

土器は、‘かわらけ’（第127図-8～16）である。‘かわらけ’は4,726点（28,535g）で、最小個体数は226点である。

土製品は、有孔土玉（第127図-18）である。土玉は、937点（3,435g）である。大きさ（直径）が計測可能な完形・ほぼ完形の土玉は347点（1,205g）で、計測不可の破損土玉は590点（2,230g）である。

金属製品は、銭貨で新寛永（第127図-19）が1枚、銭種不明が1枚である。

16号遺構 [D・E-6]（1区）

・遺構（第77図）

1号遺構（御殿堀）内、7号遺構（近世2土坑）の南側、15号遺構（近世2土坑）の東側に位置する。
(95cm) × (85cm) × 10cmで、多くを欠損する。

・遺物

出土資料は、陶器の碗（1点）、土器の焙烙（1点）である。

‘かわらけ’は133点（464g）で、最小個体数は2点である。

土玉は、3点（3g）である。大きさ（直径）が計測可能な完形・ほぼ完形の土玉はなく、全て計測不可の破損土玉である。

金属製品は、銭種不明が1枚ある。

17号遺構 [D・E-4]（1区）

・遺構（第77図）

1号遺構（御殿堀）北西斜面部分に位置する。(130cm) × 112cm × 6cmの楕円状を呈する。南東部分を欠損する。

・遺物（第127図）

出土資料は、磁器の碗（7点）、陶器の碗（7点）・甕（1点）、土器の焙烙（4点）である。

‘かわらけ’墨書は、第127図-20が「五(カ)月」、21は判読不能である。‘かわらけ’は87点（299g）で、最小個体数は1点である。

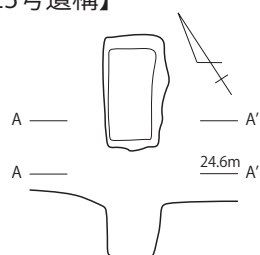
金属製品は、銭貨の銭種不明が1枚、鉄釘（第127図-22）が複数出土している。

21号遺構 [D-2]（1区）

・遺構（第78図）

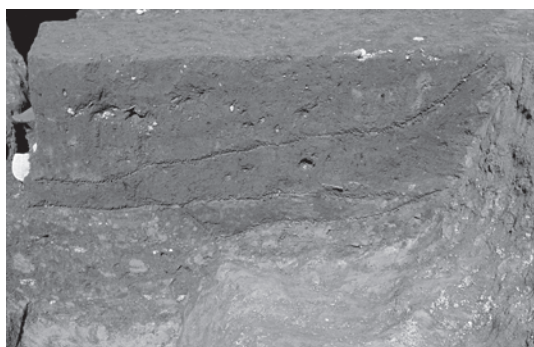
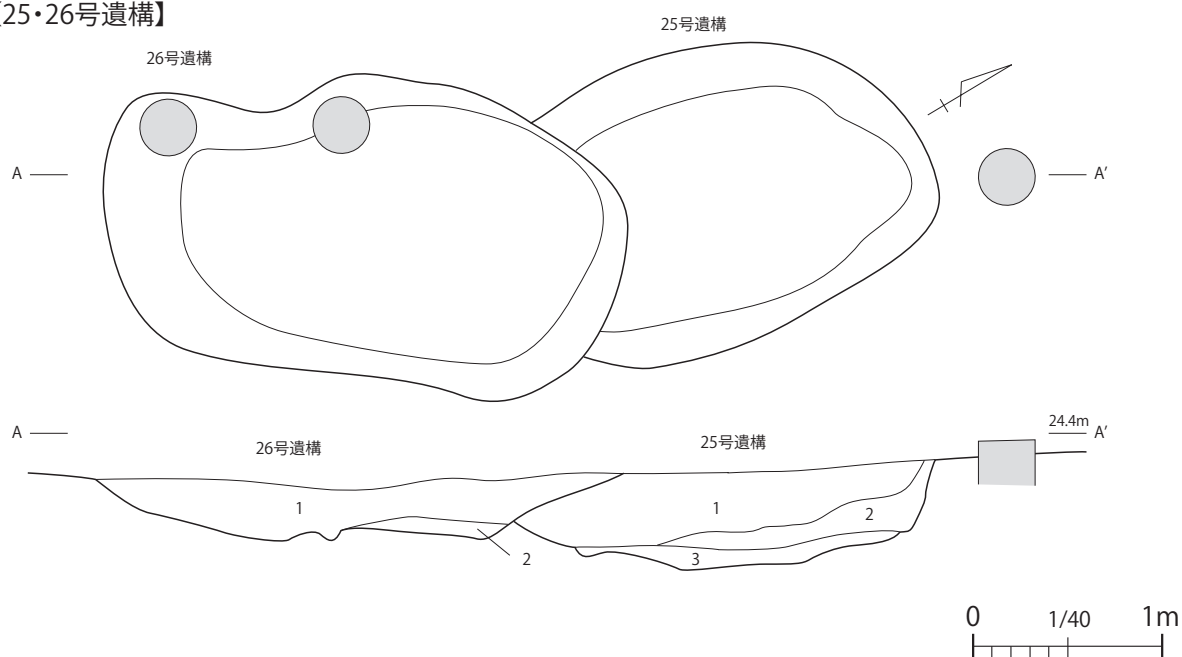
調査区南西部の32号遺構～37号遺構（近世2畝跡群）を切る。(180cm) × 145cm × 37cmの

【23号遺構】



23号遺構 (南東より)

【25・26号遺構】



25号遺構断面 (南東より)



26号遺構断面 (南東より)

土層説明

25号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。径3-5mm炭化物片・径10mmロームブロック・小礫含む。
	2	極暗褐色	粘性やや強。締まりあり。径10-50mmロームブロック30%。径5-10mm灰白色粘土ブロック含む。
	3	黒褐色	粘性あり。締まりやや強。径1-3cmロームブロック30%。
26号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-20mmロームブロック10%。径3-10mm炭化物片3%。
	2	暗褐色	粘性やや強。締まりあり。径10-50mmロームブロック30%。灰白色粘土ブロック径1-15mm含む。

隅丸方形状を呈する。南西部は調査区外となる。

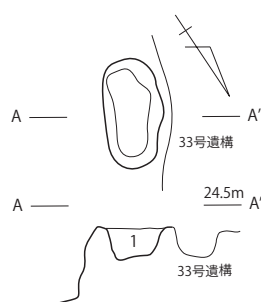
・遺物（第 128 図）

出土資料は、磁器の碗（15 点）・鉢（4 点）・瓶（2 点）・仏飯器（1 点）・蓋物（1 点）、陶器の碗（6 点）・皿（1 点）・甕（9 点）・瓶（9 点）・播鉢（3 点）・その他（1 点）、土器の焙烙（10 点）・火鉢（1 点）・不明（4 点）である。

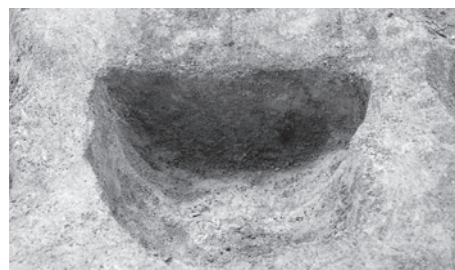
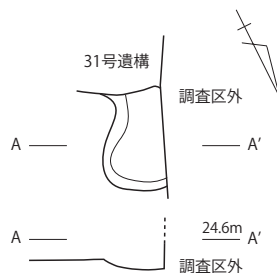
磁器は、碗（第 128 図 -1：角枠禍福）である。

土器は、焙烙（第 128 図 -2：刻印○に一）である。‘かわらけ’は 83 点（145g）で、最小個体数

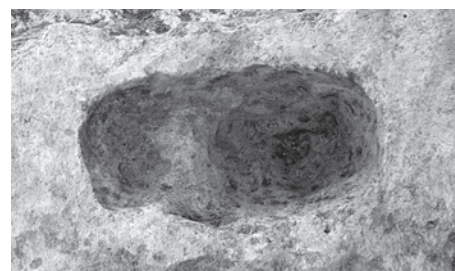
【27号遺構】



【29号遺構】

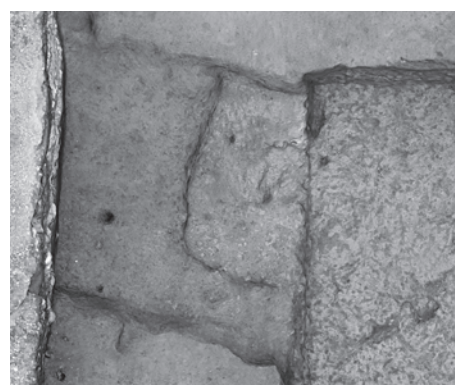
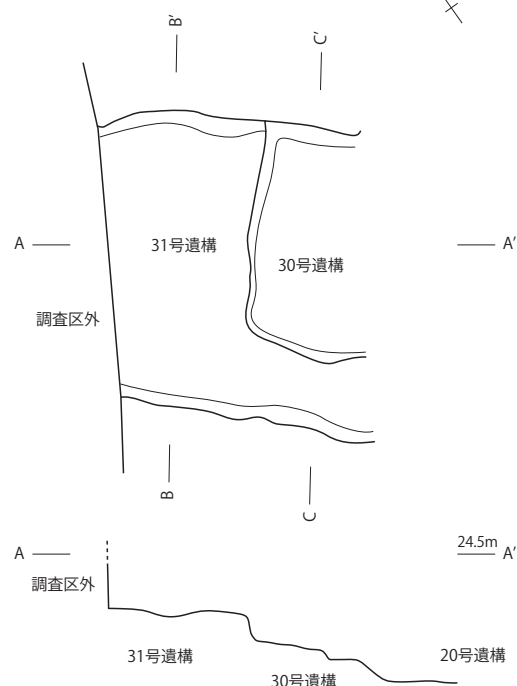


27号遺構(北東より)

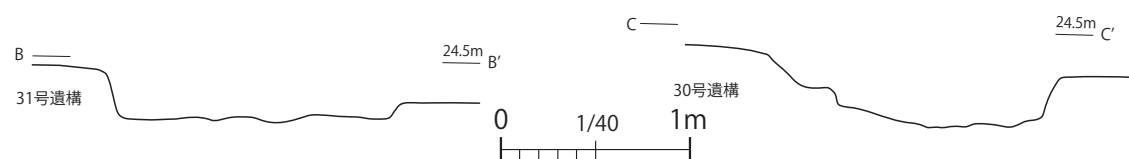


27号遺構(北西より)

【30・31号遺構】



30・31号遺構(南東より)



土層説明

27号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-3cmロームブロック10%。炭化物片含む。
-----	---	-----	-------------------------------------

第 80 図 近世 2 面の土坑（14：1/40）

は 1 点である。

金属製品は、円錐状の外面に鋸歯状の装飾を 3 段に施した青銅製の「用途不明品」（第 128 図 -3、273 頁：写真 -2）がある。同じような資料が、台東区元浅草遺跡から出土している（東京都埋蔵文化財センター 2024：231 頁）。

・自然遺物

貝類は、サザエ（2 点）が出土した。

22 号遺構 [D・E-2]（1 区）

・遺構（第 78 図）

調査区西側、20 号遺構（近世 1 土坑）の南側に位置する。径 65cm × 11cm の略円形を呈する。

・遺物

出土資料は、磁器の鉢（1 点）・不明（1 点）、陶器の瓶（1 点）、土器の不明（1 点）である。

23 号遺構 [E-1]（1 区）

・遺構（第 79 図）

調査区西部に位置する。60cm × 33cm × 30cm で平面は長方形を呈する。

25 号遺構 [E・F-3]（1 区）

・遺構（第 79 図）

1 号遺構（御殿堀）北西外縁上の 51 号遺構（近世 1 上水路）と重複する位置にある。西に位置する 41 号遺構（近世 1 土坑）を切り、南西に位置する 26 号遺構（近世 2 土坑）に切られる。（210cm）× 158cm × 48cm の長楕円状を呈する。

・遺物（第 128 図）

出土資料は、磁器の碗（16 点）・瓶（3 点）・仏飯器（1 点）・香炉（7 点）、花瓶（5 点）・不明（2 点）、陶器の碗（15 点）・皿（3 点）・鉢（9 点）・甕（1 点）・瓶（5 点）・香炉（1 点）・擂鉢（3 点）・灯明受皿（1 点）・餌擂鉢（1 点）・不明（7 点）、土器の火鉢（1 点）・焙烙（48 点）・土製品（人形：1 点）・不明（3 点）である。

土器は、焙烙（第 128 図 -4：刻印「○に一」）、‘かわらけ’墨書（第 128 図 -5：「中」カ）である。‘かわらけ’は 374 点（1,595g）で、最小個体数は 4 点である。

金属製品は、鉄釘（第 128 図 -6）が複数出土している。

＊遺構間接合

6：磁器仏花瓶（第 56 図 -11）は、38 号遺構（近世 1 土坑）・41 号遺構（近世 1 土坑）の遺構間接合で接合距離は 5.5m である。

8：陶器鉢（第 57 図 -11）は、41 号遺構（近世 1 土坑）と 45 号遺構（近世 1 土坑）の遺構間（4.5m）接合である。

26 号遺構 [E-3]（1 区）

・遺構（第 79 図）

280cm × 160cm × 25cm の長楕円状を呈する。北東側の 25 号遺構（近世 2 土坑）を切る。南西部の下方には 19 号遺構（近世 1 上水路）が位置する。

・遺物

出土資料は、磁器の碗（1点）、陶器の碗（1点）・播鉢（1点）、土器の不明（1点）である。

‘かわらけ’は、1点（8g）である。

27号遺構 [D-2]（1区）

・遺構（第80図）

調査区西側、33号遺構（近世2畝跡）と21号遺構（近世2土坑）の間に位置する。59cm × 33cm × 15cmで楕円形を呈する。

・遺物

出土資料は、磁器の碗（1点）である。

29号遺構 [E-2]（1区）

・遺構（第80図）

調査区北西縁、19号遺構（近世1上水路）の南西側に位置する。31号遺構（近世2土坑）に切られる。(54cm) × (33cm) × 8cmで北西部分は調査区外になる。

・遺物

出土資料は、土器の焙烙（1点）である。‘かわらけ’は、1点（1g）である。

30号遺構 [E-2]（1区）

・遺構（第80図）

調査区北西縁近く、北西の31号遺構（近世2土坑）を切り、南東の20号遺構（近世2土坑）に切られる。115cm × (60cm) × 30cmの方形を呈する。

31号遺構 [E-1・2]（1区）

・遺構（第80図）

調査区北西縁に位置する。(140cm) × 160cm × 25cmで北西部は調査区外、南東部は20号遺構・30号遺構（近世2土坑）に切られる。

43号遺構 [D-3]（1区）

・遺構（第81図）

1号遺構（御殿堀）北西外縁直上、44号遺構（近世2地下室）の北東に位置する。154cm × 138cm × 25cmで不整形を呈する。

・遺物

出土資料は、磁器の皿（1点）・蓋（1点）、陶器の皿（1点）、土器の火鉢（1点）・瓦灯（8点）・不明（2点）である。‘かわらけ’は、10点（33g）である。

47号遺構 [F-3・4]（1区）

・遺構（第81図）

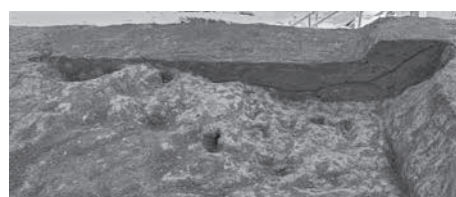
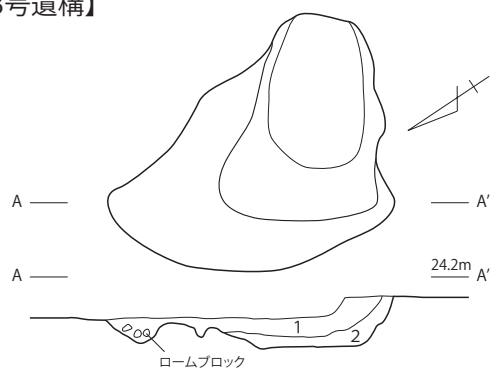
1号遺構（御殿堀）北西外縁上、51号遺構（近世1上水路）と70号遺構（近世1上水路）の間に位置する。南東部に46号遺構（近世2ピット）、北西部に48号遺構（近世2土坑）が位置する。70cm × 60cm × 4cmの略円形を呈する。

・遺物（第128図）

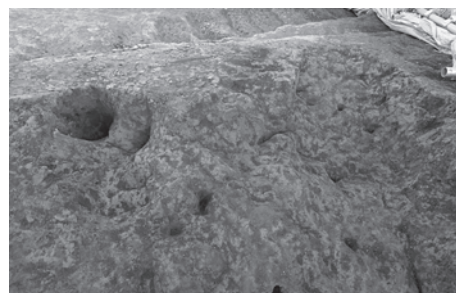
出土資料は、磁器の碗（第128図-7：遺構間接合#17）である。‘かわらけ’は、41点（99g）である。

*遺構間接合

【43号遺構】

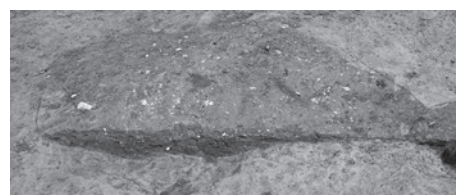
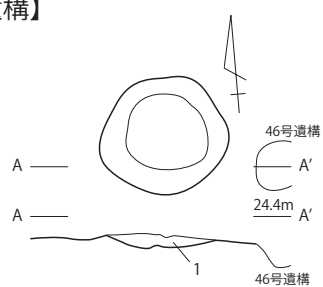


43号遺構断面(南東より)

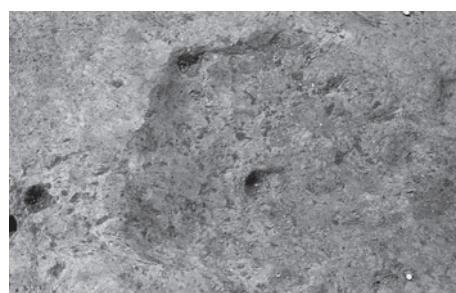


43号遺構(北西より)

【47号遺構】

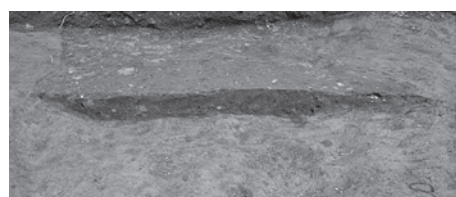
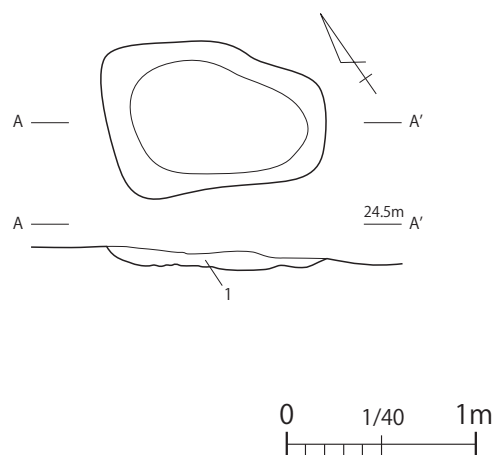


47号遺構断面(南西より)



47号遺構(北西より)

【48号遺構】



48号遺構断面(南西より)



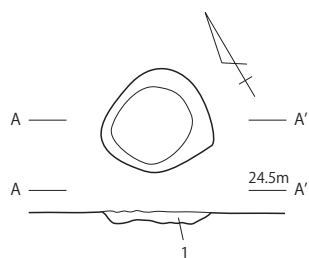
48号遺構(北東より)

土層説明

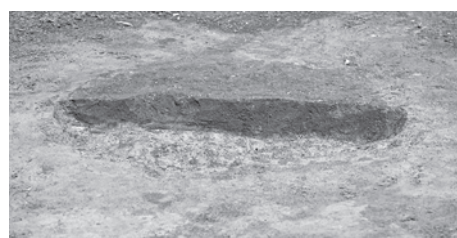
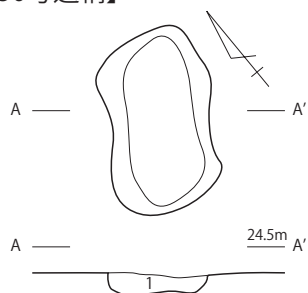
43号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径2-5mmローム粒3%。
	2	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径4-5mmロームブロック3%。
47号	1	黒褐色	粘性あり。締まりやや強。径10mm白色粘土ブロック3%。かわかけ片10%。炭化物片含む。
48号	1	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1-2cmロームブロック10%。炭化物片含む。

第 81 図 近世 2 面の土坑 (15 : 1/40)

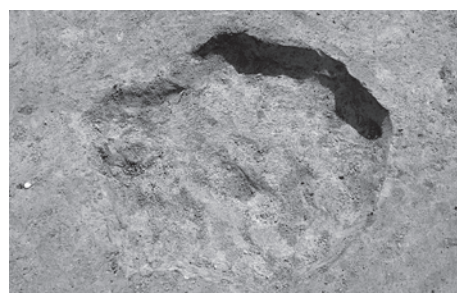
【49号遺構】



【50号遺構】

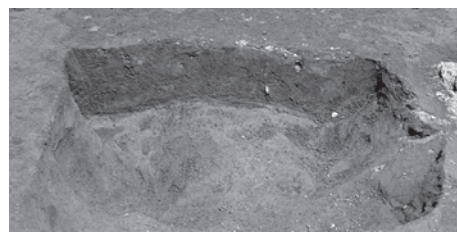
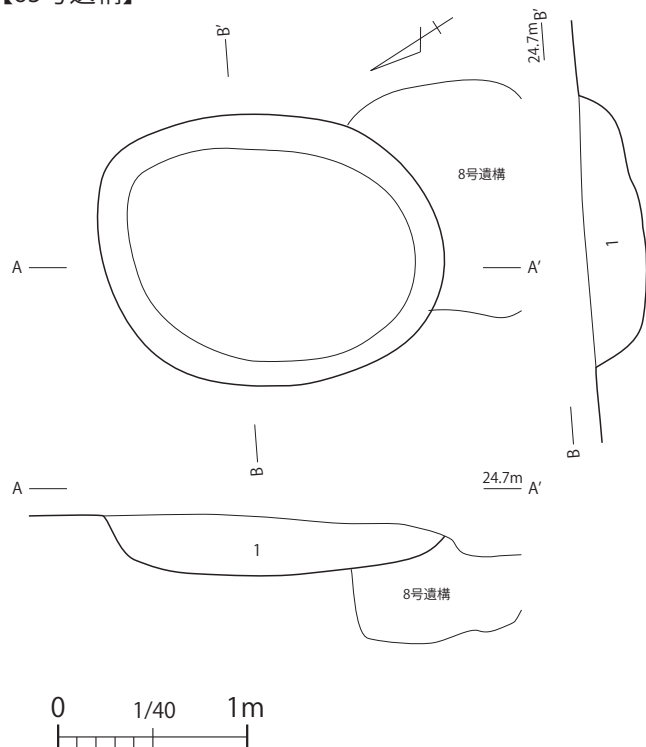


49号遺構断面(南西より)

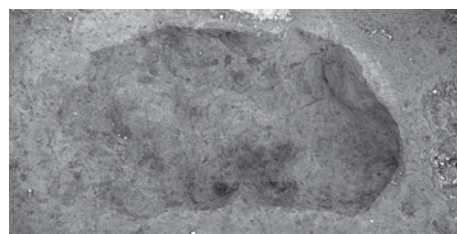


49号遺構(北東より)

【65号遺構】



50号遺構断面(南西より)



50号遺構(北西より)



65号遺構断面(南西より)



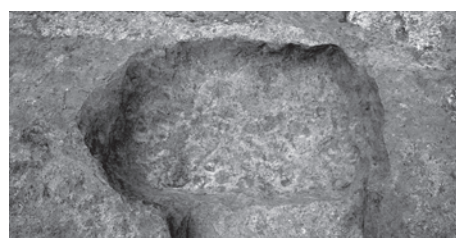
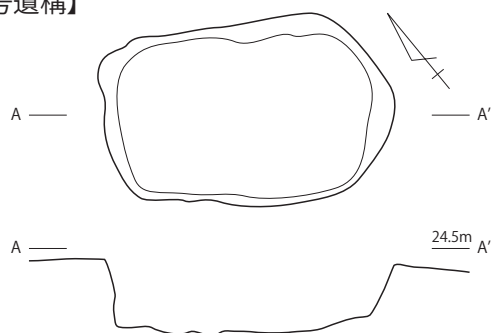
65号遺構(北東より)

土層説明

49号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒10%。かわらけ片含む。
50号	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1-3cmロームブロック30% 径1cm青灰色粘土ブロック含む。
65号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。かわらけ片凝集。土玉含まず。

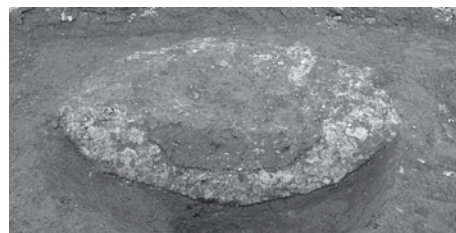
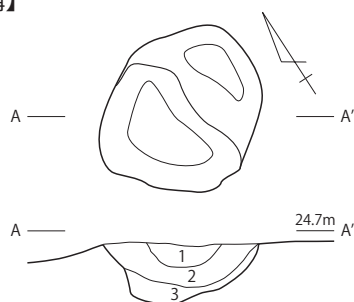
第 82 図 近世 2 面の土坑 (16 : 1/40)

【69号遺構】

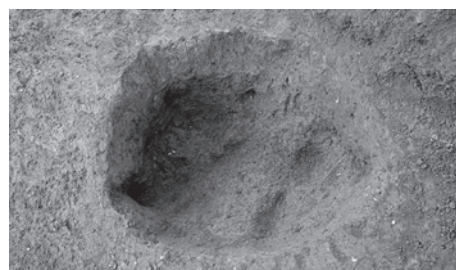


69号遺構 (北東より)

【71号遺構】

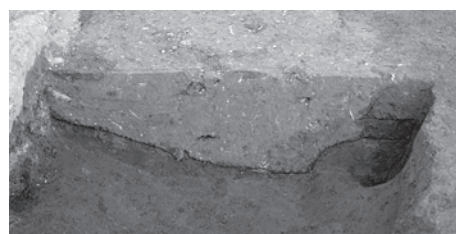
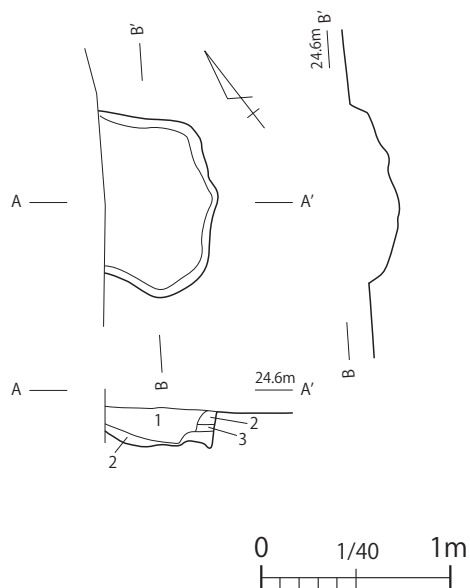


71号遺構断面 (南西より)



71号遺構 (南東より)

【72号遺構】



72号遺構断面 (南西より)



72号遺構 (北西より)

土層説明

71号	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1-5mm白色粘土粒含む。
	2	明褐色～黄橙色	粘性やや強。締まりあり。径3-6cm白色粘土ブロック・橙色ブロック主体80-90%。
	3	暗褐色	粘性あり。締まりあり。かわらけ片一部凝集。
72号	1	褐色	粘性やや欠く。締まりあり。木片30%・炭化物片含む。
	2	暗褐色	粘性あり。締まりあり。含有物なし。
	3	黒色	粘性あり。締まりあり。含有物なし。

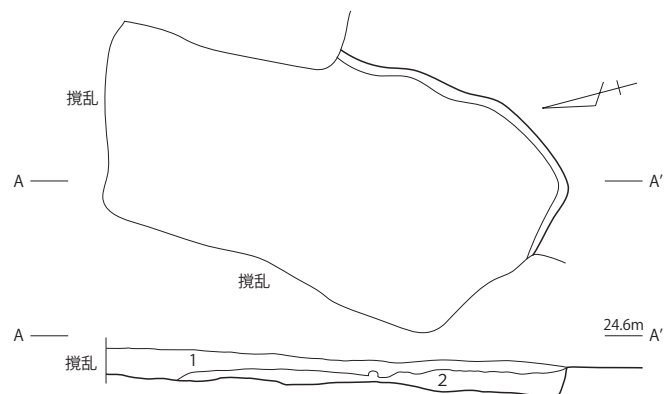
第 83 図 近世 2 面の土坑 (17:1/40)

17：磁器碗片（第 128 図 -7）は、48 号遺構（近世 2 期土坑）との遺構間接合で、接合距離は 1m である。

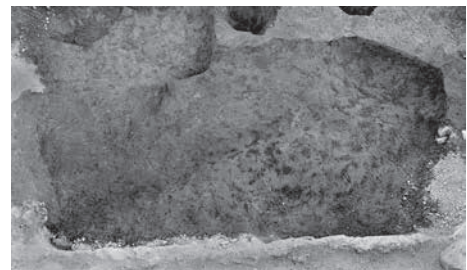
48 号遺構 [F-3・4]（1 区）

・遺構（第 81 図）

【81号遺構】

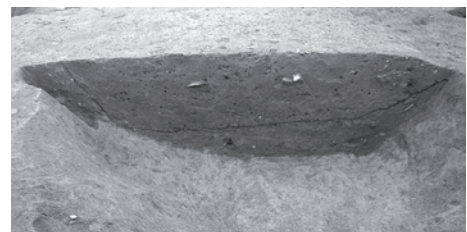
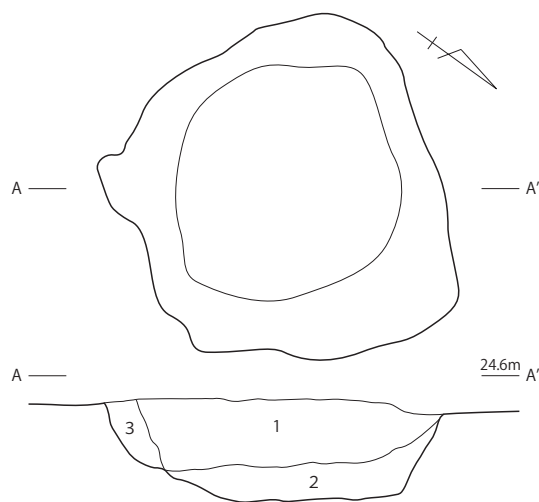


81号遺構断面(西より)

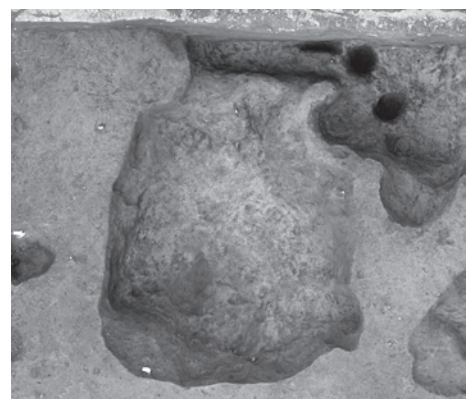


81号遺構(北西より)

【90号遺構】



90号遺構断面(北東より)



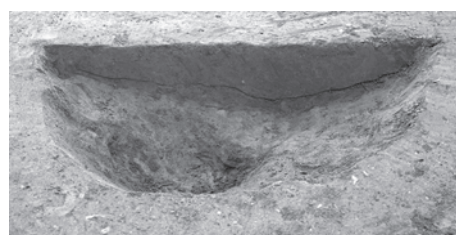
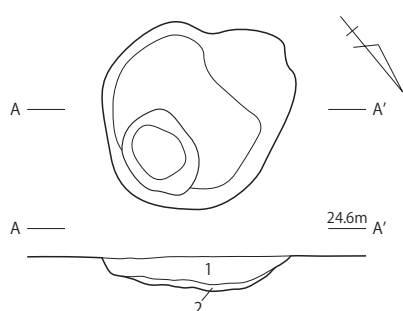
90号遺構(南東より)

土層説明

81号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。径1-3mm黄褐色ローム粒3%。径1-2cmロームブロック含む。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。内容物なし。
90号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒3%。かわらけ片・瓦片・小礫含む。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cm白色粘土ブロック含む。
	3	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cmロームブロック20%。

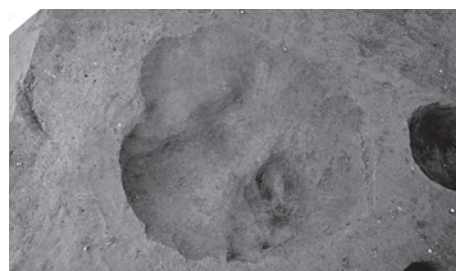
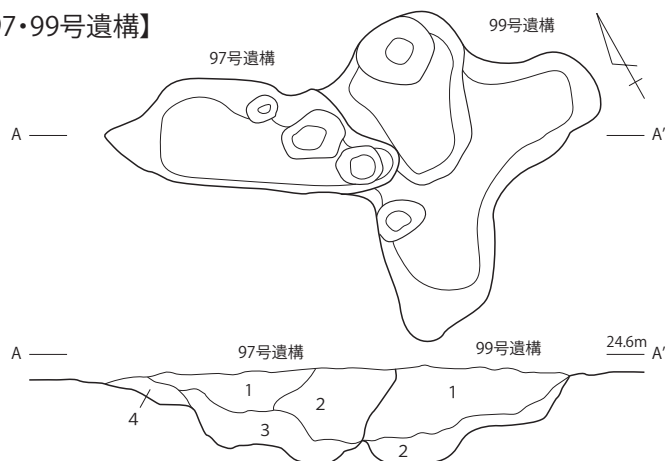
第 84 図 近世 2 面の土坑（18：1/40）

【91号遺構】



91号遺構断面(北東より)

【97・99号遺構】

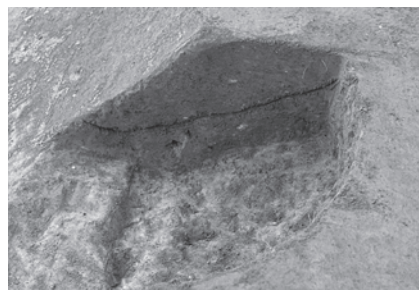
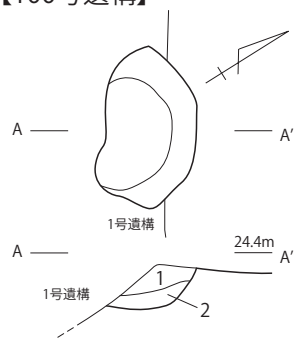


91号遺構(南東より)

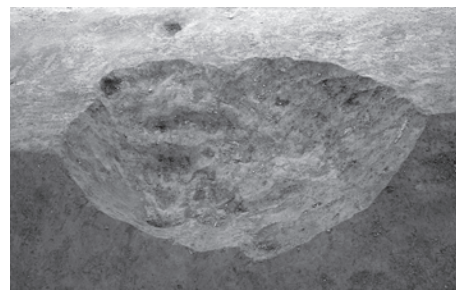


97・99号遺構(南東より)

【100号遺構】



100号遺構断面(南東より)



100号遺構(北東より)



土層説明

91号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。かわらけ片多数含む。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cmソフトロームブロック含む。
97号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-2mmローム粒3%。
	2	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1-2mm炭化物片・かわらけ片含む。
	3	粘暗褐色	粘性あり。締まりあり。かわらけ片含む。
	4	黒褐色	粘性あり。締まりあり。内容物なし。
99号	1	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。瓦片・かわらけ片含む。
	2	黒褐色	粘性やや強。締まりあり。かわらけ片含む。
100号	1	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒3%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径5cmロームブロック含む。

第 85 図 近世 2 面の土坑 (19:1/40)

1号遺構（御殿堀）北西外縁上、51号遺構（近世1上水路）と70号遺構（近世1上水路）の間に位置する。南東方向に47号遺構・46号遺構（近世2期土坑）が連なる。120cm × 80cm × 5cmの不整形な楕円状を呈する。

・遺物

出土資料は、磁器の碗（3点）である。‘かわらけ’は、33点（45g）である。

＊遺構間接合

17：磁器碗片（第128図-7）は、47号遺構（近世2土坑）との遺構間接合で、接合距離は1mである。

49号遺構 [F-3]（1区）

・遺構（第82図）

1号遺構（御殿堀）北西外縁上、51号遺構（近世1上水路）と70号遺構（近世1上水路）の間に位置する。北方向に53号遺構（近世2土坑）、南方向に50号遺構（近世2土坑）が位置する。径60cm × 3cmの不整形な円形を呈する。

・遺物

出土資料は、陶器の土瓶（1点）、土器の焙烙（1点）である。

50号遺構 [F-3]（1区）

・遺構（第82図）

1号遺構（御殿堀）北西外縁上、51号遺構（近世1上水路）と70号遺構（近世1上水路）の間に位置する。99cm × 52cm × 5cmの不整形な長楕円状を呈する。長軸は、北東－南西方向である。

・遺物

出土資料は、磁器の碗（1点）、陶器の不明（1点）、土器の不明（2点）である。‘かわらけ’は、5点（8g）である。

65号遺構 [E-6]（1・2区）

・遺構（第82図）

調査区南東寄りの1号遺構（御殿堀）内部に位置する。8号遺構（近世2土坑）を切る。182cm × 142cm × 31cmの楕円形を呈する。

・遺物（第128図）

出土資料は、磁器の碗（2点）・瓶（2点）、陶器の碗（8点）・瓶（2点）・香炉（1点）、土器の皿（1点）・焙烙（2点）・不明（3点）である。

図示した‘かわらけ’（第128図-8～12）を含めて、‘かわらけ’総点数は2,059点（19,406g）で、最小個体数は57点である。

土玉は、アーモンド形（第128図-13）で、土玉の総点数は929点（1,468g）である。大きさ（直径）が計測可能な完形・ほぼ完形の土玉は110点（331g）で、計測不可の破損土玉は519点（1,137g）である。

・自然遺物

貝類は、ヤマトシジミ（1点）が出土した。

69号遺構 [G-5]（2区）

・遺構（第 83 図）

1 号遺構（御殿堀）の北側屈曲部から南東方向直近に位置し、1 号遺構（御殿堀）を切る。155cm × 100cm × 40cm の小判状を呈する。長軸は、北西―南東方向で、1 号遺構（御殿堀）北東外縁上に乗る。

・遺物（第 128 図）

出土資料は、磁器の碗（5 点）・瓶（1 点）、陶器の碗（2 点）・甕（1 点）・瓶（5 点）・播鉢（1 点）、土器の鉢（2 点）・植木鉢（3 点）・土製品（人形：1 点）・脚付灯明受皿（1 点）・不明（2 点）である。

陶器は、碗（第 128 図-14：刻印）である。‘かわらけ’は 18 点（37g）で、最小個体数は 1 点である。

金属製品は、鉄釘（第 128 図-15）が出土している。

71 号遺構 [G-7]（2 区）

・遺構（第 83 図）

1 号遺構（御殿堀）の北東、大形の 110 号遺構（近世 2 土坑）の南東縁に位置する。91cm × 81cm × 32cm で略円形を呈する。

・遺物（第 128 図）

出土資料は、磁器の碗（6 点）・皿（1 点）・蓋物（1 点）、陶器の碗（1 点）・皿（2 点）・甕（2 点）・瓶（18 点）・播鉢（1 点）・焙烙（3 点）・水鉢（1 点）・焜炉（1 点）、土器の不明（2 点）である。

陶器は、瓶（第 128 図-19：釘書「ヤマに川」）である。

土器は、‘かわらけ’墨書（第 128 図-16：「脈」カ、17：判読不能）である。‘かわらけ’は 548 点（520g）で、最小個体数は 8 点である。

金属製品は、鉄釘（第 128 図-18）である。

72 号遺構 [H-5]（2 区）

・遺構（第 83 図）

1 号遺構（御殿堀）屈曲部北西に位置する。93cm × (60cm) × 20cm で、北西部をコンクリート基礎によって損失する。

・遺物

‘かわらけ’は、2 点（13g）である。

・自然遺物

貝類は、ヤマトシジミ（1 点）が出土した。

81 号遺構 [H-5]（2 区）

・遺構（第 84 図）

1 号遺構（御殿堀）屈曲部北西に位置する。72 号遺構（近世 2 土坑）と重複する。(250cm) × (130cm) × 18cm で、南東部以外の多くを官舎基礎で欠損する。

・遺物

出土資料は、磁器の碗（1 点）、陶器の碗（2 点）・甕（2 点）、土器の焙烙（3 点）・焼塩壺蓋（1 点）である。

‘かわらけ’は、26 点（56g）である。

90 号遺構 [F・G-7]（2 区）

・遺構（第 84 図）

1 号遺構（御殿堀）の北東外縁直近に位置する。180cm × 170cm × 52cm の略円形の大形土坑である。

・遺物

出土資料は、磁器の碗（2 点）・皿（2 点）・不明（1 点）、陶器の碗（7 点）・鉢（3 点）・壺（1 点）・甕（2 点）・瓶（12 点）・播鉢（4 点）・土瓶（1 点）・その他（5 点）、土器の火鉢（3 点）・焙烙（2 点）である。‘かわらけ’は 274 点（757g）で、最小個体数は 9 点である。

・自然遺物

貝類は、サザエ（2 点）が出土した。

91 号遺構 [F-7]（2 区）

・遺構（第 85 図）

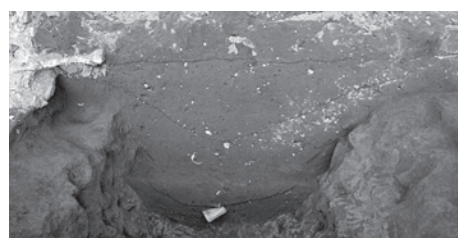
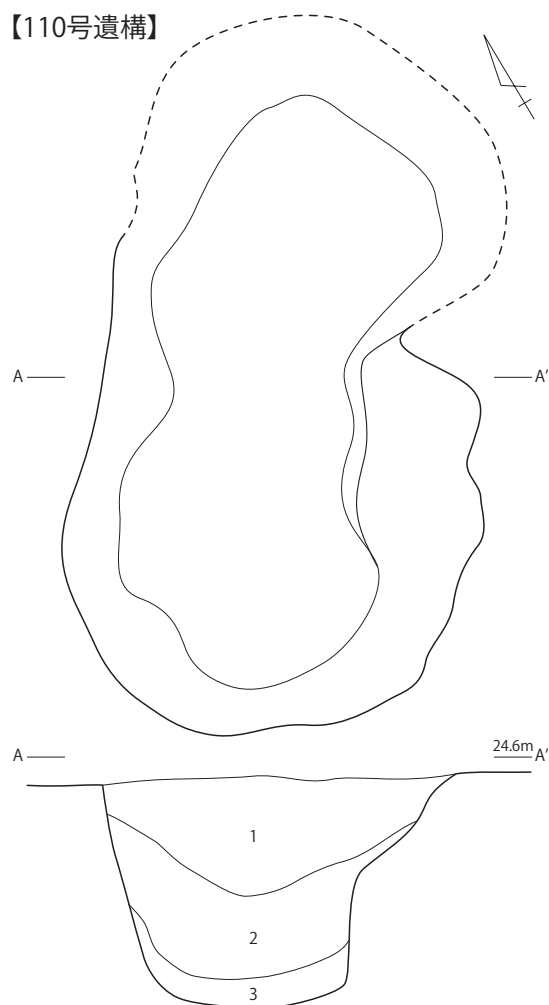
1 号遺構（御殿堀）の北東外縁直近に位置する。111cm × 97cm × 18cm の略円形土坑である。

・遺物

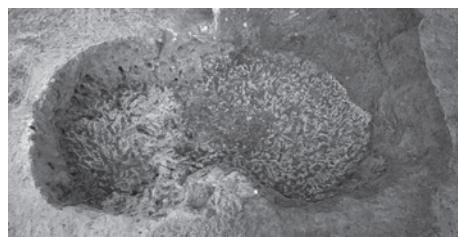
出土資料は、陶器の瓶（2 点）、土器の不明（1 点）である。‘かわらけ’は、9 点（28g）である。

97 号遺構 [G-7]（2 区、3-1 区）

【110号遺構】



110号遺構断面(南西より)



110号遺構(北東より)



土層説明

110号	1	黒褐色	粘性あり。縮まり強。径1cm小礫・酸化鉄含む。
	2	黒褐色	粘性あり。縮まりやや強。径1cm小礫・径1-2mm炭化物片含む。
	3	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径1-2mmローム粒含む。かわらけ片多量に含む。

第 86 図 近世 2 面の土坑（20：1/40）

・遺構（第 85 図）

1 号遺構（御殿堀）の北東外縁の 90 号遺構・91 号遺構（近世 2 土坑）の北東側に位置する。152cm × 56cm × 5cm の長楕円形の土坑である。複数のピットを伴う。南東部に位置する 99 号遺構（近世 2 土坑）を切る。

・遺物

出土資料は、磁器の碗（2 点）・段重（1 点）、陶器の碗（2 点）・瓶（3 点）・不明（1 点）、土器の不明（1 点）である。‘かわらけ’は、38 点（158g）である。

99 号遺構 [G-7]（2 区、3-1 区）

・遺構（第 85 図）

1 号遺構（御殿堀）の北東外縁の 90 号遺構・91 号遺構（近世 2 土坑）の北東側に位置する。(120cm) × 160cm × 51cm の不整形を呈する。複数のピットを伴う。北西部に位置する 97 号遺構（近世 2 土坑）に切られる。

・遺物

出土資料は、磁器の瓶（1 点）・不明（1 点）、陶器の碗（3 点）・皿（1 点）・瓶（3 点）・播鉢（1 点）・不明（1 点）、土器の焙烙（3 点）・焜炉（2 点）・不明（1 点）である。

97 号遺構および 99 号遺構の出土資料として磁器の碗（3 点）・鉢（1 点）・瓶（1 点）、陶器の碗（3 点）・瓶（4 点）・播鉢（1 点）・火鉢（1 点）・不明（1 点）、土器の焙烙（1 点）・焼塩壺（1 点）・不明（4 点）である。‘かわらけ’は、86 点（329g）である。

土玉は、2 点（38g）である。大きさ（直径）が計測可能な完形・ほぼ完形の土玉は 1 点（27g）で、計測不可の破損土玉は 1 点（11g）である。

100 号遺構 [G-6]（2 区）

・遺構（第 85 図）

1 号遺構（御殿堀）北東外縁上に位置する。86cm × (53cm) × (23cm) で、南半部を 1 号遺構（御殿堀）によって欠損する。

・遺物

出土資料は、磁器の碗（1 点）である。‘かわらけ’は、22 点（42g）である。

110 号遺構 [G-6・7]（2 区・3-1 区）

・遺構（第 86 図）

1 号遺構（御殿堀）の北東外縁の直近に位置する。(370cm) × 200cm × 123cm の長楕円形の大形土坑である。北東部の 151 号遺構（近世 2 土坑）に切られる。

・遺物（第 129 図）

出土資料は、磁器の碗（266 点）・皿（28 点）・鉢（11 点）・蓋（9 点）・瓶（19 点）・紅猪口（2 点）・土製品（ミニチュア：1 点）・蓋物（5 点）・段重（1 点）・不明（5 点）、陶器の碗（225 点）・皿（47 点）・鉢（11 点）・蓋（1 点）・壺（2 点）・甕（82 点）・瓶（349 点）・土鍋（10 点）・小杯（1 点）・香炉（18 点）・播鉢（65 点）・土瓶（21 点）・水滴（1 点）・灯明受皿（1 点）・灯明皿（1 点）・乗燭（1 点）・火入れ（2 点）・把手（1 点）・不明（32 点）、土器の皿（1 点）・鉢（19 点）・植木鉢（2 点）・火鉢（86 点）・焜炉（3 点）・十能（1 点）・焙烙（132 点）・火消壺（6 点）・火消壺蓋（22 点）・焼塩壺（6 点）・

焼塩壺蓋（5点）・灯明受皿（3点）・土製品（人形：7点・箱庭：2点・ミニチュア：4点）・五徳（5点）・灯明皿（8点）・脚付灯明受皿（8点）・その他（10点）・不明（63点）である。

磁器は、碗（第129図-1、3～5）、皿（第129図-6：底部銘、7：角枠篆書）、紅猪口（第129図-2、8）である。

陶器は、小杯（第129図-9）、碗（第129図-10～14、15：緑釉）、輪花皿（第129図-16）、香炉（第129図-17）、壺（第129図-18）、土鍋（第129図-21）、灯明皿（第129図-20）、半胴甕（第129図-19：底部穿孔植木鉢転用）である。

土器は、‘かわらけ’（第130図-1～5）、焼塩壺（第130図-6）、焼塩壺蓋（第130図-7・8）、火鉢（第130図-9）である。

磁器の銘は、碗（第130図-10：禍福）、そば猪口（第130図-11：□）、色絵は鉢蓋（第130図-14）である。

陶器の銘は、碗（第130図-12：刻印「森」）、墨書は瓶（第130図-13：「■集力」）、色絵は碗（第130図-15・16）である。徳利の釘書は、第130図-17：「万」、18：「た」、19：「□□（ち）□」、20：「×しま」、第131図-1：「□本」である。

徳利底部（第130図-21）は、窯印が刻印される。焙烙（第131図-2：「○に一」）、焼塩壺（第131図-3：「サカイ／泉州□□（磨生）／御塩所力」がある。「サカイ／泉州磨生／御塩所」の刻印を有する焼塩壺（第131図-3）は、18世紀第三四半期の年代が推定されている（小川2008）。

‘かわらけ’墨書は、第131図-4・10・11：「中」力、5～9：判読不能である。

‘かわらけ’は5,426点（16,236g）で、最小個体数は415点である。

土製品は、器物（第131図-12・13：蓋）、人形（第131図-15：天神）、模造貨幣（第131図-14：表面「銀座常買」・裏面「以南鐐万力換力小判一両」）である。玩具として利用されていたものと思われる。

土玉は、13点（81g）である。大きさ（直径）が計測可能な完形・ほぼ完形の土玉は6点（40g）で、計測不可の破損土玉は7点（41g）である。

金属製品は、銭貨で新寛永（第131図-16、17：「元」）である。煙管は、吸口（第131図-18・19）である。多数の鉄釘（第131図-30）が出土している。

ガラス製品は、簪（第131図-20～29）である。

*遺構間接合

#2：磁器鉢（第124図-18）の口縁部小破片が12号遺構（近世2土坑）から、中破片が110号遺構（近世2土坑）から出土している。接合距離は、23mである。

・自然遺物

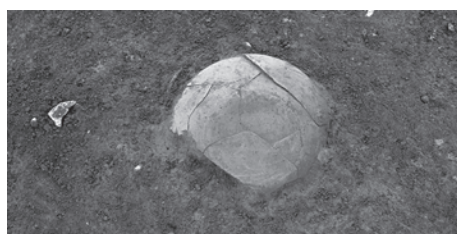
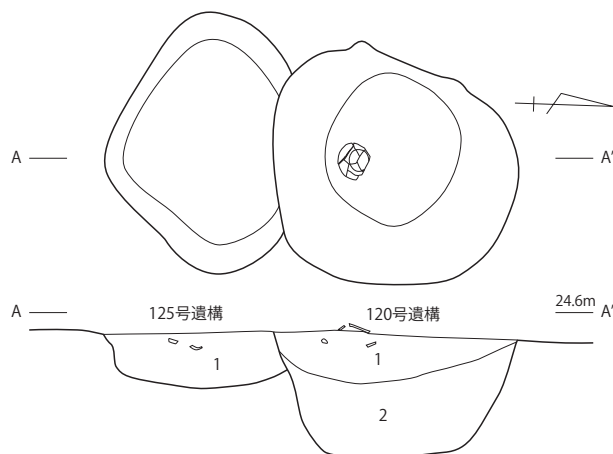
貝類は、サザエ（1点）が出土した。

120号遺構 [G・H-7]（3-1区）

・遺構（第87図）

1号遺構（御殿堀）北東外縁上に位置する。139cm×120cm×64cmの略円形を呈する。南西に位置する125号遺構（近世2土坑）を切る。底部を上にしたやや大形の‘かわらけ’が存在したが、下部に対応する‘かわらけ’は存在せず朧衣皿ではないと判断した。

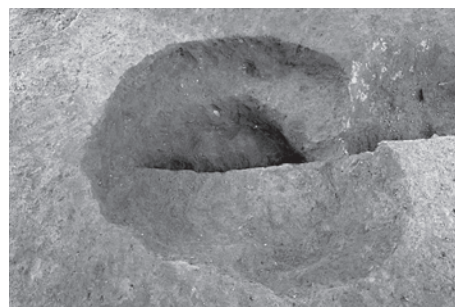
【120・125号遺構】



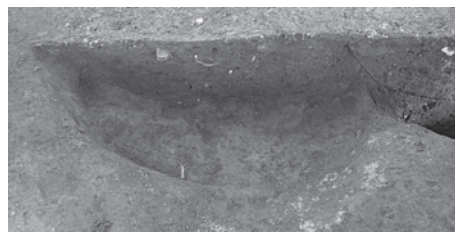
120号遺構遺物検出状況(北西より)



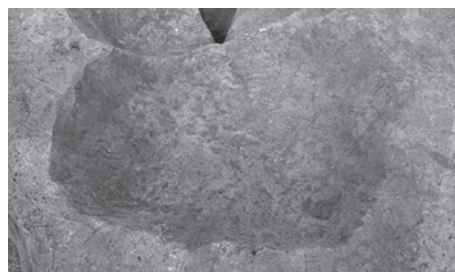
120号遺構断面(東より)



120号遺構(北西より)

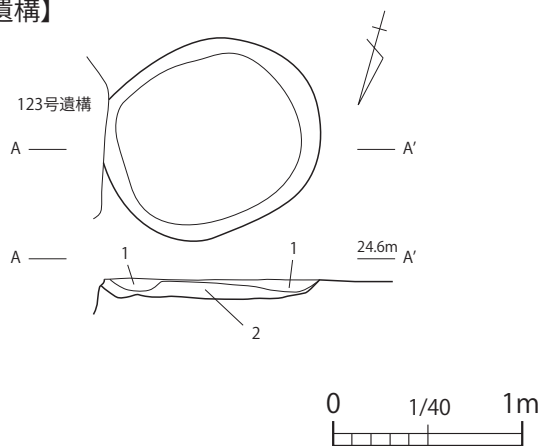


125号遺構断面(東より)

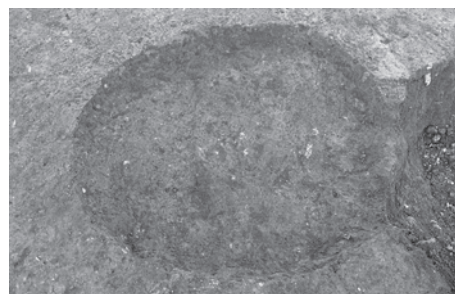


125号遺構(南西より)

【122号遺構】



122号遺構断面(北西より)



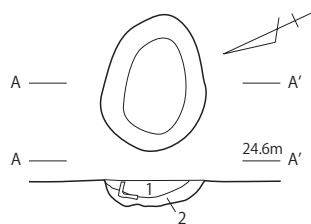
122号遺構(南東より)

土層説明

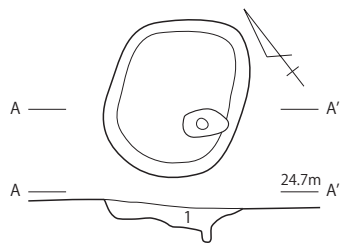
120号	1	暗褐色	粘性やや欠く。締まりあり。径5mm黄褐色ローム粒含む。
	2	黒褐色	粘性やや強。締まりあり。ソフトローム主体。
122号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm石灰粒・径1-2cm小礫含む。
	2	にぶい褐色	粘性強。締まりあり。径1-2cm白色粘土ブロック含む。
125号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。瓦片・陶磁器片含む。

第 87 図 近世 2 面の土坑 (21:1/40)

【126号遺構】

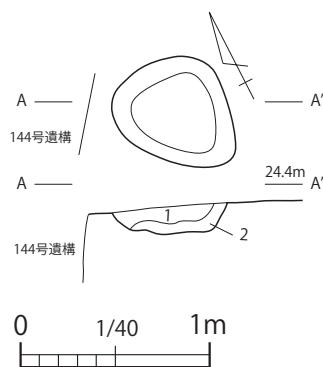


【129号遺構】

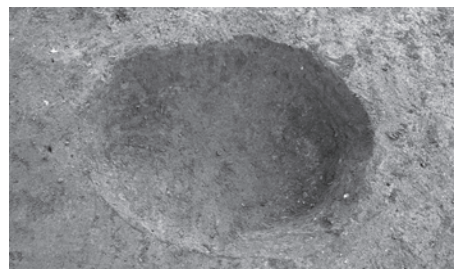
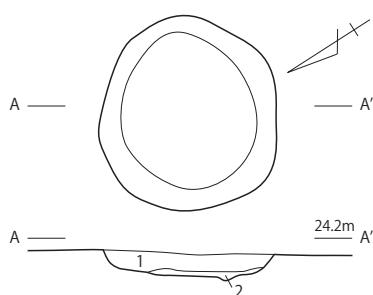


126号遺構断面(北西より)

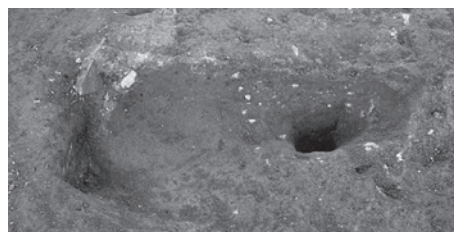
【138号遺構】



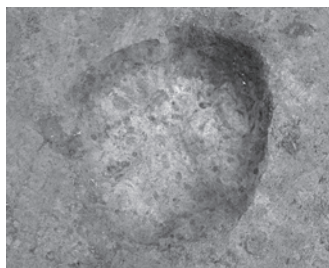
【139号遺構】



126号遺構(北東より)



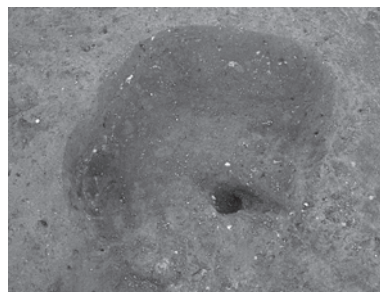
129号遺構断面(南西より)



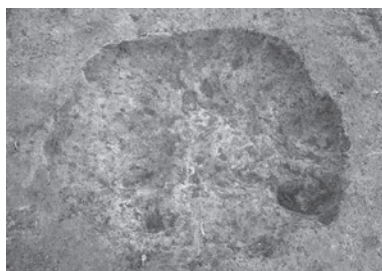
138号遺構(北西より)



139号遺構断面(北西より)



129号遺構(南西より)

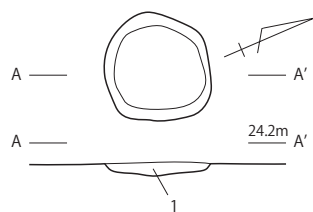


139号遺構(北東より)

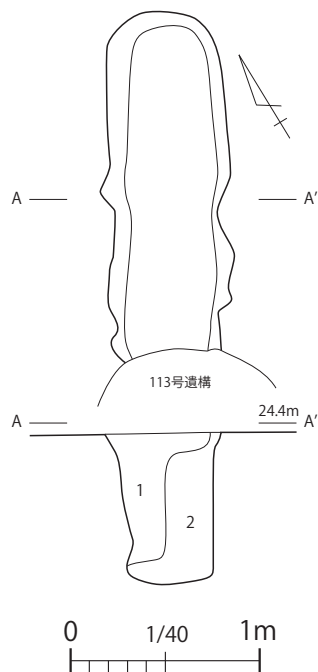
土層説明

126号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm橙色スコリア3%。炭化材70%。
	2	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。
129号	1	黒褐色	粘性あり。締まりやや強。径1mm橙色スコリア・径5mm小礫・瓦片含む。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。ソフトローム主体。
138号	1	黒色	粘性欠く。締まりやや欠く。径2cmロームブロック含む。黒色土主体。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。ソフトローム主体。
139号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。黒色土主体。
	2	暗褐色	粘性あり。締まりあり。ソフトローム主体。

【140号遺構】

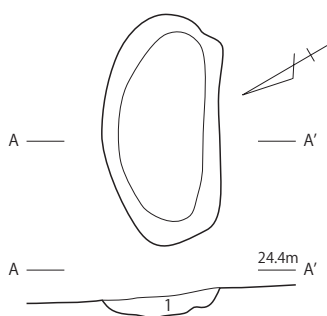


【141号遺構】

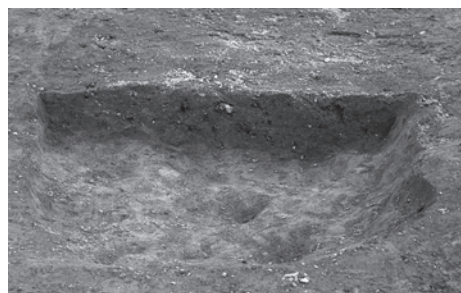


140号遺構断面(東より)

【142号遺構】



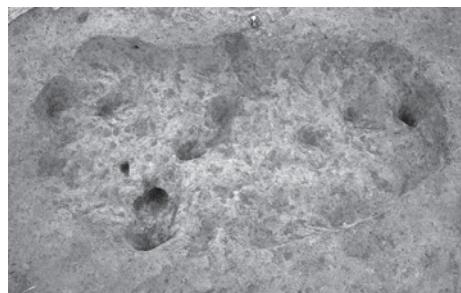
140号遺構(北東より)



142号遺構断面(北西より)



141号遺構断面(南西より)



142号遺構(北東より)



141号遺構(南東より)

土層説明

140号	1	極暗褐色	粘性あり。締まりやや強。径1mm橙色スコリア3%。
141号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まり欠く。径1-5cmロームブロック含む。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりやや強。径1-3cmロームブロック30%。
142号	1	黒褐色	粘性欠く。締まりやや欠く。径1cm小礫含む。

第 89 図 近世 2 面の土坑 (23 : 1/40)

・遺物（第 132 図）

出土資料は、磁器の碗（13 点）・小杯（1 点）・不明（1 点）、陶器の碗（4 点）・鉢（1 点）・甕（→ 140 頁）（4 点）・瓶（1 点）・播鉢（1 点）・不明（3 点）、土器の焙烙（6 点）・土製品（人形：1 点）・不明（3 点）である。

磁器は、小杯（第 132 図 -1）、碗（第 132 図 -2）である。

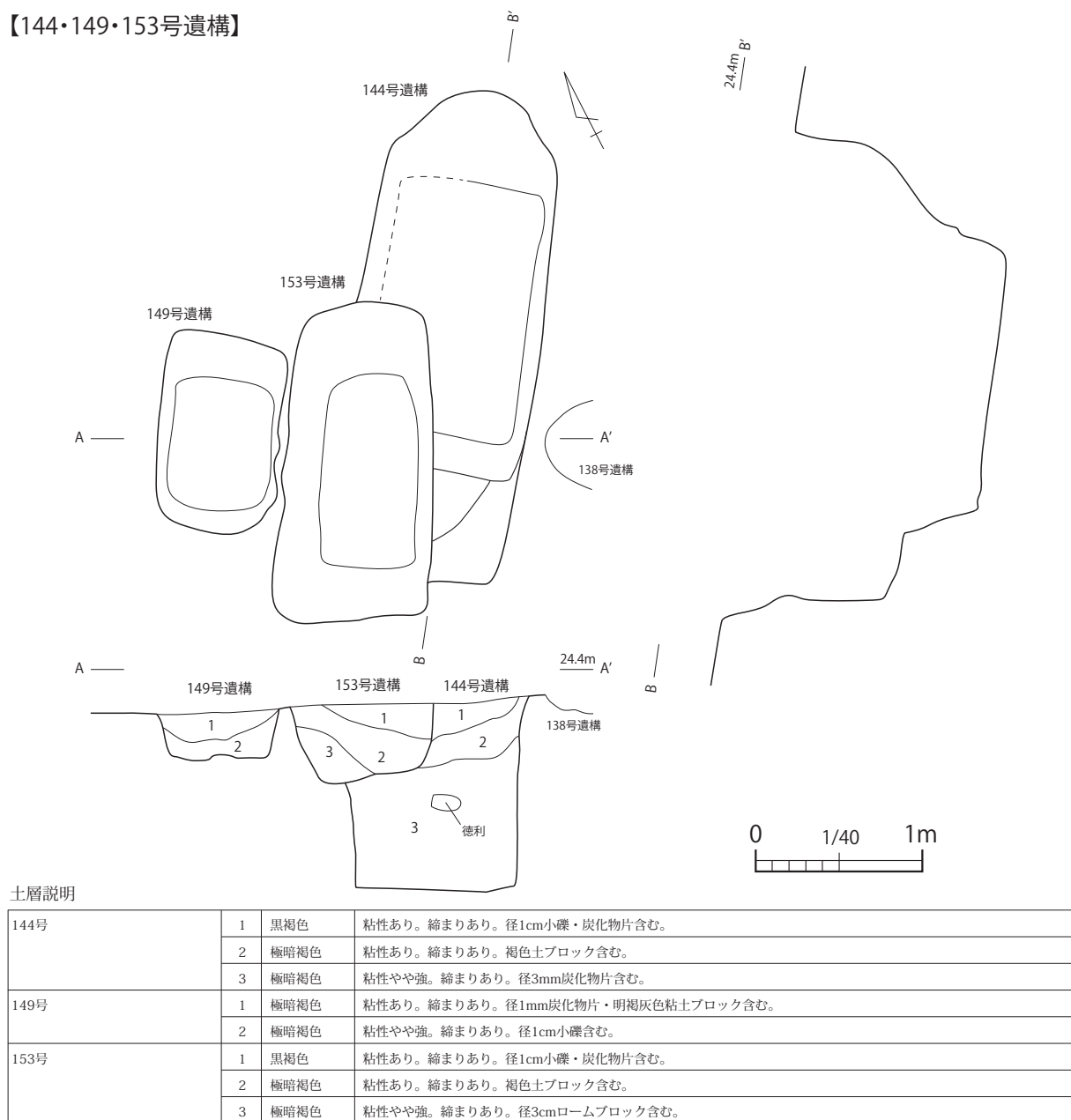
‘かわらけ’は 71 点（705g）で、最小個体数は 3 点である。

金属製品は、鉄釘（第 132 図 -3）がある。

・自然遺物

貝類は、アサリ（81 点）・ハマグリ（5 点）・シオフキガイ（2 点）が出土した。

【144・149・153号遺構】



第 90 図 近世 2 面の土坑（24：1/40）

122号遺構 [H-7] (3-1区)

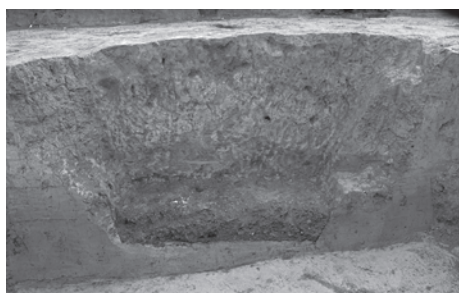
・遺構 (第87図)

1号遺構 (御殿堀) 北東外縁上に位置する。115cm × 100cm × 10cm の略円形を呈する。東側に位置する 123号遺構 (近代土坑) に一部切られる。

・遺物

出土資料は、陶器の瓶 (1点)、土器の焙烙 (2点) である。‘かわらけ’は、3点 (10g) である。

125号遺構 [G-7] (3-1区)



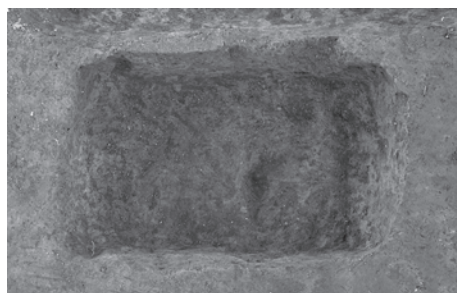
144号遺構断割り断面 (北西より)



144号遺構断割り (北西より)



149号遺構断面 (南西より)



149号遺構 (北西より)



144・149・153号遺構 (南東より)

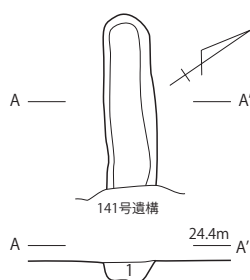
・遺構（第 87 図）

1 号以降（御殿堀）北東外縁上に位置し、135cm × (90cm) × 30cm の略方形を呈する。北東に位置する 120 号以降（近世 2 土坑）に切られる。

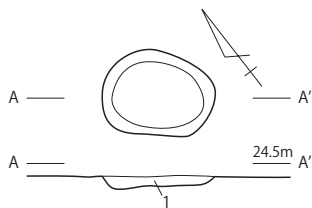
・遺物（第 132 図）

出土資料は、磁器の碗（8 点）・香炉（1 点）、陶器の碗（2 点）・皿（2 点）・甕（2 点）・瓶（2 点）、

【146号遺構】

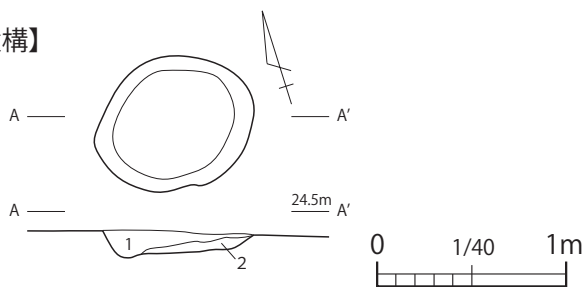


【147号遺構】

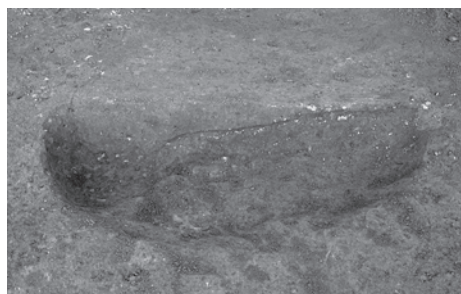


146号遺構断面（南東より）

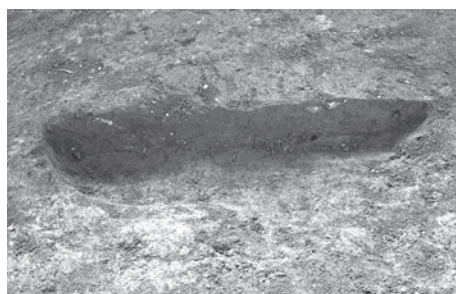
【148号遺構】



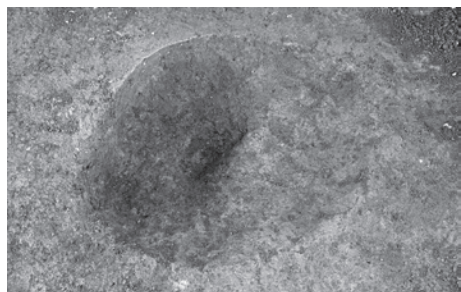
146号遺構（北東より）



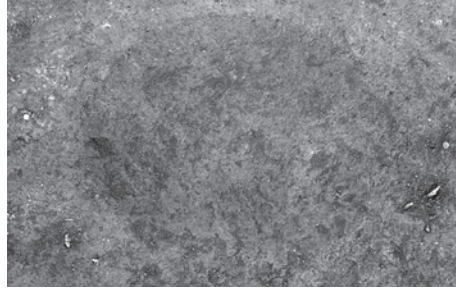
148号遺構断面（南西より）



147号遺構断面（南西より）



148号遺構（南西より）



147号遺構（南西より）

土層説明

146号	1	暗褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径2-3mmローム粒3%。
147号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mmローム粒3%。
148号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。ローム土50%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。黒色土主体。

第 92 図 近世 2 面の土坑（26：1/40）

土器の焙烙（2点）・不明（5点）である。

磁器は、碗（第132図-4）である。

陶器は、皿（第132図-5）、瓶底部（第132図-7：遺構間接合#10）である。

土器は、‘かわらけ’（第132図-6）である。‘かわらけ’は26点（133g）で、最小個体数は5点である。

＊遺構間接合

#10：陶器瓶（第132図-7）は、149号遺構（近世2土坑）との遺構間接合で、接合距離は3mである。

126号遺構 [H-8]（3-1区）

・遺構（第88図）

調査区の東側、西側に144号以降（近世2土坑）が位置する。71cm×55cm×13cmの卵形を呈する。

・遺物

出土資料は、陶器の碗（1点）・甕（1点）、土器のさな（2点）・不明（39点）である。‘かわらけ’は、11点（57g）である。

129号遺構 [H-6]（3-2区）

・遺構（第88図）

1号遺構（御殿堀）北東外縁上の87号遺構（近世2井戸）の中央部に位置する。82cm×71cm×16cmの略方形を呈する。

・遺物

出土資料は、土器の焙烙（1点）・土製品（人形：31点）・不明（3点）である。‘かわらけ’は、5点（7g）である。

138号遺構 [G-8]（3-1区）

・遺構（第88図）

調査区の東側に位置する。北側に144号遺構（近世2土坑）、南側に133号遺構（近代土坑）が位置する。70cm×55cm×14cmの略三角形を呈する。

139号遺構 [H-8]（3-1区）

・遺構（第88図）

調査区東側に位置する。101cm×92cm×13cmの円形を呈する。

・遺物

‘かわらけ’は、18点（81g）である。

140号遺構 [H-7・8]（3-1区）

・遺構（第89図）

調査区の東側に位置する。北東側に188号遺構（近世1土坑）、南西側に123号遺構（近代土坑）が位置する。62cm×55cm×9cmの略円形を呈する。

141号遺構 [G-7・8]（3-1区）

・遺構（第89図）

1号遺構（御殿堀）北東外縁上に位置する。（180cm）×64cm×80cmで、長軸は北東－南西方向である。南西部は、113号遺構（近世2井戸）によって切られる。

・遺物（第 132 図）

出土資料は、磁器の瓶（1 点）、陶器の碗（4 点）・瓶（4 点）・不明（2 点）、土器の焙烙（1 点）・不明（1 点）である。‘かわらけ’は 16 点（36g）で、最小個体数は 1 点である。

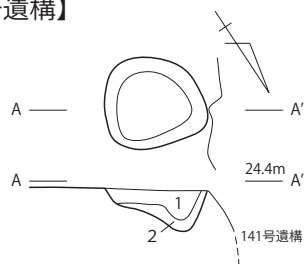
金属製品は、鉾がついたキャップ状の金具（第 132 図 -8）、鉄釘（第 132 図 -9）である。

142 号遺構 [G-8]（3-1 区）

・遺構（第 89 図）

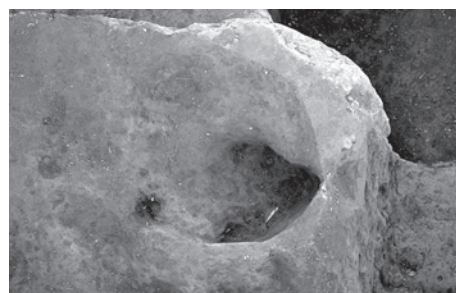
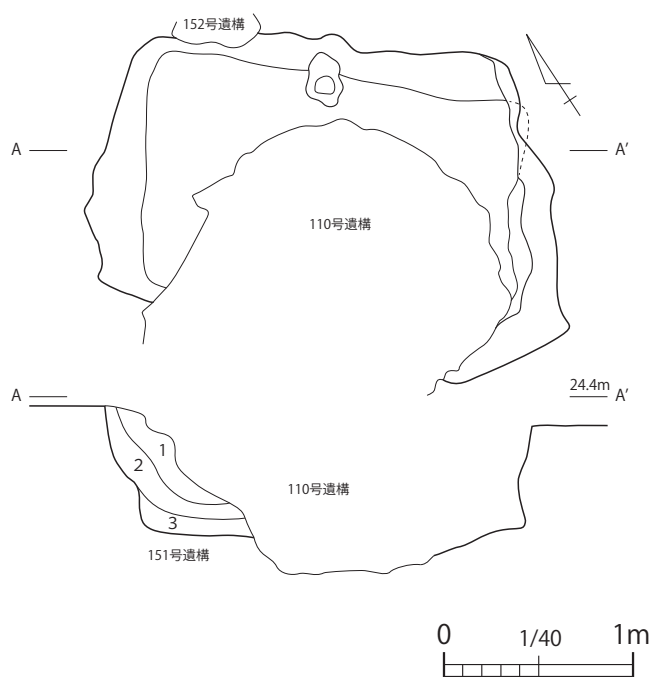
1 号遺構（御殿堀）北東外縁部上、151 号遺構（近世 2 土坑）の南東に位置する。122cm × 63cm × 12cm の楕円形を呈する。

【150号遺構】

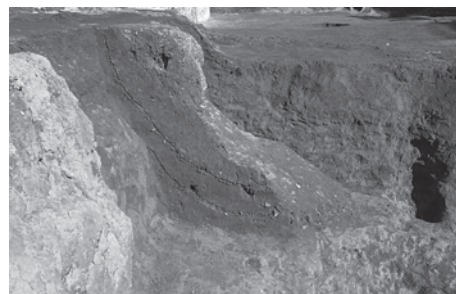


150号遺構断面（北東より）

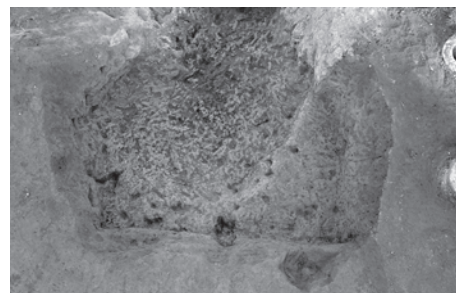
【151号遺構】



150号遺構（北東より）



151号遺構断面（南西より）



151号遺構（北東より）

土層説明

150号	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm白色粘土粒3%。
	2	暗褐色	粘性やや欠く。締まりあり。
151号	1	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm橙色スコリア1%。かわらけ片含む。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径5mm炭化物片含む。
	3	黒褐色	粘性あり。締まりやや強。径1mmローム粒3%。

第 93 図 近世 2 面の土坑（27：1/40）

・遺物

‘かわらけ’は、3点(10g)である。

144号遺構 [G・H-8] (3-1区)

・遺構 (第90・91図)

調査区東部、153号遺構(近世2土坑)に西側の一部を切られる。291cm×109cm×114cmで長方形の大形土坑である。南西部分に段を有する。

・遺物 (第132図)

出土資料は、磁器の碗(38点)・皿(8点)・蓋(1点)・瓶(5点)・紅猪口(1点)、陶器の碗(34点)・皿(10点)・鉢(1点)・蓋(1点)・壺(3点)・甕(12点)・瓶(136点)・香炉(1点)・播鉢(→56)(5点)・土瓶(3点)・水滴(1点)・灯明受皿(2点)・灯明皿(3点)・秉燭(3点)、土器の火鉢(18点)・焙烙(122点)・火消壺蓋(4点)・焼塩壺(12点)・灯明受皿(1点)・五徳(4点)・風口(12点)・灯明皿(1点)・瓦灯(2点)・秉燭(5点)・不明(20点)である。

このほかに144号遺構と153号遺構の両者からの出土資料として、磁器の碗(4点)・鉢(1点)・蓋(1点)、陶器の蓋(1点)・瓶(20点)・香炉(1点)・不明(3点)、土器の焙烙(2点)・火消壺(11点)・不明(5点)である。

磁器は、紅猪口(第132図-10)、碗(第132図-11～15)、皿(第133図-7:角枠「福」)である。

陶器は、碗(第132図-16～19)、輪花皿(第132図-20)、半胴甕(第132図-21:底部穿孔植木鉢転用)、灯明皿(第132図-22)、灯明受皿(第132図-23・24)、秉燭(第133図-5)、瓶(第133図-8:釘書「又一」、9～11:釘書「山に伊」、12:釘書「万」)である。

土器は、‘かわらけ’(第132図-25)、灯明受皿(第133図-6)、火鉢(第132図-26)、焙烙(第132図-27・28)、風口(第133図-1)、五徳(第133図-2)、焼塩壺(第133図-3:遺構間接合#1)、火消壺蓋(第133図-4)である。‘かわらけ’墨書は、第133図-15:判読不能、16:「大」、17:「八」カ、18:「中」、19:「定」カである。‘かわらけ’は169点(2891g)で、最小個体数は13点である。

金属製品は、煙管雁首(第133図-13)、小柄の柄(第133図-14:無文)がある。

＊遺構間接合

#1:ロクロ成形無刻印の焼塩壺(第133図-3)の小破片が12号遺構(近世2土坑)から、大破片が144号遺構(近世2土坑)から出土しており、接合距離は最大の29mである。

・自然遺物

貝類は、ヤマトシジミ(93点)・ハマグリ(10点)・アサリ(5点)・サザエ(2点)が出土した。

146号遺構 [G-7] (3-1区)

・遺構 (第92図)

1号遺構(御殿堀)北東外縁上に位置する。(90cm)×28cm×5cmで、長軸は北西―南東方向である。南東部は、141号遺構(近世2土坑)によって切られる。

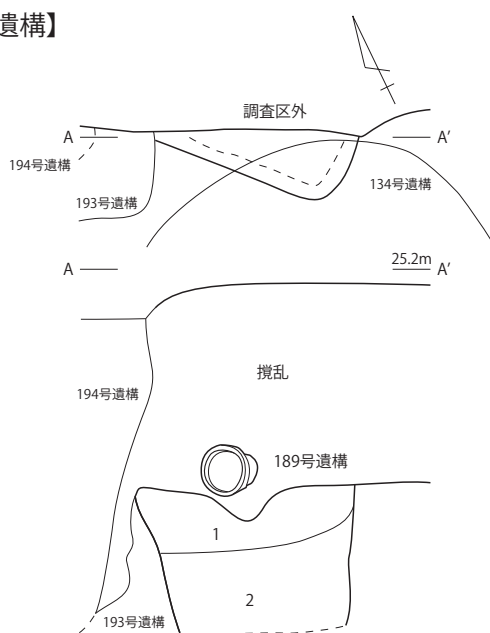
・遺物

出土資料は、磁器の碗(1点)、陶器の瓶(1点)である。‘かわらけ’は、1点(3g)である。

147号遺構 [I-5・6] (3-3区)

・遺構 (第92図)

【189号遺構】

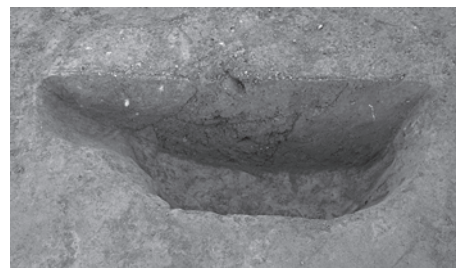
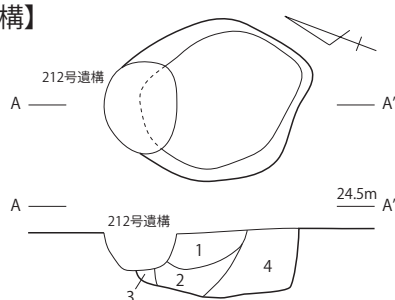


189号遺構断面(南西より)

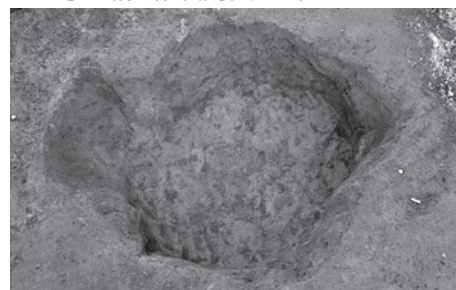


189号遺構(南西より)

【213号遺構】

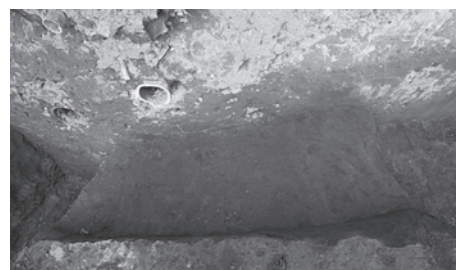
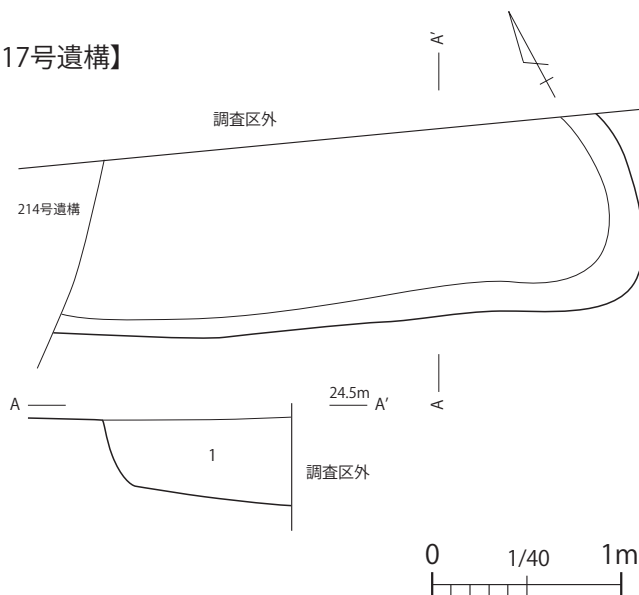


213号遺構断面(南西より)



213号遺構(南西より)

【217号遺構】



217号遺構(南西より)

土層説明

18号	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。ロームブロック含む。	213号	1	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm橙色スコリア含む。
	2	黒褐色	粘性やや強。締まりあり。褐色砂層含む。		2	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。茶褐色砂層含む。
217号	1	明褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径1mm橙色スコリア3%。		3	暗褐色	粘性あり。締まりあり。ロームブロック含む。
					4	黒褐色	粘性やや強。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。

第 94 図 近世 2 面の土坑 (28 : 1/40)

調査区北側、217号遺構(近世2土坑)の南西側に位置する。60cm×44cm×3cmの卵形を呈する。

・遺物

出土資料は、土器の灯明皿(1点)である。‘かわらけ’は、1点(3g)である。

148号遺構 [I-6] (3-2区)

・遺構(第92図)

調査区北東縁近く、217号遺構(近世2土坑)の南東側に位置する。84cm×70cm×12cmの略円形を呈する。

149号遺構 [G・H-7・8] (3-1区)

・遺構(第90・91図)

調査区東部、153号遺構(近世2土坑)の北西に位置する。長軸は北東―南西、118cm×82cm×28cmの長方形を呈する。

・遺物(第134図)

出土資料は、磁器の碗(4点)・皿(2点)・瓶(1点)・杯(1点)、陶器の碗(4点)・皿(1点)・瓶(3点)・不明(1点)、土器の火鉢(1点)・焼塩壺蓋(1点)・不明(1点)である。

磁器は、杯(第134図-1)である。‘かわらけ’は18点(74g)で、最小個体数は2点である。

＊遺構間接合

#10:陶器瓶(第132図-7)は、125号遺構(近世2土坑)との遺構間接合で、接合距離は3mである。

150号遺構 [G-8] (3-1区)

・遺構(第93図)

1号遺構(御殿堀)北西外縁直上に位置する。北西側に141号遺構(近世2土坑)、西側に113号遺構(近世2期井戸)が位置する。56cm×50cm×23cmの不整円形を呈する。

151号遺構 [G-6・7, H-7] (3-1区)

・遺構(第93図)

1号遺構(御殿堀)北東外縁上に位置する。240cm×(140cm)×60cmの大形方形土坑で、南西部を大形の110号遺構(近世2土坑)に切られる。

・遺物(第134図)

出土資料は、磁器の碗(3点)、陶器の碗(13点)・瓶(5点)・香炉(1点)、土器の灯明受皿(1点)・不明(2点)である。

土器は、灯明受皿(第134図-2)である。‘かわらけ’は189点(906g)で、最小個体数は23点である。

石製品は、硯(第134図-3)、火打石(第134図-4)である。

153号遺構 [G・H-8] (3-1区)

・遺構(第90・91図)

調査区東部、東側に位置する144号遺構(近世2土坑)を切り、西側の149号遺構(近世2土坑)と接する。191cm×92cm×45cmの長方形を呈する。

・遺物

‘かわらけ’は、11 点（29g）である。

189 号遺構 [I-8]（3-1 区）

・遺構（第 94 図）

調査区北東縁に位置する。形状は方形と思われるが過半が調査区外に位置し判然としない。上部を南側に位置する 194 号遺構（近代土坑）に切られる。北西方向に 193 号遺構・194 号遺構（近代土坑）が位置する。

・遺物

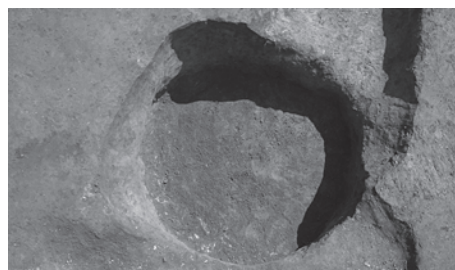
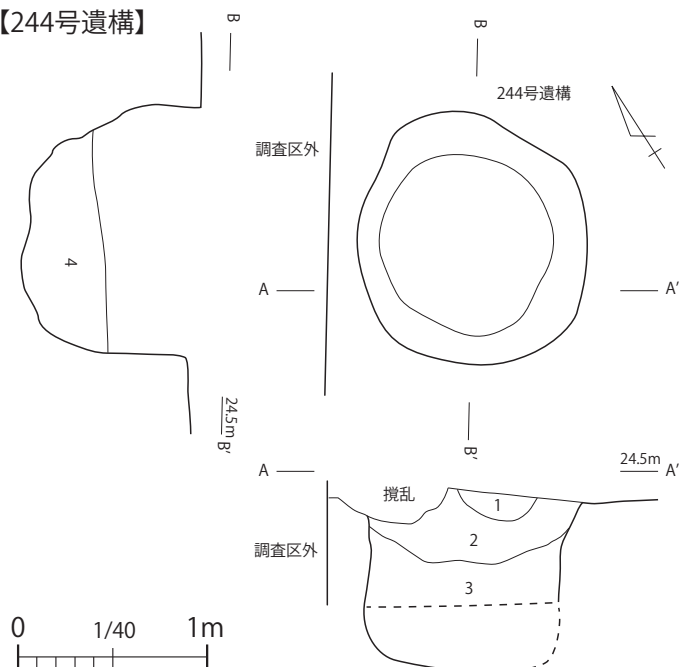
出土資料は、磁器の鉢（1 点）、陶器の皿（1 点）・瓶（2 点）、土器の灯明皿（1 点）である。

213 号遺構 [H-4]（3-3 区）

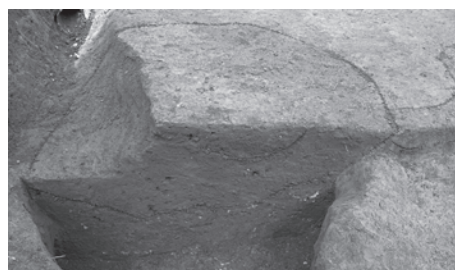
・遺構（第 94 図）

1 号遺構（御殿堀）屈曲部北西方向に位置する。(112cm) × 85cm × 34cm の卵形を呈する。北西

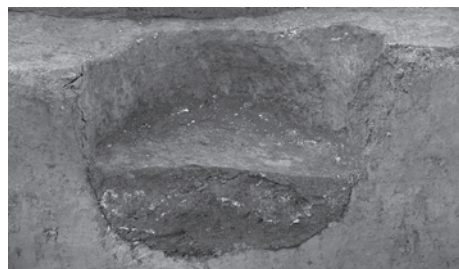
【244号遺構】



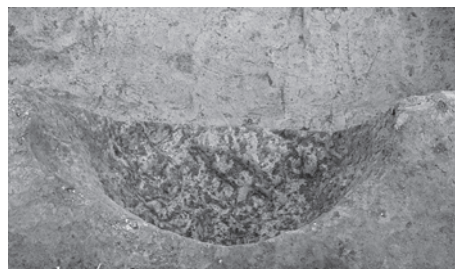
244号遺構(北西より)



244号遺構断面(南西より)



244号遺構断割り(南東より)



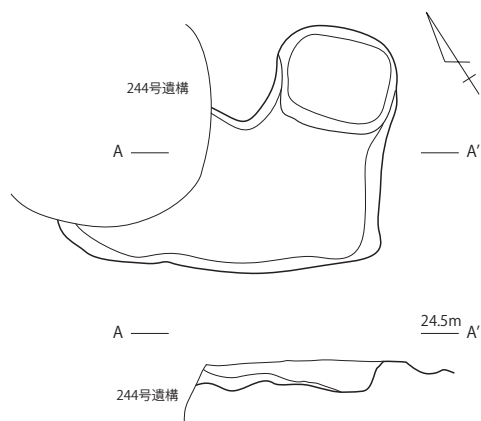
244号遺構完掘(北西より)

土層説明

244号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-2cmロームブロック含む。黒色土主体。
	2	黒褐色	粘性やや強。締まりあり。径1mmローム粒3%。
	3	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-5mm白色粘土3%。径1-3mmローム粒3%。
	4	黒色	粘性あり。締まりあり。にぶい黄色粘土ブロック含む。径2-3cmロームブロック・小礫含む。

第 95 図 近世 2 面の土坑（29：1/40）

【245号遺構】

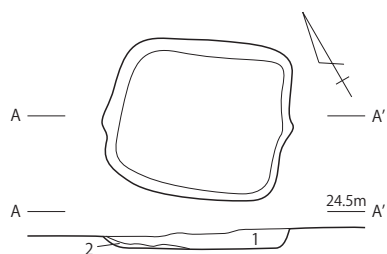


245号遺構断面(南西より)

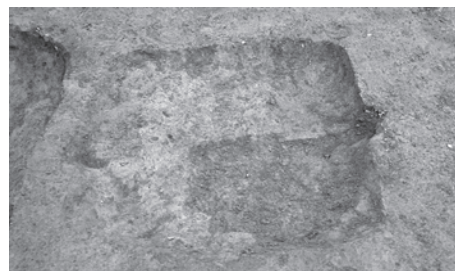


245号遺構(南東より)

【246号遺構】

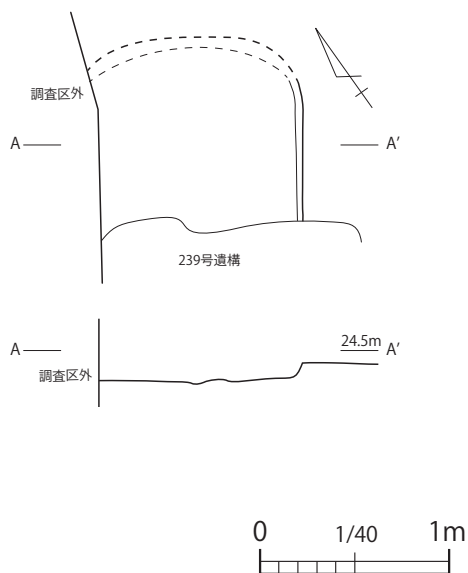


246号遺構断面(南西より)



246号遺構(南東より)

【248号遺構】



248号遺構(北西より)

土層説明

245号	1	黒褐色	粘性あり。縮まりやや欠く。ローム粒・小礫含む。
246号	1	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径2-4mm炭化物片・ローム粒含む。
	2	褐色	粘性あり。縮まりあり。ソフトローム主体。

第 96 図 近世 2 面の土坑 (30 : 1/40)

部分は 212 号遺構（近世 2 ピット）に切られる。

・遺物（第 134 図）

出土資料は、磁器の碗（2 点）・瓶（1 点）、陶器の碗（1 点）・皿（1 点）である。

陶器は、碗（第 134 図 -5）である。‘かわらけ’は、8 点（45g）である。

・自然遺物

貝類は、サザエ（1 点）が出土した。

217 号遺構 [I-6, J-5・6]（3-2・3 区）

・遺構（第 94 図）

調査区北東外縁部に位置する。(300cm) × (100cm) × (50cm) で北西部を 214 号遺構(近世 1 上水路)で欠損し、北東部の多くが調査区外に位置する。

・遺物（第 134 図）

出土資料は、磁器の碗（3 点）・皿（1 点）・鉢（1 点）・瓶（1 点）・蓋物（2 点）、陶器の碗（1 点）・皿（2 点）・蓋（1 点）・甕（1 点）・瓶（4 点）・播鉢（4 点）、土器の型（1 点）・さな（1 点）・七輪（2 点）・不明（3 点）である。

陶器は、急須蓋（第 134 図 -7）である。

土器は、七輪（第 134 図 -6）である。‘かわらけ’は、2 点（6g）である。

金属製品は、環状の把手（第 134 図 -8）、不明鉄製品（第 134 図 -9）がある。

・自然遺物

貝類は、ハマグリ（7 点）・アサリ（1 点）が出土した。

244 号遺構 [G-3]（3-4 区）

・遺構（第 95 図）

調査区北西側の 51 号遺構（近世 1 上水路）と 70 号遺構（近世 1 上水路）の間に位置する。南東側に位置する 245 号遺構（近世 2 土坑）を切る。135cm × 130cm × 98cm の略円形を呈する。

・遺物（第 134 図）

出土資料は、磁器の碗（12 点）・皿（1 点）・瓶（1 点）、陶器の皿（2 点）・甕（1 点）・瓶（2 点）・播鉢（1 点）・不明（2 点）、土器の焙烙（1 点）・不明（15 点）である。‘かわらけ’は 23 点（124g）で、最小個体数は 2 点である。

金属製品は、煙管吸口（第 134 図 -10）、鉄釘（第 134 図 -11）である。そのほか釘が 4 点出土した。

・自然遺物

貝類は、サザエ（1 点）が出土した。

245 号遺構 [F・G-3]（3-4 区）

・遺構（第 96 図）

調査区北西側の 51 号遺構（近世 1 上水路）と 70 号遺構（近世 1 上水路）の間に位置する。(170cm) × 125cm × 16cm の不整形を呈する。北東部に略方形の落ち込みを伴う。北側の一部を 244 号遺構（近世 2 土坑）によって切られる。

246 号遺構 [F・G-3]（3-4 区）

・遺構（第 96 図）



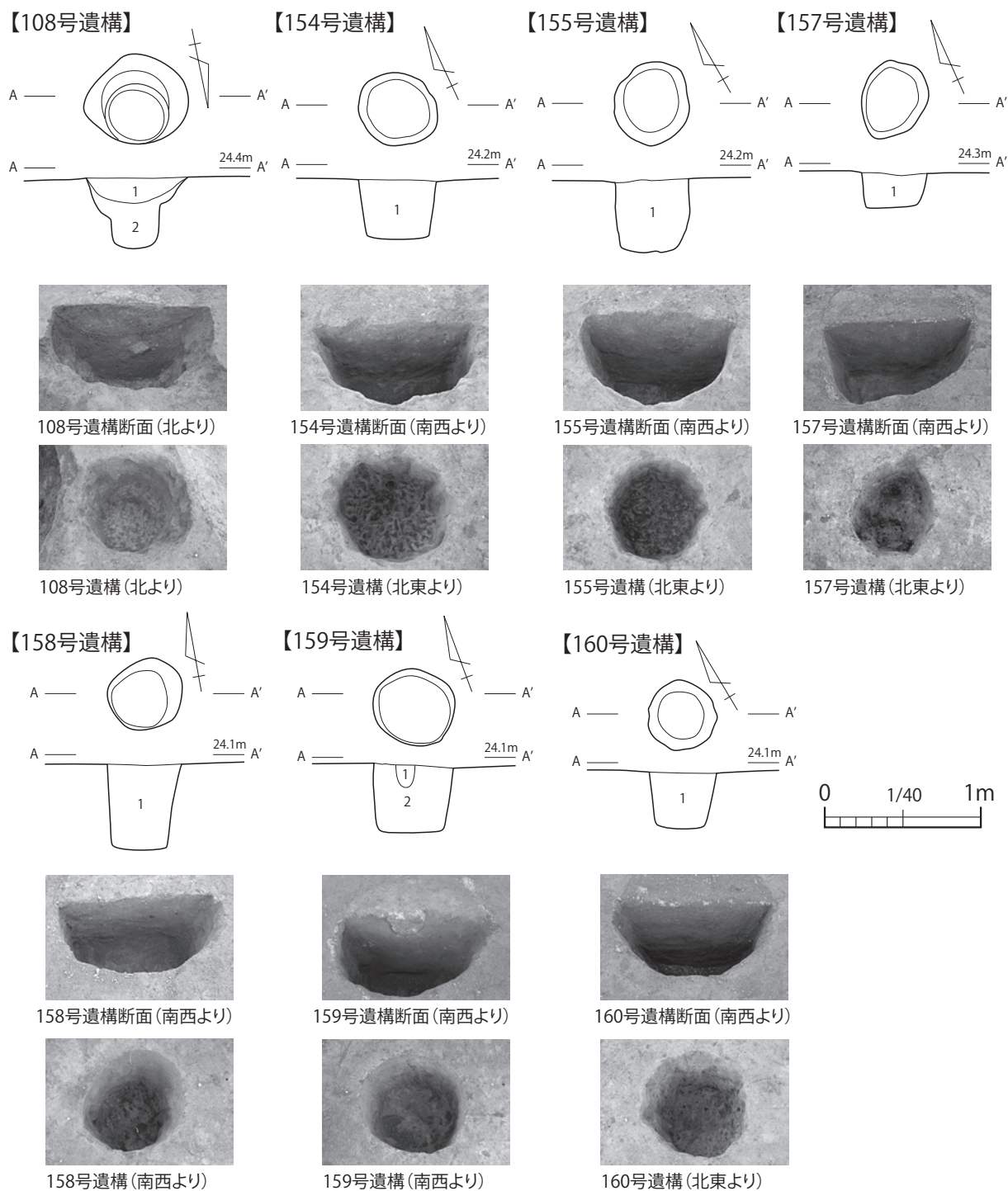
第 97 図 近世 2 面の柱穴土坑分布図 (1/200)



写真-1



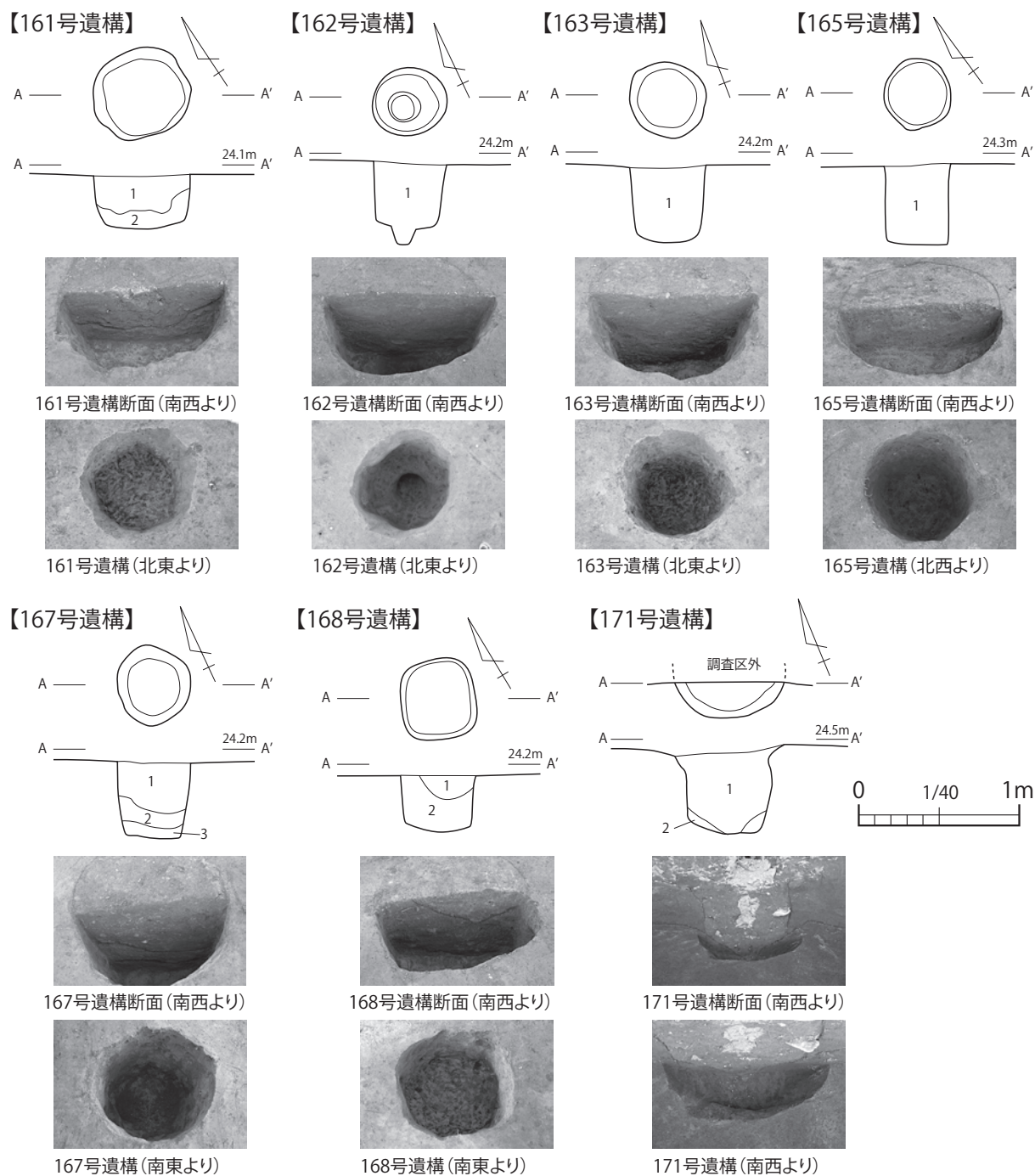
写真-2



土層説明

108号	1	暗褐色	粘性やや強。締まりあり。径2-4mmローム粒30%。
	2	黒褐色	粘性やや強。締まりあり。径1-5cmロームブロック・瓦片含む。
154号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-5mm黄褐色ローム粒3%。
155号	1	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径1-5mm黄褐色ローム粒5%。
157号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。
158号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径2-4mm黄褐色ローム粒含む。
159号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりやや欠く。白色粘土ブロック含む。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径1-5mm黄褐色ローム粒含む。
160号	1	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径1-2mm黄褐色ローム粒3%。

第 98 図 近世 2 面の柱穴土坑（1：1/40）

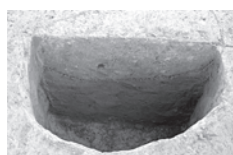
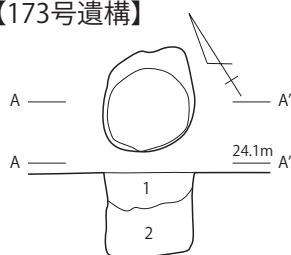


土層説明

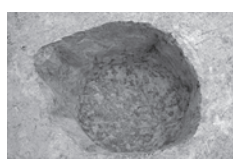
161号	1	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径2-4mm黄褐色ローム粒3%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径2-4mm黄褐色ローム粒3%。
162号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径2-5mm黄褐色ローム粒5%。
163号	1	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径2-4mm黄褐色ローム粒3%。
165号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-3mm黄褐色ローム粒5%。
167号	1	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。径3-5mmロームブロック10%。
	2	暗褐色	粘性あり。締まりやや欠く。ソフトローム主体。
	3	極暗褐色	粘性あり。締まりやや欠く。2層より黒色土多。
168号	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1-5mmローム粒20%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径5-15mmロームブロック10%。
171号	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1-5cm白色粘土ブロック含む。
	2	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径3-5mmロームブロック3%。

第 99 図 近世 2 面の柱穴土坑 (2 : 1/40)

【173号遺構】

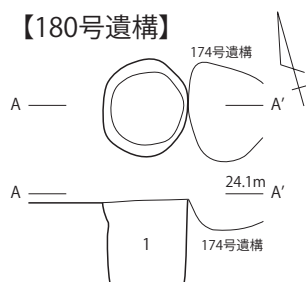


173号遺構断面(南西より)

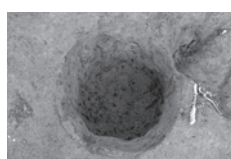


173号遺構(北西より)

【180号遺構】

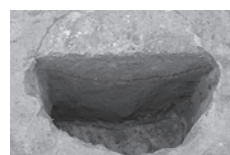
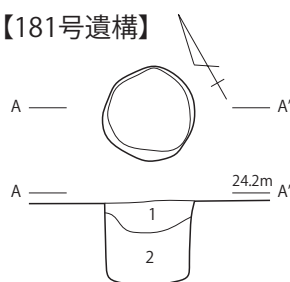


180号遺構断面(南西より)

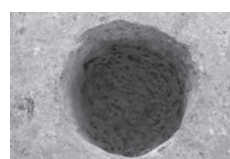


180号遺構(南西より)

【181号遺構】

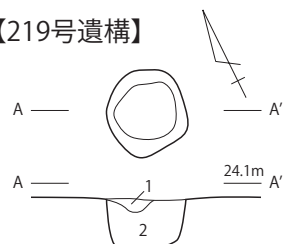


181号遺構断面(南西より)

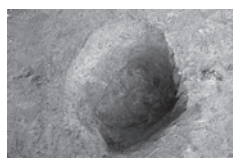


181号遺構(北東より)

【219号遺構】

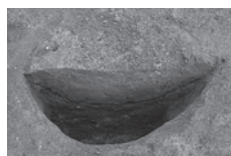
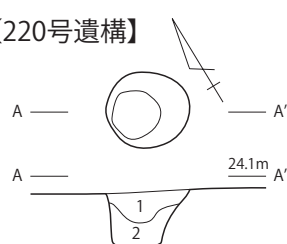


219号遺構断面(南西より)

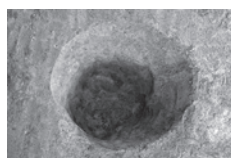


219号遺構(南西より)

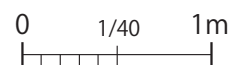
【220号遺構】



220号遺構断面(南西より)



220号遺構(南西より)

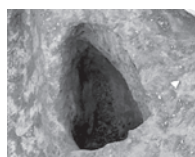
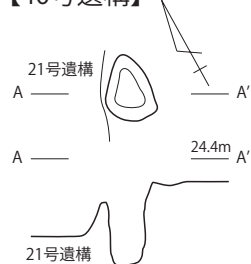


土層説明

173号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-3mmローム粒10%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりやや強。径1mmローム粒3%。
180号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径2-5mmロームブロック5%。炭化物片含む。
181号	1	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。径5-10mmロームブロック20%。
	2	極暗褐色	粘性あり。締まりあり。内容物なし。
219号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径2-3mmローム粒3%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm橙色スコリア含む。
220号	1	黒褐色	粘性あり。締まりやや強。径1mm黄褐色ローム粒5%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。内容物なし。

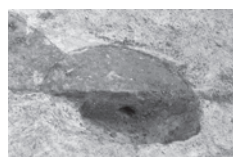
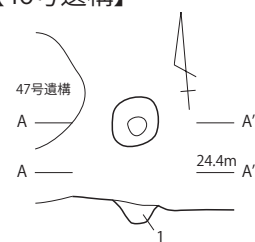
第 100 図 近世 2 面の柱穴土坑 (3 : 1/40)

【40号遺構】

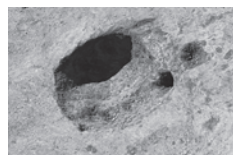


40号遺構 (南東より)

【46号遺構】

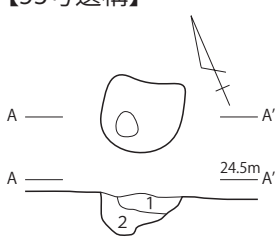


46号遺構断面(南より)

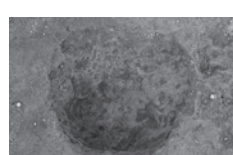


46号遺構 (北西より)

【53号遺構】

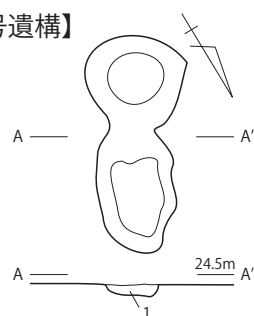


53号遺構断面(南東より)

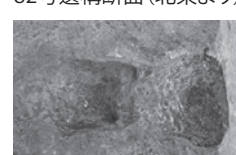


53号遺構 (南西より)

【82号遺構】

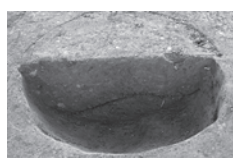
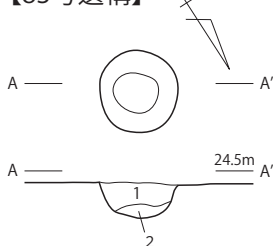


82号遺構断面(北東より)

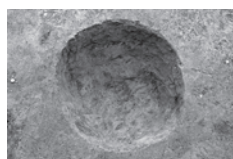


82号遺構 (北西より)

【83号遺構】

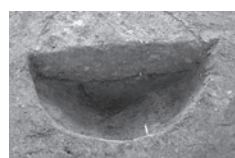
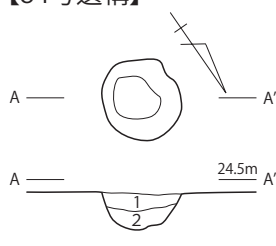


83号遺構断面(北東より)

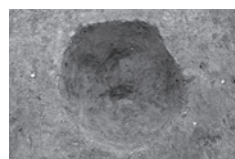


83号遺構 (北東より)

【84号遺構】

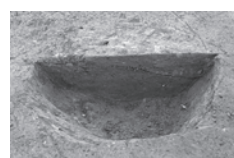
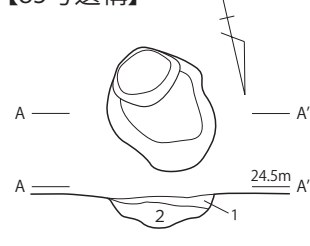


84号遺構断面(北東より)

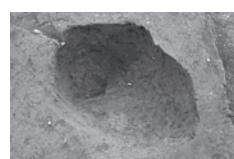


84号遺構 (北東より)

【85号遺構】

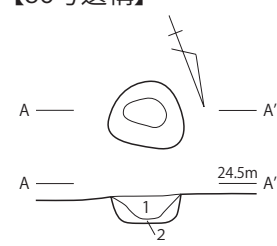


85号遺構断面(北東より)

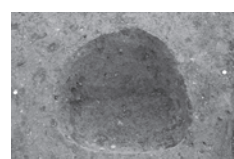


85号遺構 (北東より)

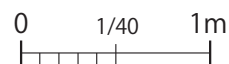
【86号遺構】



86号遺構断面(北東より)



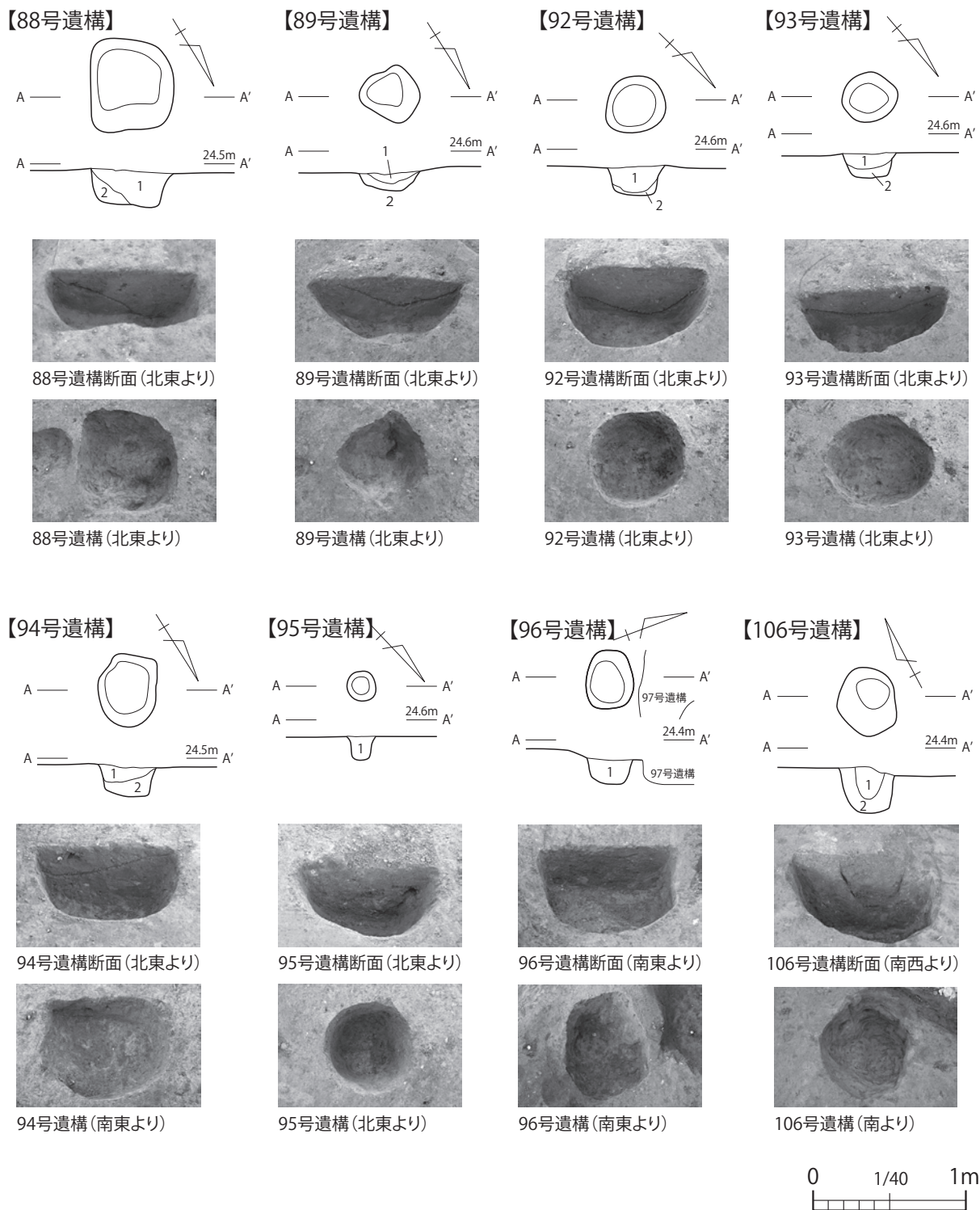
86号遺構 (北東より)



土層説明

46号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-30mmロームブロック10%。径2mm焼土粒・炭化物片含む。	84号	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1cmロームブロック3%。
					2	暗褐色	粘性やや強。締まりあり。内容物なし。
53号	1	黒褐色	粘性あり。締まりやや強。径1mmローム粒3%。	85号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cmロームブロック含3%。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。1層土ブロック状に含む。		2	黒褐色	粘性やや強。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。
82号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cmロームブロック3%。	86号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-3cmロームブロック10%。
83号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cmロームブロック3%。		2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。内容物なし。
	2	暗褐色	粘性やや強。締まりあり。内容物なし。				

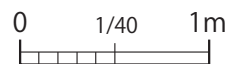
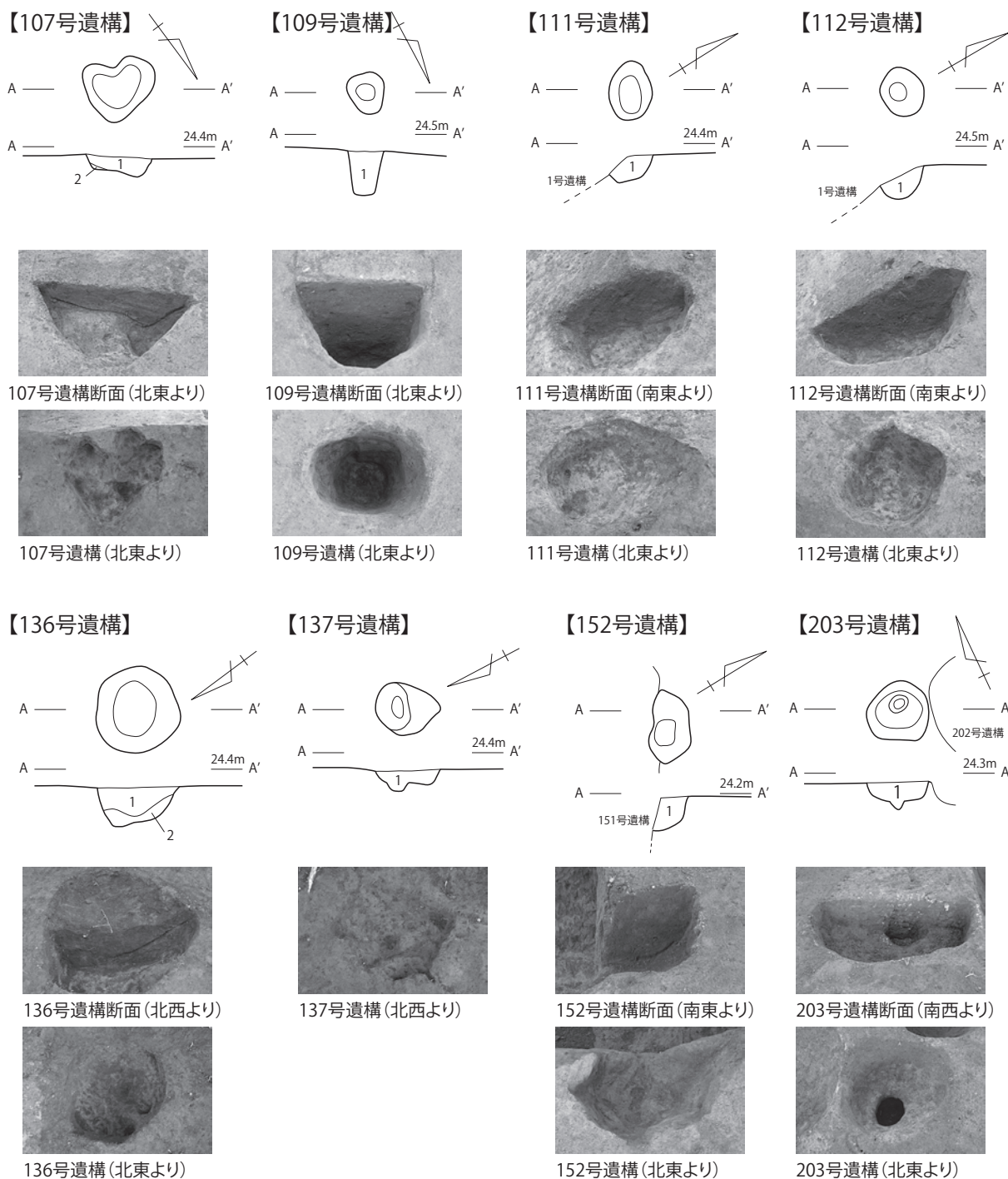
第 101 図 近世 2 面のピット (1:1/40)



土層説明

88号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cmロームブロック3%。	94号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径5mm砂礫・炭化物片含む。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。内容物なし。		2	暗褐色	粘性あり。締まりあり。内容物なし。
89号	1	黒褐色	粘性あり。径1mm黄褐色ローム粒3%。	95号	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1cm明黄褐色粘土ブロック含む。
	2	暗褐色	粘性あり。締まりあり。内容物なし。		2	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1-2mmローム粒30%。
92号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒3%。	106号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-2mmローム粒含む。
	2	暗褐色	粘性やや強。締まりあり。内容物なし。		2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1-2mmローム粒30%。
93号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cmロームブロック・炭化物片含む。				
	2	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒含む。				

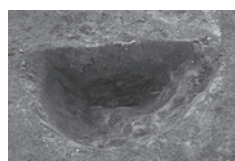
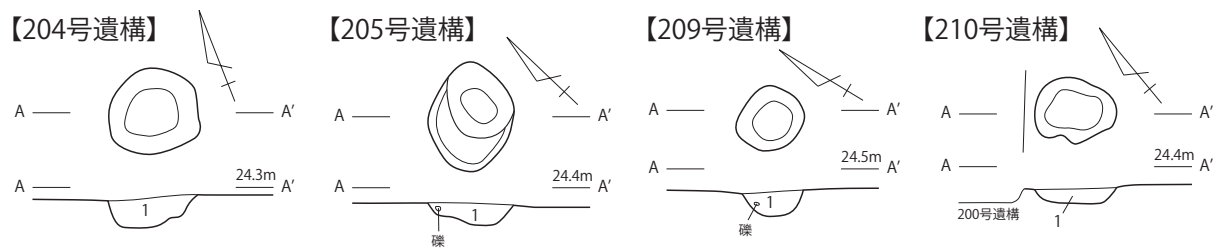
第 102 図 近世 2 面のピット (2:1/40)



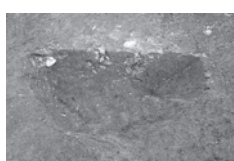
土層説明

107号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cm黒色土ブロック含む。	136号	1	黒褐色	粘性あり。締まりやや欠く。黒色土主体。
	2	暗褐色	粘性やや強。締まりあり。内容物なし。		2	暗褐色	粘性あり。締まりあり。ソフトローム主体。
109号	1	暗褐色	粘性やや強。締まりあり。径1mm橙色スコリア5%。径1mm黄褐色ローム粒10%。	137号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりやや欠く。径1cmロームブロック含む。黒色土主体。
111号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。内容物なし。	152号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm黄褐色ローム粒含む。
112号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cm黒色土ブロック含む。	203号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりあり。径1mm橙色スコリア含む。

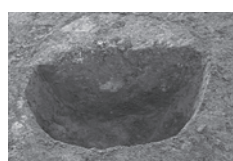
第 103 図 近世 2 面のピット (3 : 1/40)



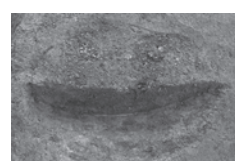
204号遺構断面(南西より)



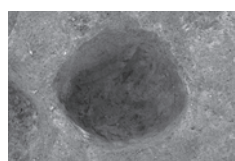
205号遺構断面(南西より)



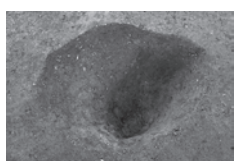
209号遺構断面(南西より)



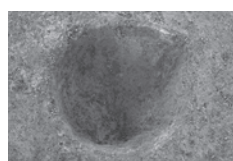
210号遺構断面(南西より)



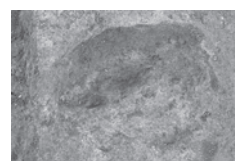
204号遺構(北西より)



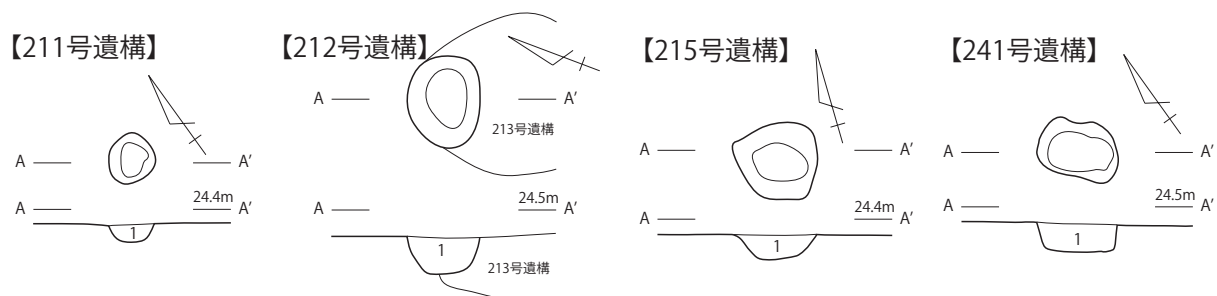
205号遺構(南東より)



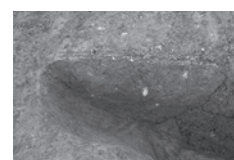
209号遺構(南東より)



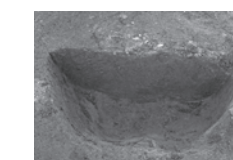
210号遺構(南西より)



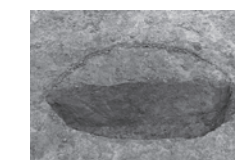
211号遺構断面(南西より)



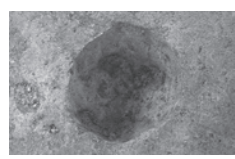
212号遺構断面(南西より)



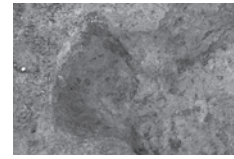
215号遺構断面(南西より)



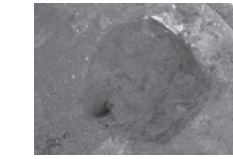
241号遺構断面(南西より)



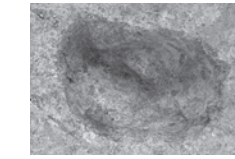
211号遺構(南西より)



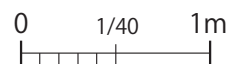
212号遺構(南西より)



215号遺構(南西より)



241号遺構(南西より)

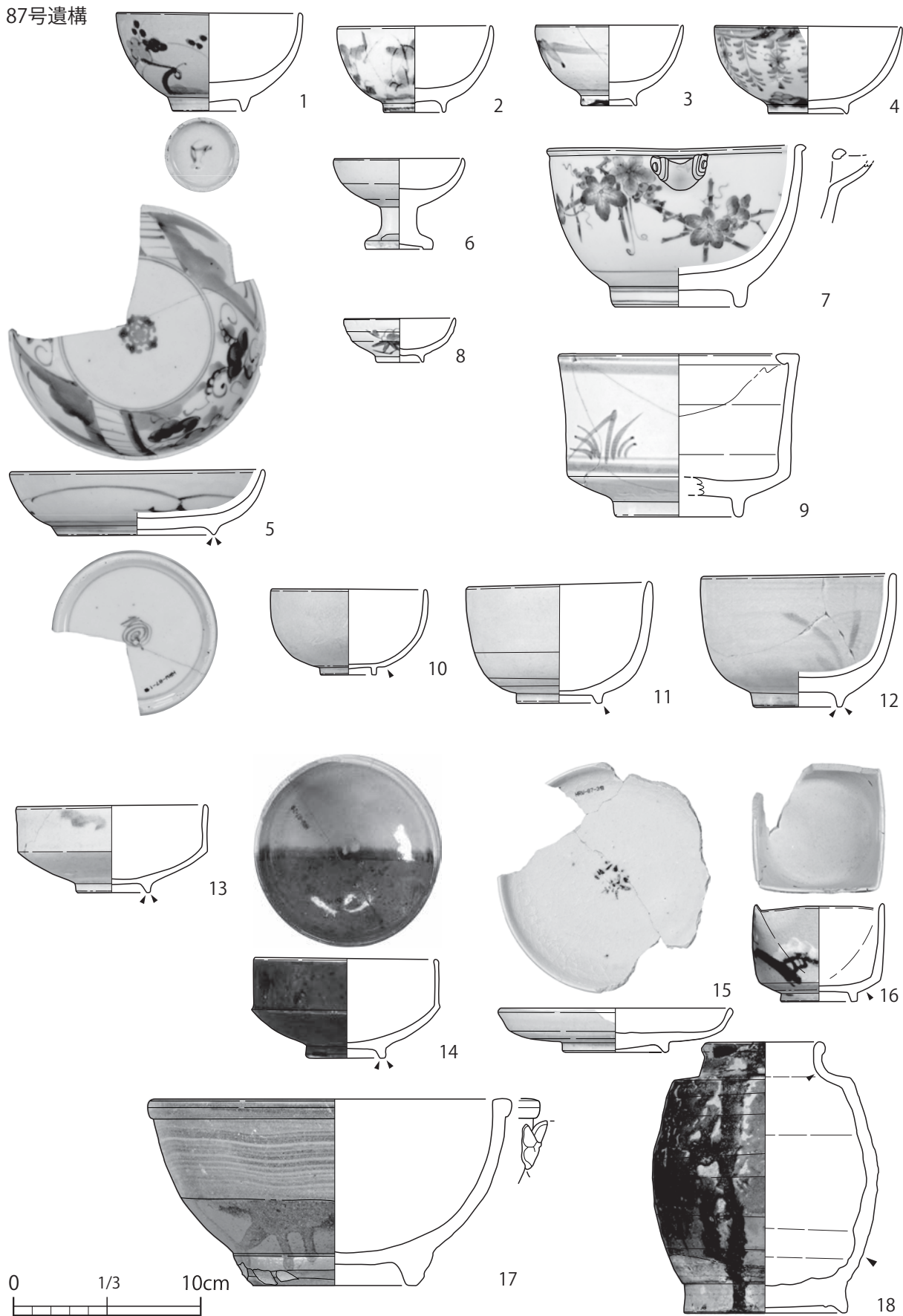


土層説明

204号	1	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径1mm黄褐色ローム粒含む。	210号	1	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径1mm黄褐色ローム粒含む。
205号	1	黒褐色	粘性やや欠く。縮まりあり。径1cm小礫・灰白色粘土ブロック含む。	211号	1	極暗褐色	粘性あり。縮まりあり。径1mm橙色スコリア含む。
				212号	1	黒褐色	粘性やや強。縮まりあり。径1-2cm小礫含む。
209号	1	極暗褐色	粘性あり。縮まりあり。径3-5cmロームブロック・径1-3mm灰白色粘土ブロック含む。	215号	1	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。上面に白色粘土ブロック含む。
				241号	1	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。黒色土主体。

第 104 図 近世 2 面のピット (4 : 1/40)

87号遺構



第 105 図 近世 2 面の遺物 (1 : 1/3)

調査区北西側の 51 号遺構（近世 1 上水路）と 70 号遺構（近世 1 上水路）の間、245 号遺構（近世 2 土坑）の南東側に隣接する。100cm × 82cm × 6cm の方形を呈する。

・遺物（第 134 図）

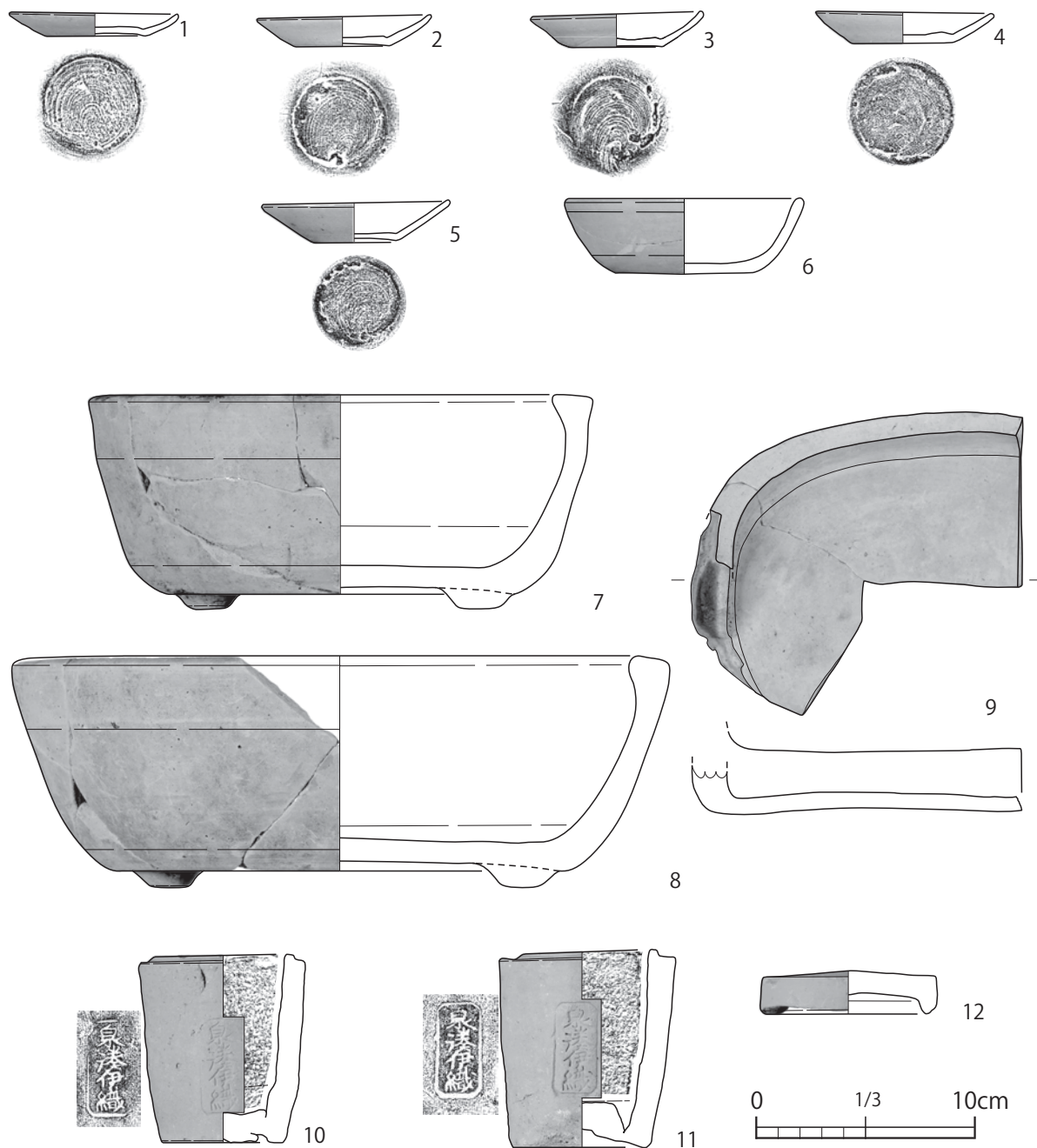
出土資料は、磁器の碗（5 点）・皿（1 点）・香炉（2 点）、陶器の碗（3 点）・皿（13 点）・鉢（6 点）・植木鉢（1 点）、土器の焼塩壺（9 点）・不明（4 点）である。

磁器は、碗（第 134 図 -12）である。

陶器は、皿（第 135 図 -1）、鉢（第 135 図 -2）である。

‘かわらけ’は、2 点（65g）である。

87号遺構



第 106 図 近世 2 面の遺物（2 : 1/3）

金属製品は、鉄釘（第 134 図 -14）である。

瓦を再加工した硯のミニチュア製品（第 134 図 -13）がある。

・自然遺物

貝類は、アカガイ（1 点）が出土した。

248 号遺構 [H-3]（3-4 区）

・遺構（第 96 図）

70 号遺構（近世 1 上水路）北西端部の北側、南西に位置する 239 号遺構（近代土坑）に切られ、北西側は調査区外となる。(105cm) × (105cm) × 10cm であるが、全体形状は不明である。

・遺物

出土資料は、磁器の碗（2 点）、陶器の碗（1 点）・鉢（1 点）、土器の鉢（1 点）・不明（1 点）である。

‘かわらけ’は、8 点（20g）である。

【柱穴土坑】

108 号遺構 [G-6]（2 区）

・遺構（第 98 図）

1 号遺構（御殿堀）北東外縁部上、85 号遺構（近世 2 土坑）が北側に、118 号遺構（近世 2 土坑）が南側に位置する。66cm × 58cm × 45cm で略円形を呈する。

・遺物

出土資料は、磁器の碗（2 点）・皿（1 点）、陶器の甕（1 点）・播鉢（1 点）、土器の焙烙（6 点）・焼塩壺（1 点）である。‘かわらけ’は、21 点（36g）である。

154 号遺構 [H-6]（3-2 区）

・遺構（第 98 図）

調査区北東部、径 54cm × 39cm の円形を呈する。

155 号遺構 [H-6]（3-2 区）

・遺構（第 98 図）

調査区北東部、154 号遺構（近世 1 土坑）の北西方向に位置する。径 52cm × 45cm の略円形を呈する。

157 号遺構 [H-6]（3-2 区）

・遺構（第 98 図）

調査区北東部、87 号遺構（近世 2 井戸）の北東部に位置する。50cm × 40cm × 22cm の略楕円形を呈する。

158 号遺構 [I-6]（3-2 区）

・遺構（第 98 図）

調査区北東部、148 号遺構（近世 2 土坑）の南方に位置する。径 45cm × 54cm の略円形を呈する。

159 号遺構 [I-6]（3-2 区）

・遺構（第 98 図）

調査区北東部、158 号遺構（近世 1 土坑）の北西に位置する。径 52cm × 44cm の円形を呈する。

160 号遺構 [I-5]（3-2 区）

・遺構（第 98 図）

調査区北東部、128 号遺構（近代礎石）と重複する。径 44cm × 36cm の円形を呈する。

161 号遺構 [I-6]（3-2 区）

・遺構（第 99 図）

調査区北東部、160 号遺構（近世 1 土坑）の南東方向に位置する。60cm × 55cm × 33cm の略円形を呈する。（→ 73）

162 号遺構 [H・I-5]（3-2 区）

・遺構（第 99 図）

調査区北東部、160 号遺構（近世 1 土坑）の南西方向に位置する。径 42cm × 50cm の円形を呈する。底面にピット状の窪みを有する。

163 号遺構 [H-5・6]（3-2 区）

・遺構（第 99 図）

調査区北東部、161 号遺構（近世 1 土坑）の南西方向に位置する。径 48cm × 46cm の円形を呈する。

165 号遺構 [H-5・6]（3-2 区）

・遺構（第 99 図）

調査区北東部、157 号遺構（近世 1 土坑）の北西方向に位置する。径 42cm × 50cm の円形を呈する。

167 号遺構 [H-6]（3-2 区）

・遺構（第 99 図）

調査区北東部、124 号遺構（近代礎石）と重複する。50cm × 45cm × 48cm の略円形を呈する。

168 号遺構 [H-6]（3-2 区）

・遺構（第 99 図）

調査区北東部、167 号遺構（近世 1 土坑）の北西方向に位置する。径 50cm × 35cm の略円形を呈する。

171 号遺構 [I・J-6]（3-2 区）

・遺構（第 99 図）

調査区北東部、北東部分は調査区外となる。(68cm) × (22cm) × 55cm の円形を呈するものと思われる。

173 号遺構 [I-6]（3-2 区）

・遺構（第 100 図）

調査区北東部、防火水槽西側に位置する。52cm × 48cm × 43cm の略円形を呈する。

180 号遺構 [H-7]（3-2 区）

・遺構（第 100 図）

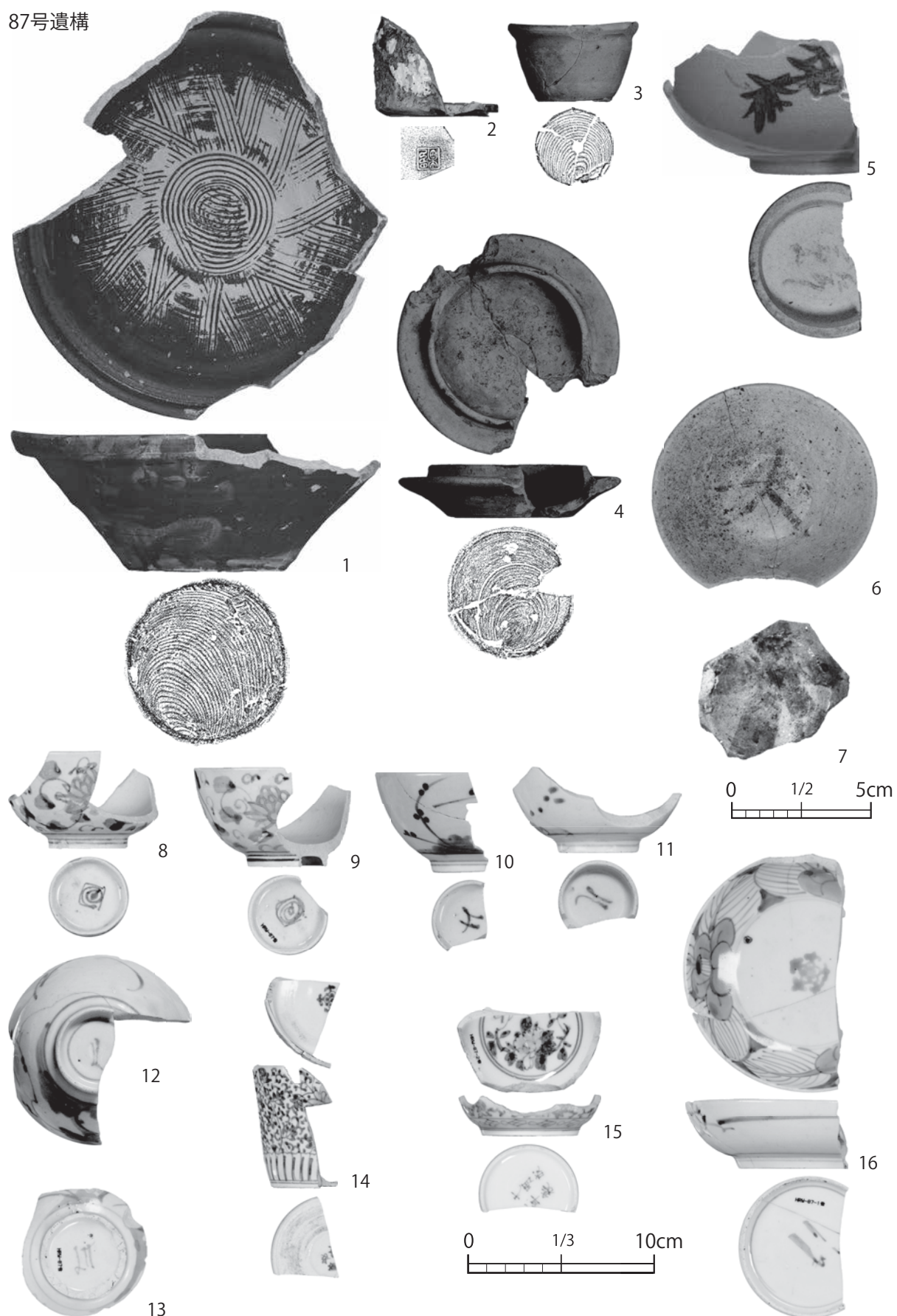
調査区北東部、防火水槽南西に位置する。174 号遺構（近世 1 土坑）と隣接する。52cm × 47cm × 45cm の略円形を呈する。

181 号遺構 [H-6]（3-2 区）

・遺構（第 100 図）

調査区北東部、163 号遺構（近世 1 土坑）の南東、168 号の北西に位置する。径 50cm × 44cm

87号遺構



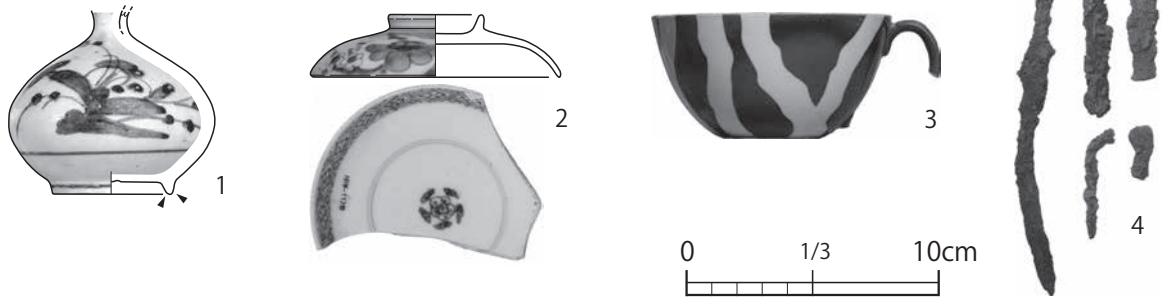
第 107 図 近世 2 面の遺物 (3 : 1/2 ・ 1/3)

87号遺構

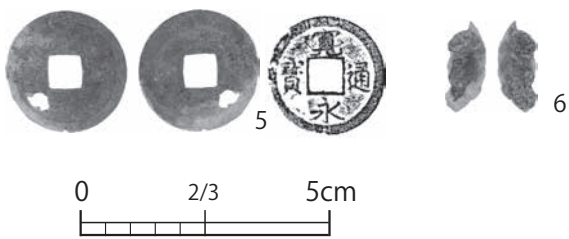


第 108 図 近世 2 面の遺物 (4 : 2/3 ・ 1/2 ・ 1/3)

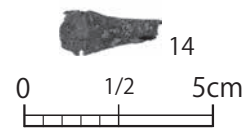
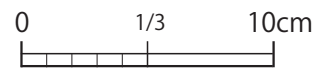
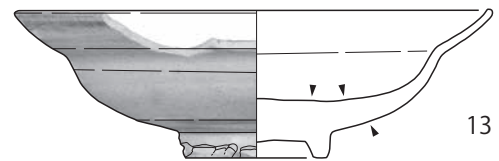
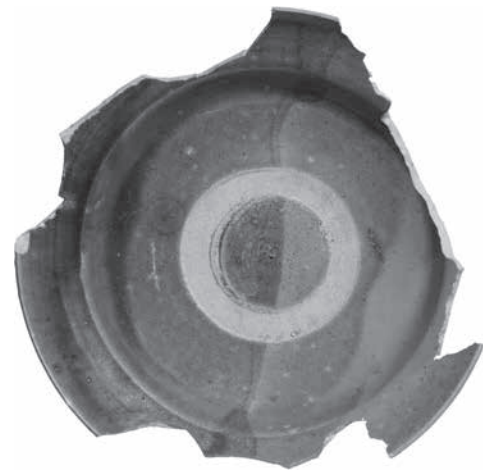
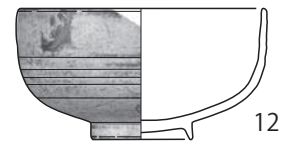
113号遺構



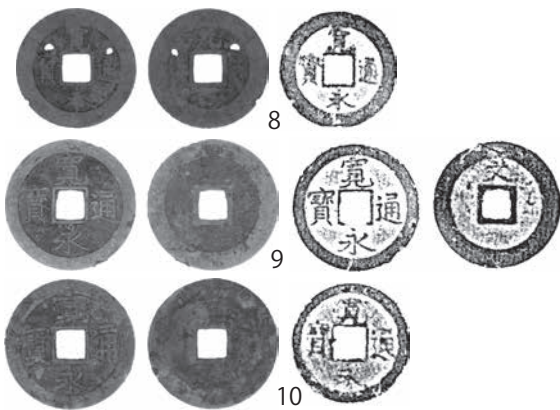
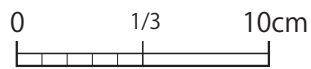
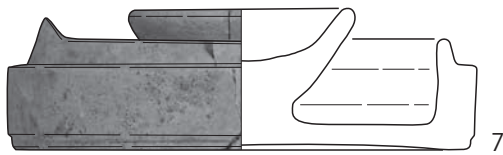
34号遺構



44号遺構

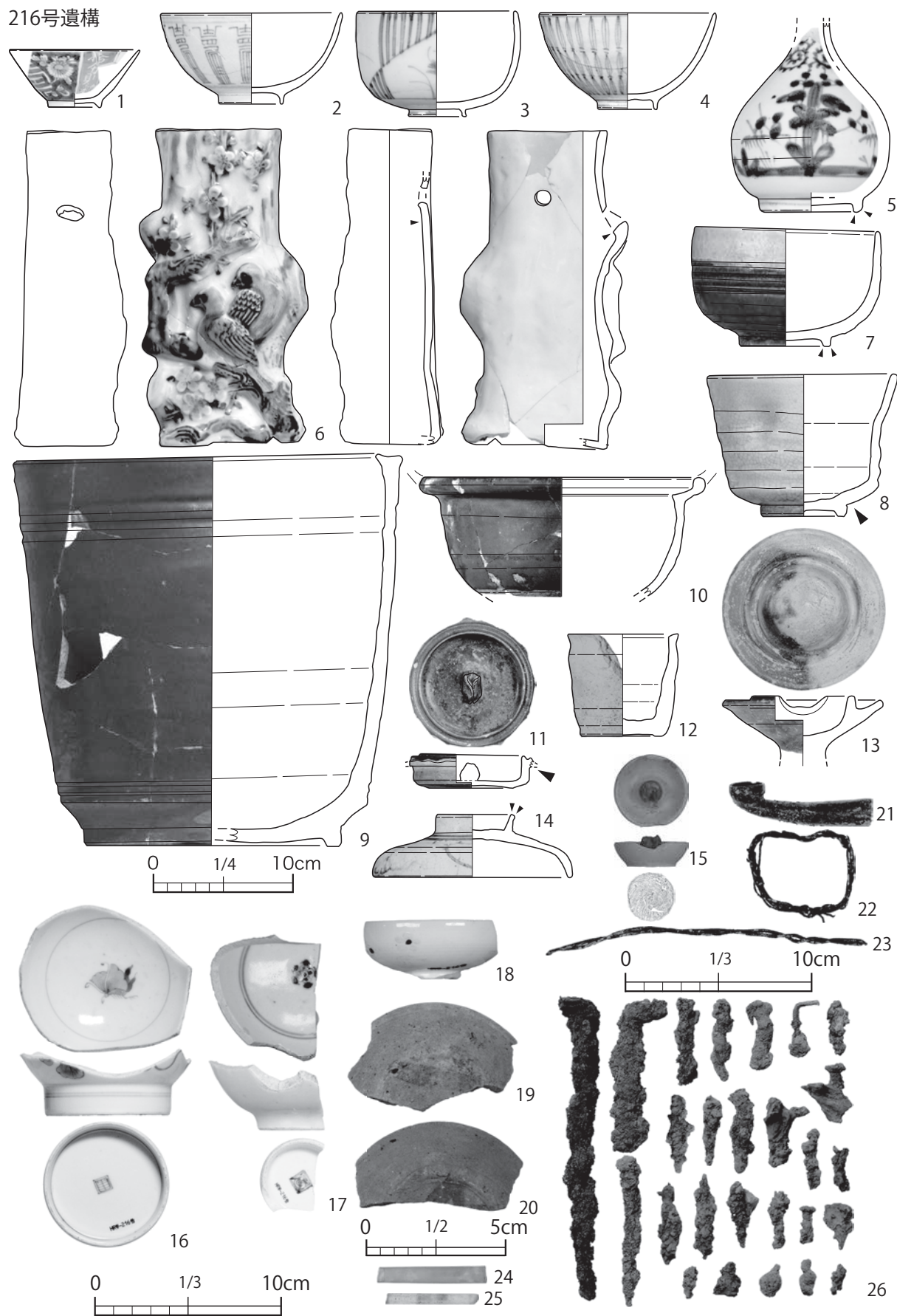


13号遺構



第 109 図 近世 2 面の遺物 (5 : 2/3 ・ 1/2 ・ 1/3)

216号遺構



第110図 近世2面の遺物 (6: 1/2・1/3・1/4)

の円形を呈する。

219号遺構 [J-4・5] (3-3区)

・遺構 (第100図)

調査区北部、214号遺構 (近世1上水路) の北西に位置する。径44cm × 25cmの略円形を呈する。

220号遺構 [J-4] (3-3区)

・遺構 (第100図)

調査区北部の北西縁近くで、南東方向には216号遺構 (近世2地下室) が位置する。44cm × 40cm × 30cmの略円形を呈する。

【ピット】

40号遺構 [D-2] (1区)

・遺構 (第101図)

調査区南西部の33号遺構～36号遺構 (近世2畝跡群) の中で、畝跡群を切る21号遺構 (近世2土坑) の東側脇に位置する。34cm × 22cm × 44cmで卵形を呈する。

46号遺構 [F-4] (1区)

・遺構 (第101図)

1号遺構 (御殿堀) 北西外縁上、51号遺構 (近世1上水路) と70号遺構 (近世1上水路) の間に位置する。南西部に47号遺構 (近世2土坑) が位置する。径25cm × 6cmの円形を呈する。

53号遺構 [F-3] (1区)

・遺構 (第101図)

1号遺構 (御殿堀) 北西外縁上、51号遺構 (近世1上水路) と70号遺構 (近世1上水路) の間に位置する。北西方向に241号遺構 (近世2ピット) ・246号遺構 (近世2土坑)、南西方向に49号遺構 (近世2土坑)、南東方向に48号遺構 (近世2土坑) が位置する。43cm × 39cm × 20cmの不整形な形状を呈する。

82号遺構 [G-5・6] (2区)

・遺構 (第101図)

1号遺構 (御殿堀) 北西外縁直上に位置する。114cm × 52cm × 10cmで2つのピットが接続する。

・遺物

出土資料は、陶器の不明 (1点) である。‘かわらけ’は、1点 (1g) である。

83号遺構 [G-6] (2区)

・遺構 (第101図)

1号遺構 (御殿堀) 北西外縁直上に位置する。径42cm × 19cmの円形を呈する。

・遺物

出土資料は、土器の不明 (1点) である。

84号遺構 [G-6] (2区)

・遺構 (第101図)

1号遺構 (御殿堀) 北西外縁直上の83号遺構 (近世2ピット) の北東部に位置する。径43cm × 15cmの略円形を呈する。

・遺物（第 135 図）

出土資料は、磁器の碗（7 点）・皿（1 点）・蓋物（1 点）、陶器の碗（5 点）・鉢（2 点）・甕（2 点）・水注（4 点）・播鉢（1 点）・灯明受皿（1 点）、土器の鉢（1 点）・火鉢（7 点）・焙烙（2 点）・不明（7 点）である。

磁器は、皿（第 135 図-4：「×製」）である。

陶器底部（第 135 図-5）には、「いせや」の墨書がある。

土器は、火鉢（第 135 図-3：遺構間接合 # 12）である。‘かわらけ’墨書（第 135 図-6 判読不能）である。‘かわらけ’は 18 点（122g）で、最小個体数は 1 点である。

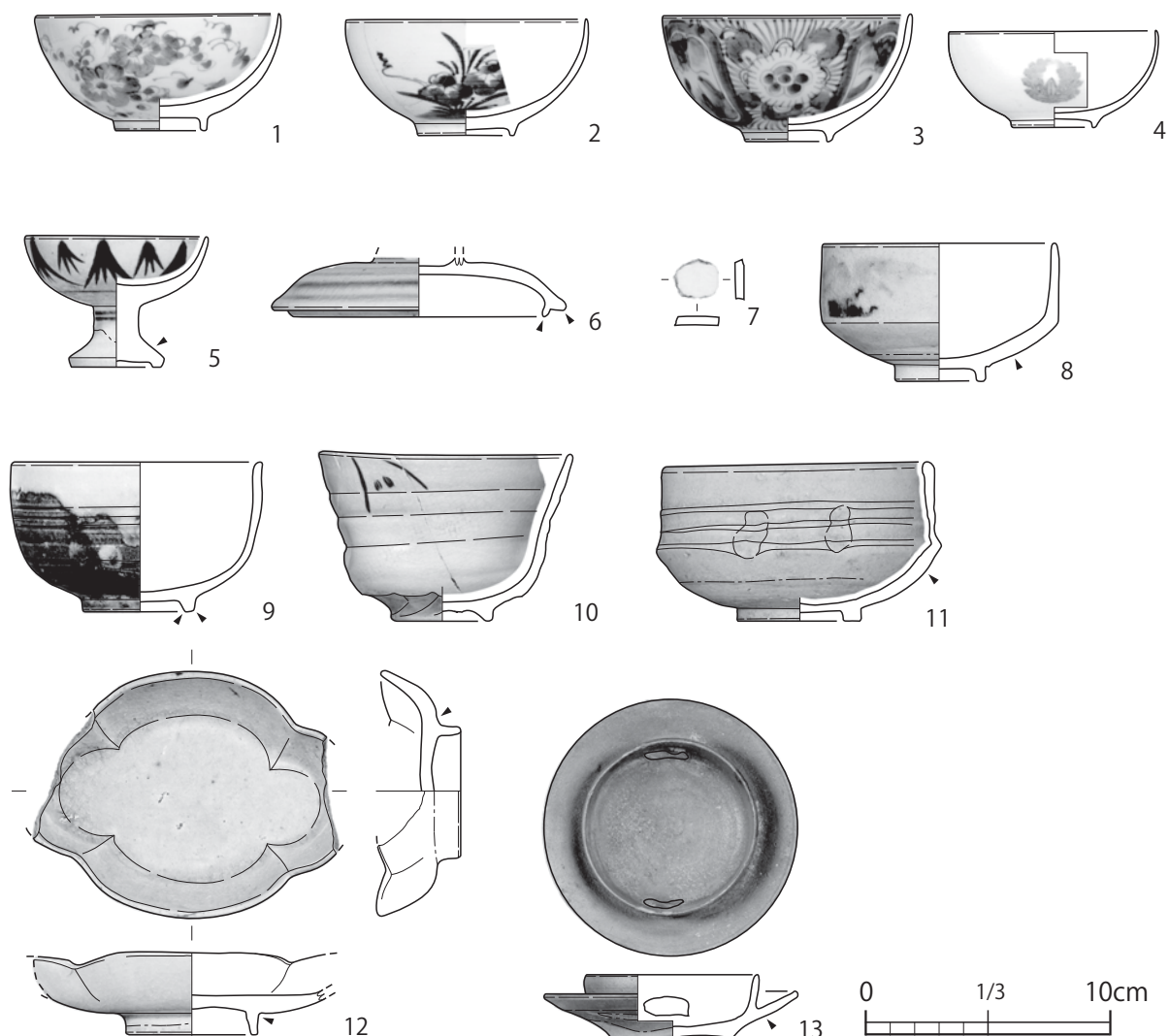
金属製品は、銭貨古寛永（第 135 図-7）である。煙管は、雁首（第 135 図-8・9）である。

＊遺構間接合

12：火鉢（第 135 図-1）は、87 号遺構（近世 2 井戸）との遺構間接合で、接合距離は 2.5m である。
85 号遺構 [G-6]（2 区）

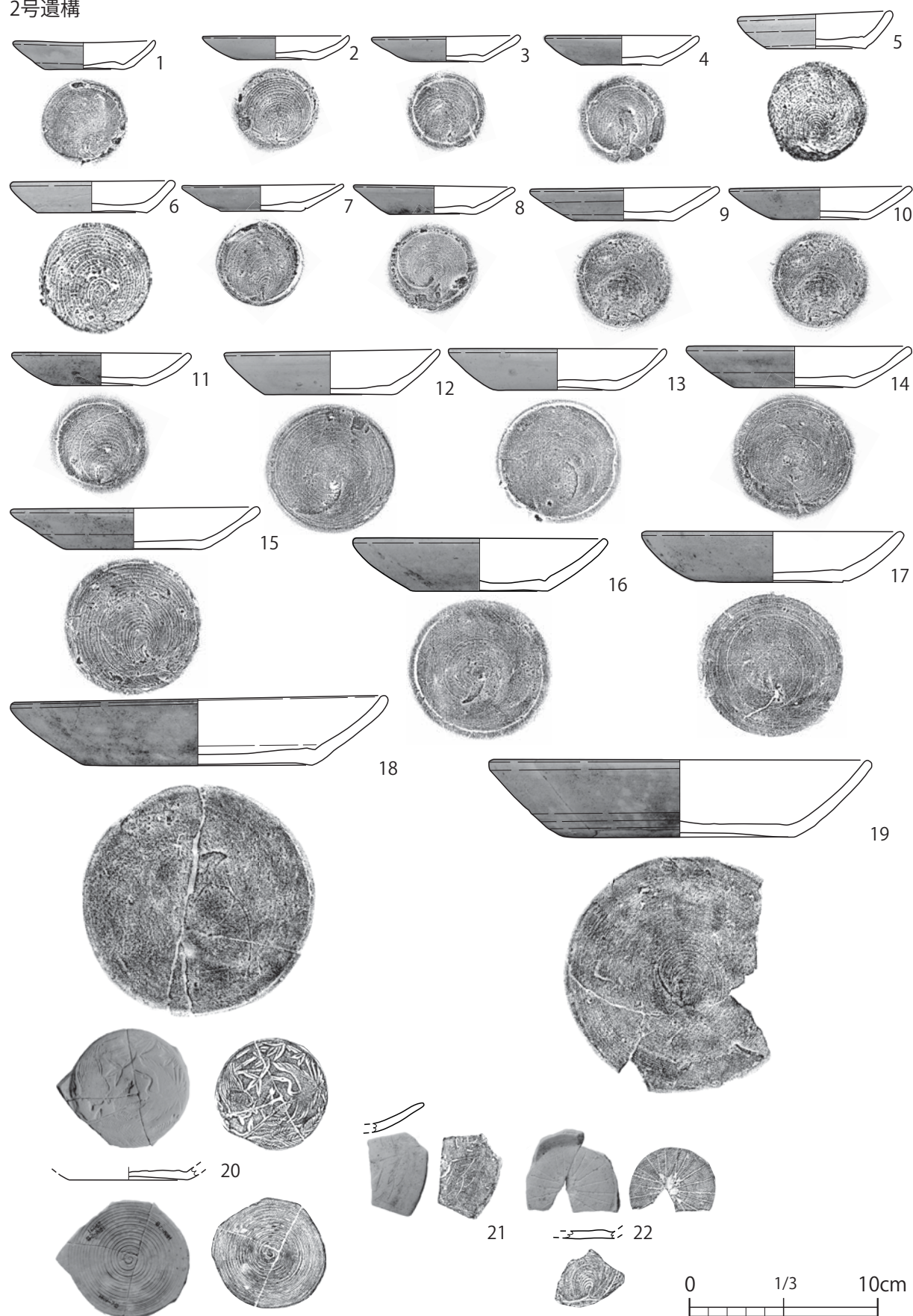
・遺構（第 101 図）

2号遺構



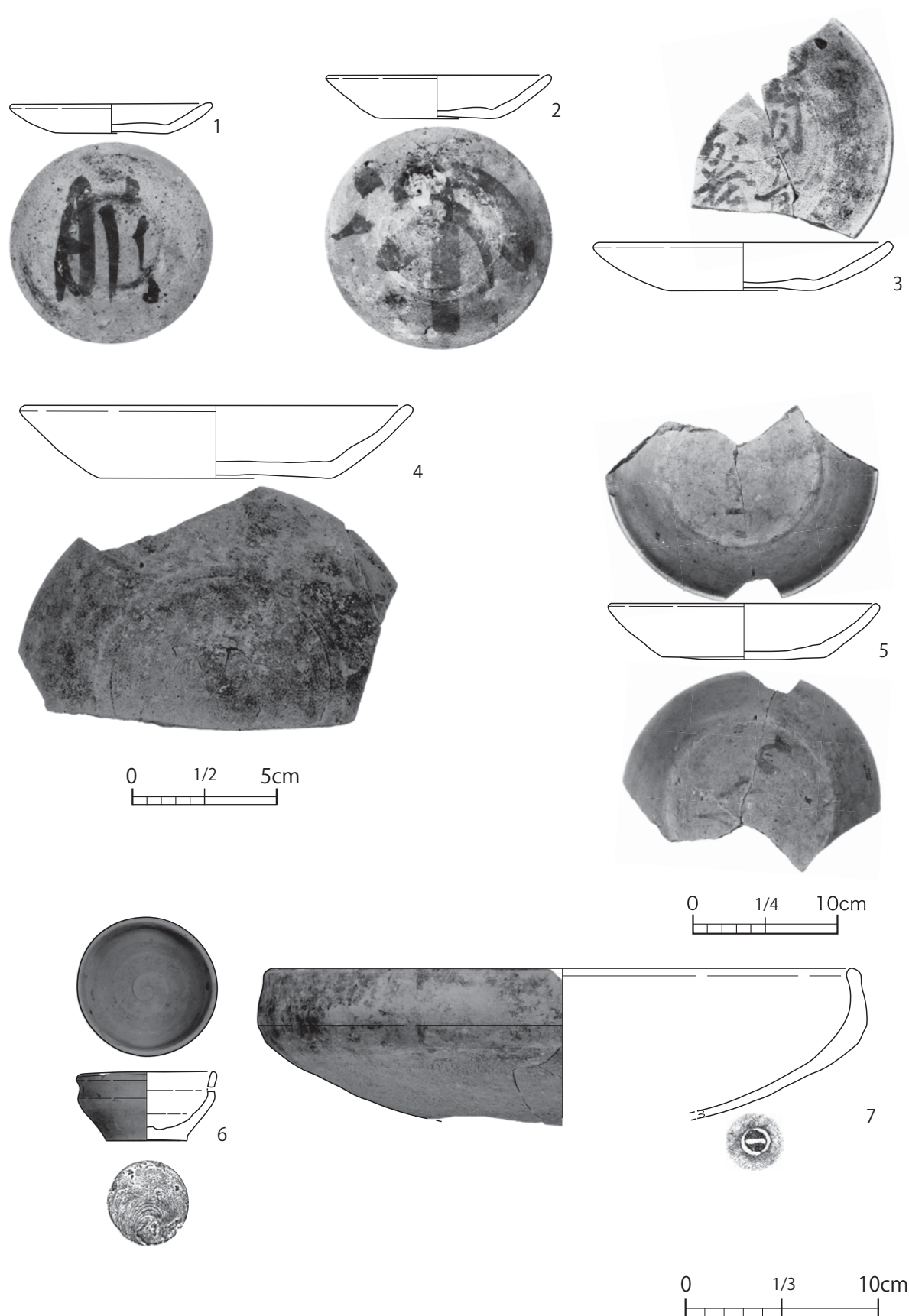
第 111 図 近世 2 面の遺物（7：1/3）

2号遺構



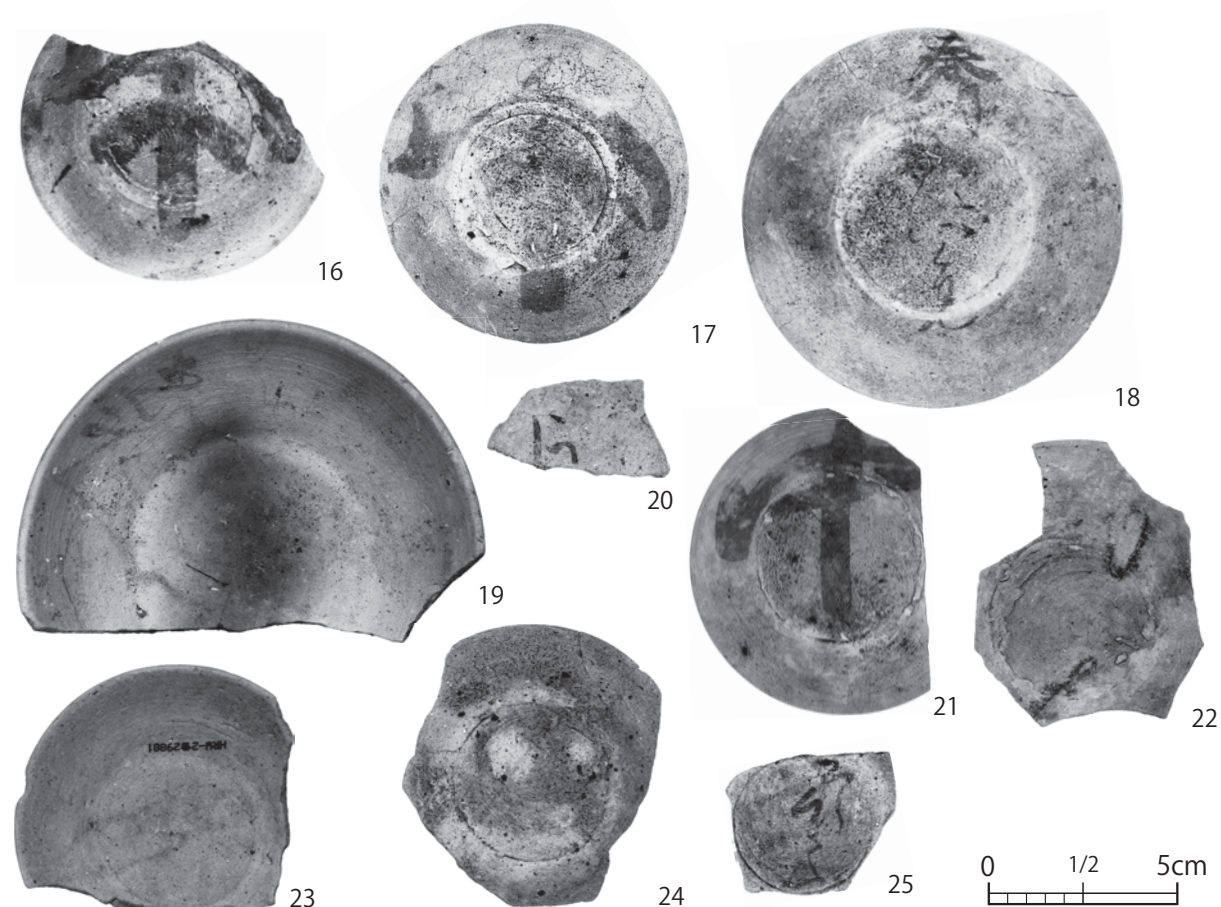
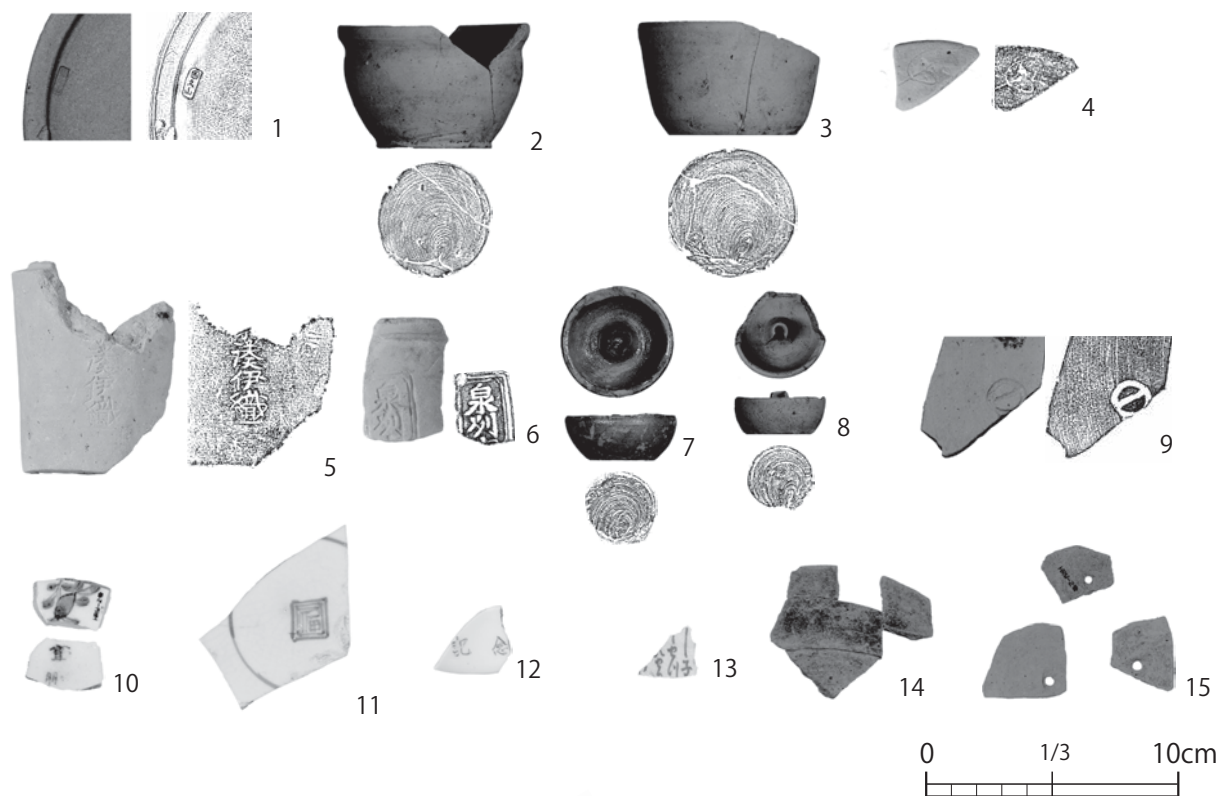
第112図 近世2面の遺物（8：1/3）

2号遺構



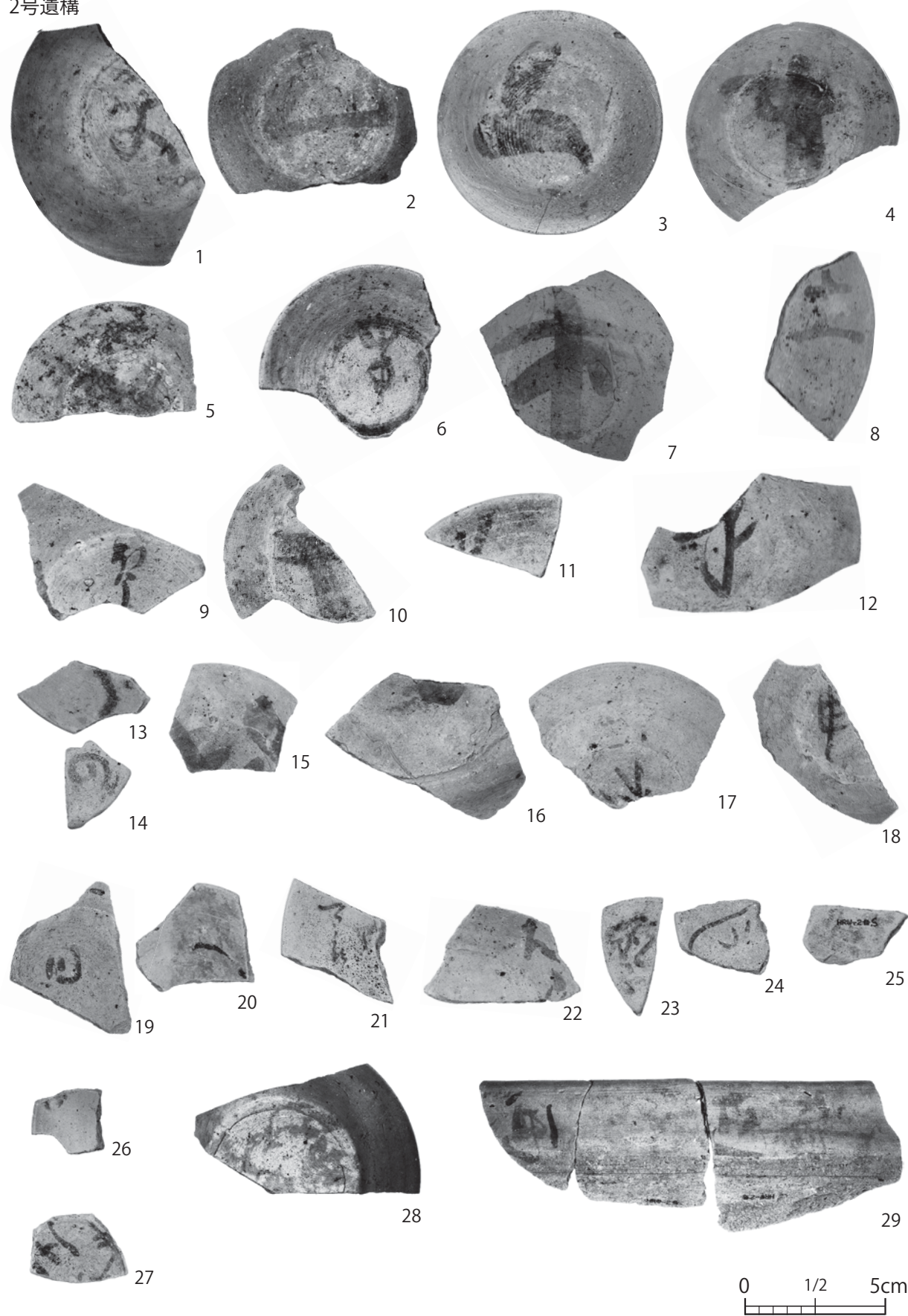
第113図 近世2面の遺物（9：1/2・1/3・1/4）

2号遺構



第114図 近世2面の遺物（10：1/2・1/3）

2号遺構



第 115 図 近世 2 面の遺物 (11 : 1/2)

1号遺構（御殿堀）北西外縁直上に位置する。東側に110号遺構（近世2土坑）、南側に118号遺構（近世1期土坑）がある。70cm × 55cm × 16cmの楕円形を呈する。

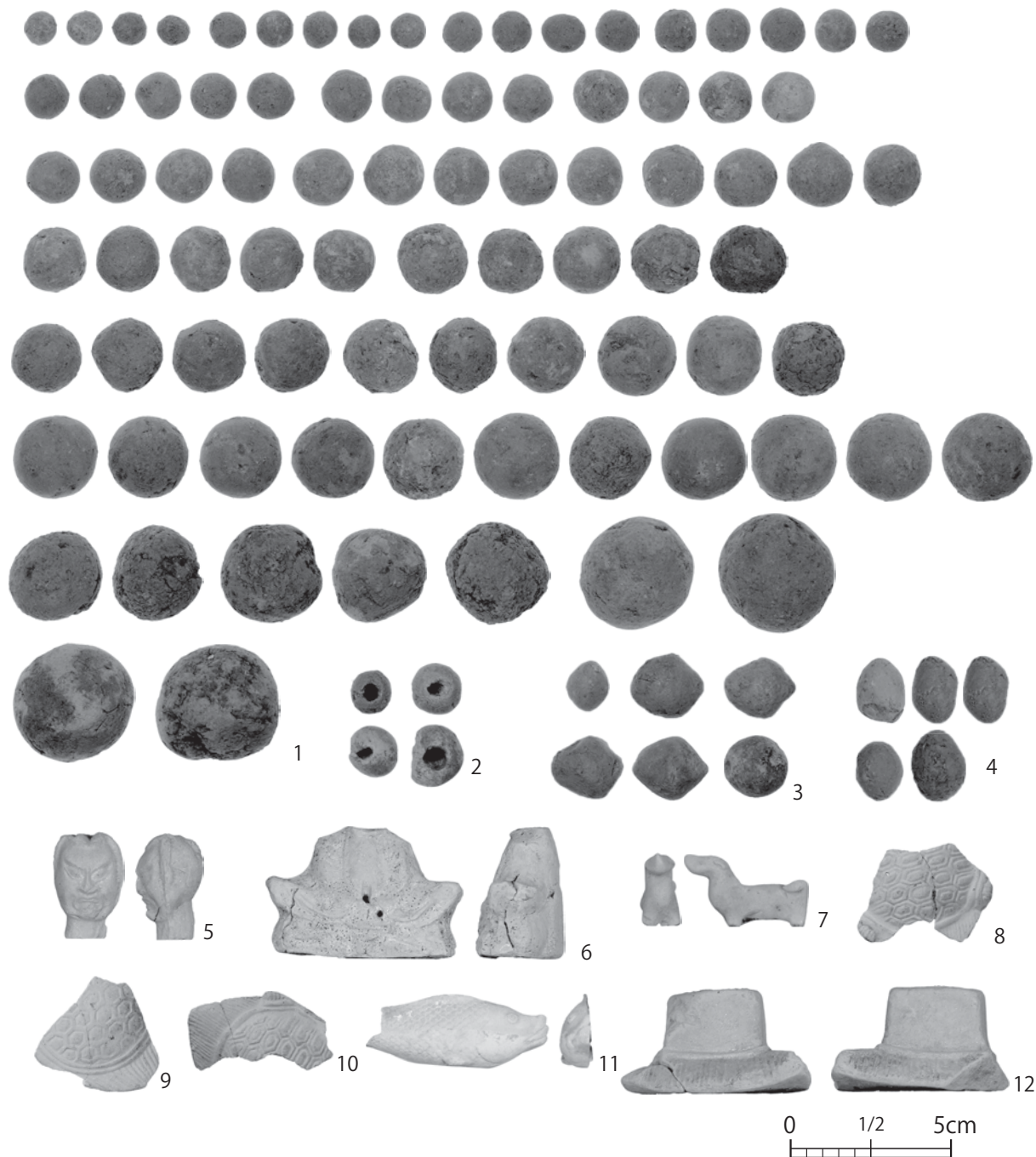
・遺物

出土資料は、磁器の碗（1点）・不明（1点）、陶器の碗（1点）・皿（2点）・鉢（1点）・瓶（2点）、土器の焙烙（3点）・不明（1点）である。‘かわらけ’は、13点（19g）である。

86号遺構 [G-6]（2区）

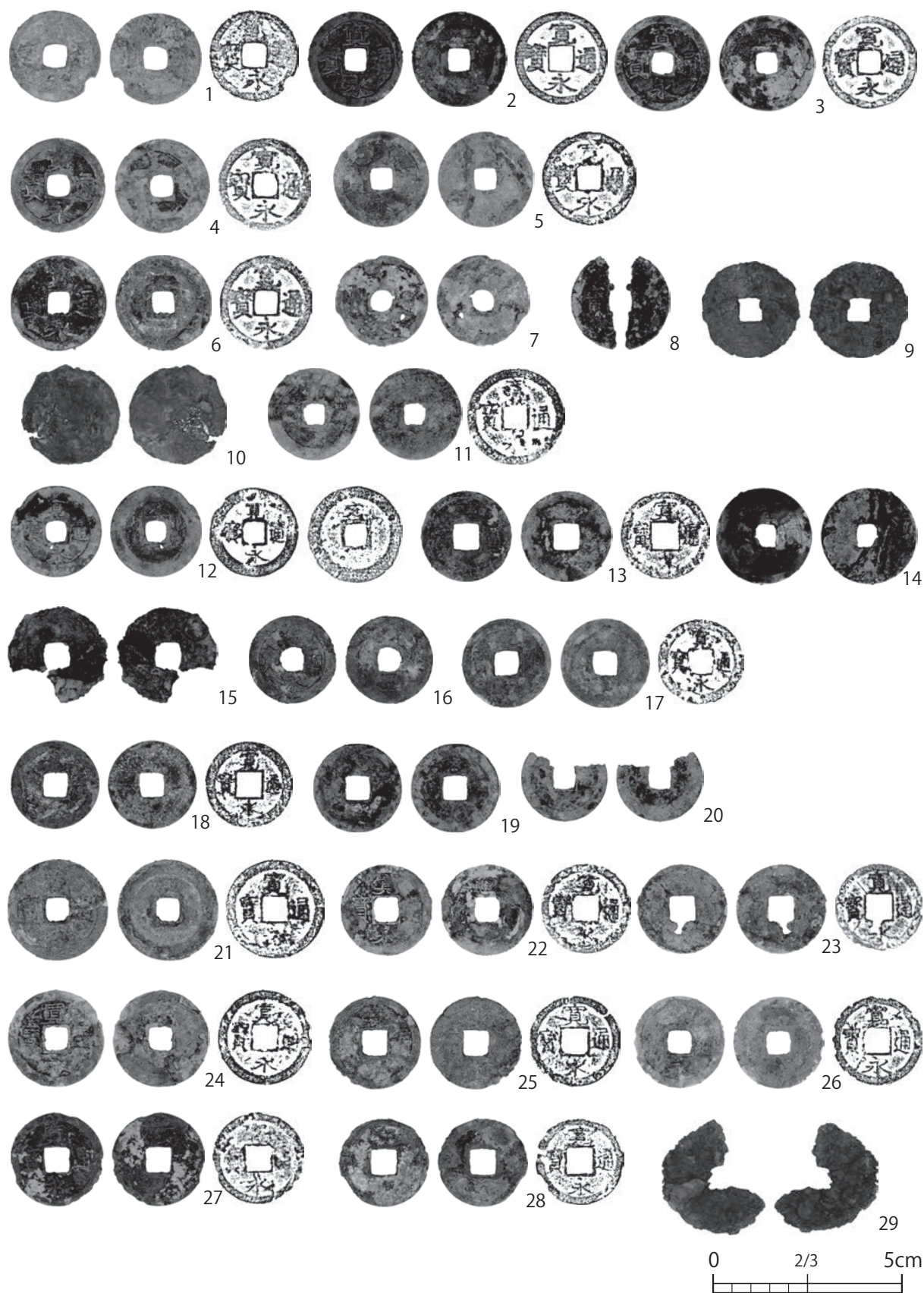
・遺構（第101図）

2号遺構



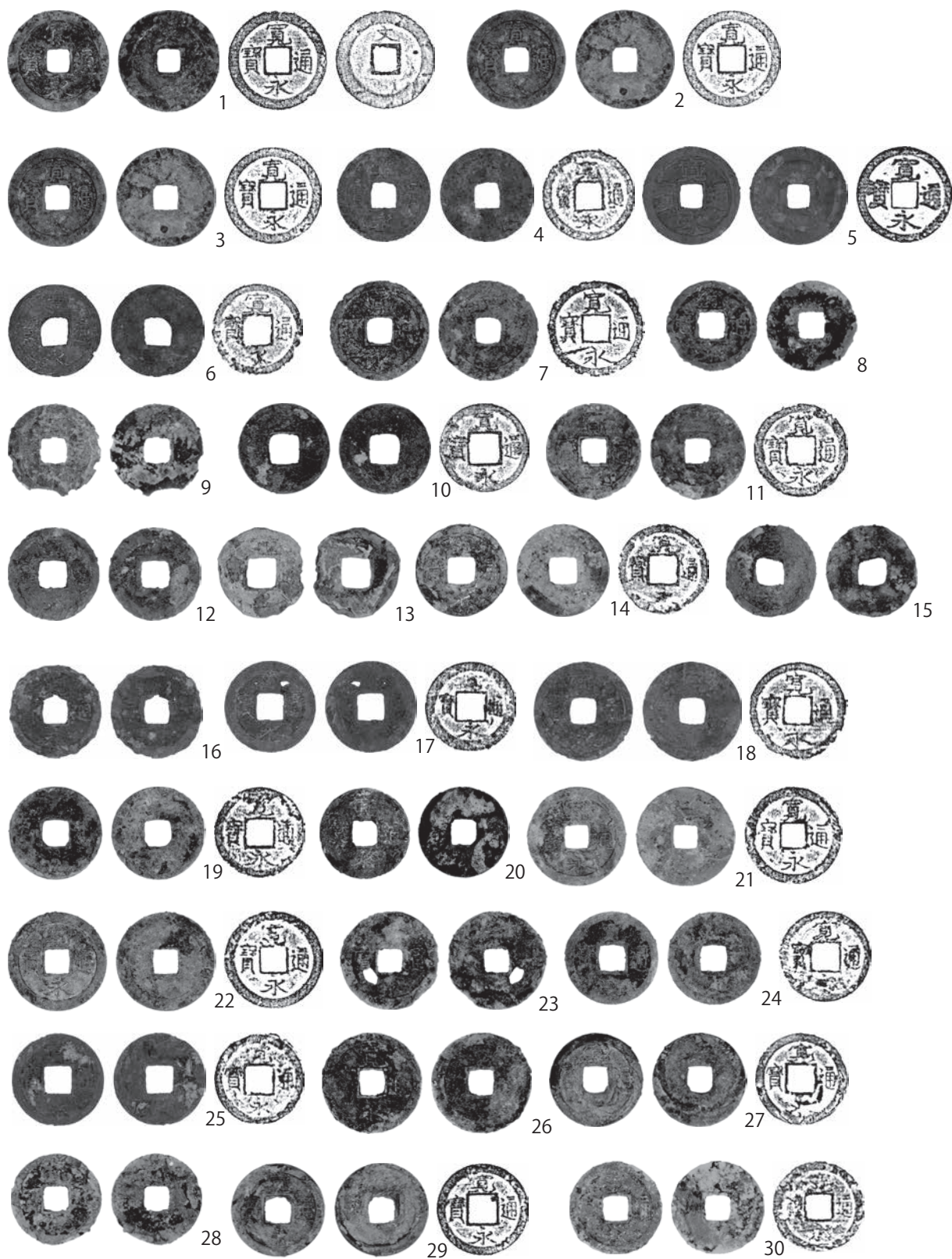
第116図 近世2面の遺物（12：1/2）

2号遺構



第117図 近世2面の遺物（13：2/3）

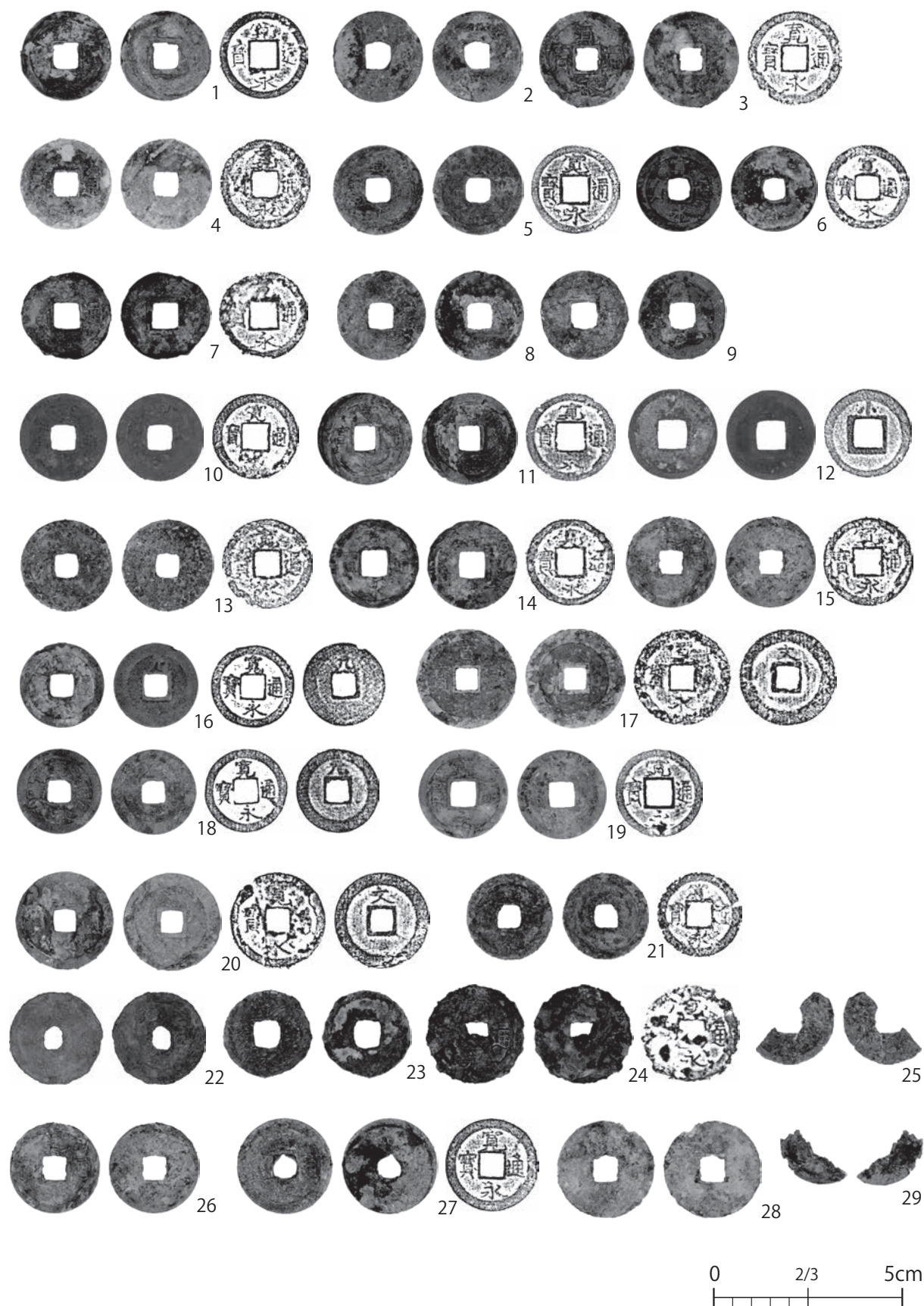
2号遺構



0 2/3 5cm

第118図 近世2面の遺物（14：2/3）

2号遺構



第119図 近世2面の遺物（15：2/3）

1号遺構（御殿堀）北西外縁直上に位置する。110号遺構（近世2土坑）の西側で、85号遺構（近世2期ピット）の北東部に位置する。40cm × 35cm × 14cm の楕円形を呈する。

・遺物

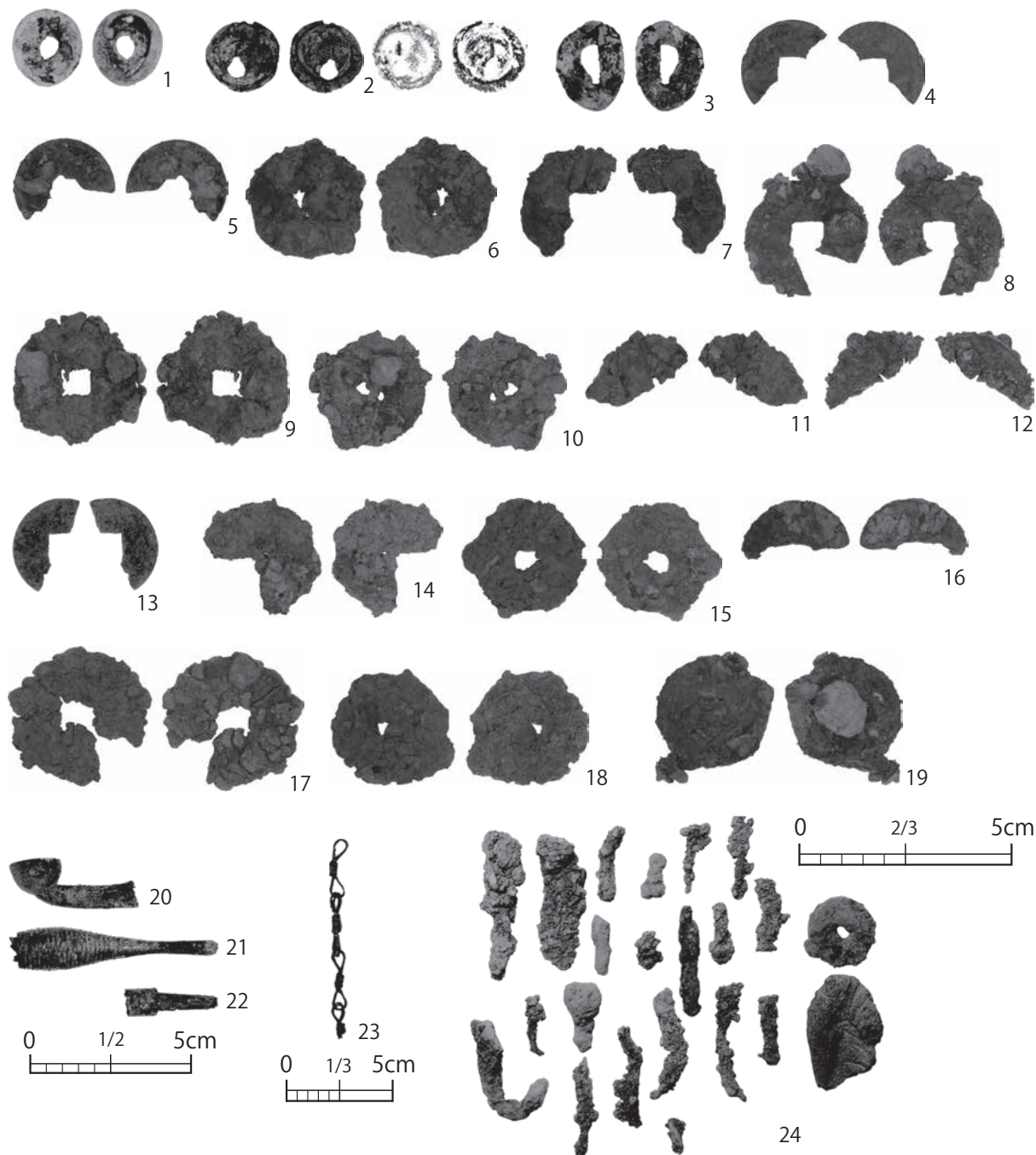
出土資料は、陶器の甕（1点）、土器の鉢（1点）である。

88号遺構 [G-6・7]（2区）

・遺構（第102図）

1号遺構（御殿堀）北西外縁直上に位置する。北側に110号遺構（近世2土坑）が隣接する。

2号遺構



第120図 近世2面の遺物（16：2/3・1/2・1/3）

60cm × 55cm × 24cm の略方形を呈する。

・遺物

出土資料は、磁器の瓶（1点）、陶器の碗（1点）・皿（1点）・瓶（1点）である。‘かわらけ’は、4点（9g）である。

89号遺構 [G-7]（2区）

・遺構（第102図）

1号遺構（御殿堀）北西外縁直上に位置する。南東に90号遺構（近世2土坑）、北西に110号遺構（近世2期土坑）が位置する。径39cm × 12cm の略円形を呈する。

・遺物

‘かわらけ’は、6点（11g）である。

92号遺構 [F・G-7]（2区）

・遺構（第102図）

1号遺構（御殿堀）北西外縁直上に位置する。東側に113号遺構（近世2井戸）、北側に99号遺構（近世2土坑）、南西側に91号遺構（近世2土坑）が位置する。径36cm × 20cm の円形を呈する。

93号遺構 [F-7]（2区）

・遺構（第102図）

1号遺構（御殿堀）北西外縁直上に位置する。北東側に113号遺構（近世2井戸）、北西側に91号遺構（近世2土坑）が位置する。径33cm × 16cm の略円形を呈する。

94号遺構 [F-7・8]（2区）

・遺構（第102図）

1号遺構（御殿堀）北西外縁直上に位置する。南東側は調査区外になる。50cm × 39cm × 19cm の略楕円形を呈する。

・遺物

出土資料は、陶器の皿（1点）である。‘かわらけ’は、1点（4g）である。

95号遺構 [F-7]（2区）

・遺構（第102図）

1号遺構（御殿堀）北西外縁直上に位置する。北側に92号遺構（近世2ピット）、東側に113号遺構（近世2井戸）、南側に93号遺構（近世2ピット）、西側に91号遺構（近世2土坑）が位置する。径20cm × 15cm の円形を呈する。

96号遺構 [G-7]（2区）

・遺構（第102図）

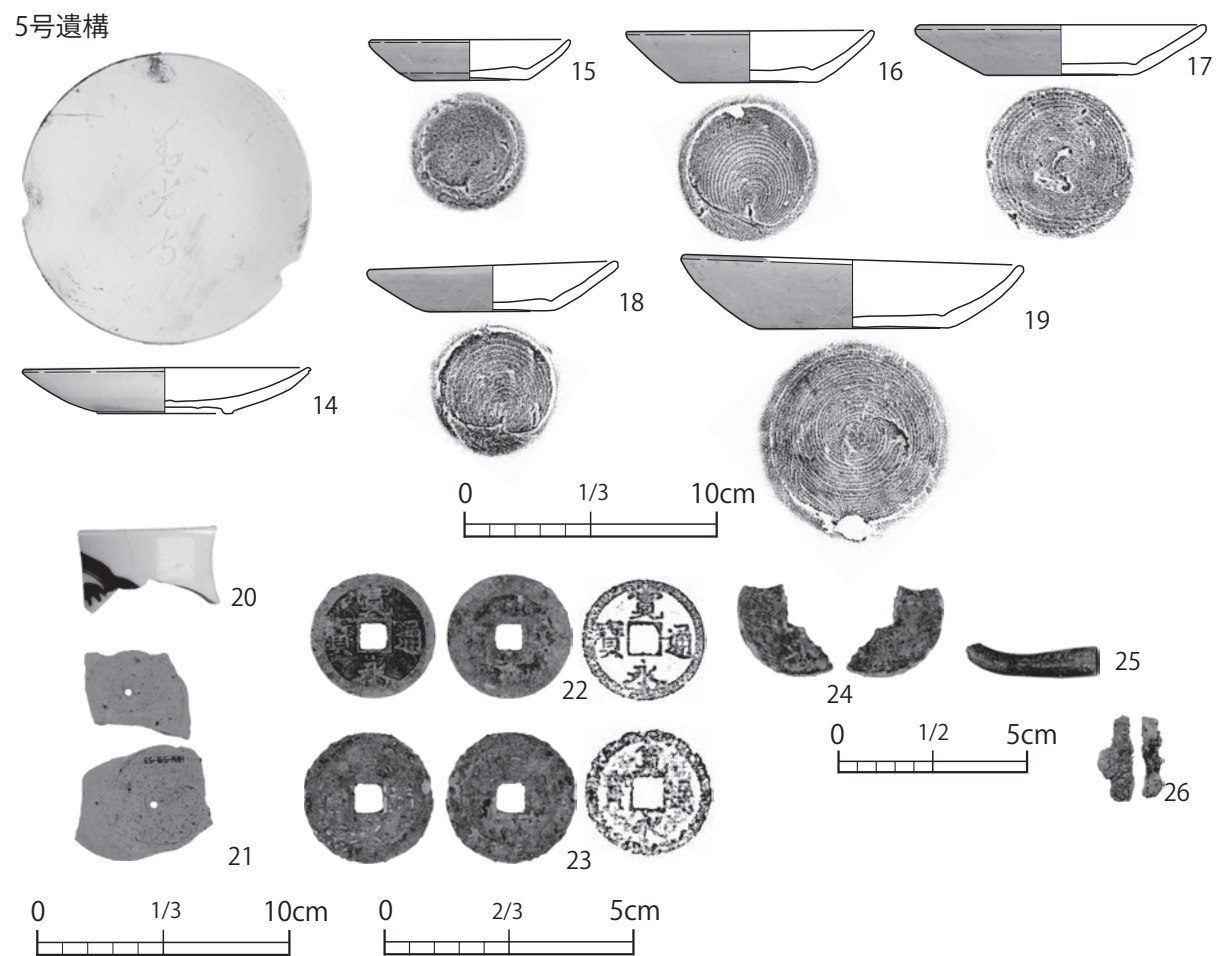
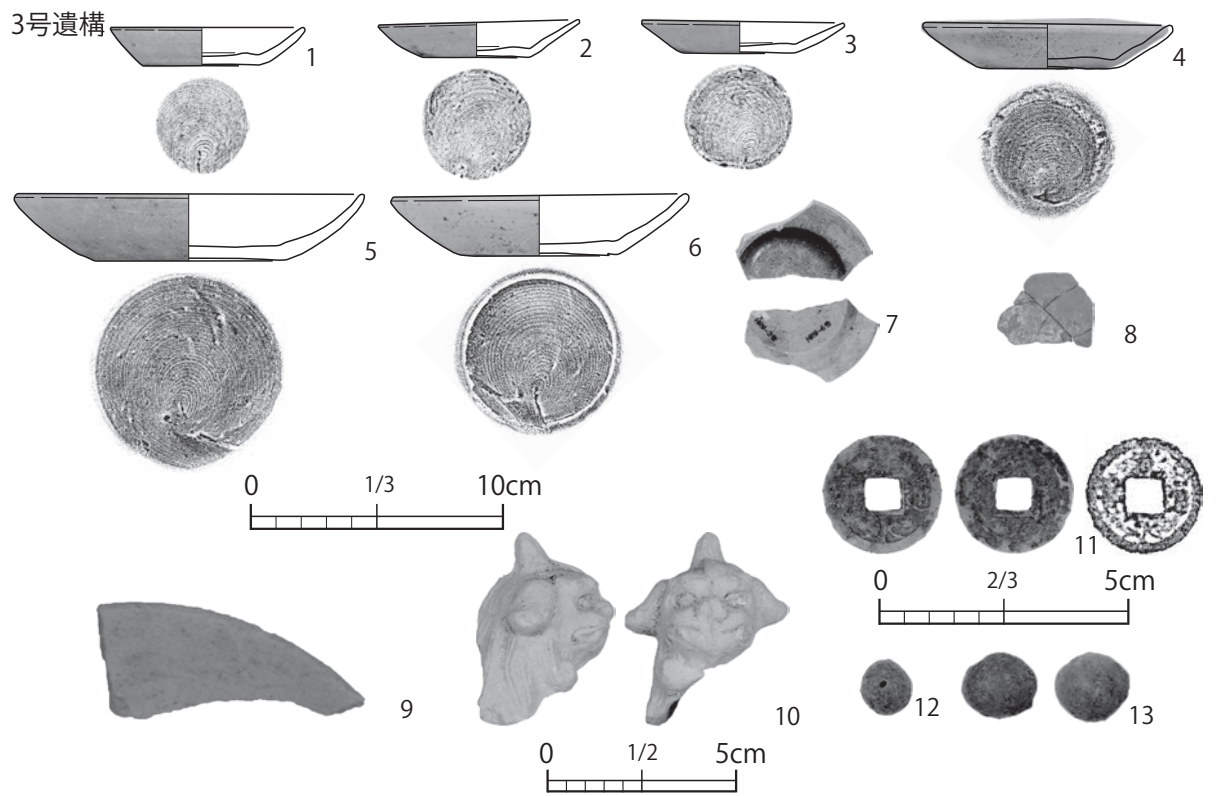
1号遺構（御殿堀）北西外縁直上に位置する。北側に97号遺構（近世2期土坑）、東側に99号遺構（近世2土坑）、西側に90号遺構（近世2土坑）が位置する。39cm × 30cm × 15cm の卵形を呈する。

・遺物

出土資料は、磁器の瓶（1点）である。

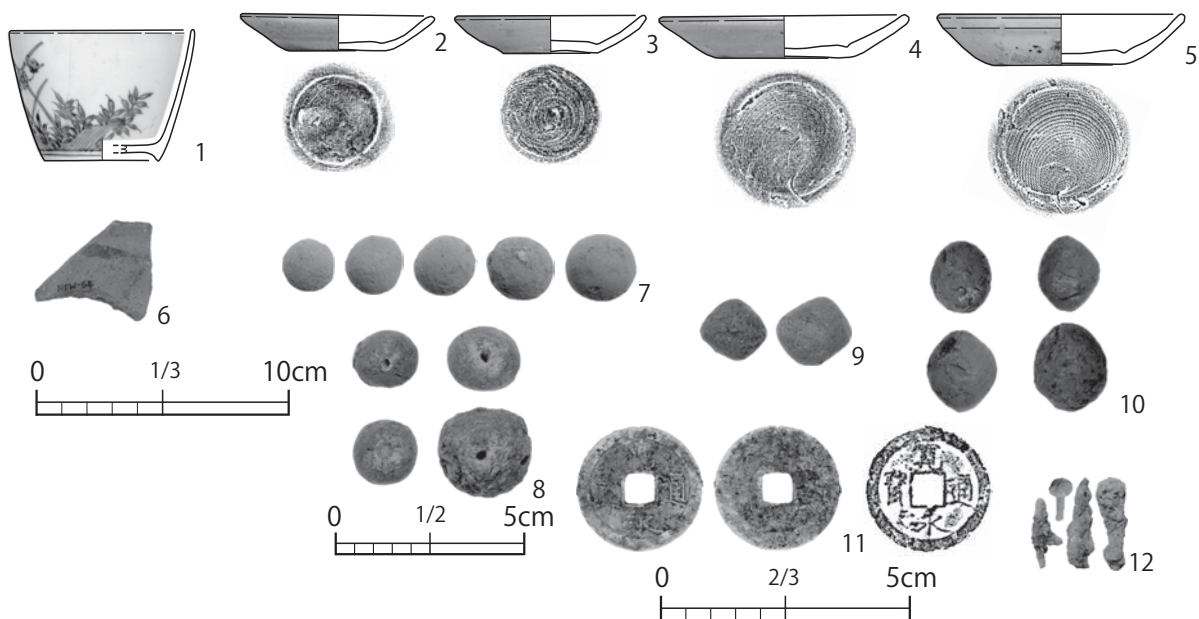
106号遺構 [H-5]（2区）

・遺構（第102図）

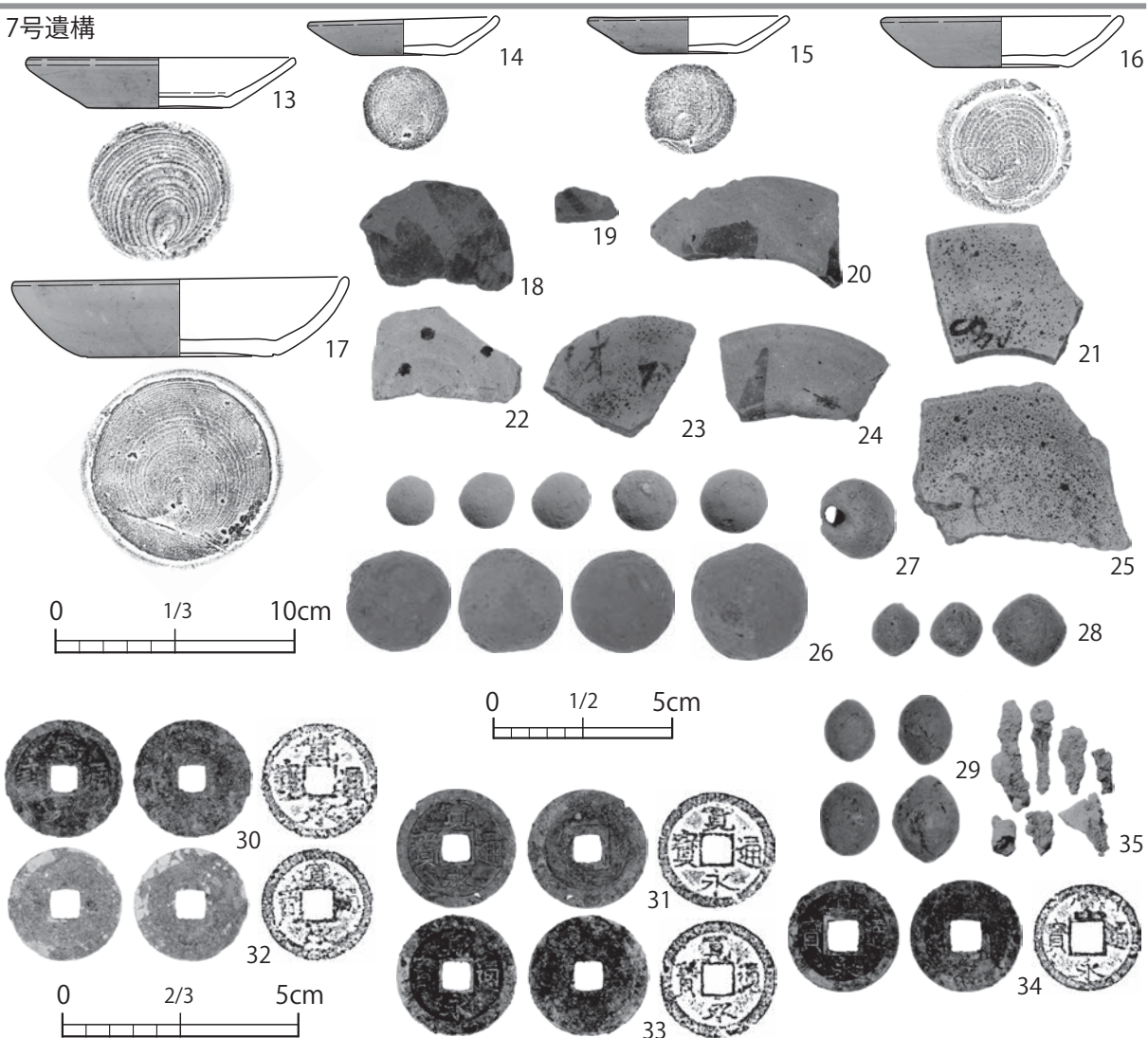


第 121 図 近世 2 面の遺物 (17 : 2/3 ・ 1/2 ・ 1/3)

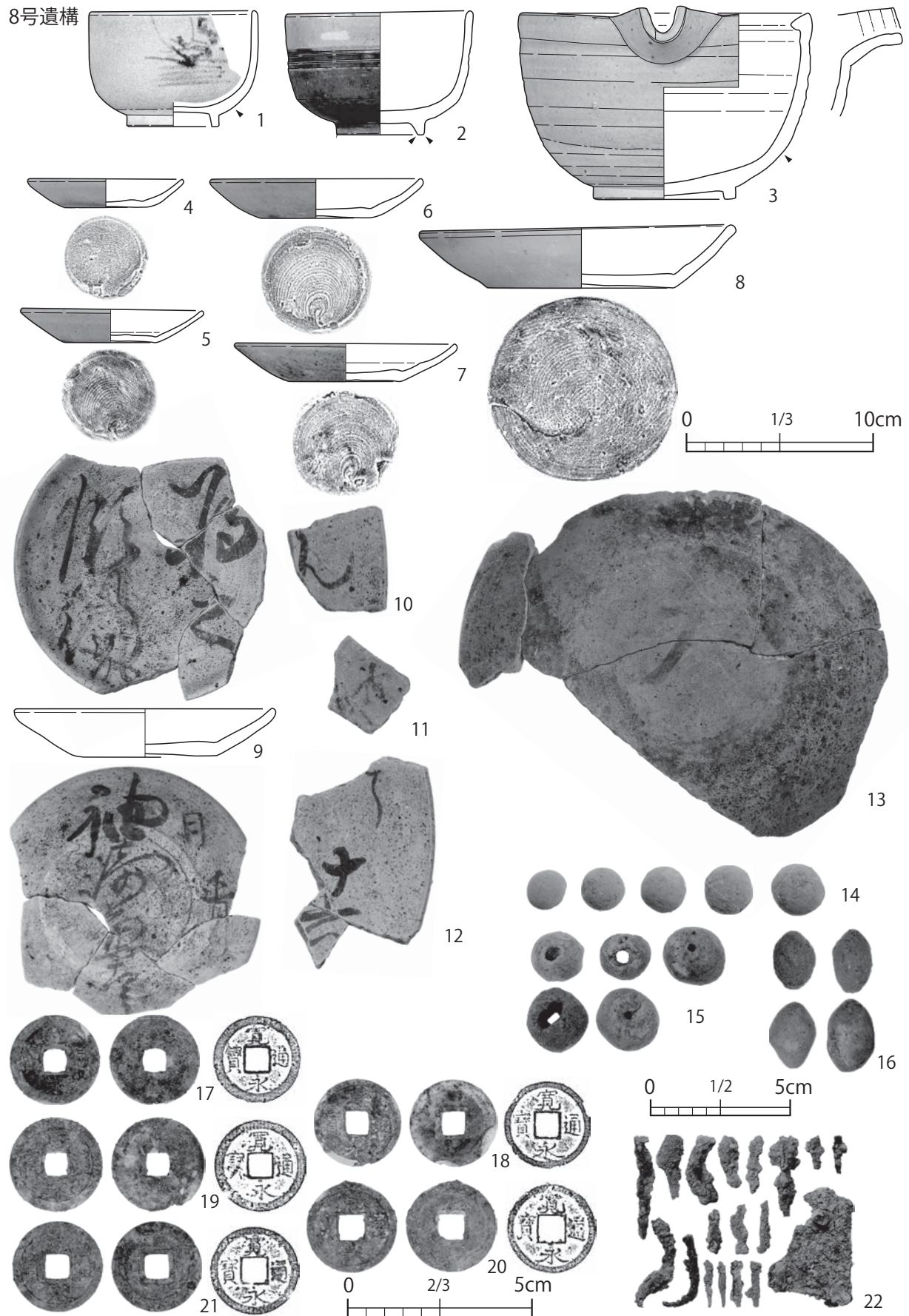
6号遺構



7号遺構

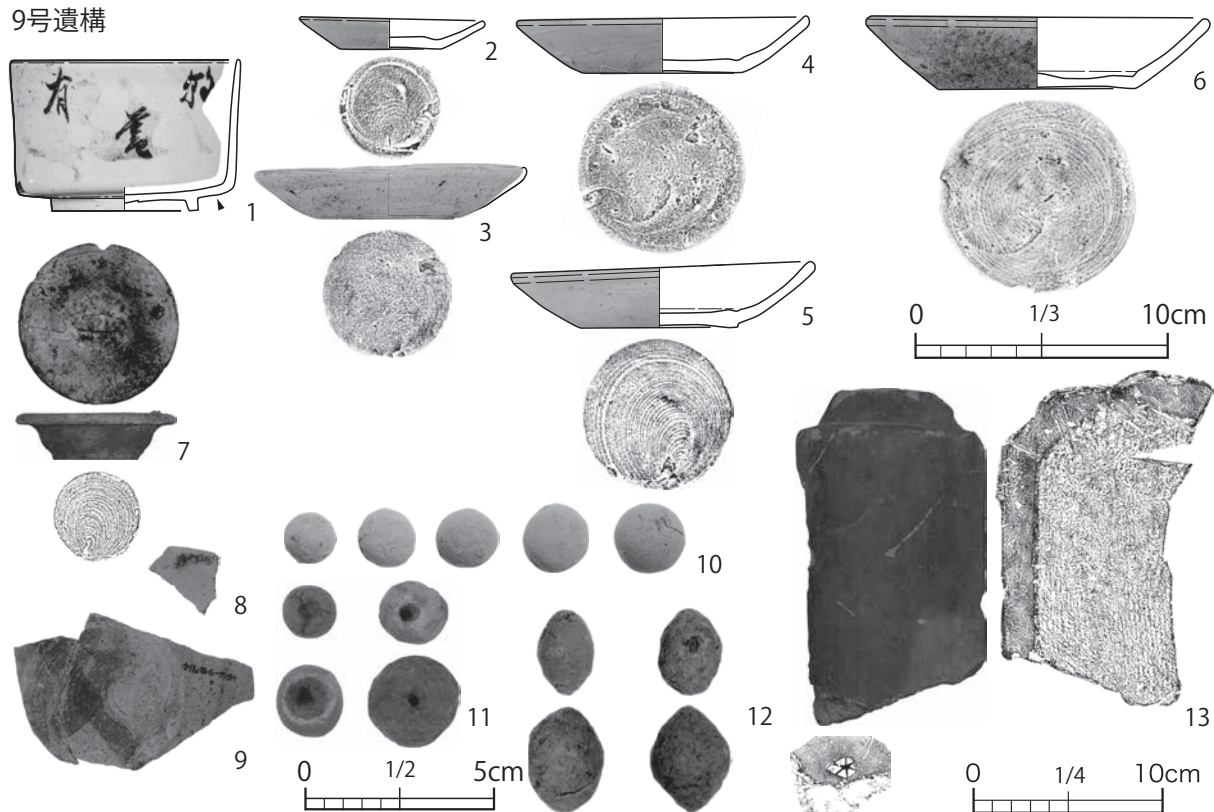


第 122 図 近世 2 面の遺物 (18 : 2/3 ・ 1/2 ・ 1/3)

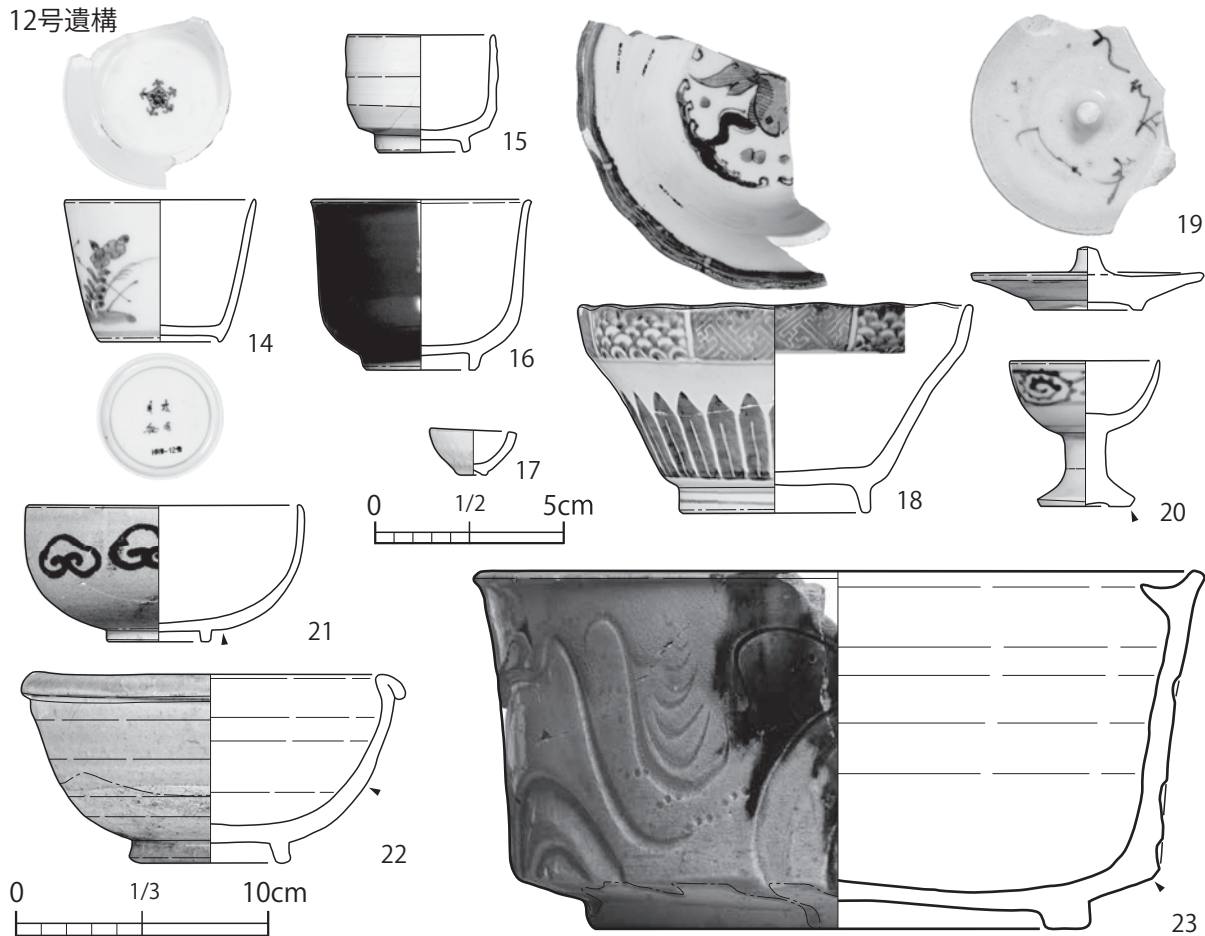


第 123 図 近世 2 面の遺物 (19 : 2/3 ・ 1/2 ・ 1/3)

9号遺構

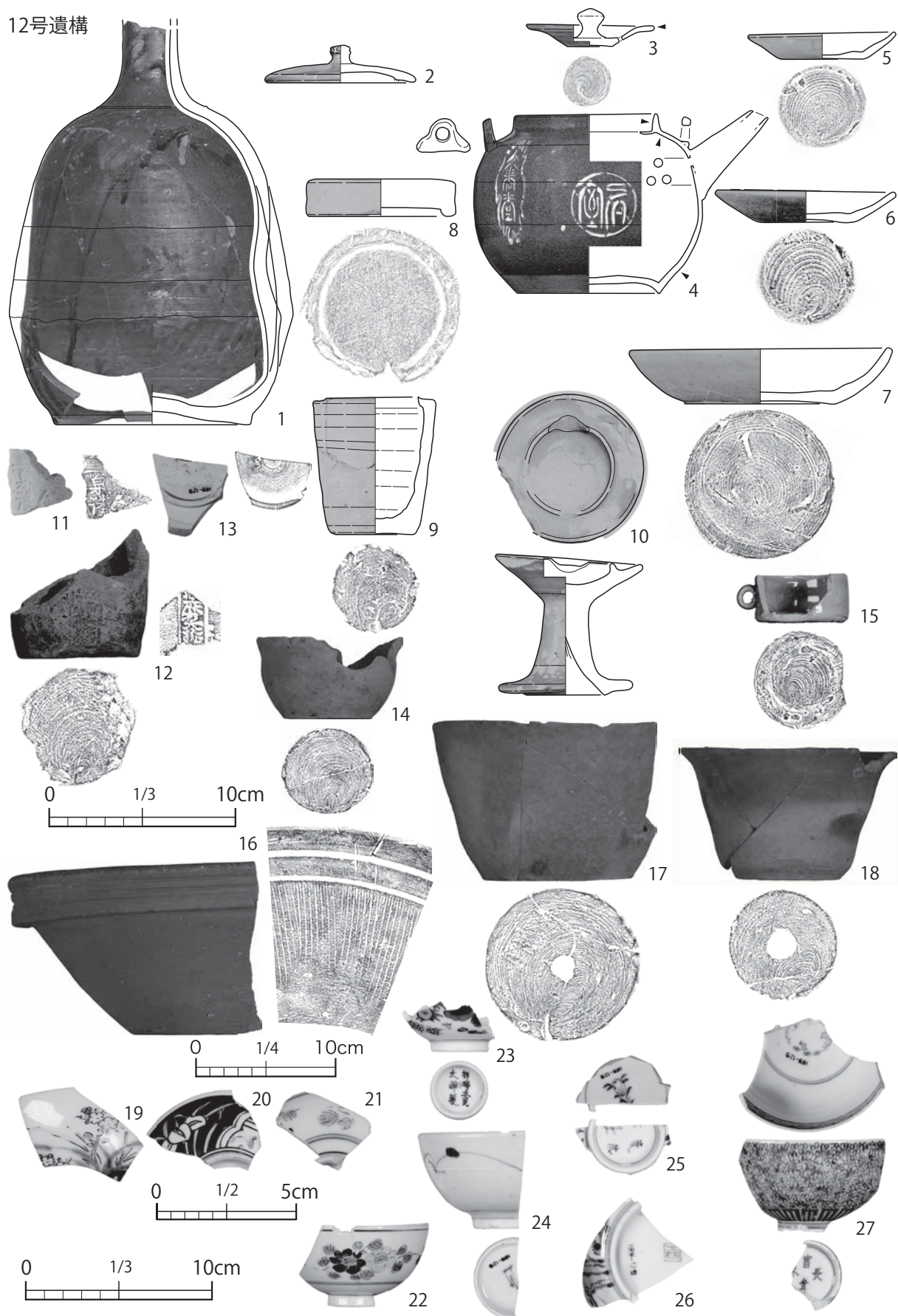


12号遺構



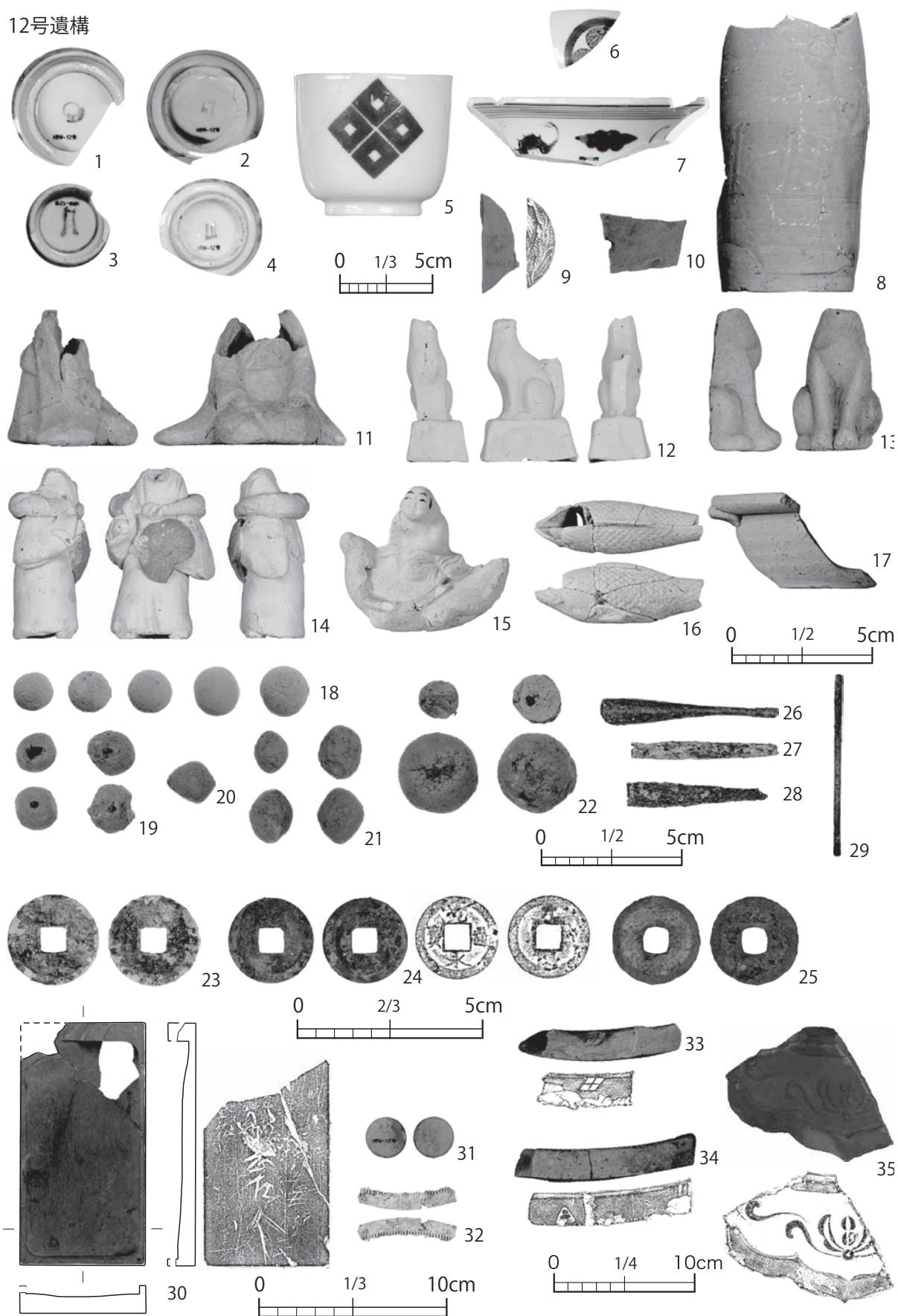
第 124 図 近世 2 面の遺物 (20 : 1/2 ・ 1/3 ・ 1/4)

12号遺構



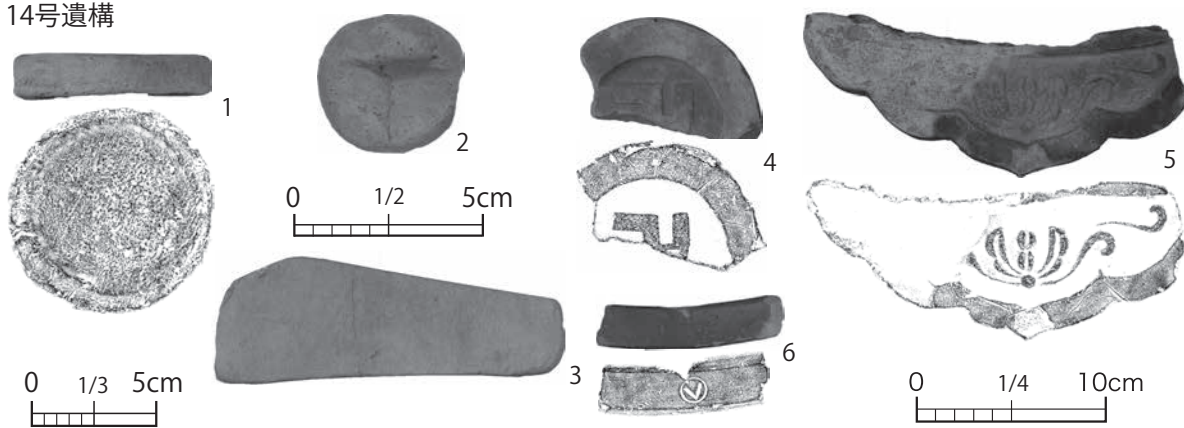
第 125 図 近世 2 面の遺物 (21 : 1/2・1/3・1/4)

12号遺構

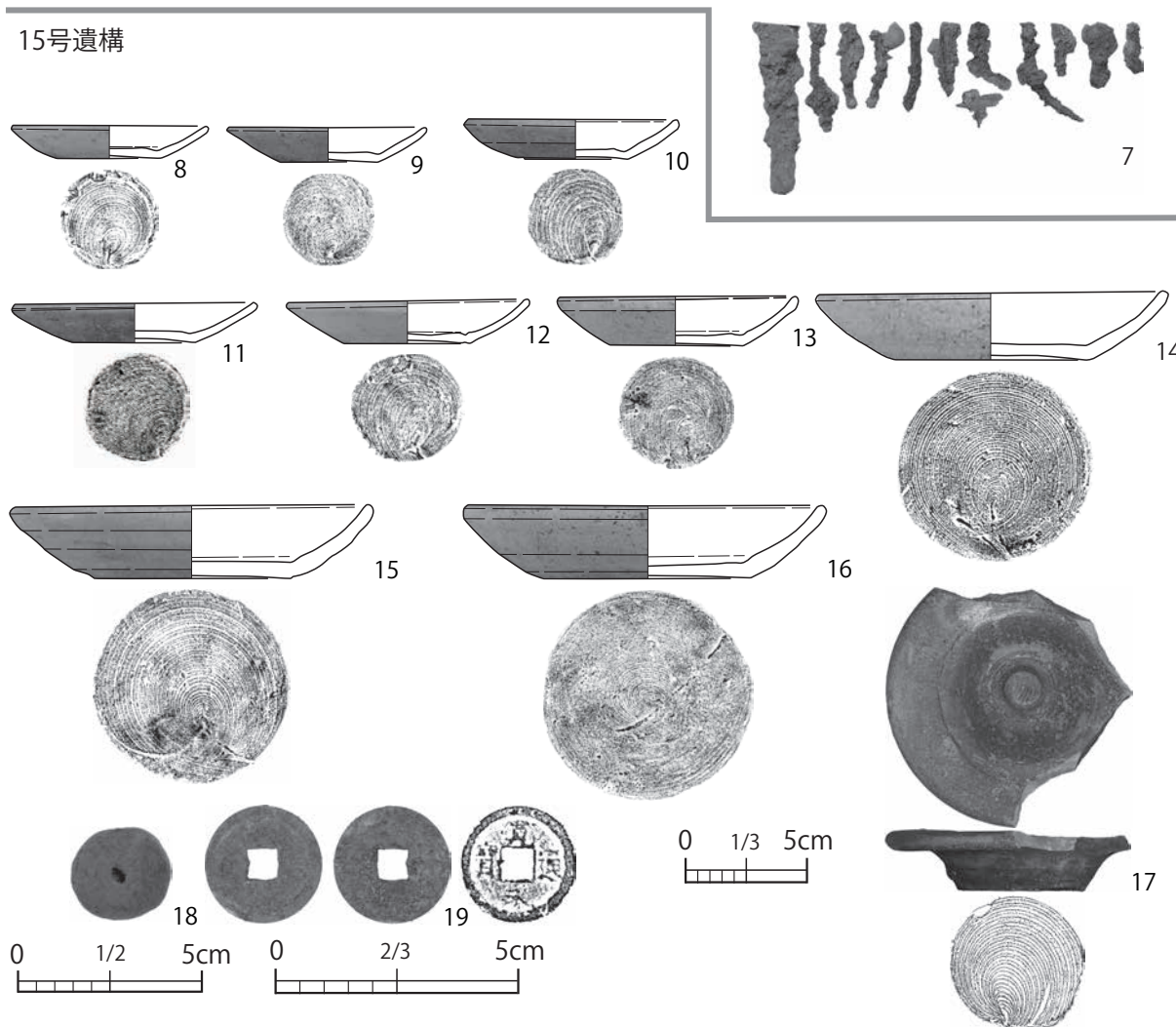


第126図 近世2面の遺物 (22: 2/3・1/2・1/3・1/4)

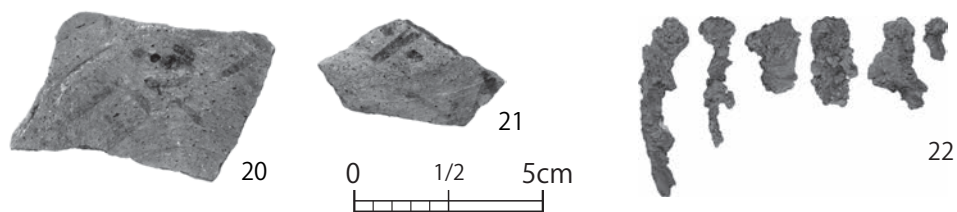
14号遺構



15号遺構



17号遺構



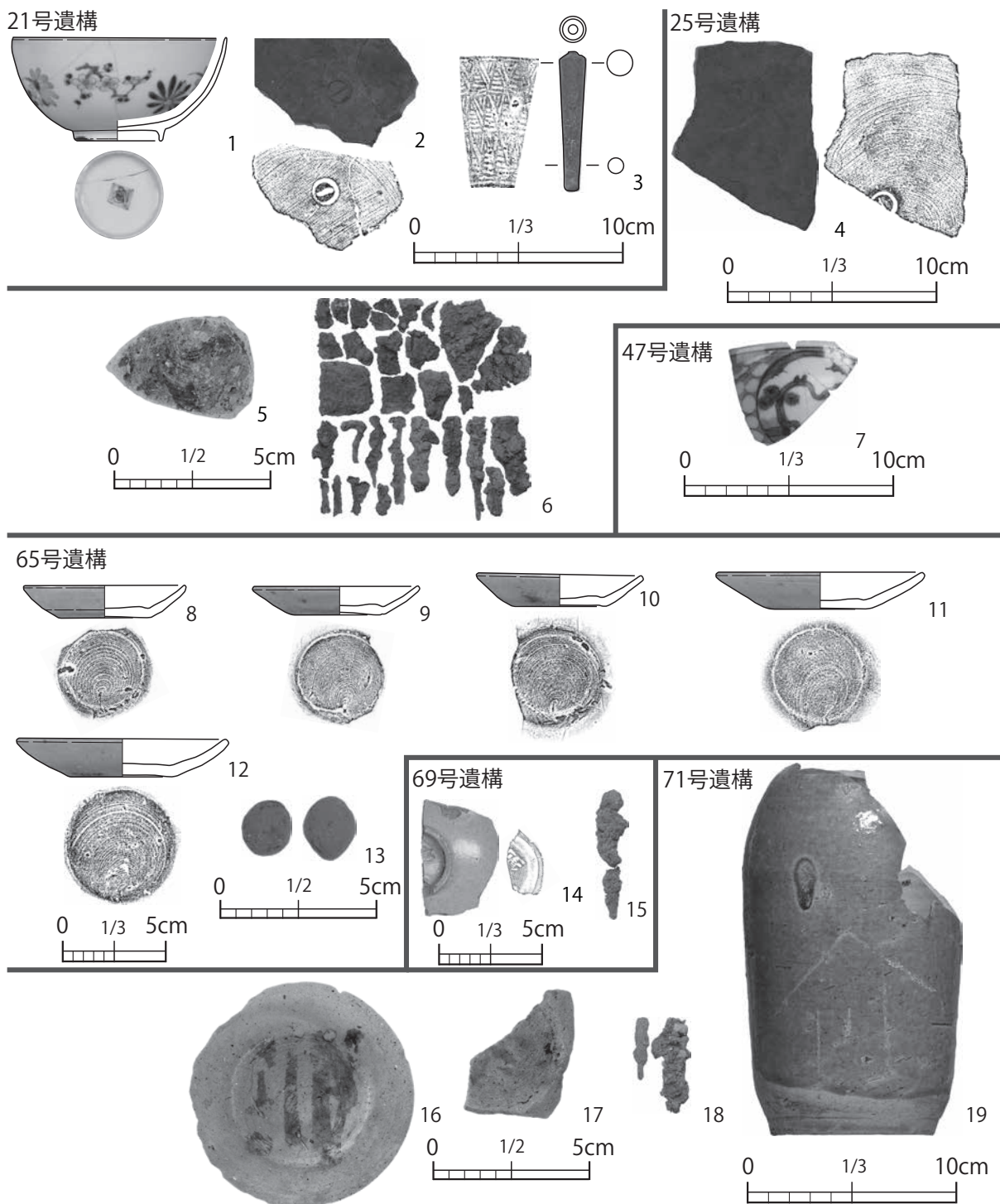
第 127 図 近世 2 面の遺物 (23 : 2/3 ・ 1/2 ・ 1/3 ・ 1/4)

1号遺構（御殿堀）屈曲部の北東方向、87号遺構（近世2井戸）の西に位置する。44cm × 39cm × 31cm の略楕円形を呈する。

・遺物

‘かわらけ’は8点（20g）で、最小個体数は1点である。

107号遺構 [G-6]（2区）



第128図 近世2面の遺物（24：1/2・1/3）

・遺構（第 103 図）

1 号遺構（御殿堀）北東外縁部に位置する。46cm × 42cm × 11cm のハート形を呈する。

109 号遺構 [F-7]（2 区）

・遺構（第 103 図）

1 号遺構（御殿堀）北東外縁部、北方向に 90 号遺構（近世 2 土坑）、東方向に 91 号遺構（近世 2 土坑）が位置する。26cm × 24cm × 28cm の略円形を呈する。

111 号遺構 [F-7]（2 区）

・遺構（第 103 図）

1 号遺構（御殿堀）の北東法面の外縁部付近、北東方向に 91 号遺構（近世 2 土坑）が位置する。38cm × 28cm × 16cm の楕円形を呈する。

・遺物

‘かわらけ’は、3 点（11g）である。

112 号遺構 [F-7]（2 区）

・遺構（第 103 図）

1 号遺構（御殿堀）の北東法面の外縁部付近、北西方向に 111 号遺構（近世 2 ピット）が位置する。36cm × 28cm × 21cm の楕円形を呈する。

・遺物

出土資料は、磁器の碗（1 点）である。‘かわらけ’は、1 点（7g）である。

136 号遺構 [H-8・9]（3-1 区）

・遺構（第 103 図）

調査区の東側に位置する。径 55cm × 22cm の略円形を呈する。

137 号遺構 [H-8]（3-1 区）

・遺構（第 103 図）

調査区の東側に位置する。40cm × 34cm × 13cm の略円形を呈する。

152 号遺構 [G・H-7]（3-1 区）

・遺構（第 103 図）

1 号遺構（御殿堀）北西外縁上に位置する。南西側の 151 号遺構（近世 2 土坑）に切られる。46cm × (28cm) × 20cm の不整円形を呈する。

203 号遺構 [G-3]（3-3 区）

・遺構（第 103 図）

調査区北側に位置する。南東部に 202 号遺構（近代土坑）が接する。径 40cm × 15cm の略円形を呈する。

・遺物

出土資料は、磁器の碗（1 点）である。

204 号遺構 [I-5]（3-3 区）

・遺構（第 104 図）

調査区北側に位置する。北東部に 203 号遺構（近世 2 ピット）が接する。径 50cm × 14cm の略

円形を呈する。

- ・遺物

出土資料は、磁器の碗（1点）・皿（1点）である。

205号遺構 [I-5]（3-3区）

- ・遺構（第104図）

調査区北側、214号遺構（近世1上水路）が北西側に位置する。68cm × 45cm × 11cmの卵形を呈する。

209号遺構 [H-4]（3-3区）

- ・遺構（第104図）

1号遺構（御殿堀）屈曲部の北西に位置する。径36cm × 11cmの略円形を呈する。

210号遺構 [H-3・4]（3-3区）

- ・遺構（第104図）

調査区北西縁近く、北西側には214号遺構（近世1上水路）が位置する。44cm × 35cm × 9cmの楕円形を呈する。

211号遺構 [H-4]（3-3区）

- ・遺構（第104図）

調査区北西縁近く、南西側に210号遺構（近世2ピット）が位置する。径25cm × 10cmの略円形を呈する。

212号遺構 [H-4]（3-3区）

- ・遺構（第104図）

1号遺構（御殿堀）屈曲部の北西方向、213号遺構（近世2土坑）の北側に位置する。49cm × 40cm × 19cmの楕円形を呈する。

- ・遺物

出土資料は、陶器の碗（1点）である。

215号遺構 [H-5]（3-3区）

- ・遺構（第104図）

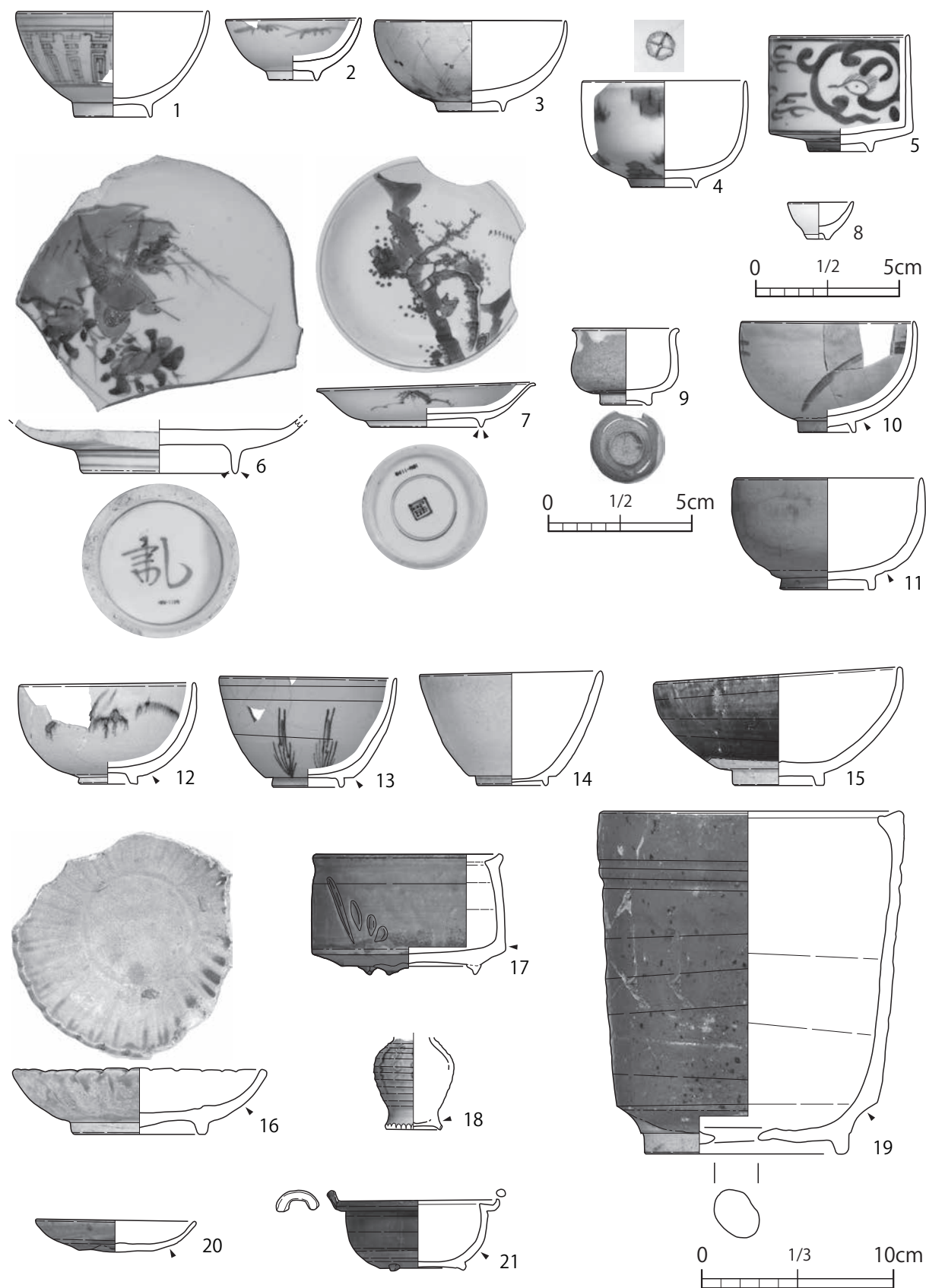
1号遺構（御殿堀）屈曲部の北方向に位置する。46cm × 41cm × 12cmの略円形を呈する。

241号遺構 [F-3]（3-4区）

- ・遺構（第104図）

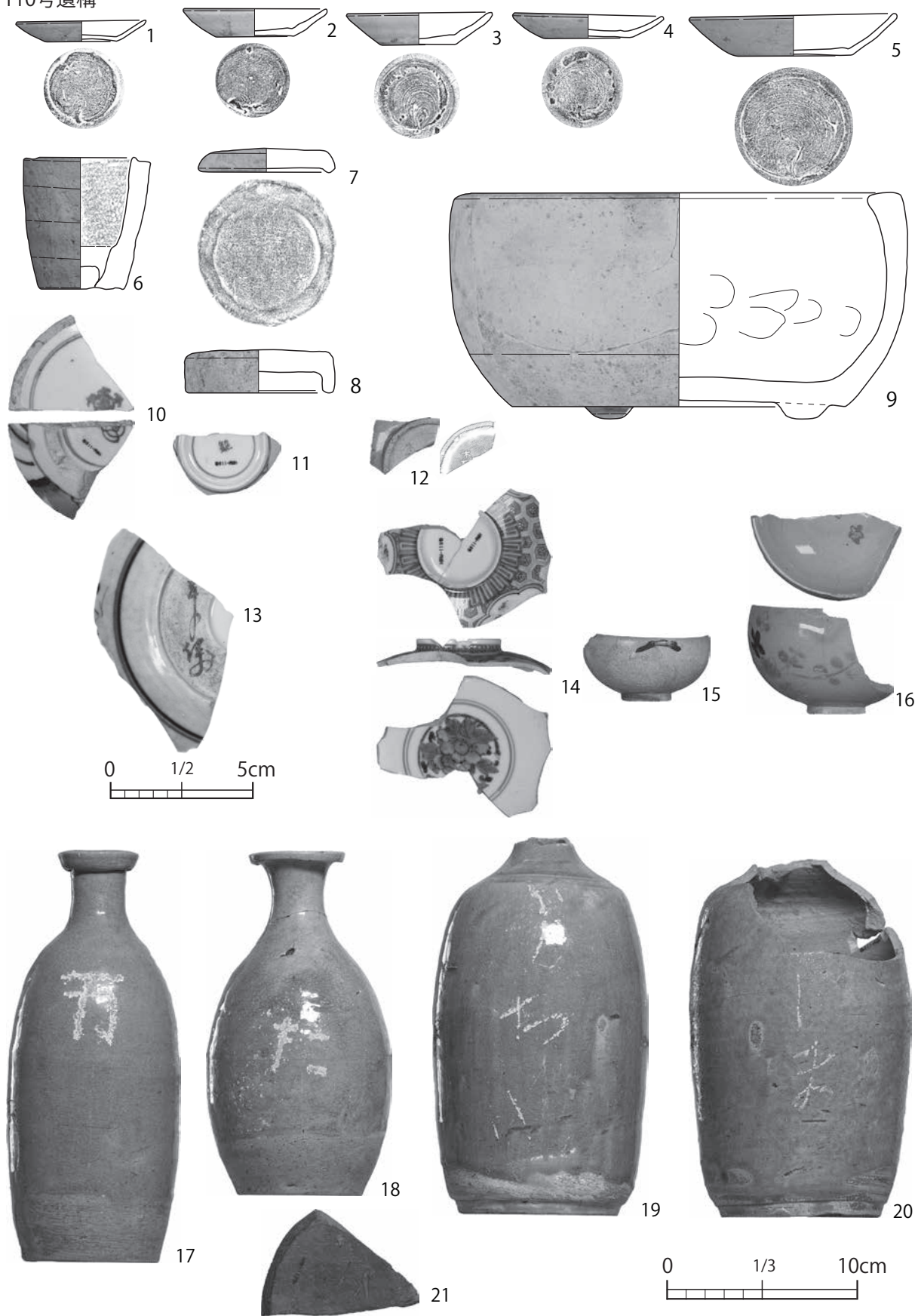
調査区北西側の51号遺構（近世1上水路）と70号遺構（近世1上水路）の間に位置する。45cm × 28cm × 14cmの不整長方形を呈する。

110号遺構



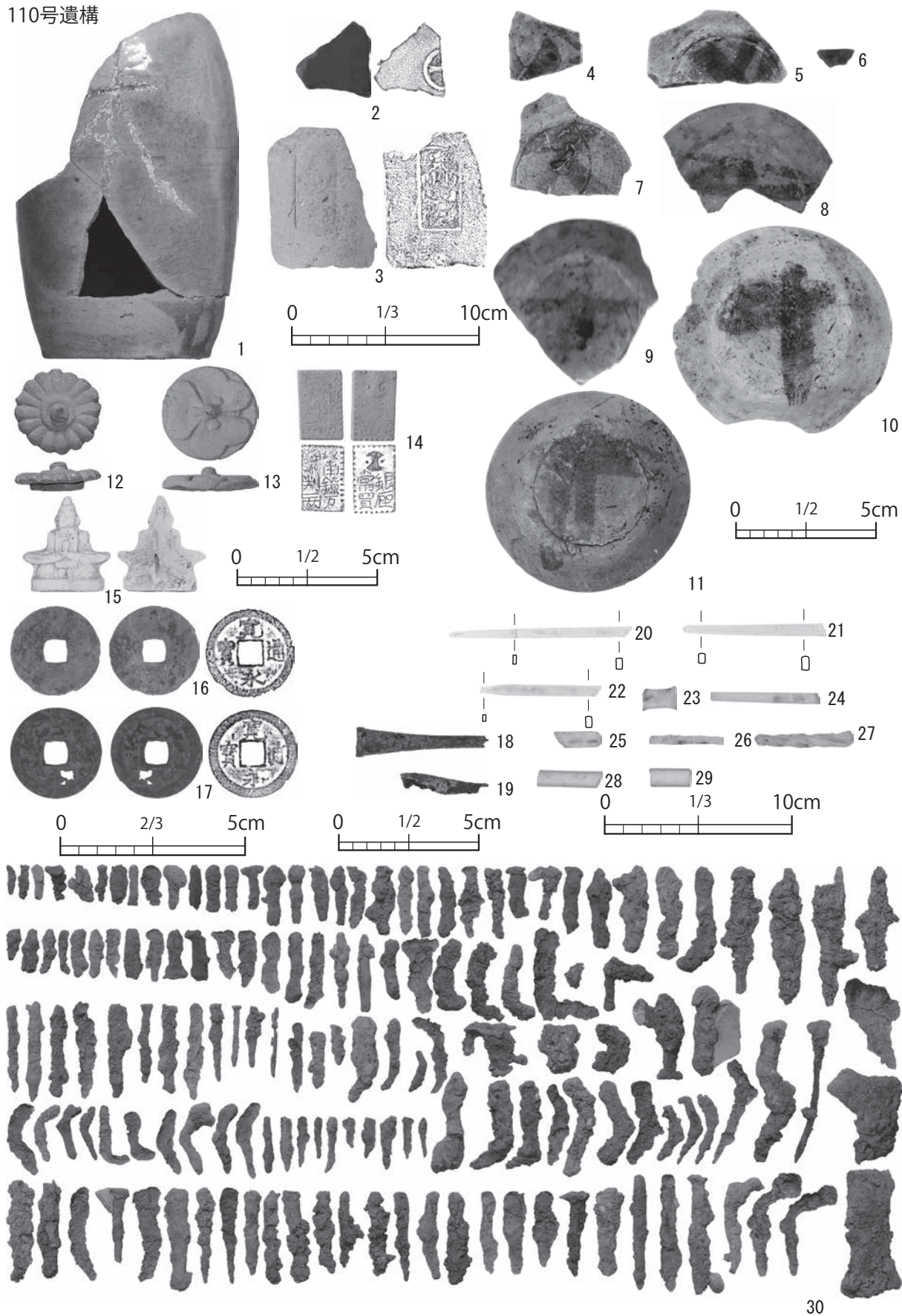
第 129 図 近世 2 面の遺物 (25 : 1/2 ・ 1/3)

110号遺構

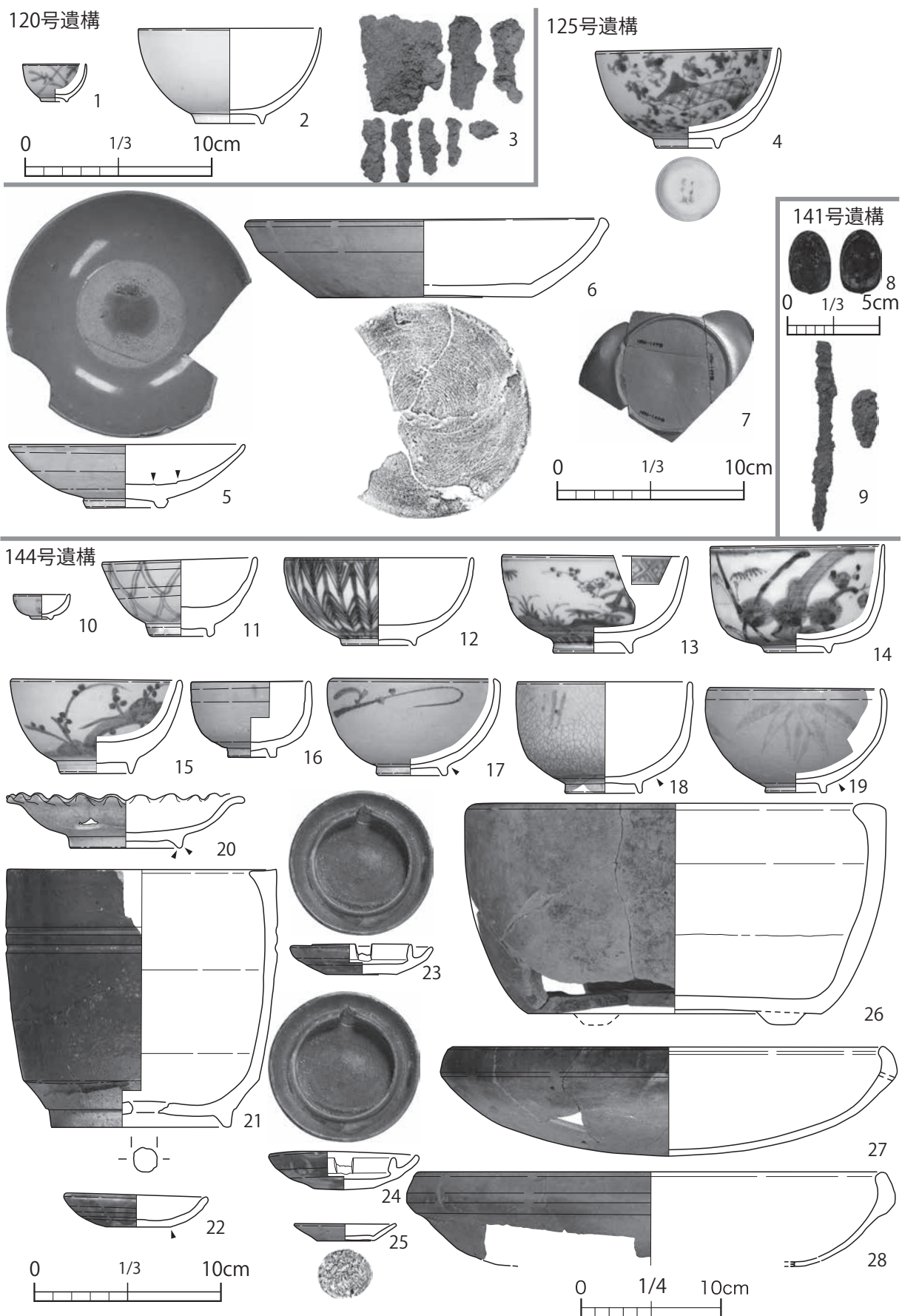


第 130 図 近世 2 面の遺物 (26 : 1/2 ・ 1/3)

110号遺構

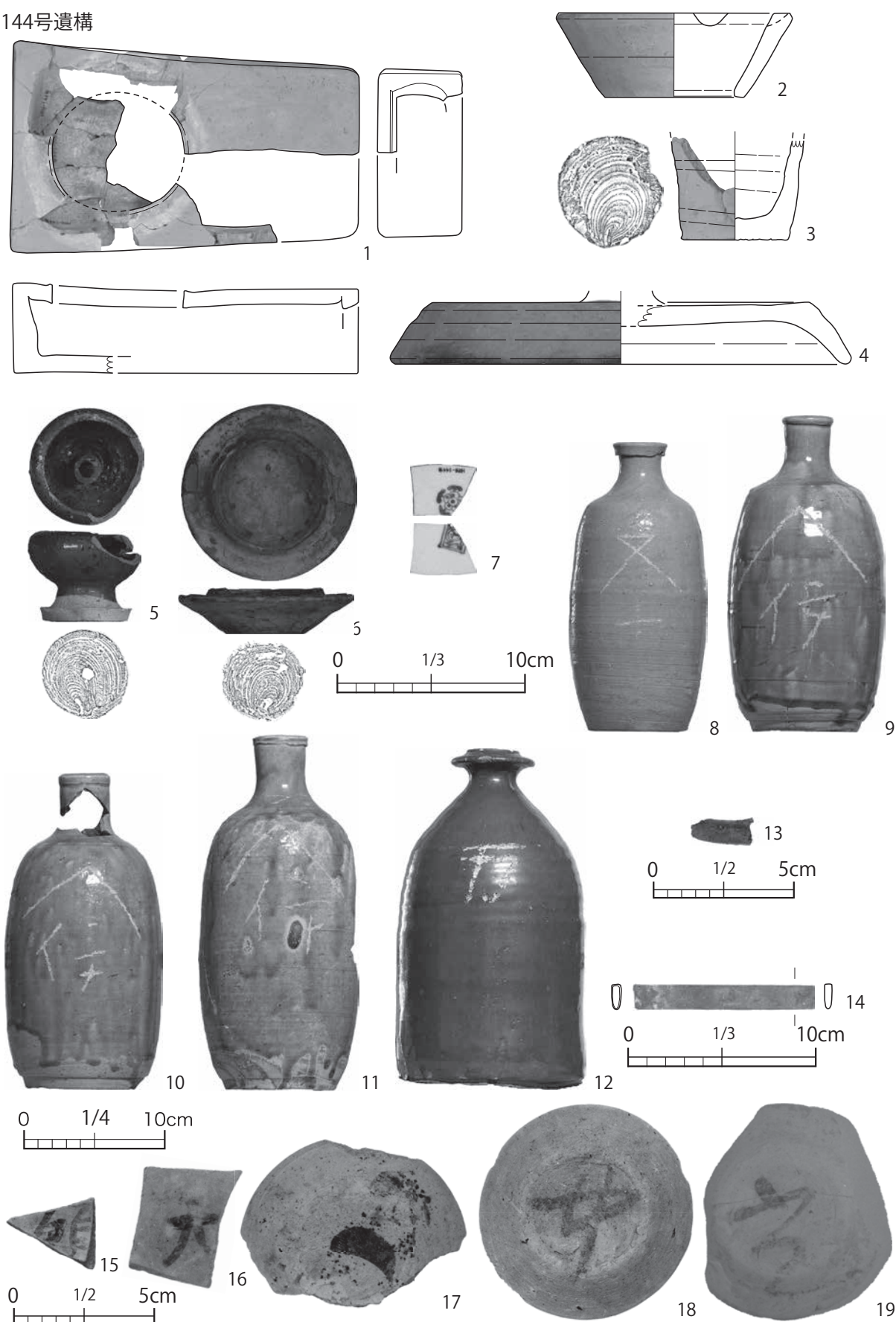


第 131 図 近世 2 面の遺物 (27 : 2/3 ・ 1/2 ・ 1/3)



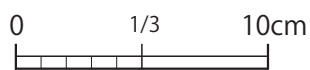
第 132 図 近世 2 面の遺物 (28 : 1/3 ・ 1/4)

144号遺構

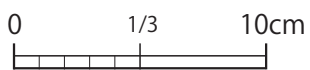


第 133 図 近世 2 面の遺物 (29 : 1/2 ・ 1/3 ・ 1/4)

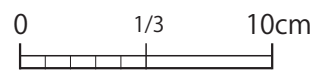
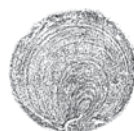
149号遺構



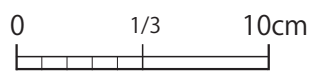
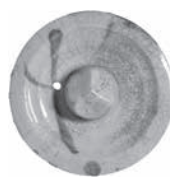
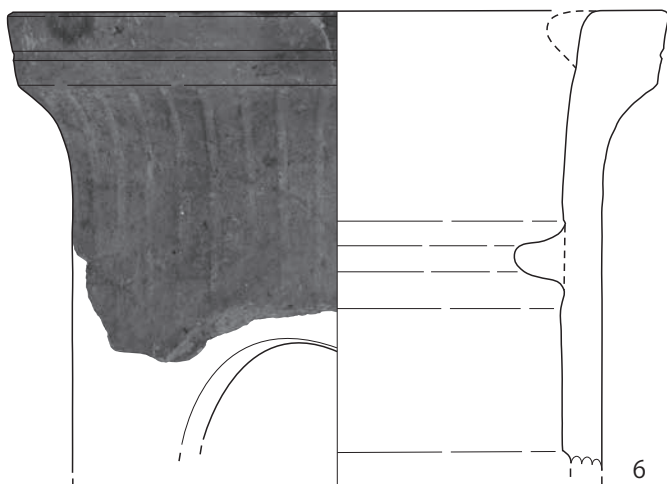
213号遺構



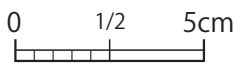
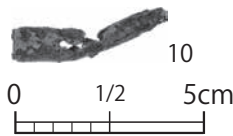
151号遺構



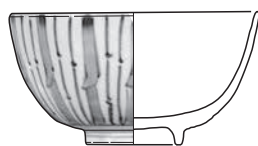
217号遺構



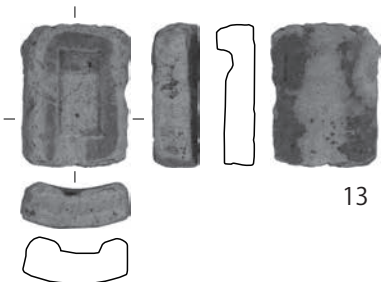
244号遺構



246号遺構



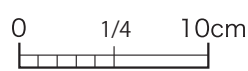
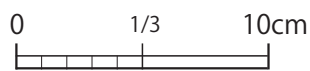
12



13

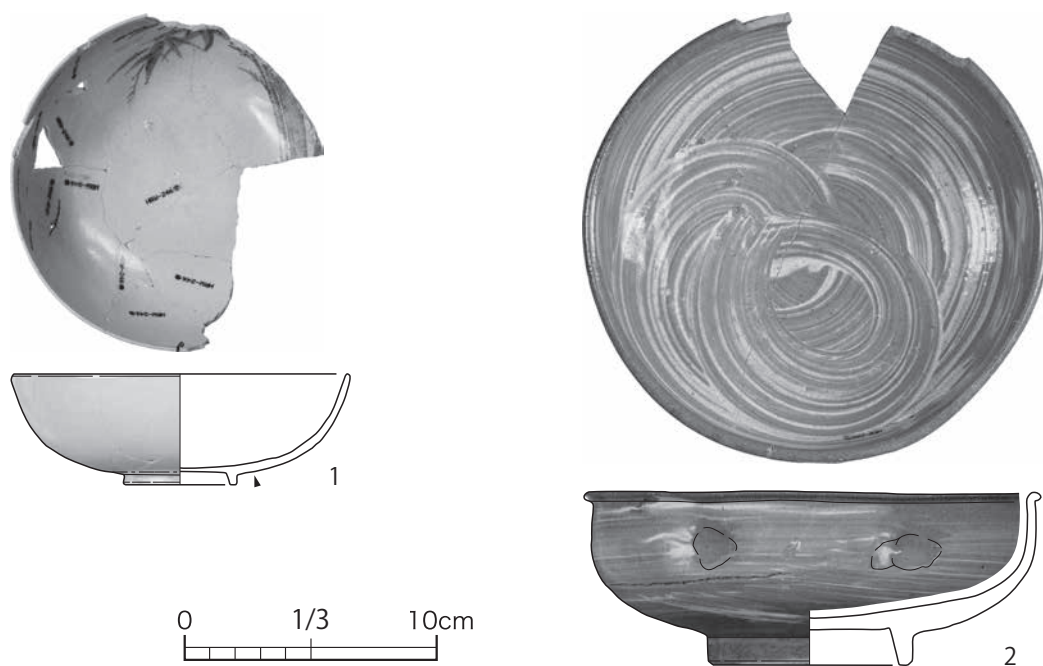


14

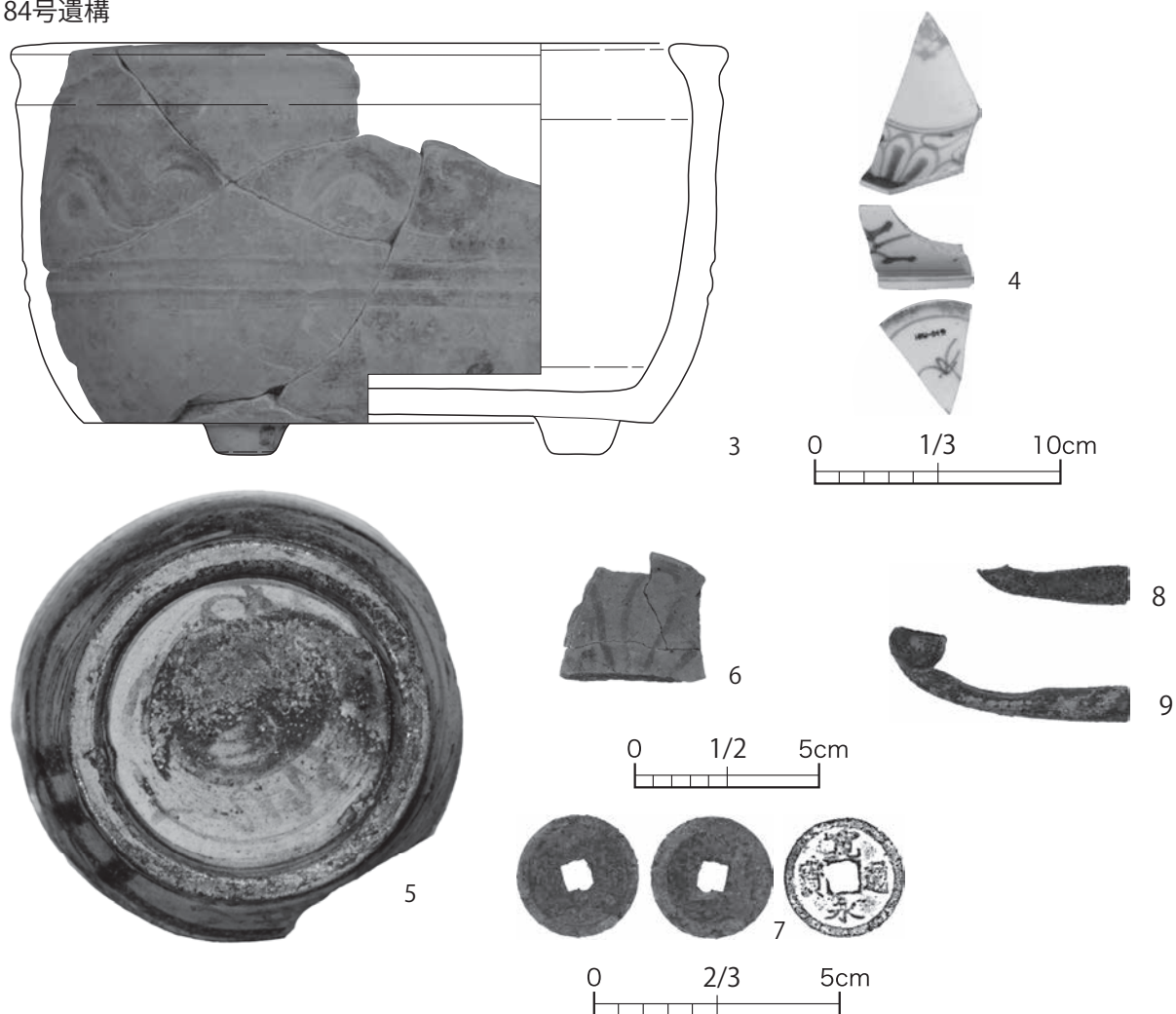


第 134 図 近世 2 面の遺物 (30 : 1/2 ・ 1/3 ・ 1/4)

246号遺構



84号遺構



第 135 図 近世 2 面の遺物 (31 : 2/3 ・ 1/2 ・ 1/3)

第9表 近世2面陶磁器・土器掲載資料

図版番号		出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ 径 (mm)	成形技 法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第 105 図	1	87 号	磁器	碗	肥前	98	53	38		轆轤	染付	淡灰	外面草花文	波佐見 くらわんか 碗 畳付に砂粒 底部銘	18C 前
第 105 図	2	87 号	磁器	碗	肥前	82	46	33		轆轤	染付		外面草花文	高台に砂粒付着	18C 代
第 105 図	3	87 号	磁器	碗	肥前	(78)	43	29		轆轤	染付		外面笹文		18C 代
第 105 図	4	87 号	磁器	碗	肥前	100	47	42		轆轤	染付		外面藤文	半球碗	18C 前～ 中
第 105 図	5	87 号	磁器	皿	肥前	134	35	84		轆轤	染付		外面唐草文 内 面区画扇子 / 区 画間蔓文	畳付砂粒付着 底部銘渦福	18C 前
第 105 図	6	87 号	磁器	仏飯器	肥前	69	48	36		轆轤		淡灰		波佐見か	18C 代
第 105 図	7	87 号	磁器	片口	肥前	135	87	70	(150)	轆轤	染付		外面葡萄文		18C 代
第 105 図	8	87 号	磁器	紅猪口	肥前	59	24	25		轆轤	染付 / 色絵		外面梅文		18C 代
第 105 図	9	87 号	磁器	香炉	肥前	(128)	87	(68)		轆轤	染付		外面草文		18C 代
第 105 図	10	87 号	陶器	碗	京都 ・信楽	82	46	28		轆轤	灰釉 色絵		外面葉文		18C 中～ 後
第 105 図	11	87 号	陶器	碗	瀬戸 ・美濃	96	65	45		轆轤	灰釉 呉須絵		外面山水文		18C 前～ 中
第 105 図	12	87 号	陶器	碗	肥前	101	71	1		轆轤	透明釉 呉須絵	灰	外面風景文	陶胎染付	18C 前
第 105 図	13	87 号	陶器	碗	瀬戸 ・美濃	100	47	39		轆轤	灰釉 呉須絵		外面鳥文	腰折碗	18C 中～ 後
第 105 図	14	87 号	陶器	碗	瀬戸 ・美濃	96	54	40		轆轤	灰釉・鉄釉 掛分			腰折碗	18C 中～ 後
第 105 図	15	87 号	陶器	皿	瀬戸 ・美濃	(123)	24	55		轆轤	灰釉 呉須絵 / 刷絵		見込み草花文		18C 中
第 105 図	16	87 号	陶器	猪口	京都 ・信楽	68	52	40		轆轤	灰釉 鉄絵 白化粧土		外面梅文	口縁方角	18C 代
第 105 図	17	87 号	陶器	片口	肥前	190	100	88		轆轤	灰釉 白化粧土 刷毛目	暗灰			18C 代
第 105 図	18	87 号	陶器	壺	瀬戸 ・美濃	60	145	86	121	轆轤	灰釉 / 鉄釉 流掛け	暗褐		体部そろばん玉形	18C 代
第 106 図	1	87 号	土器	皿		75	11	45							
第 106 図	2	87 号	土器	皿		79	14	44							
第 106 図	3	87 号	土器	皿		77	16	42							
第 106 図	4	87 号	土器	皿		79	15	46							
第 106 図	5	87 号	土器	皿		83	18	38							
第 106 図	6	87 号	土器	かわらけ		106	34	62		轆轤				外傾度大 やや深め 磨き調整 精製土器	
第 106 図	7	87 号	土器	火鉢		198	98	160		板作り 輪積				三足 口縁煤付着	
第 106 図	8	87 号	土器	火鉢		272	106	212		板作り 輪積				三足か 一足欠損	
第 106 図	9	87 号	土器	焔炉		(151)	(138)	(38)		板作り				焔炉受口部	
第 106 図	10	87 号	土器	焼塩壺		60	86	55		板作り		淡褐		体部刻印角棒「泉湊 伊織」 蓋掛りあり 金雲母若干	17C 後葉 ～ 18C 前
第 106 図	11	87 号	土器	焼塩壺		59	91	61		板作り		淡褐		体部刻印角棒「泉湊 伊織」 蓋掛りあり 金雲母若干	17C 後葉 ～18C 前
第 106 図	12	87 号	土器	焼塩壺蓋		79/74	20			型		淡褐		布目 金雲母顕著	17C 後葉 ～18C 前
第 107 図	1	87 号	陶器	播鉢	瀬戸・ 美濃	220	72	84		轆轤	鉄釉	淡灰黄褐		卸目 14 本 / 条	17C 後葉 ～18C 前 葉
第 107 図	2	87 号	陶器	花瓶	不明	—	53			板作り	部分長石釉			底面六角形か 体部 岩肌のような凸凹 底部銘角棒豪刻	
第 107 図	3	87 号	土器	鉢		72	44	40		轆轤		褐		底部糸切痕 口縁外 反気味 底部穿孔 植木鉢	
第 107 図	4	87 号	土器	灯明受皿		86	28	66	120	轆轤		褐		底部糸切痕 口縁 3 箇所煤付着	
第 107 図	5	87 号	陶器	碗	京都					轆轤	灰釉 鉄絵		外面葉文	平碗 見込み目跡 3 底部墨書「×仁□／ ×□□□」	18C 前
第 107 図	6	87 号	土器	かわらけ		74	13	36							
第 107 図	7	87 号	土器	かわらけ		—	—	38							
第 107 図	8	87 号	磁器	碗	肥前	(98)	52	42		轆轤	染付 こんにゃく印刷		外面花唐草文	底部銘角棒渦福	18C 前～ 中

図版番号		出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ 径 (mm)	成形技 法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第107図	9	87号	磁器	碗	肥前	(99)	53	42		轆轤	染付 こんにゃく印刷		外面唐草文	底部銘角枠渦福	18C 前
第107図	10	87号	磁器	碗	肥前	(108)	53	(44)		轆轤	染付		外面草花文	くらわんか碗 底部銘「□」	18C 前
第107図	11	87号	磁器	碗	肥前	—	(46)	42		轆轤	染付		外面草花文	くらわんか碗 底部銘「□」	18C 前
第107図	12	87号	磁器	碗	肥前	101	56	45		轆轤	染付		外面草花文	くらわんか碗 碗底部銘「□」	18C 前
第107図	13	87号	磁器	碗	肥前	—	(22)	—		轆轤	染付		外面草花文	くらわんか碗 碗底部銘「□」	18C 前
第107図	14	87号	磁器	そば猪口	肥前	(86)	66	(64)		轆轤	染付		外面唐草文 / 蓮花卉 内面口 縁文帯四方櫛文 見込み五弁花	蛇の目凹型高台 底部銘「富□(貴) 長(春)」	18C 後
第107図	15	87号	磁器	猪口	肥前	—	(21)	52		轆轤	染付		外面唐草文 内 面半菊文 見込 み五弁花	底部銘「大明成□ (化)年製」	17C 末 ~18C 後
第107図	16	87号	磁器	皿	肥前	129	37	76		轆轤	染付 こんにゃく印刷		外面唐草文 内 面花文 見込み 五弁花	くらわんか手 底部銘	18C 前
第108図	1	87号	磁器	蓋物蓋	肥前	(54)	(11)	(44)					天井花文	かえりあり	18C~ 19C 前
第108図	2	87号	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	—	(153)	76	112	轆轤	飴釉・薬灰釉	暗灰		体部連続釘書 屋号山形「伊」	18C 前~ 中
第108図	3	87号	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	—	(151)	71	112	轆轤	飴釉	暗灰		体部連続釘書 屋号山形「伊」	18C 前~ 中
第109図	1	113号	磁器	油壺	肥前	—	73	47	82	轆轤	染付	灰白	外面草花文		18C 代
第109図	2	113号	磁器	碗蓋	肥前	(98)	25		38	轆轤	染付		天井松竹梅文内 面口縁文様帯四 方櫛文 見込み 五弁花文		18C 後
第109図	3	113号 +135号	軟質 磁器	カップ	不明	92	48	34	113 (把手 含)	轆轤	透明釉・緑		体部縞文	洋食器	20C 代
第109図	7	13号	土器	瓦灯皿		86/161	(56)	180	186	板作り ・ 紐作り		褐			
第109図	12	44号	陶器	碗	不明	(96)	52	39		轆轤	灰釉・鉄釉・薬 灰釉	淡暗灰黄 褐		腰部刻印か	18C 代
第109図	13	44号	陶器	皿	肥前	(188)	59	56		轆轤	鉄釉・銅緑釉・ 灰釉 掛分け			内野山窯 蛇の目釉剥ぎ	18C 前
第110図	1	216号	磁器	碗	肥前	(70)	31	27		轆轤	染付		外面区画(墨 引き文字/草花 文) 見込み文 様		18C 代
第110図	2	216号	磁器	碗	肥前	(96)	49	34		轆轤	染付		外面連続篆書字 文 見込み篆書 字文		18C 後
第110図	3	216号	磁器	碗	肥前	84	57	30		轆轤	染付		外面区画(条線 /草花文) 見 込み五弁花	腰張碗	18C 後
第110図	4	216号 +試掘 No.2	磁器	碗	肥前	(95)	52	31		轆轤	染付		外面文様 見込み篆書字文		18C 後
第110図	5	216号	磁器	瓶	肥前					轆轤	染付		外面草花文/蛸 唐草文	高台砂粒付着	18C 代
第110図	6	216号	磁器	掛け花瓶	肥前	67× (45)	170	72× 48		板作り ・手捏 ね	染付			樹木(梅)・鳥 背面に壁掛け用孔1 側面に花入れ用孔1	18C 代か
第110図	7	216号	陶器	碗	瀬戸・ 美濃	98	64	48		轆轤	灰釉・鉄釉 掛分け	灰白		見込み砂粒 底部焼台痕	18C 前~ 中
第110図	8	216号	陶器	碗	瀬戸・ 美濃	100	77	44		轆轤	灰釉	灰		胴部押圧による文様 2	18C 代
第110図	9	216号	陶器	半胴甕	瀬戸・ 美濃	278	281	184		轆轤	鉄釉	淡灰褐		見込み目跡4	18C 代 ~19C 前
第110図	10	216号	陶器	土鍋	瀬戸・ 美濃	148	(64)	—		轆轤	鉄釉	灰		受け口 把手欠損	18C 後 ~19C 前
第110図	11	216号	陶器	土瓶蓋	瀬戸・ 美濃	—	18	44	11× 17	轆轤	鉄釉	淡灰褐		受部全体に欠損 故意によるものか	18C 後 ~19C 前
第110図	12	216号	土器	焼塩壺		60	55	43		轆轤		淡褐		底部条切痕 内外面ピンク	18C 後葉 ~19C 前
第110図	13	216号	土器	脚付灯明 受皿		84	(34)	—	受部 54	轆轤	透明釉	褐			

図版番号		出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ 径 (mm)	成形技 法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第110図	14	216号	陶器	碗蓋	瀬戸・美濃	105	34		43	轆轤	長石釉鉄絵	乳白	天井文様	口錆	18C 後 ~19C 前
第110図	15	216号	土器	タンコロ		39	17	25		轆轤		褐		底部糸切痕 灯芯支え タール付着	
第110図	16	216号	磁器	碗	肥前	—	(35)	65		轆轤	染付		外面文様 見込み蝶文	広東碗 底部銘角棒文字	18C 後
第110図	17	216号	磁器	碗	肥前	—	(37)	(48)		轆轤	青磁・染付 外青磁		見込み五弁花	底部銘角棒渦福	18C 後
第110図	18	216号	磁器	紅猪口	肥前	—	(20)	(60)					外面梅花文		19C 前
第110図	19	216号	土器	かわらけ		(74)	14	(44)							
第110図	20	216号	土器	かわらけ		(74)	11	(44)							
第111図	1	2号	磁器	碗	肥前	99	48	37		轆轤	染付		外面葡萄文	半球碗	18C 前 ~ 中
第111図	2	2号	磁器	碗	肥前	98	48	39		轆轤	染付		外面草花文	半球碗	18C 前 ~ 中
第111図	3	2号	磁器	碗	肥前	101	52	33		轆轤	染付		外面窓絵文・区 画間花文 内面 口縁文様帯雷文 見込み松竹梅		18C 代
第111図	4	2号	磁器	碗	肥前	84	40	34		轆轤	染付 こんにゃく印刷		外面家紋・上り 藤	半球碗	18C 前 ~ 中
第111図	5	2号	磁器	仏飯器	肥前	74	54	37		轆轤	染付	暗灰	外面文様		18C 代
第111図	6	2号	磁器	蓋物蓋	肥前	(102)	(23)		(120)	轆轤	染付			天井渦文	18C~ 19C 前
第111図	7	2号	磁器	碗	肥前	18	16	4		轆轤				外周斫り 転用品おはじき	
第111図	8	2号	陶器	碗	瀬戸・美濃	96	56	35		轆轤	灰釉	灰		せんじ碗	18C 中
第111図	9	2号	陶器	碗	瀬戸・美濃	101	61	44		轆轤	灰釉・鉄釉 掛分け	灰			18C 前 ~ 中
第111図	10	2号+12号	陶器	碗	京都・信楽	101	69	39		轆轤	灰釉 色絵	淡灰褐	外面文様	体部指押し 腰部鎬 文 高台内削り痕顕 著	18C 代
第111図	11	2号	陶器	碗	瀬戸・美濃	106	65	50		轆轤	灰釉	乳黄白		せんじ碗 体部指押し	18C 中
第111図	12	2号	陶器	皿	瀬戸・美濃	(124/98)	34	53		轆轤	灰釉	淡灰		木瓜形 御深井か	18C 前
第111図	13	2号	陶器	灯明受皿	志戸呂	104	26	50	受部 70	轆轤	鉄釉			受け部アーチ状孔2	18C 前
第112図	1	2号	土器	皿		75	15	41							
第112図	2	2号	土器	皿		77	13	41							
第112図	3	2号	土器	皿		77	14	38							
第112図	4	2号	土器	皿		80	16	42							
第112図	5	2号	土器	かわらけ		79	20	52		轆轤		乳白~淡 灰黄褐		底部糸切痕	
第112図	6	2号	土器	かわらけ		85	17	58		轆轤		乳白~淡 灰黄褐		底部糸切痕	
第112図	7	2号	土器	皿		84	15	42							
第112図	8	2号	土器	皿		82	16	44							
第112図	9	2号	土器	皿		98	19	50							
第112図	10	2号	土器	皿		95	18	50							
第112図	11	2号	土器	皿		94	18	48							
第112図	12	2号	土器	皿		113	24	68							
第112図	13	2号	土器	皿		113	22	65							
第112図	14	2号	土器	皿		117	22	64							
第112図	15	2号	土器	皿		129	23	72							
第112図	16	2号	土器	皿		132	28	72							
第112図	17	2号	土器	皿		136	27	75							
第112図	18	2号	土器	皿		197	37	122				淡褐		底部糸切痕 口縁か ら内面黒変	
第112図	19	2号	土器	皿		19.8	41	122				淡褐~褐		底部糸切痕	
第112図	20	2号+7号	土器	かわらけ		—	—	62		轆轤		灰褐		見込み陰刻松・竹・ 鶴・亀 底部渦文	
第112図	21	2号	土器	かわらけ		(98)	—	—		轆轤		淡褐		外面線刻文字	
第112図	22	2号	土器	かわらけ		—	—	(56)		轆轤		淡褐		見込み放射状の暗文	
第113図	1	2号	土器	かわらけ		68	11	38							
第113図	2	2号	土器	かわらけ		78	16	42							
第113図	3	2号	土器	かわらけ		(10)	17	(50)							
第113図	4	2号	土器	かわらけ		(132)	25	80							
第113図	5	2号	土器	かわらけ		(182)	39	113							

図版番号		出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ 径 (mm)	成形技 法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第113図	6	2号	土器	鉢型容器		70	36	42		轆轤		淡褐		底部糸切痕 体部穿孔3（平面三角形の頂点位置）	
第113図	7	2号	土器	焙烙		(300)	(78)			型		褐		底部ちりめん 底部内面刻印	18C 代
第114図	1	2号	陶器	植木鉢	不明	—	(33)	(160)		轆轤	鉄釉	暗灰		刻印「因久山」	18C 中 ~19C 前
第114図	2	2号	土器	鉢形容器		76	50	44		轆轤		褐		底部糸切痕 口縁外 反気味に内湾	
第114図	3	2号	土器	鉢形容器		(72)	45	25		轆轤		淡褐		底部糸切痕	
第114図	4	2号	土器												
第114図	5	2号	土器	焼塩壺		—	83	(56)		板作り		淡褐		体部刻印角棒「□湊 伊織」	17C 後 ~18C 前
第114図	6	2号	土器	焼塩壺		—	—	—		板作り		褐		体部刻印角棒「泉州 □□」	17C 後 ~18C 前
第114図	7	2号	土器	タンコロ		44	18	27		轆轤	透明釉	褐		底部糸切痕 灯芯支 え端部煤付着	
第114図	8	2号	土器	タンコロ		(36)	17	25		轆轤		褐		底部糸切痕	
第114図	9	2号	土器	焙烙		—	—	—		型		褐		底部ちりめん 内面刻印丸に「一」	18C 後 ~19C 前
第114図	10	2号	磁器	皿	中国 か	—	—	—		轆轤	染付		内面草花文	底部銘「宣明」	17C 前
第114図	11	2号	磁器	皿	肥前	—	—	—		轆轤	染付		内面文様	底部ハリ支え 底部銘角棒「福」	17C 末 ~18C 後
第114図	12	2号	磁器	酒杯	瀬戸・ 美濃	—	—	—		轆轤	色絵		内面文字文「× 記念×」		19C 後 ~
第114図	13	2号	陶器	碗	京都・ 信楽	—	—	—		轆轤	灰釉・色絵		外面文字	磨茶碗	18C 代
第114図	14	2号	土器	かわらけ		(78)	23	(100)							
第114図	16	2号	土器	かわらけ		80	15	41							
第114図	17	2号	土器	かわらけ		78	16	41							
第114図	18	2号	土器	かわらけ		96	28	48							
第114図	19	2号	土器	かわらけ		114	23	61							
第114図	20	2号	土器	かわらけ		—	—	—							
第114図	21	2号	土器	かわらけ		78	14	43							
第114図	22	2号	土器	かわらけ		(92)	16	42							
第114図	23	2号	土器	かわらけ		(80)	15	42							
第114図	24	2号	土器	かわらけ		(76)	17	42							
第114図	25	2号	土器	かわらけ		—	—	42							
第115図	1	2号	土器	かわらけ		(98)	17	50							
第115図	2	2号	土器	かわらけ		76	13	44							
第115図	3	2号	土器	かわらけ		76	13	41							
第115図	4	2号	土器	かわらけ		72	14	41							
第115図	5	2号	土器	かわらけ		72	11	38							
第115図	6	2号	土器	かわらけ		78	14	39							
第115図	7	2号	土器	かわらけ		78	16	42							
第115図	8	2号	土器	かわらけ		(98)	(19)	—							
第115図	9	2号	土器	かわらけ		(96)	24	(62)							
第115図	10	2号	土器	かわらけ		(84)	13	(48)							
第115図	11	2号	土器	かわらけ		(98)	(20)	—							
第115図	12	2号	土器	かわらけ		(96)	17	50							
第115図	13	2号	土器	かわらけ		(96)	(16)	—							
第115図	14	2号	土器	かわらけ		—	—	(22)							
第115図	15	2号	土器	かわらけ		(86)	14	(50)							
第115図	16	2号	土器	かわらけ		(130)	(19)	(80)							
第115図	17	2号	土器	かわらけ		92	19	42							
第115図	18	2号	土器	かわらけ		92	—	42							
第115図	19	2号	土器	かわらけ		—	—	42							
第115図	20	2号	土器	かわらけ		(80)	13	(37)							
第115図	21	2号	土器	かわらけ		(100)	(20)	—							
第115図	22	2号	土器	かわらけ		—	(13)	(57)							
第115図	23	2号	土器	かわらけ		—	—	—							
第115図	24	2号	土器	かわらけ		—	—	—							
第115図	25	2号	土器	かわらけ		—	—	—							
第115図	26	2号	土器	かわらけ		—	—	—							
第115図	27	2号	土器	かわらけ		—	—	—							
第115図	28	2号	土器	かわらけ		(96)	19	50							
第115図	29	2号	土器	焙烙		—	—	—							

図版番号		出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ 径 (mm)	成形技 法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第121図	1	3号	土器	皿		77	15	46				淡褐		底部糸切痕 腰部や丸気味	
第121図	2	3号	土器	皿		80	15	43				淡褐		底部糸切痕	
第121図	3	3号	土器	皿		80	14	44				淡褐		底部糸切痕 外面腰部・見込み外周ビンク	
第121図	4	3号	土器	皿		97	18	50							
第121図	5	3号	土器	皿		136	27	74							
第121図	6	3号	土器	皿		116	24	65							
第121図	7	3号+6号	陶器	蓋	瀬戸・美濃					轆轤	灰釉	灰		土瓶蓋か	18C代
第121図	8	3号	土器	かわらけ		—	—	—							
第121図	9	3号	土器	かわらけ		116	(17)	—							
第121図	14	5・6・7号	土器	かわらけ		113	18	53		轆轤		乳白		内外面磨き調整 碁笥底 見込み「善光寺」陽刻	
第121図	15	5号	土器	皿		78	16	45							
第121図	16	5号	土器	皿		97	21	56							
第121図	17	5号	土器	皿		112	20	60							
第121図	18	5号	土器	皿		97	20	50							
第121図	19	5号	土器	皿		133	29	76							
第121図	20	5・6・7号+8号	磁器	香炉	肥前					轆轤	染付	白	窓絵(笹)文		18C代
第122図	1	6号+9号	磁器	猪口	肥前	(72)	52	(45)		轆轤	染付		外面草花文		18C中～後
第122図	2	6号	土器	皿		75	15	40							
第122図	3	6号	土器	皿		74	15	38							
第122図	4	6号	土器	皿		96	17	50							
第122図	5	6号	土器	皿		96	20	52							
第122図	6	6号	土器	かわらけ		—	—	—							
第122図	13	7号	土器	皿		110	21	60				淡褐		底部糸切痕	
第122図	14	7号	土器	皿		87	16	42							
第122図	15	7号	土器	皿		81	16	42							
第122図	16	7号	土器	皿		98	21	56							
第122図	17	7号	土器	皿		138	33	82							
第122図	18	7号	土器	かわらけ		—	—	(35)							
第122図	19	7号	土器	かわらけ		—	—	—							
第122図	20	7号	土器	かわらけ		(88)	(13)	—							
第122図	21	7号	土器	かわらけ		(112)	(20)	—							
第122図	22	7号	土器	かわらけ		—	—	(60)							
第122図	23	7号	土器	かわらけ		—	—	(62)							
第122図	24	7号	土器	かわらけ		(76)	(16)	—							
第122図	25	7号	土器	かわらけ		—	(12)	56							
第123図	1	8号+9号	陶器	碗	肥前	88	62	49		轆轤	灰釉/鉄釉	乳黄白	外面山水文	京焼風陶器	17C後
第123図	2	8号	陶器	碗	瀬戸・美濃	98	67	47		轆轤	灰釉・鉄釉掛分け	乳黄白			18C前～中
第123図	3	8号	陶器	片口	瀬戸・美濃	154	103	73	190	轆轤	灰釉・鉄釉	乳白		見込み目跡3	18C代
第123図	4	8号	土器	皿		82	15	44							
第123図	5	8号	土器	皿		96	18	50				淡褐		底部糸切痕	
第123図	6	8号	土器	皿		112	21	58							
第123図	7	8号	土器	皿		117	21	60				淡褐		底部糸切痕	
第123図	8	8号	土器	皿		166	34	100				褐		底部糸切痕	
第123図	9	8号	土器	かわらけ		(92)	17	51							
第123図	10	8号	土器	かわらけ		—	—	—							
第123図	11	8号	土器	かわらけ		—	—	—							
第123図	12	8号	土器	かわらけ		—	—	—							
第123図	13	8号	土器	かわらけ		(172)	32	85							
第124図	1	9号+10号	陶器	碗	京都	89	60	58		轆轤	灰釉 色絵・呉須絵・鉄絵	乳白	外面草本文・文字文	筒形碗	18C前～中
第124図	2	9号	土器	皿		72	13	40							
第124図	3	9号	土器	皿		105	19	54				淡褐		底部糸切痕	
第124図	4	9号	土器	皿		113	23	63							
第124図	5	9号	土器	皿		118	26	62				淡褐		底部糸切痕	
第124図	6	9号	土器	皿		131	29	78				淡褐		底部糸切痕	
第124図	7	9号	陶器	壺蓋	瀬戸・美濃	60	19	35		轆轤	灰釉	灰		底部糸切痕 二次焼成	17C後葉

図版番号		出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ 径 (mm)	成形技 法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第124図	8	9号	土器	かわらけ		—	—	—							
第124図	9	9号	土器	かわらけ		(80)	18	43							
第124図	14	12号	磁器	そば猪口	肥前	75	57	48		轆轤	染付		外面草花文 見込み五弁花文	底部銘「大明年製」	18C代
第124図	15	12号	磁器	坏	肥前	57	47	34		轆轤	白磁				18C後
第124図	16	12号	磁器	碗	瀬戸・ 美濃	(86)	68	(42)		轆轤	瑠璃釉				19C前
第124図	17	12号	磁器	紅猪口	肥前	23	12	8		轆轤	白磁		外面陽刻文		18C代
第124図	18	12号	磁器	鉢	肥前	(155)	83	(73)		轆轤	染付		外面蓮弁文 内外面口縁文様 帯区画(鱗文/ 墨引き文) 見込み荒磯文	高台内焼継ぎ印	18C代
第124図	19	12号	磁器	蓋	肥前	(92)	25	43	8	轆轤	青磁 染付		天井文字文	下面は施釉後ヘラに よる調整 水指蓋 か?	18C代
第124図	20	12号	磁器	仏飯器	肥前	58	58	32		轆轤	染付		外面蛸唐草文		18C代
第124図	21	12号	陶器	碗	京都	107	54	40		轆轤	灰釉 鉄絵	淡灰黄	外面如意頭文		18C前～ 中
第124図	22	12号	陶器	捏鉢	瀬戸・ 美濃	140	76	56		轆轤	灰釉	灰白		見込み目跡5 口縁玉縁	19C前
第124図	23	12号	陶器	水鉢	瀬戸・ 美濃	282	142	192		轆轤	灰釉・鉄釉流掛 け 鎬文	淡灰	鎬・水流文	見込み目跡4	18C後 ～19C前
第125図	1	12号	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	—	(218)	108	152	轆轤	鉄釉	暗灰		べこかん徳利 胴部凹み	19C前
第125図	2	12号	陶器	土瓶蓋	京都・ 信楽	82	(20)		11	轆轤	緑釉	灰			
第125図	3	12号	陶器	土瓶蓋	不明	69	20	25	14	轆轤	透明釉 白化粧土	淡灰	天井文字文	底部糸切痕	19C前
第125図	4	12号	陶器	土瓶	不明	75	98	77	158	轆轤	透明釉 白化粧土	淡灰褐	外面文字文	3とセット	19C前
第125図	5	12号	土器	皿		78	14	45							
第125図	6	12号	土器	皿		94	18	50							
第125図	7	12号	土器	皿		138	30	80							
第125図	8	12号	土器	焼塩壺蓋		79	20	77		型		褐		布目	
第125図	9	12号	土器	焼塩壺		50	74	43		轆轤		褐		底部糸切痕	
第125図	10	12号	土器	脚付灯明 受皿		(77)	76	71	受部 (47)	轆轤	透明釉	褐			
第125図	11	12号	土器	焼塩壺		—	—	—		板作り		褐		体部刻印角棒「泉湊 □□」	17C後 ～18C前
第125図	12	12号	土器	焼塩壺		—	(64)	60		轆轤		褐		底部糸切痕 体部刻 印角棒「×□□」	19C前
第125図	13	12号	陶器	香炉	肥前	—	(22)	(52)		轆轤	透明釉	暗灰		京焼風陶器 底部銘刻印「清水」	18C前
第125図	14	12号	土器	鉢形容器		78	44	47		轆轤		褐		底部糸切痕 口縁外 反気味	
第125図	15	12号	陶器	餌猪口	瀬戸・ 美濃	49	26	48	55	轆轤	灰釉	灰		底部糸切痕	18C後
第125図	16	12号	陶器	搦鉢	堺	(316)	116	(160)		板作り ・輪積		褐		焼き締め 御目7本 /条	18C後 ～19C前
第125図	17	12号	土器	植木鉢		(136)	86	80		轆轤		灰		底部糸切痕	
第125図	18	12号	土器	植木鉢		116	71	56		轆轤		灰～暗灰		底部糸切痕 口縁外 反	
第125図	19	12号	磁器	碗	肥前	—	—	—			染付		外面草花文		18C代
第125図	20	12号	磁器	碗蓋	肥前	(30)	20	(70)			染付		天井区画(草花) 文		18C代
第125図	21	12号	磁器	碗蓋	瀬戸・ 美濃	—	22	—			染付		天井草花文		19C前
第125図	22	12号	磁器	碗	肥前	(84)	44	(30)			染付		外面草花文		18C代
第125図	23	12号	磁器	碗	瀬戸・ 美濃	—	28	29		轆轤	染付		外面唐花文	底部銘「祥瑞立良/ 太□製」	19C前
第125図	24	12号	磁器	碗	肥前	(99)	52	42		轆轤	染付		外面草花文	くらわんか碗 底部銘「□」	18C前
第125図	25	12号	磁器	碗	肥前	—	12	40		轆轤	染付		外面文様 見込 み花文	底部銘「成化年製」	17C末 ～18C後
第125図	26	12号	磁器	碗	肥前	—	30	48		轆轤	染付		外面文様 / 鋸歯 文	底部銘角棒篆書体	17C末 ～18C後

図版番号		出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ 径 (mm)	成形技 法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第125図	27	12号	磁器	碗	肥前	(100)	50	(36)		轆轤	染付		外面ちりめん唐 草文 / 角蓮弁文 内面口縁文様帯 四方繹文 見込 み松竹梅文	半球碗 底部銘「富貴長春」	18C 前 ~ 中
第126図	1	12号	磁器	碗	肥前	—	(37)	51		轆轤	染付 こんにやく印刷		外面草花文 見 込み五弁花文	くらわんか碗 底部銘渦福か	18C 前
第126図	2	12号	磁器	碗	肥前	—	(31)	(43)		轆轤	染付		外面草花文	くらわんか碗 底部銘「□」	18C 前
第126図	3	12号	磁器	碗	肥前	—	23	42		轆轤	染付		外面文	くらわんか碗 底部銘「□」	18C 前
第126図	4	12号	磁器	碗	肥前	—	44	38		轆轤	染付		外面草花文	くらわんか碗 底部銘「□」	18C 前
第126図	5	12号	磁器	碗	瀬戸・ 美濃	82	75	50		轆轤	人造コバルト			大前家家紋「隅立て 四ツ目結文」	19C 後 ~
第126図	6	12号	磁器	碗	肥前	—	—	—		轆轤	染付		外面丸棹三ツ葉 葵紋		
第126図	7	12号 +110号	磁器	鉢	肥前					轆轤	染付		外面雲文 内面 蝙蝠文他		18C 後 ~
第126図	8	12号	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	—	148	70		轆轤	灰釉	灰		体部烈点釘書 屋号「舎」	18C 末 ~19C 前
第126図	9	12号	土器	かわらけ		—	—	—							
第127図	1	14号	土器	焼塩壺蓋		76	17	75		型		暗灰褐		布目痕	17C 後 ~18C 前
第127図	8	15号 169	土器	皿		79	13	42				淡褐		底部糸切痕	
第127図	9	15号 171	土器	皿		80	14	40				淡褐		底部糸切痕	
第127図	10	15号 170	土器	皿		85	1.6	42				淡褐		底部糸切痕	
第127図	11	15号 178	土器	皿		97	16	50				淡褐		底部糸切痕	
第127図	12	15号 174	土器	皿		97	18	52				淡褐		底部糸切痕	
第127図	13	15号 176	土器	皿		96	20	54				淡褐		底部糸切痕	
第127図	14	15号	土器	皿		141	28	80							
第127図	15	15号 167	土器	皿		143	30	80				淡褐		底部糸切痕	
第127図	16	15号 168	土器	皿		144	30	84				淡褐		底部糸切痕	
第127図	17	15号	陶器	壺蓋	瀬戸・ 美濃	(102)	24	53		轆轤	灰釉	淡灰黄褐		底部糸切痕	17C 後葉
第127図	20	17号	土器	かわらけ		—	—	(42)							
第127図	21	17号	土器	かわらけ		—	—	—							
第128図	1	21号 + 包含層	磁器	碗	肥前	102	50	41		轆轤	染付		外面梅・花文	半球碗 底部銘角棹渦福	18C 中
第128図	2	21号	土器	焙烙		(232)	(65)	—		型		褐		底部ちりめん 内面刻印丸に「一」	18C 後 ~19C 前
第128図	4	25号	土器	焙烙		—	—	—		型		褐		底部ちりめん 内面刻印丸に「一」	18C 後 ~19C 前
第128図	5	25号	土器	かわらけ		—	—	(42)							
第128図	7	47号 +48号	磁器	碗	肥前					轆轤	染付	白	外面丸(松)文・ 半菊文		18C 代
第128図	8	65号	土器	皿		76	16	43							
第128図	9	65号	土器	皿		78	14	44							
第128図	10	65号	土器	皿		78	16	45							
第128図	11	65号	土器	皿		97	18	46							
第128図	12	65号	土器	皿		99	19	50							
第128図	14	69号	陶器	碗	不明	—	(21)	(36)		轆轤	灰釉			底部銘刻印	18C 代
第128図	16	71号	土器	かわらけ		72	8	41							
第128図	17	71号	土器	かわらけ		—	(7)	(42)							
第128図	19	71号	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	—	177	76	108	轆轤	灰釉	灰		体部烈点釘書 屋号山形「川」	18C 後 ~19C 前
第129図	1	110号	磁器	碗	肥前	100	55	40		轆轤	染付		外面篆書字文 見込み篆書字文		18C 代
第129図	2	110号	磁器	紅猪口	肥前	70	33	26		轆轤	染付		外面笹文		18C 後 ~19C 前
第129図	3	110号	磁器	碗	肥前	99	48	35		轆轤	染付		外面文様	半球碗	18C 前 ~ 中
第129図	4	110号	磁器	碗	肥前	(84)	56	34		轆轤	染付		外面亀甲文 見込み花文	腰張碗	18C 代

図版番号		出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ 径 (mm)	成形技 法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第129図	5	110号	磁器	碗	肥前	72	61	34		轆轤	染付 こんにやく印刷		外面鳳凰・雲文 内面口縁文様帯 四方櫛文 見込み五弁花	筒形碗	18C 後
第129図	6	110号	磁器	皿	肥前	—	(28)	(80)		轆轤	染付		内面花鳥文	底部銘	18C 代
第129図	7	110号	磁器	皿	中国	114	58	23		轆轤	染付		外面枝文 内面山水文	底部銘角椀篆書 口縁外反 口縁虫喰い	~17C 前 葉
第129図	8	110号	磁器	紅猪口	肥前	22	13	8		轆轤	白磁				18C 代
第129図	9	110号	陶器	小坏	瀬戸・ 美濃 か	36	27	18		轆轤	灰釉 白化粧土	暗灰		口縁外反 高台内墨書	18C 代
第129図	10	110号	陶器	碗	京都・ 信楽	90	58	29		轆轤	透明釉・色絵	淡灰黄褐	外面花・格子文		18C 中～ 後
第129図	11	110号	陶器	碗	瀬戸・ 美濃	96	59	48		轆轤	灰釉呉須絵	淡灰黄褐	外面文様	御室碗	18C 前～ 中
第129図	12	110号	陶器	碗	京都・ 信楽	90	53	30		轆轤	灰釉鉄絵	灰白	外面文様		18C 中～ 後
第129図	13	110号	陶器	碗	京都・ 信楽	91	58	36		轆轤	灰釉 呉須絵・鉄絵	灰白	外面若杉文	小杉碗	18C 中～ 後
第129図	14	110号	陶器	碗	京都・ 信楽	94	60	36		轆轤	灰釉	灰白		小杉碗	18C 中～ 後
第129図	15	110号	陶器	碗	瀬戸・ 美濃	123	62	47		轆轤	緑釉	淡灰黄褐			18C 前～ 中
第129図	16	110号	陶器	皿	瀬戸・ 美濃	(128)	35	68		轆轤	灰釉・緑釉	淡灰黄褐		菊皿 内面目跡3	18C 中
第129図	17	110号	陶器	香炉	瀬戸・ 美濃	96	63	72	102	轆轤	灰釉	淡灰	外面半菊文	三足鍋	18C 前
第129図	18	110号	陶器	壺	京都 か	—	(48)	29		轆轤	透明釉 呉須絵・鉄絵	淡灰黄褐	外面よろけ縞文 他		18C 代
第129図	19	110号	陶器	半胴甕	瀬戸・ 美濃	155	180	103		轆轤	鉄釉	暗灰黄褐		底部穿孔 植木鉢に転用	19C 前
第129図	20	110号	陶器	灯明皿	瀬戸・ 美濃	83	17	39		轆轤	鉄釉	暗灰		底部重ね焼き環状痕	18C 後葉 ~19C 前
第129図	21	110号	陶器	土鍋	瀬戸・ 美濃	83	42	40	93	轆轤	鉄釉	灰		三足 受け口 胴下部に煤付着	18C 後 ~19C 前
第130図	1	110号	土器	皿		68	11	38							
第130図	2	110号	土器	皿		75	15	42							
第130図	3	110号	土器	皿		75	17	40							
第130図	4	110号	土器	皿		78	13	46							
第130図	5	110号	土器	皿		108	22	62							
第130図	6	110号	土器	焼塩壺		50	69	44		板作り		灰褐		内部布目 金雲母含	
第130図	7	110号	土器	焼塩壺蓋		62/67	13			手捏ね か		灰		布目 内外面ピンク	17C 後
第130図	8	110号	土器	焼塩壺蓋		77/76	23			型		淡灰黄褐		内面細かい布目 砂 粒顕著 外表面剥離 が激しい 泉州麻生 産と思われる	17C 後葉 ~18C 前
第130図	9	110号	土器	火鉢		224	119	176		板作り ・輪積		褐		三足内面接合帯が見 られる 指頭による 調整痕あり	
第130図	10	110号	磁器	碗	肥前	—	(22)	—		轆轤	染付 こんにやく印刷		外面文様 見込 み五弁花	くらわんか碗 底部銘渦福	18C 前
第130図	11	110号	磁器	そば猪口	肥前	—	(22)	44		轆轤	染付		外面文様	底部銘「□」	18C 代
第130図	12	110号	陶器	碗	肥前	—	(15)	(52)		轆轤	透明釉	暗灰		京焼風陶器 底部銘刻印「森」	17C 後 ~18C 初
第130図	13	110号	磁器	瓶	肥前	—	(20)	62			染付		外面文様	碁笥底 蛇の目凹形 高台 底部墨書「× □□□」	18C 代
第130図	14	110号	磁器	碗蓋	肥前	44	(20)	—			染付・金彩		天井窓絵(草花 文)・亀甲文・ 蓮弁文 内面牡 丹文		18C 代
第130図	15	110号	陶器	碗	京都・ 信楽	(64)	33	25			白化粧土・透明 釉	淡褐	外面松文		18C 後
第130図	16	110号	陶器	碗	京都・ 信楽	(96)	51	(32)			灰釉	淡灰黄褐	外面草花文		18C 後
第130図	17	110号	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	33	217	69	90	轆轤	灰釉	暗灰		体部連続釘書 屋号「万」 頸長	18C 前～ 中
第130図	18	110号	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	27	181	65	98	轆轤	灰釉	淡灰黄褐		体部連続釘書 屋号「た」 頸長	18C 前～ 中

図版番号		出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ 径 (mm)	成形技 法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第130図	19	110号	陶器	德利	瀬戸・美濃	—	(200)	82	114	轆轤	灰釉	暗灰		体部烈点釘書 屋号「□□(ち)□」	18C 後 ~19C 前
第130図	20	110号	陶器	德利	瀬戸・美濃	—	(177)	78	107	轆轤	灰釉	暗淡灰黄 褐		体部烈点釘書 屋号「×しま」	18C 後 ~19C 前
第130図	21	110号	陶器	瓶	備前	—	(16)	(112)		轆轤		赤褐		底部窯印 焼き締め	
第131図	1	110号	陶器	德利	瀬戸・美濃	—	139	67		轆轤	灰釉	灰		体部連続釘書 屋号「□本」	18C 前 ~ 中
第131図	2	110号	土器	焙烙		—	—	—		型		褐		底部ちりめん 内面刻印丸に「一」	18C 後 ~19C 前
第131図	3	110号	土器	焼塩壺		—	—	—		板作り		褐		体部刻印「泉州麻生」	17C 後 ~18C 前
第131図	4	110号	土器	かわらけ		—	—	—							
第131図	5	110号	土器	かわらけ		—	(10)	40							
第131図	6	110号	土器	かわらけ		—	—	—							
第131図	7	110号	土器	かわらけ		—	(6)	45							
第131図	8	110号	土器	かわらけ		(72)	12	(44)							
第131図	9	110号	土器	かわらけ		(72)	12	41							
第131図	10	110号	土器	かわらけ		74	10	44							
第131図	11	110号	土器	かわらけ		70	11	42							
第132図	1	120号	磁器	小坏	肥前	34	20	15		轆轤	染付				18C 代
第132図	2	120号	磁器	碗	肥前	(97)	51	36		轆轤	白磁		外面文様		18C 代
第132図	4	125号	磁器	碗	肥前	98	54	33		轆轤	染付		外面花蛸唐草・ 唐草文	底部銘「大明成化年 製」	18C 代
第132図	5	125号	陶器	皿	肥前	125	34	42		轆轤	銅緑釉・灰釉			内野山窯跡 目見込み蛇の目剥ぎ	18C 前
第132図	6	125号	土器	皿		188	42	115				淡褐		底部糸切痕	
第132図	7	125号 +149号	陶器	瓶か	肥前 か					轆轤		暗褐		焼き締め・外面磨き	
第132図	10	144号	磁器	紅猪口	肥前	(30)	13	(10)		轆轤	色絵		外面羽子板・羽 根文		18C 代
第132図	11	144号	磁器	碗	肥前	82	43	31		轆轤		灰	外面二重網目文		18C 前 ~ 中
第132図	12	144号	磁器	碗	肥前	(100)	47	38		轆轤	染付		外面矢羽根文	腰張碗	18C 代
第132図	13	144号	磁器	碗	肥前	98	53	42		轆轤	染付		外面松竹梅文 / 蓮弁文 内面口 縁文様帯四方櫛 文 見込み花文		18C 代
第132図	14	144号	磁器	碗	肥前	92	58	34		轆轤	染付		外面松竹・梅文	腰張碗	18C 代
第132図	15	144号	磁器	碗	肥前	90	51	38		轆轤	染付		外面草花文	底部銘	18C 前
第132図	16	144号	陶器	碗	瀬戸・美濃	62	41	25		轆轤	灰釉				18C 前
第132図	17	144号	陶器	碗	瀬戸・美濃	86	52	36		轆轤	灰釉 呉須絵		外面文様		18C 代
第132図	18	144号	陶器	碗	瀬戸・美濃	92	60	41		轆轤	灰釉 呉須絵		外面山水文		18C 中
第132図	19	144号	陶器	碗	京都・ 信楽	92	56	31		轆轤	透明釉 色絵・呉須絵		外面笹文		18C 中
第132図	20	144号	陶器	皿	瀬戸・美濃	(128)	30	60		轆轤	灰釉			輪花皿	18C 中
第132図	21	144号	陶器	半胴甕	瀬戸・美濃	(145)	139	96		轆轤	鉄釉			底部穿孔 植木鉢に転用	18C 後 ~19C 前
第132図	22	144号	陶器	灯明皿	瀬戸・美濃	75	18	35		轆轤	鉄釉				18C 代
第132図	23	144号	陶器	灯明受皿	瀬戸・美濃	75	17	39	受部 52	轆轤	鉄釉		外面重ね焼痕 (環状痕)		18C 代
第132図	24	144号	陶器	灯明受皿	瀬戸・美濃	79	21	32	受部 55	轆轤	鉄釉				18C 代
第132図	25	144号	土器	皿		54	9	30				淡褐		底部糸切痕 見込 み・底部ピンク	
第132図	26	144号	土器	火鉢		287	159	210		板作り ・輪積		淡褐		三足 二足欠損 胴内部ナデ調整	
第132図	27	144号	土器	焙烙		(308)	78			型		褐		底部ちりめん 孔2	18C 代
第132図	28	144号	土器	焙烙		(330)	(67)			型		褐		底部ちりめん	18C 代
第133図	1	144号	土器	風口		185	113	48		板作り		褐			
第133図	2	144号	土器	五徳		(123)	45	(74)						逆台形状 上端部凹 み2	
第133図	3	144号 +12号	土器	焼塩壺		—	(53)	55		轆轤		褐		底部糸切痕	

図版番号		出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ 径 (mm)	成形技 法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第 133 図	4	144 号	土器	火消壺蓋		(240)	(33)			板作り 輪積		褐		把手欠損	
第 133 図	5	144 号	陶器	秉燭	瀬戸・ 美濃	52	47	44	63	轆轤	鉄釉			底部糸切痕	19C 前
第 133 図	6	144 号	土器	灯明受皿		60	25	40	93	轆轤		暗灰		底部糸切痕 表面剥 落	
第 133 図	7	144 号	磁器	皿	肥前	—	—	—		轆轤	染付		見込み五弁花	底部銘角棒「福」	17 末 ~18C 後
第 133 図	8	144 号	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	35	207	67	96	轆轤	灰釉			体部連続釘書 屋号「又一」	18C 前 ~18C 中
第 133 図	9	144 号 +153 号	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	31	224	74	111	轆轤	鉛釉	暗灰		体部連続釘書 屋号山形「伊」	18C 中 ~19C 前
第 133 図	10	144 号	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	(35)	224	80	112	轆轤	灰釉			体部連続釘書 屋号山形「伊」	18C 前 ~ 中
第 133 図	11	144・ 153 号	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	36	249	76	113	轆轤	灰釉			体部連続釘書 屋号 山形「伊」 底部孔	18C 前 ~ 中
第 133 図	12	144 号	陶器	瓶	瀬戸・ 美濃	36	240	130		轆轤	鉄釉			体部連続釘書「万」 口縁帯円盤状に突出 底部焼台痕	18C 前
第 133 図	15	144 号	土器	かわらけ		—	—	—							
第 133 図	16	144 号	土器	かわらけ		—	—	(50)							
第 133 図	17	144 号	土器	かわらけ		(76)	11	42							
第 133 図	18	144 号	土器	かわらけ		72	11	42							
第 133 図	19	144 号	土器	かわらけ		78	12	44							
第 134 図	1	149 号	磁器	坏	肥前	72	46	34		轆轤	染付		外面草花文	口縁外反	18C 代
第 134 図	2	151 号	土器	灯明受皿		60	25	49	94	轆轤		褐		底部糸切痕	
第 134 図	5	213 号	陶器	碗	瀬戸・ 美濃	77	38	40		轆轤	鉄釉			内面目跡 3	18C 代
第 134 図	6	217 号 + 包含層	土器	七厘		(258)	(183)	—		輪積		暗灰褐～ 褐	外面縦突帯文	金雲母・砂粒顕著	
第 134 図	7	217 号	陶器	急須蓋	不明	48	17		64 / 20	轆轤	透明釉・呉須絵		天井文様	穿孔 1	19C 後 ~
第 134 図	12	246 号	磁器	碗	肥前	98	53	37		轆轤	染付		外面竹林文		18C 代
第 135 図	1	246 号	陶器	碗	京都	131	44	43		轆轤	灰釉鉄絵		内面竹文	平碗 見込み目跡 3	18C 前
第 135 図	2	246 号	陶器	鉢	不明	178	69	78		轆轤	灰釉 白化粧土 ・刷毛目	暗灰褐			18C 代
第 135 図	3	84 号 +87 号	土器	火鉢		(254)	168	232		板作り 輪積			胴部外面凹線 2 条 / 陰刻唐草文	三足 口縁横ナデ調 整 胴内部に調整痕 あり 唐草文内赤漆 塗りか	
第 135 図	4	84 号	磁器	皿	肥前	(136)	37	(80)		轆轤	染付 こんにゃく印刷		外面唐草文 見 込み花文	くらわんか手 底部銘「×製」	18C 前
第 135 図	5	84 号	陶器	瓶		—	(74)	82							
第 135 図	6	84 号	土器	かわらけ		(72)	14	(32)							

第10表 近世2面土製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	種別	器種 モチーフ	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	備考
第108図	5	87号	人形	西行	—	96.6
第108図	6	87号	動物形	猿	—	—
第108図	7	87号	建造物	祠?	62.5	—
第108図	8	87号	型	烏天狗	62.9	30.3
第108図	9	87号	型	鍾馗か	57.3	17.7
第116図	5	2号	人形	首人形	—	— 歌舞伎顔
第116図	6	2号	人形	天神	—	61.5 付属品の差し込み孔が手元と腰にある
第116図	7	2号	動物形	犬	38.4	—
第116図	8	2号	動物形	亀	—	—
第116図	9	2号	動物形	亀	—	—
第116図	11	2号	人形	鯉	—	22.3 彩色(緑・赤・青)
第116図	10	2号	動物形	亀	—	—
第116図	12	2号	建造物	塔	—	—
第121図	10	3号	動物形	狛犬頭	—	—
第126図	11	12号	人形	姉様	—	68.5 頭なし
第126図	12	12号	動物形	狐	—	— 頭なし
第126図	13	12号	動物形	狐	—	— 頭なし
第126図	14	12号	人形	西行	—	36.7 頭なし 笠に赤色の胎土使用
第126図	15	12号	人形	亀乗り童子	51.5	59.9 人+亀 彩色(黄)

図版番号		出土 遺構	種別	器種 モチーフ	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	備考
第 126 図	16	12 号	動物形	鯉	21.8	—	彩色 (緑)
第 126 図	17	12 号	器物	土鍋	89.5	32.7	
第 131 図	12	110 号	器物	蓋	30.2	—	緑釉、透明釉 菊花形
第 131 図	13	110 号	器物	蓋	33.7	—	キラ付着 梅花形
第 131 図	15	110 号	人形	天神?	33.6	30.8	
第 131 図	14	110 号	器物	銭貨	24.8	15.4	表面「銀座常買」、裏面「以南銀万〇小判一両」

第 11 表 近世 2 面 金属製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	種別	材質	長さ (銭径) (mm)	高さ (孔径) (mm)	重量 (g)	備考	
第108図	12	87号	寛永通宝(新)	銅	24.7	6.6	2	
第108図	13	87号	寛永通宝(新)	銅	24.8	6.4	1.9	
第108図	14	87号	雁首	銅	—	—	0.9	火皿部のみ残存
第108図	15	87号	雁首	銅	(43.8)	(11.7)	2.9	火皿部欠損 羅字あり
第108図	16	87号	雁首	銅	34.4	16.4	3.5	
第108図	17	87号	雁首	銅	60.0	17.9	4.8	
第108図	18	87号	吸口	銅	27.7	—	1.3	羅字あり
第108図	19	87号	吸口	銅	64.6	—	4.0	羅字あり
第108図	20	87号	水滴	銅	22.4	43.0	11.4	
第109図	5	34号	寛永通宝(新)	銅	24	6.1	1.5	
第109図	6	34号	寛永通宝(新)	銅	—	—	0.3	破損
第109図	8	13号	寛永通宝(新)	銅	23.2	5.5	1.8	初鑄年(西暦)1741 背文「元」
第109図	9	13号	寛永通宝(新)	銅	25.2	5.7	3.7	初鑄年(西暦)1668 背文「文」
第109図	10	13号	寛永通宝(新)	銅	25.4	5.7	2.7	
第109図	14	44号	吸口	銅	(26.3)	—	1.1	
第110図	20	216号	雁首	銅	50.3	14.5	6.0	
第110図	21	216号	針金	銅	58.0	49.0	8.0	
第110図	22	216号	針金	銅	170.0	—	6.8	
第117図	1	2号	寛永通宝(古)	銅	23.5	6.1	2.1	初鑄年(西暦)1636
第117図	2	2号	寛永通宝(古)	銅	24.2	5.9	2.7	初鑄年(西暦)1636
第117図	3	2号	寛永通宝(古)	銅	24.5	5.4	3.1	初鑄年(西暦)1636
第117図	4	2号	寛永通宝(古)	銅	24.3	5.9	2.7	初鑄年(西暦)1636
第117図	5	2号	寛永通宝(古)	銅	24.4	5.6	3.1	初鑄年(西暦)1636
第117図	6	2号	寛永通宝(古)	銅	24.4	5.6	4.4	初鑄年(西暦)1636
第117図	7	2号	寛永通宝(古)	銅	23.8	5.3	2.6	初鑄年(西暦)1636
第117図	8	2号	寛永通宝(新)	銅	26.7	5.6	1.2	
第117図	9	2号	寛永通宝(新)	鉄	24.2	5.9	3	
第117図	10	2号	寛永通宝(新)	鉄	24.7	—	3.7	
第117図	11	2号	寛永通宝(新)	銅	23.5	5.3	2.6	
第117図	12	2号	寛永通宝(新)	銅	23.3	5.3	2.2	初鑄年(西暦)1741 背文「元」
第117図	13	2号	寛永通宝(新)	銅	23.2	6.6	2.6	
第117図	14	2号	寛永通宝(新)	銅	24.6	5.8	3.4	
第117図	15	2号	寛永通宝(新)	鉄	24.9	6.5	2	
第117図	16	2号	寛永通宝(新)	銅	22.3	6.1	2.1	
第117図	17	2号	寛永通宝(新)	銅	22.8	6.1	3.2	
第117図	18	2号	寛永通宝(新)	銅	22.6	6.1	2	
第117図	19	2号	寛永通宝(新)	銅	22.6	6.1	1.8	
第117図	20	2号	寛永通宝(新)	銅	22.1	5.6	1	欠損
第117図	21	2号	寛永通宝(新)	銅	25.8	5.7	3.8	
第117図	22	2号	寛永通宝(新)	銅	23.4	6.1	2.4	
第117図	23	2号	寛永通宝(新)	銅	22.8	6.5	2.2	
第117図	24	2号	寛永通宝(新)	銅	24.7	5.9	3.1	
第117図	25	2号	寛永通宝(新)	銅	23.6	6.4	2.7	
第117図	26	2号	寛永通宝(新)	銅	23.3	6.1	2.5	
第117図	27	2号	寛永通宝(新)	銅	24	6.4	1.9	
第117図	28	2号	寛永通宝(新)	銅	22.6	6.7	2.4	
第117図	29	2号	寛永通宝(新)	鉄	28.4	6.1	3.2	
第118図	1	2号	寛永通宝(新)	銅	25.2	5.6	4	初鑄年(西暦)1668 背文「文」
第118図	2	2号	寛永通宝(新)	銅	22.8	6	2.1	
第118図	3	2号	寛永通宝(新)	銅	24.7	6.2	3.2	
第118図	4	2号	寛永通宝(新)	銅	23.3	6.1	2.4	
第118図	5	2号	寛永通宝(新)	銅	23.1	6.6	2.8	
第118図	6	2号	寛永通宝(新)	銅	23	6.6	2.6	
第118図	7	2号	寛永通宝(新)	銅	24.9	6.2	2.6	初鑄年(西暦)1668 所謂「マ頭通」

図版番号	出土 遺構	種別	材質	長さ (銭径) (mm)	高さ (孔径) (mm)	重量 (g)	備考
第118図	8	2号	寛永通宝(新)	銅	22.4	6.5	2.6
第118図	9	2号	寛永通宝(新)	銅	23	6.4	2
第118図	10	2号	寛永通宝(新)	銅	22.5	7.3	2.1
第118図	11	2号	寛永通宝(新)	銅	23.8	6.3	3.4
第118図	12	2号	寛永通宝(新)	銅	23	7	2.8
第118図	13	2号	寛永通宝(新)	銅	22.6	7.2	1.5
第118図	14	2号	寛永通宝(新)	銅	22.8	6.8	2.7
第118図	15	2号	寛永通宝(新)	銅	22.9	7	2.4
第118図	16	2号	寛永通宝(新)	銅	23.1	6.2	1.9
第118図	17	2号	寛永通宝(新)	銅	22.6	6.6	1.6
第118図	18	2号	寛永通宝(新)	銅	24.6	6.5	2.3
第118図	19	2号	寛永通宝(新)	銅	23	6.5	2.3
第118図	20	2号	寛永通宝(新)	銅	22.7	6.2	2.3
第118図	21	2号	寛永通宝(新)	銅	24.7	5.8	2.5
第118図	22	2号	寛永通宝(新)	銅	24.6	6.1	3.3
第118図	23	2号	寛永通宝(新)	銅	24.4	6.1	2
第118図	24	2号	寛永通宝(新)	銅	22.9	6.4	2.9
第118図	25	2号	寛永通宝(新)	銅	22.8	6.5	2.1
第118図	26	2号	寛永通宝(新)	銅	24.8	6.1	2.9
第118図	27	2号	寛永通宝(新)	銅	23	6.5	2.9
第118図	28	2号	寛永通宝(新)	銅	22.3	6.2	3.2
第118図	29	2号	寛永通宝(新)	銅	23.2	6.5	3.2
第118図	30	2号	寛永通宝(新)	銅	22.8	6.2	2.4
第119図	1	2号	寛永通宝(新)	銅	23	6.6	2.6
第119図	2	2号	寛永通宝(新)	銅	23.2	6.4	3.2
第119図	3	2号	寛永通宝(新)	銅	24.4	5.8	3.8
第119図	4	2号	寛永通宝(新)	銅	23.3	6.3	1.8
第119図	5	2号	寛永通宝(新)	銅	22.9	6.4	2.4
第119図	6	2号	寛永通宝(新)	銅	22	5.7	2.3
第119図	7	2号	寛永通宝(新)	銅	23.1	6.6	2
第119図	8	2号	寛永通宝(新)	銅	22.9	6.7	2.1
第119図	9	2号	寛永通宝(新)	銅	22.8	6.8	2.6
第119図	10	2号	寛永通宝(新)	銅	22.4	6.6	2
第119図	11	2号	寛永通宝(新)	銅	22.9/22.8	7.0/6.7	4.6
第119図	12	2号	寛永通宝(新)	銅	22.9	7.3	2
第119図	13	2号	寛永通宝(新)	銅	23.3	5.9	2.7
第119図	14	2号	寛永通宝(新)	銅	22.8	6.6	2.2
第119図	15	2号	寛永通宝(新)	銅	23.2	6.1	2.8
第119図	16	2号	寛永通宝(新)	銅	21.7	6.1	2.2
第119図	17	2号	寛永通宝(新)	銅	25.4	5.6	3.3
第119図	18	2号	寛永通宝(新)	銅	21.8	5.9	1.9
第119図	19	2号	寛永通宝(新)	銅	22.7	6.5	1.9
第119図	20	2号	寛永通宝(新)	銅	25.1	5.7	3.8
第119図	21	2号	寛永通宝(新)	銅	22.1	6	2.9
第119図	22	2号	寛永通宝(新)	銅	23.9	5.7	2.3
第119図	23	2号	寛永通宝(新)	鉄	22.8	6.8	1.7
第119図	24	2号	寛永通宝(新)	銅	24.7	5.6	4
第119図	25	2号	寛永通宝(新)	銅	23	6	0.8
第119図	26	2号	寛永通宝(古・新)	銅	24.7/23.0/23.0	5.4/5.9	9.9
第119図	27	2号	寛永通宝(古・新)	銅	24.2/22.3	5.9/6.2	5.9
第119図	28	2号	寛永通宝か	銅	25	6.2	2.6
第119図	29	2号	寛永通宝か	銅	22.1	—	0.5
第120図	1	2号	雁首銭	鉄	15.7—17.6	4.3—5.2	1.6
第120図	2	2号	雁首銭	銅	16.1—17.0	4.0—4.6	1.1
第120図	3	2号	雁首銭	銅	15.7—20.7	3.7—8.5	1.7
第120図	4	2号	寛永通宝か	銅	22	5	0.9
第120図	5	2号	寛永通宝か	銅	22.5	5.6	1.2
第120図	6	2号	寛永通宝か	鉄	24	5.6	5.4
第120図	7	2号	寛永通宝か	鉄	26	5	2.7
第120図	8	2号	寛永通宝か	鉄	26	6	5
第120図	9	2号	寛永通宝か	鉄	26	7	5.1
第120図	10	2号	寛永通宝か	鉄	24	5	4.1
第120図	11	2号	寛永通宝か	鉄	25.5	6.2	2
第120図	12	2号	寛永通宝か	鉄	26.3	—	1.8
第120図	13	2号	寛永通宝か	銅	22.3	5.5	0.8
第120図	14	2号	寛永通宝か	鉄	26	—	3.4
第120図	15	2号	寛永通宝か	銅	24.2	5	4.1
第120図	16	2号	寛永通宝か	鉄	24	5.5	1.1
第120図	17	2号	寛永通宝か	鉄	28	—	4.7
第120図	18	2号	寛永通宝か	鉄	23.8	6.5	5.4
第120図	19	2号	寛永通宝か	鉄	25	—	4.6

図版番号	出土 遺構	種別	材質	長さ (銭径) (mm)	高さ (孔径) (mm)	重量 (g)	備考	
第120図	20	2号	雁首	銅	(38.5)	17.7	4.7	
第120図	21	2号	吸口	銅	61.3	—	6.5	羅字あり 筋巻の装飾あり
第120図	22	2号	吸口	銅	(29.3)	—	1.7	
第120図	23	2号	金具	銅	93.0	7.4	3.2	
第121図	11	3号	寛永通宝(新)	銅	22.9	6.4	2.6	背文「元」
第121図	22	5号	寛永通宝(古)	銅	24.4	5.3	3.5	初鑄年(西暦)1636
第121図	23	5・6・7号	寛永通宝(新)	銅	25.3	5.3	3.4	
第121図	24	5・6・7号	寛永通宝(新)	銅	26.6	—	0.9	
第121図	25	5号	雁首	銅	(34.2)	(9.7)	2.1	火皿部欠損
第122図	11	6号	寛永通宝(新)	銅	24.3	5.9	2.6	
第122図	30	7号	寛永通宝(古)	銅	24.4	5.5	2.9	初鑄年(西暦)1636
第122図	31	7号	寛永通宝(古)	銅	24.5	5.7	2	初鑄年(西暦)1636
第122図	32	7号	寛永通宝(新)	銅	23.2	6.2	2.2	
第122図	33	7号	寛永通宝(新)	銅	24.5	6	3.2	
第122図	34	7号	寛永通宝(新)	銅	22.8	6.2	3.1	
第123図	17	8号	寛永通宝(新)	銅	23.6	6.1	3.2	
第123図	18	8号	寛永通宝(新)	銅	23	6.1	2.9	
第123図	19	8号	寛永通宝(新)	銅	24.6	6.2	3.2	
第123図	20	8号	寛永通宝(新)	銅	23.7	6.9	2.7	
第123図	21	8号	寛永通宝(新)	銅	23.6	6.3	2.7	
第126図	23	12号	寛永通宝(新)	銅	23.9	6.6	3	
第126図	24	12号	寛永通宝(新)	銅	22.2	6.5	1.8	初鑄年(西暦)1741 背文「元」
第126図	25	12号	寛永通宝(新)	銅	23.2	6.6	1.7	
第126図	26	12号	吸口	銅	62.2	—	3.6	
第126図	27	12号	吸口	銅	51.4	—	2.3	羅字あり
第126図	28	12号	吸口	銅	(48.9)	—	2.5	羅字あり
第126図	29	12号	金具	銅	96.1	—	7.8	
第127図	19	15号	寛永通宝(新)	銅	23.3	6.2	3	
第128図	3	21号	金具	銅	66.5	11.9	13.1	
第131図	16	110号	寛永通宝(新)	銅	23.5	6.1	2	
第131図	17	110号	寛永通宝(新)	銅	23.9	6.1	2	初鑄年(西暦)1741 背文「元」
第131図	18	110号	吸口	銅	(46.3)	—	3.1	羅字あり
第131図	19	110号	吸口	銅	(30.7)	—	1.0	
第132図	8	141号	金具	銅	33.6	22.3	2.0	
第133図	13	144号	雁首	銅	(22.3)	(9.2)	2.1	火皿部欠損
第133図	14	144号	小柄	銅	95.7	13.4	21.5	
第134図	8	217号	把手	銅	35.0	72.4	17.8	
第134図	10	244号	雁首	銅	42.0	—	2.1	
第135図	7	84号	寛永通宝(古)	銅	24.1	5.7	3.2	初鑄年(西暦)1636
第135図	8	84号	雁首	銅	(40.4)	(10.3)	4.4	火皿部欠損
第135図	9	84号	雁首	銅	63.5	18.8	9.2	

第12表 近世2面石製品掲載資料

図版番号		出土 遺構	器種	石材	長さ 長軸 (mm)	幅 短軸 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第 126 図	30	12 号	硯	粘板岩	129.3	66.7	14.8	170.2	長方形の硯で硯の海部分と縁が欠損する 硯背と硯側に線刻がある
第 126 図	31	12 号	碁石	泥岩	21.4	21.4	4.7	3.2	表裏面は平坦で外縁部が丸みを帯びる 縁辺部は平面形が円形となるよう面取り加工が施される
第 127 図	3	14 号	砥石	千枚岩	139.6	50.8	31.8	271.3	断面が方形の棒状の砥石 4 面のうち狭い一側面のみが使用されている 雲母がみられ軟質
第 134 図	3	151 号	硯	粘板岩	108.2	61.5	9.2	81.1	長方形の硯で石材の板状に割れる性質によって硯表が欠損し一部に海の部分のみが残る 硯背もほぼ破落している
第 134 図	4	151 号	火打石	玉髄	61.8	46.4	16.4	38.8	不定形剥片の縁辺の一部に幅 2 cm 程のノッチ状の剥離部を持つ (片面のみ) 石器の縁辺部は全体的に摩耗している 茨城県常陸大宮

第13表 近世2面ガラス製品掲載資料

図版番号		出土 遺構	器種	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第 109 図	5	113 号	食品瓶	77	186	78	422.5	色調無色 口縁スクリュー 「NESCAFE INSTAN □ COFF □ E」 「NESTLÉ JAPAN LIMITED KOBE」等 底部陽刻: 石塚硝子マーク3 ネスレ日本株式会社
第 110 図	24	216 号	筭	(58.7)	9.3	5.2	9.9	色調黄色 断面長方形 表面銀化 両側欠損
第 110 図	25	216 号	筭	(49.8)	5.4	5.4	4.7	色調無色 断面方形 表面銀化 両側欠損
第 131 図	20	110 号	筭	(97.0)	(6.0)	3.2	4.9	色調黄色 断面長方形 表面銀化 片側欠損

図版番号	出土 遺構	器種	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第 131 図	21	110 号 筭	(75.8)	(6.0)	4.6	6.7	色調黄色 断面長方形 表面銀化 片側欠損
第 131 図	22	110 号 筭	(64.0)	(6.0)	3.3	3.9	色調黄色 断面長方形 表面銀化 両側欠損
第 131 図	23	110 号 筭	(17.8)	(12.2)	6.9	3.1	色調無色 楕円形 片側欠損
第 131 図	24	110 号 筭	(57.7)	5.6	5.6	5.7	色調無色 断面方形 両側欠損
第 131 図	25	110 号 筭	(25.5)	7.9	3.6	2.1	色調無色 断面長方形 片側欠損
第 131 図	26	110 号 筭	(39.0)	5.2	2.4	1.0	色調無色 断面長方形 被熱?
第 131 図	27	110 号 筭	(52.0)	8.0	1.4	5.3	色調無色 断面円形 ねじり
第 131 図	28	110 号 筭	(34.5)	8.5	4.8	4.2	色調無色 断面楕円形 両側欠損
第 131 図	29	110 号 筭	(22.2)	9.5	5.3	3.3	色調無色 断面楕円形 両側欠損

第 14 表 近世 2 面 骨角製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	種類	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
第 126 図	32	12 号 櫛	骨	—	—	4.0	1.2	表面に赤色と金色の彩色塗装残存

第 15 表 近世 2 面 部材掲載資料

図版番号	出土 遺構	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	特徴
第 124 図	13	9 号 丸瓦	—	—	—	外表面黒化 胎土灰 凹面粗い布目痕 菱形に 6 本線の星
第 126 図	33	12 号 平瓦	—	—	—	胎土灰 砂粒の混入極めて少 武田菱
第 126 図	34	12 号 平瓦	—	—	—	胎土表層灰 中心暗灰 黒色粒混 三角に記号
第 126 図	35	12 号 滴水瓦	—	—	86.5	胎土灰 砂粒の混入極めて少 中心飾三方割花・唐草文(江戸式)
第 127 図	4	14 号 軒丸瓦	—	—	—	外表面黒化 胎土灰 外面金雲母粒疎 卍
第 127 図	5	14 号 滴水瓦	—	—	—	外表面黒化 胎土表層灰 中心黒灰 砂粒の混入疎少 中心飾三方割花・唐草文(江戸式)
第 127 図	6	14 号 平瓦	—	—	—	胎土灰 砂粒の混入極めて少 側面・凹面黒化 丸椀に山形
第 134 図	13	246 号 丸瓦	76.1	55.5	23.7	正面中央に長形の削り 側面に棒状工具による削痕

写真 -1: 2 号遺構出土
鶴亀吉祥紋型押‘かわらけ’
(第 112 図 -20)写真 -2: 2 号遺構出土
口縁部有孔土製鉢形容器
(第 113 図 -6)

4 近代

近代の遺構は、井戸 1 基、土坑 11 基、礎石 8 基、排水施設 3 基である（第 136 図）。そのほか調査区東端に 3m × 2.5m のコンクリート製貯水槽、直径 5m の防火水槽、外径 30cm・内径 17.5cm のコンクリートパイプが 3 本一組で計 66 本打ち込まれてコンクリート基礎を支えていた。

【井戸】

134 号遺構 [H・I-8] (3-1 区)

・遺構（第 137 図）

調査区北東縁に隣接し、121 号遺構（貯水槽）の北西に位置する。径 220cm（395cm）の正円形を呈する。上層部には瓦片・鉄片などが凝集する。セクション写真では下部ほど先細りとなっているが、掘削箇所が調査区縁辺に当り断面を垂直に設定できなかったため、本来の垂直断面は円筒状をなす。近代以降に属する遺物は上半部に集中するために、近世に使われていた井戸を近代以降に廃棄場所として再利用した可能性がある。

・遺物（第 146 ～ 150 図）

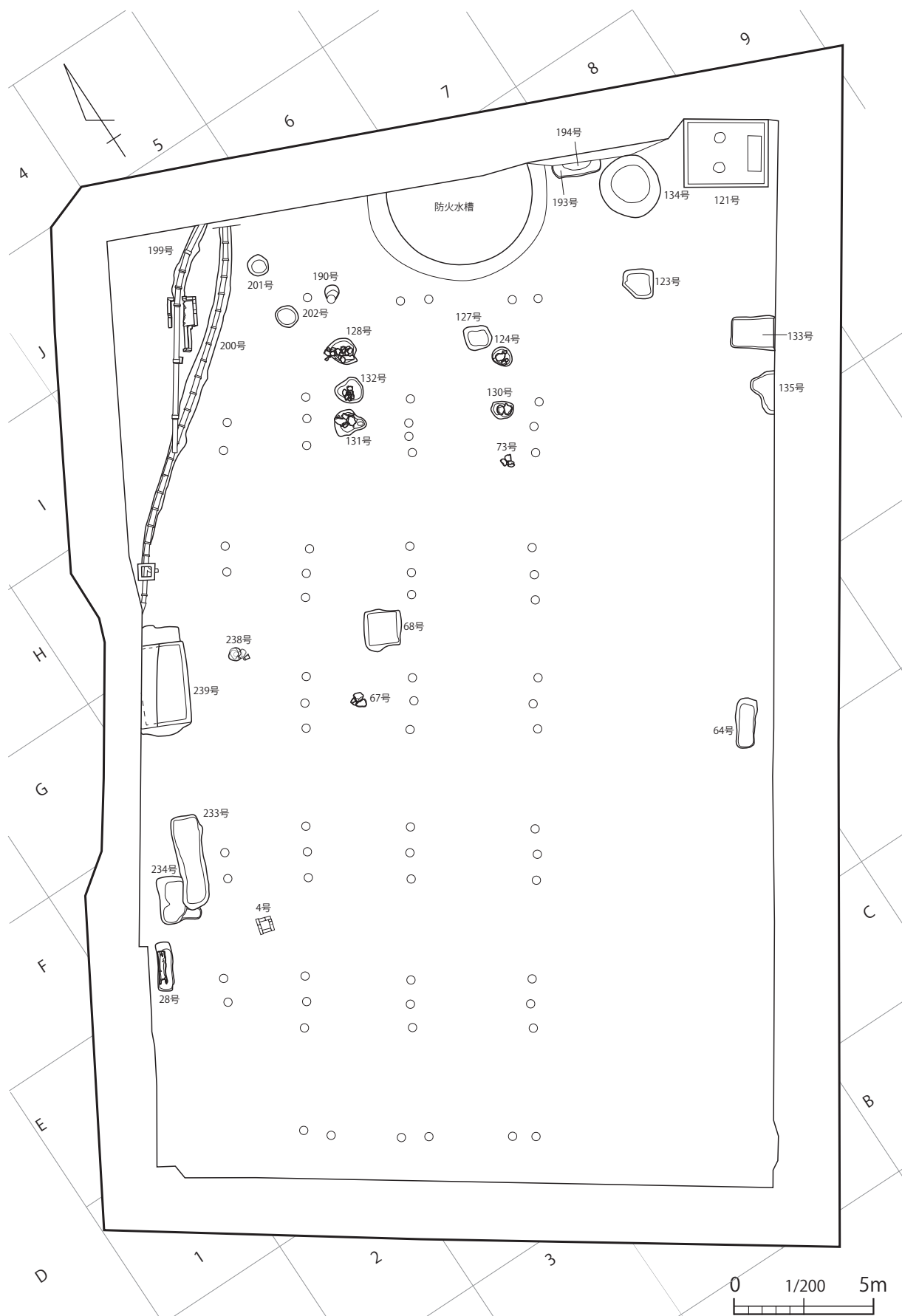
出土資料は、磁器の碗（108 点）・皿（53 点）・鉢（17 点）・蓋（25 点）・壺（10 点）・瓶（18 点）・香炉（1 点）・片口鉢（3 点）・植木鉢（3 点）・土瓶（31 点）・急須（4 点）・水滴（4 点）・蓋物（6 点）・銚子（16 点）・その他（5 点）・不明（26 点）、陶器の碗（21 点）・皿（8 点）・鉢（8 点）・蓋（9 点）・壺（5 点）・甕（21 点）・瓶（67 点）・土鍋（3 点）・搦鉢（12 点）・植木鉢（1 点）・土瓶（8 点）・蓋物（1 点）・その他（11 点）・不明（2 点）、土器の植木鉢（7 点）・火鉢（7 点）・焙烙（13 点）・灯明受皿（2 点）・養蚕焔炉（9 点）・不明（8 点）である。

磁器は、碗（第 146 図 -7：「硬質陶器／MEIJI TOKI」、8：「六江製」、9：「平八園」）、皿（第 146 図 -1：底部陽刻「鳩居堂」、11：「名／21」）、紅猪口（第 146 図 -5）、杯（第 146 図 -6：「□」）、鉢（第 146 図 -12：「大□（明）年□（製）」、13、14：緑色二重圈線）、片口（第 146 図 -15：「林町／和泉屋酒店」）、銚子（第 146 図 -16・17）、蓋（第 146 図 -10：外「□×／東×／九十」内「成化／□□」、18、19）である。

陶器は、碗（第 146 図 -2）、瓶（第 146 図 -3）、火鉢蓋（第 146 図 -4：朱泥陶器）である。

洋食器は、カップ（第 147 図 -1・2：「Shofu China」（松風陶器）、3：「FUJI CHINA／JAPAN／MADE IN OCCUPIED JAPAN」（富士製陶）、4：王冠・楯「MEITO」（名古屋製陶所）、5：「SANGO CHI(NA)／MADE IN JA(PAN)」(三郷陶器)、6：「富士に流水」（深川製磁））、皿（第 147 図 -7：「NA(RUMI)／CH(INA)」(鳴海製陶)、8：「Sango／JAPAN」（三郷陶器）、9：「KYOTO／CHINA／LANCSTER／7202／JAPAN」（日本窯工貿易）、10：「富士に流水」（深川製磁、6 とセット）、11：「富士に流水」（深川製磁）、12：「SANGO／CHINA」（三郷陶器）、13：「IMPERIAL／CHINA／OCCUPIED JAP」（富士製陶）、鉢（14：「富士に流水」（深川製磁））、醤油皿（15：横浜駅／崎陽軒のシウマイ）、醤油差し（16）である。

「Sango／JAPAN」は、三郷陶器の製品である。三郷陶器は、1932（昭和七）年に三郷製陶所として設立されて、1946（昭和二十一）年設立の三郷陶器と 1952（昭和二十七）年に合併して（→ 212 頁）現在の三郷陶器株式会社（本社：愛知県尾張旭市）となった。



第136図 近代の遺構分布図 (1/200)

「MEITO」王冠に盾の裏印は、1911年に設立された名古屋の帝国製陶所、その後進の名古屋製陶所の製品である（濱屋 2018）。1969年に解散した。

「Shofu / china」は、1848（嘉永一）年ごろから京都で創業した松風陶器の製品である。1906（明治三十九）年には松風陶器合資会社が設立され、現在では陶歯製造で知られる（濱屋 2017）。

「NA… / CH… / JAPAN」は、鳴海製陶株式会社の 1954 年に製造・販売されたものである（日本陶磁器意匠センターのご教示による）。鳴海製陶所は、1938（昭和十三）年に名古屋製陶所が設立した鳴海工場が前身である。

「富士に流水」の深川製磁は、1894（明治二十七）年に佐賀県有田町で設立された（濱屋 2020）。

「FUJI CHINA MADE IN OCCUPIED JAPAN」、「IMPERIAL CHINA OCCUPIED JAP」は、共に愛知県多治見市高田町に所在した富士製陶株式会社が 1950 年ごろに製作・販売した資料である（日本陶磁器意匠センターのご教示による）。「MADE IN OCCUPIED JAPAN」は、GHQ が輸出用商品に対して 1947（昭和二十二）年から 1949（昭和二十四）年、一部は 1952（昭和二十七）年まで義務付けた表記である。

「KYOTO / CHINA / LANCASTER / 7202 / JAPAN」は、1947 年に愛知県名古屋市で設立された日本窯工貿易株式会社を取り扱った製品である。

「ランカスター」は、シリーズ名称で製造元は不明である。1954 年の文献資料で確認できる（日本陶磁器意匠センターのご教示による）。

陶器は、碗（第 148 図 -1）、徳利（第 148 図 -2：釘書「上 / □白」）、汽車土瓶（第 148 図 -3：鉄道省の動輪マーク）である。

‘かわらけ’は 17 点（96g）で、最小個体数は 2 点である。

石製品は、硯（第 148 図 -10）の裏面には、戦後に当地に居住していた方の氏名が刻まれている。

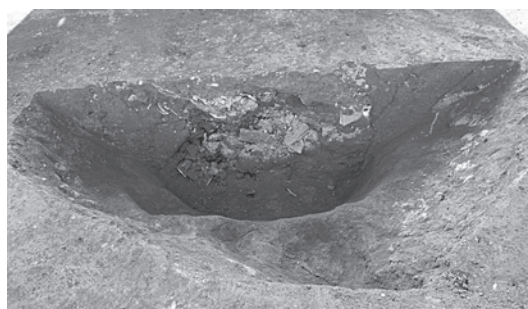
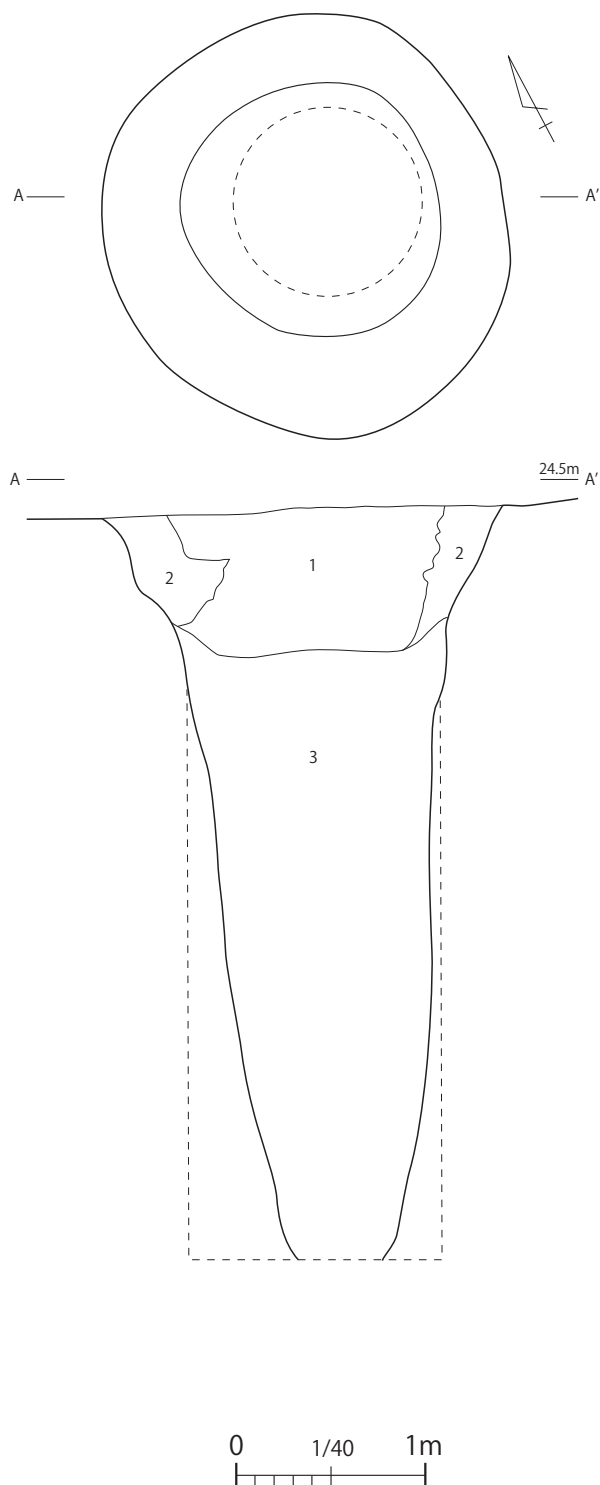
ガラス製品は、文具・医薬品・化粧品・食料品・調味料・日用品のほか用途不明品である。

文具（第 149 図 -1・2：インク壺、3：「クロンボ / インキ消」（ロイド産業）、4：「チープ糊」、5：「RIGHT INK / 20Z / MADE / IN JAPAN」篠崎インキ）、医薬品（6：「FUMINAIN A」（龍角散本舗）、7：大正製薬、8：薬品、9：目薬、10：薬品「N.T.K.」）、化粧品（11：「TELL ME / 80c.c.」テルミー化粧品、12：「IDEAL」高橋東洋堂、13：「KINTSURU PERFUMERY CO., LTD / MADE IN JAPAN」金鶴香水（現マダム）、14：ウテナ商標、15「柳家（へ）ヤートニック / 360cc / （株）会社柳家本（店）」、16：化粧クリーム「KNK / K2」カネカ、17・18：柳屋商標）、食料品（第 150 図 -1：「王冠印ピーナッツバター / 1/2 ポンド」、2：「玉露園」）、調味料（3：「ヒゲタしょうゆ」ヒゲタ醤油、4：「AICHI TOMATO CO. 57」カゴメ商標六芒星、5：「発酵乳 生菌ヤクルト」「33.11 30G」）、日用品（6：「VIOLA」品川油化；靴クリーム、7：金属製蓋「Columbus Shoe Polish」コロンプス、8：「ORGAN」ミシンオイル、9：灰皿；百合）、用途不明品（10：「× / N 15 / 50」、11・12：底部エンボス）である。

金属製品は、煙管吸口（第 148 図 -4・5）、「ボタン」（第 148 図 -6～9）がある。

合成樹脂製品は、歯ブラシ（第 150 図 -13：「MADE IN / WEST GERMANY T.K.I DORLON / PROUDUCY」、14：縦書；資生堂マーク「資生堂歯刷牙子 ○に 40」、15：縦書「オリチナル 普及型」、16：「マスホ ○に 9」）、ベークライト製碗（第 150 図 -17）、キャップ（第 150 図 -18）、用途不明品（第 150 図 -19・20）である。

【134号遺構】



134号遺構断面



134号遺構 (西より)



134号遺構断割り

土層説明

134号 (井戸)	1	灰褐色	粘性やや欠く。締まりやや欠く。瓦片・鉄片など近現代資料主体。
	2	暗褐色	粘性やや欠く。締まりやや欠く。焼土50-70%。径1mm炭化物片多数含む。
	3	黒褐色	粘性欠く。締まり欠く。焼土50%。

第 137 図 近代の井戸 (1/40)

- ・部材（第 150 図）

碍子（第 150 図 -21：「AOKI / 1348」）である。

- ・自然遺物

貝類は、ハマグリ（5 点）・ヤマトシジミ（4 点）・サザエ（1 点）が出土した。

【土坑】

28 号遺構 [E・F-2]（1 区）

- ・遺構（第 138 図）

南西部に位置する 19 号遺構（近世 2 上水路）、北西部に位置する 42 号遺構（近世 1 地下坑）を切る。175cm × 52cm × 104cm の長方形を呈する。長さ 140cm の丸太に針金が巻き付く。木製のアンカーで、上下に 2 個体確認された。上部のアンカーは腐蝕が著しく、下部のアンカーは残存状況が良好であった。3 本の丸太の中央部を、銅線で束ねている。

- ・遺物（第 151 図）

出土資料は、磁器の碗（14 点）・蓋（1 点）・壺（1 点）・瓶（1 点）・段重（1 点）、陶器の碗（4 点）・甕（2 点）・瓶（12 点）・土鍋（1 点）・土瓶（1 点）・灯明受皿（1 点）、土器の焙烙（1 点）である。

磁器は、碗（第 151 図 -1）である。

‘かわらけ’は、6 点（33g）である。

金属製品は、鉄条網の断片（第 151 図 -2）のほか、鉄製品（第 151 図 -3）が複数出土している。

123 号遺構 [H-7・8]（3-1 区）

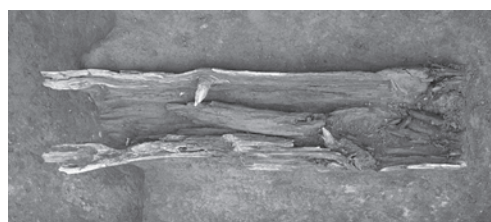
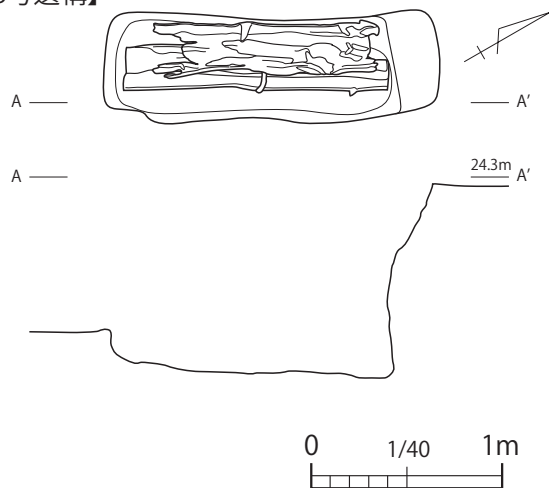
- ・遺構（第 139 図）

西側に位置する 122 号遺構（近世 1 期土坑）を切る。108cm × 105cm × 15cm のほぼ正方形を呈する。底面は不整形である。陶磁器・ガラス製品・瓦片・貝片などが混在する。

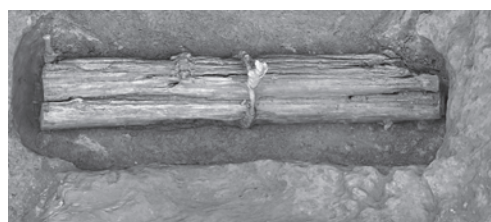
- ・遺物（第 151 図）

出土資料は、磁器の碗（15 点）・皿（1 点）・鉢（2 点）・蓋（3 点）・小杯（3 点）・蓋物（1 点）・その他（1 点）、陶器の碗（12 点）・甕（2 点）・瓶（3 点）・植木鉢（2 点）・汽車土瓶（12 点）・火鉢（1 点）・不明（2 点）、土器の焜炉（76 点）・土製品（人形：1 点）である。

【28号遺構】



28号遺構上部部材出土状況(南東より)



28号遺構下部部材出土状況(南東より)

第 138 図 近代の土坑（1：1/40）

磁器は、酒杯（第 151 図 -3：「銘酒／金婚／キンコン」）、皿（第 151 図 -4：「(田) 代硬質磁器／Tashiro Seitsoyo／意・登 56865」）、碗（第 151 図 -5）である。洋皿破片（第 151 図 -4）は、愛知県名古屋市に所在した田代商店（濱屋 2016）が 1935 年ごろに製作・販売した洋食器である（日本陶磁器意匠センターのご教示による）。

陶器は、汽車土瓶（第 151 図 -6：鉄道省「動輪マーク」胴部陽刻）である。

‘かわらけ’は、2 点（15g）である。

合成樹脂製品は、歯ブラシ（第 151 図 -7：右読み「東京 資生堂 銀座」左に資生堂商標、右に「○に公 13 196（二本下線）」、8：縦書「ツバメ歯ブラシ」）である。

・部材（第 152・153 図）

瓦は、平瓦（第 151 図 -9：「尾 山に甚 本」）である。衛生陶器は、「厠下駄（第 152-1 図）で、同種の破片（45 点；3,040g）が出土している。「厠下駄」は、袋状の前部と後部は直接に接合せず、同一個体が確定しない。「厠下駄」とは「用を足す際に床を汚さなくて済むよう、立ち位置を示すため小便器の前に置かれたもの」である（INAX ライブミュージアム：https://livingculture.lixil.com/ilm/learn/collection_antiquetoilet/）。1930 年代の製陶所のカタログにも記載がある。

本資料にプリントされている「TOYOHASHI」の文字は「豊橋製陶所」を表わし、1922（大正十一）年に「豊橋硬質陶器合資会社」として設立、本社は愛知県豊橋市花田町で、1971（昭和四十六）年に廃業した。染付便器破片（第 152 図 -2）の上端部側面には雷文、上面には花蝶が描かれている。

・自然遺物

貝類は、ヤマトシジミ（8 点）が出土した。

127 号遺構 [H-6]（3-2 区）

・遺構（第 139 図）

北側に位置する 127 号遺構（近代以降ピット）を切る。94cm × 84cm × 31cm でやや不整な正方形を呈する。底面は不整形である。陶磁器・金属製品・ガラス製品などが充填する。

・遺物（第 151 図）

出土資料は、陶器の甕（1 点）、土器の鉢（1 点）・焙烙（2 点）である。

ガラス製品は、調味料（第 151 図 -10：「東京中野食品工業株式會社」金属製蓋付）である。

石製品は、正方形の板状製品の中央に穿孔されている用途不明品（第 152 図 -13）である。

133 号遺構 [G-8]（3-1 区）

・遺構（第 139 図）

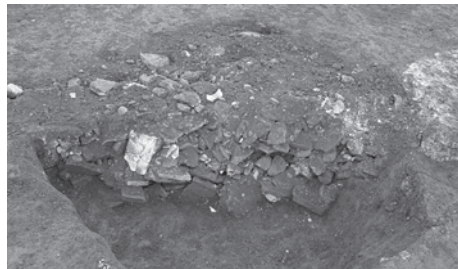
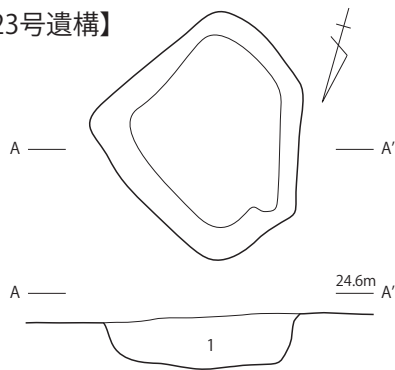
3-1 区の東側に位置し、調査区外に続く。（165cm）× 120cm × 44cm の長形状を呈する。底面は平坦をなす。182 号遺構（近世 2 ピット）を切る。

・遺物（第 151 図）

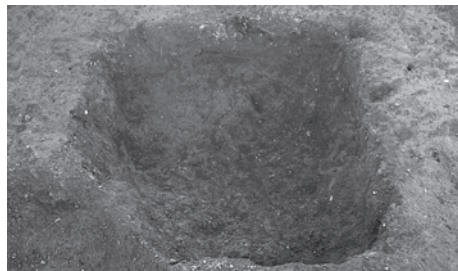
出土資料は、磁器の碗（14 点）・皿（6 点）・蓋（7 点）・瓶（1 点）・不明（1 点）、陶器の皿（1 点）・鉢（2 点）・瓶（14 点）・土瓶（3 点）・灯明受皿（1 点）・不明（4 点）、土器の鉢（3 点）・不明（1 点）である。‘かわらけ’は、2 点（8g）である。

ガラス製品は、玩具（第 151 図 -11）で目薬瓶の再利用品と思われる。

【123号遺構】

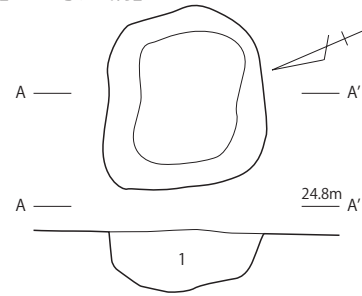


123号遺構断面(北西より)

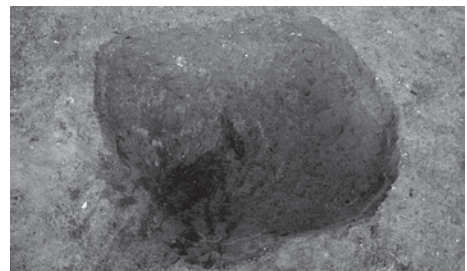


123号遺構(南西より)

【127号遺構】

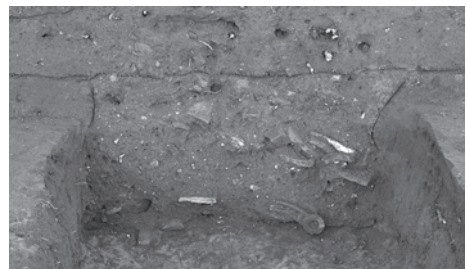
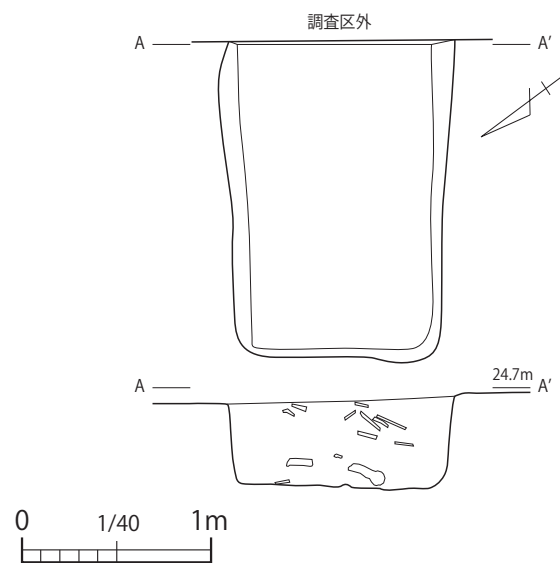


127号遺構断面(北西より)



127号遺構(南西より)

【133号遺構】



133号遺構断面(北西より)



133号遺構(北東より)

土層説明

123号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まりやや欠く。ガラス瓶・土管片含む。瓦片大量に含む。
127号	1	褐色	粘性やや欠く。締まりなし。ガラス片・瓦片・木材片含む。

第 139 図 近代の土坑 (2 : 1/40)

・自然遺物

貝類は、アサリ（2点）・ヤマトシジミ（1点）・シオフキガイ（1点）が出土した。

193号遺構・194号遺構 [I-7・8]（3-1区）

・遺構（第140図）

3-1区の北側に位置する。(185cm) × (85cm) の193号遺構（近代以降土坑）を切るように、地下坑と思われる(102cm) × (32cm) の194号遺構（近代以降土坑）が位置するが、同一遺構の可能性もある。過半が調査区外に位置して定かではない。

・遺物

出土資料は、磁器の碗（7点）、陶器の瓶（1点）である。

＊遺構間接合

4：190号遺構出土の磁器洋皿の大破片と194号遺構出土の小破片が接合した（第154図-3）。接合距離は、10mである。

201号遺構 [I・J-5]（3-3区）

・遺構（第141図）

調査区北部、199号遺構・200号遺構（近代以降配水施設）の東に位置する。径80cm × 70cmの略円形土坑上部に瓦片が凝集する。

・部材（第155図）

瓦は、鬼瓦（第155図-1）で201号遺構と包含層出土の接合個体である。

202号遺構 [I-5]（3-3区）

・遺構（第142図）

3-3区に位置する。北側に225号遺構（近世2ピット）、西側に235号遺構（近世2ピット）が位置する。83cm × 73cm × 18cmのほぼ円形を呈する。

・遺物（第153図）

出土資料は、磁器の碗（1点）、陶器の碗（1点）・瓶（1点）・不明（1点）である。‘かわらけ’は、23点（18g）である。

ガラス製品は、染料（第153図-2：「みやこ染」桂屋）である。

233号遺構 [F-2・3]（3-5区）

・遺構（第141図）

石製アンカーを有する234号遺構（近代以降土坑）を切る。329cm × 102cm × (40cm) の溝状を呈する。ライオン歯磨き瓶（第155図-6）から1940年以降の埋没が推定される。

・遺物（第153図）

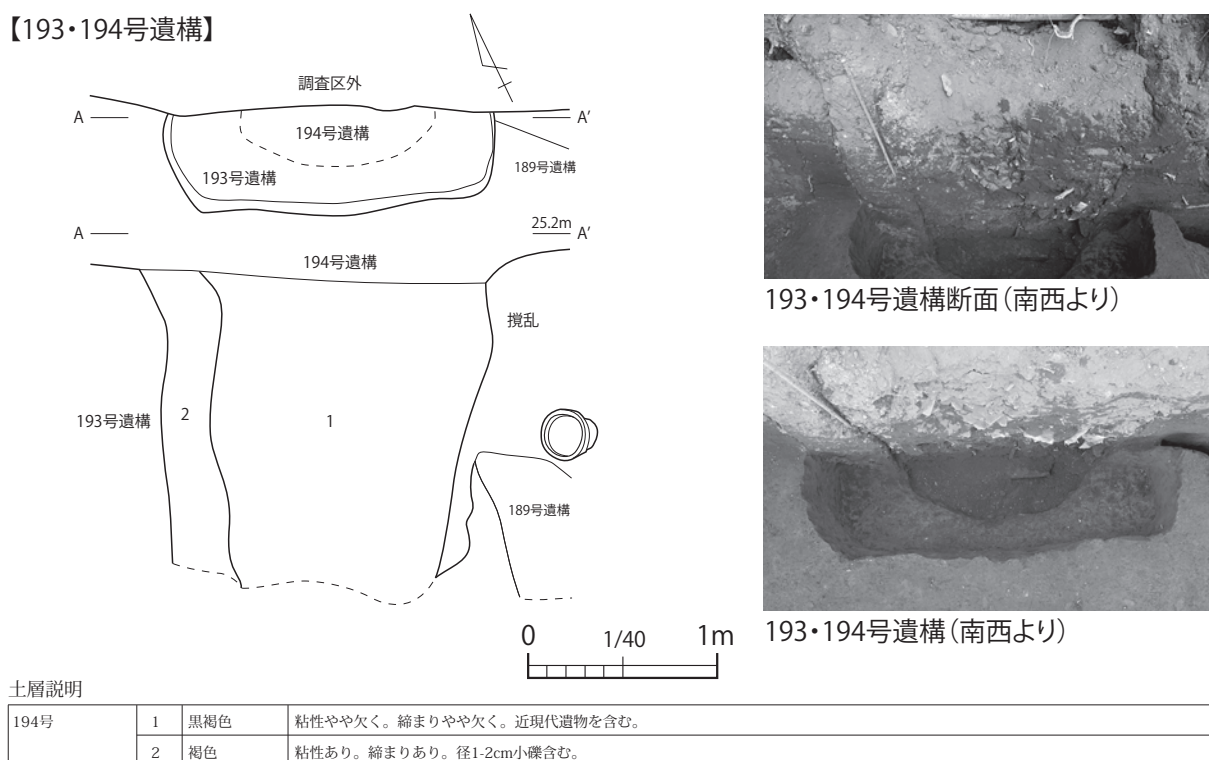
出土資料は、磁器の碗（10点）・皿（6点）・蓋（1点）・仏飯器（1点）・カップ（1点）・不明（3点）、陶器の碗（3点）・鉢（3点）・甕（1点）・瓶（5点）・香炉（1点）・土瓶（1点）・蓋物（1点）・不明（1点）、土器の植木鉢（3点）・焙烙（1点）・泥面子（1点）・不明（5点）である。

磁器は、カップ（第153図-3：「SHELTON / BONE CHINA / JAPAN」製造元不明）である。

陶器は、蓋物（第153図-4：統制番号「岐／46」）である。

‘かわらけ’は、4点（17g）である。

【193・194号遺構】



第 140 図 近代の土坑（3：1/40）

ガラス製品は、化粧品（第 153 図 -5：表「ホーカー液」裏「堀越」底部「○に四」）である。「ホーカー液」は、1909（明治四十二）年に堀越嘉太郎が創業した堀越二八堂の製品である（及川 2008）。1915 年に神田区柳原河岸に移転、1924 年に株式会社化したが、1945 年前後に廃業と思われる。日用品（第 153 図 -6：底部陽刻「LION」ライオン歯磨；現ライオン株式会社）である。

・自然遺物

貝類は、ハマグリ（22 点）・アサリ（4 点）が出土した。

234 号遺構 [F-2]（3-5 区）

・遺構（第 141 図）

51 号遺構（近世 2 上水路）を切り、233 号遺構（近代以降土坑）に切られる。170cm × (110cm) × 93cm で長方形を呈する。南西部に 55cm × 40cm の切石に穿孔部に棒状の鉄製品が残存する石製アンカーおよび 35cm × 20cm の切石が配置されている。

・遺物（第 155 図）

出土資料は、磁器の碗（8 点）・皿（2 点）・瓶（1 点）、陶器の碗（2 点）・皿（2 点）・鉢（1 点）・甕（1 点）・瓶（14 点）・土瓶（1 点）・柄杓形容器（1 点）・ミニチュア（1 点）、土器の植木鉢（2 点）・焙烙（3 点）・土製品（人形：1 点・ミニチュア：1 点）・不明（5 点）である。

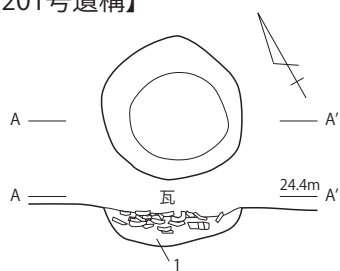
土器は、植木鉢（第 153 図 -7）である。‘かわらけ’は、3 点（11g）である。

陶器は、鳥形（第 153 図 -8：箸置き）である。

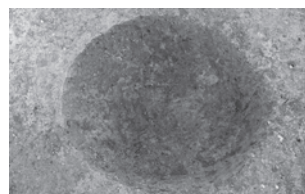
金属製品は、小鉤（第 153 図 -9）である。

ガラス製品は、文具でインク壺（第 153 図 -10：「文」、11：側面「実用新案」「No3218」底部「M」

【201号遺構】

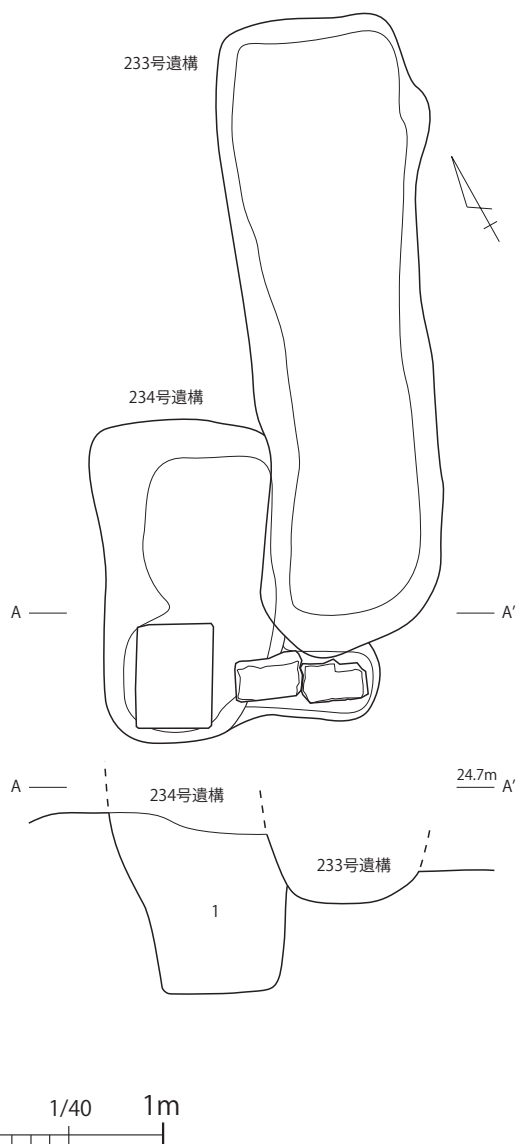


201号遺構断面



201号遺構(南西より)

【233・234号遺構】



233号遺構(北西より)



234号遺構断面(南西より)



234号遺構出土状況(南西より)



234号遺構(南東より)

土層説明

201号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。瓦片・モルタル片多量に含む。
234号	1	黒褐色	粘性やや欠く。締まり欠く。径1-2cm小礫・ガラス片・コンクリート製アンカーを含む。

第 141 図 近代の土坑（4：1/40）

丸善)である。

239号遺構 [G・H-3] (3-4区)

・遺構 (第142図)

70号遺構 (近世2上水路)の北西端に位置する。330cm × (180cm) × 68cmの長方形を呈するが北西部分は調査区外に続く。陶磁器・金属製品・ガラス製品・瓦片・貝片などが凝集する。

・遺物 (第154～157図)

出土資料は、磁器の碗 (58点)・皿 (14点)・鉢 (11点)・蓋 (1点)・壺 (1点)・瓶 (12点)・小杯 (2点)・蓮華 (1点)・その他 (4点)・不明 (2点)、陶器の碗 (20点)・皿 (4点)・鉢 (4点)・蓋 (4点)・甕 (6点)・瓶 (18点)・香炉 (1点)・合子 (1点)・搦鉢 (5点)・植木鉢 (2点)・髪油壺 (1点)・火鉢 (6点)・型 (1点)・仏花瓶 (1点)・その他 (8点)・不明 (3点)、土器の植木鉢 (55点)・ミニチュア (1点)・さな (1点)・その他 (25点)である。

磁器は、碗 (第154図-1、8:「大明年製」、9:統制番号「岐/304」、10、11:「陶山園」、12:統制番号「岐/139」、13)、小杯 (第154図-7)、鉢 (第154図-2)、瓶 (第155図-3:エンボス「岐8□□」)、容器 (第155図-4:エンボス「岐/□(2)□(7)」、5:エンボス桜、6:統制番号エンボス「岐/□62」、7:「MENU M A P ×」メヌマポマード)である。

陶器は、天目碗 (第154図-3)、碗 (第154図-14)、香炉あるいは蓋置 (第154図-4)、合子蓋 (第154図-5)、搦鉢 (第155図-8)である。

洋食器は、ポット (第154図-15)、カップ (第154図-16:「第一硬質・磁器/DAI・ITTO」折り鶴マーク)、皿 (第155図-1)、鉢 (第155図-2:「福壽」)である。

土器は、七輪 (第154図-6)である。

土製品は、器物 (第155図-9:蓋)、型枠 (第155図-10:兵隊人形 (341頁:写真-1)である。兵隊人形の型枠 (第155図-10)は、縦5.1cm・横3.7cm・厚さ1.3cmの板状土製品に鉄兜を被り捧げ銃をする兵隊が彫り窪められている。表面には、離材と思われる白色微粉状のものが付着している。「型抜き遊び」に用いられた土製玩具である (松井1991、斉藤2009)。

‘かわらけ’は28点 (142g)で、最小個体数は1点である。

金属製品は、珐瑯製カップ (第155図-11:「TOKYO / M.T.H.&」)、把手状金具 (第155図-12)がある。

ガラス製品は、医薬品 (第156図-1:「やはぎ」「目薬」、2:「布田の眼薬」「根岸/薬王山」佐賀製薬株式会社が製造し千葉県東金市の布田薬王寺が発売元、3:横書「内用」縦書「薬精」、4:「C」、5:「JUKAI / SEIYAKUSHO」、5:「JUKAI SEIYAKUSHO」、6:六角形に「K」、7:「鎮咳/○にY「コデチン」/祛痰」、1896 (明治二十九)年に設立された大木合名会社 (現:大木製薬株式会社、本社:文京区音羽)、8:「オキシフル OXYFULL」三共オキシフル、9:「ZANDU」ザンドゥは、1910年設立のインド西ベンガル州カルカッタに本社を置くアーユルヴェーダ製品を取り扱う医薬品会社、10:「犬印」小宗化学薬品は、1892 (明治二十五)年創業の化学薬品商を原点として、「犬印の試薬」として高純度薬品等の製造を行う。埼玉県行田市に本社)、調味料 (第156図-12:「ブルドッグソース ○にB / BULLDOG SAUCE CO.LTD.」正式名称は「ブルドッグソース株式会社」であるが、本資料は「ブルドッグ」、また英文表記も「BULL-DOG」が「BULLDOG」に「SAUCE」が「SAUGE」となってい

る。類品が「小石川植物園西遺跡 (No.123) から出土している (文京区教育委員会 2017:253 頁)。
飲料水 (第 157 図 -1、2:「BEE BRAND KOZAN WINE」「R.KONDO & CO. / TOKYO」「蜂印香竄
葡萄酒」は、神谷傳兵衛が 1881 (明治十四) 年に発売した葡萄酒で現在は「ハチブドー酒」とし
て合同酒精株式会社 (本社: 墨田区東駒形) が販売)、化粧品 (第 156 図 -11: 底部の陽刻は鏡文
字「GIAN」「Patent」)、玩具 (第 157 図 -5: 独楽)、調理器具 (第 157 図 -4: おろし器)、不明 (第
157 図 -3: 胴部陽刻目盛、6: 横書「東京」縦書「杉本製」、7: 底部陽刻「31」、8: 二重隅切角枠
「KATO」) である。

合成樹脂製品は、セルロイド製の櫛 (第 157 図 -9) である。

金属製品は、鉄釘のほか板状の鉄製品が複数出土している (第 161 図 -6)。

・部材 (第 158 ~ 161 図)

瓦は、軒平瓦 (第 158 図 -1: 四角枠「二又」「五二号」)、軒棧瓦 (第 158 図 -2: 四角枠「□」「一〇四
号」、第 159 図 -2: 四角枠「□」「一〇四号」)、切隅瓦 (第 159 図 -1: 「〇に十」)、棧瓦 (第 159 図
-3: 「□」「五二号」)、鬼瓦 (第 159 図 -4、5) である。

衛生陶器は、「痰吐付洗面器」 (第 160 図) である。横幅 65cm・奥行 47cm・高さ 12cm で、洗面
ボウルの左上に石鹸置き、左下に痰壺が作り付けられている。1910 年代末に痰壺と洗面器を合体さ
せたものが実用新案権を取得したが、賛否両論があった。1954 年に刊行された『タイルと衛生陶器
の知識並施工法』では、「痰吐付洗面器」をめぐる関係者のやり取りが記されている。

「…斎久工業小川誠耳委員から、従来の痰吐付洗面器など、甚だ不衛生だから規格から外して了解と
云う御意見が出ましたが、筆者もこの論には賛成で、この形はよく喫茶店や田舎の旅館でお目にかゝ
る洗面器ですが、痰が陶器の左側につくられた壺の中にこびりついて全くやり切れない。どうしても
この痰吐付がよく売れるから、つまり需要があるならメーカーはコックをひねるとこの痰吐穴の中
にも、水が流れる位な工夫もしても良いと技術者でない筆者は良心的に考え、且つ改良しない技術者に
憤りさえ感じます。」 (小林・中島 1954: 138 頁)

洗面所壁面のコーナー部分に取り付ける製品は正式名称が不明のため「三角ラック」 (第 161 図
-1) とする。壁面に接する等辺にはネジ穴が 2 つ穿たれており 36cm、手前の底辺は 49cm、等辺の
縁高は 7.5cm を計る。衛生陶器の破片 (第 161 図 -2) には、圏線内の星形に「STK」という高島製
陶所の商標がプリントされている。高島製陶所は、1915 (大正四) 年に設立されて 1919 (大正八)
年に痰壺付洗面器の実用新案権を取得し、1975 (昭和五十) 年に衛生陶器の製造から撤退した。小
便器下部の破片 (第 161 図 -3) がある。

・自然遺物

貝類は、マガキ (2 点)・ハマグリ (2 点) アサリ (1 点) が出土した。

【礎石】

67 号遺構 [F・G-4] (2 区)

・遺構 (第 143 図)

径 50 ~ 60cm ほどの略円形に配置されている。

・遺物 (第 162 図)

土器は、「かわらけ」 (第 162 図 -1) で口縁部に煤が付着している。

73号遺構 [G-6] (2区)

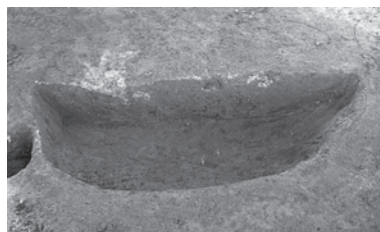
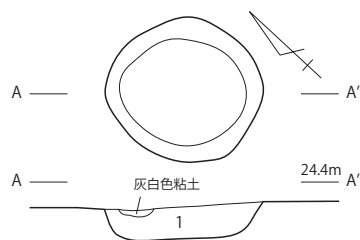
・遺構 (第 143 図)

径 50cm ほどの略円形に配置されている。

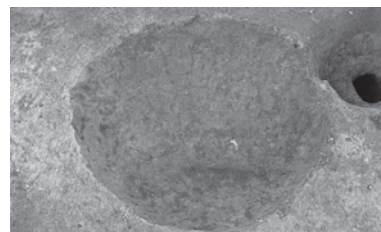
124号遺構 [H-6] (3-2区)

・遺構 (第 143 図)

【202号遺構】

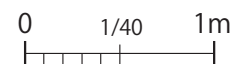
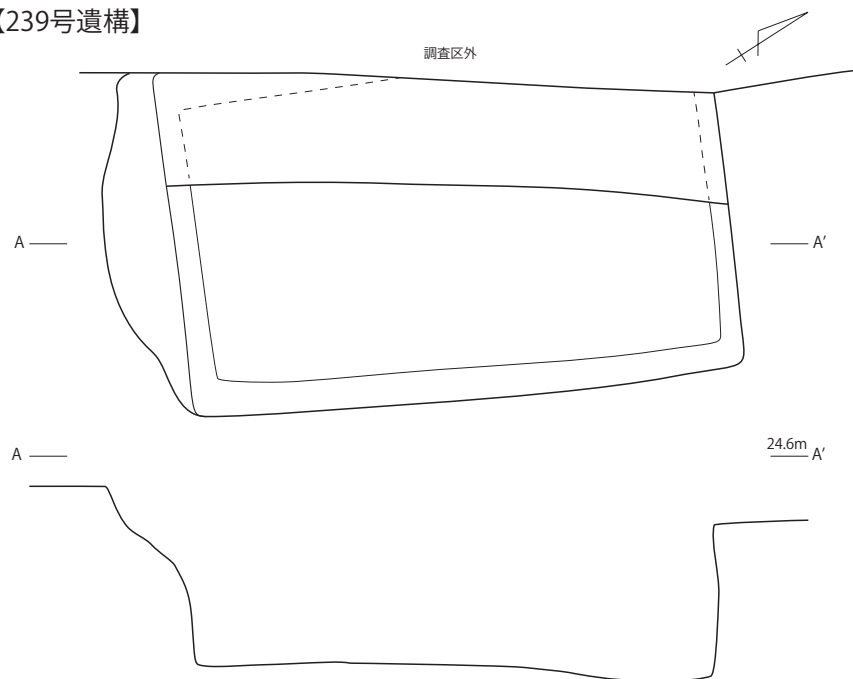


202号遺構断面 (南西より)



202号遺構 (北東より)

【239号遺構】



239号遺構断面 (南東より)



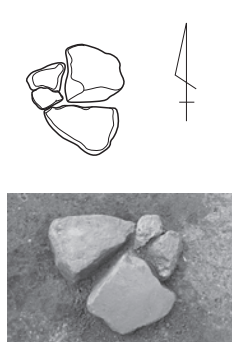
239号遺構 (北西より)

土層説明

202号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm橙色スコリア含む。黒色土主体。
------	---	-----	--------------------------------

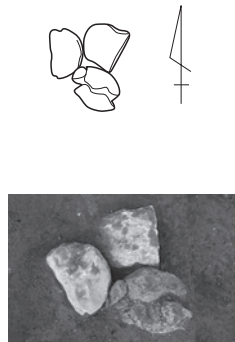
第 142 図 近代の土坑 (5 : 1/40)

【67号遺構】



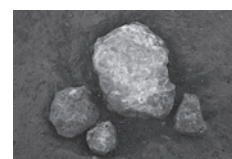
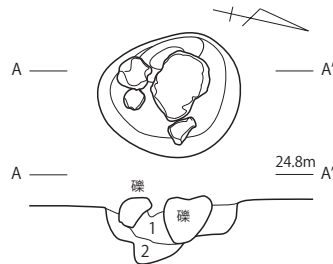
67号遺構 (北東より)

【73号遺構】

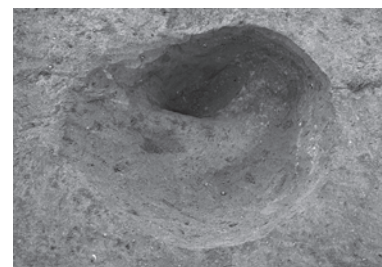


73号遺構 (南西より)

【124号遺構】

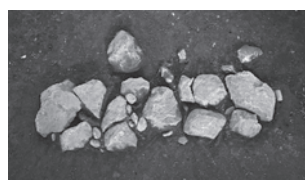
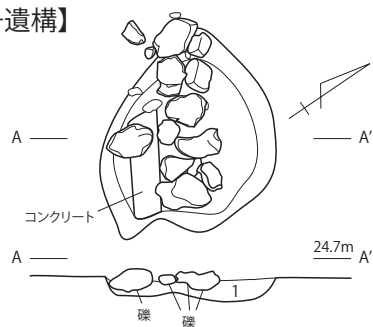


124号遺構 (北西より)



124号遺構 (東より)

【128号遺構】

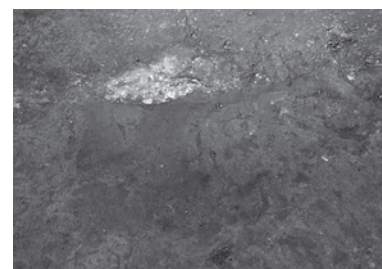
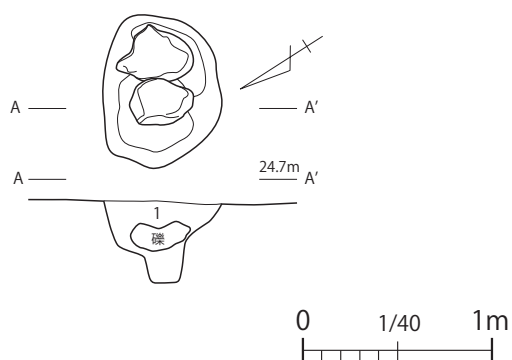


128号遺構 (北東より)

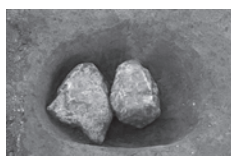


128号遺構断面 (南西より)

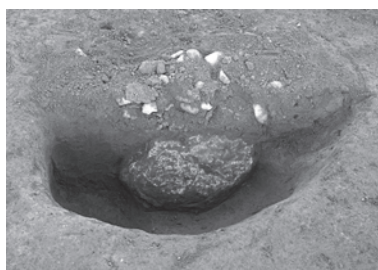
【130号遺構】



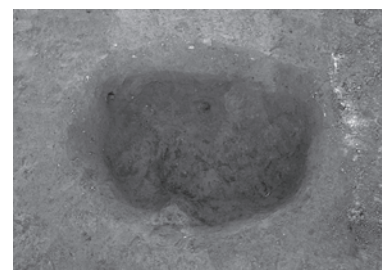
128号遺構 (東より)



130号遺構 (北東より)



130号遺構断面 (北西より)



130号遺構 (南西より)

土層説明

124号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径1cm灰白色粘土ブロック含む。
	2	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径2-3cm黄褐色ロームブロック含む。
128号	1	暗褐色	粘性あり。締まりあり。径1mm橙色スコリア3%。
130号	1	黒褐色	粘性あり。締まりあり。径3cm小礫含む。

第 143 図 近代の礎石 (1 : 1/40)

径 50cm ほどの略円形に配置されている。下部に 74cm × 63cm × 30cm の円形の土坑を伴う。

・遺物

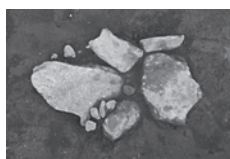
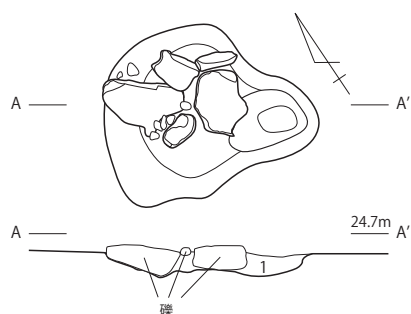
出土資料は、磁器の碗（1 点）・不明（1 点）、陶器の碗（1 点）・瓶（2 点）、土器の焙烙（1 点）・不明（4 点）である。‘かわらけ’は、15 点（20g）である。

128 号遺構 [H-5, I-5・6]（3-2 区）

・遺構（第 143 図）

30cm × 100cm ほどの列状を呈する。コンクリート片を伴う。下部に 105cm × 94cm × 6cm の

【131号遺構】

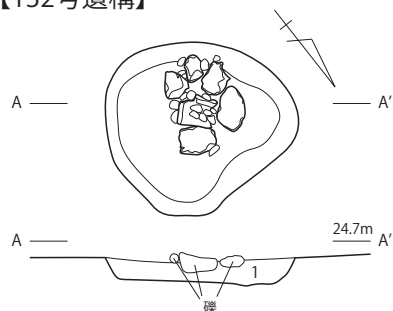


131号遺構(南西より)

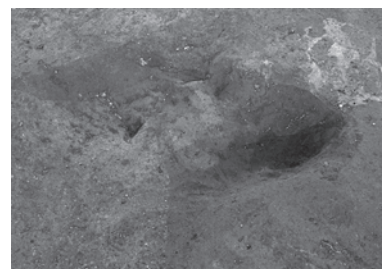


131号遺構断面(南西より)

【132号遺構】

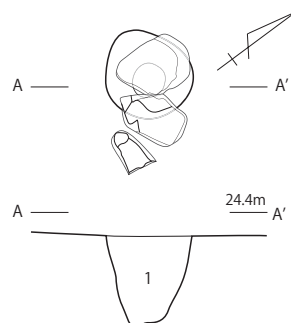


132号遺構(南東より)

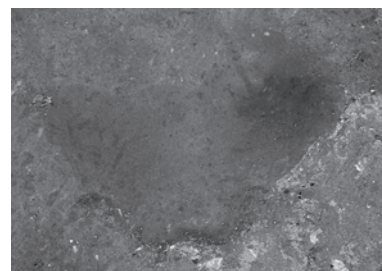


131号遺構(南より)

【238号遺構】



132号遺構断面(北西より)



132号遺構(北西より)



238号遺構(南西より)

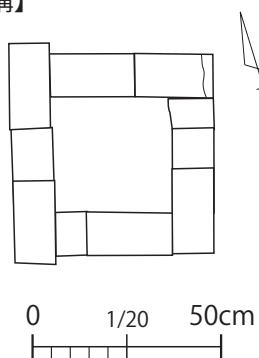


土層説明

131号	1	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径1mm橙色スコリア3%。
132号	1	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径1mm橙色スコリア3%。
238号	1	黒褐色	粘性あり。縮まりあり。径1mm橙色スコリア5%。

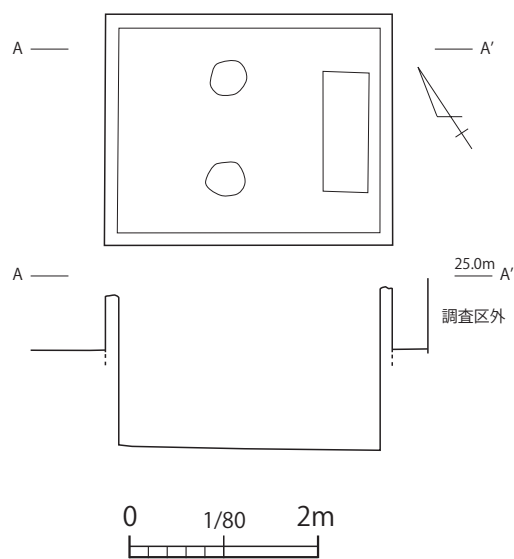
第 144 図 近代の礎石（2：1/40）

【4号遺構】



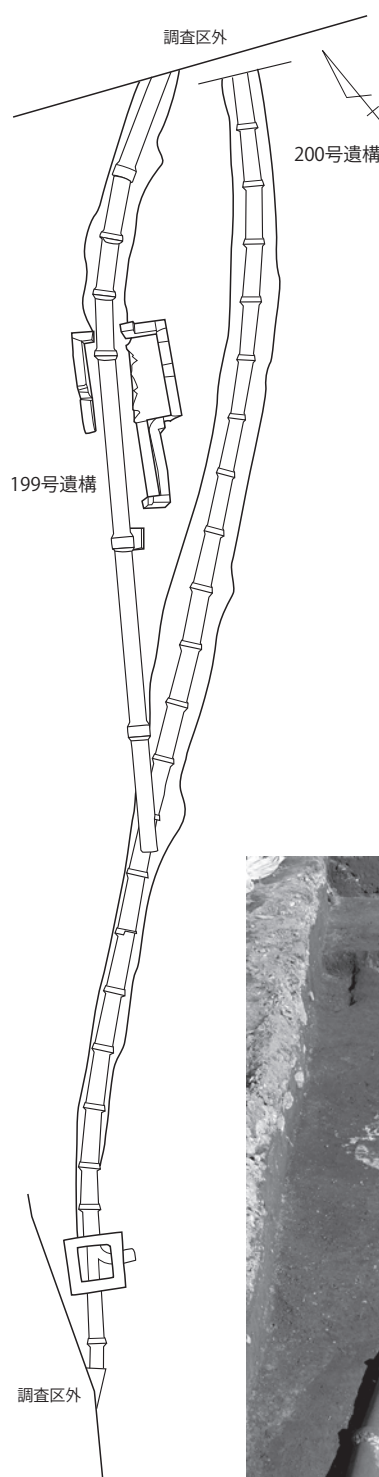
4号遺構(南東より)

【121号遺構】

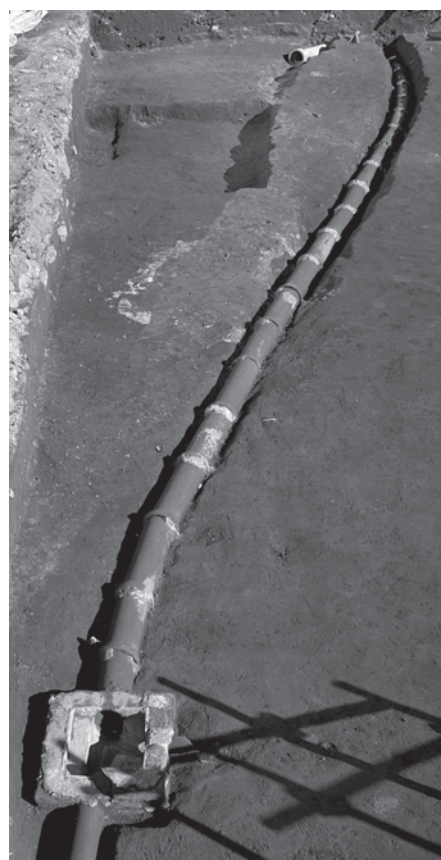


121号遺構(北東より)

【199・200号遺構】



199号遺構(南より)



200号遺構(南より)

第 145 図 近代の排水施設 (1/20・1/80)

円形の土坑を伴う。

- ・遺物（第 162 図）

金属製品は、銭貨で新寛永（第 162 図 -2：「元」）である。‘かわらけ’は、6 点（21g）である。

130 号遺構 [H-6]（3-2 区）

- ・遺構（第 143 図）

80cm × 64cm × 42cm の楕円形土坑に礫が 2 個配置されている。

- ・遺物

‘かわらけ’は、1 点（5g）である。

131 号遺構 [H-5]（3-2 区）

- ・遺構（第 144 図）

80cm × 50cm の楕円状に礫が配置されている。下部には 115cm × 90cm × 10cm の略円形の土坑を伴う。

- ・遺物

出土資料は、陶器の瓶（1 点）である。‘かわらけ’は、6 点（9g）である。

132 号遺構 [H-5]（3-2 区）

- ・遺構（第 144 図）

大小の礫が 50cm × 40cm の略円形に配置されている。下部に 100cm × 92cm × 13cm の土坑を伴う。

- ・遺物

出土資料は、土器の焼塩壺（1 点）である。‘かわらけ’は、2 点（5g）である。

238 号遺構 [G-4]（3-4 区）

- ・遺構（第 144 図）

3 個の大型礫が 75cm × 40cm の範囲で配置されている。下部に 49cm × 42cm × 45cm の土坑を伴う。

【排水施設】

4 号遺構 [E・F-3]（1 区）

- ・遺構（第 145 図）

51 号遺構（近世 2 上水路）の中央部に位置する。50cm 四方の方形の煉瓦枳である。配管などの接続施設は認められなかった。

- ・遺物

金属製品は、銭貨で銭種不明が 1 枚ある。

- ・部材（第 162 図）

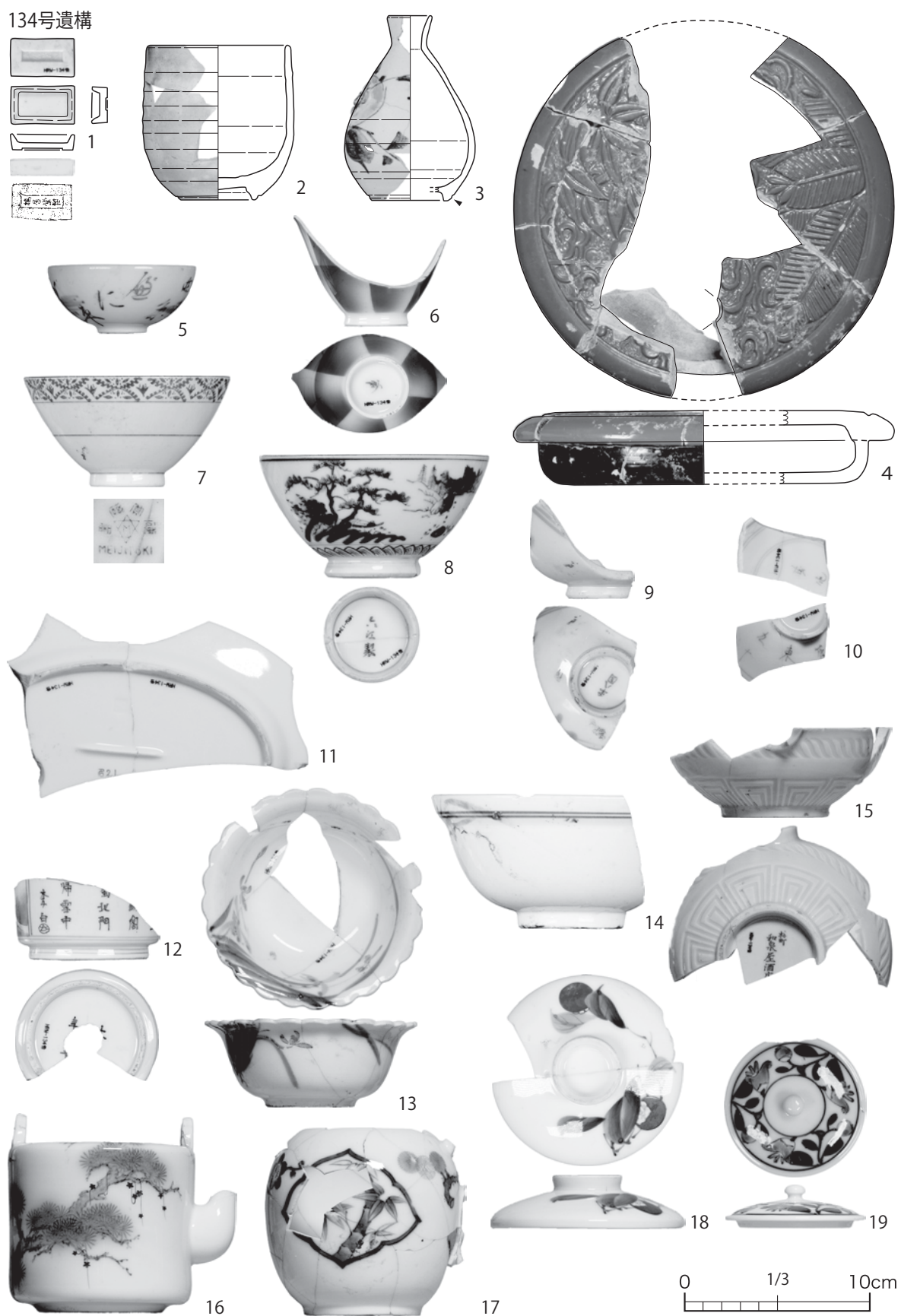
煉瓦（第 162 図 -3 ～ 5）には、扇形の刻印が認められる。

199 号遺構 [I-4・5, J-5]（3-3 区）

- ・遺構（第 145 図）

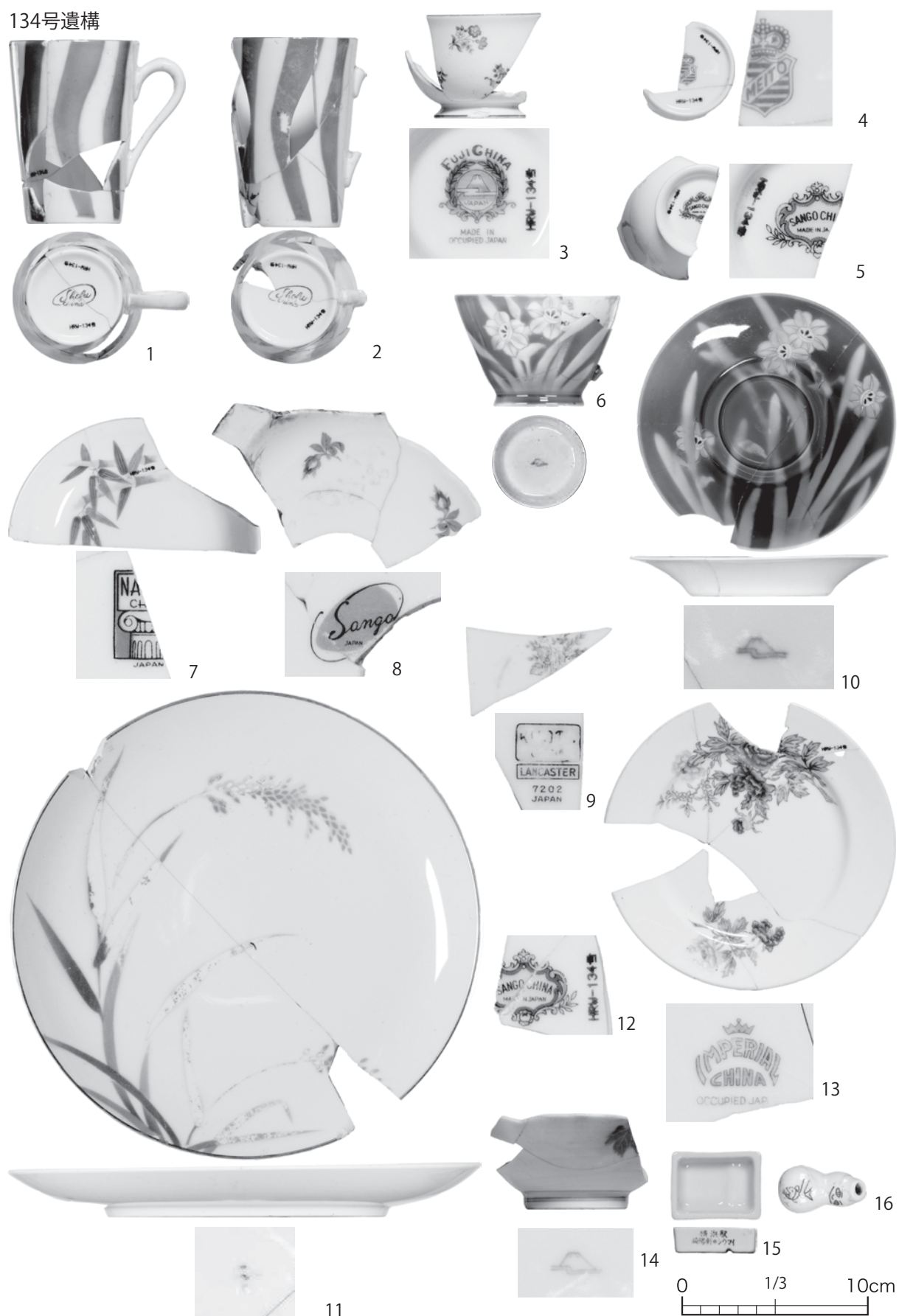
調査区北東部から南西部に向けてヒューム管列（199 号遺構 -a）とそれに壊されている煉瓦積構造物（199 号遺構 -b）が検出された（199 号遺構 -b → 199 号遺構 -a）。ヒューム管列（199 号遺構

134号遺構



第 146 図 近代の遺物（1：1/3）

134号遺構



第 147 図 近代の遺物 (2 : 1/3)

-a) は、直線部が 2m ほど、曲線部が 60cm ほどの短いヒューム管を用いて、全長で 8m ほどが現存する。200 号遺構を覆う。煉瓦積構造物 (199 号遺構 -b) は 1m 四方の本体部に 1m ほどの張り出し部が付随する。この煉瓦積遺構は、試掘坑 2 で確認された「煉瓦造施設」に相当する (東京航業研究所 2021 : 2 頁)。

・遺物 (第 162 図)

出土資料は、磁器の碗 (6 点)・皿 (4 点)・鉢 (3 点)・瓶 (1 点)・不明 (1 点)、陶器の碗 (3 点)・皿 (1 点)・甕 (2 点)・瓶 (9 点)・不明 (2 点)、土器の焙烙 (3 点)・焼塩壺蓋 (2 点)・不明 (2 点) である。

磁器は、碗 (第 162 図 -7 : 「□」) である。

陶器は、甕 (第 162 図 -8 : 「□山」)、半胴甕破片の転用品 (第 162 図 -6 : 方形に研磨) である。

‘かわらけ’は、10 点 (9g) である。

金属製品は、煙管雁首 (第 162 図 -9) である。

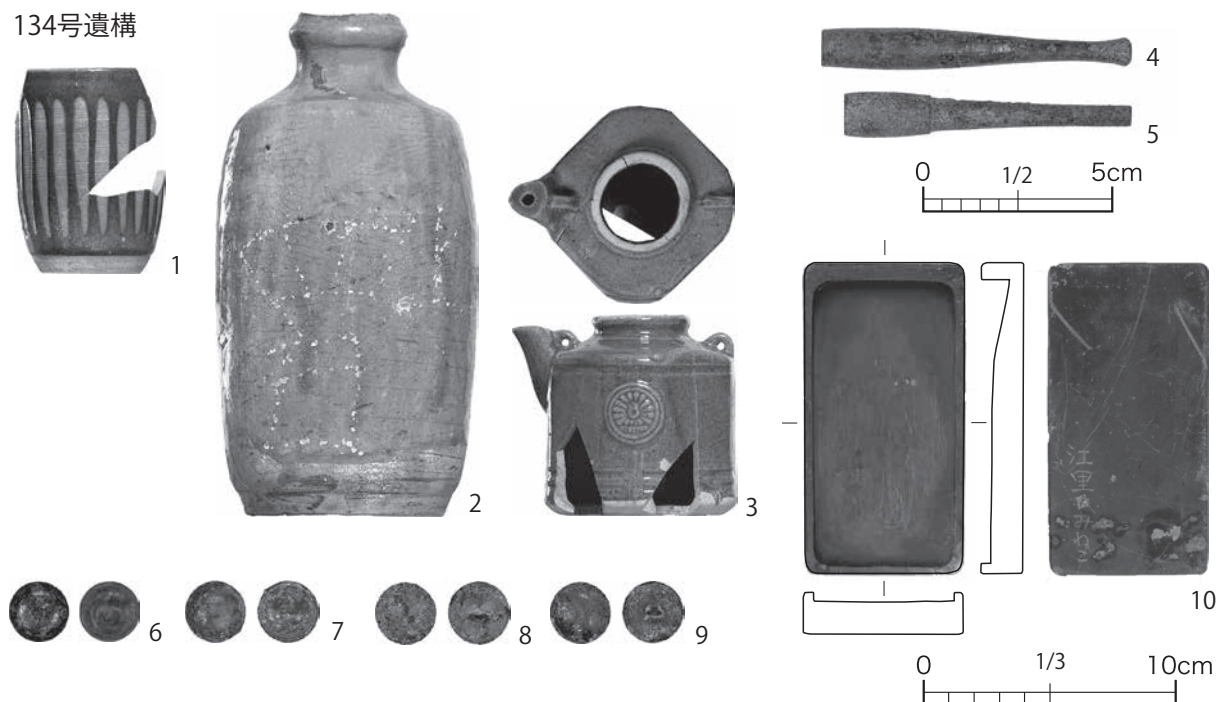
200 号遺構 [H-3・4, I-4・5, J-5] (3-3 区)

・遺構 (第 145 図)

調査区北東部から南西部にかけてヒューム管列 (200 号遺構 -a) と煉瓦積構造物 (200 号遺構 -b) が西側に付随する。ヒューム管列 (200 号遺構 -a) は 60cm ほどの短いもので構成されており、14m ほどを計る。煉瓦積構造物 (200 号遺構 -b) は、60cm 四方の正方形を呈し、ヒューム管列の南西部において南東方向へ向かう分岐を示す。199 号遺構 -a と 200 号遺構の前後関係は 200 号遺構 → 199 号遺構 -a を示すが、200 号遺構と 199 号遺構 -b の前後関係は不明である。199 号遺構・200 号遺構ともに下層の 214 号遺構 (近世 1 期水路) と方向を同じくする。

・遺物 (第 162 図)

134号遺構



第 148 図 近代の遺物 (3 : 1/2 · 1/3)

134号遺構



第 149 図 近代の遺物 (4 : 1/3)

出土資料は、磁器の碗（3点）・鉢（2点）、陶器の碗（2点）・皿（1点）・甕（1点）・瓶（1点）・播鉢（1点）・化粧瓶（1点）、土器の不明（3点）である。

磁器は、化粧瓶（第162図-10：「P.」伊藤胡蝶園パピリオ）である。

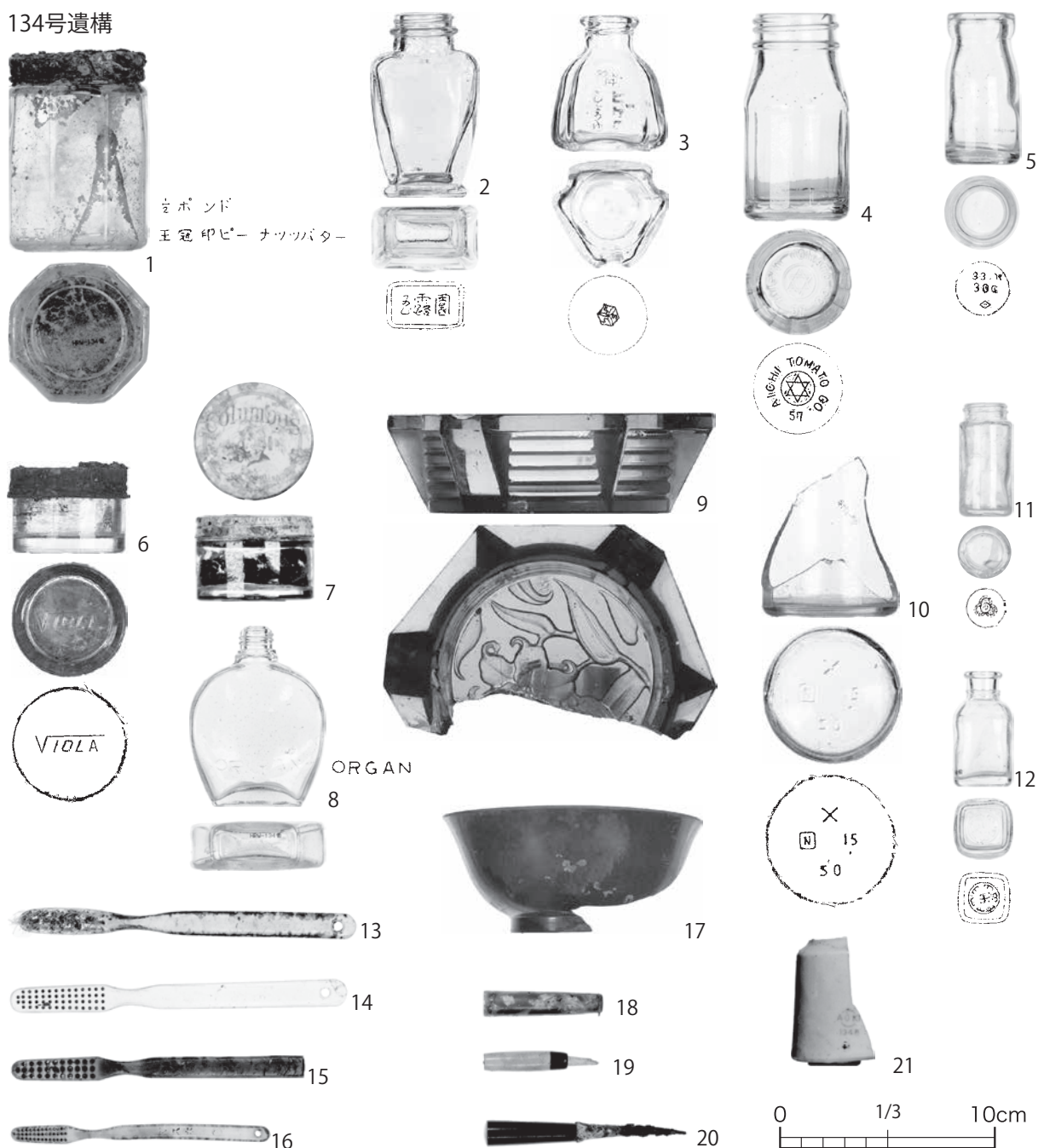
‘かわらけ’は、5点（8g）である。

ガラス製品は、薬品蓋（第162図-11：「Gynan Capsule」生理痛薬品、インドのアーユルヴェーダの製薬会社「クマー・プロダクト」の医薬品）である。

金属製品は、釘（第162図-12）である。

121号遺構 貯水槽 [H-8・9, I-8]（3-1区）

134号遺構



第150図 近代の遺物（5：1/3）

・遺構（第 145 図）

敷地東隅に構築された鉄筋コンクリート製貯水槽である。各種の廃材で埋められていた。

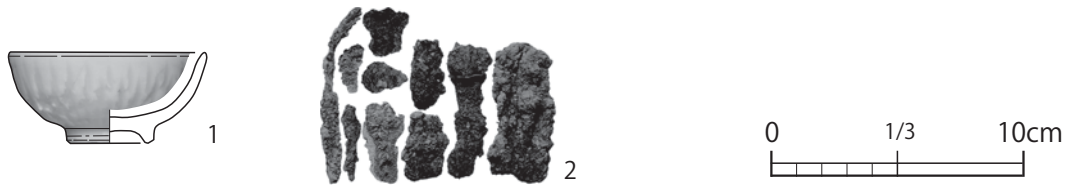
・遺物

出土資料は、磁器碗（2 点）・鉢（1 点）・植木鉢（1 点）である。‘かわらけ’は、1 点である。

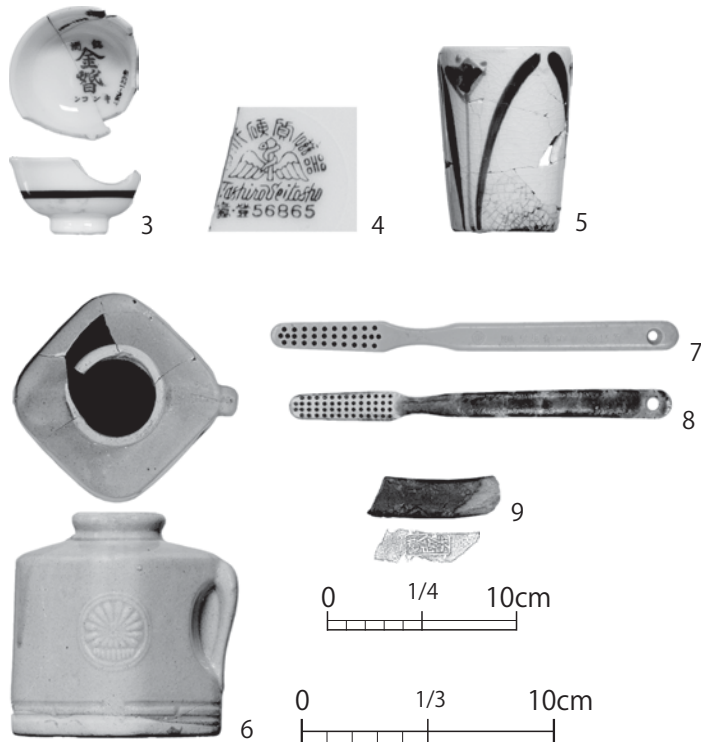
包含層出土（第 163 ～ 174 図）

出土資料は磁器の碗（775 点）・皿（167 点）・鉢（42 点）・蓋（48 点）・瓶（97 点）・小杯（12 点）・仏飯器（4 点）・香炉（4 点）・植木鉢（2 点）・急須（6 点）・水滴（1 点）・蓮華（2 点）・花瓶（1 点）・人形（3 点）・ミニチュア（1 点）・猪口（2 点）・蓋物（14 点）・段重（18 点）・髪油壺（1 点）（→ 250 頁）不明（34 点）・陶器碗（301 点）・皿（103 点）・鉢（44 点）・蓋（22 点）・壺（10 点）・甕（133 点）・瓶（385 点）・土鍋（19 点）・香炉（17 点）・播鉢（125 点）・植木鉢（13 点）・餌猪口（2 点）・土瓶（74 点）・急須（5 点）・水鉢（1 点）・尿瓶（1 点）・火鉢（5 点）・灯明受皿（4 点）・蓋物（2 点）・灯明皿（7 点）・灰吹（1 点）・火入れ（2 点）・脚付灯明受皿（4 点）・水鉢（2 点）・羽釜（7 点）・髪油壺（3 点）・把手（1 点）・その他（12 点）・不明（80 点）、土器鉢（73 点）・壺（5 点）・甕（1 点）・植木鉢（27 点）・火鉢（76 点）・焙烙（101 点）・火消壺（17 点）・火消壺蓋（10 点）・焼塩壺（7 点）・焼塩壺蓋（6 点）

28号遺構



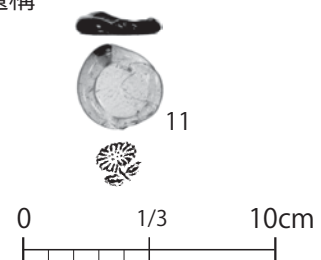
123号遺構



127号遺構

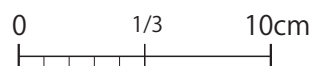
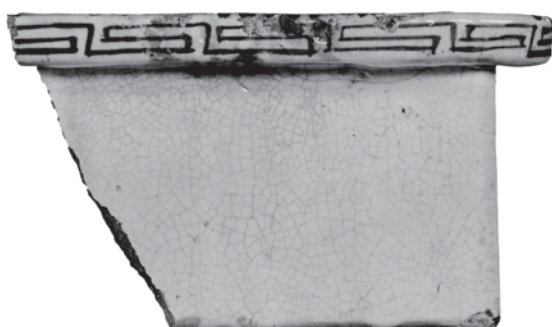
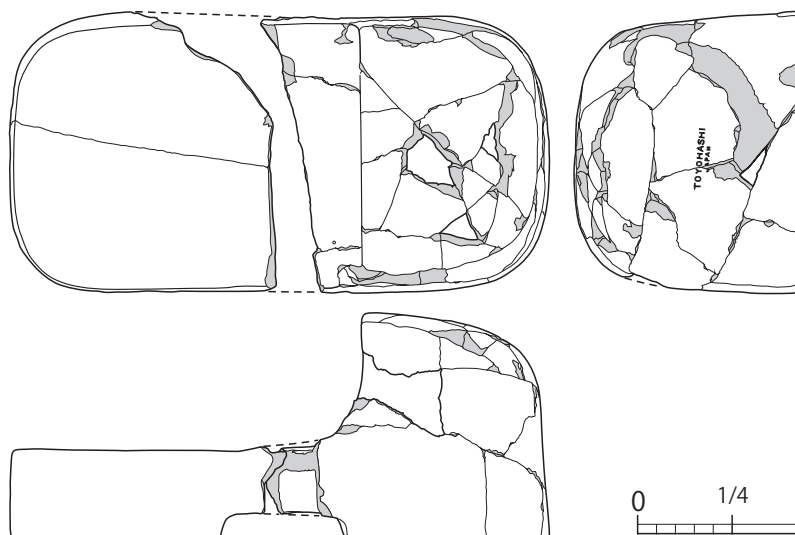
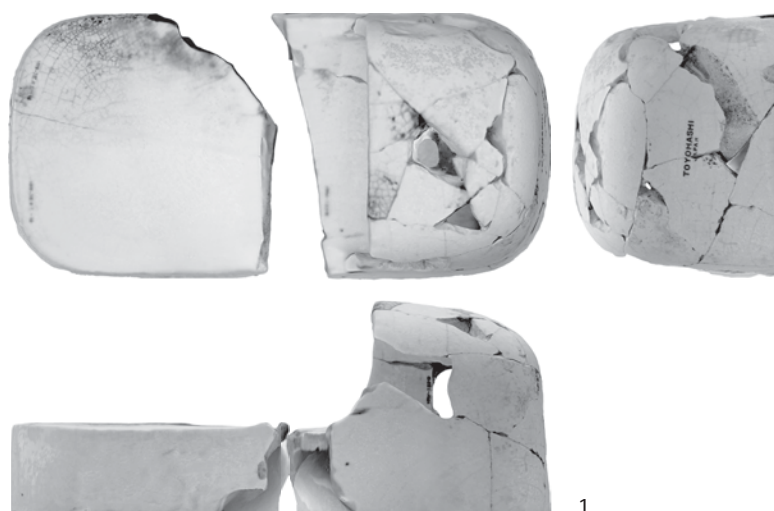


133号遺構



第 151 図 近代の遺物（6：1/3・1/4）

123号遺構

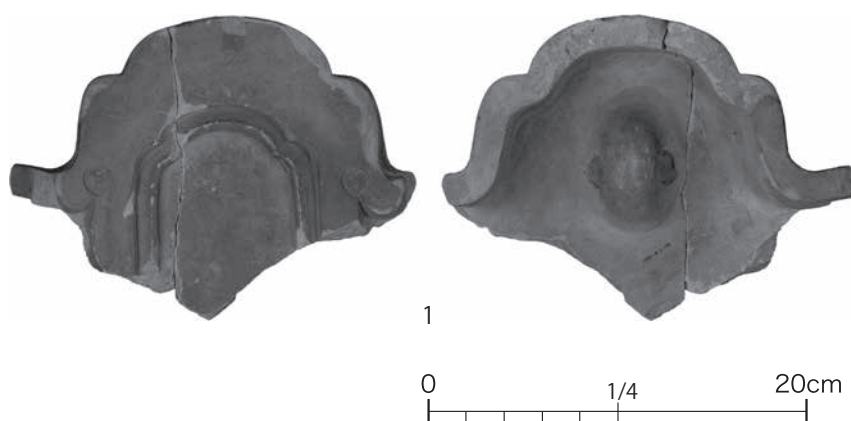


第 152 図 近代の遺物（7：1/3・1/4）

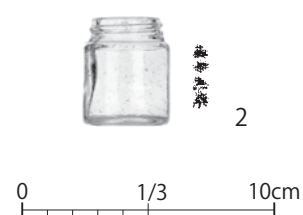
灯明受皿 (3 点)・土製品 (人形：48 点)・ミニチュア (11 点)・五徳 (2 点)・風口 (1 点)・型 (2 点)・灯明皿 (7 点)・瓦灯 (6 点)・脚付灯明受皿 (5 点)・乗燭 (3 点)・焔炉 (4 点)・さな (4 点)・泥面子 (2 点)・その他 (35 点)・不明 (251 点) である。

磁器は、碗 (第 163 図 -1、2、3:角枠篆書、第 164 図 -15:外面「山紫水明／是神山×／溪雲再×」、16:「真陶園／平安製」川本半助、17:統制番号「瀬／781」、18:「園山」、第 166 図 -1:統制番号「瀬／870」、2:「□山」、3:禍福、4:統制番号陰刻「○に品／50」、5:統制番号陽刻「岐／81」、6:「大明年製」、7:「大明年□ (製)」、8:「大明□ (成) 化□ (年) □製」、9・10・11:「大明年製」、

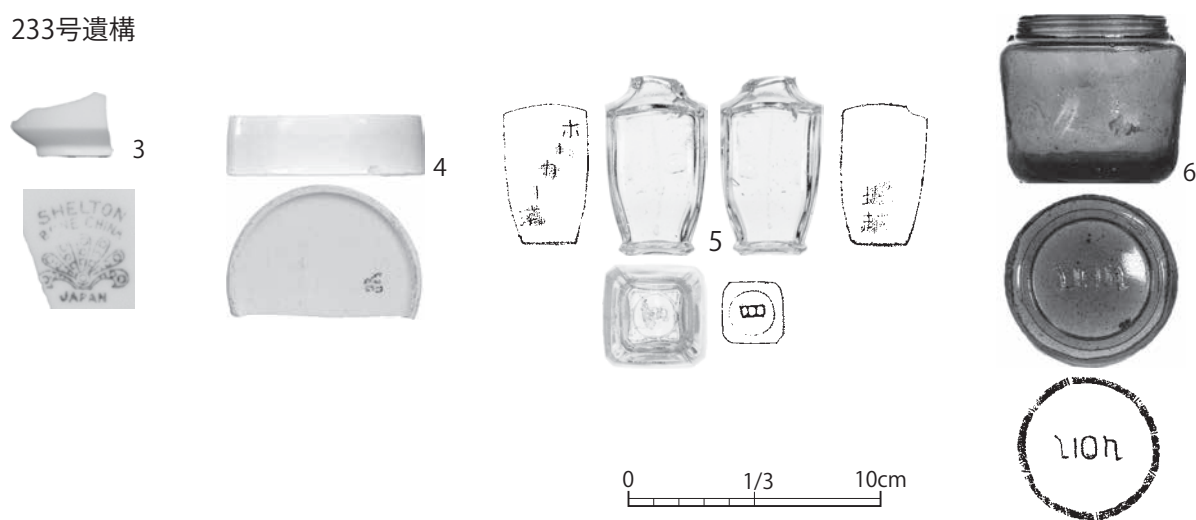
201号遺構



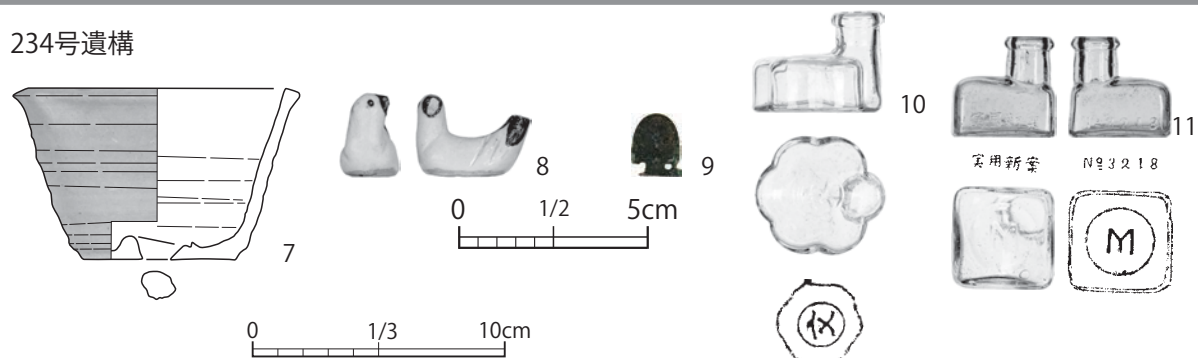
202号遺構



233号遺構

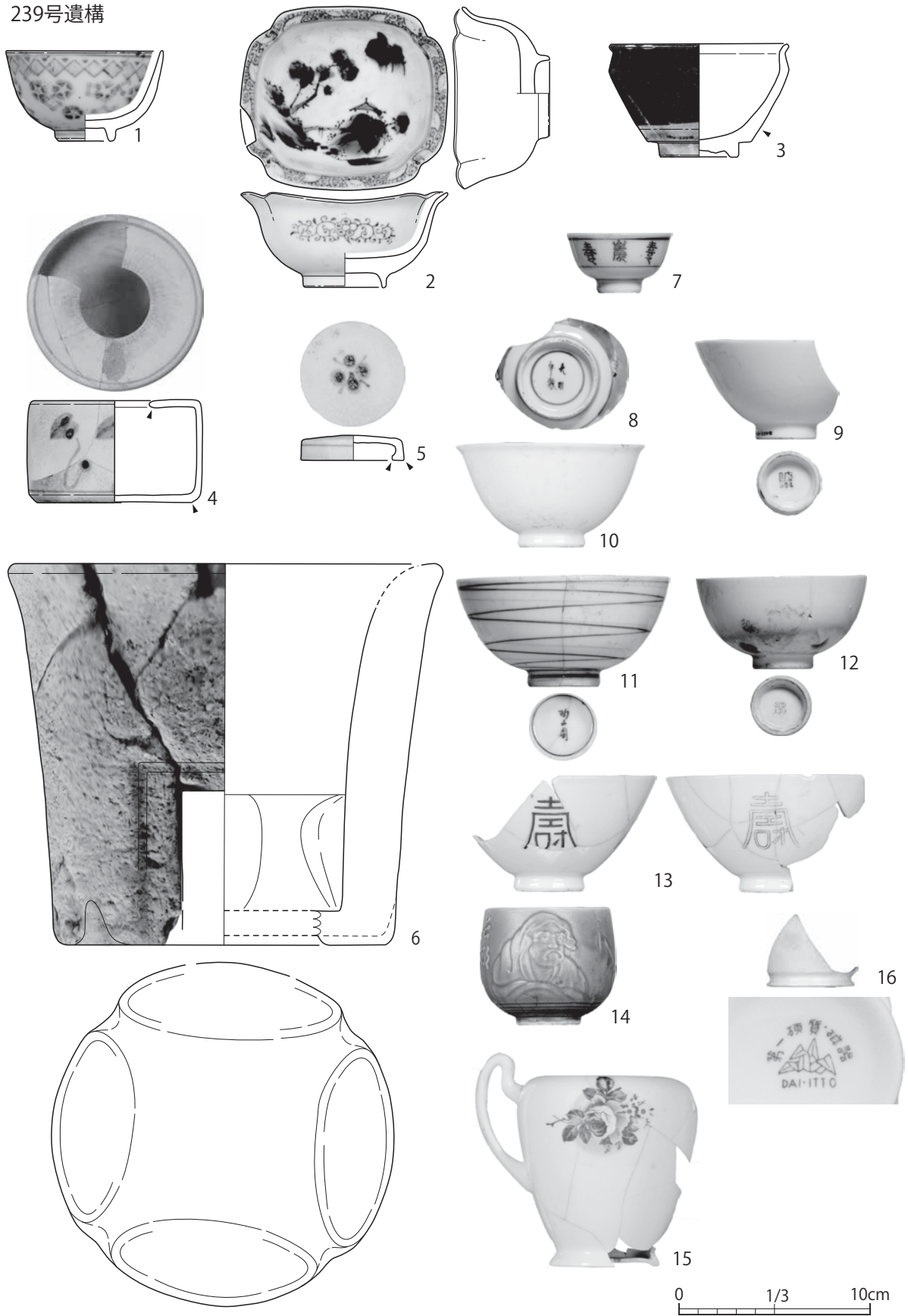


234号遺構



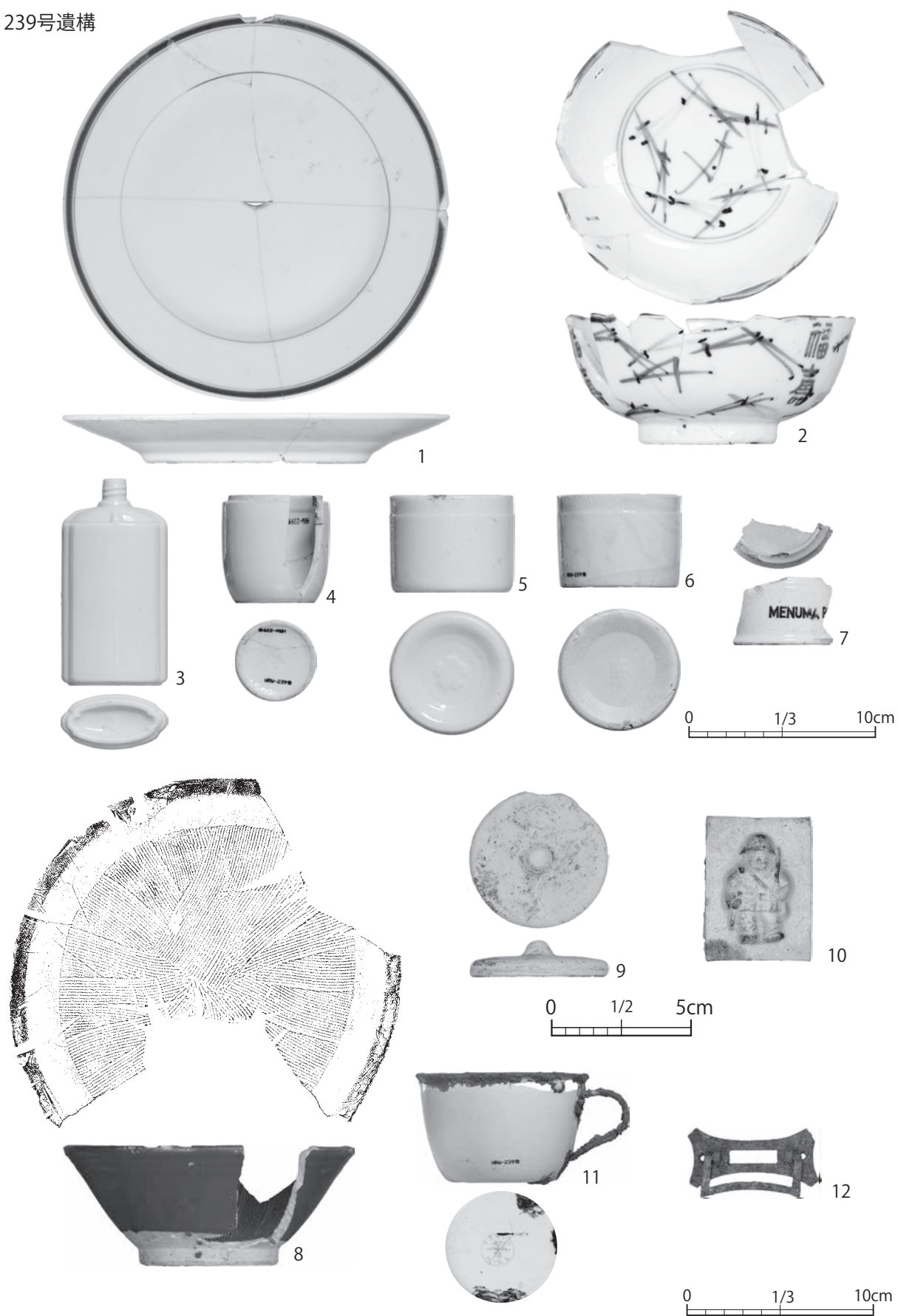
第 153 図 近代の遺物 (8: 1/2・1/3・1/4)

239号遺構



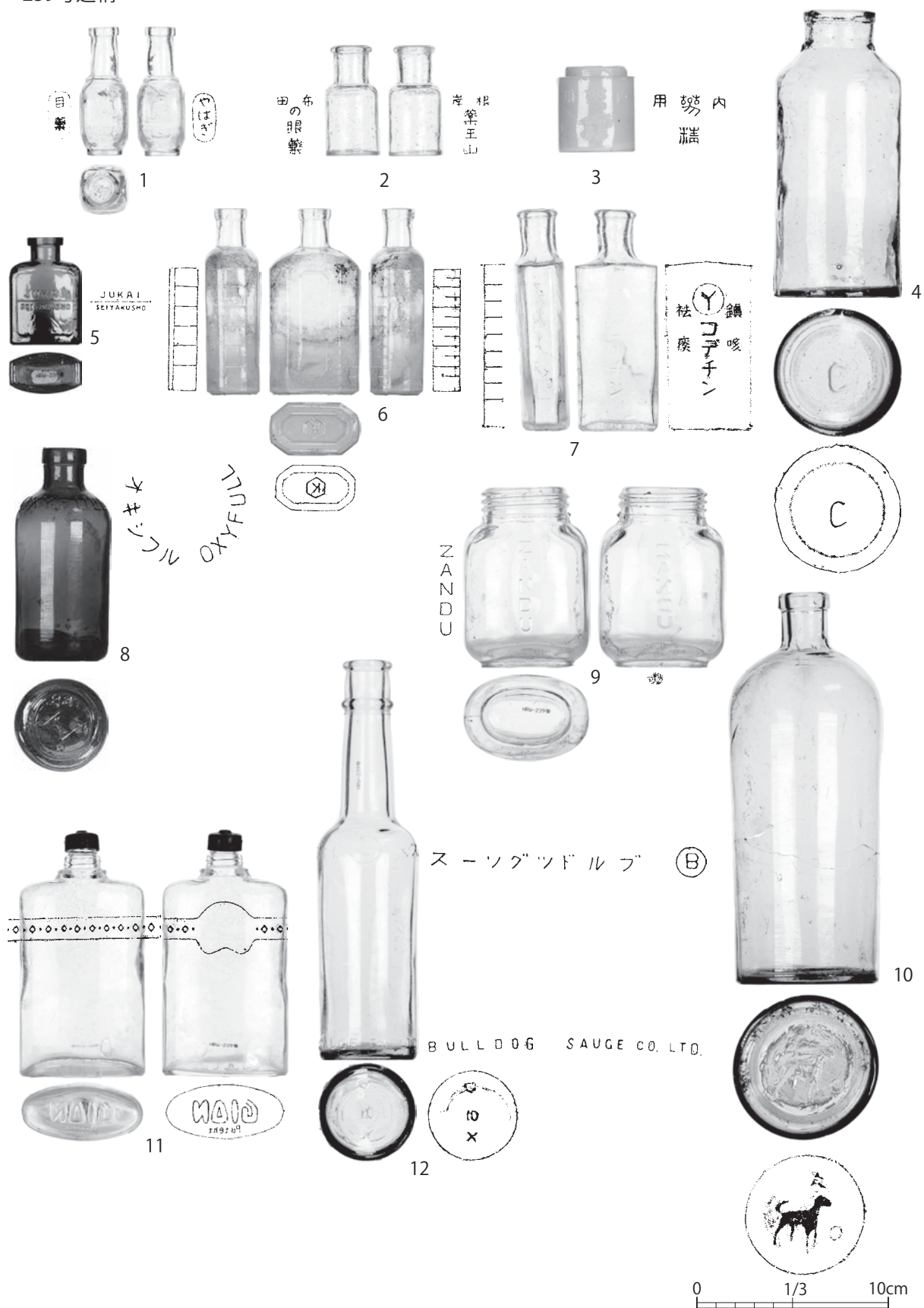
第 154 図 近代の遺物 (9 : 1/3)

239号遺構

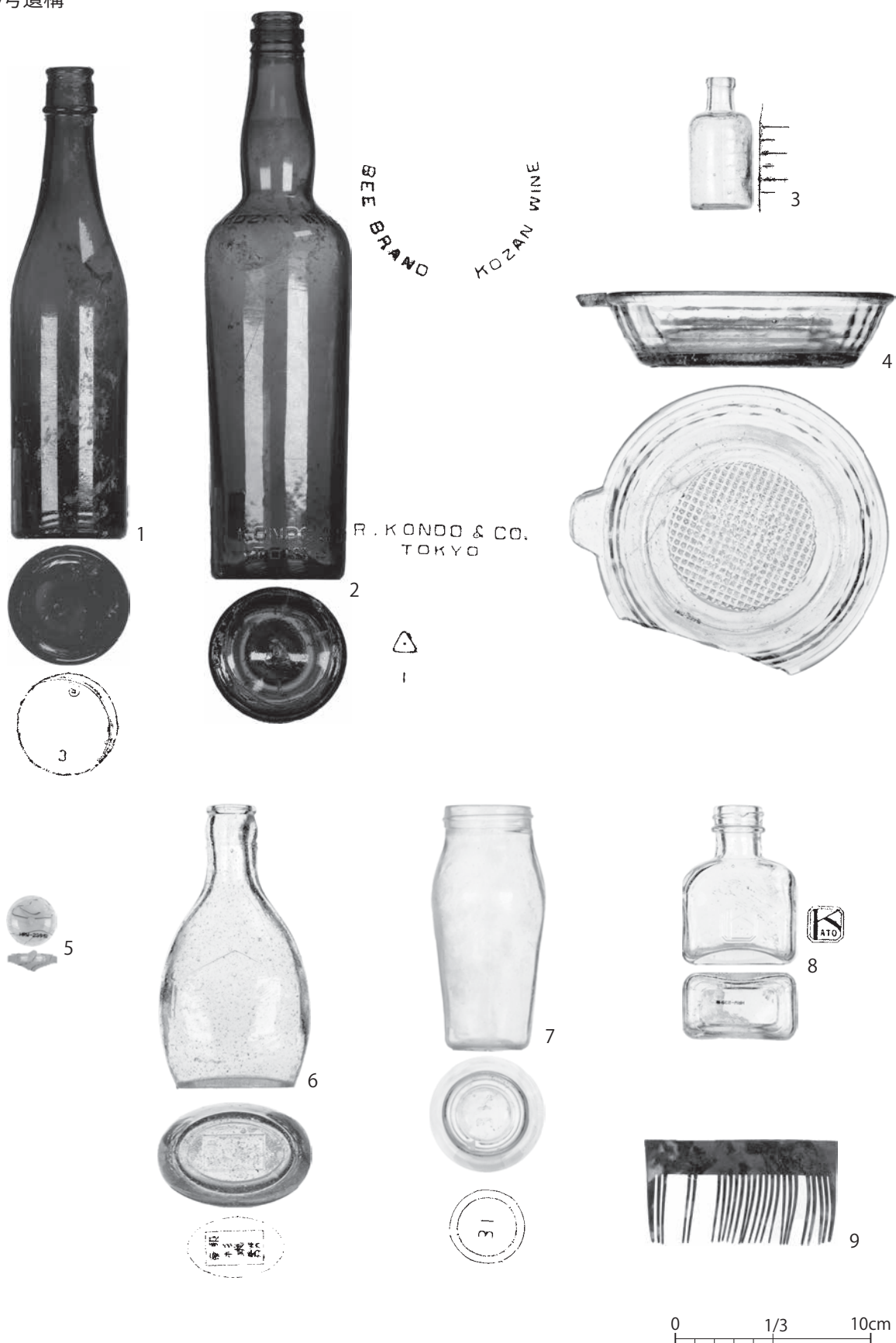


第 155 図 近代の遺物 (10 : 1/2 ・ 1/3)

239号遺構

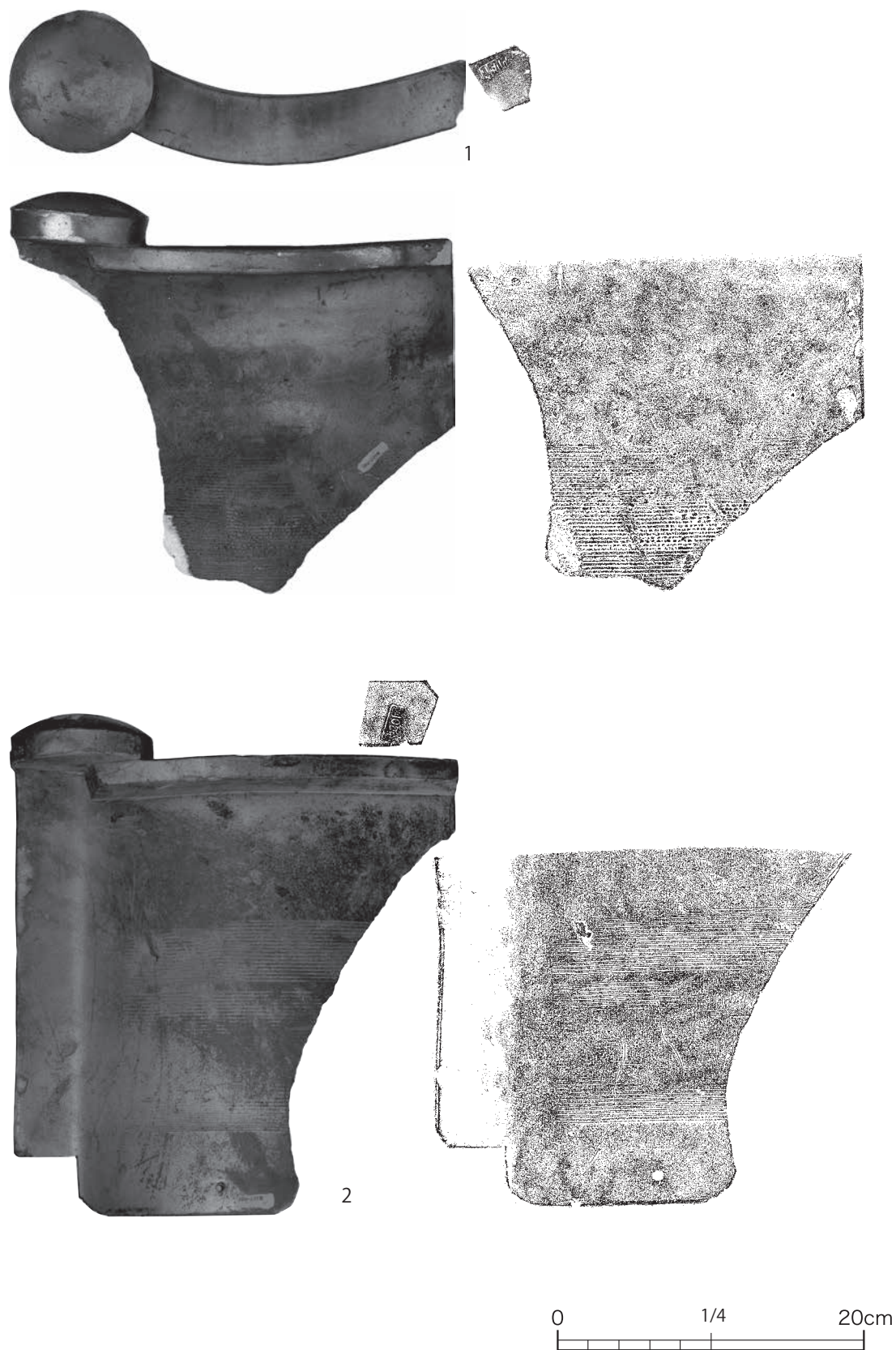


第 156 図 近代の遺物（11：1/3）



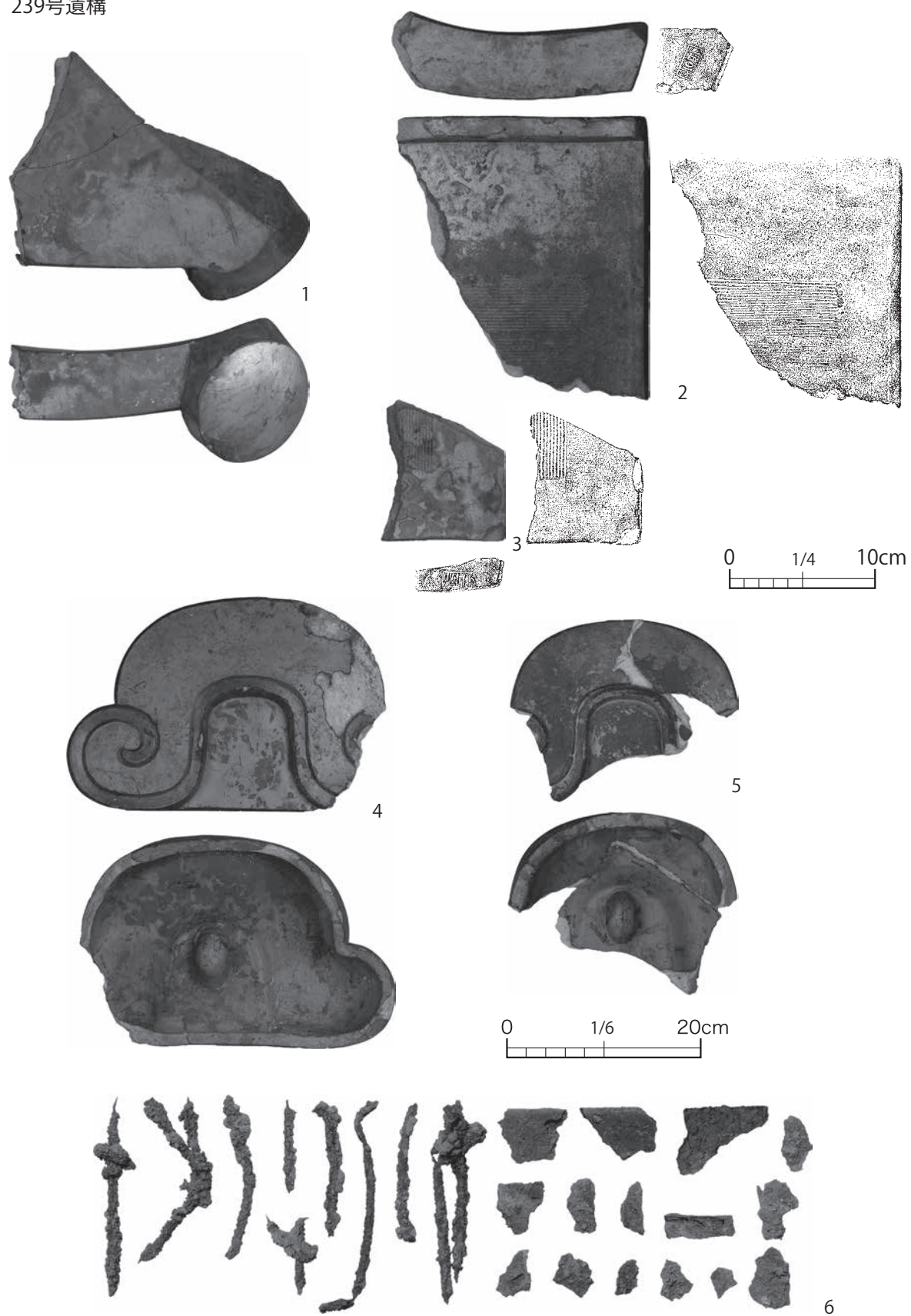
第 157 図 近代の遺物 (12 : 1/3)

239号遺構



第 158 図 近代の遺物（13：1/4）

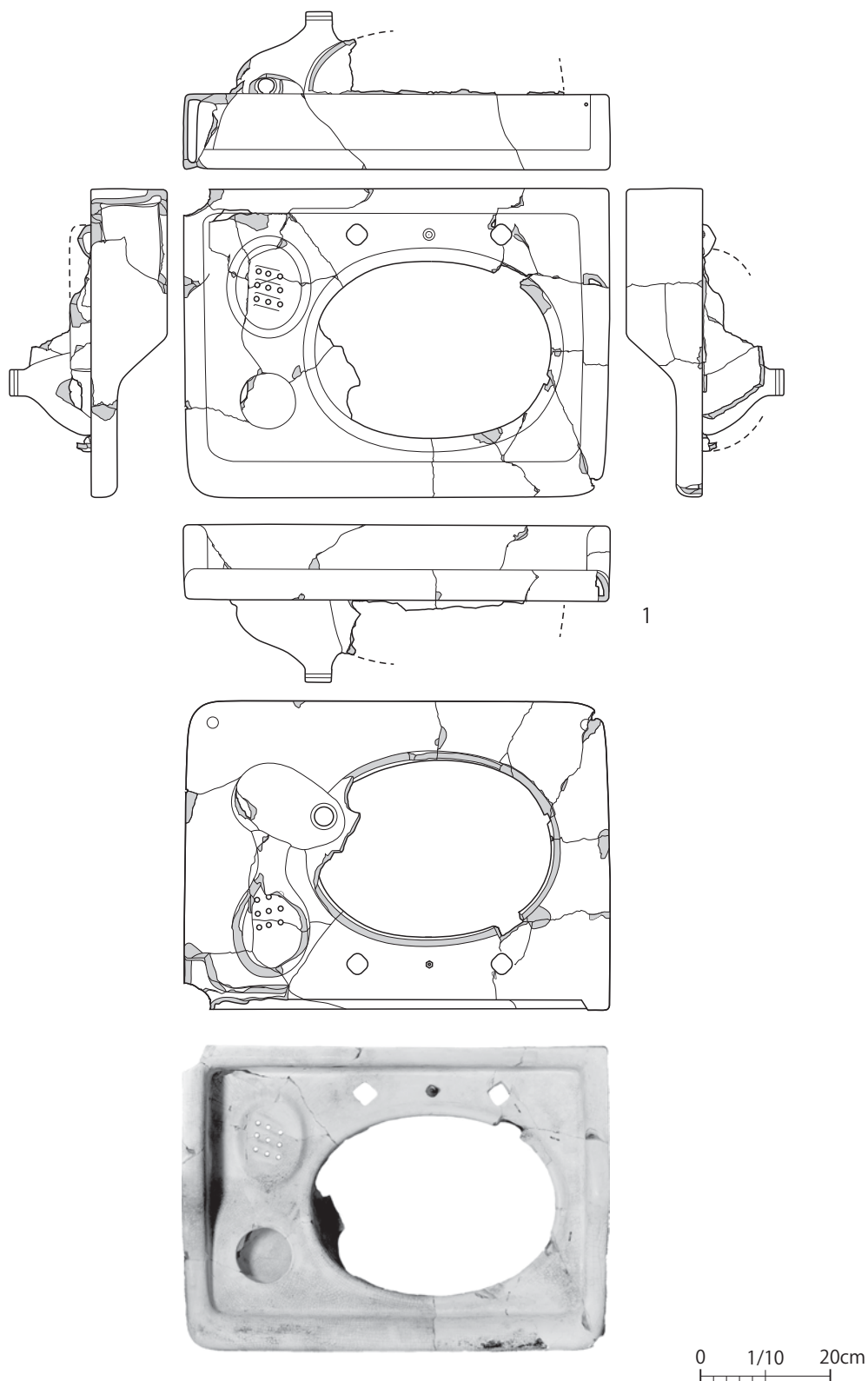
239号遺構



第 159 図 近代の遺物 (14 : 1/4 ・ 1/6)

12:「大□(明)年□(製)」、13:「宣明年製」、14:禍福、15・16:「□□」、17:○に山／「丸山園」、皿(第163図-4、第168図-18:鍋島、19、20:見込「長寿庵／(941)二三五五」21:統制番号「有／14」、22・23:漢詩文)、変形皿(第163図-5:角杵篆書;中国産)、仏飯器(第163図-6)、段

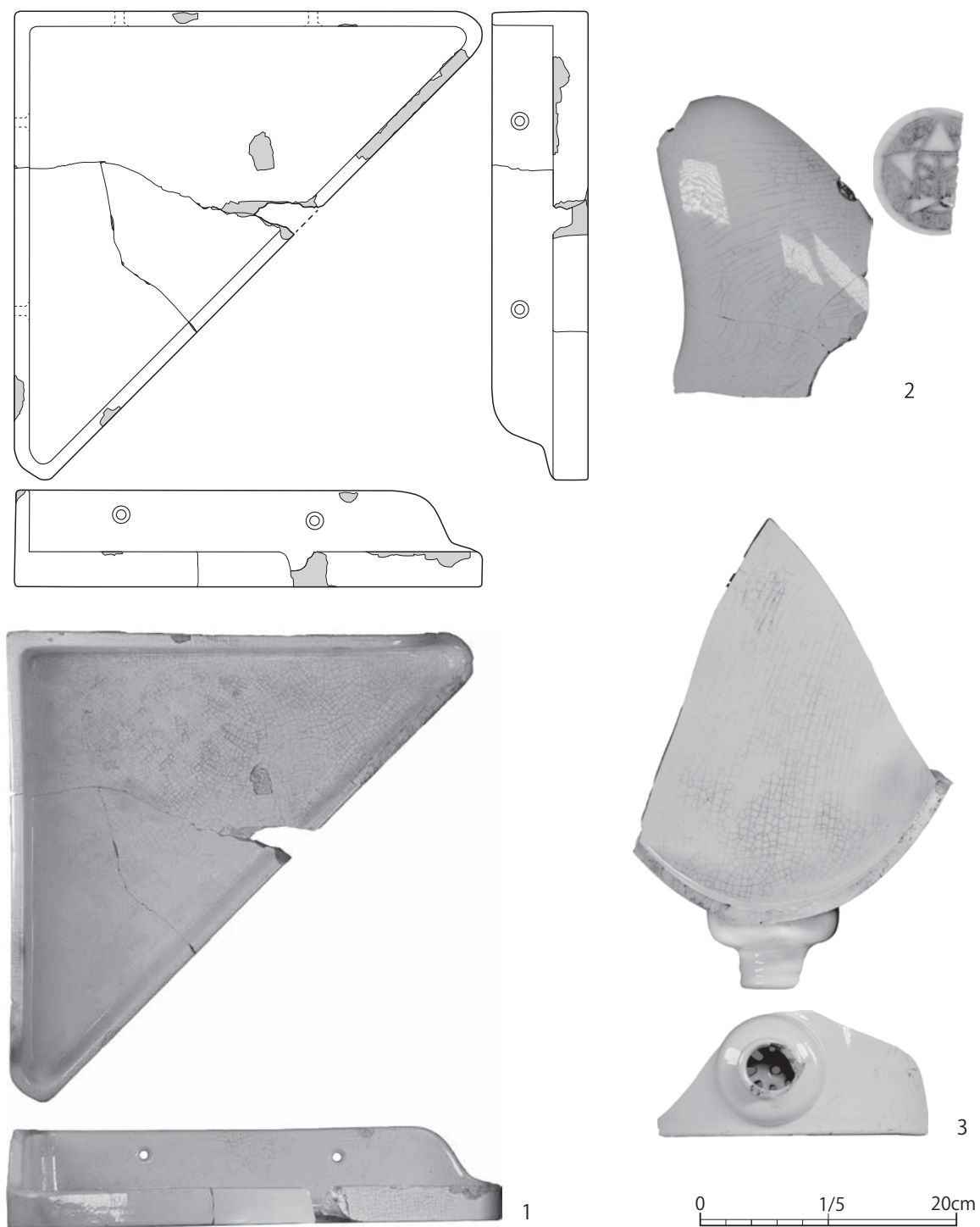
239号遺構



第160図 近代の遺物 (15:1/10)

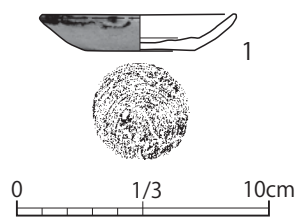
重（第 163 図 -8）、転用品（第 164 図 -8：碗高台部分）、酒杯（第 164 図 -11・12、14：見込「正宗」）、杯（第 164 図 -13：見込銘「辰見野」）、蒸し器蓋（第 165 図 -1：エンボス「小」）、碗蓋（第 165 図 -2：凸凹黒兵衛；田河水泡、3：漢詩文、5、6：角杵篆書）、鉢蓋（第 165 図 -7：角杵篆書）、蓋物蓋（第 165 図 -4）、洋皿（第 167 図 -1：統制番号「SL／岐 1163」、2：「M／JAPAN」ノリタケ、

239号遺構

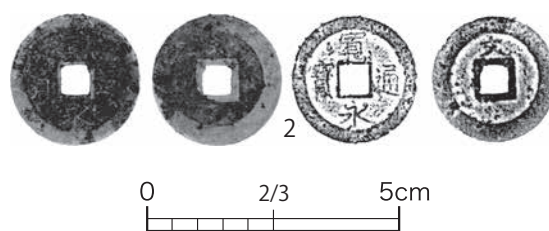


第 161 図 近代の遺物（16：1/5）

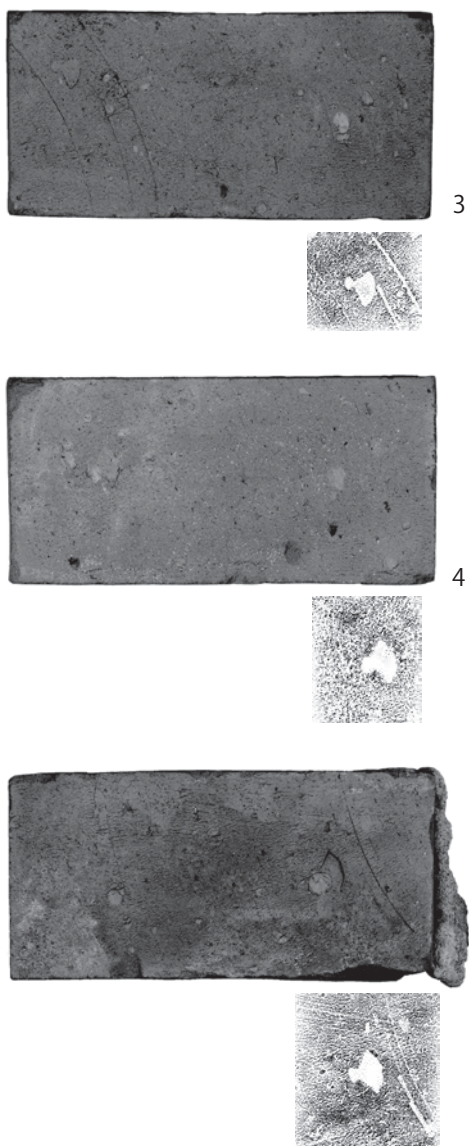
67号遺構



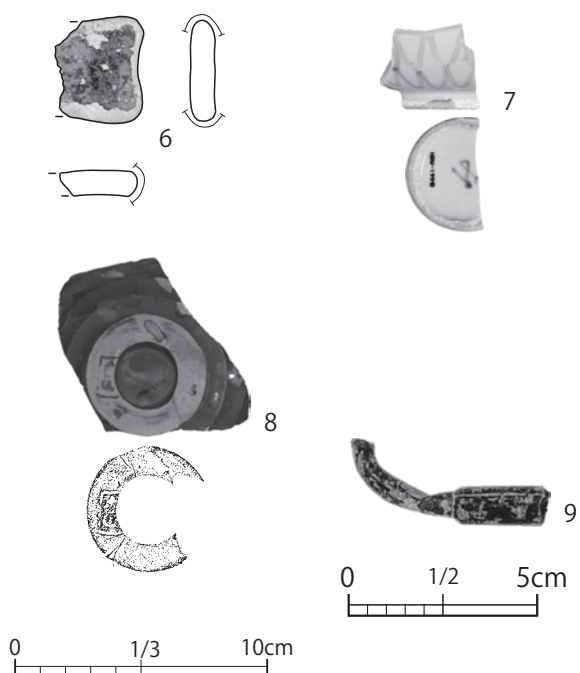
128号遺構



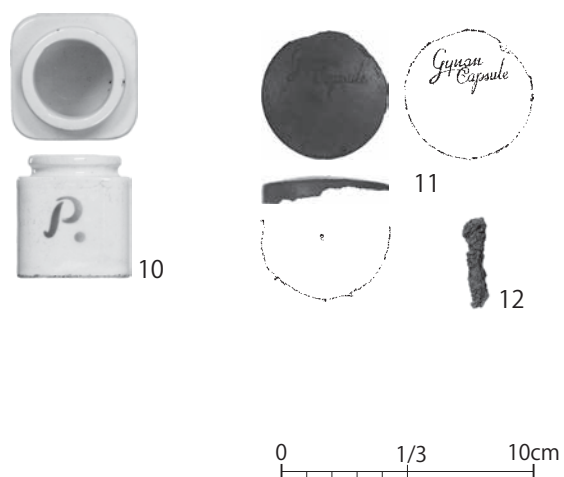
4号遺構



199号遺構



200号遺構



第 162 図 近代の遺物 (17: 2/3・1/2・1/3・1/4)

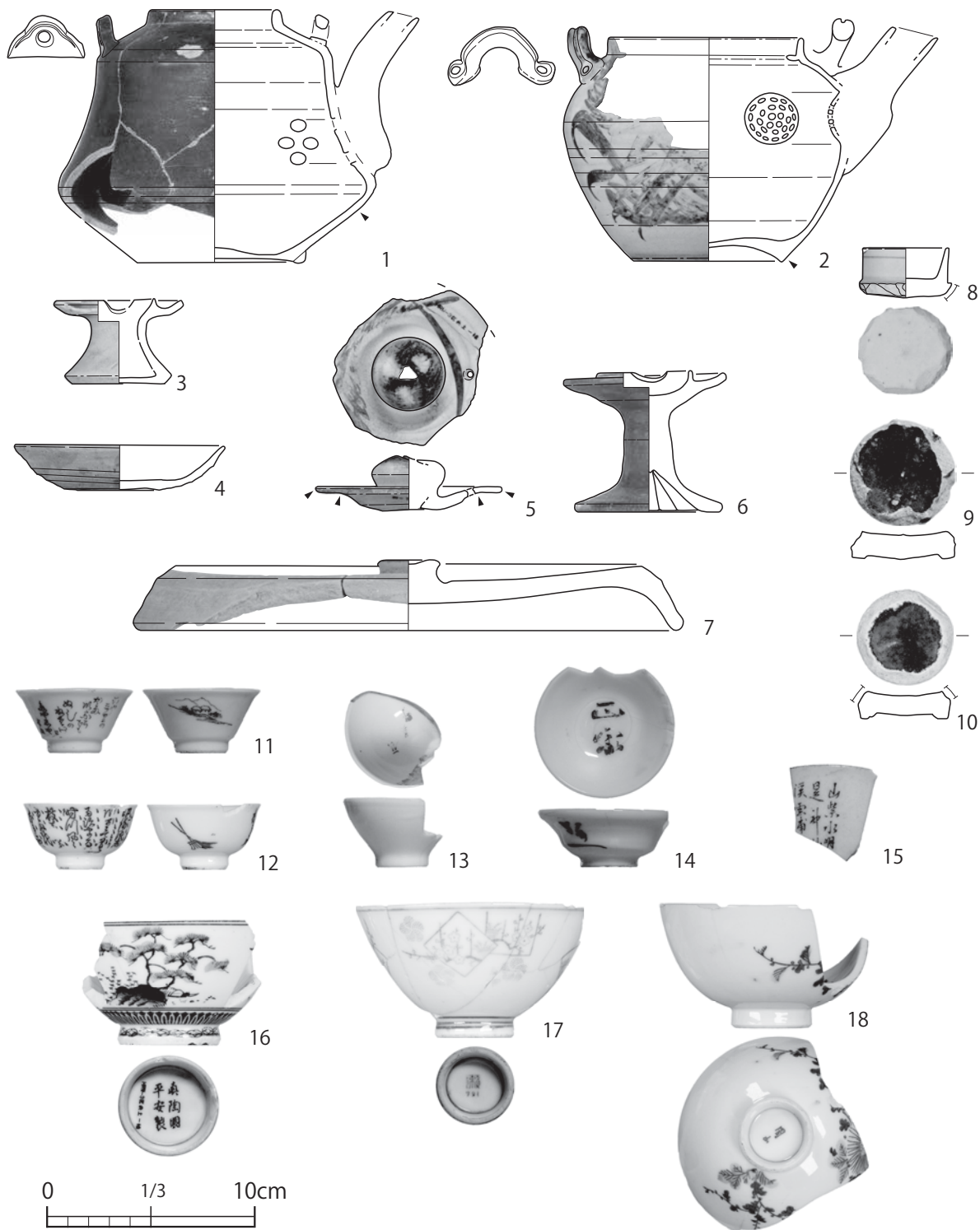
包含層



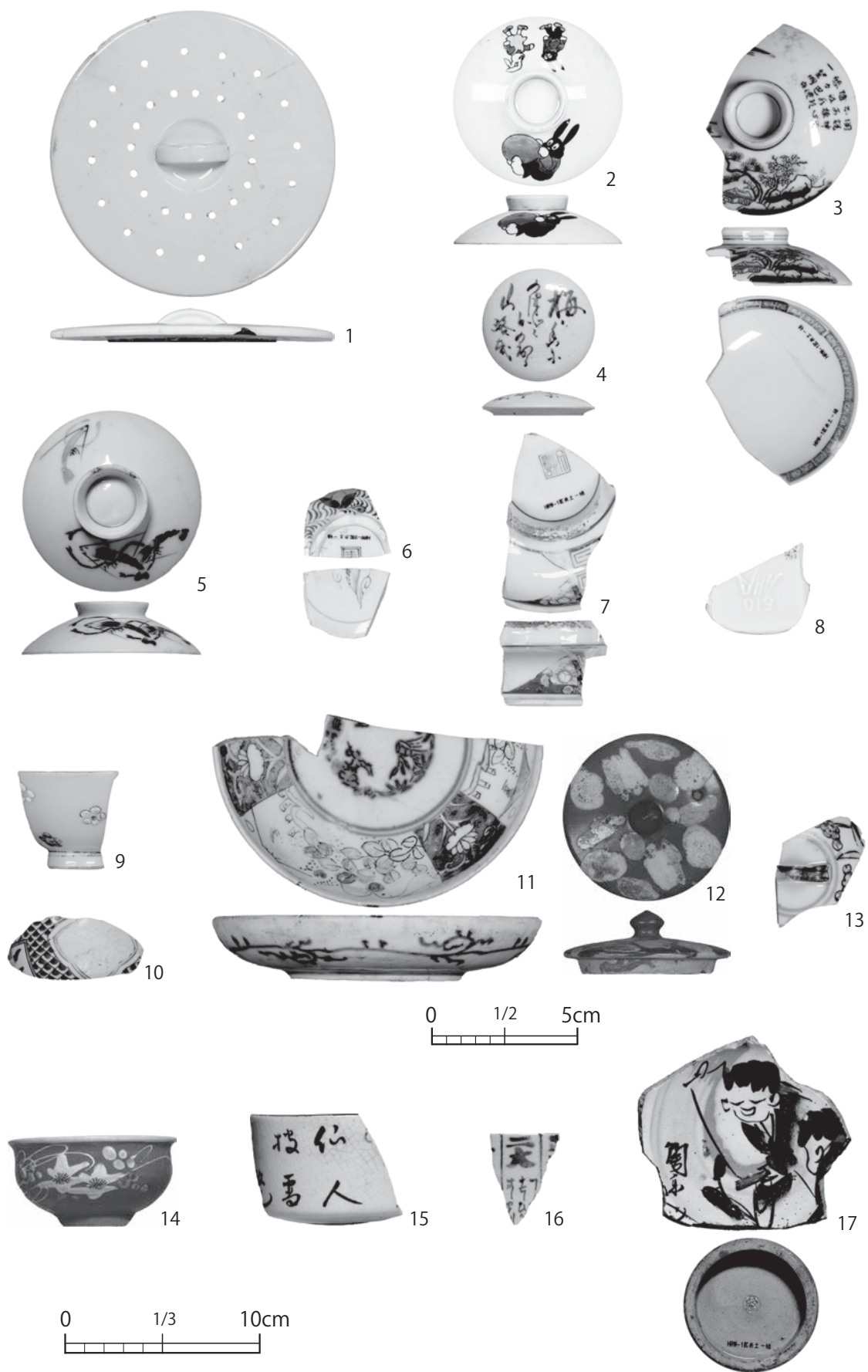
第 163 図 近代の遺物 (18 : 1/3)

3：「IRON STONECHINA / KANAZAWA / NIPPON KOSHITU TOKI Co. / MADE IN JAPAN」、灰皿（第 167 図-4：「TOYO TOKI / KOKURA / JAPAN」東洋陶器）、小壺（第 167 図-5：「蒲焼」「やっこ／電(84)九八八六-八」）、容器（第 167 図-8：統制番号「岐／783」体部陽刻「610 / AHA」、第 167 図-6：統制番号「岐 690」ウテナ商標）である。

陶器は、杯（第 170 図-2）、碗（第 165 図-14、15、16、第 166 図-4：統制番号「品／50」、5：

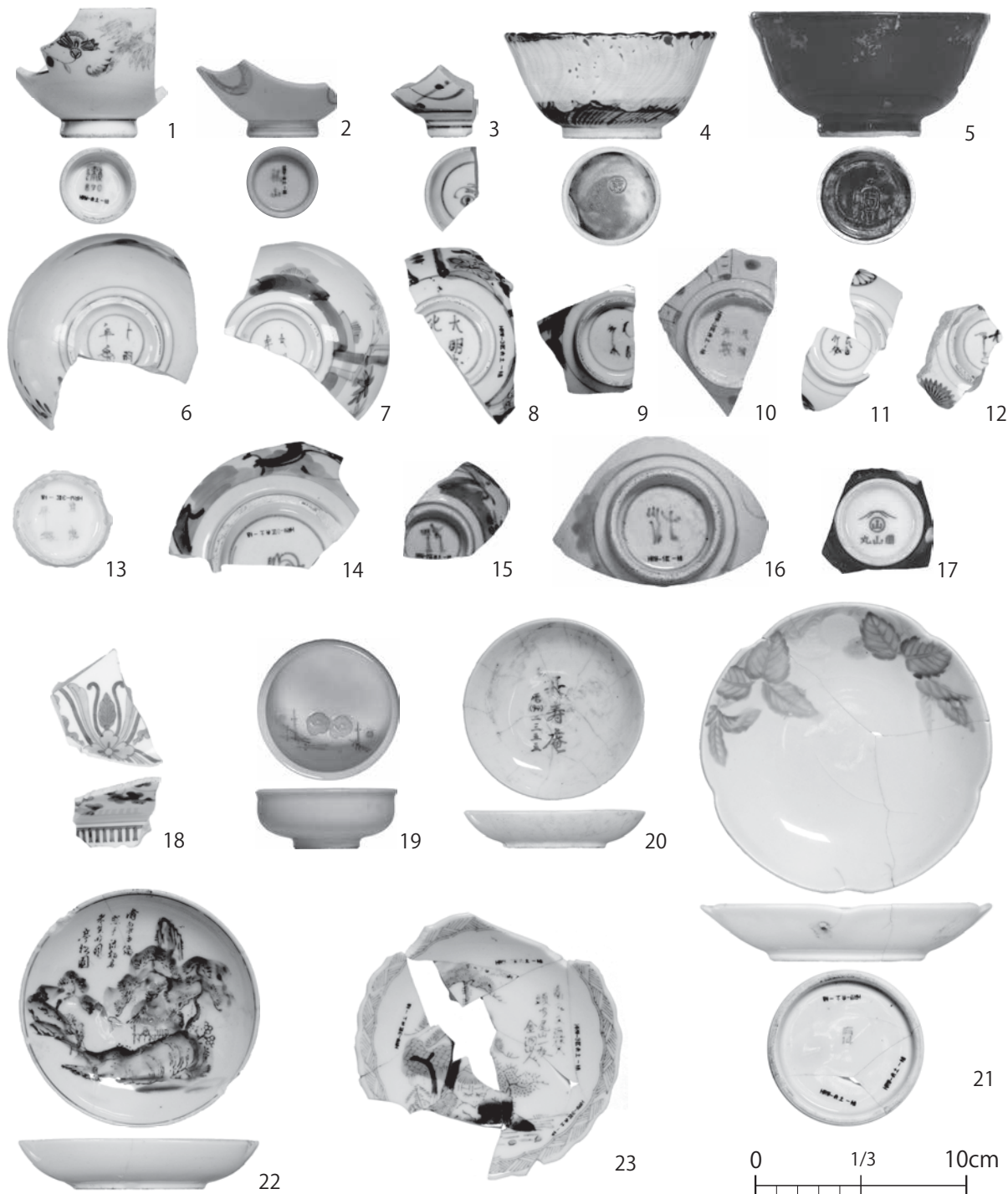


第 164 図 近代の遺物（19：1/3）



第 165 図 近代の遺物 (20 : 1/2 ・ 1/3)

統制番号「岐／81」、第169図-1：底部刻印「清水」、鉢（第163図-9）、皿（第165図-17：統制番号「品／180」）、皿ないしは碗蓋（第163図-7：鎧手）、鉢（第163図-10：三島手）、香炉（第165図-11）、瓶（第163図-12：ぺこかん徳利、第167図-9：「幹山」、10・11：「原平」、第168図-2：釘書「内定」、3：山に「舎」、4：山に「赤」、5：「定」、6：窠書「本」、7）、土瓶（第164図-1、2）、花瓶（第167図-12）、壺（第168図-1：「日本アルプス」）、水注（第168図-9）、甕（第169図-5）、急須（第169図-6：角杵刻印「萬古」）、容器（第168図-10：統制番号「岐／674」）、灯明皿（第164図-3）、灯明受皿（第169図-3）、脚付灯明受皿（第164図-4）、蓋（第164図-5、



第166図 近代の遺物（21：1/3）

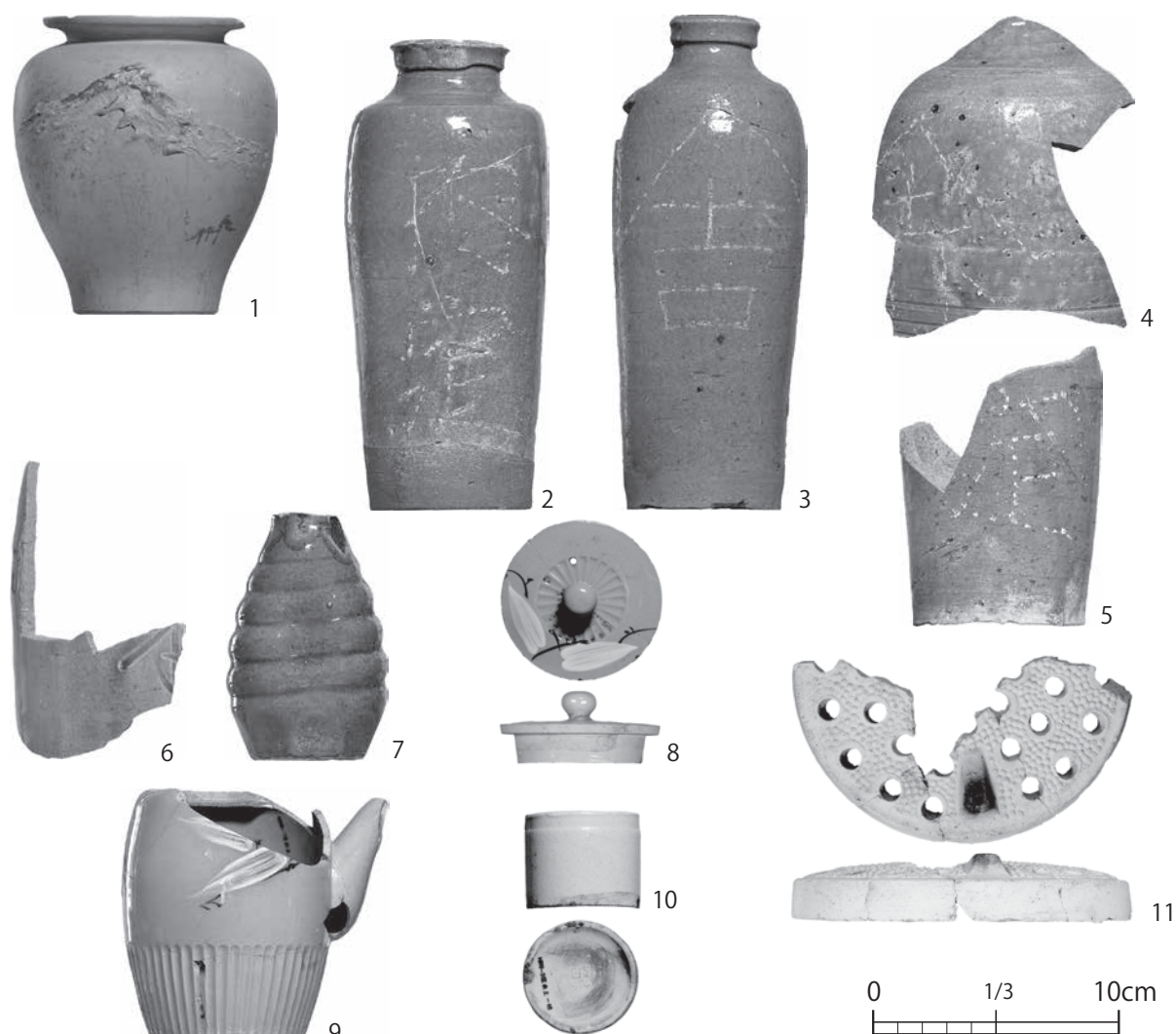


第 167 図 近代の遺物 (22 : 1/3)

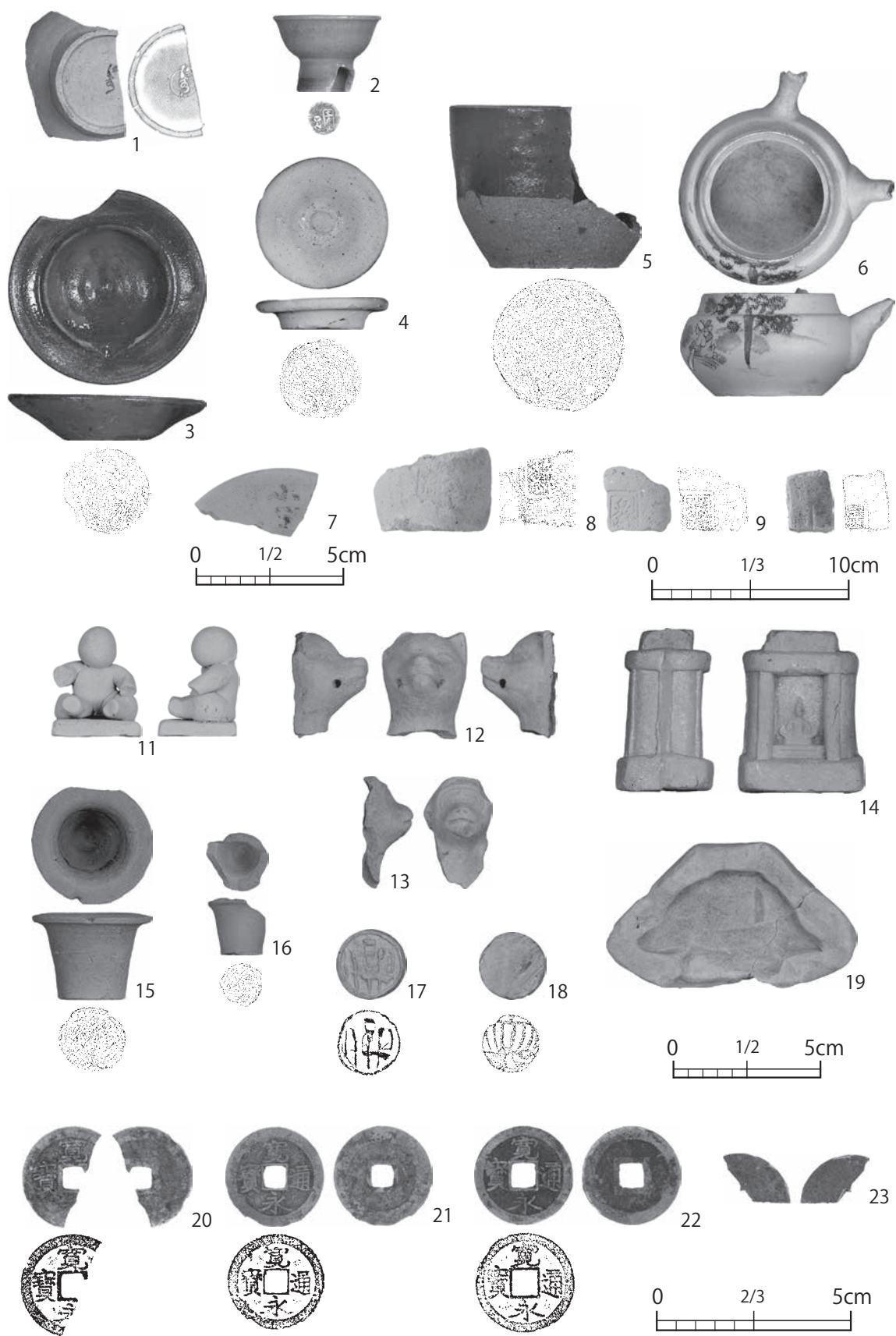
第 168 図 -8)、壺蓋 (第 169 図 -4)、転用品 (第 164 図 -9・10: 天目碗破片) である。

土器は、焼塩壺 (第 169 図 -8:「□□伊織」、9:「泉州□□」、10:山形「正」「堺□」)、脚付灯明受皿 (第 164 図 -6)、火消壺蓋 (第 164 図 -7)、さな (第 168 図 -11)、「かわらけ」墨書 (第 169 図 -7:「小■」) である。

磁器碗蓋 (第 165 図 -2) は、1933 (昭和八) 年から 1938 (昭和十三) 年まで講談社の『婦人倶楽部』に長期連載された田河水泡「凸凹黒兵衛」に登場する黒うさぎ (黒兵衛) と白うさぎ (白ちゃん) が描かれている (高橋 1982、山口 2013)。硬質陶器製の灰皿 (第 167 図 -4) には「TOYOTOKI / KOKURA / JAPAN」の裏印があり、1917 (大正六) 年に設立された東洋陶器株式会社 (現: TOTO) の製品である。洋食器の皿破片 (第 167 図 -1) の裏印は、「SC / 岐 1163」と統制番号が記されている。統制番号から 1940 (昭和十五) 年から 1946 (昭和二十一) 年までの松風陶器株式会社の製品であることが確かめられる。花柄の皿 (第 167 図 -2) の「M / JAPAN」の裏印は、ノリタケの「桜印グリーン」と呼ばれるもので、1924 (大正十三) 年から 1941 (昭和十六) 年にかけて主にアメリカ向け輸出製品として製作された。洋食器の皿 (第 167 図 -3) は、「(IMPERIAL) IRONSTONE CHINA / NIPPON KOSHITU TOKI Co. / MADE IN JAPAN」の裏印があり、1908 (明治四十一年) 年に金沢市



第 168 図 近代の遺物 (23: 1/3)



第 169 図 近代の遺物 (24 : 2/3 ・ 1/2 ・ 1/3)

長町で創業された日本硬質陶器（現：ニッコー株式会社）の製品である。

土製品は、人形（第 169 図 -11）、動物（第 169 図 -12：狐頭部、13：猿頭部）、建造物（第 169 図 -14：祠）、容器（第 169 図 -15・16：植木鉢ミニチュア）、泥面子（第 169 図 -17・18）、型（第 169 図 -19：天神の胴部）である。

金属製品は、銭貨で古寛永（第 169 図 -20～23）、新寛永（第 170 図 -1、2：「文」）である。煙管は、



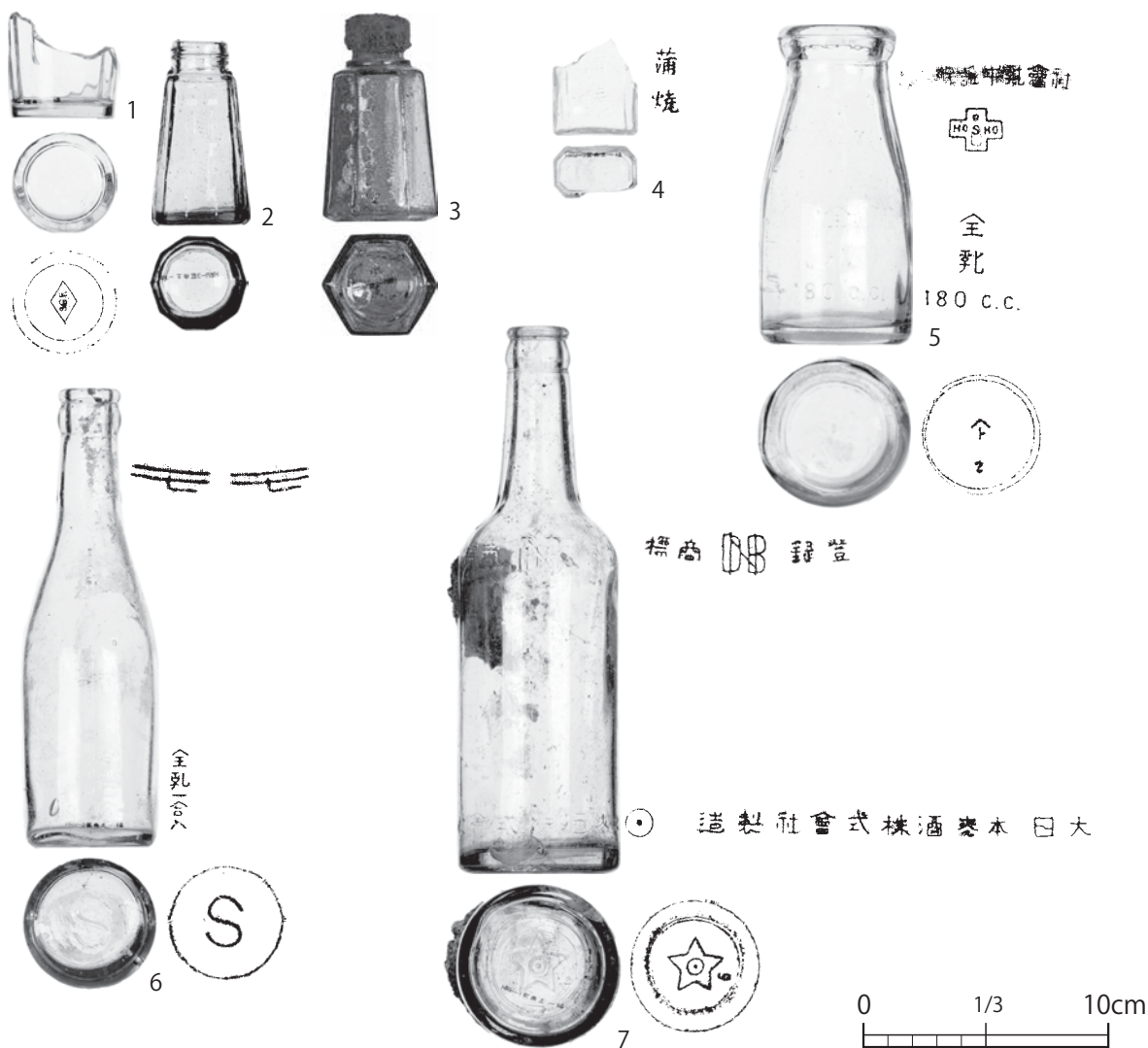
第 170 図 近代の遺物（25：2/3・1/2・1/3）



第 171 図 近代の遺物 (26 : 1/3)

雁首（第 170 図 -3：真鍮製条線装飾、4～7）、吸口（第 170 図 -8～10）である。ほかに携帯式歯ブラシ（第 170 図 -11：開閉できず（341 頁：写真 -2））、金具（第 170 図 -12）、ボタン（第 172 図 -13：陽刻「中」）、錠剤ケース（第 170 図 -14：「住友化学工業株式会社」「ネオンロケ□」）、把手（第 170 図 -15）である。

ガラス製品は、文具はインク壺（第 170 図 -17：底部陽刻「登録」「M」丸善、18：胴部陽刻「S.S.S FOUNTAIN PEN INK.」サンエス万年筆本舗）、薬品（第 170 図 -19：小林製薬株式会社、20：胴部陽刻「コデチン」底部陽刻「OHKI」、21：側面陽刻「BLUTOSE」底部陽刻「500」藤澤友吉商店；現アステラス製薬、第 171 図 -1：胴部陽刻「BIOFERMIN」「KHL」底部陽刻「Y 29」ビオフェルミン製薬株式会社、2：胴部陽刻「薬液ハルナー」橋本ケミカル合資会社、3：胴部陽刻「安川コロダイン」安川晃栄堂、4：底部陽刻「T5 / A & M」）、化粧品 5：底部陽刻「KNK v 「4」 株式会社カネカ、6：底部陽刻「○に王 4 v、7：底部陽刻「◇に N」日本硝子記号、柳屋商標「K」柳屋本店、8：底部陽刻「アイデア（ル）」株式会社高橋東洋堂；現株式会社コンテス、9：胴部陽刻「OSOME ELEGANCE HAIR=OIL」底部陽刻「意匠登録」、10：底部陽刻、11：底部陽刻「KINTSURU PERFUMERY CO.,LTD. MADE IN JAPAN 5411」金鶴香水株式会社；現株式会社マンダム、12：底部陽刻「資生堂商標：花椿」、



第 172 図 近代の遺物（27：1/3）

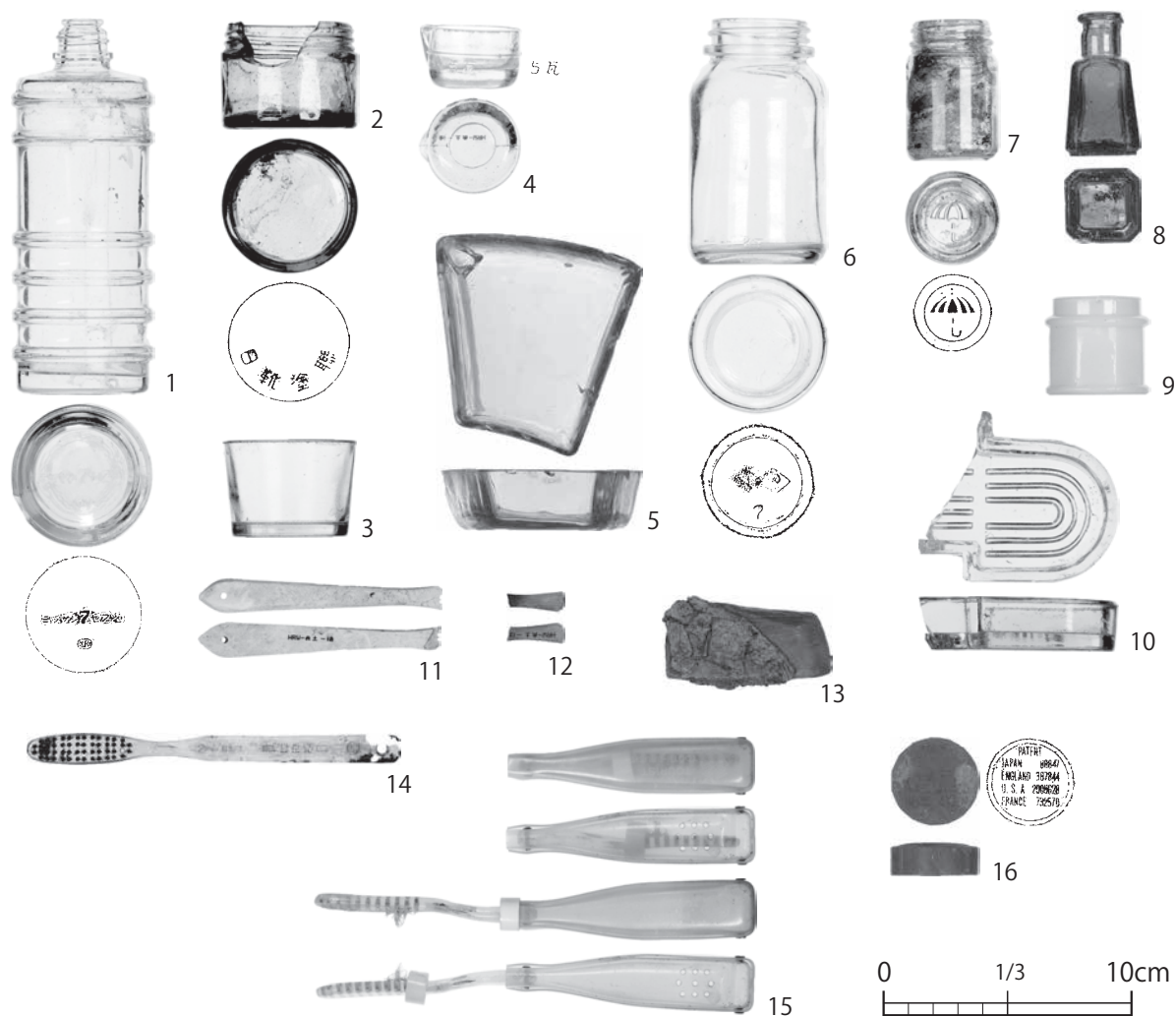
13、14：底部陽刻「カネボウ」鐘淵紡績株式会社；現カネボウ化粧品、15：胴部プリント「Make-up Base LIQUID FOUNDATION」「Kiss Me」「THE ISEHAN&Co.,LTD.」「PAT127330」株式会社伊勢半、16、17、18）、食品（第172図-1：底部陽刻「◇に S.G.F」、2、3、4：「蒲焼」）、飲料（第172図-5：胴部陽刻「東京保証牛乳會社」「180c.c.」ほか東京保証牛乳株式会社；現雪印メグミルク株式会社、6：胴部陽刻縦書「全乳一合入」底部陽刻「S」、7：胴部陽刻「登録商標 DNB 商標」「大日本麥酒株式会社製造」ほか）、日用品（第173図-1：底部陽刻「ニッサン7セブン」ほか、2：底部陽刻「日靴塗聯」靴クリーム）、食器（第173図-3、5）、調理器具（第173図-4）、用途不明（第173図-6、7：底部陽刻「こうもり傘のマーク」、8、9、10）である。

骨角製品は歯ブラシ（第173図-11・12）、木製品は板片に金属板が付着する（第173図-13）。

合成樹脂製品は、歯ブラシ（第173図-14：「No.1」右書き「東京 資生堂 銀座」左に縦書き「露毛」右に資生堂商標、15：地球儀の商標「TOURIST / TOOTH-BRUSH；折りたたみ式携帯用）、蓋（第173図-16：「PATENT JAPAN 88847 ENGLAND 367844 U.S.A 2008620 FRANCE 732570」など）である。

包含層出土の‘かわらけ’総数は、5,390点（25,076g）である。最小個体数は、215点である。

包含層出土の土玉総数は、171点（410g）である。大きさ（直径）が計測可能な完形・ほぼ完形



第173図 近代の遺物（28：1/3）

の土玉は 64 点 (175g) で、計測不可の破損土玉は 107 点 (235g) である。

・部材

瓦は、丸瓦 (第 174 図 -1)、軒丸瓦 (第 174 図 -2)、平瓦 (第 174 図 -3: 角粋「柴□ (宕) カ」) である。碍子は、円筒形 (第 174 図 -5: 「○に K 1951」)、板状 (第 174 図 -6: 「登録商標 Y 10A 250V」)、円形 (第 174 図 -7: 「1A250. 3A125V. TDK PAT.NO>165778」) である。陶製染付便器の把手部分破片 (第 174 図 -8) である。



第 174 図 近代の遺物 (29: 1/3・1/4)

かつて大塚窪町に所在していた音楽学校の金属製看板（第 174 図 -4）が出土した。「大塚窪町」は、調査区から 600m ほど西方の大塚 3 丁目に該当し、現在の都道 437 号線（不忍通り）にはかつて市電 16・17 系統の「大塚窪町」停留場が存在していた。

＊小括

礎石群は、一間（1.8m）の柱間で北東－南西方向に 2 列（124 号－130 号－73 号、128 号－131 号）、両列の間の北西－南東方向は三間（5.4m）となる。1901 年建設の学生宿舎（備中館）ないしは 1950 年～1968 年の裁判所平屋官舎に伴う礎石と考えられる。

28 号遺構の木製アンカーおよび 234 号遺構の石製アンカーは、調査区西側に埋設式の支線アンカーを必要とする電柱など何らかの施設が存在したことを暗示する。

ヒューム管列による導水管（199 号遺構・200 号遺構）は、214 号遺構（近世 2 期上水路）とほぼ重複するように構築されており、近世以降同じような場所で同じような方向の導水利用がなされていたことが伺える。

出土した洋食器には、占領期に輸出用商品に記載が義務付けられていた「MADE IN OCCUPIED JAPAN」の表記がなされており、当地を接収したとされる GHQ との関連が伺われる。

第 16 表 近代 陶磁器・土器掲載資料

図版番号	出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ径 (mm)	成形技 法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第 146 図	1	134 号	磁器	絵具 皿	瀬戸・ 美濃	35 × 20	19	33 × 19		型	白磁		岩絵具皿 底部陽刻「鳩居堂製」	19C 後～
第 146 図	2	134 号	陶器	碗	不明	(74)	84	40		轆轤	灰釉		京都か 轆轤目・削り痕 顕著 内外面一部ピンク 基筈底	18C 代
第 146 図	3	134 号	陶器	瓶	京都・ 信楽	22	100	(42)	71	轆轤	灰釉 鉄絵・色絵 橙 ・金彩	外面柿文		19C 後～
第 146 図	4	134 号	土器	火鉢 蓋か		205	39	—		板作り ・輪積	表面赤漆		上面孔 2	
第 146 図	5	134 号	磁器	紅猪 口	肥前	80	36	25		轆轤	染付・色絵	外面草花文・ 文字文		18C 代
第 146 図	6	134 号	磁器	坏	瀬戸・ 美濃	(90)	60	34		轆轤	染付	外面文様	口縁外反 底部銘「□」	19C 後～
第 146 図	7	134 号	磁器	碗	不明	108	59	39		轆轤	染付		底部銘「硬質陶器 / マー ク / MEJITOKI」	19C 後～
第 146 図	8	134 号	磁器	碗	瀬戸・ 美濃	123	65	48		轆轤	染付	外面山水文 / 波文 内面口 縁文様帯	底部銘「六江製」	19C 後～
第 146 図	9	134 号	磁器	碗	瀬戸・ 美濃	—	54	37		轆轤	染付・色絵	外面文様	口縁外反底部銘「平八園」	19C 後～
第 146 図	10	134 号	磁器	碗蓋	瀬戸・ 美濃	(28)	28	(84)		轆轤	染付	端反碗蓋 天 井文字文「□ × / 東× / 九十」	内面銘「成化 / □□」	19C 前
第 146 図	11	134 号	磁器	皿	名古屋	—	26	—		轆轤			統制陶器 底部銘「名 / 21」	1940～ 1945 年
第 146 図	12	134 号	磁器	鉢	肥前	—	(44)	64		轆轤	染付・色絵	外面区画漢詩 文 / 山水文	底部銘「大□ (明) 年□ (製)」	18C 代
第 146 図	13	134 号	磁器	鉢	瀬戸・ 美濃	116	47	48		轆轤	染付・色絵	内外面菖蒲文	輪花	20C 代
第 146 図	14	134 号	磁器	鉢	不明	(152)	72	(60)		轆轤	色絵・人造コバ ルト (緑)			20C 代
第 146 図	15	134 号	磁器	片口	不明	(128)	48	56		轆轤	染付・青磁釉・ 青釉	外面角蓮弁文	銘文 底部「林町 / 和泉 屋酒店」	19C 後～
第 146 図	16	134 号	磁器	銚子	不明	96	107	68	124	轆轤	染付・色絵	体部松文		20C 代
第 146 図	17	134 号	磁器	銚子	不明	64	100	62	109	轆轤	染付・色絵	体部窓絵 (竹) 文・松・梅文		20C 代
第 146 図	18	134 号	磁器	碗蓋	不明	104	28		36		染付・色絵	天井柿文		20C 代
第 146 図	19	134 号	磁器	蓋	瀬戸・ 美濃	60	24		10 / 77	轆轤	染付・色絵	天井文様	かえしあり	20C 代
第 147 図	1	134 号	磁器	カップ	京都	72	100	50		轆轤	緑釉		松風工業株式会社「Shofu china」	20C 中～
第 147 図	2	134 号	磁器	カップ	京都	72	101	50		轆轤	ピンク		松風工業株式会社「Shofu china」	20C 中～
第 147 図	3	134 号	磁器	カップ		(96)	55	52		轆轤		外面花文	三郷製陶株式会社「FUJI CHINA / マーク花輪・富 士山 / MADE IN OCCUPIED JAPAN」	1945～ 1952 年
第 147 図	4	134 号	磁器	カップ	名古屋	—	(25)	50		轆轤			底部マーク王冠橋 「MEITO」	20C 中～
第 147 図	5	134 号	磁器	カップ	岐阜	—	51	50		轆轤		外面文様	三郷製陶株式会社 花輪 「SANGO CHINA」	1932 年 ～
第 147 図	6	134 号	磁器	カップ	肥前	89	59	(48)		轆轤	瑠璃釉・色絵	外面水仙文	深川製磁 富士山	19C 末～
第 147 図	7	134 号	磁器	皿	名古屋	140	30	80		轆轤		内面竹文	エンタシス「NA □□□ □ (RUMI)」	20C 中～
第 147 図	8	134 号	磁器	皿	岐阜	—	38	92		轆轤		内面花文	三郷製陶株式会社 「SANGO / JAPAN」	20C 中～
第 147 図	9	134 号	磁器	皿	京都	—	—	—		轆轤		内面花文	「KYOTO CHINA / 角枠 「LANCASTER」 / 7202 / JAPAN」	20C 中～
第 147 図	10	134 号	磁器	ソー サー	肥前	145	22	77		轆轤	瑠璃釉・色絵	内面水仙文	深川製磁 富士山	19C 末～
第 147 図	11	134 号	磁器	皿	肥前	260	29	153		轆轤	色絵	内面稲穂文	深川製磁 底部ハリ 1 底 部マーク富士山	19C 末～
第 147 図	12	134 号	磁器	皿	岐阜	—	—	—		轆轤		外面文様	三郷製陶株式会社 花輪 「SANGO CHINA」	1932 年 ～
第 147 図	13	134 号	磁器	皿		120	13	94		轆轤		外面薔薇文	王冠「IMPERIAL / CHINA / OCCUPIED JAPAN」	1945～ 1952 年
第 147 図	14	134 号	磁器	鉢	肥前	(124)	51	56		轆轤	瑠璃釉・色絵	内外面葉文	深川製磁 輪花 富士山 ※深川製磁	19C 末～
第 147 図	15	134 号	磁器	皿	不明	45	13	42		轆轤	人造コバルト (緑)		角皿 醬油入れ 体部「横浜駅 / 崎陽軒の シウマイ」	1955 年 ～

図版番号		出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ径 (mm)	成形技法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第 147 図	16	134 号	磁器	瓶	不明	12	21	37	48	轆轤	染付			瓢箪型醬油差しひょう ちゃん(顔・魚取り)	
第 148 図	1	134 号	陶器	碗	不明	56	82	40			透明釉・瑠璃釉	淡黄褐		筒形碗	20C 代
第 148 図	2	134 号	陶器	德利	瀬戸・ 美濃	37	201	79	106	轆轤	灰釉	暗灰		体部烈点釘書 屋号「上 / □白」	18C 後 ~19C 前
第 148 図	3	134 号	陶器	汽車 土瓶	不明	36	80	65		型合わせ	胎釉			体部箱形 断面四角形 体部動輪マーク(鉄道省)	20C 前
第 151 図	1	28 号	磁器	碗	瀬戸・ 美濃	77	36	31		轆轤	クロム青磁		外面鎔縞文		19C 後 ~
第 151 図	3	123 号	磁器	酒坏	瀬戸・ 美濃	20	30	56		轆轤	染付		外面条線文	見込み「銘酒 / 金婚 / キ ンコン」	19C 後
第 151 図	4	123 号	磁器	皿	不明	—	(20)	(100)		轆轤	白磁			「□□□硬質陶器 / マー ク / Tashiroseitosyo/ 意・ 登 56865」	19C 末 ~
第 151 図	5	123 号	陶器	碗	不明	50	74	40		轆轤	透明釉・青・緑 ・赤			高台端部施釉 体部水仙 か	20C 代
第 151 図	6	123 号	陶器	汽車 土瓶	不明	40	88	80		型合わせ	黄釉			体部箱形 断面四角形 体部動輪マーク(鉄道省)	20C 前
第 153 図	3	233 号	磁器	カッ プ	愛知	—	(25)	46		轆轤				ノリタケ「SHELTON/ BONE CHINA/JAPAN」	20C 初 ~
第 153 図	4	233 号	陶器	蓋物	岐阜	(76)	24	(76)		轆轤	透明釉			統制陶器 「岐 / 46」	1940~ 1945 年
第 153 図	7	234 号	土器	植木 鉢		102	68	60		轆轤		暗灰		底部糸切痕	
第 154 図	1	239 号	磁器	碗	瀬戸・ 美濃	81	47	28		轆轤	染付・緑 銅板転写			人造コバルト	19C 末 ~
第 154 図	2	239 号	磁器	鉢	不明	107 × 95	50	40		轆轤	染付 銅板転写		見込み山水文	高台内銘	19C 末 ~
第 154 図	3	239 号	陶器	碗	瀬戸・ 美濃	(92)	59	40		轆轤	鉄釉	淡灰黄 褐		天目碗	18C 前
第 156 図	4	239 号	陶器	香炉	京都	86	54	82		轆轤	透明釉 呉須絵	淡灰黄 褐	外面葉文		18C 代
第 154 図	5	239 号	陶器	合子 蓋	京都・ 信楽	52/53	13			轆轤	透明釉 呉須絵	淡灰黄 褐	天井花文		18C 代
第 154 図	6	239 号	土器	七厘		220	200	170		板作り ・輪積		淡灰白 褐		鍋受け突起の剥落痕 4 さな受け 4	
第 154 図	7	239 号	磁器	小坏	瀬戸・ 美濃	56	31	22		轆轤	染付		外面文字文		19C 後 ~
第 154 図	8	239 号	磁器	碗	肥前	—	(20)	42		轆轤	染付		外面文様	「大明年製」	18C 代
第 154 図	9	239 号	磁器	碗	美濃	(100)	52	30		轆轤	染付			「岐 / 304」	1940~ 1945 年
第 154 図	10	239 号	磁器	碗	瀬戸・ 美濃	97	54	33		轆轤	染付			端反碗	19C 前
第 154 図	11	239 号	磁器	碗	瀬戸・ 美濃 か	110	57	36		轆轤	染付・色絵		外面縞文	「陶山園」	20C 前 ~
第 154 図	12	239 号	磁器	碗	岐阜	92	48	30		轆轤				統制陶器 「岐 / 139」	1940~ 1945 年
第 154 図	13	239 号	磁器	碗	瀬戸・ 美濃	(56)	60	34		轆轤	色絵		外面文字文 「寿」		20C 前
第 154 図	14	239 号	陶器	碗	不明	64	62	32	73	型合わせ	灰釉・鉄釉		外面達磨文・ 文字文	陽刻	20C 代
第 154 図	15	239 号	洋物	ポッ ト	不明	68	111	59	116		色絵		外面薔薇文	洋漆器	19C 後 ~
第 154 図	16	239 号	磁器	カッ プ	不明	—	(37)	44		轆轤				「第一硬質・磁器 / マー ク折鶴 / DAI・ITTO」	20C 中 ~
第 155 図	1	239 号	洋物	皿	不明	208	25	118		轆轤	人造コバルト			洋漆器 高台端部無釉	19C 後 ~
第 155 図	2	239 号	磁器	鉢	瀬戸・ 美濃	156	67	70		轆轤	灰釉・鉄釉		外面文字文 「福寿」・松葉 文・見込み松 葉文	輪花 □鎔	19C 後 ~
第 155 図	3	239 号	磁器	瓶	美濃	12	112	50		型	クロム青磁			統制陶器 底部陽刻銘 「岐 / 8 □□」	1940~ 1945 年
第 155 図	4	239 号	磁器	容器	美濃	50	53	42			白磁			統制陶器 底部陽刻銘 「岐 / □ (2) □ (7)」	1940~ 1945 年
第 155 図	5	239 号	磁器	容器	美濃	67	52	62			白磁			底部陽刻桜マーク	1940~ 1945 年
第 155 図	6	239 号	磁器	容器	美濃	68	49	61			白磁			統制陶器 底部陽刻銘 「岐 / □ 62」	1940~ 1945 年
第 155 図	7	239 号	陶器	容器	不明	(52)	36	(72)			透明釉			メヌマボマード 体部「MENUMA P ×」	20C 中 ~
第 155 図	8	239 号	陶器	挿鉢	瀬戸・ 美濃	157	65	72		轆轤	鉄釉	乳白		卸目 25 本 / 条	19C 後 ~
第 155 図	11	239 号	ホー ロー	カッ プ		92	60	52						「TOKYO / マーク / M.T.H.&」	

図版番号	出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ径 (mm)	成形技 法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第 162 図	1	67 号 356	土器	皿		77	14	44			淡褐		底部糸切痕 口縁タール 付着	
第 162 図	6	199 号	陶器	甕	瀬戸・ 美濃	40	(31)	11		轆轤	鉄釉		外周所り 半胴甕の転用	19C 前
第 162 図	7	199 号	磁器	碗	肥前	—	(34)	44		轆轤	染付	外面二重網目 文	くらわんか碗「□」 高 台砂粒付着	17 末～ 18C 後
第 162 図	8	199 号	陶器	碗	瀬戸・ 美濃	—	(41)	48		轆轤	灰釉・鉄釉	灰	蛇の目高台 刻印「□山」	18C 代
第 162 図	10	200 号	陶器	化粧 瓶	不明	36	49	55		透明釉・青釉			株式会社バビリオ 体部 箱形 体部マーク「P」 伊藤胡蝶園 (SS 創業)	20C 後

第 17 表 近代 土製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	種別	器種 モチーフ	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	備考
第 153 図	8	234 号	動物形	烏	—	—
第 155 図	9	239 号	器物	蓋	49.2	12.8
第 155 図	10	239 号	型	兵隊	51.2	37.7
						キラ付着

第 18 表 近代 金属製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	種別	材質	長さ (銭径) (mm)	高さ (孔径) (mm)	重量 (g)	備考
第 148 図	4	134 号	吸口	鉄	81.4	—	16.3
第 148 図	5	134 号	吸口	銅	75.2	—	11.3
第 148 図	6	134 号	ボタン	銅	11.0	23.2	3.7
第 148 図	7	134 号	ボタン	銅	13.4	23.7	4.3
第 148 図	8	134 号	ボタン	銅	11.0	24.0	4.5
第 148 図	9	134 号	ボタン	銅	12.0	24.0	4.7
第 152 図	17	135 号	佃煮瓶盖	鉄	58	—	12.3
第 153 図	9	234 号	把手金具	銅	35.2	17.0	5.8
第 155 図	12	239 号	金具	銅	32.2	68.7	25.5
第 162 図	2	128 号	寛永通宝(新)	銅	25.4	5.8	3.3
第 162 図	9	199 号掘方	雁首	銅	51.5	21.8	6.1

第 19 表 近代 石製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	器種	石材	長さ 長軸 (mm)	幅 短軸 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第 148 図	10	134 号	硯	粘板岩	123.4	63.5	16.6	236.1
								略完形の方形の硯 丘部分の縁が一部欠損する

第 20 表 近代 ガラス製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	器種	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第 149 図	1	134 号	文具	各 35	37	102	313
第 149 図	2	134 号	文具	35	46	51	254.5
第 149 図	3	134 号	文具	10	52	24	28.3
第 149 図	4	134 号	文具	43	42	44	68.2
第 149 図	5	134 号	文具	27	69	53	100
第 149 図	6	134 号	薬品	5	164	62	266
第 149 図	7	134 号	薬品	8	107	34	82.8
第 149 図	8	134 号	薬品	12	56	10	4.4
第 149 図	9	134 号	薬品	55	13	—	4.6
第 149 図	10	134 号	不明	18	78	32	57.2
第 149 図	11	134 号	化粧品	—	※ 77	56	96
第 149 図	12	134 号	化粧品	10	113	49	110
第 149 図	13	134 号	化粧品	8	135	57	165.4
第 149 図	14	134 号	化粧品	12	123	54	134.3

図版番号		出土 遺構	器種	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第 149 図	15	134 号	化粧品	11	164	79	348	色調無色 口縁スクリュー 「柳屋□ヤートニック」360cc 「□式会社柳屋本□」 柳屋マーク 3 株式会社柳屋本店 柳屋ヘヤートニック
第 149 図	16	134 号	化粧品	42	63	44	149.9	色調白 口縁スクリュー 「KNK」K2 株式会社カネカ
第 149 図	17	134 号	化粧品	51	53	36	165.2	色調白 口縁スクリュー プラスチック蓋 (柳屋マーク 「YANAGIYA」) 付 柳屋マーク S.28 蓋直径 60mm 株式会社柳屋本店
第 149 図	18	134 号	化粧品	61	63	44	127.3	色調白 口縁スクリュー 柳屋マーク N4 株式会社柳屋本店
第 150 図	1	134 号	食品	[62]	[92]	50	168.7	色調無色 口縁スクリュー 金属蓋付 「王冠印ピーナッツバター 1/2 ポンド」
第 150 図	2	134 号	食品	25	86	34	96.5	色調無色 口縁スクリュー 「玉露園」 玉露園食品工業株式会社
第 150 図	3	134 号	調味料	21	62	38	71.3	色調無色 口縁内側スクリュー ヒゲタマーク 「ヒゲタしょうゆ」 マーク (3 つの S が入ってい る) ヒゲタ醤油株式会社
第 150 図	4	134 号	調味料	35	96	40	142.6	色調無色 口縁スクリュー 「AICHI TOMATO CO.」57 カゴメマーク 愛知トマト株式会社 (現 カゴメ株式会社)
第 150 図	5	134 号	飲料	26	70	28	75.2	色調無色 口縁紙蓋 シロタマーク Yakult ロゴ 「醗酵乳 生菌ヤクルト®」 33.11 30G 第一 硝子マーク 株式会社ヤクルト本社 ヤクルト (乳酸菌飲料)
第 150 図	6	134 号	日用品	[53]	[39]	50	94.9	色調無色 口縁スクリュー 金属蓋付 VIOLA ロゴ 品川油化研究所 ヴィオラ靴クリーム
第 150 図	7	134 号	日用品	[53]	[41]	52	83.9	色調無色 口縁スクリュー 金属蓋 (Columbus Shoe Polish 男性の肖像のマーク) 付 株式会社 コロンパス 靴磨き
第 150 図	8	134 号	日用品	7	83	40	76	色調無色 口縁スクリュー 「ORGAN」 オルガンオイル (ミシンオイル)
第 150 図	9	134 号	灰皿	149	45	112	442	色調モスグレー 底部裏面に立体的なユリの陰刻 灰皿
第 150 図	10	134 号	不明	—	※ 74	56	78.7	色調無色 × □に N 15 の下に・ 50
第 150 図	11	134 号	不明	17	53	18	25.4	色調無色
第 150 図	12	134 号	不明	14	54	23	28.1	色調無色 口縁栓 円と円の中心に「※」、その周りに円環状に 6 つの「山」のようなマーク
第 151 図	10	127 号	調味料	34	85	40	134.2	色調無色 口縁金属蓋・スクリュー 金属中蓋縁部分付 「東京中野・食品工業株式會社」4 △ 食品工業株式会社 (現 キュービー株式会社) マヨネーズ
第 151 図	11	133 号	玩具	34	9	—	11.2	色調青 花の絵 おはじき
第 153 図	2	202 号	日用品	24	43	28	37.9	色調無色 口縁スクリュー 「みやこ染 (こは変体仮名)」 桂屋 (現 桂屋ファイングッズ株式会 社) みやこ染 (家庭用染料)
第 153 図	5	233 号	化粧品	—	※ 71	23	82.7	色調無色 「ホーカー液」「堀越」 四 堀越嘉太郎商店 ホーカー液 (美顔料)
第 153 図	6	233 号	日用品	57	67	55	164.8	色調オリーブ ライオン歯磨 (現 ライオン株式会社) 歯磨き粉
第 153 図	10	234 号	文具	18	40	47	38.1	色調無色 口縁栓 ○に文 インク
第 153 図	11	234 号	文具	16	40	35	35.7	色調無色 口縁栓 「実用新案 No3218」 M 丸善株式会社 (現 株式会社丸善ジュンク堂書 店) インク
第 156 図	1	239 号	薬品	15	67	18	19	色調無色 口縁栓 「やはぎ」「目薬」 やはぎ目乃薬 目薬
第 156 図	2	239 号	薬品	17	52	26	23.3	色調無色 口縁栓 「布田の眼薬」「根岸 薬王山」不老山 布田薬王寺 布田の目薬
第 156 図	3	239 号	薬品	29	45	38	79.3	色調水色 口縁印籠蓋 「内用 葉精」
第 156 図	4	239 号	薬品	29	150	65	269.1	色調薄青緑 口縁栓 C
第 156 図	5	239 号	薬品	13	57	34	34.7	色調褐色 口縁栓 「JUKAI SEIYAKUSHO」
第 156 図	6	239 号	薬品	8	97	41	40.3	色調無色 口縁栓 目盛付 (左右側面 2 箇所) 六角形に K マーク
第 156 図	7	239 号	薬品	18	115	38	68.3	色調無色 口縁栓 「鎮咳 [衣片に去] 痰」⑤ 「コデチン」目盛付 大木合名会社 (現 大木 製薬株式会社) コデチン (咳止めシロップ)
第 156 図	8	239 号	薬品	21	112	38	119.8	色調褐色 口縁栓 「OXYFUL オキシフル」82 三共製薬マーク 8 三共株式会社 (現 第一 三共株式会社) オキシフル (消毒用過酸化水素水)
第 156 図	9	239 号	薬品	38	94	48	126.8	色調無色 口縁スクリュー 「ZANDU」○に麦 ZANDU ZANDU Balm (鎮痛軟膏)
第 158 図	10	239 号	薬品	24	204	72	307	色調水色 口縁栓 「犬印」「大」犬印マーク 底部に臍状の凹みあり 小宗化学薬品株式会社 犬印試薬
第 156 図	11	239 号	化粧品	[18]	[128]	62	126.6	色調無色 口縁スクリュー 中蓋 (孔 1 つ) 付 菱形の連続模様 「GIAN」ロゴ Patent (鏡文字)
第 156 図	12	239 号	調味料	19	208	46	271	色調薄青緑 口縁栓 ⑩ 「ブルドッグソース」「BULLDOG SAUGE CO.LTD.」△ 10 × ブル ドッグソース株式会社 ソース
第 157 図	1	239 号	飲料	20	242	54	452.5	色調褐色 口縁栓 ⑤ 3 瓶内部からコルク片を発見
第 157 図	2	239 号	飲料	19	290	64	679	色調褐色 口縁栓 「BEE BRAND KOZAN WINE」「R.KONDO&CO. TOKYO」△に・ 1 販売: 近藤利兵衛商店 製造: 神谷傳兵衛 蜂印香竇葡萄酒 (甘味葡萄酒)
第 157 図	3	239 号	不明	13	68	28	26	色調無色 口縁栓 目盛付
第 157 図	4	239 号	調理器 具	147	38	102	348	色調水色 底部中央に四角錐状の小突起多数 裏面にドット状の滑り止め おろし器
第 157 図	5	239 号	玩具	26	11	—	5.4	色調白地にオレンジのマーブル コマ
第 157 図	6	239 号	不明	17	144	59	224.8	色調無色 口縁栓 「東京 杉本製」
第 157 図	7	239 号	不明	43	125	36	166.5	色調無色 口縁スクリュー 31
第 157 図	8	239 号	不明	22	81	45	122.7	色調無色 口縁スクリュー 「KATO」ロゴ

第 21 表 近代以降 骨角製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	種類	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴	
第 173 図	11	1 区表土一括	歯ブラシ	骨	—	13.9	5.3	6.2	頭部欠損
第 173 図	12	1 区表土一括	歯ブラシ	骨					頭部のみ 被熱か？

第 22 表 近代 合成樹脂製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	備考
第 150 図	13	134 号 歯ブラシ	157	11.3	「MADE □ WEST GERMANY T.K.I. DORLON PRODUCT」
第 150 図	14	134 号 歯ブラシ	157	12.5	花椿マーク「資生堂歯刷子」○に 40 株式会社 資生堂
第 150 図	15	134 号 歯ブラシ	135.5	10	「オリヂナル 普及型」オリヂナル薬粧株式会社
第 150 図	16	134 号 歯ブラシ	120	8.5	「マスホ」○に 9
第 150 図	17	134 号 碗	50	111.2	「(冒頭欠損) 標」
第 150 図	18	134 号 文具	54.8	12	ペンのキャップ
第 150 図	19	134 号	52.1	9.6	不明
第 150 図	20	134 号	94	12	目打ち?
第 151 図	7	123 号 歯ブラシ	163	12	○に公 13 196 「東京 資生堂 銀座」花椿マーク 株式会社 資生堂 1940 年~1945 年?
第 151 図	8	123 号 歯ブラシ	151.5	11.5	ツバメのマーク「ツバメ歯ブラシ」矢野芳香園
第 153 図	7	233 号 栓	—	26.1	
第 157 図	9	239 号 櫛	52.1	97.9	蝶と花の線刻
第 162 図	11	200 号 蓋	32	—	「Gynan Capsule」 8 KUMAR PRODUCTS Gynan Capsule 女性向けカプセル剤か?

第 23 表 近代 部材掲載資料

図版番号	出土 遺構	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	特徴
第 150 図	21	134 号 ガイシ	—	57	52	産地不明 体部マーク丸枠「AOKI」／「1348」
第 151 図	9	123 号 平瓦	—	—	—	外表面黒化 胎土灰 四角枠に「尾」/山形「□(甚)」/本
第 152 図	1 右	123 号 厠下駄	(285)	150	119	黒字で「TOYOHASHI JAPAN」とプリントされている。裏面に刻印がある。
第 152 図	2	123 号 和式大便器	(216)	(86)	127	緑は青と緑の染付で模様が描かれており、緑以外は白無地である。
第 153 図	1	201 号+表土 鬼瓦				胎土灰 砂粒の混入極めて少
第 158 図	1	239 号 軒平瓦	—	291.0	43.3	瓦当径 91mm 外表面黒化 胎土白色・黒色粒含む 金雲母粒顕著 凸面条線 丸十 四角枠に「二又」「五二号」
第 158 図	2	239 号 軒棧瓦	316.5	295.4	45.9	瓦当径 88.8mm 外表面黒化 金属質の光沢 胎土白色・黒色粒含む 金雲母粒凸面条線 尻側に孔 丸十 四角枠に「□」「一〇四号」
第 159 図	1	239 号 切隅瓦	—	—	47.2	瓦当径 92.3mm 丸十 外表面金属質の光沢 胎土灰～灰白 白色微砂粒混
第 159 図	2	239 号 軒棧瓦	—	—	44.5	外表面黒化 金属質の光沢 胎土白色・黒色粒含む 金雲母粒 凸面条線 丸十 四角枠に「□」「一〇四号」
第 159 図	3	239 号 棧瓦	—	—	—	外表面黒化 金属質の光沢 胎土白色・黒色粒含む 金雲母粒顕著 凹面条線 四角枠に「□」「五二号」
第 159 図	4	239 号 鬼瓦	—	—	222.3	外表面金属質の光沢 胎土灰白 砂粒の混入極めて少
第 159 図	5	239 号 鬼瓦	—	—		外表面金属質の光沢 胎土灰白 白色・黒色微砂粒混
第 160 図	1	239 号 痰吐付洗面器	650	470	243	洗面ボウルの他、金具・石鹼置き・痰壺が備え付けられている。洗面ボウルには左手前にオーバーフローホールがある。石鹼置きの排水構造とオーバーフローホールは痰壺から下水管に繋がるとみられる漏斗状の部分に繋がっている。
第 161 図	1	239 号 コーナーラック	490	365	75	図中右上の角は角ばっているが、左下の角は丸みを帯びている。孔が空いている面は内側に向かって僅かに傾いている。
第 161 図	2	239 号 小便器か	(259)	(196)	—	高島製陶所株式会社のマークが印字されている。
第 161 図	3	239 号 小便器	(303)	(209)	(97)	大部分が欠損しており全体的な形状は定かではないが、奥側の面は平らな板状になっている。排水溝は 9 個の穴が並んでいる。
第 162 図	3	4 号 煉瓦	223.1	109.1	58.7	スタンプ陰刻：扇形 側面のうち 3 面が平滑
第 162 図	4	4 号 煉瓦	227.5	108.6	57.6	スタンプ陰刻：扇形 側面のうち 3 面が平滑 モルタル付着
第 162 図	5	4 号 煉瓦	222.4	110.5	57.7	スタンプ陰刻：扇形 側面のうち 3 面が平滑 モルタル付着

第 24 表 包含層 陶磁器・土器掲載資料

図版番号	出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ径 (mm)	成形技 法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第 163 図	1	包含層	磁器	碗	瀬戸・美濃	90	49	39		轆轤 染付		外面草花文	端反碗	19C 前
第 163 図	2	包含層	磁器	碗	肥前	98	57	40		轆轤 染付		外面草花文	くらわんか碗	18C 前
第 163 図	3	包含層	磁器	碗	肥前	100	52	39		轆轤 染付		外面蔓草文	底部銘渦福	18C 前
第 163 図	4	包含層	磁器	皿	不明	(180)	39	(92)		轆轤 染付 銅板転写		外面七宝繁文 内面口縁文様帯 四方禪文 内面 梅文	輪花 被熱	19C 後～
第 163 図	5	包含層	磁器	皿	中国	72 × 58	14	55 × 42		型 染付		内面花唐草文	底部銘角枠篆書	～17C 前葉
第 163 図	6	包含層	磁器	仏飯器	肥前	68	60	44		轆轤 染付		外面蛸唐草文		18C 代
第 163 図	7	包含層	陶器	皿	瀬戸・美濃	102	26	42		轆轤 鉄釉 飛鉋	外面		鍔手	18C 中～ 後
第 163 図	8	包含層	磁器	段重	肥前	93 × 93	36	93 × 93		板作り 染付		外面山水文		19C 後～
第 163 図	9	包含層	陶器	鉢	瀬戸・美濃	198	85	70		轆轤 灰釉・緑釉 流掛け			口縁凹み 3 見込み目跡 3	18C 代

図版番号	出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ径 (mm)	成形技 法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第 163 図	10	包含層	陶器	鉢	肥前	261	78	76		轆轤 灰釉・鉄漿 白化粧土・ 刷毛目	暗灰 褐		三島手 見込み重ね 焼きの砂粒環状に付 着	18C 前
第 163 図	11	包含層	陶器	香炉	瀬戸・ 美濃	49	42	30		轆轤 灰釉	灰			18C 代
第 163 図	12	包含層	陶器	瓶	瀬戸・ 美濃	27	181	72	109	轆轤 鉄釉			ぺこかん徳利	19C 前
第 164 図	1	包含層	陶器	土瓶	瀬戸・ 美濃	60	122	76	174	轆轤 鉄釉	灰		三足か 袴腰 胴下 部より底部釉剥ぎ	19C 前
第 164 図	2	包含層	陶器	土瓶	京都・ 信楽	93	113	72	180	轆轤 透明釉・鉛 釉・色絵	淡灰 黄褐	外面文様		19C 前
第 164 図	3	包含層	陶器	蓋	京都・ 信楽	(90)	27		35	轆轤 透明釉・鉛 釉・色絵	淡灰 黄褐	天井文様	通気孔 2	
第 164 図	4	包含層	陶器	灯明皿	瀬戸・ 美濃	100	22	40		轆轤 鉄釉			見込み輪状に無釉	18C 代
第 164 図	6	包含層	土器	脚付灯明 受皿		77	68	68	受部 45	轆轤 透明釉				
第 164 図	5	包含層	陶器	脚付灯明 受皿	瀬戸・ 美濃	(60)	41	45	受部 34	轆轤 灰釉	灰白			18C 代
第 164 図	7	包含層	土器	火消壺蓋		(260)	34		30	板作り ・輪積	褐			
第 164 図	8	包含層	磁器	転用品 (碗)	肥前	(41)	24	(41)		轆轤 染付			外周所り 碗の転用	18C 代
第 164 図	9	包含層	陶器	転用品 (碗)	瀬戸・ 美濃	50	80	13		轆轤 鉄釉			天目碗 外周所り 碗の転用	17C 後 ~18C 前
第 164 図	10	包含層	陶器	転用品 (碗)	瀬戸・ 美濃	45	45	13		轆轤 鉄釉			天目碗 外周所り 碗の転用	17C 後 ~19C 前
第 164 図	11	包含層	磁器	酒環	瀬戸・ 美濃	56	30	25		轆轤 染付		外面山水文 / 文 字文		19C 後 ~
第 164 図	12	包含層	磁器	酒環	瀬戸・ 美濃	56	31	20		轆轤 染付		外面帯文 / 文字 文		
第 164 図	13	包含層	磁器	坏	瀬戸・ 美濃	(54)	33	23		轆轤 色絵			底部銘「辰見野」	19C 後 ~
第 164 図	14	包含層	磁器	酒環	瀬戸・ 美濃	64	27	28		轆轤 染付・色絵		外面文様 内面「正宗」		
第 164 図	15	包含層	磁器	碗	瀬戸・ 美濃 か	—	—	—		轆轤 染付		外面漢詩文「山 紫水明 / 是神山 × / 溪雲再×」		19C 後 ~
第 164 図	16	包含層	磁器	碗	不明	112	59	47		轆轤 黒色に近い 染付		外面山水文他	底部銘「真陶園 / 平安 製」	20C 前
第 164 図	17	包含層	磁器	碗	瀬戸	(116)	63	36		轆轤 染付		外面色紙(梅文・ 桜文)	統制陶器 底部銘「瀬 / 781」	1940~ 1945 年
第 164 図	18	包含層	磁器	碗	瀬戸・ 美濃	(114)	66	37		轆轤 人造コバル ト		外面菊花文	底部銘「園山」	19C 後 ~
第 165 図	1	包含層	磁器	蒸し台		146	18	86		透明釉			つまみ付 穿孔複数 かえりあり 内面 陽刻「小」 洋食器	20C 前 ~
第 165 図	2	包含層	磁器	碗蓋	瀬戸・ 美濃 か	87	25	—	32	轆轤 色絵		天井瓦文	田河水泡 黒兔：凸 凹黒兵衛 白兔：し ろちゃん	1933 年 ~
第 165 図	3	包含層	磁器	碗蓋	瀬戸・ 美濃	32	30	(80)		轆轤 染付		天井山水文 / 漢 詩文 内面口縁 文様帯雷文		19C 後 ~
第 165 図	4	包含層	磁器	蓋物蓋	不明	58	13	44		轆轤 染付		天井文字文		19C 後 ~
第 165 図	5	包含層	磁器	碗蓋	不明	93	27		38	轆轤 人造コバル ト		天井海老文		20C 代
第 165 図	6	包含層	磁器	碗蓋	肥前	—	(15)	—		轆轤 染付		天井花唐草文 内面文様	つまみ銘角枰篆書体	18C 後
第 165 図	7	包含層	磁器	鉢蓋	瀬戸・ 美濃	(106)	43	(58)		轆轤 色絵		天井文様	つまみ銘角枰篆書体 どんぶり鉢	19C 後 ~
第 165 図	8	包含層	磁器	不明	美濃	—	—	—		クロム青磁 ・染付			統制陶器 体部陽刻 「G10/AHA」 体部銘 「岐 / 783」	1940~ 1945 年
第 165 図	9	包含層	磁器	碗	瀬戸・ 美濃	(104)	51	(32)				外面梅花文		19C 前
第 165 図	10	包含層	磁器	碗	肥前	—	—	—				外面窓絵(唐花) 文・鱗文		18C 代
第 165 図	11	包含層	磁器	皿	肥前	111	22	56		染付		外面唐草文 内 面区画(唐花) 文・区画間(風景) 文 松竹梅文		18C 代
第 165 図	12	包含層	磁器	急須蓋	不明	44	21	—	56 / 12			天井文様		19C 前 ~
第 165 図	13	包含層	磁器	蓋物蓋	肥前	—	—	—				天井草花文		18C 代
第 165 図	14	包含層	陶器	碗	不明	88	47	(40)		轆轤 白釉・透明 釉・白化粧 土・緑・鉄 釉・黒		外面文様		19C 後 ~

図版番号	出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ径 (mm)	成形技 法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第165図	15	包含層	陶器	碗	京都・ 信楽	—	(56)	—	轆轤	透明釉・鉄 絵・染付		外面文字文他	筒形碗	18C 中～ 18C 後
第165図	16	包含層	陶器	碗	京都・ 信楽	—	—	—	轆轤	灰釉・色絵		外面文字		18C 代
第165図	17	包含層	陶器	皿	瀬戸	—	(27)	68	轆轤	灰釉・黒・ 赤		内面人物文他	統制陶器 刻印「品 /180」	1940～ 1945 年
第166図	1	包含層	磁器	碗	瀬戸	(124)	61	34	轆轤	染付・色絵		外面鳳凰文・花 文	統制陶器 「瀬 /870」	1940～ 1945 年
第166図	2	包含層	磁器	碗	瀬戸・ 美濃	—	(37)	33	轆轤	染付		外面丸文	「□山」	19C 後～
第166図	3	包含層	磁器	碗	肥前	—	(34)	(46)	轆轤	染付		外面草花文	くらわんか碗 渦福	18C 前
第166図	4	包含層	磁器	碗	瀬戸	102	51	46	轆轤型 打	灰釉・鉄釉 ・鉄漿		内外面連弁文	輪花 統制陶器 刻 印「品 /50」 ※品は 瀬戸・品野	1940～ 1945 年
第166図	5	包含層	磁器	碗	美濃	115	58	47	轆轤	鉄釉			統制陶器 「岐 /81」	1940～ 1945 年
第166図	6	包含層	磁器	碗	肥前	106	53	44	轆轤	染付		外面草花・山水 文	「大明年製」	17C 末～ 18C 前
第166図	7	包含層	磁器	碗	肥前	(98)	54	41	轆轤	染付		外面竹林文	「大明年□ (製)」	18C 前
第166図	8	包含層	磁器	碗	肥前	—	(40)	42	轆轤	染付		外面文様区画 / 区画間花文 見 込み文様	「大明□ (成) 化□ (年) □ (製)」	18C 前
第166図	9	包含層	磁器	碗	肥前	—	(22)	(44)	轆轤	染付		外面文様	「大明年製」	18C 前
第166図	10	包含層	磁器	碗	肥前	—	(26)	(22)	轆轤	染付		外面文様区画 / 区画間文様 見 込み文様 (花)		18C 前
第166図	11	包含層	磁器	碗	肥前	—	(21)	(38)	轆轤	染付		外面丸文 (菊)	「大明年製」	18C 前
第166図	12	包含層	磁器	碗	肥前	—	(21)	(38)	轆轤	染付 こんにやく 印刷		外面菊文	「大□ (明) 年□ (製)」	18C 前
第166図	13	包含層	磁器	碗	肥前	—	(11)	42	轆轤	染付			「宣明年製」 外周所 り	17C 末～ 18C 前
第166図	14	包含層	磁器	碗	肥前	—	(39)	(64)	轆轤	染付 こんにやく 印刷		外面草花文 見 込み五弁花文	くらわんか碗 渦福	18C 前
第166図	15	包含層	磁器	碗	肥前	—	(36)	(36)	轆轤	染付		外面草花文	くらわんか碗 「□ □」	18C 前
第166図	16	包含層	磁器	碗	肥前	—	(31)	52	轆轤	染付		外面草花文	くらわんか碗 「□ □」	18C 前
第166図	17	包含層	磁器	碗	瀬戸・ 美濃	—	(22)	40	轆轤	染付・瑠璃 釉			マーク二重山形丸枠 「山」 / 「丸山園」	19C 後～
第166図	18	包含層	磁器	皿	肥前				轆轤	染付		外面唐草文 / 櫛 歯文 内面唐花文	鍋島	17C 末～ 18C 初
第166図	19	包含層	磁器	皿	不明	65	28	29	轆轤	人造コバル ト		見込み梅・松葉 文		19C 後～
第166図	20	包含層	磁器	皿	瀬戸・ 美濃	84	18	48	轆轤	色絵			見込み「長寿庵 / (941) 二三五五」	20C 前
第166図	21	包含層	磁器	皿	肥前	140	26	71	型打	クロム青磁 ・染付		内面葉文	統制陶器 輪花底部 銘「有 /14」	1940～ 1945 年
第166図	22	包含層	磁器	皿	瀬戸・ 美濃	115	23	62	轆轤	染付		内面山水文 / 漢 詩文		19C 後～
第166図	23	包含層	磁器	皿	瀬戸・ 美濃	125	24	56	轆轤	染付		内面口縁文様帯 斜格子文 見込 み山水文 / 漢詩	輪花	19C 後～
第167図	1	包含層	磁器	皿	岐阜	—	11	96	轆轤				ノリタケ 底部マー ク花輪・楯「SL」 / 角 枠「岐 1163」	20C 中～
第167図	2	包含層	磁器	皿	愛知	—	(17)	116	轆轤			内面花文	ノリタケ 底部マー ク花輪「M」 / 「JAPAN」	20C 初～
第167図	3	包含層	硬質 陶器	皿	石川	(224)	28	103	轆轤			外面花文	日本硬質陶器株式会 社 輪花底部マーク IRONSTONECHINA/ マーク対面鶴 「KANAZAWA」 / 「NIPPONKOSHI — TSUTOKI Co./ MADE IN JAPAN」	20C 初～
第167図	4	包含層	磁器	灰皿	小倉	112	22	64					東洋陶器「TOYOTOKI」 /「KOKURA」/「JAPAN」	20C 初～
第167図	5	包含層	磁器	壺	不明	27	41	25	34	轆轤			瓢箪形：「蒲焼」裏 「□□」 / 「やっこ / 電 (84) 九八八六—八」	
第167図	6	包含層	磁器	瓶	瀬戸・ 美濃	—	45	45	轆轤				「岐 690」 ウテナ	20C 中
第167図	7	包含層	磁器	蓋物	不明	81	50	51	轆轤型 打ち	鉄釉		外面文字文「福 禄寿」	八角形陽刻	20C 代

図版番号		出土 遺構	種別	器種	産地	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚み (mm)	最大幅 つまみ径 (mm)	成形技法	文様 釉薬 絵付の技法	胎土	文様内容	備考	年代
第 167 図	8	包含層	磁器	蓋物	瀬戸・ 美濃 か	83	60	46		轆轤	クロム青磁		体部陽刻唐花 / 「つばうに」	食品容器	19C 後～
第 167 図	9	包含層	磁器	瓶	瀬戸・ 美濃 か	25	183	57		轆轤	染付			「幹山」	19C 後～
第 167 図	10	包含層	磁器	瓶	瀬戸・ 美濃 か	(24)	185	63		轆轤	染付			「原平」	19C 後～
第 167 図	11	包含層	磁器	瓶	瀬戸・ 美濃	22	145	45	64	轆轤	染付			「原平」	19C 後～
第 167 図	12	包含層	磁器	花瓶	不明	61	127	55	70	轆轤	クロム青磁		外面角枠網代文	角型	20C 代
第 168 図	1	包含層	陶器	壺	不明	84	122	58	108	轆轤			外面貼り付け文 (山) / 「日本アル プス」	焼き締め・金彩	20C 前～
第 168 図	2	包含層	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	41	194	67	84	轆轤	灰釉	灰		体部烈点釘書 屋号「内定」	18C 後～ 19C 前
第 168 図	3	包含層	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	33	204	62	79	轆轤	灰釉	灰		体部烈点釘書 屋号「舎」	18C 後～ 19C 前
第 168 図	4	包含層	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	—	—	—		轆轤	灰釉	灰		体部烈点釘書 屋号山形「赤」	18C 後～ 19C 前
第 168 図	5	包含層	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	—	115	70		轆轤	灰釉	灰		体部烈点釘書 屋号「定」	18C 後～ 19C 前
第 168 図	6	包含層	陶器	徳利	瀬戸・ 美濃	—	—	—		轆轤	灰釉	灰		体部へら書「本」	18C 後～ 19C 前
第 168 図	7	包含層	陶器	瓶	不明	—	101	45		型合わせ	鉄釉・薬灰 釉				19C 後～
第 168 図	8	包含層	陶器	蓋	不明	51	29		64 / 14	轆轤	透明・鉄絵 ・緑		天井文様 つま み外周葡萄文		20C 代
第 168 図	9	包含層	陶器	水注	不明	72	105	62	111	轆轤	透明・鉄緑 ・緑		外面文様 胴部 下半蓮弁文		20C 代
第 168 図	10	包含層	陶器	容器	美濃	47	38	46			透明釉			統制陶器 底部陽刻 銘「岐 /674」	1940～ 1945 年
第 168 図	11	包含層	土器	さな	不明	136	27	144				乳黄 白			年代不詳
第 169 図	1	包含層	陶器	碗	肥前	—	(30)	56		轆轤	透明釉	淡灰 黄褐		京焼風陶器 底部銘刻印「清水」	17C 後～ 18C 初
第 169 図	2	包含層	陶器	坏	不明	54	39	30		轆轤	灰釉・薬灰 釉	淡灰			18C 代
第 169 図	3	包含層	土器	灯明受皿		100	23	44	受部 64	轆轤	透明釉			底部糸切痕	
第 169 図	4	包含層	陶器	壺蓋	瀬戸・ 美濃	64	16	42		轆轤		乳黄 白		底部糸切痕 焼き締 め	17C 後葉
第 169 図	5	包含層	陶器	甕	瀬戸・ 美濃	113	84	66		轆轤	鉄釉			孫太襲 底部糸切痕	18C 末～ 19C 前
第 169 図	6	包含層	磁器	急須	三重	65	52	56	110	轆轤	色絵			万古 金彩・黒・緑・ 赤 体部銘刻印角枠 「萬古」	19C 後～
第 169 図	7	包含層	土器	かわらけ											
第 169 図	8	包含層	土器	焼塩壺		—	41	52		板作り		褐		体部刻印角枠「□□ 伊織」	17C 後～ 18C 前
第 169 図	9	包含層	土器	焼塩壺		—	—	—		板作り		褐		体部刻印角枠「泉州 □□」	17C 後～ 18C 前
第 169 図	10	包含層	土器	焼塩壺		—	—	—		板作り				体部刻印「マーク山 形「正」 / 堺□□□ / □□×」	17C 後～ 18C 前

第 25 表 包含層 土製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	種別	器種 モチーフ	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	備考
第 169 図	11	包含層	人形		37.1	— 赤子座り
第 169 図	12	包含層	動物形	狐	—	— 頭のみ
第 169 図	13	包含層	動物形	猿	—	— 顔
第 169 図	14	包含層	建造物	祠	—	— 底部穿孔 祠正面中央に天神 裏面に「天」の線刻 キラ付着
第 169 図	15	包含層	玩具		32	28 轆轤 植木鉢 口縁折縁 底部糸切痕
第 169 図	16	包含層	玩具		(32)	29 轆轤 植木鉢 口縁折縁 底部糸切痕
第 169 図	17	包含層	器物	泥面子	23.2	— 打面モチーフ不明
第 169 図	18	包含層	器物	泥面子	22.1	— 打面モチーフ不明
第 169 図	19	包含層	型	天神	50.1	84.5 胴のみの型

第 26 表 包含層 金属製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	種別	材質	長さ (銭径) (mm)	高さ (孔径) (mm)	重量 (g)	備考	
第 169 図	20	包含層	寛永通宝 (古)	銅	25.6	5.4	1.7	初鑄年 (西暦)1636 破損
第 169 図	21	包含層	寛永通宝 (古)	銅	24.7	5.7	2.4	初鑄年 (西暦)1636
第 169 図	22	包含層	寛永通宝 (古)	銅	24.6	6.1	3.2	初鑄年 (西暦)1636 背文「文」
第 169 図	23	包含層	寛永通宝 (古)	銅	26.5	—	0.9	初鑄年 (西暦)1636 破損
第 170 図	1	包含層	寛永通宝 (新)	銅	23.2	6.2	2.5	
第 170 図	2	包含層	寛永通宝 (新)	銅	25.5	5.2	2.3	初鑄年 (西暦)1636 背文「文」2 点接合
第 170 図	3	包含層	雁首	銅・真鍮	53.0	17.8	8.1	羅字あり 裝飾あり
第 170 図	4	包含層	雁首	銅	21.3	22.8	1.7	
第 170 図	5	包含層	雁首	銅	28.5	20.2	4.0	
第 170 図	6	包含層	雁首	銅	43.5	(13.2)	6.1	
第 170 図	7	包含層	雁首	銅	50.5	—	3.6	
第 170 図	8	包含層	吸口	銅	74.5	—	8.2	羅字あり
第 170 図	9	包含層	吸口	銅	46.7	—	4.1	羅字あり
第 170 図	10	包含層	吸口	銅	32.1	—	2.6	
第 170 図	11	包含層	歯ブラシ	?	87.2	25.3	30.4	開閉式のケースで通気孔らしき孔が両面にある
第 170 図	12	包含層	金具	銅	14.0	33.0	12.3	固定用の孔が両側にある
第 170 図	13	包含層	ボタン	銅	20.9	21.1	2.2	「中」のエンボス
第 170 図	14	包含層	錠剤ケース	アルミ	40	—	4.3	「住友化学工業株式会社」「ネオンロケ■」
第 170 図	15	包含層	把手	銅	34.1	71.9	20.3	

第 27 表 包含層 石製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	器種	石材	長さ 長軸 (mm)	幅 短軸 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第 170 図	16	包含層 砥石	泥岩	92.3	50.2	19.0	113.3	長方形の砥石で両面が使用によって消耗している 軟質

第 28 表 包含層 ガラス製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	器種	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第 170 図	17	包含層 文具	26	62	49	101.5	色調無色 口縁栓 「登録」「M」 丸善株式会社 (現 株式会社丸善ジュンク堂書店) インク
第 170 図	18	包含層 文具	27	65	54	104	色調水色 口縁栓 「S.S.S FOUNTAIN PEN INK.」 サンエス万年筆本舗 インク
第 170 図	19	包含層 薬品	13	63	44	61.9	色調無色 口縁栓 ラベル片に黄色地に銀の描画 表裏に鋏留め状の緑取り 側面に横線状の凹凸 小林製薬株式会社 小林タムシチンキ
第 170 図	20	包含層 薬品	12	121	※ 42(51)	105.3	色調薄青緑 口縁栓 「コデチン」側面目盛付 「OHKI」 大木合名会社 (現 大木製薬株式会社) コデチン (咳止めシロップ)
第 170 図	21	包含層 薬品	20	226	78	598.5	色調褐色 口縁王冠 「BLUTOSE」 500 7 藤澤友吉商店 (現 アステラス製薬) ブルトーゼ 500g 入 (補血強壮剤)
第 173 図	1	包含層 薬品	27	128	50	214.8	色調褐色 口縁スクリュー 「BIOFERMIN」「K.H.L.」 Y 29 ビオフェルミン製薬株式会社 ビオフェルミン (乳酸菌整腸薬)
第 173 図	2	包含層 薬品	11	91	30	41.2	色調緑 口縁栓 「薬液ハルナー」 側面 2 面に滑り止め加工 橋本ケミカル合資会社 薬液ハルナー (外用皮膚専門医薬品)
第 171 図	3	包含層 薬品	12	98	35	51.6	色調青 口縁栓 「安川コロダイン」 安川晃栄堂 安川コロダイン (胃腸薬)
第 171 図	4	包含層 薬品	—	※ 77	34	44.8	色調無色 T5 A & M
第 171 図	5	包含層 化粧品	6	132	45	139.3	色調青 口縁スクリュー・スポイト状 「KNK」 4 株式会社カネカ
第 171 図	6	包含層 化粧品	15	125	65	194.3	色調無色 口縁スクリュー ○に王 4
第 171 図	7	包含層 化粧品	21	165	86	365.5	色調無色 口縁スクリュー 19 底部陽刻:日本硝子マーク 柳屋マーク K 株式会社柳屋本店 ヘアトニック
第 171 図	8	包含層 化粧品	21	141	※ 32(52)	151.4	色調無色 口縁栓 「アイデア□」 株式会社高橋東洋堂 (現 株式会社コンテス) アイデアル化粧品
第 171 図	9	包含層 化粧品	5	84	40	88.5	色調無色 口縁スクリュー 「OSOME ELEGANCE HAIR — OIL」「意匠登録」
第 171 図	10	包含層 化粧品	9	56	21	29.2	色調無色 口縁スクリュー 中央に四角錐状の◇ ◇外周に円環状に 6 つの「山」のようなマーク
第 171 図	11	包含層 化粧品	55	55	56	170.1	色調白 口縁スクリュー 「KINTSURU PERFUMERY CO., LTD. MADE IN JAPAN 54II・」 2 金鶴香水株式会社 (現 株式会社マンダム) 化粧クリーム
第 171 図	12	包含層 化粧品	24	63	28	86.8	色調白 口縁スクリュー 花椿マーク 株式会社資生堂
第 171 図	13	包含層 化粧品	42	62	43	136	色調白 口縁スクリュー
第 171 図	14	包含層 化粧品	—	※ 18	44	12.2	色調深緑底部マーブル 「カネボウ」 鐘淵紡績株式会社 (現 株式会社カネボウ化粧品)
第 171 図	15	包含層 化粧品	20	53	34	45	色調無色 口縁スクリュー 「Make — up Base LIQUID FOUNDATION」「Kiss Me」「THE ISEHAN & CO.,LTD.」「PAT 127230」 株式会社伊勢半 KISSME リキッドファンデーション
第 171 図	16	包含層 化粧品	45	42	46	66.4	色調無色 口縁スクリュー
第 171 図	17	包含層 化粧品	22	65	40	61.1	色調無色 口縁栓
第 171 図	18	包含層 化粧品	65	58	74	242.7	色調白 口縁スクリュー
第 172 図	1	包含層 食品	—	※ 44	40	39.8	色調無色 S.G.F マーク 島田硝子製作所 (現 東洋ガラス株式会社) アンカーグラス (食料品缶詰の代用容器)
第 172 図	2	包含層 調味料	21	76	33	59.4	色調薄青緑 口縁スクリュー
第 172 図	3	包含層 調味料	[22]	[85]	34	79.5	色調薄青緑 口縁スクリュー 金属中蓋 (孔 1 つ) 付
第 172 図	4	包含層 調味料	—	※ 40	30	11.1	色調無色 「蒲焼」 蒲焼のたれ
第 172 図	5	包含層 飲料	42	130	50	283.7	色調無色 口縁紙蓋 保証マーク 「全乳」「180c.c.」「東京保証牛乳會社」 ^ にト 2 東京保証牛乳株式会社 (現 雪印メグミルク株式会社) 牛乳

図版番号	出土 遺構	器種	口径 長さ (mm)	器高 幅 (mm)	底径 厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第 172 図	6	包含層 飲料	20	188	48	266.4	色調無色 口縁栓 「モ」 状の滑り止め 「全乳一合入」 S 牛乳
第 172 図	7	包含層 飲料	20	225	52	444	色調薄青緑 口縁王冠 「登録商標」 大日本麦酒 (DNB) マーク ○に・ 「大日本麦酒株式会社 製造」 星に○に・ 6 大日本麦酒株式会社 ビール
第 173 図	1	包含層 日用品	16	151	48	242	色調無色 日本油脂 (現 NS ファーファ・ジャパン株式会社) ニッサンセブン (洗剤)
第 173 図	2	包含層 日用品	47	43	50	81	色調青緑 口縁スクリュー 「日靴塗聯」 日靴塗聯 靴クリーム
第 173 図	3	包含層 食器	53	39	44	62.7	色調薄青緑
第 173 図	4	包含層 調理器具	38	26	20	31.9	色調無色 くちばし状の注口付 胴部を一周する横線 「5 瓦」
第 173 図	5	包含層 食器	81	25	60	95.8	色調薄青
第 173 図	6	包含層 不明	37	100	45	157.2	色調無色 口縁スクリュー K.T 「QP(一字ずつ菱形に開まっている)」 7
第 173 図	7	包含層 不明	28	58	30	48.6	色調無色 口縁スクリュー 蝙蝠傘のマーク
第 173 図	8	包含層 不明	15	58	27	41.1	色調オリーブグリーン 口縁栓
第 173 図	9	包含層 不明	33	39	40	66.2	色調白 口縁印籠蓋
第 173 図	10	包含層 不明	※ 80	※ 69	21	83.7	色調黄緑 底部に 3 重の U 字状の溝あり ブラックライト反応あり ウランガラス製品

第 29 表 包含層 木製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	種別	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	木取り	樹種	備考
第 173 図	13	包含層 銅板付着木片	66.5	36.0	20.0	板目取り	不明	木材に沿って L 字に銅板が固定される 銅板の厚さ 0.5mm

第 30 表 包含層 合成樹脂製品掲載資料

図版番号	出土 遺構	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	備考
第 173 図	14	一括 歯ブラシ	150.4	12.5	「露毛」 No.1 「東京 資生堂 銀座」 花椿マーク 株式会社 資生堂
第 173 図	15	一括 歯ブラシ	98.7	22.7	「TRADE MARK」 「TOURIST TOOTH — BRUSH」 携帯用折り畳み式歯ブラシ
第 173 図	16	一括 蓋	外蓋 35、内蓋 25	—	「PATENT JAPAN 88847 ENGLAND 367844 U.S.A 2008620 FRANCE 732570」 :72

第 31 表 包含層 部材掲載資料

図版番号	出土 遺構	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	特徴
第 152 図	1 左	包含層 廁下駄	(119)	(106)	(56)	黒字で「TOYOHASH □ JAPAN」とプリントされている。
第 174 図	1	包含層 丸瓦	293.5	137.8	—	外表面黒化 胎土灰 凹面粗い布目痕
第 174 図	2	包含層 軒丸瓦	—	150.2	—	玉縁側に孔 2 つ
第 174 図	3	包含層 平瓦	—	—	—	胎土灰 外面金雲母粒 凹面光沢 凹面条線 四角枠に「柴□ (宍)」
第 174 図	4	包含層 看板		300	90	ヴァイオリン マンドリン ピアノオルガン ギター セロ □切教授 / 市電大塚窪町停留所前 / 正則音楽院
第 174 図	5	包含層 ガイシ	60	88	60	丸に K 1951
第 174 図	6	包含層 ガイシ	62	82	29	□□特許 九四八八三 九四八八四 / 登録商標 / Y/10. A. 250. V
第 174 図	7	包含層 ガイシ	60	42	44	1A250. 3A125V. TOK PAT. NO. 165778
第 174 図	8	包含層 和式大便器	(100)	(32)	持ち手径 28	陶器 金隠し上部持ち手 花唐草文の呉須絵が施されている 19C 後 ~



写真 -1 : 2 号遺構出土 土製品 (犬)
(第 116 図 -7 : 173 頁)



写真 -2 : 21 号遺構出土 青銅製不明円形
筒製品 (第 116 図 -7 : 173 頁)

IV 分析

1 原町西遺跡の江戸時代における土地利用

渋谷 葉子*

はじめに

本稿は、文京区原町西遺跡（以下「調査地」）に関わる文献史料の調査である。まずはその江戸時代における土地利用の変遷を文献・絵図史料によって明らかにし⁽¹⁾、さらに発掘調査で検出された遺構・遺物を踏まえて、千川上水と瘡守稻荷について述べる。

なお土地利用と所持者の変遷は「屋敷地所持者変遷」（第1表）、所持者の履歴は「屋敷地所持者履歴」（第2表）、相対替による土地の授受は「屋敷地相対替一覧」（第3表）にまとめ、参照しつつ稿を進める。

1. 所持者と土地利用の変遷

1. 館林藩小石川下屋敷

調査地は、まず寛永19～20年（1642～1643）の様相とされる「江戸全図」（第1図）によれば小石川村「百姓地」であったが、慶安5年（承応元・1652）、承応4年（明暦元・1655）と寛文2・9年（1662・1669）の4回にわたり、小石川村百姓地のうちが三代将軍徳川家光の四男で館林藩主であった綱吉に下賜されて、一帯に同藩の小石川下屋敷となった。こうして武家地としての土地利用が始まり、幕末まで続く。

小石川下屋敷の坪数は不詳だが、全貌は寛文11年（1671）の「新板江戸外絵図」（第2図）の「館林宰相殿」にみるように広大な敷地で、慶安5・承応4年に与えられた南部が概ね殿舎や庭園等を擁したいわゆる御殿空間、寛文2・9年に添地された北部が概ね家臣の住居等が設けられたいわゆる詰人空間、という土地利用だったと考えられる。

調査地については、敷地北部の詰人空間のうちであったと推定される。それを含む「御府内場末往還其外沿革図書」⁽²⁾の「延宝年中之形」（1673～1681、第3・13図）では、一帯に「館林殿」として描くのみだが、後述のようにその内部は藩士らの居住空間が広がっていたようである。

※ 公益財団法人 徳川黎明会 徳川林政史研究所

- (1) 本調査地に関わる先行の文献史料の調査には、拙稿 i 「小石川植物園」の土地利用に関する歴史的変遷（東京大学埋蔵文化財調査室編・発行『東京大学構内遺跡調査研究年報5』2006年、所収、172～210頁）、拙稿 ii 「小石川御殿とその跡地の利用—北端部中央について—」（東京都埋蔵文化財センター編・発行『文京区 小石川植物園内貝塚・原町遺跡—日本銀行本店原町家族寮地点における埋蔵文化財発掘調査—』2020年、所収、417～436頁）がある。本稿では変遷については主に拙稿 i に基づき、その他に依拠する場合は註を付す。
- (2) 国立国会図書館デジタルコレクション。なお調査地の場所を描く絵図が「御府内場末往還其外沿革図書 貳拾 元下」のうち「小石川白山御殿跡芥川小野寺御預御薬園、蜷川相模守、高井石見守屋鋪、氷川明神社地、御賄方大縄地、其外小屋鋪辺之部」（以下、「沿革図書A」と、「同 貳拾 元上」のうち「小石川白山御殿跡新屋鋪、同所大通・中通、小原町小屋鋪辺之部」（以下、「沿革図書B」と）にわたり、沿革図書Aでは東端部、沿革図書Bでは南西端中央部に描かれる。したがって第3～12図に沿革図書A、第13～16図に沿革図書Bを掲載して以下併せて参照する。

第1表 屋敷地所持者変遷

年月日	西暦	絵図・史料名	西		東	
寛永 19 ～ 20 年	1642 ～ 43	江戸全図	百姓地			
寛文 11 年	1671	新板江戸外絵図	館林宰相殿 (徳川綱吉)			
延宝年中	1673 ～ 81	御府内場末往還其外沿革図書 延宝年中之形	館林殿 (徳川綱吉)			
天和年中	1681 ～ 84	御府内場末往還其外沿革図書 天和年中之形	小屋敷			
元禄 11 年	1698	御府内場末往還其外沿革図書 元禄十一寅年之形	広道・御殿			
正徳 3 年	1713	御府内場末往還其外沿革図書 正徳三巳年頃之形	広道・御殿跡地			
正徳 4 年 3 月晦日	1714	屋敷渡預絵図証文	※拝領 250 坪 橋本喜平次 (敬近)		※拝領 250 坪 大前孫兵衛 (重職)	
正徳 4 ～ 6 年	1714 ～ 16	御府内場末往還其外沿革図書 正徳四午年・同五未年・同六申年之形	橋本喜平次 (敬近)		大前孫兵衛 (重職)	
享保 2 年	1717	御府内場末往還其外沿革図書 享保二酉年之形	橋本喜八郎 (敬周)		大前孫兵衛 (重職)	
享保 7 年	1722	御府内場末往還其外沿革図書 享保七寅年之形	橋本喜八郎 (敬周)		大前孫兵衛 (重職)	
享保 18 年 6 月 2 日	1733	屋敷渡預絵図証文	※差上 橋本喜八郎 (敬周)			
享保 18 年 10 月 8 日	1733	屋敷渡預絵図証文	※預地 250 坪 大前吉十郎 (房次)		大前吉十郎 (房次)	
享保 18 年 11 月 16 日	1733	屋敷渡預絵図証文	※拝領 250 坪 土山甚五郎 (昌紀)		大前吉十郎 (房次)	
寛延元年	1748	御府内場末往還其外沿革図書 延享五辰年之形	土山勘 (ママ、甚) 五郎 (昌紀)		大前吉十郎 (房次)	
宝暦 2 年	1752	御府内場末往還其外沿革図書 宝暦二申年之形	土山甚十郎 (紀時)		大前熊次郎 (房明)	
明和 5 年 9 月 26 日	1768	相对替御書附書拔			※相对替 200 坪 小川長十郎 (康慶)	※残地 50 坪 大前熊次郎 (房明)
安永 4 年 正月 22 日	1775	屋敷渡預絵図証文	※差上 土山甚十郎 (紀時)			
安永 4 年 10 月 29 日	1775	屋敷渡預絵図証文	※拝領 125 坪 鶴田初三郎	※拝領 125 坪 木村周蔵 (光休)	小川長十郎 (康慶)	
天明 7 年 10 月	1787	御府内場末往還其外沿革図書	※上地 鶴田源吉郎			
天明 8 年 8 月 7 日	1788	屋敷書拔	※拝領 125 坪 平田恵十郎			
寛政 7 年 7 月 28 日	1795	相对替御書附書拔		※相对替 125 坪 小林七郎右衛門 (正武)		
寛政 9 年 5 月	1797	御府内場末往還其外沿革図書				※上地 大前孫兵衛 (房明)
寛政 9 年 5 月晦日	1797	屋敷渡預絵図証文			小川長左衛門 (康甲)	※預地 50 坪 小川長左衛門 (康甲)
寛政 9 年 7 月 16 日	1797	相对替御書附書拔			※相对替 200 坪 蔭山徳次郎 (広郷)	
文化 6 年 5 月 11 日	1809	屋敷書拔				※預地 50 坪 蔭山外記 (広郷)
文化 9 年 8 月 5 日	1812	屋敷書拔				※拝領 50 坪 丸山奥右衛門
文政元年 7 月 14 日	1818	相对替御書附書拔				※相对替 50 坪 小川勇八
天保 3 年 12 月 29 日	1832	被下屋敷相对替切坪絵図書拔			※相对替 堀田甚兵衛	
嘉永元年 7 月 16 日	1848	相对替御書附書拔			※相对替 200 坪 渡辺伊兵衛	
嘉永 7 年 10 月	1854	御府内場末往還其外沿革図書 当時之形	平田順之助	小林松之丞	渡辺伊兵衛	小川鉄之助
安政 3 年	1856	諸向地面取調書	なし	拝領屋敷 小石川白山御殿跡 125 坪 小林松之丞 地守附置	拝領屋敷 小石川白山御殿跡中通り 200 坪 渡辺伊兵衛 地守附置、当分小川町一 橋通り小普請大岡兵五郎 方同居	拝領屋敷 小石川白山御殿跡 50 坪 小川鉄之助 地守附置
慶応年間	1865 ～ 68	江戸絵図 3 号	平■順■	大村釗七郎	長谷川又三郎	中内■■衛門
明治 6 年	1873	第四大区沽券地図 (十小区)	(無番地、空白)			

第2表 屋敷地所持者履歴 1

姓名	よみ	通称等	生没年	当主期間	高	実父 / 実母 / 正室妻	履歴	出典
東側								
橋本 敬近	はしもと ゆき ちか	喜三郎 / 喜平次	明暦 2 ～享保 7 (1656 ～ 1722)	? ～享保 7 年 (? ～ 1722)	150 俵	— / — / 佐久間氏女	はじめ娘衆の技をもって松平伊予守より扶助を受け、召出されて家を興す→元禄 11(1698).8.2 召されて綱吉に勤仕、廊下番となり切米 150 俵→宝永 6(1709).2.21 土圭間番→正徳 3(1713).5.18 減員により小普請→享保 7(1722).12.13 没、享年 67、法名曰心、葬地は谷中立善寺	寛政譜 19-272
橋本 敬周	はしもと ゆき まさ	喜八郎	元禄 6 ～宝暦 8 (1693 ～ 1758)	享保 8 ～宝暦 8 (1723 ～ 1758)	150 俵	野々山弥左衛門兼富(二男) / 野々山平右衛門正次女 / 橋本敬近二女	橋本敬近の養子となり、その女を妻とす→宝永 2(1705).11.28 綱吉に初目見(13 歳)→享保 8(1723).3.5 遺跡を継ぐ→同 10(1725).6.2 表右筆→同 11(1726).1.13 奥右筆→延享 3(1746).8.11 表右筆組頭→宝暦 8(1758).5.26 没、享年 66、法名栄水、葬地は谷中立善寺	寛政譜 19-272
土山 昌紀	つちやま まさ のり	甚五郎	? ～延享 2 (? ～ 1745)	? ～延享 2 (? ～ 1745)	現米 80 石	— / — / 中条氏女	先手与力→支配勘定→元文 5(1740).6.22 旗本となり、勘定(現米 80 石)→延享 2(1745).6.2 没、享年不詳、法名了伝、葬地は目白永泉寺 ※御家人→旗本	寛政譜 22-197
土山 紀時	つちやま のり とき	吉十郎 / 甚十郎	正徳 5 ～天明 1 (1715 ～ 1781)	延享 2 ～天明 1 (1745 ～ 1781)	現米 80 石	土山昌紀(長男) / 中条氏女 / 幸田友之助親盈女→同養女→松平弥路守家臣坪田権兵衛信処女	寛保 1(1741).11.29 勘定→延享 2(1745).8.20 遺跡を継ぐ→宝暦 3(1753).11.13 書替奉行→同 9(1759).12.2 勘定組頭→安永 5(1776).8.24 一橋家長柄奉行→天明 1(1781).12.9 没、享年 67、法名道智、葬地は目白永泉寺	寛政譜 22-197
鶴田 初三郎	つるた はつさ ぶろう	—	—	—	—	— / — / —	安永 4(1775).10.29 時点 普請役【以降不明】 ※御家人	屋敷渡預絵図証文
鶴田 源吉郎	つるた げんき ちろう	—	—	—	—	— / — / —	天明 8(1788).8.7 時点 当主【以降不明】 ※御家人	屋敷書拔
木村 光休	きむら みつや す	三次郎 / 周蔵	延享 2 ～? (1745 ～?)	? ～? (? ～?)	40 俵	— / — / 太田氏女	明和 8(1771).12. 普請役→のち勘定買物使→京都入用取調役、支配勘定に準ぜられる→天明 8(1788).9.10 旗本となり、禁裏頭頭(44 歳)→寛政 7(1795).2.3 代官→文化 11(1814) 務めを辞す【以降不明】 ※御家人→旗本	寛政譜 20-173/ 旗本百科 1680
平田 恵十郎	ひらた けい じゅうろう	—	—	—	—	— / — / —	天明 8(1788).8.7 時点 普請役【以降不明】 ※御家人	屋敷書拔
平田 順之助	ひらた じゅん のすけ	—	—	—	—	— / — / —	【この間、代々不詳】 安政 1(1854).10 時点 当主【以降不明】 ※御家人	沿革図書・当時 之形
小林 正武	こばやし まさ たけ	鉄五郎 / 又兵衛 / 七郎右衛門	延享 2 ～寛政 9 (1745 ～ 1797)	天明 7 ～寛政 9 (1787 ～ 1797)	500 石	小林三郎右衛門正儀(三男) / 小林五郎右衛門正沅女 / 小長谷伊左衛門時興女	宝暦 10(1760).3.1 家重に初目見(16 歳)→明和 1(1764). 間 12.16 大番→天明 7(1787).12.29 遺跡を継ぐ→寛政 5(1793).12.13 番を辞す→同 9(1797).7.18 没、享年 53、法名全性、葬地は牛込万昌院	寛政譜 16-147
小林 正友	こばやし まさ とも	鉄五郎	安永 1 ～? (1772 ～?)	寛政 9 ～? (1797 ～?)	500 石	小林正武(長男) / 小長谷伊左衛門時興女 / —	天明 8(1788).7.1 家斉に初目見→寛政 9(1797).9.3 遺跡を継ぐ(26 歳)【以降不明】 【この間、代々不詳】	寛政譜 16-147
小林 一 (ヱ)	こばやし	—	—	—	500 石	— / — / —	小普請【以降不明】	幕臣人名 2-149
小林 三郎右衛 門	こばやし さぶ ろうえもん	—	—	? ～嘉永 5 (? ～ 1852)	500 石	小林 I [(ヱ) / — / —]	□ (ヱ) 番→嘉永 5(1852).12.26 家督を譲る【以降不明】	幕臣人名 2-149
小林 松之丞	こばやし まつ のじょう	—	天保 7 ～? (1836 ～?)	嘉永 5 ～? (1852 ～?)	500 石	船橋半右衛門 / — / —	小林三郎右衛門の養子となる→嘉永 5(1852).12.26 家督を継ぎ、小普請→安政 5(1858).5.16 大番→文久 1(1861).3.26 小納戸→同 3(1863).6.16 職を辞し、勤仕並寄合(28 歳)【以降不明】	幕臣人名 2-149
大村 針七郎	おおむら しよ うしちろう	—	—	—	250 石	倉橋三五郎 / — / —	大村藤次郎の養子となり、小普請→文久 1(1861).3.24 大番【以降不明】	幕臣人名 1-236

第2表 屋敷地所持者履歴 2

姓名	よみ	通称等	生没年	当主期間	高	実父 / 実母 / 正室妻	履歴	出典
西側								
大前 重職	おおまえ しげもと	孫兵衛 / 致仕号了順	寛文 8～元文 3 (1668～1738)	?～享保 17 (?～1732)	150 俵	小川藤左衛門正長 / 一徳田氏女	宝永 5(1708).2.23 召されて綱吉に勤仕、廊下番となり、切米 150 俵、大前と称す→同 6(1709).2.21 土主間番→正徳 3(1713).5.18 減員により小普請→享保 17(1732).8.26 致仕→元文 3(1738).8.2 没、享年 71、法名日成、葬地は谷中大円寺	寛政譜 22-20
大前 房次	おおまえ ふさつぐ	吉十郎 / 孫兵衛	正徳 3～寛保 1 (1713～1741)	享保 17～寛保 1 (1732～1741)	150 俵	大前重職 (長男) / 徳田氏女 / 尾崎勝次郎種武女	享保 17(1732).8.26 家を継ぐ→同 19(1734).6.1 表右筆→寛保 1(1741).5.11 没、享年 29、法名日然、葬地は谷中大円寺	寛政譜 22-20
大前 房明	おおまえ ふさあきら	熊次郎 / 孫兵衛	享保 18～? (1733～?)	寛保 1～? (1741～?)	150 俵 → 200 俵	飯嶋惣右衛門之房 (二男) / 大前重職三女 / 瀧川久助一偏女	大前房次の終に臨み養子となる→寛保 1(1741).7.26 遺跡を継ぐ (9 歳) →宝暦 5(1755).9.28 家重に初目見→同 8(1758).2.20 表右筆→明和 1(1764).7.19 奥右筆→天明 3(1783).8.8 奥右筆組頭→同 .12.18 布衣→同 5(1785).2.16 加増 50 俵→同 7(1787).6.24 西丸裏門番之頭→文化 1(1804).3.24 職を辞す 【以降不明】	寛政譜 22-20/ 旗本百科 1036
小川 康慶	おがわ やすよし	長太郎 / 長十郎	元文 3～天明 7 (1738～1787)	明和 3～天明 7 (1766～1787)	300 俵	小川長左衛門康存 (長男) / 山名伊豆守豊明女 / 戸川十兵衛安長女→山角次郎右衛門勝定女	宝暦 1(1751).10.15 家重に初目見 (14 歳) →明和 3(1766).12.27 遺跡を継ぐ→同 4(1767).8.18 西丸書院番→同 7(1770).4.24 番を辞す→天明 7(1787).2.25 没、享年 50、法名向岸、葬地は駒込大保福寺	寛政譜 14-217
小川 康甲	おがわ やすもと	亀太郎 / 長左衛門	明和 6～? (1769～?)	天明 7～? (1787～?)	300 俵	小川長十郎康慶 (長男) / 戸川十兵衛安長女 / 朝比奈内蔵助盛方女	天明 7(1787).5.9 遺跡を継ぐ (19 歳) →同 .11.21 書院番→寛政 11(1799).10 時点書院番 【以降不明】	寛政譜 14-217/ 諸家系譜
蔭山 広郷	かげやま ひろさと	徳次郎 / 外記	安永 2～? (1773～?)	寛政 6～? (1794～?)	210 俵余	小川長十郎康慶 (二男) / 戸川十兵衛安長女 / 清水家大臣榎本玄昌成美女、蔭山小八郎広賢養女	蔭山広賢の養子となり、その養女を妻とする→寛政 6(1794).4.24 家を継ぐ (22 歳) →同 8(1796).11.25 家斉に初目見→同 9(1797).11.27 大番→文化 6(1809).5.11 時点小普請【以降不明】	寛政譜 2-127/ 屋敷書板
蔭山	かげやま						【この間、代々不詳】	
蔭山 小八郎	かげやま ちろう	—	—	—	210 俵余	— / — / —	天保 3(1832).12.29 時点 当主 【以降不明】	被下屋敷相對替 切呼絵図書板
丸山 奥右衛門	まるやま おくえもん	—	—	—	—	— / — / —	文化 9(1812).8.5 時点 御鷹野方 【以降不明】	屋敷書板
丸山 万吉	まるやま まんきち	—	—	—	—	— / — / —	文政 1(1818).7.14 時点 御鷹野方 【以降不明】	相對替御書附書 板
小川 勇八	おがわ ゆうはち	—	—	—	—	— / — / —	文政 1(1818).7.14 時点 普請方改役 【以降不明】	相對替御書附書 板
小川 鉄之助	おがわ 鉄のすけ	—	—	—	—	— / — / —	安政 1(1854).10 時点 当主→同 3(1856) 時点 小普請 【以降不明】	沿革図書・当時 之形 / 諸向地面 取調書
堀田 甚兵衛	ほった じんべえ	—	天明 3～? (1783～?)	—	250 俵	— / — / —	嘉永 1(1848).7.16 時点 大番→小普請 【以降不明】	相對替御書附 書板 / 幕臣人名 4-19
渡辺 伊兵衛	わたなべ いへえ	—	—	—	30 俵 2 人 扶持	— / — / —	嘉永 1(1848).7.16 時点 小普請→安政 3(1856) 時点 小普請 【以降不明】	相對替御書附書 板 / 諸向地面取 調書
長谷川 又三郎	はせがわ またさぶろう	民之助	文化 1～? (1804～?)	嘉永 7～? (1854～?)	150 俵 → 200 俵	榊原孫之丞 / 一	長谷川又三郎の養子となる→文政 12(1829).6.26 表右筆、切米 150 俵→天保 2(1831).10.19 西丸奥右筆所留物方→同 3(1832).?.26 西丸奥右筆→同 9(1838).4.13 書院番→嘉永 5(1852).12.27 西丸膳奉行→同 6(1853).9.27 本丸膳奉行→同 7(1854).閏 7.4 家督を継ぐ→文久 2(1862).12.20 姫君用人格、布衣→元治 1(1864).5.24 役廃止により勤仕並寄合→同 .9. 表右筆組頭→慶応 2(1866).12.22 役廃止につき勤仕並寄合 【以降不明】	旗本百科 4-2152/ 幕臣人 名 3-224
中内 □□衛門	なかうち	—	—	—	—	— / — / —	【名不詳につき検索不能】	—

第3表 屋敷地相対替一覧

位置	年(西暦) 月日	所持者 屋敷種別 場所	坪数	獲得者
西側	寛政7年(1795) 7月28日	小林七郎右衛門拝領屋敷四谷仲町	417坪	御代官木村周蔵(光休)
		木村周蔵拝領屋敷小石川白山御殿跡	125坪	小普請組南部主税支配小林七郎右衛門(正武)
東側	明和5年(1768) 9月26日	大前熊次郎拝領屋敷白山御殿跡 250坪のうち	200坪	西丸御書院番小笠原越中守組小川長十郎(康慶)
		小川長十郎拝領屋敷神田三河町	500坪	奥御右筆大前熊次郎(房明)
	寛政9年(1797) 7月16日	蔭山徳次郎拝領屋敷小日向石切橋	340坪	御書院番松平内匠頭組小川長左衛門(康甲)
		小川長左衛門拝領屋敷小石川白山御殿跡	200坪	小普請戸田中務支配蔭山徳次郎(広郷)
	文政元年(1818) 7月14日	丸山万吉拝領屋敷小石川白山御殿跡	50坪	御普請方改役小川勇八
		小川勇八拝領屋敷湯嶋天神中坂下	60坪余	御鷹野方丸山万吉
	天保3年(1832) 12月29日	堀田甚兵衛拝領屋敷小石川蓮花寺坂 400坪のうち	150坪	蔭山小八郎
		蔭山小八郎拝領屋敷小石川白山御殿跡	200坪	堀田甚兵衛
	嘉永元年(1848) 7月16日	加藤左内拝領屋敷小石川白山御殿坂上横町	60坪	大御番朽木周防守組堀田甚兵衛
		渡辺伊兵衛拝領屋敷市谷元鷹匠町	150坪余	小普請組岡村備後守支配加藤左内
		堀田甚兵衛拝領屋敷小石川白山御殿跡中通	200坪	小普請組津田鉄太郎支配渡辺伊兵衛

※「相対替御書附書拔」・「被下屋敷相対替切坪絵図書拔」(国立国会図書館所蔵)、「諸家系譜」(国立公文書館内閣文庫所蔵)より作成



第1図 「(江戸全図)」(寛永19～20年、部分) 白杵市教育委員会蔵



第2図 新板江戸外絵図(寛文11年、部分) 国立国会図書館蔵

2. 小石川御殿残地

延宝8年(1680)5月6日、綱吉は兄で四代将軍家綱の死去により五代将軍となり、館林藩主はその長子、徳松が継いだ。館林藩の小石川下屋敷は翌天和元～2年(1681～1682)の半ばまでの間に、概ね南部が幕府の小石川御殿(俗称「白山御殿」)に転換された。一方北部の調査地の辺りは「御府内場末往還其外沿革図書」の文談⁽³⁾によれば、「右御殿地ニ相成候残地之内ニ前々より住居来候者、其俣屋鋪拝領いたし候儀与相見、天和年中之頃者同所之内ニ夫々道敷有之名前不詳小屋鋪」とあり、小石川下屋敷で小石川御殿にならなかった残地は、そこに前々から居住してきた者がそのまま屋敷を拝領したようで、天和年中(1681～1684)頃はそれぞれ道敷に沿った居住者不詳の小屋敷だったというのである⁽⁴⁾。

小石川下屋敷に居住してきた者とは当然館林藩士で、したがって拝領者はそれらということになる。幕府が屋敷地を与えるのは原則として大名・幕臣に限られ、陪臣である館林藩士への下賜は変則的だが、同藩主の徳松は将軍綱吉の世子で、それへ仕える藩士は江戸城西丸に勤仕して将軍世子附の幕臣同様の存在だったといい⁽⁵⁾、そうした理由による措置とみられる。

このようにして調査地は、館林藩士の拝領屋敷に転換した。前に引いた「御府内場末往還其外沿革図書」の文談によれば、「天和年中之形」(第4・14図)で「小屋敷」とある街区が館林藩士の居住域と理解され、その文言からすると小規模な屋敷が道に面して並んでいたようすが想定される。それらは館林藩士が居住してきた屋敷をそのまま拝領したものといい、したがって小石川下屋敷時代の詰人空間の様相を留めていた可能性も考えられる。

そして天和3年(1683)閏5月28日、館林藩主徳川徳松が没した。結果同藩は廃止されて、藩士のほとんどが幕臣に編入された。つまり館林藩士の居住した小屋敷は幕臣の住居に転換し、ここにおいて陪臣の拝領屋敷地という変則的な状況が解消された。こうして調査地も幕臣の拝領屋敷地という位置付けとなった。

3. 小石川御殿・広道

元禄11年(1698)、小石川御殿が北および西側に大きく拡張し、その北側屋敷境に沿って新たに「広道」が敷設された⁽⁶⁾。調査地はこの拡張域に含まれて、所在した屋敷地は召し上げられた。その位置は「御府内場末往還其外沿革図書」のうち「元禄十一寅年之形」(第5・15図)でいえば北西の角辺りで、概ねが広道となった。さらに南側の一部は御殿地に転換したが、小石川御殿は周囲に堀と土居が廻っていたことが絵図から明らかとなっており、そのひとつ「小石川御殿図」(第23図)⁽⁷⁾によれば堀口10間・深さ3間の堀と高さ2間の土居(幅不詳)は犬走と土塀を伴う大規模なもので⁽⁸⁾、

(3) 凡例によれば絵図の前に記されているその説明書きを「文談」と呼称しているので、本稿はこれに倣った。

(4) 沿革図書Bの天和年中のものを記した文談は「(前略)右御殿地ニ相成候残地、当所御屋鋪跡地之内ニ前々方住居来候者、其俣屋鋪拝領いたし候儀与相見、天和年中之頃者同所之内夫々道敷有之、名前不詳小屋鋪(後略)」とあり、沿革図書Aと同様に土地利用が展開をしたことが確認される。

(5) 深井雅海著『徳川将軍政治権力の研究』(吉川弘文館、1991年)、166～167頁。

(6) その変容の全貌は前掲註(1)拙稿i、図5・6(176頁)を参照。なお両図は「御府内場末往還其外沿革図書」の関係項目の絵図を筆者が合成して作成したものである。

(7) 文京ふるさと歴史館所蔵。

(8) 前掲註(1)拙稿ii、図6「小石川御殿北端圍繞施設推定模式図」(433頁)参照。

広道内側の御殿地部分は概ねそうした施設に関わる用地になったものとみられる。

小石川御殿は将軍綱吉とその家族らの保養や饗応の場であるとともに、広大な薬園やいわゆる生類憐れみの令を受けて鳥類の畜養施設が設けられるなど、綱吉の政治政策の実践場としての機能があったが、宝永4年（1707）4月21日の世子家宣の訪問を最後に将軍やその家族らが訪れることはなくなり、そして同6年（1709）正月10日、綱吉が没して生類憐れみの令が廃されると、飼育動物は速やかに放たれて畜養施設としての機能も失った。

その後の小石川御殿は、暫くは奉行が置かれて温存されたが、正徳3年（1713）4月19日に廃止が決定した。当時の調査地を含む周辺の様相は「御府内場末往還其外沿革図書」の「正徳三巳年頃之形」（第6図）に見るとおりだが、これより間もなく殿舎等の建築物は取り壊されて、圍繞していた堀や土居は埋め立てられ、広道は大幅に狭められたことが、次に述べるもようから推察される。

4. 小石川御殿跡

そして小石川御殿および広道の跡地は、大名・幕臣の拝領屋敷地として利用されることになり、廃止決定の10ヶ月後、正徳4年（1714）2月19日から下賜が始まり、同6年（享保元・1716）3月9日までの間に大小113筆の屋敷地となった。調査地を含む一帯は「御府内場末往還其外沿革図書」の「正徳四午年・同五未年・同六申年之形」（第7図）のようになり、調査地は北西角の2筆に当る。「屋敷渡預絵図証文」によれば、これらは正徳4年3月晦日に旗本20名に下賜された屋敷地のうちで（第18図）、拝領者は西側が橋本喜平次（敬近）、東側が大前孫兵衛（重職）であった。両屋敷地とも坪数は250坪、間口・奥行は「屋敷渡預絵図証文」の絵図にみるとおりだが、同図によれば広道は大きく縮小して幅4間の道敷（通称「小石川白山御殿跡大通」）となり、また広道沿いには堀と土居が幅10数間にわたってあったことから、橋本の屋敷地はほぼ全域、大前の屋敷地は南側のごく一部を除き、広道および堀・土居の造成地であったと推定される。

拝領者については、正徳4年に小石川御殿地跡の屋敷地を下賜された旗本は計65名に上ったが、そのほとんどが将軍綱吉に召し出され、あるいは次代家宣の将軍家養子入りに伴って幕臣となり両人の側近くに仕える役職にあったが、その廃役や減員により無役となって小普請入りした者という共通の履歴があり、橋本と大前もそうした者であった（第2表、後述2-2【和田倉御用屋敷の瘡守稻荷】参照）。

5. 幕臣屋敷

このように調査地は幕臣屋敷地となり、以後幕末まで利用されることとなった。その所持者の変遷と土地の分割について、以下西側・東側に分けて順にみていく（第1表参照）。

【西側】

当初の拝領者である橋本敬近から、その次代喜八郎（敬周）が引き継いだ（第8・9図）⁽⁹⁾、小石川金杉横町通高井十左衛門上地222坪との引き替えが享保18年（1733）6月2日に許可され

(9) 「御府内場末往還其外沿革図書」の「享保二酉年之形」・「享保七寅年之形」ともに西側屋敷地には「橋本喜八郎」、つまり敬近の次代敬周の名が記されているが、「寛政重修諸家譜」によれば相続は享保8年（1723）3月5日のことで錯誤とみられる。

ると同時に上地されて⁽¹⁰⁾、同年 10 月 18 日に東隣の屋敷地所持者大前吉十郎(房次)の預地となり(第 19 図)、間もない同年 11 月 16 日に土山甚五郎(昌紀)へ下された(第 20 図)。土山は拝領当時は支配勘定を務める御家人で、元文 5 年(1740) 6 月 22 日に旗本に取り立てられた。その所持は続き(第 10 図)⁽¹¹⁾、没後は次代甚十郎(紀時)が引き継いだことが確認されるが(第 11 図)、表二番町原田弥右衛門上地のうち 250 坪との引き替えが安永 4 年(1775) 正月 22 日に許されて上地となり⁽¹²⁾、同年 10 月 29 日には北・南 125 坪ずつに二分割されて、北側が鶴田初三郎へ、南側が木村周蔵(光休)へ、それぞれ与えられた(第 21 図)。両人は普請役を務める御家人であった。

それから北側の屋敷地は天明 7 年(1787) 10 月、理由は不詳だが鶴田より上地となって翌天明 8 年(1788) 8 月 7 日に平田恵十郎が拝領した。平田もまた普請役を務める御家人であった。そして下った嘉永 7 年(1854) 10 月の「御府内場末往還其外沿革図書」の「当時之形」に「平田順之助」(第 12・16 図)、また慶応年間(1865～1868)の様相とみられる「江戸絵図 3 号」に一部判読不能ながら「平■順■」と見え(第 17 図)、幕末まで平田の所持が続いたものと考えられる。

一方南側の屋敷地は、寛政 7 年(1795) 7 月 28 日に木村光休より旗本小林七郎右衛門(正武)へ相對替で譲渡されて(第 3 表)、その後は嘉永 7 年 10 月の「御府内場末往還其外沿革図書」の「当時之形」に「小林松之丞」とあり(第 12・16 図)、安政 3 年(1856)頃幕府作成とされる「諸向地面取調書」でも同人が所持しており、正武の獲得以来小林家が代々所持してきたものとみられる。ただし「同」によれば調査地の小石川白山御殿跡 125 坪は「地守附置」、すなわち所持はしたものの居住はしていなかったことが判明する。そして慶応年間の「江戸絵図 3 号」になると「大村釧七郎」の名が記されており(第 17 図)、時期・方法は不詳だが、旗本大村釧七郎の所持するところとなったもようである。

【東側】

当初の拝領者である大前重職から次代吉十郎(房次)、熊次郎(房明)と所持を引き継いでもようだが(第 7～11 図)、房明のとき、明和 5 年(1768) 9 月 26 日に切坪相對替によって 250 坪のうち 200 坪を旗本小川長十郎(康慶)に譲渡して、大前は 50 坪の所持を続けていた。しかしそれが寛政 9 年(1798) 5 月に上地されて、同月晦日に隣地の所持者小川長左衛門(康甲)に預けられた(第 22 図)。このとき作成された「屋敷渡預絵図証文」の絵図から、切坪相對替で大前が残した所持地は北東角の 50 坪であったことが判明する。

一方小川康慶が獲得した 200 坪は次代康甲に引き継がれたが、寛政 9 年 7 月 16 日旗本蔭山徳次郎(広郷)に、天保 3 年(1832) 12 月 29 日に旗本堀田甚兵衛に、嘉永元年(1848) 7 月 16 日には旗本渡辺伊兵衛に、何れも相對替により所持者が推移し(第 3 表)、以後は嘉永 7 年 10 月の「御府内場末往還其外沿革図書」の「当時之形」(第 12・16 図)、安政 3 年頃の「諸向地面取調書」とも渡辺の所持が確認される。ただし「同」によれば「地守附置」で居住はしていなかった。そして慶応年間の「江戸絵図 3 号」では「長谷川又三郎」の名が記されており(第 17 図)、時期・方法は不詳

(10) 「屋敷渡預絵図証文」(国立国会図書館デジタルコレクション)。

(11) 「御府内場末往還其外沿革図書」の「延享五辰年之形」の西側屋敷地には「土山勘三郎」と記されており(第 10 図)、「甚」を「勘」と錯誤したもようである。

(12) 同上。

だが旗本長谷川又三郎に所持が移行していたようである。

さて北東角の 50 坪については、寛政 9 年 5 月の大前よりの土地後は暫く隣地の所持者である小川・蔭山の預地となっていたが（第 1 表）、文化 9 年（1812）8 月 5 日になって丸山奥右衛門が拝領することとなった。丸山は御鷹野方を務める御家人であった。そして文政元年（1818）7 月 14 日、相對替により丸山から小川勇八に譲渡された（第 3 表）。小川もまた普請方改役を務める御家人で、その後は嘉永 7 年 10 月の「御府内場末往還其外沿革図書」の「当時之形」（第 12・16 図）、安政 3 年頃の「諸向地面取調書」ともに「小川鑓之助」の所持となっており、勇八以来小川家の所持が続いたとみられる。ただし「諸向地面取調書」によれば「地守附置」で居住はしていなかった。そして慶応年間の「江戸絵図 3 号」では一部判読不能ながら「中内■■右衛門」の名が見え（第 17 図）、時期・方法は不詳だが所持者が中内某に移行していたようである。

2. 遺構・遺物からみる土地と利用

1. 小石川御殿と千川上水⁽¹³⁾

【描かれた上水樋と遺構】

発掘調査では、小石川御殿を囲繞した堀跡と堀への取水口に関わるとみられる遺構が検出された。小石川御殿の堀は水堀で、千川上水を引いたものであったことは知られている。

前述のように、調査地は概ね小石川御殿北西角の内・外に当る。「小石川御殿図」（第 23 図）のその辺りの描写には、広道のところに御殿の堀に突き当たる平行線と「水道、上ハ道」の記載、さらにその続く先、堀の内側に短い平行線と「爰へ出」の記載がある。すなわち「水道」とは千川上水で平行線はその樋線とみられ、これが広道の地下を通して堀側面の「爰」に出ていたもようを描いたと理解され、この絵図から調査地が、暗渠で引水した千川上水の堀への落ち口に当たったことが改めて認識される。

【千川上水の概要】

幕府普請奉行上水方を務めた石野広通が寛政 3 年（1791）に作成した『上水記』によれば、千川上水は五代將軍綱吉の代、元禄 9 年（1696）に初めて出来した小石川御殿・湯島聖堂・東叡山（寛永寺）・浅草御殿（浅草寺）への上水で、保谷新田から巢鴨村まで 5 里 24 町（約 20km）の白堀（素掘りの開渠）だったという⁽¹⁴⁾。そして巢鴨村からは樋（暗渠）で、江戸市中の本郷・湯島・外神田から下谷・浅草辺りにまで給水した。

その流路の概ねは「千川上水江戸府内絵図」（第 24 図）から知ることができる。この絵図は当初より千川上水の普請と管理に当たった千川家に伝来した⁽¹⁵⁾。描写内容からその年代は、吉祥寺裏手にある「御鷹場」は播磨国姫路藩榊原家の駒込千駄木林近所 1 万坪の土地が享保 2 年（1717）4 月 16 日、御鷹匠頭戸田五助・小栗長右衛門組に御鷹部屋御用屋敷として渡されたもので⁽¹⁶⁾、したがってこれが

(13) 千川上水については東京学芸大学近世史研究会編『千川上水・用水と江戸・武蔵野』（名著出版、2006 年）で種々検討されている。うち第二章・山端穂「千川上水の開設」と第四章・古谷香絵「千川上水と江戸の町」は本稿と史料や視点が重なるところが少なくない。

(14) 『上水記』巻八（国立公文書館デジタルアーカイブ）のうち「千川上水之事」。

(15) 練馬区立石神井公園ふるさと文化館所蔵「千川家文書」291。

(16) 「屋敷渡預絵図証文」・「屋敷書抜」（国立国会図書館デジタルコレクション）。

上限となる。一方下限は図中「松平日向守」とある浅草御門外の豊後国杵築藩松平家上屋敷は享保4年(1719)3月に上地されて翌月9日には町地に転換しており、そのときとなる。つまり概ね享保2～4年の様相と判断される⁽¹⁷⁾。

小石川御殿はこの年代には既に撤廃されており、したがって「小石川御殿跡」と描写され、千川上水も「小石川御殿へ水筋、只今相懸り不申候」と当時は通水していなかった旨が記されている⁽¹⁸⁾。

【小石川御殿へ水筋の位置】

小石川御殿へ至る千川上水の水筋を検討するため、まず「千川上水江戸府内絵図」からその周辺をトレースした(第25図)。これによれば千川上水は北上したのち中山道南側に沿って間もなく3本に分れ、北から1本目は途中四角形の描写を経て北方に屈曲し、中山道に沿いの「水野隼人正」(松本藩水野家巢鴨屋敷)、「松平加賀守」(加賀藩前田家駒込屋敷)ほかへの水筋となり、これが江戸市中への給水経路となる(以下、水筋①)。そして2本目は「小石川御殿へ水筋」(同②)、3本目は「大谷」方面へ南下する(同③)。

次に「江戸水道配水図」より「千川上水江戸府内絵図」のトレース部分(第25図)に該当する範囲を切り取った(第26図)。「江戸水道配水図」もまた千川家に伝来した、江戸五上水(玉川・神田・青山・三田・千川)の流路を描いた図である⁽¹⁹⁾。これによれば千川上水は中山道南側で「千川水門」及び四角形の描写を経て北に屈曲し中山道沿いの「水野出羽守」、「松平加賀守」等屋敷への水筋となっている。ここに描かれた四角形は溜池(「溜堀」)を表し、水門はその上流側にあったとみられる⁽²⁰⁾。したがってここが開渠(白堀)と暗渠の境目だったと理解される。そしてこの水筋は「千川上水江戸府内絵図」の水筋①と同一に見て取れ、つまり水筋①の四角形も溜池を表現したものといえることができる。

指摘したいのは「小石川御殿へ水筋」である水筋②について、第一にそれが溜池より上流で分岐していること、第二に水筋をそのまま延長していくと「小石川御殿跡」の北西部に行き当ることである。

先に第二の点から、堀の上水落ち口が御殿北西部にあったことは「小石川御殿図」(第23図)の描写と発掘調査での検出遺構から確実である。これと水筋②の描写を考え合えると、千川上水の小石川御殿への水筋は白堀から分岐した地点と御殿との最短距離を採って開鑿されたもようが窺える⁽²¹⁾。

【小石川御殿へ水筋による給水】

そして上で指摘した第一、水筋②が溜池より上流で分岐した事実と意味は、次の史料から判明する。

(17) 「屋敷渡預絵図証文」享保4年3月2日・4月9日付。念のため「寛政重修諸家譜」で絵図に記名された武家、計31のうち重複5・「寛政譜」無記載1を差し引いた25名を調べた結果、享保2～4年の間の官職・受領名が絵図記載名と齟齬する者は3名に留まり、したがって推定した年代は妥当といえる。

(18) 文京区教育委員会編『東京都文京区 柳沢家駒込屋敷(六義館・六義園)跡 第4地点一文京区立六義公園運動場管理棟改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』(文京区、2020年)は千川上水の六義園への流路検討に当りこの図を用いるが、小石川御殿に纏わる文字読解及び年代を本稿の見解と異にしている(113～114頁)。

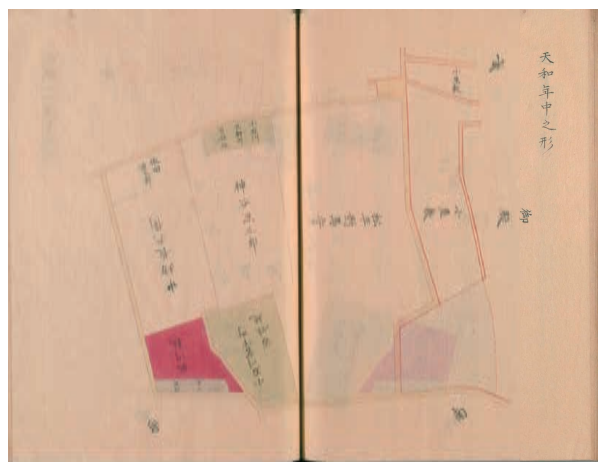
(19) 前掲註(15)「千川家文書」279。なおこの絵図は『東京市史稿 上水篇 第一』に「正徳末頃ノ上水図」(正徳5年6月～享保3年10月)として掲載されている。

(20) 練馬区立石神井公園ふるさと文化館副館長渡邊嘉之氏よりご教示を頂いた。

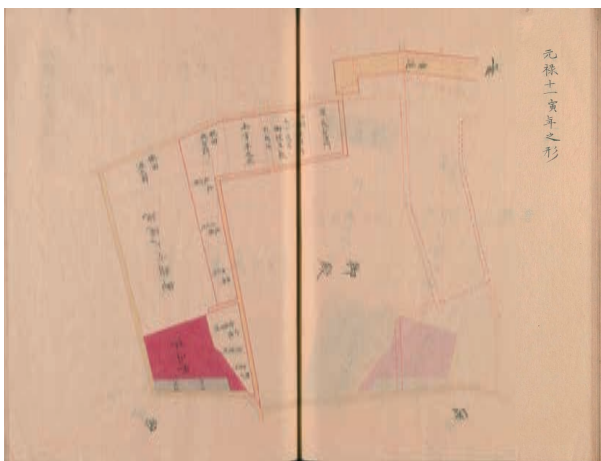
(21) 大松騏一『千川上水三百年の謎を追う』(東京銀座出版社、1996年)は小石川御殿への水筋の現代を「旧中仙道(地蔵通り)かその西側の(中略)高台に沿って南へ進み、十文字高校(北大塚三丁目)あたりから、千石三・四丁目の境界辺を通り、文京区立十中の方から堀へ引かれた」(30頁)と推定しており、概ね白堀分岐点と御殿との最短距離に合致しており妥当と思われる。



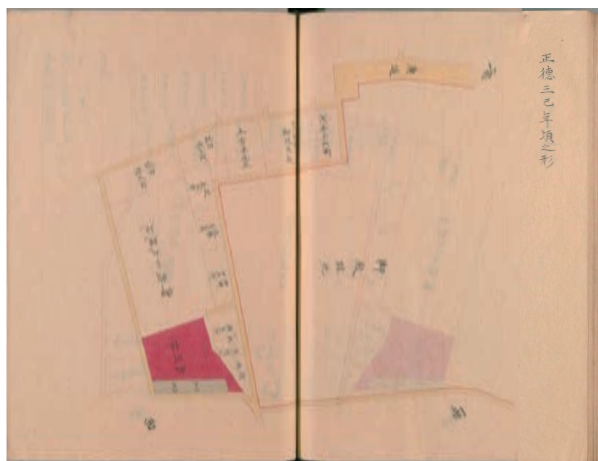
第3図 御府内場末往還其外沿革図書 延寶年中之形
国立国会図書館所蔵



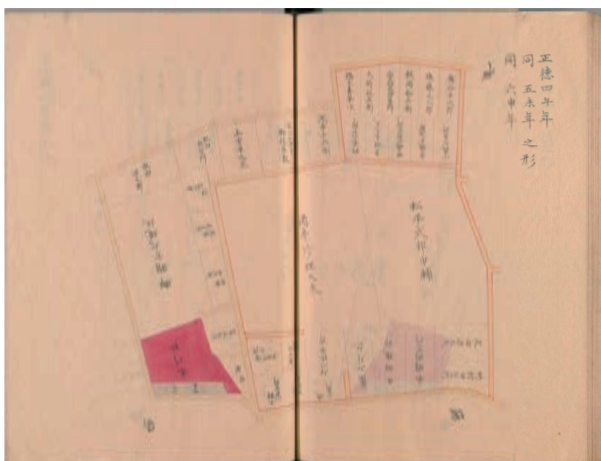
第4図 御府内場末往還其外沿革図書 天和年中之形
国立国会図書館所蔵



第5図 御府内場末往還其外沿革図書 元禄十一寅年
之形 国立国会図書館所蔵



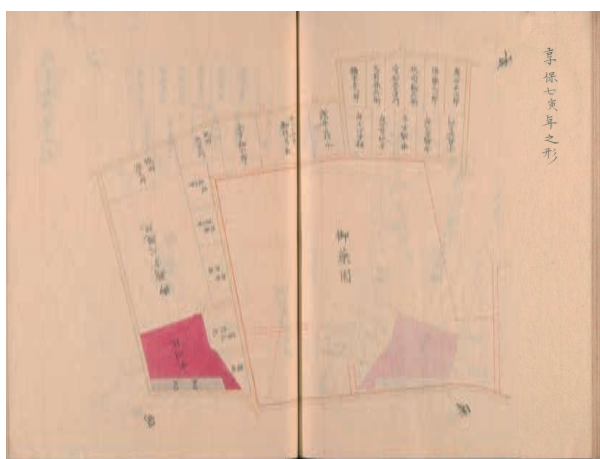
第6図 御府内場末往還其外沿革図書 正徳三巳年頃
之形 国立国会図書館所蔵



第7図 御府内場末往還其外沿革図書 正徳四年・
同五年・同六年之形 国立国会図書館所蔵



第8図 御府内場末往還其外沿革図書 享保二酉年之
形 国立国会図書館所蔵



第9図 御府内場末往還其外沿革図書 享保七寅年之形 国立国会図書館所蔵



第10図 御府内場末往還其外沿革図書 延享五辰年之形 国立国会図書館所蔵



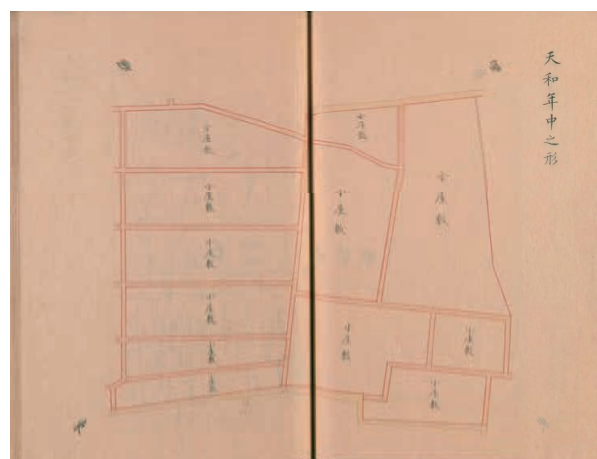
第11図 御府内場末往還其外沿革図書 宝暦二申年之形 国立国会図書館所蔵



第12図 御府内場末往還其外沿革図書 当時之形（嘉永7年） 国立国会図書館所蔵



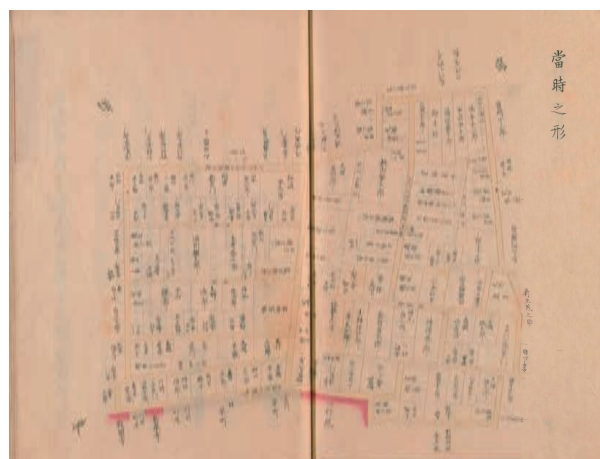
第13図 御府内場末往還其外沿革図書 延宝年中之形 国立国会図書館所蔵



第14図 御府内場末往還其外沿革図書 天和年中之形 国立国会図書館所蔵



第15図 御府内場末往還其外沿革図書 元禄十一寅年之形 国立国会図書館蔵



第16図 御府内場末往還其外沿革図書 当時之形（嘉永7年） 国立国会図書館蔵

《史料》「千川上水録」⁽²²⁾のうち「千川上水道古来御用ニ而相懸り申候御場所、并御武家・寺社・町方・野方分水之書上」

（前略）

- 一、巢鴨村水口竹戸樋、村数合テ拾七ヶ村、御領・私領共、此町反百畝余、此分水百四拾八才、
 - 一、小石川御殿御堀江相掛り候戸樋内法〔壹尺貳寸二毫貳寸〕、此分水百四拾四才、
 - 一、巢鴨溜メ堀方本郷四丁目迄大通、町間凡五拾町程、此分水百九拾貳才〔壹尺貳寸二毫貳六寸〕、
- （中略）

- 一、右之通、野辺村方江相掛り候分水百四拾八才、
- 一、小石川御殿江相懸り候分水百四拾四才、
- 一、江戸之内江相掛候分水百九拾貳才

（後略、下線引用者）

これは千川上水の分水ごと、水口の樋の内法と給水量を書き上げた箇所である。見るべきは下線部で、分水を「野辺村方」、「小石川御殿」、「江戸之内」の順に区分して記しているところである。「野辺村方」は巢鴨村より上流の村方⁽²³⁾、「小石川御殿」は文字通り、「江戸之内」は巢鴨村溜池より下流の江戸市中のことで、つまり上流から下流へ、分岐した順に記しており、したがって「江戸之内江相掛候分水」とは別に、それより上流に「小石川御殿相懸り候分水」の水口が設けられていたと読み取れる。「江戸之内江相掛候分水」は水筋①に相当し⁽²⁴⁾、それより上流で分岐する「小石川御殿江相懸り候分水」は水筋②に等しいと判断される。

もうひとつ見るべきは給水量で、「野辺村方」は148才(約267リットル)、「小石川御殿」は144才(約260リットル)、「江戸之内」は192才(約350リットル)とある。「野辺村方」は17箇村100畝余(約1万㎡)の灌漑を賄い、「江戸之内」は「千川上水江戸府内絵図」に見るような広い市中を潤すに足

(22) 前掲註(15)「千川家文書」241。

(23) 宝永4年、巢鴨村より上流の村方からの嘆願により灌漑用水として分水が認められた。

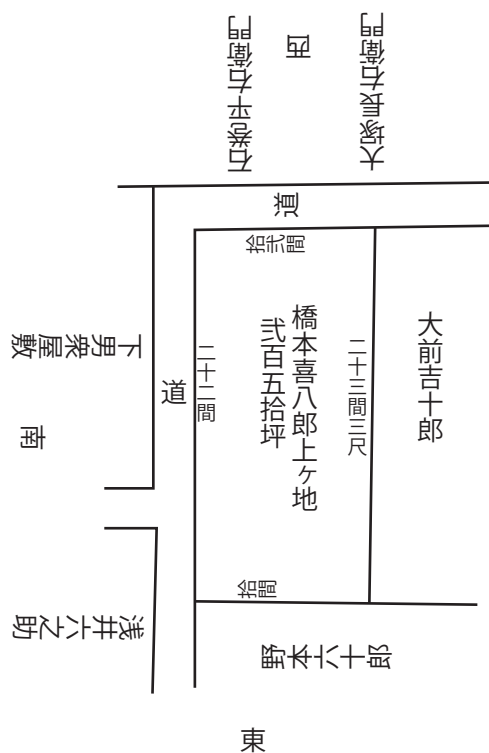
(24) 引用《史料》中の「(中略)」部分には「巢鴨溜メ堀」より先の給水域が概略的に記されており、それは「千川上水江戸府内絵図」に示された給水域に概ね合致する。



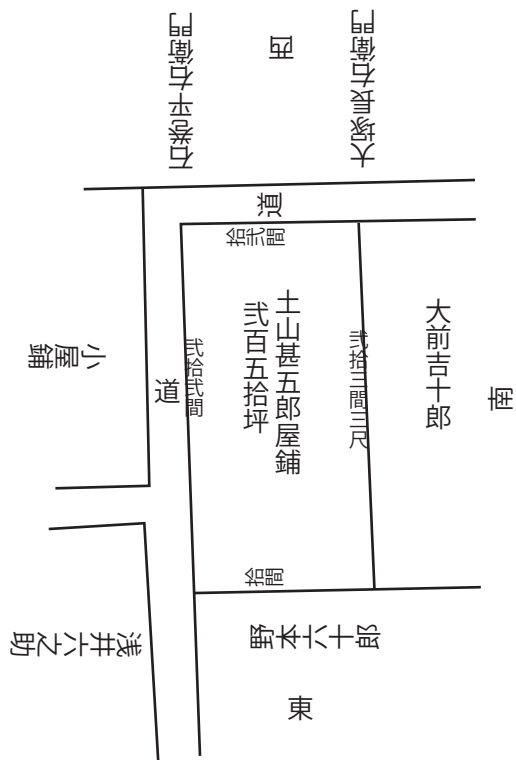
第 17 図 江戸絵図 3 号（慶応年間、部分）国立国会図書館所蔵



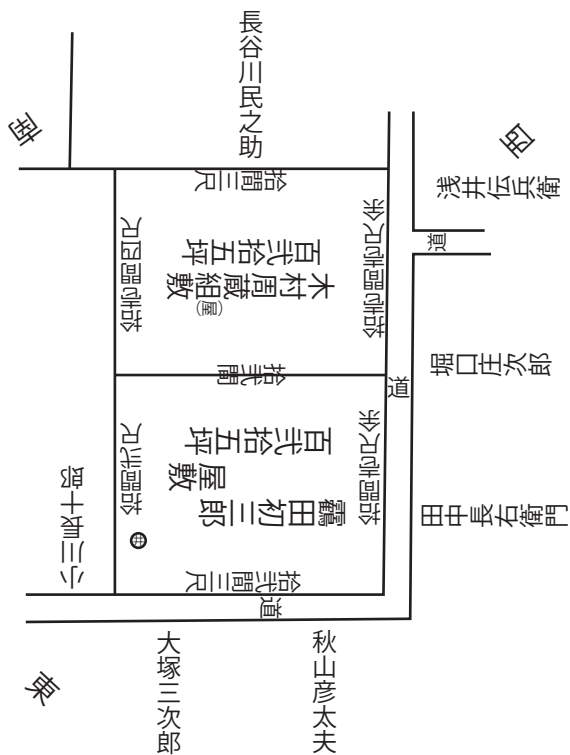
第 18 図 正徳 4 年 3 月晦日付 屋敷渡預絵図証文（橋本敬近・大前重職拝領）トレース図 国立国会図書館所蔵



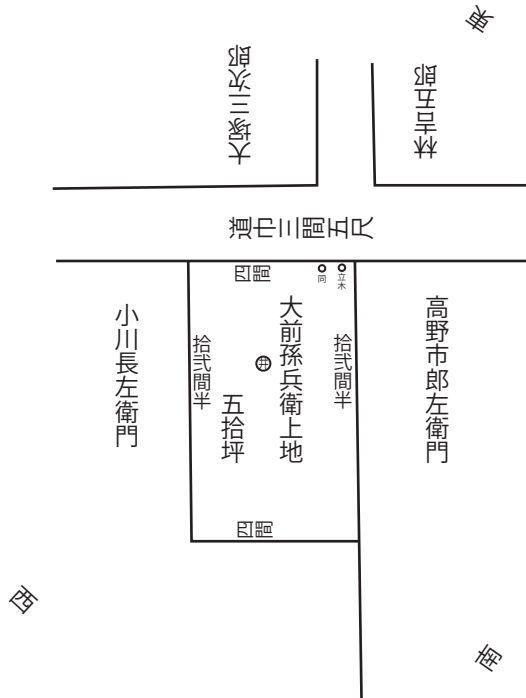
第 19 図 享保 18 年 10 月 8 日付 屋敷渡預絵図証文
(橋本敬周上地大前房次預り) トレース図
国立国会図書館所蔵



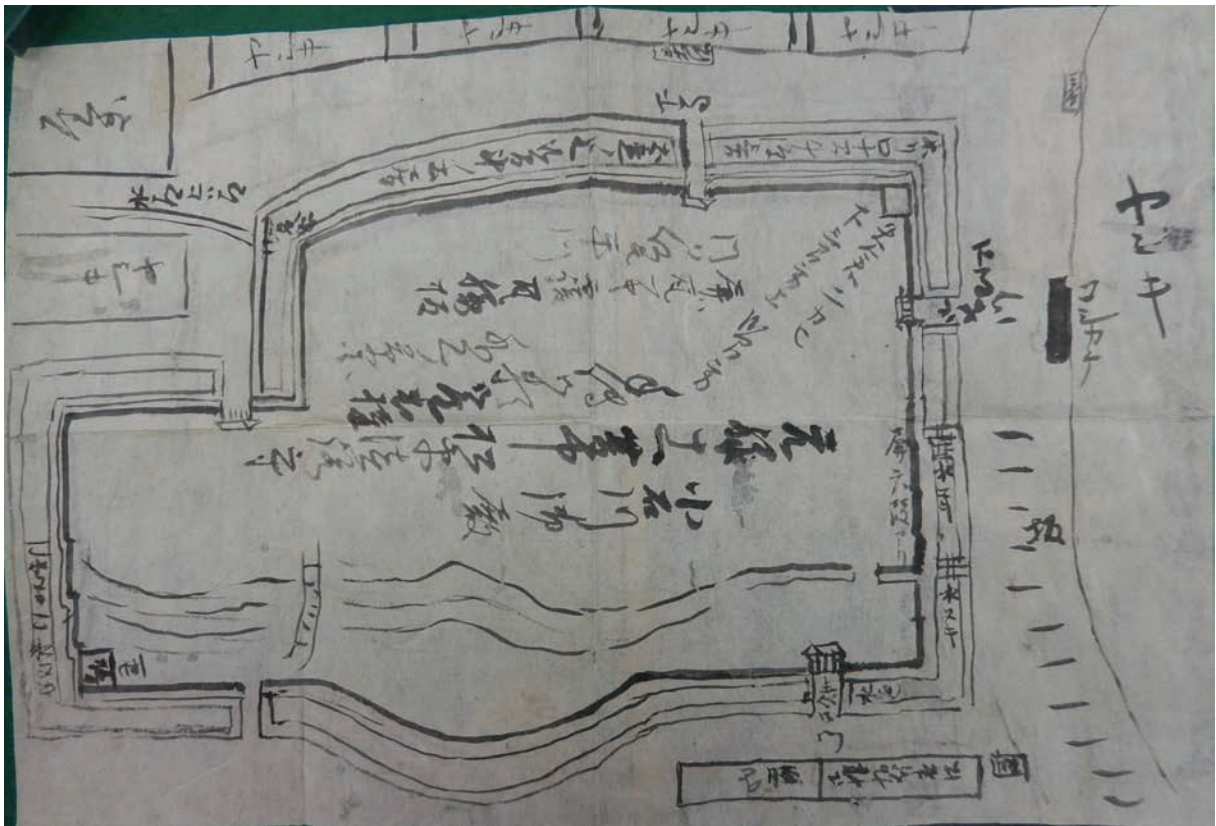
第 20 図 享保 18 年 11 月 16 日付 屋敷渡預絵図証文
(橋本敬周上地土山昌紀拝領) トレース図
国立国会図書館所蔵



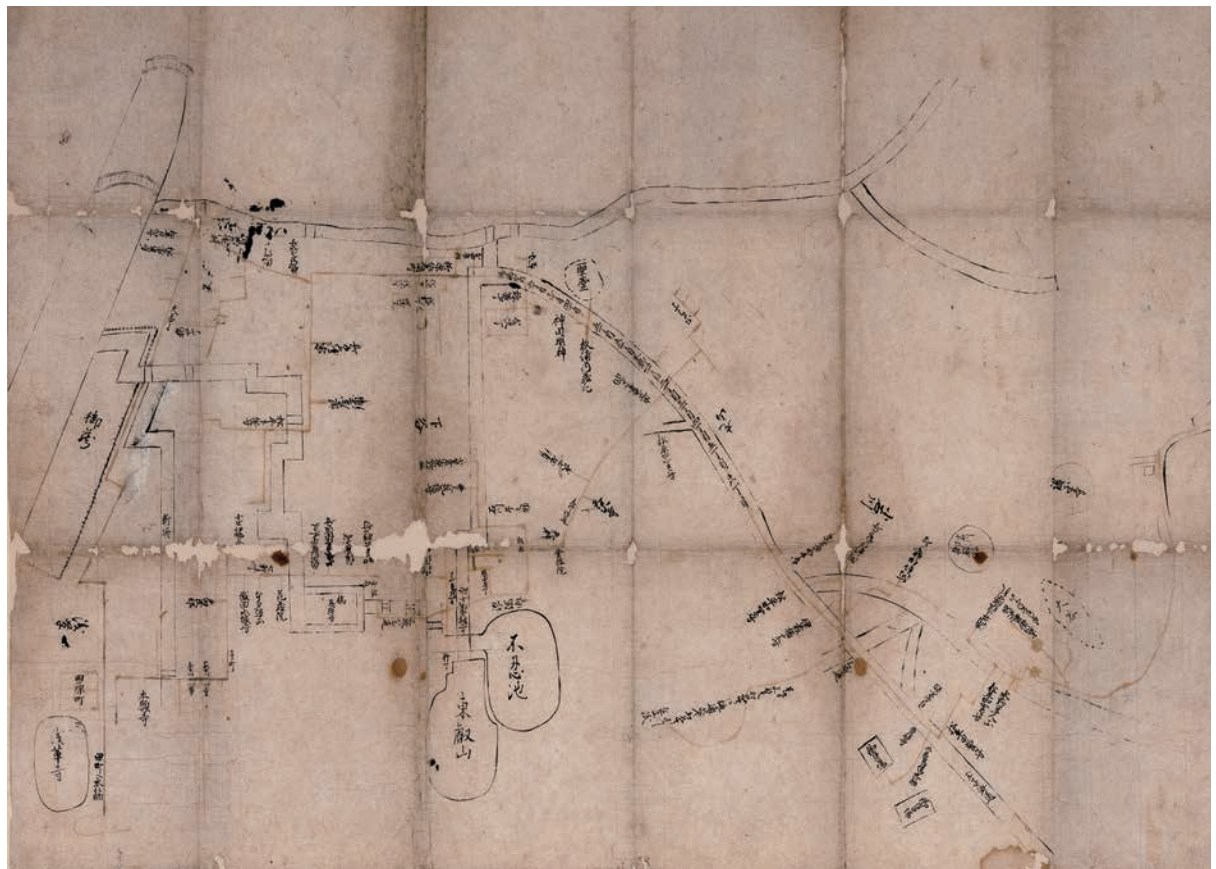
第 21 図 安永 4 年 10 月 29 日付 屋敷渡預絵図証文
(土山紀時上地鶴田初三郎・木村光休拝領)
トレース図 国立国会図書館所蔵



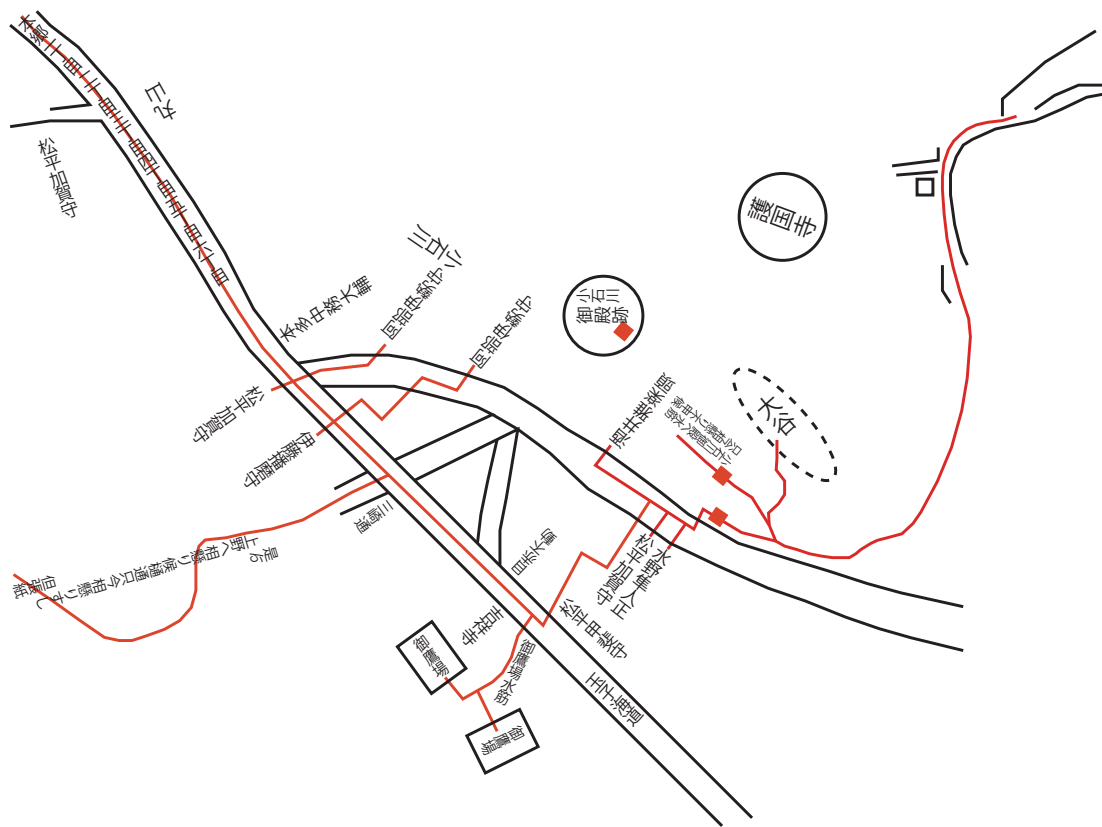
第 22 図 寛政 9 年 5 月 晦日付 屋敷渡預絵図証文
(大前孫兵衛上地小川康甲預り)
トレース図 国立国会図書館所蔵



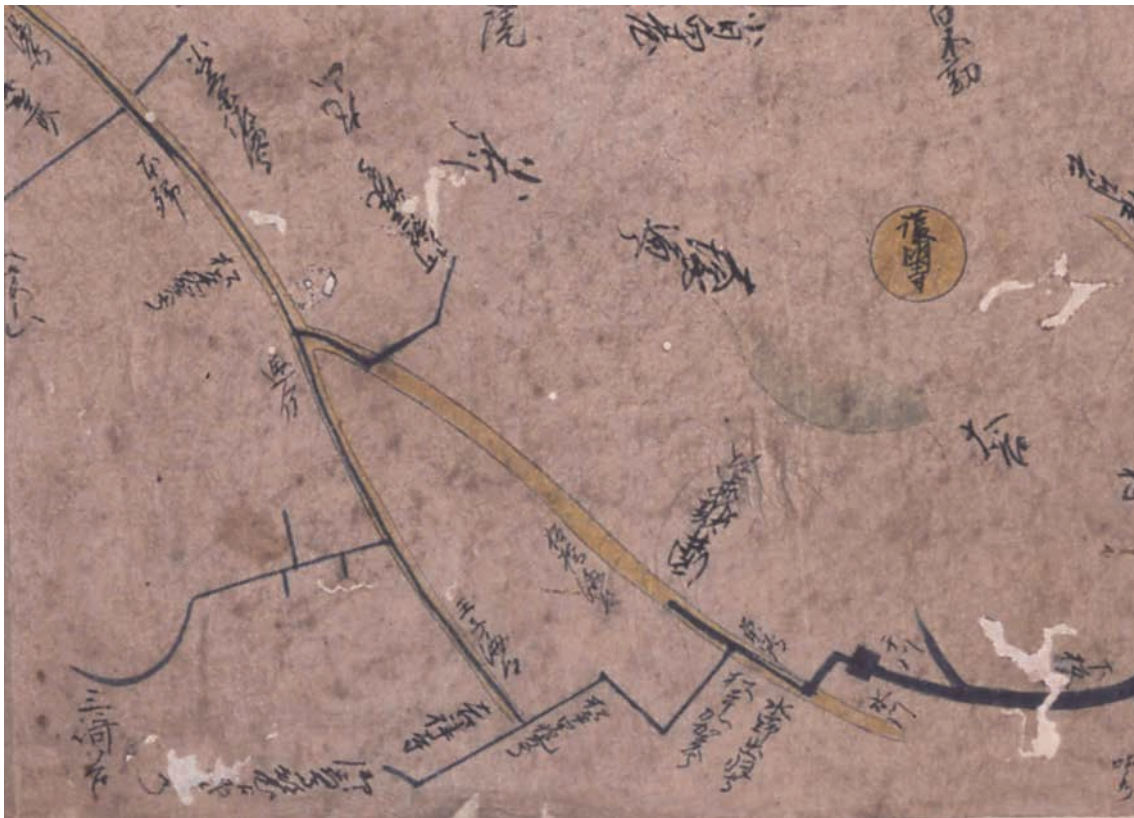
第 23 図 小石川御殿図 文京ふるさと歴史館所蔵



第 24 図 千川上水江戸府内絵図 練馬区立石神井公園ふるさと文化館所蔵



第 25 図 千川上水江戸府内絵図（部分トレース図） 練馬区立石神井公園ふるさと文化館所蔵



第 26 図 江戸水道配水図（部分） 練馬区立石神井公園ふるさと文化館所蔵

る量とみられるが、小石川御殿への水量に比すと前者は大差なく、後者も 1.3 倍ほどに留まっており、御殿堀への給水量がいかに破格であったかという理解に至る。

すなわち千川上水から小石川御殿への給水は、専用の水筋で優先的かつ大量に確保されていた。これにより「坂の内五段の瀧ありて、石垣より落るありさまハ絶景也、」⁽²⁵⁾と言わしめた景観は現出したのであった。

【小石川御殿へ水筋の普請・管理】

千川上水の普請は主に徳兵衛・太兵衛が請け負い、両人はその功で幕府から「千川」姓を与えられ、以後も両家で管理・運営を担ったとされるが、小石川御殿への水筋に関しては必ずしもそうではなかったもようが、白山前町千川屋敷に纏わる史料から窺える。

まず太兵衛の孫、千川幸治郎と江戸町年寄樽屋役所の問答から、「一、小石川差ヶ谷町屋鋪之儀、何訳ニ而私計に御座候哉御尋ニ御座候、此儀者元来御医師余語古庵老拝領地ニ御座候処本郷御弓町屋敷替御座候而上り地ニ罷成候間、祖父太兵衛御願申上拝領仕候由承り申候」⁽²⁶⁾、なぜ小石川指（差）ヶ谷町屋敷（＝白山前町千川屋敷）は幸治郎ばかりの所持なのかとの樽屋役所からの尋ねに、これは医師余語古庵の拝領屋敷だったが同人が本郷御弓町屋敷へ替地となり上地されたので、祖父太兵衛が願って拝領したと承知していると幸治郎は答えた。つまり白山前町屋敷は太兵衛が自らのために願って拝領し、単独で同家代々が所持してきたことがわかる。

さらに幸治郎が幕府上水奉行に提出した書付には「小石川白山前町千川屋鋪拝領仕罷在候儀者、元禄年中小石川御殿御堀へ御上水相懸ヶ候ニ付被下置候地面」⁽²⁷⁾、白山前町屋敷の拝領は小石川御殿堀への上水設置に対するもので、したがってその拝領者である太兵衛が小石川御殿への水筋を普請したと解される。

加えて『御府内備考』の「白山前町千川屋鋪」の項に「元禄九子年中千川上水請負人太兵衛与申者拝領仕候処、其後上水御差留ニ而上ヶ地ニ相成、正徳四甲午年二月廿七日、小石川御殿地上水請負人役屋敷上り地与相唱、白山前町名主六之丞江御預地ニ罷成居候処、」⁽²⁸⁾と、小石川御殿への上水差し止めで白山前町屋敷は太兵衛より上地され、その後は「小石川御殿地上水請負人役屋敷上り地」と呼ばれたといい、白山前町屋敷は明らかに小石川御殿への水筋を担当することに対して与えられた役屋敷であった。

(25) 『御府内備考 卷之四十一 小石川之一』（国立国会図書館デジタルコレクション）のうち「白山御殿蹟」。

(26) 「千川一件」（前掲註(15)「千川家文書」21）のうち明和5年（1768）8月6日付「御吟味御尋之趣左ニ御談申上候」。なお後出の史料は白山前町千川屋敷拝領を元禄年中や同9年とするが、余語古庵の本郷御弓町屋敷は「屋敷渡預絵図証文」から宝永元年（1704）7月27日に明地を拝領したものと判明、さらに「御府内往還其外沿革図書」（『江戸城下変遷絵図集 御府内沿革図書』第14・15巻、原書房、1986年）の絵図によれば、小石川指ヶ谷町屋敷（白山前町千川屋敷）は「元禄十二卯年之形」までは「余語古庵町屋」、次ぐ「享保十巳年之形」から「千川屋敷」となり（『同』第15巻、7・9頁）、一方本郷御弓町屋敷は「元禄十二卯・同十六未年之形」までは「明地」、次ぐ「宝永元申年之形」から「余語古庵町屋」となっており（『同』第14巻、77・79頁）、前の「屋敷渡預絵図証文」の内容と合致する。したがって太兵衛の千川屋敷拝領は、幕府史料によれば宝永元年7月27日以降のこととなる。

(27) 前掲註(26)「千川一件」のうち明和5年12月2日付「乍恐書付を以奉申上候」。

(28) 『御府内備考 卷之四十四 小石川之四』（国立国会図書館デジタルコレクション）。

以上から小石川御殿へ水筋の普請・管理には、太兵衛が専ら当たっていたものと推定される⁽²⁹⁾。

【小石川御殿と千川上水の廃止】

小石川御殿は既述のように正徳3年4月19日に廃止が決まり、翌4年2月19日には跡地が武家屋敷地として配分され始めた。その造成は堀を埋め立てて行われたのであり、必然的に堀への給水はそれに先立ち止められた筈で、恐らく白堀からの分水口を閉じるのがその最もあり得た方法だったと考えられる。樋は掘り出して「古樋」として売却や再利用された事例があり⁽³⁰⁾、この場合もその可能性がある。

千川上水はこうして小石川御殿への給水を終えたが、江戸市中への供給は享保7年(1722)まで続いて停止した。その顛末は千川幸治郎によると「一、正徳四年ニ白山御殿御引被遊候得共、其後享保七寅年迄上水有之、則寅年御不用ニ罷成候故其節御上水相止ミ申候、」⁽³¹⁾、正徳4年に小石川御殿は撤廃されたが、上水はその後享保7年まで存続し、そして同年不用になったのでその機に停止になったという⁽³²⁾。

興味深いのは、千川上水は享保7年まで続いたのだからその廃止の要因は小石川御殿廃絶ではなく「御不用」、つまり幕府に不用となったからだと述べている点である。実は享保7年10月、千川上水と同時に青山・三田・本所(亀有)の3上水も幕命により廃止されており⁽³³⁾、つまりこのとき江戸6上水のうち玉川・神田以外の「中興」の4上水は廃止するという政策の大転換が図られたのである。この事実を踏まえれば、千川上水廃止の契機は小石川御殿廃絶ではなく、幕府政策にあったことは明白である⁽³⁴⁾。

2. 旗本大前家屋敷の瘡守稻荷

【瘡守稻荷の痕跡】

発掘調査で検出された土坑から、大量のカワラケと丸い豆粒大の土玉が出土した。これは小石川御殿の堀埋め立て後に造成された武家屋敷に伴うもので、位置は調査地東方だったことから大前家屋敷

(29) なお太兵衛は根津惣門前橋三ヶ所新規・修復とも自分入用で勤めることを出願して認められ、正徳4年3月22日に白山前町千川屋敷を役屋敷として再び下され、以後太兵衛家が代々受け継いだ(前掲註(28)『御府内備考』のうち「白山前町千川屋舗」、「屋敷渡預絵図証文」)。

(30) 例えば本所上水の廃止後にそうした事例がみられる(「享保撰要類集」、『東京市史稿 上水篇 第一』、341～344頁)。

(31) 前掲註(26)「御吟味御尋之趣左ニ御談申上候」。

(32) 前掲註(14)「千川上水之事」によれば享保7年8月に廃止決定、同年10月2日に巢鴨村白堀溜が閉められた。なお巢鴨村より上流の灌漑用水部分(前掲註(23)参照)は市中への給水停止に関らず「千川用水」として続行した。

(33) 同上。

(34) 千川上水は小石川御殿への給水が第一義だったとの見方があるが(前掲註(13)山端・古谷論稿63・127頁)、御殿への給水は開鑿から2年も後の元禄11年で当初計画にはなかった可能性があり、また述べたように上水廃止の契機が御殿廃絶でなかったことからそうとは判断し難く、むしろ開鑿には加賀藩前田家と柳沢吉保が深く関わったようすが諸史料に窺える。すなわち①元禄9年5月の着工時には本郷までの計画だったこと(「御上水永々御請負定手形之事」、「千川家文書」1)、②開鑿経費の負担は「御屋舗方」(武家)金1,393両ほど、「寺方」金2両3分ほど、「町方」金7両2分ほど、「加賀守様」金385両ほど(「千川上水録」、「千川家文書」241)、つまり加賀藩前田家が約46%も負担したこと、③加賀藩の平尾・駒込屋敷に引水されたこと(『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』第三分冊、東京大学埋蔵文化財調査室、1990年、15頁・「千川上水江戸府内絵図」)、④元禄8年4月、加賀藩駒込屋敷の一部4万7,000坪が上地されて柳沢吉保に下賜された翌年に着工したこと、⑤その柳沢家駒込屋敷庭園「六義園」に引水されたことなどが今のところ見出される。本稿の主旨に外れるのでこれ以上述べるのは控えるが、千川上水開鑿については再考の余地があると考えられる。

に関わる遺構と判断された。

享保 17 年（1732）刊の『江戸砂子』に「○瘡守稲荷 御殿跡、大前孫兵衛殿やしきの鎮守也、小児の顔・かしらなどのでき物、此神にいのれはふしきの奇瑞有、願成就の時、土団子といふて土を以たんごのこことくまろめて神前にさゝぐ也、やしきの鎮守なれば初尾等かつて請られす、」⁽³⁵⁾、すなわち小石川御殿跡の大前孫兵衛（重職）の屋敷には「瘡守稲荷」が鎮守として祀られており、子供の湿疹の治癒祈願に靈験があつて、成就時は土をだんご状に丸めた「土団子」を供えるのが習わしであつたという。

以上から出土した土玉は供物の土団子、カワラケはその皿とみられ、かつての大前家屋敷に瘡守稲荷が存在した痕跡が認められたのである。

【瘡守稲荷の勧請】

大田南畝著「武江披砂 外編」に「白山御殿跡瘡守稲荷」についてこうある。「宝永年中和田倉御用屋敷二住居之節、京都吉田家之雑掌屋敷江相越、摂津国芥川瘡守稲荷を屋敷之鎮守ニ勧請致ス、正徳年中右之御用やしき一統引払、白山御殿跡ニ而替地拝領致候節右鎮守をも白山へ移候処奇瑞之義有之、信仰之者も有之候由之事、大前氏屋敷」⁽³⁶⁾。

勧請したのは摂津国芥川（現大阪府高槻市内）の笠森稲荷で、『摂津名所図会 五』によれば「世人瘡神と称して土の団子を供じ、瘡毒を病もの遠近よりこゝに来て祈願す、笠と瘡と訓を通ず、」⁽³⁷⁾、つまり「笠」が「瘡」と同訓のため「瘡神（かみ）」と呼ばれ、「瘡（か）」は皮膚のでき物・腫物や瘡蓋、瘡毒（梅毒）の俗称であり⁽³⁸⁾、そうした罹患者が土団子を供えて祈ったといい、それを大前重職自らが赴き和田倉御用屋敷の住居に勧請して、小石川御殿跡へ替地の際も遷して参詣者に靈験があり信仰を集めたというのである。

【和田倉御用屋敷の瘡守稲荷】

瘡守稲荷を勧請した重職は大前家の初代で、宝永 5 年（1708）2 月 23 日に召されて五代將軍綱吉に仕えた。『寛政重修諸家譜』に「処士にして猿楽の衣装着（イヨウキセ）」とあり⁽³⁹⁾、浪人から能の演者に装束を着せる係として出仕したと判明する。綱吉は能を異常に好み、例えば重職が当初列せられた廊下番は大量に召し抱えた猿楽四座（観世・宝生・金剛・金春）の能役者らのために貞享元年（1684）に新設された奥向番衆で、綱吉が江戸城内で個人的に催す演能を務める役柄であつた⁽⁴⁰⁾。

こうした職務のあり方から、廊下番らは登城に至便な和田倉御門向かいの御用屋敷に住まわされたとみられ⁽⁴¹⁾、重職もその内に住居を与えられたため瘡守稲荷はそこに祀られた。ただし和田倉御用

(35) 「江戸砂子温故名跡誌 卷之三」（京都大学貴重資料デジタルアーカイブ）。

(36) 筑波大学附属図書館所蔵、国書データベース。

(37) 国立国会図書館デジタルコレクション。

(38) 『日本国語大辞典』（小学館）。

(39) 『新訂寛政重修諸家譜』第二十二（続群書類従完成会）、19～21 頁。

(40) 「能楽史概説」（『岩波講座 能・狂言 I』、岩波書店、1987 年）、114～115 頁。なお奥向番衆の土圭間番と綱吉在任中に新設された桐間番・御次番・御近習番も猿楽に関わる役職である可能性が高い。

(41) 和田倉御用屋敷の機能を示す史料は見出されないが、大前重職を含む猿楽に関わり出仕した者、少なくとも 39 名が正徳 4 年 3 月 29・晦日と 6 月 9 日に小石川御殿跡に屋敷地を下され（前掲註（1）拙稿 i、表 2 「正徳 4～6 年小石川御殿跡 拝領者一覧」参照）、間もない正徳 4 年 9 月 13 日に和田倉御用屋敷が廃止されたことから、それが猿楽に関わり出仕した者たちの住居であつたと推定される。

屋敷の敷地のようすから出入りは制約されたと考えられ⁽⁴²⁾、当時の瘡守稲荷が一般に開かれたものだったかは不詳である。

【小石川御殿跡屋敷の瘡守稲荷】

小石川御殿跡に移転してからの瘡守稲荷には多くの祈願者が訪れたようすが諸史料から、また発掘調査からも窺われ、社は自由な参詣が可能な位置にあったと想定される。

前述のように大前家は明和5年9月26日、切坪相對替で小石川御殿跡屋敷250坪のうち200坪を手放したが50坪は残して所持し続け、これが寛政9年5月に上地となった。そして「寺社書上」の大円寺の記載に「境内安置稲荷、尊客者元白山御殿大前孫兵衛殿屋敷ニ安置、去ル寛政九巳年五月十九日当寺へ遷座、(中略) 俗ニ瘡守稲荷ト奉称、」⁽⁴³⁾と瘡守稲荷は寛政9年5月19日に大円寺に遷座と明記されている。その年月は残地50坪の上地と一致しており、したがって瘡守稲荷は大前家が所持し続けた50坪の地にあったと判断され、それは敷地北東角で表通りに面した位置であった(第22図)。

【瘡守稲荷と笠森稲荷】

瘡守稲荷が遷った大円寺は大前家の菩提寺で谷中に所在した。そして同じ谷中の感応寺境内には「笠森稲荷」があり、同訓ながら両社は起立が全く異なるにも関わらず、誤解によりしばしば混同されてきた⁽⁴⁴⁾。

笠森稲荷は『江戸志』に「此稲荷別当御家人倉地甚左衛門と云、稲荷社の地のみ甚左衛門の地也、其以前駒込之瘡守稲荷之別当と争論の事有しか、此かさ守ハ笠ノ字にて駒込の瘡守とハ別社也とて申披済候よし、此稲荷も土の団子を以願をかけ願満して米の団子を備といへり、一体ハ感応寺の門前地の内也、」⁽⁴⁵⁾とあり、御家人(のち旗本)倉地仁左衛門(忠見)が勧請して感応寺境内借地に鎮座したこと⁽⁴⁶⁾、瘡守稲荷と名称の混同をめぐる争ったこと、瘡守稲荷同様祈願時には土団子を捧げたことが判明する。

倉地家は家康よりその子頼宣に附属され紀州藩士となり、享保3年(1718)の將軍吉宗母淨円院の江戸下向に随い幕臣に列した倉地文左衛門(満房)の子が忠見であった⁽⁴⁷⁾。すなわち笠森稲荷の成立はそれ以降となる。明和5年頃から門前の水茶屋鍵屋の娘、通称「笠森お仙」が美貌で評判となり笠森稲荷の知名度も上ったようで、同9年(安永元・1772)刊『再校江戸砂子』に「笠森稲荷」の項目が加筆されたが⁽⁴⁸⁾、「(前略)白山にある所の瘡守いなりハ当社の勧請なりといふ、いつれか新古をしらす」、瘡守稲荷の勧請神は感応寺の笠森稲荷というのが、どちらが新古かはわからないとした。

(42) 和田倉御用屋敷は、廃止後の正徳5年(1715)正月15日、松平(保科)肥後守への預地に際して作成された「屋敷渡預絵図証文」の絵図によれば、門は1箇所のみで長屋と塀に囲われていた。

(43) 「谷中寺社書上三」(国立国会図書館デジタルコレクション)のうち「谷中大円寺」。

(44) 例えば弘化3年(1846)に堀田甚兵衛が著した「飛鳥川」(別名「世のたゝずまひ」)、「江戸沿革」(堀田甚兵衛記)中「谷中の稲荷」は錯誤が甚だしく、現代の事・辞典類も両社を正しく理解して載せるものは管見の限りほばない。

(45) 「江戸志三」(国立国会図書館デジタルコレクション)。これは寛政年間(1789～1801)の成立という。

(46) 「谷中町方書上全」(国立国会図書館デジタルコレクション)のうち「谷中感応寺中門前町」。

(47) 前掲註(39)『新訂寛政重修諸家譜』第二十、24頁。

(48) 「再校江戸砂子温故名跡誌巻三」(国立国会図書館デジタルコレクション)。なお前掲註(35)享保17年刊「江戸砂子温故名跡誌巻之三」には「笠森稲荷」の記載がなく、それは成立前だったか、以後でも名所ではなかったためだろう。なおお仙は明和7年(1770)に倉地忠見の養子政之助(満濟)の妻となり店を退いた。

この記述から当時、笠森稲荷が瘡守稲荷の基は自らだと主張していたことが読み取れ、著者は瘡守稲荷が古くそれはあり得ないと知っていた筈だが、敢えてその真偽には触れずはぐらかしたと解される。しかしこれが結果的に一般に錯誤を生む一因となり、さらに瘡守稲荷が谷中に遷って一層の混乱が生じたのではないかと推察される。

おわりに

本稿で述べた事柄をまとめておく。本調査地は 17 世紀半ば以来、一貫して武家地に利用された。まず館林藩小石川下屋敷の藩士居住域から同藩土屋敷地、そして幕臣屋敷地、その後小石川御殿及び広道となり、再び幕臣屋敷地と変遷して幕末に至ったと明らかにし、それぞれの土地利用のあり方を考えた。

発掘調査の成果に関しては、千川上水は小石川御殿へ専用の水筋で給水されたことを解明し、その経路と普請・管理に考察を加え、また小石川御殿と千川上水開鑿の関係性への再考を促した。そして瘡守稲荷のあり方を、勧請した旗本大前家の履歴と屋敷地の変遷を踏まえて明らかにし、同訓の名を持つ笠森稲荷との錯誤を招いた要因を可能性として示した。

【謝辞】

「千川家文書」の閲覧にあたり、練馬区立石神井公園ふるさと文化館副館長渡邊嘉之様にたいへんお世話になりました。末尾ながら記して感謝致します。

2 笠森稲荷信仰遺構に関する民俗学的考察

長沢 利明*

1 原町西遺跡に残された信仰遺構

2023年5月から2024年3月にかけて実施された原町西遺跡の発掘調査を通じ、近世江戸で顕著な発展を見せた笠森稲荷信仰の痕跡を、明確にとどめる遺構が発見されたことは、まことに特筆すべきことであったといえる。笠森稲荷とはいうまでもなく、近世中期に爆発的に流行した民間信仰神のひとつで病氣平癒、特に性病・皮膚病平癒に絶大な効験のある神とされ、あつい信心と祈願とがそこに寄せられてきたことで知られている。笠森の「笠」とは「瘡」に通じ、性病などによって生じた皮膚のあばたのことを指しているのであるが、それが消え去ることへの祈願の意を込めて「瘡守^{かさもり}」という言葉が生まれたことになる。それが神祠の社号にあてられた時、「笠森」・「瘡守」・「瘡護」などといった具合に、さまざまな表記がなされることになったものの、ここでは一般名称として述べる場合に限って「笠森」の表記を用いることにし、個々の神祠の呼称については、そのつど使い分けることにしたい。

江戸における笠森稲荷信仰のその発祥地のひとつとされているのが、小石川白山御殿跡にあった旗本大前家の屋敷地内なのであって、摂津国島上郡真上村芥川の笠森本祠から勧請された笠森稲荷がそこに鎮座しており、「瘡守稲荷」という称号がそこでは用いられていた。有馬家の水天宮や南部家の南部稲荷などと同様、大名家や武家屋敷内に祀られている屋敷神への参詣を、広く一般庶民にも許して開放していた例は数多く見られるが、大前家の瘡守稲荷もまた同じで、江戸市中に住む多くの信徒らが貴賤を問わず、参詣におとずれていたのであった。その大前家の跡地こそが、まさに今いうところの原町西遺跡なのであったから、信仰の発祥地そのものからその関連遺構が直接、しかも明確に見い出されたことの意義はきわめて大きい。

笠森稲荷への庶民信仰は近世後期に至ってさらに隆盛し、大前家の屋敷内からそれが消え去ったのちも、その分霊が各地へとさかんに勧請され、江戸市中や近郊地域に数多くの分社が生み出されていくことにもなった。そこでの祈願習俗には独特なものが見られ、立願の際には土で作られた黒い団子を神前に奉納し、病氣平癒後の礼参りには米で作られた白い団子がささげられるということが長年なされてきた。供物としてささげられる黒い土団子とは、もちろん病による患部の病変を、白い米団子は平癒後の白い肌を象徴している。そのようにありたいという願いを、物や行為にたとえて表現するという一種の類感呪術が、そのような形を取ってなされていたのである。笠森稲荷へ寄せられるこうした特殊な信仰習俗は、近世の歳事記本や随筆資料などにくわしく記されており、枚挙にいとまがないほどである。

* 元 法政大学講師

今回、原町西遺跡からはその土団子（土玉）の実物と、それを盛った土器皿とが**かわらけ**おびただしい数量で出土しており、そうした特殊な祈願習俗が実際におこなわれていたことが初めて明らかとなった。近世の文献記録を実際に裏付ける発見がなされたことは、きわめて重要であって、江戸の庶民信仰史の研究上、多大な成果が得られたことになる。ここではそのことの意義を、民俗学的な観点から若干、考察してみることにしよう。

2 江戸東京の笠森稲荷信仰

江戸市中の各地に生み出された笠森稲荷の、数あるその分社の中には、小石川白山御殿跡のそれと肩を並べつつ、こちらこそが笠森稲荷信仰の発祥地であるとされてきたものも存在する（長沢 1998：10-26 頁）。たとえば、谷中の感応寺の境内にかつて鎮座していた笠森稲荷などもその筆頭的地位にあり、その門前の水茶屋「鍵屋」の看板娘であった笠森お仙という女性は、江戸随一の美女とされてきたのであった。お仙の評判は江戸市中に広く知れわたり、大田南畝の『一話一言』や山東京伝の『笠森娘錦笈摺』をはじめとする数多くの評判記や人情本などのほか、歌舞伎脚本や講談にも取り上げられ、いくつかの錦絵にも描かれている。

お仙は明和 7 年（1770）に幕府御庭番の御家人、倉地政之助のもとへ嫁いでいるが、その倉地家の先祖であった倉地甚左衛門は、天正 12 年（1584）の小牧・長久手の戦いの際、腫れ物に悩んでいた徳川家康のために笠森稲荷に祈り、平癒に導いたと伝えられる。そのことの縁から倉地家では代々、この神を深く信心し、ついには江戸谷中観応寺の境内にそれを勧請することになったという。『御府内備考』にも、「一笠森稲荷社、右者御賄方倉地甚四郎、観応寺境内借地仕、右地内へ安置致し候」と述べられている。お仙と倉地家の間には、そのような縁がもともとあったということになる。お仙は文政 10 年（1827）に没し、四谷の正見寺にあった倉地家の墓所に葬られているが、同寺はその後、中野の上高田に移転したため、お仙は今ではそちらに眠っている。

谷中の感応寺は、その後の天保 3 年（1833）に天王寺と改称され、今に至っているが、境内にあった笠森稲荷は明治維新後、上野寛永寺坂の養寿院に移されることになった。養寿院の本堂内に今もそれが祀られているが、仏式での祭祀がなされているため、現在では笠森陀枳尼天と呼ばれている。養寿院では明治時代初期、「笠森陀枳尼天 ^{おなでいし}御撫石」と称する縁起物の小石を信徒らに授与しており、病気に悩む信徒がその石で患部を撫でながら、「ナマサマンダボダナンキリイカクソワカ」の陀羅尼を百八遍唱えると万病が治るとされていた。そのような形で感応寺時代以来の病氣平癒の祈願習俗が、養寿院にも継承されていたことがわかる。

一方、谷中感応寺跡の笠森稲荷の旧地には明治 16 年（1883）、功德林寺という寺が新たに建立され、その境内には昭和 37 年（1962）、再び笠森稲荷と称する稲荷社が建てられることとなって、今もそれがそこにある。やはり仏式での祭祀がなされているため、正式には「笠森稲荷陀枳尼天」と称しているけれども、かつて同じ地にあった近世の笠森稲荷との直接の関係はなく、そこが旧笠森稲荷の鎮座地であることを顕彰しつつ、神祠が現代に再興されたということであろう。現代の笠森稲荷は五穀豊穡・家内安全の神とされており、病氣治しの神ではすでにないと、功德林寺では説明しているものの、その周辺の土を掘り起こしてみると、江戸時代に奉納されたおびただしい数の土団子が、今でも出てくるとのことである（三田村 1975：155-160 頁）。

ところで谷中地域には、もうひとつの笠森稲荷があって、三崎坂の大円寺という寺にそれが祀られている。この寺では「笠森稲荷」を「瘡守稲荷」と表記していて、正式には「瘡守薬王菩薩」と称しているのであるが、「薬王菩薩」という称号にもまた、病気治しの神仏という意味が込められている。この大円寺の瘡守稲荷については、明治期に編さんされた『新撰東京名所図会』に、次のように述べられている。

瘡守薬王菩薩は大円寺に在り。是れ笠森稲荷の事なり。今は寺に祀れる為にや。稲荷の体裁絶てなく、全く仏堂となりたり。堂前に宝珠形の大香炉を置き、香火を供し、鰐口を掛け、左右に多く奉納の小額を陳展し、又小型土偶の狐を置く。列植せる幟には瘡守稲荷と書したるあり。或は旧に仍り笠森稲荷大明神など記したるものあるはおかし。俗間にては昔時より笠森は瘡守なりとて、瘡の病に効験ありと信じ、初は土製の団子を納めて之を祈り、平癒せし時は米の団子を納るの習慣なり。門内に其団子を嚙き居れり。

先の養寿院と同様、稲荷は本堂内に祀られているが、土団子・米団子の奉納習俗が維新後も守られてきたことは興味深く、境内にはそれらを売る店まで出ていたとある。大円寺では現在も、参拝者に土団子を授与しているが、さすがに今では土をこねた団子ではなく、素焼きの土製の団子に変わっている（写真1～2）。しかし、昭和時代の戦前期までは土でこねた黒団子の奉納がなされていたともいい、先代住職の豊田貫彦師が次のように述べておられる。

戦前は下の病に効くというので、吉原の女郎衆が抱え主のお母さんに連れられてきたり、芸者さんも多かった。芸者さんの方がお行儀がよかったですね。だからそれを見に男どもも生信心でやってきたものです。（中略）願かけには土の団子、願いがかなうと上しん粉をこねて小さく丸めたお団子を供えるのがならわしで、境内の茶屋で売ってました。子供のころよく丸めたけど、馴れると一ぺんに六つも丸められるんです（森 1987：22 頁）。

ここにもあるように当寺の瘡守稲荷は戦前、吉原の女郎衆らにあつく信心をされており、性病平癒の利益で知られていたのがあったが、腫物や腰から下の病にも多大な効験があったといわれている。現在では、痔病・アトピーなどの治癒を祈っ



写真1 大円寺の瘡護稲荷



写真2 大円寺瘡護稲荷の土団子

て参詣する人々が多いとのことである。

この大円寺に今、祀られているこの瘡守稲荷とは実は、ここで問題にしている小石川白山御殿跡の旗本家、大前家の屋敷内にもともと鎮座していた瘡守稲荷なのであって、そのことも知られておかねばならない。旗本大前家にあった瘡守稲荷は現在、大円寺に祀られているのであって、多くの一般庶民が参詣できるようにとの配慮から、寛政9年（1797）頃に大前家から大円寺へ移されたと伝えられている。とはいえ、大円寺への移転はもう少し遅れて、享和年間頃（1801～1804）のことであったという別説もまた、一部で聞かれるのであるが、情報の信頼度はあまり高くはないであろう。『新編武蔵風土記稿』には「瘡守稲荷と唱ふ。元白山御殿地大前孫兵衛と云ふ者の宅地にありしを、寛政九年当方（大円寺）へ遷座せしといふ」とあるし、『御府内備考続編』にも、「稲荷社、元白山御殿大前孫兵衛殿屋敷ニ安置、去る寛政九年五月十九日、当寺（大円寺）へ遷座、俗に瘡守稲荷与奉称」と述べられている。大円寺に移される前の、大前家時代の瘡守稲荷のことについては、次節でまた詳しく触れてみることにする。

さて以上に述べた通り、谷中地域にはいくつかの笠森稲荷が祀られていることがわかったが、これらについて大浄敬順はその著書、『十方庵遊歴雑記』の中で、「かさもり稲荷三ヶ処の事実」と題し、以下のような解説を述べているので、以下に引用してみることにしよう。

かさもり稲荷といふは、武城の中に三ヶ處あり。第一は谷中感應寺の裏門際にあり。（中略）第二には谷中三崎町北側大圓寺の境内にあり。第三には小石川御薬園の北うしろ通白山に隣りたる屋敷町南側中程にあり。いづれもかさもり稲荷と称す。字は瘡守と書あり、又笠盛とも、或は暈漏とも、又笠傳母とも書、いづれが靈験の増るやらん、しかれども谷中感應寺門際の笠森稲荷こそ、その起る事久しければ根元ともいふべし。（中略）みなおのおの本家と號せば、何れをか眞、いづれをか偽とせん。但し家名久しき方ぞ能からん。今かさもり稲荷といふも是とおなじからんかし。

ここには谷中感應寺・三崎町大円寺・小石川白山大前家の三ヶ所の笠森稲荷の名があげられているが、いわば江戸の三大笠森稲荷とでもいえるような取り上げ方がなされている。しかしながら、大円寺と大前家のそれは同じものであったはずで、両者が並列的に述べられていることには不自然さがともなう。大前家から大円寺へと瘡守稲荷が移された後も、白山の地には何らかの神祠が残されていたのかも知れないし、そのような伝承もまた聞かれるのであるが、確かなことはわかっていない。

現代の東京都内には、これらの笠森稲荷からさらに分霊を移して祀られたと思われる神祠が各地にあって、今でもあつく信仰されている。たとえば港区芝公園には瘡護稲荷神社という小社があり、もともとは増上寺の境内社なのであったが、明治期の神仏分離を通じて独立することとなった。土団子・米団子の奉納祈願も近年までなされており、境内にある「みふくら石」と呼ばれる靈石にそれがささげられることになっていた（写真3・4）。渋谷区幡ヶ谷の清岸寺にあるそれは瘡守稲荷神社と称していて（写真5）、かつては奉納用の土団子・米団子を売る店が境内に出ていたという（長沢1998：10-26頁）。世田谷区瀬田にある瘡守稲荷神社は独立した神社で（写真6）、性病・皮膚病治しの神祠として今でも広く知られ、二子宿の盛り場女郎らが特にあつい信心を寄せていた（長沢2015a：11-12頁、2021：107-108頁）。風俗産業のある所、必ず笠森稲荷が祀られているものだ、といわれてきたことには理由があったわけで、吉原女郎たちが大円寺の瘡守稲荷を信仰してきたことと同じである。世田谷区内には、ほかにもさらに、小祠ではあるが砦や千歳台の地に笠森稲荷が祀られて



写真3 港区の瘡護稲荷



写真4 港区瘡護稲荷のみふくら石



写真5 渋谷区清岸寺の瘡護稲荷



写真6 世田谷区瀬田の瘡護稲荷

いる（長沢 2015b：1 頁）。豊島区南池袋の清立院という寺には、瘡守薬師^{かさもり}という仏が安置されており、疫病一般・疱瘡（天然痘）・皮膚病平癒の利益があるといわれている（長沢 2021：108 頁）。小金井市東町にある笠森稲荷神社の場合は、地区の鎮守神として崇敬されており、大社の類に属する珍しい例であろう。

第二次世界大戦後の時代における遊廓街や岡場所の消滅、売春防止法の施行などを通じ、性病平癒祈願に関する民間信仰は著しく衰微することとなったため、笠森稲荷信仰もまた現代社会に見合った変容と適応とを求められている。小児のアトピーやアレルギー、成人の痔疾や皮膚病などの平癒と、若い女性による美容祈願といった現代的なニーズに応えながら、社会環境の変化に即した生き残りが模索されつつある。東京都内に残る多くの笠森稲荷は、そのような形で今もあつく信心されているのである。

3 大前家時代の瘡守稲荷

江戸における笠森稲荷信仰の発祥地のひとつとされた、小石川白山御殿跡の旗本大前家の屋敷内に、かつて存在した瘡守稲荷について、ここでまた、もう少しくわしく触れてみることにしよう。『江

戸砂子』にはこれについて、「御殿跡大前氏やしきの鎮守なり。小児の顔かしらなどのでき物、此神にいのれば、ふしぎの奇瑞あり。願成就の時、土団子といふて、土をもってだんごのごとくまるめて神前にささぐ。武家の鎮守なれば初穂等かたく請けられず」と述べており、土団子の奉納習俗のことも触れられている。とはいえ武家屋敷内の鎮守神であったため、大前家が初穂料などを受け取ることは決してなかったとも記されている。一方、『武江披砂』には次のような解説が載せられている。

小石川白山御殿跡瘡守稲荷の儀、宝永年中和田蔵御用屋敷に住居の節、京都吉田家の雑掌屋敷へ相越、摂津国芥川瘡守稲荷を、屋敷の鎮守に勧請致す。正徳年中、右の御用屋敷一統引払、白山御殿跡にて替地拝領致し候節右鎮守をも、白山へ移候処、奇瑞の義有之信仰の者も有之候由の事。其後三崎の旦那寺へ移したるなり。

旗本大前家の屋敷が和田蔵にあった宝永年中、大前家先祖の出身地であった摂州芥川の地から、瘡守稲荷の分霊を屋敷内に迎えて祀っていたものの、大前家の白山御殿跡への転居後はそれをそちらへと移し、その後はさらに三崎坂の大円寺へと遷座されることになったと、ここには記されている。

五代将軍徳川綱吉の別邸であった小石川白山御殿は、綱吉の死去後の正徳3年（1713）に廃止となり、御殿堀も埋め立てられて武家屋敷地となった。大前家の当主、大前孫兵衛がそこに屋敷地を拝領したのは同4年（1714）のことで、瘡守稲荷の白山御殿跡への遷座はもちろん、その時のことであったろう。したがって白山御殿跡の大前家の屋敷内に、瘡守稲荷が祀られていたのは、わずか80年間ほどのことに過ぎないということになる。

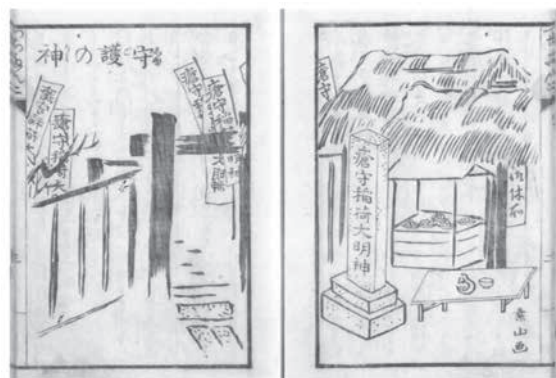
この大前家の瘡守稲荷がさらにその後の時代、三崎坂の大円寺に移されることになったのは、大前家が同寺の檀徒であったことの縁によるもので、大円寺の境内には今でも、大前家の古い墓石が残されている。しかしながら、大円寺の近くには感応寺の笠森稲荷がすでにあり、同じ谷中地域内に「笠森・瘡守」稲荷の双方が並び立つことになったことは、物議をかもし結果ともなった。堀田甚兵衛の『江戸沿革』や『飛鳥川』には、以下のようなエピソードも載せられているので、引用してみよう。

谷中瘡守の稲荷は白山御殿跡大前氏の鎮守を移し天明寛政のむかし、（中略）抑瘡守稲荷は大前孫兵衛が祖先、摂州の産にて芥川の笠森稲荷をやしきへ勧請せしを、土をささげて病を祈り、癒て米をささぐる団子の奇瑞ありて、其やしきへ参詣多くありければ他聞を憚り、己が菩提所なる谷中大円寺へ享和年間に納めたりしを、写せしいなりの方おなじ谷中に古く、大円寺に有ては二の舞なるを憤り、寺社司に願ひ、先の稲荷を笠守の文字とし、こなた瘡守の本社を願はせしが、今は双社ともに格別の群参もなし。天保度予大円寺和尚に一話の時、和尚のいへるは、此神摂陽のみなもとを知らず、大前氏も委しくせず。願くは浪華の役の時、芥川にたづねてよとの事を託せらるるに付、芥川を問はするに、森の形の笠の如きをいふて笠森稲荷と呼び、民俗笠と瘡のひびきにて瘡毒を祈ることとなりたるよし。（中略）予彼の大前のやしき跡に住みし比にて、のがれがたき故に芥川を問あかしける。嗚呼谷中両社の争ひ、瘡といへるを笠と書かへしは、摂州の笠森に自然と合たるも一奇ならずや。

ここでは、大前家屋敷内への瘡守稲荷の勧請時が天明・寛政年間（1781～1801）、大円寺に移されたのが享和年間（1801～1804）のことであったとされ、異説が述べられている。「笠」と「瘡」の字をめぐり、感応寺と大円寺の双方が争ったとの記述も興味深いが、その知名度においては、もともと谷中の地にあった感応寺の笠森稲荷の方が幾分、勝っていたといえるかも知れない。しかし、「大

円寺の) 瘡守稲荷は明治維新の後、(感応寺の) 笠森稲荷の祠を取毀たれてより、漸次其名世に著はれ、殊に根津の遊廓が繁盛せし頃、参詣人が多かった」との指摘もなされていて [秋の屋, 1914 : pp.27-28]、双方の知名度はのちに逆転していったものらしい。根津遊廓の遊女らによる信心は、特に大きな影響力をもたらしたことであったろう。

ところで、大前家の屋敷内にあった時代の瘡守稲荷は、絵図にも描かれているので、それについても少し触れておくことにしよう。その絵図とは、小川顕道という人が文化7年(1810)に著した『瘡家示訓』、あるいは『瘡守土団子』とも題されている絵本の挿絵で、そこには小石川白山御殿跡の大前家の瘡守稲荷が、部分的に描写されている(図1:国立国会図書館所蔵『瘡家示訓』請求記号851-52 コマ番号6より)。



第1図 大前家の瘡守稲荷(『瘡家示訓』より)

見ての通り、そこには武家屋敷入口の黒門がまらず描かれ、門前には「瘡守稲荷大明神」と刻まれた社号碑まで立っている。門の奥には板塀に沿いながら、神前に奉納された幟旗がたくさん立ち並んでいるので、稲荷の社殿は門のすぐ内側に鎮座していたものと思われる。門の外にはさらに、「御休所」という看板を掲げた茶店が出ていて、腰掛や煙草盆も置かれている。そして茶店の店先には、土団子と米団子とが土器皿に盛って売られており、これこそが瘡守稲荷の神前への奉納物であることがわかる。参詣者はまずこの茶店に立ち寄って何がしかの銭を納め、団子を受け取って門をくぐり、瘡守稲荷にその供物をささげ、病気治しの祈願をおこなったに違いない。谷中の感応寺境内にあった笠森稲荷への祈願作法とまったく同じことが、ここでもなされていたことがよくわかるのであった。

4 遺構と遺物に関する若干の考察

原町西遺跡、すなわち小石川白山御殿跡にあった旗本大前家の屋敷地跡において実施された今回の発掘調査の成果は、民俗学研究の観点から見て一体どのように評価しうるものであったろうか。最後

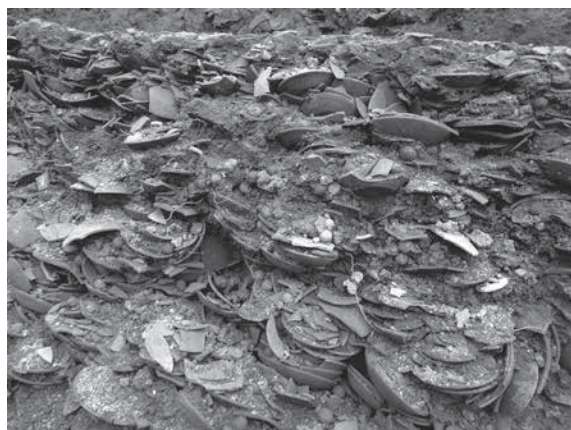


写真7 土団子と土器皿の出土状況



写真8 出土した土団子

にそれを若干述べて、報告を締めくくっておくことにしよう。

まず最初に指摘されるのは、遺跡地から今回、大量に出土した土団子と土器皿が、まぎれもなく屋敷内に鎮座していた瘡守稲荷への奉納物であり、自信を持ってそう断定できるということであつたろう（写真7～8）。土団子と米団子の奉納習俗は、江戸市中に存在した各所の笠森稲荷において普遍的に見られたことであり、今まで述べてきた通りである。市中にあつたそれらの笠森稲荷の社前には、土団子・米団子をひさぐ茶店もまず必ずあつたので、農村部での信仰習俗に見られたような、参詣者自らがその奉納物を自製して持参する例は、ほとんどなかったことであろう。その意味で、この独特な祈願習俗は、典型的な都市民俗の一形態であつたといえる。

谷中感応寺の境内にあつた笠森稲荷にあつても、それはまったくそうで、門前水茶屋の看板娘、笠森お仙もまた参拝者にその団子を売っていたのであり、そのシーンは錦絵にも描かれている。土団子・米団子をひさぐ茶店や露店は、谷中三崎坂の大円寺や芝公園の瘡護稲荷、幡ヶ谷の清岸寺の境内にも、昭和時代に至るまで出ていた。小石川白山御殿跡の大前家にあつても、それはまったく同様に、門の入口脇にあつた御休所の茶店でそれが売られていた様子は、絵図にまで描かれていた。

原町西遺跡から大量に出土した土団子とそれを盛った土器皿には、サイズや造りの面から見てばらつきがほとんどなく、規格がかなり統一されていて、それらがほぼ一軒の同じ茶店から供給されていたものであつたことを示している。それらの出土量は、遺物収納コンテナで約300箱分に達したといい、約80年間の間にそれだけの参詣者がいたということを物語っている。土団子の中には、焼成された素焼きのものもわずかに見られたものの、大部分は粘土をこねて丸めただけの未焼成の土団子であつて、粒径もよく揃っている。土器皿もまた同様に、直径数cmのほぼ同一規格品となっている。それらの大部分は、門外の茶店で売られていたものであつたろう。奉納された団子の中には、もちろん米粉から作られた白い団子もあつたはずであるが、200年以上もの時を経た現在に至るまで、それらが残存することなど考えられない。とはいえ、白い団子も必ずそこにあつたものと思われる。

これらの奉納物の出土状況を見るかぎり、土器皿に盛られた状態のまま土中に保存されていた土団子も数多く見られ、1枚の皿に15～20個ほどそれが盛られていたものと推察される。十五夜団子の三方への盛り方などと同じように、土団子はおそらく皿の上にピラミッド状に、もしくは円錐状に積み上げられていたのであろう。そして、それらの土団子と土器皿は、大きく深く掘り下げられた穴の中に無造作に積み重なった状態で出土していて、それらがそこに遺棄されていたことの痕跡をとどめている。掘り下げられた穴は、当時のゴミ溜め穴であつたわけで、参詣者らの手によって瘡守稲荷の神前にささげられた土団子が、一定量を超えて増え続けていくたびに、大前家ではそれらをまとめて撤去し、ゴミ溜め穴の中に廃棄していたのであろう。ゴミ溜め穴の中の堆積物には、土団子と土器皿に混じって、サザエなどの海産食用巻貝の貝殻も少なからず見られたが、信仰習俗との直接の関係はなく、そのような民俗事例もまた存在しない。食用に供した後の貝殻を、やはりそこに廃棄していたのであつて、この遺構がゴミ溜め穴であつたことはまちがいない。

土団子と土器皿の集積遺構、すなわち当時のゴミ溜め穴は、大前家の屋敷地内のもっとも南側の隅の目立たぬ場所に位置しており、そこがゴミの廃棄場所にあてられていたのは、まったく自然なことであつたと思われる。一方、瘡守稲荷の祀られていた場所は、先の『瘡家示訓』の挿絵に見る通り、屋敷地内の入口にあたる北側の門内であつたことが明らかである。参詣者らへの便宜を考えて、北門

のすぐ内側に社殿が設けられていたわけで、そこは土団子をひさぐ茶店からも、目と鼻の先の距離にある。社殿の跡地は、今回の発掘調査の範囲外にあるため、それを確認することはできなかった。大前家の屋敷内から大円寺へと瘡守稲荷が移された寛政9年（1797）以降、そこは完全な更地となっていたものと思われる。多くの参詣者らが奉納した土団子などの供物は、まずは屋敷内北側の瘡守稲荷の神前に積み上げられ、それら供物の山が一定量に達した時に撤饌がなされて、屋敷内南側のゴミ溜め穴にまとめて遺棄されたということなのであったろう。供物の遺棄が神祠の大円寺への遷座時まで続けられたとするならば、遺物集積遺構の堆積面上端部の層位位置が、まさしく寛政9年時の生活面であったということになる。

さて、このたびの原町西遺跡の発掘調査を通じて得られた、多くの遺物・遺構資料は今後、適切な形で一般に公開されていかねばならないであろう。土団子と土器皿、遺構断面の地層剥ぎ取り標本などは、江戸の笠森稲荷信仰の実態をそこにとどめる第一級の実物資料である。それらの一般公開を通じて、多くの市民が江戸の民間信仰の具体的な姿を知り、肌身に感じ取ることができることであろう。

【文献】

- 秋の屋 1914 「鍵屋の阿仙」『風俗画報』No.458、東陽堂
 三田村 鳶魚 1975 「笠森稲荷及びお仙茶屋」『三田村鳶魚全集』Vol.8、中央公論社
 森 まゆみ 1987 「健康にご利益のある谷中寺めぐり」『谷中根津千駄木』No.14、谷根千工房
 長沢 利明 1998 「カサモリ稲荷の土団子」『西郊民俗』No.162、西郊民俗談話会
 長沢 利明 2015a 「世田谷区南西部の民間信仰（上）」『アゼリア通信』No.273、長沢事務所
 長沢 利明 2015b 「世田谷区南西部の民間信仰（中）」『アゼリア通信』No.274、長沢事務所
 長沢 利明 2021 『江戸東京ご利益事典』、笠間書院

3 原町西遺跡出土の動物遺体

山根 洋子*

1. はじめに

本遺跡は小石川植物園の北側に隣接する。小石川植物園の所在地は、1652年に上野館林藩の下屋敷地として徳川綱吉が拝領し、綱吉が第5代将軍に就任した1680年には小石川白山御殿とされた場所である。今回、小石川白山御殿を囲む御殿堀や井戸、土坑などの遺構から、貝類を中心とした動物遺体が総数5952点出土した。以下に出土した動物遺体の内容を報告する。

2. 資料と分析方法

動物遺体は発掘調査時に目視により確認・採集されたものである。

貝類のうち、巻貝は殻柱、二枚貝は殻頂部が残存する資料、魚類・鳥類・哺乳類等については、種の同定が可能な主要部位を抽出し、現生標本（以下、標本とする）（註1）を用いて同定を行った。また、同定作業と共に、解体痕・病変等の観察および必要に応じて計測を実施した。

3. 出土した動物遺体（第1表～第4表）

第1表 出土動物種名表

〔貝類〕	8 サトウガイ	16 ハマグリ	3 カツオ
1 マダカアワビ	9 ハイガイ	17 カガミガイ	
2 アワビ類	10 アカガイ	18 アサリ	〔鳥類〕
3 キサゴ類	11 サルボウガイ	19 シオフキガイ	1 種不明
4 サザエ	12 イタヤガイ		
5 ウミナナ類	13 ナミマガシワガイ類	〔魚類〕	〔哺乳類〕
6 アカニシ	14 マガキ	1 マダラ	1 イヌ
7 バイ	15 ヤマトシジミ	2 マダイ	2 イノシシ類

【貝類】

29基の遺構から出土しており、同定資料数は5908点（最小個体数3061個体）（註2）と膨大である。マダカアワビ・アワビ類・キサゴ類・サザエ・ウミナナ類・アカニシ・バイ・サトウガイ・ハイガイ・アカガイ・サルボウガイ・イタヤガイ・ナミマガシワガイ類・マガキ・ヤマトシジミ・ハマグリ・カガミガイ・アサリ・シオフキガイの19種を確認した。

アサリが最小個体数にして2170個体と圧倒的に多く、貝類全体の71%を占める。ヤマトシジミがこれに次ぎ、520個体（17%）（註3）で、他にはハマグリ（158個体、5%）、やサザエ（128個体、4%）などが目立つ。

以下、貝類の出土量が多い4基の遺構について、主な貝種の内容と組成について記載する。

1区2号遺構（かわらけ土坑、近世2（註4））では、大量のかわらけや土玉と共に貝類が出土した。同定資料数は178点（最小個体数126点）で、アワビ類・キサゴ類・サザエ・ウミナナ類・アカニシ・

※ 港区立郷土歴史館

サトウガイ・ハイガイ・サルボウガイ・イタヤガイ・マガキ・ヤマトシジミ・ハマグリ・アサリの13種を確認した。有棘型のサザエが多量に出土し、73個体を数える。大半が殻高85～100mm前後の比較的小型の個体であった。他の種ではヤマトシジミ(36点、18個体)、ハマグリ(23点、16個体)、アサリ(20点、10個体)が目立つが、それ以外は各種1～2点が出土したのみである。ヤマトシジミ、ハマグリ、アサリはいずれもサイズに大小があり、ヤマトシジミは殻長15mm前後～30mm前後、ハマグリは殻長25mm前後～60mm前後、アサリは殻長30mm前後～45mm前後の個体が見られた。なお、東京湾では弥生時代頃に絶滅したと言われるハイガイが1点出土しているが、これは自然貝層や縄文時代貝塚の貝が混入したものではないかと考えられる。

1区8号-2遺構(土坑、近世2)での同定資料数は798点(最小個体数401個体)で、このうち782点(391個体)がヤマトシジミであった。他にはサザエ・サルボウガイ・マガキ・アサリが少量出土している。ヤマトシジミについては任意に抽出した100点について計測を行ったところ、半数以上が殻長15～20mmの小型個体であった。

3区87号遺構(井戸、近世2)での同定資料数は3990点(最小個体数2040個体)で、アワビ類・キサゴ類・サザエ・バイ・サトウガイ・アカガイ・サルボウガイ・ナミマガシワガイ類・マガキ・ヤマトシジミ・ハマグリ・カガミガイ・アサリ・シオフキガイの14種を確認した。当遺構では上部から3層に分けて貝類の取上げが行われているが(87号遺構①②③)、大半が②において採集されたものである。採集された貝類の9割がアサリで、遺構全体で3638点(最小個体数1842個体)を確認した。アサリ以外ではハマグリ(140点、77個体)、ヤマトシジミ(87点、44個体)がやや目立つ。任意に抽出したアサリ300点の計測をしたところ、殻長25mm前後の小型から50mm程度の大型個体まで、サイズには幅が見られたが、殻長30～40mm程度のやや小型から中型の個体を中心であった。ハマグリはサイズにはばらつきがあり、殻長25mm前後～80mm弱まで見られた。ヤマトシジミは大半が殻長15～20mm前後である。また、87号遺構②で採集されたサトウガイとアカガイには、殻を開けるためと思われる穿孔の見えるものが含まれていた。

3-4区240号遺構(井戸、近世1)での同定資料数は591点(最小個体数304個体)で、その8割以上がアサリであった。アサリの同定資料数は510点(最小個体数262個体)で、サイズについては3区87号遺構②で見られた傾向と同じであった。他にはハマグリがやや多く、アワビ類・ウミニナ類・サルボウガイ・シオフキガイは各種少量が確認された。

【魚類】

同定資料数は28点であり、マダラ・マダイ・カツオの3種を確認した。1区2号遺構(かわらけ土坑、近世2)と12号遺構(土坑、近世2)からの出土である。マダイは上記2基の遺構において、それぞれ同一個体がまとまって出土している。上顎骨や鰓蓋骨など、いずれも頭部の骨で、硬く残存しやすいこともあり江戸遺跡で普通に見られるタイ類の椎骨(マダイ、クロダイなどの種同定が難しいため、通常、タイ類として一括する)は出土していない。サイズは全て体長40cm程度標本と同大の個体であった。カツオは椎骨のみの出土である。マダラは1区2号遺構から上顎骨と椎骨が出土した。

第2表 貝類一覧

遺構名 種名			腹足綱						斧足綱														計					
			マダカアワビ	アワビ類	キサコ類	サザエ	ウミニナ類	アカニシ	バイ	不明	サトウガイ	ハイガイ	アカガイ	サルボウガイ	フネガイ科	イタヤガイ	ナミマガシロガイ類	マガキ	ヤマトシジミ	ハマグリ	カガミガイ	アサリ		シオフキガイ				
1区	1号	御殿堀				3				左	右	左	右	左	右	破片	左	右	左	右	左	右	左	右				
1区	2号	かわらけ土坑	+	1	73	17			1	1				1				2	36	16	7		10	10				
1区	2号2層	かわらけ土坑					+	1								+									2			
1区	8号-2	土坑			1								1				1	782				6	7		798			
1区	12号	土坑	+		18	2		1									24	1	5			1			52			
1区	14号	土坑	1		1								1										1		4			
1区	20号	土坑															1				+		1		2			
1区	21号	土坑			2	+																			2			
1区	41号	土坑																2							2			
1区	51号	上水路																							10			
2区	65号	土坑															1								1			
2区	70号	上水路			1													1							1			
2区	72号	土坑																							2			
2区	90号	土坑			2																				2			
2区	110号	土坑			1																				1			
3区	87号①	井戸									1														11			
3区	87号②	井戸	+	1	5	1			3	1	1		2	8	6		+	4	87	74	61		1	1730	1668	30	31	3714
3区	87号③	井戸			8	6			6											3	2			107	123	4	5	264
3区	87号	井戸							1																		1	
3区	120号	土坑																		2	3			44	37	1	1	88
3区	123号	土坑																8									8	
3区	133号	土坑																1					1	1	1		4	
3区	134号	井戸		1														4	3	2							10	
3区	144号	土坑		2														93	3	7			2	3			110	
3区	213号	土坑		1																							1	
3区	216号	地下室		7																							7	
3区	217号	土坑																		4	3						8	
3区	233号	土坑																		11	11			2	2		26	
3-4区	239号	土坑															1	1		1	1				1		5	
3-4区	240号	井戸	+					1						1	1					35	35			262	248	3	5	591
3-4区	244号	土坑		1																							1	
3-4区	246号	土坑																									1	
3-4区	247号	井戸付属土坑																									1	
計			1	+	2	128	26	2	2	10	1	2	0	1	0	3	10	9	+	+	+	+	+	+	+	+	+	5908

※巻貝は殻柱、二枚貝は殻頂部が残存しているものをカウント（ヤマトシジミは左右を分けてカウソント） +：破片あり
 ※近世1：1713年の御殿堀廃絶以前 近世2：御殿堀廃絶以後

第3表 魚類一覧

調査区	遺構	種別	時期	種名	部位	左右	残存部分	数	同一 個体	備考
1	2号	かわらけ土坑	近世2	マダラ	上顎骨	R		1		
				マダラ	椎骨			8		
				マダラ	椎骨		破片	2		
				マダイ	前上顎骨	R	破片	1	a	
				マダイ	上顎骨	R		1	a	
				マダイ	歯骨	L		1	a	
				マダイ	歯骨	R		1	a	
				マダイ	関節骨	L		1	a	
				マダイ	関節骨	R		1	a	
				カツオ	椎骨			6		
1	12号	土坑	近世2	—			破片	+		
				マダイ	前上顎骨	L		1	b	
				マダイ	上顎骨	L	破片	1	b	
				マダイ	前鰓蓋骨	L		1	b	
				カツオ	椎骨			1		
				—	椎骨		破片	1		
				—			破片	+		

〔時期欄〕近世1：1713年の御殿堀廃絶以前 近世2：御殿堀廃絶以後

〔種名欄〕—：未同定（同定対象外部位および同定不可の資料）

〔数欄〕+：未カウント

〔同一個体欄〕同一個体と考えられるものには、同じ記号を記す（同一遺構内）。

【鳥類】

1区2号遺構（かわらけ土坑、近世2）において、左側中手骨が1点出土しているが、骨幹部のため同定が難しく、種不明とした。

【哺乳類】

同定資料数は15点であり、イヌとイノシシ類の2種を確認した。3号遺構（土坑、近世2）ではイヌがまとまって出土している。出土した後頭骨、上腕骨、橈骨、尺骨、脛骨は同一個体と思われる。残存状態が悪く、四肢骨の全長などの計測はできなかったが、推定体高（註5）約50cmの標本（オーストラリアンシェパード）と比較すると同程度もしくは、やや小さいサイズであった。上腕骨には切痕が観察された。同遺構ではイヌの右側大腿骨も出土しているが、この大腿骨は小型であり、上記のイヌとは別個体である。14号遺構（土坑、近世2）では骨端部が癒合していない若齢のイヌの右側大腿骨が確認された。また、表土からはブタの可能性のあるイノシシ類の左側第3中足骨が1点出土している。

4. まとめ

本遺跡から出土した動物遺体は大半が貝類で、魚類や哺乳類はわずかであった。

貝類のほとんどは食物残渣と考えられ、概ね江戸遺跡で一般的に見られる種である。貝類は特定の種が集中して廃棄された遺構がいくつか見られ、1区2号遺構（かわらけ土坑、近世2）ではサザエ、1区8号-2遺構（土坑、近世2）ではヤマトシジミ、3区87号遺構（井戸、近世2）と3-4区240号遺構（井戸、近世1）ではアサリが多量に出土した。特に3区87号遺構で確認したアサリの量は膨大で、3600点余りが廃棄されていた。外洋性のサザエ、東京湾内湾の干潟で採捕されるアサリ、

第4表 哺乳類一覧

調査区	遺構等	種別	時期	取上げ No.	種名	部位	左右	残存部分	数	同一 個体	備考
1	3号	土坑	近世2	No.2	イヌ	後頭骨		破片	4	a	
				No.2	イヌ	上腕骨	L	上～中間	1	a	
				No.1	イヌ	上腕骨	L	中間～下	1	a	切痕あり
				No.3	イヌ	上腕骨	R	中間～下	1	a	Bd: 33 ±
				No.4	イヌ	橈骨	L	中間～下	1	a	
				No.4	イヌ	尺骨	R	中間	1	a	
				No.3	イヌ	脛骨	R	上～中間	1	a	Bp: —
				No.3	イヌ	大腿骨	R	上～中間	1		Bp: 30.4
				No.3	イヌ	椎骨（尾椎）			1		
				No.3	イヌ	椎骨		破片	1		
				No.2	イヌ	—		破片	+		
				No.3	イヌ	—		破片	+		
				No.4	イヌ	—		破片	+		
1	14号	土坑	近世2		イヌ	大腿骨	R	中間～下	1		遠位未癒合（無） 若
2	包含層				イノシシ類	第3中足骨	L		1		

〔時期欄〕近世1：1713年の御殿堀廃絶以前 近世2：御殿堀廃絶以後

〔種名欄〕—：未同定（同定対象外部位および同定不可の資料）

〔残存部分欄〕記載の無いものはほぼ完存 上：近位部片 中間：骨幹部片 下：遠位部片

〔数欄〕+：未カウント

〔同一個体欄〕同一個体と考えられるものには、同じ記号を記す（同一遺構内）。

〔備考欄〕幼：幼獣 若：若獣 幼・若のないものは成獣。 数値は計測値（mm）。 計測位置の記号はDriesch(1976)による。

河口域に生息するヤマトシジミはいずれも江戸の代表的な食用の貝類である。貝類のサイズについては、アサリとヤマトシジミには大小があったが、いずれも中心となるサイズが認められた。

貝類と同じく食物残滓と考えられる魚類の出土は26点と少なかった。確認されたマダイやカツオ、冷水系のマダラも貝類と同じく江戸遺跡では定番の種である。貝類が大量に出土した3区87号遺構や3-4区240号遺構では魚類の出土は確認されず、魚類など、貝類以外は貝類とは廃棄場所が異なっていたことも想定される。

哺乳類は1区3号遺構（土坑、近世2）において、同一個体のイヌの頭蓋骨の破片や四肢骨が確認された。推定体高50cmほどの現生標本のイヌに近いサイズであった。体高50cmは江戸遺跡で出土するイヌの中では大型である。このイヌの上腕骨には切痕が見られたが、解体痕かどうかは不明である。

（註1）現生標本は、西本豊弘氏および小林園子氏寄託資料を含む港区立郷土歴史館所蔵の資料を使用した。

（註2）ここでの最小個体数は遺構ごとの個体数を足したのではなく、遺跡全体で算出した数値。

（註3）ヤマトシジミは左右を分けずにカウントしたため、出土量の半数を最小個体数とした。

（註4）近世1：1713年の御殿堀廃絶以前、近世2：御殿堀廃絶以後。

（註5）推定体高は山内（1958）のⅢ式を用いて算出した。

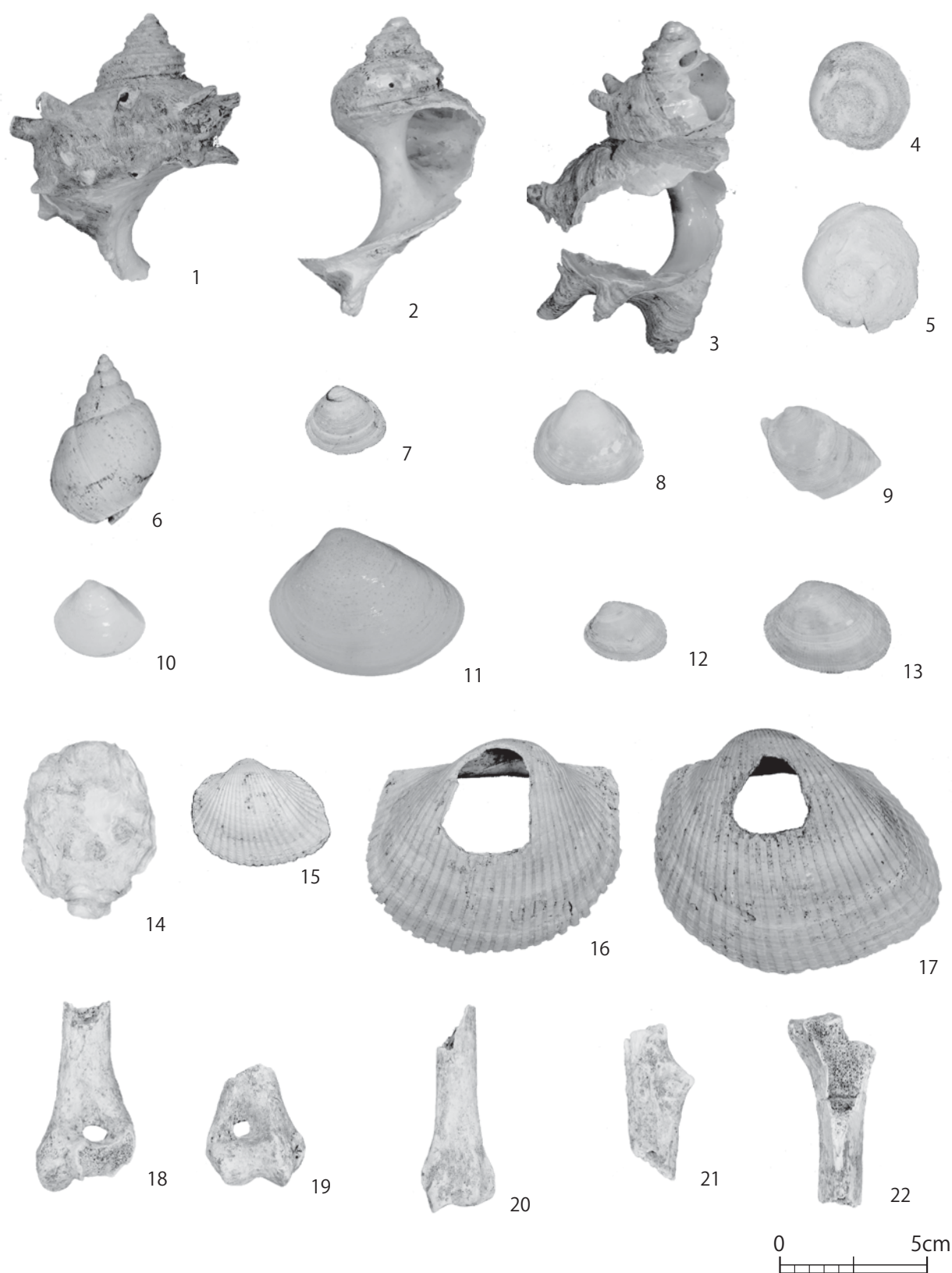
【文献】

山内 忠平 1958「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』7

山根 洋子 2006「豊後岡藩中川家屋敷跡遺跡出土の動物遺体」『豊後岡藩中川家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』

港区区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告 44 港区教育委員会

山根 洋子 2015「旗本花房家屋敷跡遺跡出土の動物遺体」『港区 旗本花房家屋敷跡遺跡—警視庁麻布警察署庁舎改築工事に伴う調査—』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第306集 東京都埋蔵文化財センター



動物遺体 S=約 1/2

1～3.サザエ 4・5.サザエ蓋 6.バイ 7.ヤマトシジミ 8.シオフキガイ 9.カガミガイ 10・11.ハマグリ 12・13.アサリ

14.マガキ 15.サルボウガイ 16.アカガイ 17.サトウガイ

18～22.イヌ (18.左上腕骨 19.右上腕骨 20.左橈骨 21.右尺骨 22.右脛骨)

[1～5:1区2号遺構、6～17:3区87号遺構②、18～22:1区3号遺構]

第1図 動物遺体

4 原町西遺跡における堆積物の特徴と産出した植物珪酸体化石

鬼崎 華^{1,2}・江口 誠一³・渡邊 稜也³

本稿では、2023 年に実施された原町西遺跡の埋蔵文化財発掘調査に際して 1 号遺構（御殿堀）の 2 地点（第 1 図，#5・#6）から採取された堆積物を対象に、鉱物と植物珪酸体化石を観察し、当時の用水利用について検討した。

1. 地層観察と試料の選定

ここでは、堆積物が採取された地点をそれぞれ地点 5（第 1 図，#5、第 2 図）、地点 6（第 1 図，#6、第 3 図）と称する。これらは堀がほぼ直角に折れ曲がる箇所に該当し、南西側の壁面からは千川上水を通して水が流入していたとされている。地点 5 は堀の壁沿い、地点 6 は中央近くに位置する。両地点ともに縞状の地層が見受けられ、地点 5 は互層が明瞭であるのに対して、地点 6 はやや不明瞭である。柱状のブロックとして採取されたこれらの試料を実験室内で観察し、分層した結果を第 4 図に示す。なお、堆積層の一部が崩れており正確な計測が困難であったことから、本図で示した層厚はあくまで参考値である。発掘時の底面にあたる最下位の黄褐色層を基盤層であるとみなし、それよりも上位を堀形成後の堆積物として分類した。地層間で粒度に大きな差異がみられず、おおむねシルトに相当したため、層序は色調をもとに判断した。地点 5 は、大きさが数 mm ～ 1 cm 程度の赤褐色～明褐色ブロックが全体に混在していた。本研究では、縞状の互層それぞれを代表して地点 5 から 8 層、地点 6 から 3 層、計 11 層を分析対象として選出した（第 4 図 参照）。

2. 含有鉱物の比較

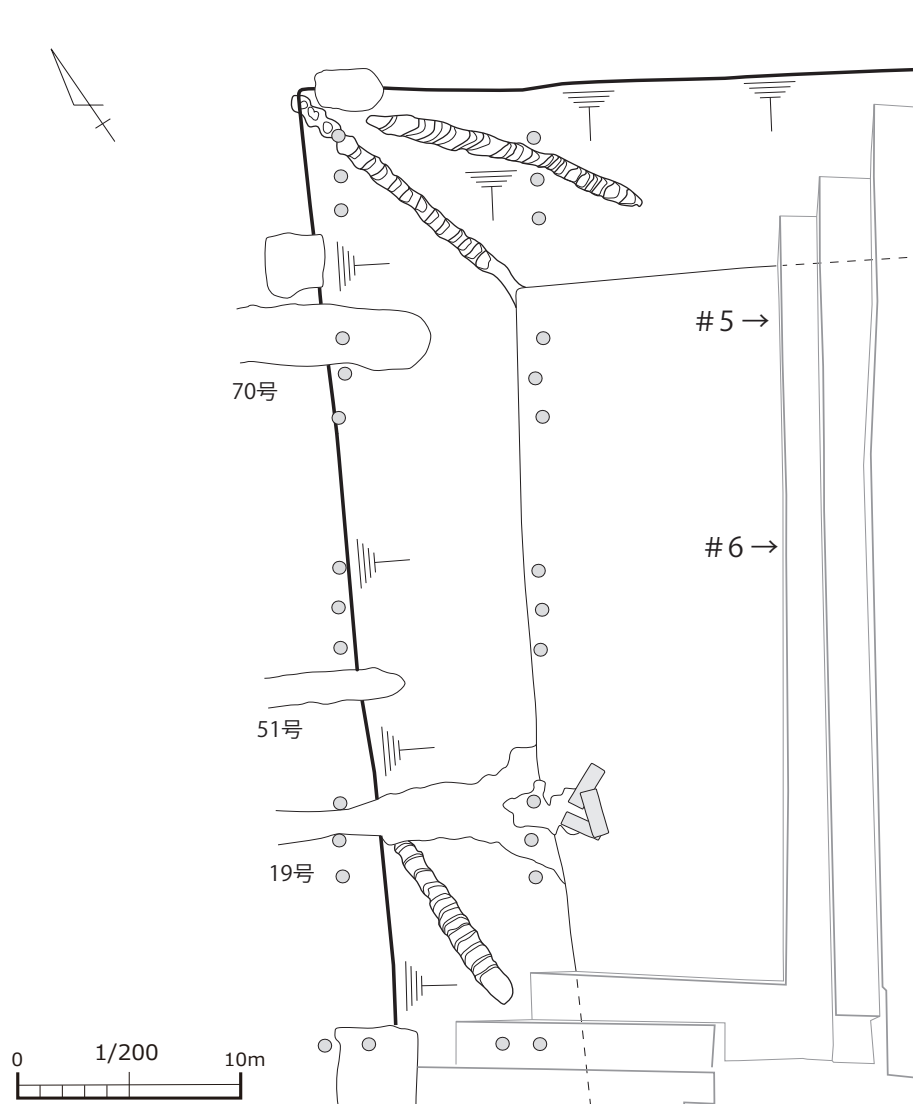
(1) 方法

椀がけ法によって各層の土壌から鉱物粒子を取り出した。蒸発皿に乾燥重量 0.1 ～ 0.3 g ほどのサンプルを入れ、水道水を加えてよく洗い、上澄みを捨てた。これを水が透明になるまで繰り返した後、残された鉱物をシャーレに移し、実体顕微鏡を用いて観察・撮影した。

(2) 結果

実体顕微鏡による撮影結果を第 5 図に示す。粒径は一定ではなく、各試料の中に細粒なものから粗粒なものまで幅広く含まれていた。HR1、HR3、HR5、HR10、HR11、H12 では、粒径 0.2 ～ 1 mm ほどの粗砂が散見された。一方、HR2、HR4、HR6、HR7、HR9 では鉱物粒子のほとんどが 0.2 mm 未満であった。色は黒色・褐色・黄色・白色・透明と多様であり、層位によって含有比率に多少の相

1. 東京大学大学院新領域創成科学研究科 2. 日本大学文理学部自然科学研究所 3. 日本大学文理学部



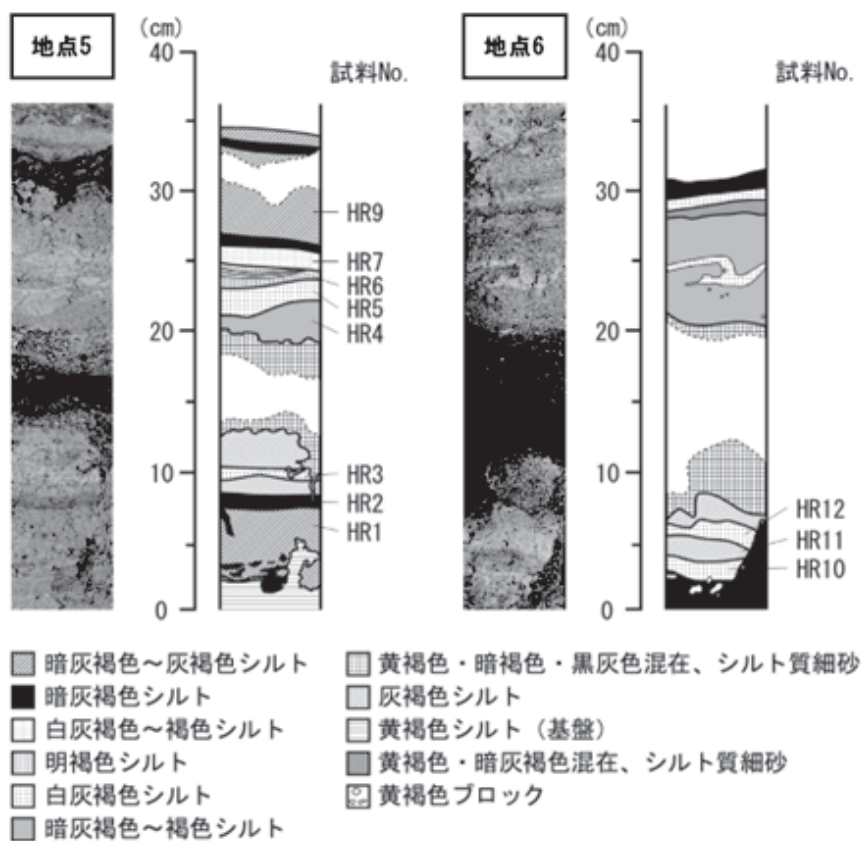
第1図 柱状サンプルの採取地点



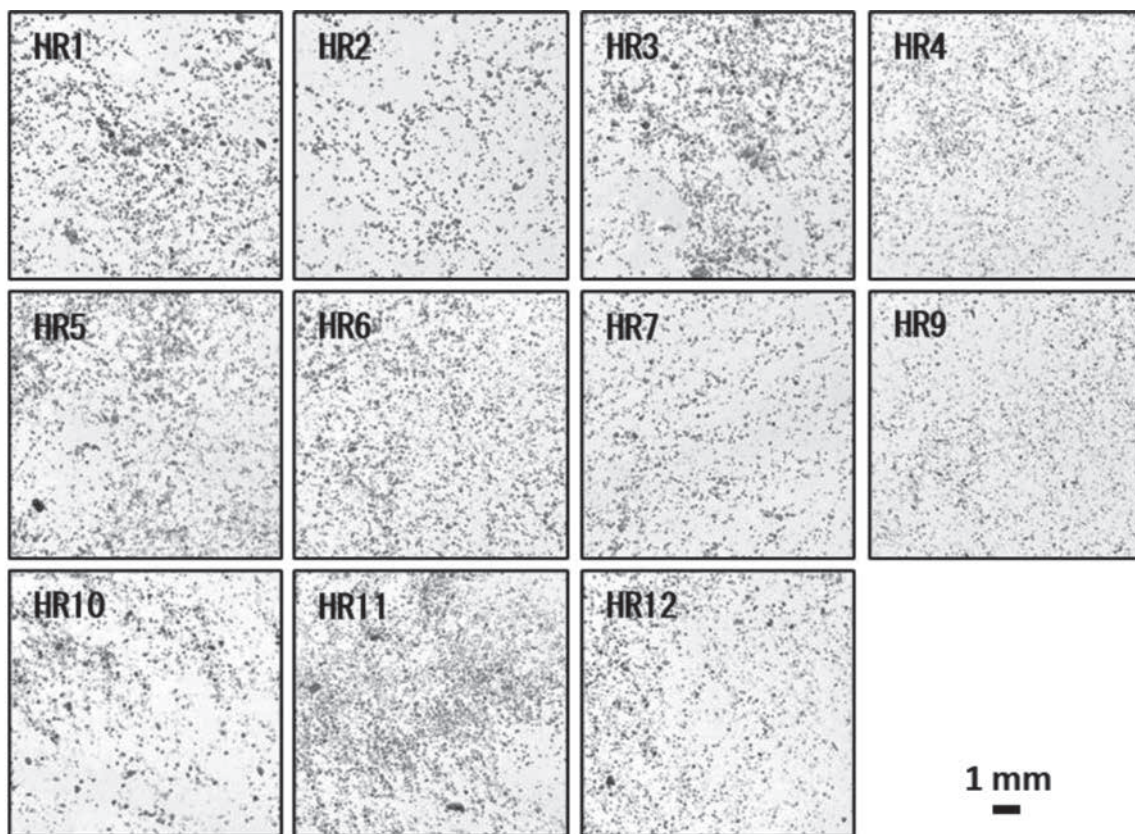
第2図 地点5における採取状況



第3図 地点6における採取状況



第4図 地点5・地点6の柱状図



第5図 各層における鉱物抽出の結果

違がみられたものの、層序と関連するような傾向は得られなかった。

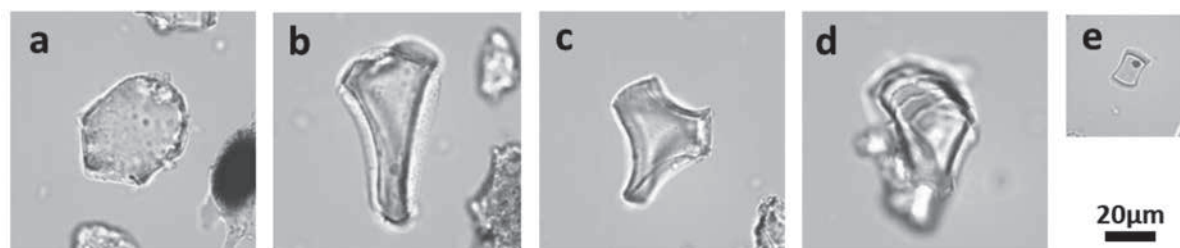
3. 植物珪酸体分析

(1) 方法

試料は江口（1996）に準拠して次のように処理した。約 0.3 ～ 0.5 g の乾燥試料を秤量し、約 20% の過酸化水素水（ H_2O_2 ）とともに 300 ml のトールビーカーに投入し、ホットプレート上で加熱して有機物を分解させた。続けて、6N の濃塩酸（HCl）を加えて脱鉄した後、超音波洗浄により粒子を分散させた。25 μm ふるいを通過した水道水を加えて 300 ml にし、ストークスの法則に基づく沈降法で水面下 10 cm の上澄みをサイフォンで吸引除去し、10 μm 以上の画分試料を作製した。これを 20 ml に希釈して攪拌した後、そのうちの 0.5 ml をピペットでプレパラート上に展開し、乾燥させて封入した。検鏡は 400 倍の生物顕微鏡下で行った。

(2) 結果

イネ科植物を中心に数多くの植物珪酸体が観察された。代表的なものでは、ササ属型やチガヤ属型、シバ属型、ネザサ節型、タケ亜科型などが見られた（第 6 図）。これらはほとんどの試料で確認することができたが、その検出量は層ごとに異なっていた。HR2、HR4、HR9、HR11 には多数の植物珪酸体が含まれていた。一方、HR3、HR5、HR6、HR7、HR12 では土壌由来の鉱物が大半を占めており、その中に点在する程度であった。



第 6 図 各層から確認された植物珪酸体の例

a：ササ属型、b：チガヤ属型、c：シバ属型、d：ネザサ節型、e：タケ亜科型

4. 考察

河川のようにある程度の流速で水が流れている場合、植物珪酸体は堆積せず下流へ運搬されてしまうことが多い。今回の分析では、検出量に差はあるものの各層から植物珪酸体を確認されたことから、当時は流れの穏やかな堀であったか、少なくともそのような時期が一定期間存在していたと考えられる。

互層の傾向を捉えるため、土壌の色調をもとに各層を「黒」「中間」「白」の 3 つに分類したうえで前項までの結果をまとめると、第 1 表のように整理される。「黒」に該当する層は含有鉱物の粒径が細かく、多くの植物珪酸体が堆積していることがわかった。「白」の層にはおおむね粗砂が含まれており、なおかつ植物珪酸体の数は少なかった。以上の事柄から、「黒」層と「白」層が形成された時期では、それぞれの堆積環境が類似していたことが示唆される。植物珪酸体の検出数が多いことと、

弱い営力では上流側から供給される土砂の粒径が小さくなることから、「黒」層の期間は流速が遅く、止水環境に近い状態が継続していたと推測される。また、黒色に近い土壌は有機物を多く含む場合があるため、堀の周辺で枯死した植物が相対的に多かったことも可能性の一つとして挙げられる。反対に「白」層の時期には、「黒」層よりも堀内の水に動きがあったと考えられる。人間の意図を考慮すると、時季に応じてこのような変化が人為的にもたらされており、それが繰り返されることで縞状の互層が形成されたと推察される。ただし、御殿が維持されていた期間に対して層数が少ないため、そのような管理は特定の時期に限られていた可能性がある。

地点 6 のすべての層で粗砂が見られたのは、壁面近くの地点 5 よりも堀の中央部に近い分、流れがあったことが理由として挙げられる。しかし、層序が不明瞭であったため、地点間で比較するのに十分な試料を採取できなかった。また、「中間」にあたる層は試料によって異なる傾向を示しているものの、本分析では考察に至る情報を得られなかった。植物珪酸体の定量解析に加え、粒度分析や堆積物のより詳細な観察を行うことで、さらなるデータ収集と実態の解明が期待される。分析対象層の追加も含め、今後の課題としたい。

第 1 表 各層の色分類と植物珪酸体の検出量

地点	試料 No.	色分類	粒径	植物珪酸体の検出量
#5	HR1	中間	細～粗	○
	HR2	黒	細	◎
	HR3	白	細～粗	△
	HR4	黒	細	◎
	HR5	白	細～粗	△
	HR6	中間	細	△
	HR7	白	細	△
	HR9	中間	細	◎
	HR10	白	細～粗	○
#6	HR11	中間	細～粗	◎
	HR12	白	細～粗	△

◎：400 倍の視野内におおむね複数個出現

○：400 倍の視野内におおむね 1 個～複数個出現

△：400 倍の視野内におおむね 0 ～ 1 個出現

【文献】

江口 誠一 1996 「植物珪酸体の試料処理方法」『関東平野』第 4 号、25-28 頁

5 原町西遺跡出土土玉・カワラケの実体顕微鏡観察および

EDX を用いた元素分析

長佐古 真也*

緒言

今回の調査で多量に検出された土玉およびカワラケに係る検討材料を提供するため、実体顕微鏡による観察および EDX を用いた元素組成分析をおこなった。

分析試料と分析方法

土玉は、提供を受けた 2 号遺構出土資料から、1A 層出土 5 点、1B 層出土 6 点、2 層出土 14 点を抽出、EDX 分析に関しては予備的に採集してあった出土位置不詳の 9 点を加えた計 34 点を対象試料とした。試料は、表面の汚染を避け、安定した観察・分析面を確保するため、乾燥後に清浄なカッターで径 10mm 前後の切断面を削出した。比較のため、同じく 2 号遺構出土カワラケ 20 点 (1A 層・1B 層・2 層・3 層出土各 5 点)、出土地点不詳カワラケ 4 点、4 号遺構 3 層内で検出された粘土塊、さらに遺跡内で掘削された粘土塊 2 検体 (87 号遺構礫層上・214 号遺構底面) も対象とした。

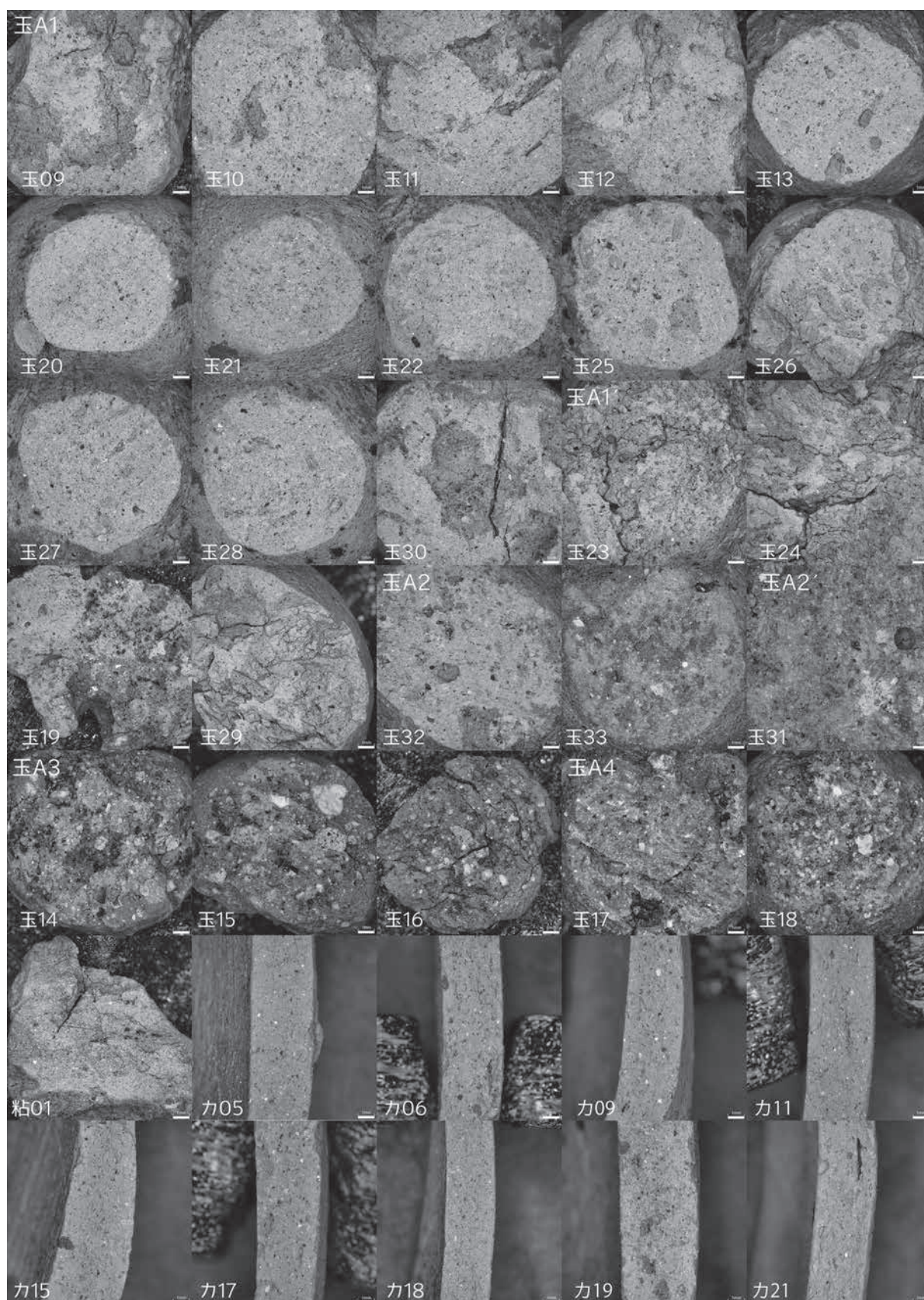
実体顕微鏡で観察したカワラケについては、土玉との比較を容易にするため、ダイヤモンドディスクを装着したリユーターで破断面を平坦に加工した。観察にはデジタル実体顕微鏡 OLYMPUS DSX110(東京都埋蔵文化財センター)を用い、深度合成モードで撮影した。観察倍率は 24 倍で、画像中のスケールバーは 1mm である。

元素組成分析には、SHIMADZU EDX-8100(東京都埋蔵文化財センター)を用いた。分析条件は、Rh ターゲット、真空環境で、分析対象毎に 3 つのチャンネル [Al—U (4.00 ~ 35.00eV) : 50kV / 240 μ A-Auto、C—Sc (0.00 ~ 4.40eV) : 15kV / 1000 μ A-Auto、S—Ca (2.10 ~ 4.10eV) : 15kV / 1000 μ A-Auto で #2 フィルタ使用] を 60 秒ずつ測定した。コリメータは 10mm に設定した。定量値は、すべて酸化物の形で表し、主成分元素に関しては %、微量元素に関しては ppm を単位としている。鉄はすべて 3 価と仮定した。定量値の算出には FP 法を用いているが、岩石・土壌試料において通常検出される 19 元素 (ケイ素 (Si)、アルミニウム (Al)、チタン (Ti)、鉄 (Fe)、ナトリウム (Na)、マグネシウム (Mg)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、リン (P)、硫黄 (S)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、クロム (Cr)、マンガン (Mn)、亜鉛 (Zn)、バナジウム (V)、ジルコニウム (Zr)、イットリウム (Y)、ガリウム (Ga)) については固定で測定し、その他の元素については検出した場合に追加するルーティンを組んでいるため、今回の検討においても十分な精度が得られることが期待できる。

考察

実体顕微鏡による観察結果を第 1 図に、EDX による分析結果を第 1 表に示す。また、これらの結果を元に若干の考察を加える。

* 東京都埋蔵文化財センター



第1図 土玉・カワラケおよび遺構内検出粘土の実体顕微鏡画像

第1表 元素分析結果

試料 #	出土位置	分類	SiO ₂	Al 2O ₃	Fe 2O ₃	TiO ₂	Na ₂ O	MgO	K ₂ O	CaO	P ₂ O ₅	SO ₃	Rb ₂ O	SrO	Cr 2O ₃	MnO	ZnO	V ₂ O ₅	ZrO ₂	Y ₂ O ₃	Ga 2O ₃	NiO	Cl	Ir 2O ₃	Br	Ag	
			%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	ppm	ppm	ppm	ppm	ppm	ppm	ppm	ppm	ppm	ppm	ppm	ppm	ppm	ppm	
玉00	予採0	A1	66.5	18.3	8.58	1.20	0.42	0.65	2.15	1.64	0.11	0.13	173	220	169	814	172	699	294	56	46						
玉01	予採1	A4	56.5	29.0	8.07	2.50	0.25	0.32	1.38	1.35	0.08	0.17	133	540	282	457	285	1067	425	50	92	95					
玉02	予採2	A1	57.4	22.9	12.25	1.67	0.31	0.64	2.16	1.87	0.21	0.21	227	308	223	1064	283	908	418	82	76						
玉03	予採3	A1	57.8	22.5	11.61	1.42	0.37	0.80	2.49	2.36	0.13	0.20	193	329	228	931	246	798	365	66	65						
玉04	予採4	A1	58.6	22.5	10.88	1.41	0.53	0.94	2.47	2.16	0.10	0.17	188	293	213	943	224	778	368	60	71						
玉05	予採5	A1	58.2	22.2	11.46	1.41	0.45	0.89	2.46	2.31	0.08	0.20	184	328	206	1248	256	743	356	67	71						
玉06	予採6	A1	57.9	22.6	11.41	1.48	0.51	0.88	2.50	2.19	0.08	0.20	186	304	169	992	249	726	379	69	87					239	
玉07	予採7	A1	58.6	22.4	10.97	1.42	0.48	0.84	2.43	2.20	0.07	0.20	184	298	246	1113	214	819	378	67	63						
玉08	予採8	A1	56.4	21.7	13.26	1.57	0.49	0.86	2.60	2.51	0.12	0.17	230	403	238	1287	303	878	451	92	81						
玉09	2号1A層01	A1	62.2	16.3	13.68	1.58	0.19	0.43	2.63	2.32	0.06	0.23	250	422	174	1308	322	838	472	91	91						
玉10	2号1A層02	A1	57.5	21.9	12.35	1.41	0.49	0.93	2.43	2.32	0.07	0.24	197	332	240	1236	231	717	390	76	76						
玉11	2号1A層03	A1	57.7	22.3	11.88	1.48	0.51	0.88	2.53	2.17	0.09	0.22	210	330	232	957	245	691	389	80	70						
玉12	2号1A層04	A1	57.5	22.1	12.39	1.46	0.44	0.91	2.47	2.09	0.05	0.19	195	346	249	1145	255	825	342	76	72					153	
玉13	2号1A層05	A1	57.9	22.4	12.03	1.47	0.24	0.87	2.45	2.07	0.07	0.20	217	310	222	1140	257	769	354	77	71						
玉14	2号1B層01	A3	44.6	22.7	26.17	2.25	0.00	0.18	1.10	1.46	0.25	0.29	208	338	271	6657	345	1678	534	82	114						
玉15	2号1B層02	A3	46.5	26.5	20.70	1.86	0.11	0.51	0.83	1.86	0.28	0.24	136	262	224	4072	245	1268	366	64	87						
玉16	2号1B層03	A3	45.2	25.6	22.98	1.95	0.18	0.28	0.95	1.45	0.18	0.29	168	352	187	5811	291	1296	464	82	89						
玉17	2号1B層04	A4	50.8	23.9	20.16	1.83	0.20	0.28	1.02	1.04	0.11	0.16	166	288	230	1933	254	1557	397	43	94						
玉18	2号1B層05	A4	55.2	26.4	12.05	2.01	0.28	0.36	1.67	1.23	0.15	0.23	166	329	266	1571	292	1137	394	92	78						
玉19	2号1B層06	A1	59.3	22.5	9.35	1.31	0.59	0.90	2.51	2.38	0.21	0.27	192	329	278	4181	260	712	338	90	59	71				84	
玉20	2号2層01	A1	58.1	22.1	11.51	1.44	0.45	0.84	2.49	2.31	0.18	0.16	212	326	214	1106	254	798	383	81	61						
玉21	2号2層02	A1	58.0	22.2	11.55	1.45	0.38	0.87	2.62	2.34	0.06	0.23	197	333	180	890	230	734	326	81	71						
玉22	2号2層03	A1	58.2	22.3	11.50	1.43	0.52	0.85	2.48	2.15	0.07	0.18	185	327	203	986	231	739	369	75	52						
玉23	2号2層04	A1	56.9	20.6	13.64	1.43	0.53	0.92	2.54	2.82	0.06	0.22	208	458	245	1367	256	751	478	93	78						
玉24	2号2層05	A1	57.2	22.5	11.90	1.57	0.36	0.73	2.73	2.19	0.23	0.26	229	359	233	810	259	957	376	86	86						
玉25	2号2層06	A1	58.6	21.9	11.48	1.41	0.31	0.88	2.46	2.31	0.11	0.24	198	313	206	1298	231	744	310	84	76						
玉26	2号2層07	A1	58.2	22.2	10.94	1.52	0.59	0.78	2.68	2.37	0.07	0.31	204	336	285	797	261	800	374	70	75						
玉27	2号2層08	A1	58.3	21.9	11.13	1.41	0.55	0.95	2.39	2.42	0.25	0.32	173	312	211	1537	239	853	297	77	63						
玉28	2号2層09	A1	58.1	22.0	11.79	1.38	0.42	0.82	2.46	2.34	0.12	0.24	191	350	243	1251	236	660	389	77	75						
玉29	2号2層10	A1	55.5	21.7	14.12	1.55	0.41	0.87	2.68	2.48	0.06	0.27	268	420	261	1219	303	897	447	103	86						
玉30	2号2層11	A1	58.4	22.4	10.75	1.46	0.55	0.87	2.56	2.26	0.10	0.24	219	335	236	1265	237	748	343	73	67						
玉31	2号2層12	A2	47.0	25.2	19.40	1.91	0.38	0.84	1.32	2.36	0.55	0.38	169	363	274	3541	325	1140	347	93	88					81	
玉32	2号2層13	A2	41.2	29.6	21.51	2.03	0.10	1.17	0.80	1.87	0.76	0.32	136	165	196	3780	302	1360	299	80	94			201	142		
玉33	2号2層14	A2	48.6	21.8	21.60	1.88	0.27	0.45	1.08	2.59	0.47	0.48	142	414	279	5506	312	1298	283	83	81						
試料 #	出土位置		SiO ₂	Al 2O ₃	Fe 2O ₃	TiO ₂	Na ₂ O	MgO	K ₂ O	CaO	P ₂ O ₅	SO ₃	Rb ₂ O	SrO	Cr 2O ₃	MnO	ZnO	V ₂ O ₅	ZrO ₂	Y ₂ O ₃	Ga 2O ₃	NiO	Cl	Ir 2O ₃	Br	Ag	
力00	予採01		61.7	18.0	11.42	1.28	0.74	1.30	2.53	2.43	0.10	0.16	187	309	314	1576	223	591	378	76	50	86					
力01	予採02		61.0	18.0	12.10	1.30	0.52	1.28	2.56	2.60	0.13	0.15	213	311	277	1330	229	547	354	80	60	81	656				
力02	予採03		60.4	17.9	13.02	1.35	0.51	1.15	2.53	2.36	0.29	0.16	185	311	356	1211	209	674	424	69	53	96					
力03	予採04		61.1	17.5	12.40	1.35	0.46	1.14	2.73	2.41	0.29	0.24	176	327	377	1416	199	609	392	65	64	85	475				
力04	2号1A層01		62.3	19.4	9.63	1.32	0.40	1.02	2.71	2.45	0.13	0.20	199	359	339	934	217	561	381	71	78		435				
力05	2号1A層02		59.0	20.1	11.85	1.34	0.60	1.05	2.68	2.56	0.22	0.19	206	348	369	2033	259	595	413	78	62	91					
力06	2号1A層03		62.9	19.5	9.69	1.40	0.48	0.83	2.58	2.12	0.04	0.16	155	325	214	889	183	594	382	72	52						
力07	2号1A層04		57.3	23.1	11.11	1.42	0.36	0.69	2.48	2.22	0.45	0.38	197	334	349	2906	232	675	356	70	62	69					
力08	2号1A層05		60.5	19.1	11.93	1.25	0.60	1.14	2.67	2.15	0.14	0.20	171	280	350	1266	179	669	345	80	66	100					
力09	2号1B層01		61.7	19.3	9.71	1.43	0.70	1.01	2.87	2.46	0.21	0.33	212	389	302	980	210	664	481	85	61	86					
力10	2号1B層02		59.7	19.1	11.42	1.36	0.65	1.12	2.71	2.70	0.49	0.36	186	336	357	1167	257	492	315	70	56	88	547				
力11	2号1B層03		64.0	19.9	8.42	1.22	0.59	0.76	2.65	1.96	0.13	0.18	153	345	302	652	173	417	404	65	62						
力12	2号1B層04		62.4	18.4	10.08	1.20	0.85	1.33	2.50	2.47	0.27	0.17	164	304	398	1099	228	546	328	62	63	73					
力13	2号1B層05		60.1	21.3	10.45	1.52	0.24	0.85	2.49	2.05	0.28	0.30	176	336	318	1679	220	650	354	71	55		536				
力14	2号2層01		59.8	22.1	9.61	1.35	0.65	0.98	2.24	2.32	0.35	0.31	165	300	350	1194	197	598	321	61	61	65					
力15	2号2層02		59.6	19.9	11.23	1.35	0.67	1.20	2.74	2.54	0.14	0.20	204	321	411	1524	263	682	343	80	57	94					
力16	2号2層03		59.1	18.8	11.04	1.32	0.57	1.18	2.72	2.54	0.39	1.14	211	314	368	1480	465	669	365	160	203	87	713				
力17	2号2層04		63.3	18.4	10.16	1.47	0.51	0.89	2.49	2.16	0.16	0.13	148	305	255	970	139	659	328	55	65						
力18	2号2層05		60.9	19.1	10.97	1.26	0.67	1.07	2.58	2.68	0.14	0.23	189	338	351	1560	281	515	407	75	38	82					
力19	2号3層01		56.2	23.1	11.56	1.40	0.49	0.96	2.64	2.39	0.44	0.															

実体顕微鏡画像からみた土玉素材土の特徴

検出された土玉は、肉眼的な観察においても、灰白色のものを主体としつつ茶褐色のものが含まれていることが確認できる。第1図に示したとおり、実体顕微鏡下では、前者は0.1～0.5mm程度の白色砂粒が目立つ微砂粒を含む灰白色粘土主体で構成されているA1類、A1類と同様の粘土で構成されているものの夾雑物が多いA1'類、0.2～0.5mm前後の砂粒を含みやや褐色を帯びた灰白色粘土主体で構成されているA2類、A2類にA1類構成粘土類似の小ブロックが混入しているA2'類に細分できそうである。また、後者は、茶褐色(ローム?)土壌にA2類様の粘土ブロックを含み夾雑物の非常に多いA3類、A1・A2類様の粘土と茶褐色土壌が混在したA4類を認めた。すなわち、土玉の色調の相違は、粘土主体群と粘土ブロックに土壌分を多く含む一群の差異であることを確認できる。なお、第1図下段に示したカワラケについては、マトリクス部分の混在粒子はA1類粘土にも似るが、径0.2～0.5mm程度の白色粒子が目立つ点でやや異なっている。

元素組成からみた土玉の分類

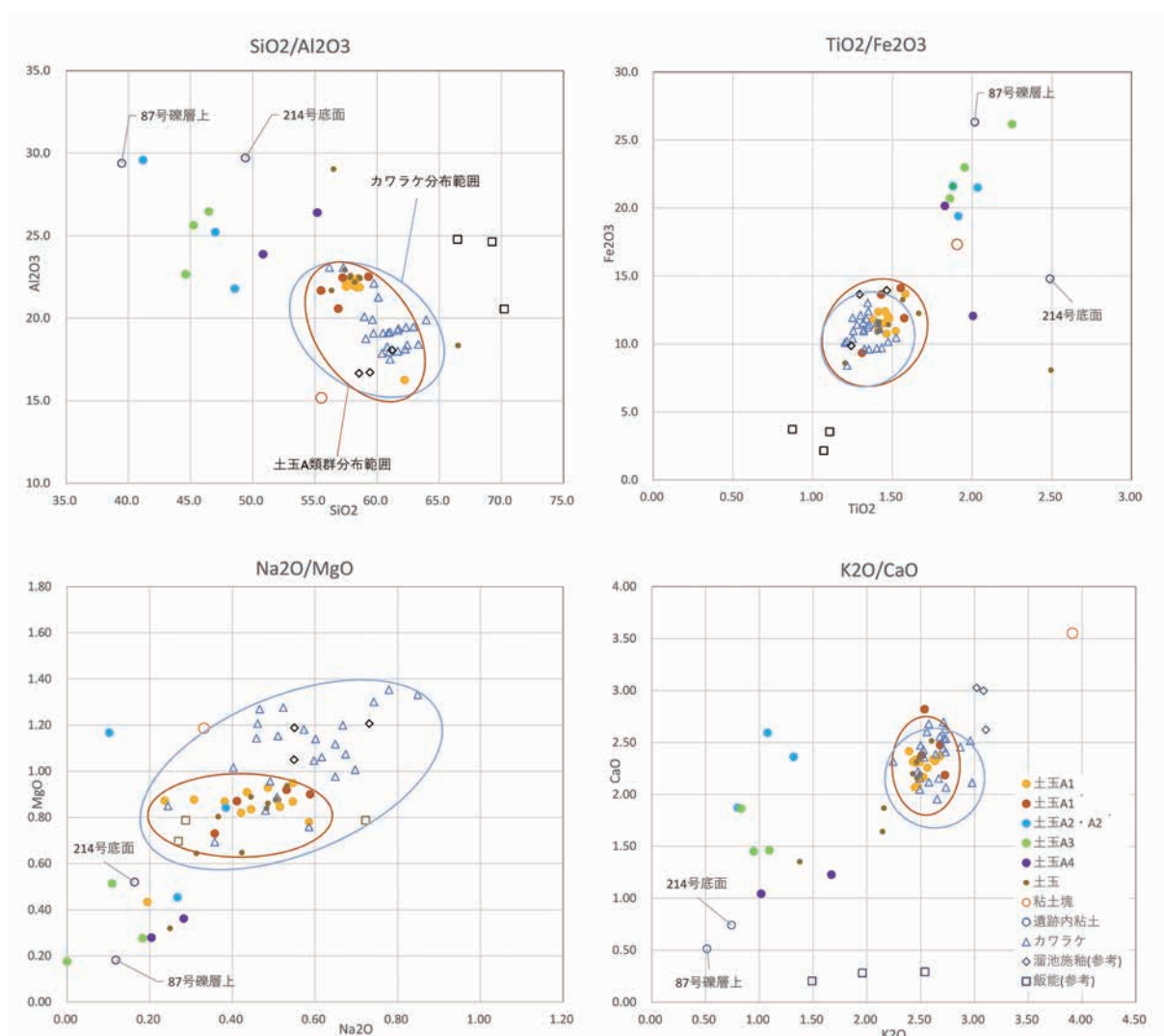
土玉の分類毎の相違や共伴したカワラケとの関係を化学的に確認するために、EDX分析の結果から、主成分8元素・微量8元素の計16元素を選択して作成した二元分布図8種(第2・3図)による検討を加える。

まず、土玉の分類間での比較を試みると、A1・A1'類に関しては、いずれの分布図においても非常に良いまとまりを示していることが判る。これに対し、A2類・A2'類・A3類・A4類はケイ素・鉄・チタン・ナトリウム・マグネシウム・カルシウムの主成分6元素、ルビジウム・ストロンチウム・クロムの微量3元素がA1・A1'類とは異なる領域に分布し、元素組成上からも両者の相違が確認できた。ただし、A2～4類群は互いに類似した挙動を示す上に、常にA1類とも隣接した領域にプロットされることにも留意が必要である。遺跡内の井戸(87号遺構壁面礫層上)および堀底(214号遺構底面)から採取された粘土試料2点は、いずれの分布図においてもA2～4類群に近接するものの、A類群とは常に排他的領域にプロットされる。したがって、これらの粘土が土玉の素材土として用いられた可能性は低いものと考えられる。

土玉とカワラケ胎土との関係

今回対象としたカワラケも、出土遺構および層位に関わらず、全ての分布図において良くまとまってプロットされており、一定期間を通じて単一生産地域から供給されたものと見做することができる。また、参考として第2・3図中に掲げた溜池遺跡出土の施釉カワラケの胎土とも分布域が重なることから、18世紀後半以降の江戸在地系土器(註1)の範疇で捉え得るものである。これは、参考として図中に示した飯能焼(荒川水系上流域)の値(註2)が多くの元素で異なることから傍証される。

そして、土玉A1・A1'類の分析値は、ジルコニウム・バナジウムが隣接域に分布することを除けば、すべてカワラケ胎土の分布域の中にプロットされた。カワラケ素地土に水簸・混和材などによる加工の可能性があることを勘案すると、両者の素材粘土は同一であったと断定して大過なкаろう。したがって、土玉A1・A1'類については、カワラケと同様、江戸在地系土器の生産者に発注した商品だった可能性が非常に高い。また、実体顕微鏡による観察結果も勘案すると、A2～4類群に関しても、カワラケ生産には適さなかった純度の低い粘土が用いられていた可能性やA1類粘土に他の土壌を添加ものが含まれている可能性などを考慮する必要があるだろう。



第2図 EDX 分析結果1 主成分元素の二元分布図4種

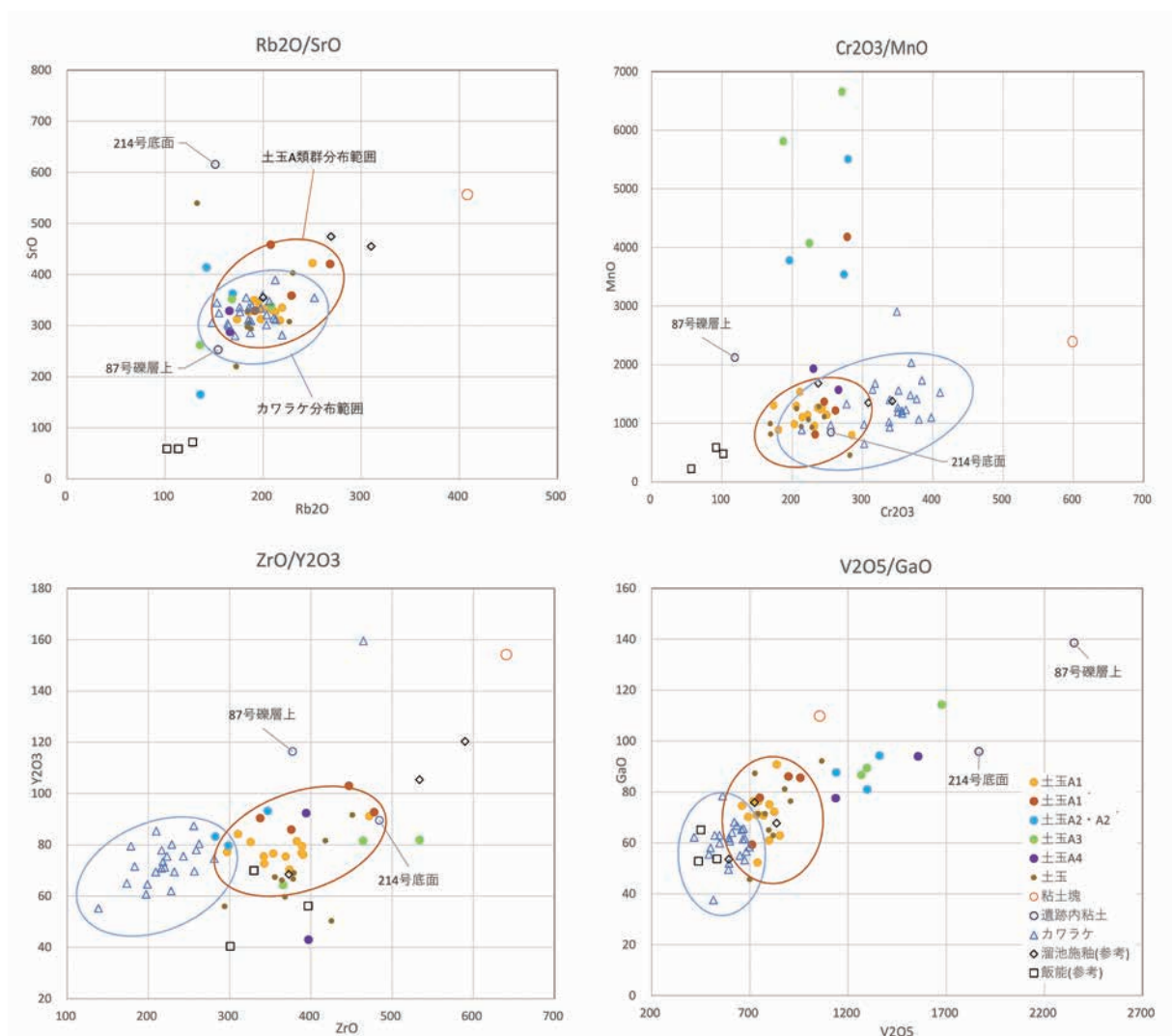
結語

今回の分析によって、土玉の主体を占めるA1群がカワラケと同じ生産地域に発注された商品であった可能性が高いことを確認できた。すなわち、大規模な習俗が維持され続けた背景には、カワラケ同様、土玉についても安定的に供給可能な裏付けがあったことになる。

附) 土玉・カワラケ廃棄層のモノグラム製作に関する覚書き

今回検出されたような土玉・カワラケの集積遺構は過去に例がなく、今後においても検出される可能性は極めて低いであろう。こうした状況を鑑み、調査区境界部分を対象として土層モノグラムを製作しておくこととした。対象は2号遺構2ヶ所(一か所は上下2枚・第67図参照)、および7号遺構である。

ただし、今回のモノグラム製作にあたっては、大きな懸念があった。対象遺構は、折り重なるように堆積するカワラケの隙間に土玉が存在し、両者の周囲には多くの空隙も認められたのである。中には、空隙の中に浮いた状態の土玉もあった。断面を整えようと少しでも力を加えると周囲の土玉やカ



第3図 EDX 分析結果2 微量元素の二元分布図4種

ワラケの小片が逐次脱落していくという状況で、検出状況のままを忠実に残そうとする場合、接点の薄弱な土玉やカワラケを如何に固定するかが問題となる。すなわち、剥ぎ取り用の樹脂とカワラケ・土玉の接点 que これらの重量に対して非常に小さくなる例が多く出てしまうこと、また、土玉・カワラケが複雑に絡んでいるため、一定の幅をもって採取せざるを得ず、全体の重量も非常に重くなってしまふことが予想されたのである。剥ぎ取りの強度を考えると、強度のある裏打ち材を用いるべきであろうが、そうすると、細かい凹凸の激しい土層面に柔軟に対応することが困難となってしまう。

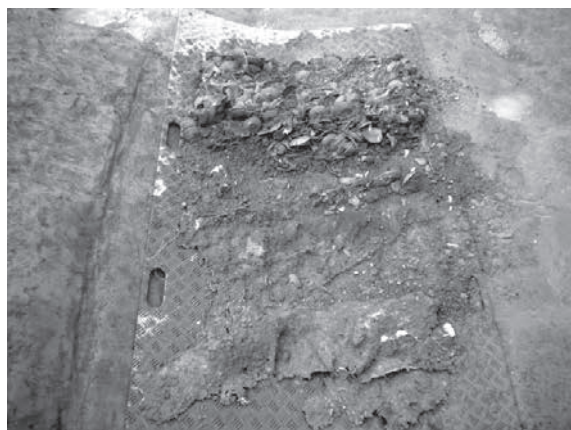
スケジュールの関係で手法に関する十分な検討を加える猶予もなかったことから、補強等に関しては後の検討課題とし、まずは、より現況に近い形を残すことを優先した。裏打ちには薄手の不織布を用い、採取面の複雑な凹凸により柔軟に対応できるようにした。裏打ち布を添わせることが困難な狭い空隙には、適当な大きさに切って湿らせた不織布の小片を押し込みながら樹脂を多めに塗布した。その結果、4例共に概ね堆積状況を反映する形で採取することができた。

この原稿を執筆している時点では、まだ仕上げ作業の途上である。成果品は、重量に比して裏打ちの強度が弱く、裏面は波打っていることから、傘釘を用いて厚手のコンパネに仮固定した状態で保管

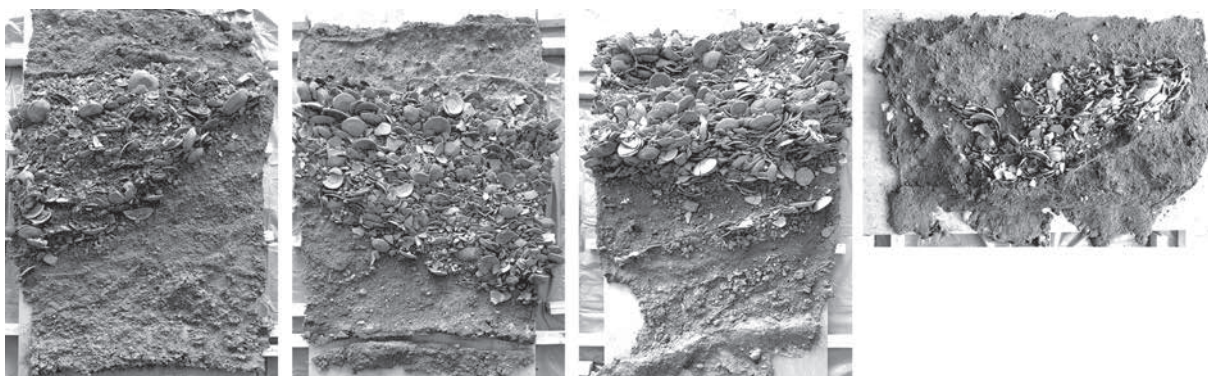
している。作業としては、乾燥中に遊離した土玉・カワラケ片・土壌を少しずつ取り除きつつ、残すべきと判断した個体については再度固定し直しながら、最終的に固定する面を整えている状況であるが、この作業も非常に手間が掛かり、保管場所が本務地と離れていることもあって、まだ多くの時間を要することが予想される。完了した際には、遺構の臨場感を直に感じることができるモノグラムとなろう。



第4図 モノグラム作成状況



第5図 硬化後水洗したモノグラム B2



第6図 モノグラム現況 左から A：2号遺構南東壁、B1：2号南西壁上部、B2：2号南西壁下部、C：7号南東壁

註

- 1 上條朝宏・長佐古真也 1996「溜池遺跡出土土器灯明皿の胎土分析」『溜池遺跡 ―総理大臣官邸整備に伴う文化財発掘調査報告書―』第一分冊 都内遺跡調査会 但し、今回使用したのは再分析値
- 2 長佐古真也 2001「飯能焼胎土の元素組成」『特別展 黎明のとき ―飯能焼・原窯からの発信―』展示図録 飯能市郷土館 但し、今回使用したのは再分析値

V 成果と課題

1. 縄文時代

・原町西遺跡周辺の縄文時代前期中葉の遺跡について

今回の調査では住居 1 軒および遺構外出土の縄文時代前期中葉の土器群が、大量とは言えないまでもまとまって出土しており、本遺跡を含む周辺地域における当該時期の遺跡の動向についてより詳細に捉えることが可能になったと言える。縄文時代前期は現在よりも温暖湿潤な気候であり、海水面の上昇による「縄文海進」が生じていた時代で、黒浜式期には干潟が発達したことから奥東京湾沿岸部には多くの貝塚が形成された。本遺跡の立地する地域は奥東京湾湾口部にあたり、貝塚の密集する湾奥部からはやや距離を置いている。

今回調査で発見された 98 号遺構は、出土土器から縄文時代前期中葉黒浜式期に位置づけられる。黒浜式は概ね 3 段階に細分されているが(奥野 1989、田中 2008 など)、98 号遺構から出土した黒浜式は黒浜式の中でも中位の段階と考えられ、お茶の水貝塚(東京都埋蔵文化財センター 2002)で発見されている住居と概ね同時期に位置づけられる。また、文京区内での黒浜式のまとまった出土事例としては御茶ノ水貝塚以外では、動坂遺跡(安孫子ほか 1978)が挙げられる。動坂遺跡報文では、黒浜式は写真のみの報告であるが大形菱形文などの破片が写っており、関山式を含んでいる可能性はあるものの、お茶の水貝塚よりも古い黒浜式の一群にあたるものが中心となるものと予想される。

この他、周辺で黒浜式期の遺構が確認されている遺跡としては、動坂貝塚よりすぐ区境を挟んで向かい合う荒川区道灌山遺跡(土岐 1934、櫻井ほか 1986・1988)や台東区上野忍岡遺跡群(菊池ほか 1996 など)が挙げられる。上野忍岡遺跡群内では諸磯式期の遺構も確認されている。また道灌山遺跡では黒浜式以降も諸磯 a~c 式まで継続して土器が出土するなど文京区内の 3 遺跡に対して継続期間が長くなるものと推察される。

・縄文土器について

今回の調査においては、縄文土器が 260 点出土したが大半が前期中葉黒浜式に比定される一群である。段階については前項でも触れたが、おおむね中位の段階に位置づけられる。都内遺跡においても黒浜式は古段階、中段階、新段階の 3 段階と先行研究と概ね同様の段階設定が可能と考えている。具体的な遺跡を挙げると、文京区動坂遺跡の他、板橋区菅原神社台地上遺跡(東京都埋蔵文化財センター 1972)などで古段階の土器が出土している。中段階の土器が出土した遺跡としては本遺跡、お茶の水貝塚の他に、北区七社神社前遺跡(渡辺 2017)や北区田端西台通遺跡(東京都埋蔵文化財センター 2020a)があり、どちらも釈迦堂 Z3 式の伴出が報告されている。新段階では、千代田区三番町遺跡(塩野崎ほか 2008)で、黒浜式の新段階から諸磯 a 式古段階の土器が出土している。また、多摩ニュータウン No.457 遺跡(川島 1996)でも黒浜式新段階から諸磯 a 式にかけての住居が検出されており、ここでも釈迦堂 Z3 式が伴出していると報告されている。

釈迦堂 Z3 式については、動坂遺跡報文においては繊維の入らない前期土器の出土は記述されていないことから釈迦堂 Z3 式の伴出はなかった可能性が高い。この釈迦堂 Z3 式は山梨県釈迦堂遺跡を

標式遺跡とする土器型式で、釈迦堂 2 群 1 類に分類された一群にあたる。その内容は報告者の小野正文氏によって以下のようにまとめられている (小野ほか 1986)。

- ①繊維を含まない
- ②器壁が薄い。5 ～ 6mm 程度
- ③内面に指頭圧痕や整形痕
- ④縄文は LR ないし RL による羽状縄文、2 段の反の撚り、LL や RR など
- ⑤まれに縄文地上に沈線文や隆帯

釈迦堂 Z3 式の編年的位置付けについては、釈迦堂遺跡での共伴関係から黒浜式に併行することが型式設定時から捉えられている。さらには、釈迦堂 Z3 式自体が変化の乏しい土器群であることから、明確な変遷過程は捉えられていないものの、遺構の重複関係等からおおよそ 3 時期に分離されるとされている。その後、報告事例の増加に伴い、釈迦堂 Z3 式が黒浜式中段階から諸磯 a 式に伴うものであることが指摘されている (縄文セミナーの会 2017)。今回確認された資料やお茶の水貝塚出土資料は現在想定されている釈迦堂 Z3 式の上限部分にあたる。これらが釈迦堂 Z3 式の最古段階であるとすれば、最古の段階においてすでに武蔵野台地東南端にまで完成された釈迦堂 Z3 式が波及していたといえよう。なお、この釈迦堂 Z3 式の移入について鈴木徳雄氏は、土器の使用法の変化などが背景にあるとしている (鈴木 1988・2006)。

また前述の多摩ニュータウン No.457 遺跡の報文で報告者の川島雅人氏は、出土した釈迦堂 Z3 式を搬入土器と位置づけ、その特徴をまとめており、本遺跡から出土した釈迦堂 Z3 式とも一致する。その中には、縄文地文上に格子目文が沈線により描かれ、口縁の波頂部から垂下する隆帯を施したものが含まれている。これについては類似するものが小田原市羽根尾貝塚より出土しているが、このような土器については、他の釈迦堂 Z3 式とは一線を画しており、釈迦堂 Z3 式と認識している土器群の中に系統の異なる土器群が含まれている可能性を考慮する必要があるだろう。

一方で、群馬県内の釈迦堂 Z3 式出土事例の集成を進める清水司氏により、釈迦堂 Z3 式類似土器が黒浜式・釈迦堂 Z3 式自体に伴って出土していることが指摘されている (清水 2020・2023)。清水氏によれば、黒浜式中段階においては胎土への繊維含有といった黒浜式に近い釈迦堂 Z3 類似土器が共存しており、これらの釈迦堂 Z3 式類似土器には搬入品は存在せず、在地で製作されたものであるという。今回、原町西遺跡から出土した中では、強いて言えば第 12 図 -20・21 が釈迦堂 Z3 式に近い距離にある土器であると考えられる。この土器は他の黒浜式と比較して、異質な施文原体を用いて施文がなされており、かつ他の土器より薄手となっている。こうした土器を釈迦堂 Z3 式類似土器と積極的に捉えられるかどうかは現状では判断が難しい部分で、今後、釈迦堂 Z3 式と同類似土器の分別について検討が必要であるとともに、関東地方で出土するすべての釈迦堂 Z3 式が搬入された土器であるのかについても検討を進める必要があるだろう。 (佐藤)

2. 御殿堀と千川上水

御殿堀の外周法面が北西縁で 24m、北東縁で 14m 確認された。法面の傾斜角は約 31°、傾斜率は 60% で、今回の発掘調査以前に確認された御殿堀の法面が「30°台の勾配」(成瀬 2008: 177 頁)であることと合致する。北西縁と北東縁が交差する屈曲部の平面的な角度は、「小石川御殿絵図」(渋

谷：第 23 図、290 頁）では御殿堀の北東縁がやや湾曲しているように描かれているが、実際には南西―北東と北西―南東の屈曲は 85°のやや鋭角を示す（第 16 図）。

御殿堀に付属する施設として北西法面の 18 号遺構（上水路-3）から南方向に一人分幅の段を有する斜路、北東法面の屈曲部から南方向にやはり一人分幅の段を有する斜路、そして屈曲部分に一人分幅の段を作り付けた昇降路が設けられていた。屈曲部分の昇降路は御殿堀のほぼ底面近くまで設けられていたが、北西法面および北東法面の斜路については法面途中で途切れていた。当時の水面までの通路だったのだろうか。御殿堀を構築する際の掘削土はすべて堀内側に向けて運び上げられたと想定されているので、御殿堀の内側法面には構築時に伴う本格的な昇降路が設けられていた可能性が高いが現時点で確認されていない。

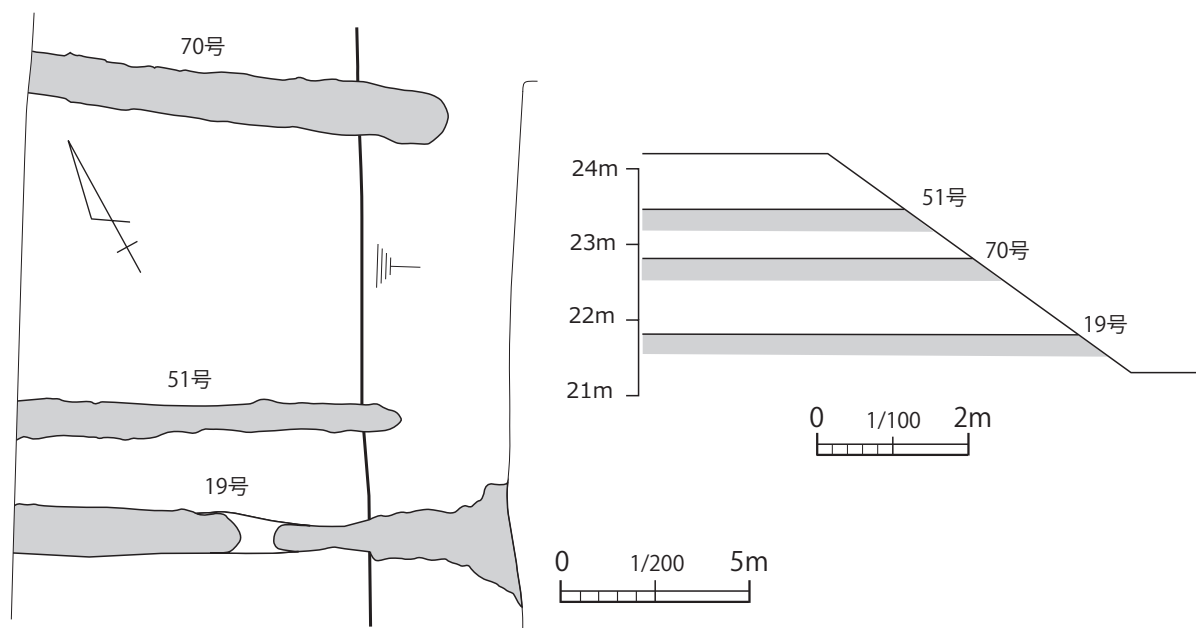
御殿堀は、小石川御殿を取り囲む水堀として 1698（元禄十一）年に綱吉が阿波徳島藩の蜂須賀綱矩に命じて幅十間（約 18m）・深さ三間（約 5.5m）の規模で全周およそ 2 キロに及ぶ施設として構築された。今回の調査で確認された千川上水の取水口から、東西に分かれた水は、東の御殿坂・西の綱干坂で 4 段あるいは 5 段の滝となって流れ下り、現在の植物園正門付近で再び合流して谷端川に流入していたものと思われる。

千川上水は、1696（元禄九）年に江戸市中の北部一帯に給水するために開削された。特に徳川綱吉が関係した小石川御殿・湯島聖堂・上野寛永寺・浅草御殿への給水が目的とされており、小石川御殿への給水はその第一とされる（大松 1996 など）。今回、千川上水から小石川御殿堀への複数の給水口が確認されたことは、千川上水の実態を考える上でも興味深い。

北西方向から南東方向へかけて流下して御殿堀に流入する上水路は、51 号遺構（上水路-1）・70 号遺構（上水路-2）・19 号遺構（上水路-3）と 3 本の遺構として確認された（第 175 図）。調査区北側で南西―北東を軸とする 214 号遺構は、調査区北西方向の調査区外の箇所において 70 号遺構（上水路-2）から分水して北東方向の居住地に給水するための枝線と考えられる（第 16 図）。51 号遺構からは鉄釘などは確認されなかったが、70 号遺構・19 号遺構・214 号遺構からは、鉄釘が等間隔に出土したことで木樋の存在が確かめられた。

御殿堀に出水する上水路と考えられる 3 本の遺構は、それぞれの木樋設置レベルが異なっている。上水路が確認された附近の御殿堀上場の標高値が 24.1m であり、51 号遺構（上水路-1：23.5m）との比高差は 60cm、70 号遺構（上水路-2：22.8m）との比高差は 130cm、19 号遺構（上水路-3：21.8m）との比高差は 230cm である（第 175 図の横断面図では上水路の鉄釘出土レベルを木樋設置レベルとみなして直線で表示）。51 号遺構が当初の千川上水だと仮定すれば、当初の水路高からまず 70cm 低下させて 70 号遺構を構築し、最終的にさらに 100cm 低下させて 19 号遺構を構築したことになる。御殿堀の底面標高が 21.4m であり、最初の 51 号遺構（上水路-1）では堀底面までの落差が 210cm であったのに対して、70 号遺構（上水路-2）では 140cm、19 号遺構（上水路-3）では僅か 40cm にまで低下している。こうした千川上水の給水レベル（水位）が徐々に低下したことが、御殿堀廃絶の一つの要因であったように思われるが、近隣の文献調査においても水位の低下に伴う千川上水の改築については確認されていない（蒲生 2020）。

千川上水から御殿堀への実際の給水形態については、それぞれの上水路出水口附近における御殿堀の法面自体には流水に伴う明確な痕跡は認められなかった。そのため御殿堀法面からある程度は堀中



第 175 図 上水路平面図・横断面図 (1/200・1/100)

中央に向けて木樋自体が付きだすように設置されて、堀中央部に落水していたと思われるが、法面にはそうした木樋を支える明確な支柱痕跡のようなものも見出せなかった。(五十嵐)

3. 小石川御殿堀（1号遺構）覆土出土陶磁器の概要

小石川御殿は、当初は徳川綱吉（幼名 徳松）が館林藩主（慶安四年 1651 拝領）当時、江戸別邸として 1652（慶安五）年に拝領し、1655（承応四）年、1662（寛文二）年、1669（寛文九）年、拝領地を拡幅する。その後、1680（延宝八）年綱吉は五代将軍を世襲し、この時点で館林藩小石川下屋敷は幕府の小石川御殿に転換する。今回調査対象となった小石川御殿堀を含む範囲は、1698（元禄十一）年拡幅された小石川御殿北東側西部分に含まれる。拡幅前は、「小屋敷」（『御府内場末沿革圖所』）とある。小石川御殿は、1713（正徳三）年に廃絶する。よって、御殿堀の稼働時期は、1698（元禄十一）年から 1713（正徳三）年となる。その間、1684（貞享元）年御殿内に「御薬園」が置かれる。また、御殿廃絶以後、御殿北東範囲は旗本屋敷となる。よって、小石川御殿堀は同時に埋め立てられたと判断される。

小石川御殿堀（原町西遺跡 1 号遺構）の覆土は、ロームブロックを多量に含み、御殿内側から流れ込んだ状況が窺える複数の堆積層からなることから、御殿内郭沿いに構築された土塁（御殿堀掘削土を用いたと考えられる）を突き崩したものと判断でき、また堆積層に間層をあまり含まないことから、埋設は短期間の内に完了したものと考えられる。

以下、小石川御殿堀（1号遺構）覆土出土陶磁器の概要を示す。まず、御殿堀溝底出土の陶磁器は、いずれも小片のみで、7点出土している。内容は、肥前窯産磁器染付丸碗底部片・染付磁器丸碗胴部片・白磁碗胴部片・青磁瓶（もしくは香炉・壺か）胴部片、瀬戸・美濃産陶器香炉底部片、土器鉢類（火鉢他）三足脚部、である。磁器染付丸碗底部片は、外面草花文、内面無文、底部銘なしで、高台はやや薄く、端部は先細りせず概ね逆台形状呈する。17 世紀後半代の製品と考えられる。瀬戸・美濃産

陶器香炉底部片は、三足筒形香炉と考えられる。御殿堀溝底出土の陶磁器は、御殿堀の稼働・廃絶年代（1698～1713）を定点とすると、開削時期以前の製品と理解できる。

次に、御殿堀埋立て覆土出土陶磁器の様相について記す。磁器、陶器、土器ともに破片が多いが、復元率はさほど高くない。磁器碗は、肥前窯産のみで、半球碗の破片はおおよそ認められず、また同様に筒碗、広東碗の破片も含まない。但し、外青磁染付碗蓋は認められた。また、瀬戸・美濃窯産磁器は認められないが、同陶器文字徳利の小片が1点ある。

種別は、以下のとおりである。磁器は、中国製品が3点見られる。染付色絵坏（第49図-5）、染付碗（第50図-6）、人物形把手付き青磁鉢（水盤か 第50図-5）である。

肥前窯産磁器は、白磁坏（第49図-1）、染付坏、外面鉄釉碗、染付丸碗、白磁碗、染付くらわんか碗（第49図-3・第50図-2他）、染付コンニャク印判文丸碗（第49図-2他）、染付皿、染付見込み蛇目釉剥ぎ皿（第49図-7他）、青磁見込み蛇目釉剥ぎ皿（第49図-6他）、青磁鉢、染付鉢（第49図-8他）、青磁三足香炉（第49図-10）、染付香炉、染付仏飯具、白磁瓶、青磁瓶、外青磁染付碗蓋（第49図-9）、染付蓋物蓋、色絵蓋物蓋（第50図-4）などである。肥前窯産陶器は、鉄釉丸碗、呉器手碗、内野山窯透明釉碗、刷毛目丸碗（現川焼）、京焼風陶器呉須絵丸碗・平碗（第49図-17・18・第50-1他）、内野山窯銅緑釉皿、三島手鉢、刷毛目鉢（第49図-14）などが見られる。瀬戸・美濃窯産は、長石釉志野皿、黄釉碁笥底小皿、掛分碗、灰釉丸碗、灰釉呉須絵碗（第49図-11）、鉄釉三足香炉、灰釉輪高台香炉、灰釉仏飯具、飴釉徳利、灰釉徳利、鉄釉壺（もしくは瓶）、鉄釉搦鉢、型紙摺絵鉄絵鬚水入れ（第49図-13）などが見られた。その他、京焼風陶器呉須絵平碗、京都・信楽窯産丸碗、色絵丸碗、呉須絵鉄絵小杉碗、志戸呂窯産徳利、灯明受け皿（第49図-15）、丹波窯産搦鉢、堺窯産搦鉢などがある。土器は、かわらけ、焙烙、角火鉢などがある。

次に、御殿堀の稼働年代（1696～1713）を念頭に据え、陶磁器の編年観に照らして主だった陶磁器資料の年代について述べる。

御殿堀の開削以前および稼働時期に対比できる製品は、繰り返しになるが中国製品として染付色絵坏、染付磁器碗、人物形把手付き青磁鉢がある。青磁鉢人形把手の胎土は、暗灰色を呈し、やや光沢感がある。17世紀初頭以前の年代観で捉えられる。肥前窯産磁器では、外面鉄釉碗：17世紀中葉、染付一重網目文丸碗：17世紀中葉～後半代、染付碗：腰部の張が弱く口唇部へ比較的直線的立ち上がる形態／17世紀中葉、外面連続雪輪文丸碗：17世紀後葉～18世紀初頭、染付型紙刷絵糸切細工皿：17世紀後半代、染付皿（折縁）、青磁鉢（高台外周蛇の目釉剥ぎ鉄漿・内面鐫文様）などのほか、染付丸碗の口縁部・底部破片が比較的多く認められ、これらも17世紀後半代と考えられる。その他、肥前窯産陶器では鉄釉丸碗、呉器手碗、内野山窯透明釉碗（薄手）、京焼風陶器呉須絵丸碗・平碗、瀬戸・美濃窯産は長石釉志野皿、黄釉碁笥底小皿、丹波窯産搦鉢（口縁断面三角形）などが当該時期の製品である。

御殿堀の廃絶時期を跨ぐ時期（17世紀末から18世紀前半代）の製品では、肥前窯産磁器は染付コンニャク印判文丸碗、染付くらわんか碗（草花文）、染付雨降文小碗、染付見込み蛇目釉剥ぎ皿（波佐見）など、肥前窯産陶器は刷毛目丸碗（現川焼）、内野山窯銅緑釉皿、三島手鉢などである。その他、瀬戸・美濃窯産陶器は灰釉丸碗、鉄釉三足香炉、飴釉徳利、灰釉・飴釉水注など、丹波搦鉢（外面口縁帯が三段に突起）がある。

御殿堀廃絶以降（18 世紀中葉から 18 世紀後半代）の製品は、肥前窯産磁器では青磁見込み蛇目釉剥ぎ皿（肥前Ⅳ期 18 世紀中葉～末）、染付仏飯具、青磁瓶、外青磁染付碗蓋、染付蓋物蓋、色絵蓋物蓋など、また肥前陶器は刷毛目鉢などである。その他、瀬戸・美濃窯産陶器は型紙摺絵鉄絵鬚水入れ、灰釉德利、鉄釉播鉢など、京都・信楽窯産は色絵丸碗（笹文）、丸碗、呉須絵鉄絵小杉碗（大振り・小杉文様詳細）、堺窯産播鉢などである。

以上、御殿堀出土陶磁器は、17 世紀代から 18 世紀前半代の製品を主体とし、その他 18 世紀後半代の製品、および一部少量 19 世紀後半代のものを含む様相であった。小石川御殿の変遷と対比すると、御殿堀覆土出土遺物は、① 御殿堀掘削以前、② 御殿堀稼働期から廃絶期、③ 御殿堀廃絶以降に区分できる。

① は、御殿堀掘削以前の御殿拡張域の武家地に内包される遺物群で、御殿堀掘削土中に含まれたものと想定しうる遺物群である。当然であるが、御殿堀廃絶以後、廃絶・埋め立て時点で御殿内郭外周の土塁覆土に含まれた遺物でもある。

② は、御殿堀構底部出土遺物であり、陶磁器も含め出土遺物は非常に僅少である。この状況は、『小石川植物園内貝塚・原町遺跡』（東京都埋蔵文化財センター 2020）においても似た様相を示し、堀浚いなど御殿堀の維持・管理が徹底され、非常に整えられていた結果を示すと考えられる。出土陶磁器は、堀掘削土に含まれた破片もしくは当該時期（1698～1713）の製品が考えられる。

③ は、旗本屋敷時点で何れかの要因で御殿堀覆土に紛れたものと想定される一群と理解される。御殿堀の廃絶時期を跨ぐ時期に対比できる製品群も含まれる。

陶磁器の年代観は、主に肥前陶磁器は『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会編 2000）、瀬戸・美濃陶磁器およびその他陶器は『瀬戸市史』（瀬戸市 1998）・『江戸時代のやきもの一生産と流通』（財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター編 2006）などを参考とした。（石崎）

4. ‘かわらけ’と土玉について

原町西から出土した‘かわらけ’の総数は、685,226 点（2,674,421g）である。総重量にして 2.6 トン以上の‘かわらけ’が出土した。‘かわらけ’については、底部が 1/2 以上残存している資料を最小個体数として注記対象としたが、その総数は 36,349 個体である。

遺構ごとの最小個体数を多い順に列記すると、# 1：2 号遺構（27,990 個体）、# 2：12 号遺構（2,300 個体）、# 3：7 号遺構（1,397 個体）、# 4：8 号遺構（1,129 個体）、# 5：9 号遺構（593 個体）となる。2 号遺構のみで全体の 77%を占める。

‘かわらけ’底部の糸切痕跡は、2 号遺構（24,969 個体）で左回転（22,046 個体：88%）・右回転（2,689 個体：11%）・その他（234 個体：1%）、2 号遺構以外（7,131 個体）で左回転（5,976 個体：84%）・右回転（1,092 個体：15%）・その他（63 個体：1%）であり、左回転が圧倒的である。

‘かわらけ’と一緒に出土した土玉の総数は、199,099 点（343,178g）である。総重量で 340kg 以上の土玉が出土した。大きさ（直径）が計測可能な完形およびほぼ完形の土玉の総数は、74,879 点である。

‘かわらけ’と同様に遺構ごとの計測可能な土玉の出土点数を多い遺構を列記すると、# 1：2 号遺構（54,132 点）、# 2：7 号遺構（5,006 点）、# 3：12 号遺構（4,582 点）、# 4：8 号遺構（4,518

点)、# 5:87 号遺構 (3,326 点) となる。土玉についても 2 号遺構の出土数が全体の 72% を占める。

‘かわらけ’も土玉も 2 号遺構が圧倒的な出土量を示している。また 2 号遺構に隣接する 12 号遺構、2 号遺構から 10m ほど北東方向に群集する直径 1m ほどの土坑群 (7 号～9 号遺構) についても多数の‘かわらけ’と土玉が出土した。

・2 号遺構における 1 m³ サンプルの数量分析

2023 (令和六) 年 9 月 25 日に 2 号遺構の‘かわらけ’・土玉堆積層から各辺 1m の立方体サンプルを採取した (第 67 図、第 70 図: 写真-11)。重量にして 125.3kg となった。全体の内容別重量は、土壌 59,798.4g、礫 969.5g、‘かわらけ’ 60,505g、土玉 3,505.1g、その他遺物 522g で、土壌と‘かわらけ’がそれぞれ全体の 48% を占めている。正に「土より遺物の方が多い」状態である。

内容物の数量は、‘かわらけ’ 25,339 点・土玉 641 点・磁器 2 点・陶器 6 点・土器 1 点・金属製品 9 点・礫 391 点・瓦 10 点のほかに炭化物・貝である。

‘かわらけ’については、総数 25,339 点 (60,505g) のうち最小個体数である底部 1/2 以上の破片は 2.7% の 674 点 (12,725g) である。他の破片の内訳は、口縁部破片 13,992 点 (24,670g)、口縁部から底部破片 1,009 点 (9,010g)、胴部から底部破片 3,746 点 (9,460g)、胴部破片 5,918 点 (4,640g) である。

最小個体数は、底部破片の過半残存を基準としているので、例えば底部で三分割された個体は計数対象とならないという意味での「最小個体」である。破碎に伴い細片化が進行する (破片数が増大する) 総点数における最小個体数の割合は、674 点 / 25,339 点 (2.7%) であるが、重量では 12,725g / 60,505g (21%) となる。

土玉については、完形の土玉が 336 点 (900.9g)、計測可能な破損した土玉が 305 点 (565.2g)、計測ができない破損した土玉が 2,039g で、総重量 3,535.1g である。完形土玉の点数 / 重量の比 (0.373) で求めると、およそ 1,300 余りの土玉が存在していたことになる。こうした点から最小個体の‘かわらけ’と想定土玉数の比は、674 : 1,318 でおよそ 1 : 2 となる。

土玉は基本的に粘土を丸めただけの未焼成であり、非常に破損し易い。良好な場合は‘かわらけ’に盛られた状況で検出されたが (第 68 図: 写真-3)、それ以上に‘かわらけ’と‘かわらけ’に挟まれて押し潰されたような状態で見出された土玉も数多い (第 68 図: 写真-4)。

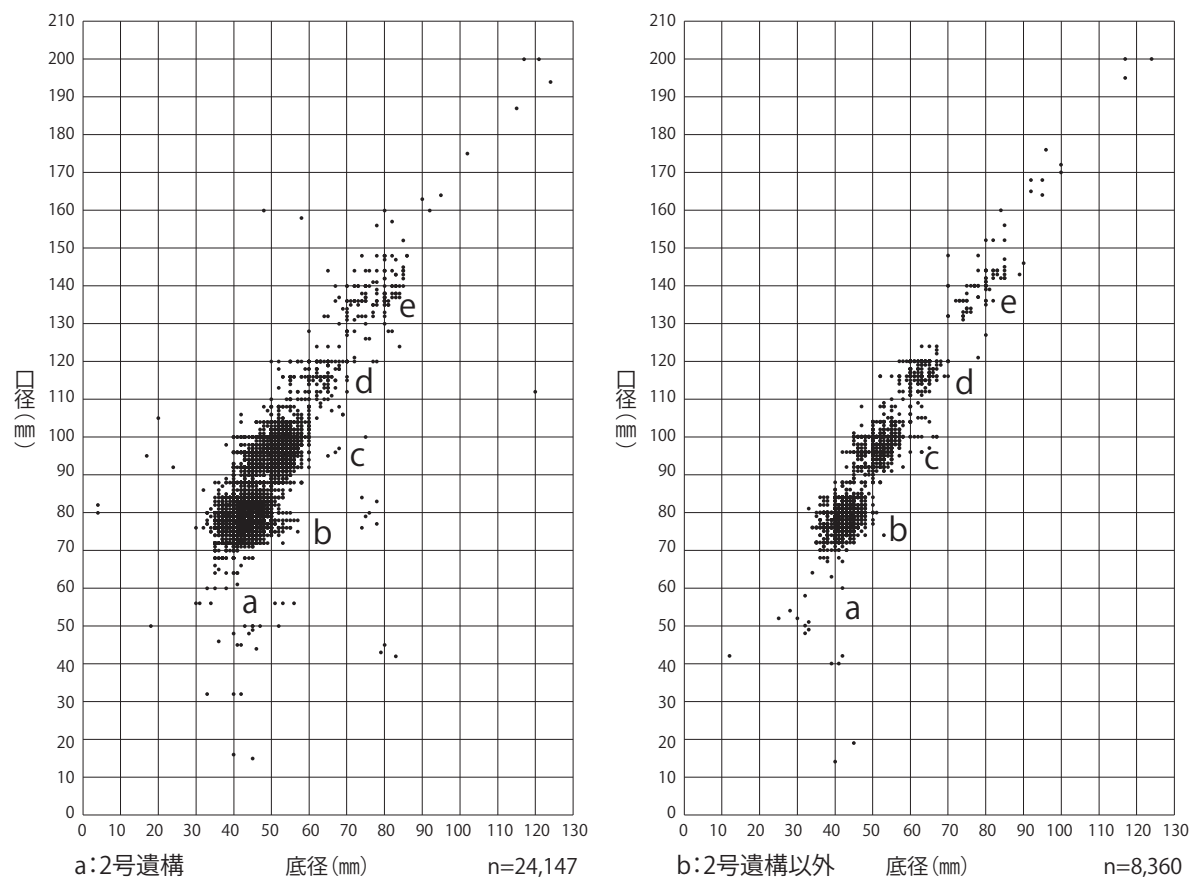
・‘かわらけ’と土玉の法量分布

‘かわらけ’については、口径を縦軸に底径を横軸とする散布図を 2 号遺構出土資料と 2 号遺構以外の全資料数について作成した (第 176 図-a: 2 号遺構、b: 2 号遺構以外)。大まかに口径を基準に区分すると a 類 (4.5cm ~ 6cm: 1.5 寸から 2 寸)、b 類 (6cm ~ 9cm: 2 寸から 3 寸)、c 類 (9cm ~ 10.5cm: 3 寸から 3.5 寸)、d 類 (10.5cm ~ 12cm: 3.5 寸から 4 寸)、e 類 (12cm ~ : 4 寸以上) と区分できる。2 号遺構と 2 号遺構以外については、大まかな傾向は一致しているが、2 号遺構では 2 号遺構以外に比べて b 類および c 類の密集度がより高い。

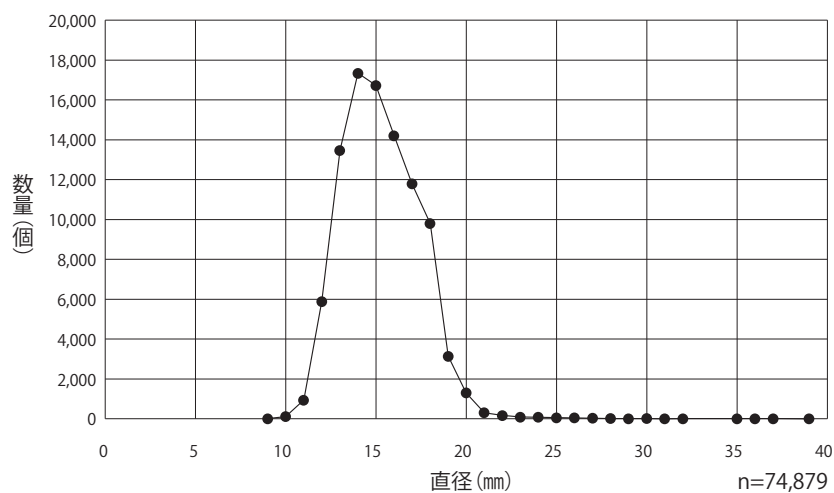
佐賀市における近世 (17 世紀後半 ~ 18 世紀前半) の土師器一括資料では、口径 ~ 4.8cm を「最極小皿」、口径 4.8cm ~ 6.5cm を「小径極小皿」、口径 6.5cm ~ 9.6cm を「広径極小皿」、口径 9.6cm ~ 13.6cm を「小径小皿」、口径 13.6cm ~ 17cm を「広径小皿」、口径 17cm ~ 30cm を「皿」、口径 30cm ~ を「大皿」と区分している (三代・小出 2011)。「溝土器溜り」とされた一括資料では、

口径 6.5cm ～ 9.6cm の「広径極小皿」と共に口径 6.5cm 以下の「最極小皿」が主体を占める点（三代・小出 2011：図 13）が、原町西との大きな違いである。

土玉については、直径の計測可能な 74,879 点について法量分布を示した（第 177 図）。14mm をピークに 13mm から 18mm が平均的な大きさとなる。パチンコ玉の直径が 11mm で、ラムネ瓶の



第 176 図 ‘かわらけ’ 法量分布図



第 177 図 土玉法量ヒストグラム

ビー玉の直径が 17mm、銀杏の実の平均が縦径 25mm・横径 19mm、現在の卓球ボールの直径が 40mm なので、今回出土した土玉の大きさはパチンコ玉より少し大きめでビー玉や銀杏の実より少し小さめの土玉が主体となるが、卓球ボールに近い大きさの土玉も僅かに交えるということになる。

5. 瘡守稲荷

「江戸の白山の大前屋敷の笠森稲荷が流行詞となったのは、宝暦の初めからである。」（三田村 鳶魚 1924「黴毒の神様」、1976『三田村鳶魚全集』第 8 巻：163 頁）

18 世紀半ばには、大前家に所在する瘡守稲荷が評判となっていたとされる（本報告では、鍵屋お仙で知られる谷中の感応寺に所在した稲荷については「笠森稲荷」、白山御殿跡地の大前家敷地に所在した稲荷については「瘡守稲荷」と表記する）。

小川 顕道（1737-1815）は、小石川植物園の地に所在した小石川養成所の医師であった。1810（文化七）年に刊行された『瘡家示訓』で「大前家の瘡守稲荷」を描いたと思われる挿図を掲載している（長沢：第 1 図、295 頁）。同じ小川顕道は、『塵塚談』という書籍で瘡守稲荷周辺の様子を記述している。

「白山御殿坂上かどより元瘡守稲荷前まで、四町ほどの間を大通りという、御堀を埋めし跡、往来となれり。故にむこう側を享保の末までは、皆ひと御堀端といいけるよし、御殿跡のかた片側にならび、朝土屋しき三十五六間もあり、五六十年以前までは、屋しきごとに土蔵一つ充はありけり、二蔵あるもあれど一蔵これなき屋敷はなかりしが、今は四五町の間土蔵一ヶ所見え、屋敷主はそのころの家も過半残れり。」（小川 顕道 1814『塵塚談』、神郡 周校注・解説 1981：51-52 頁）

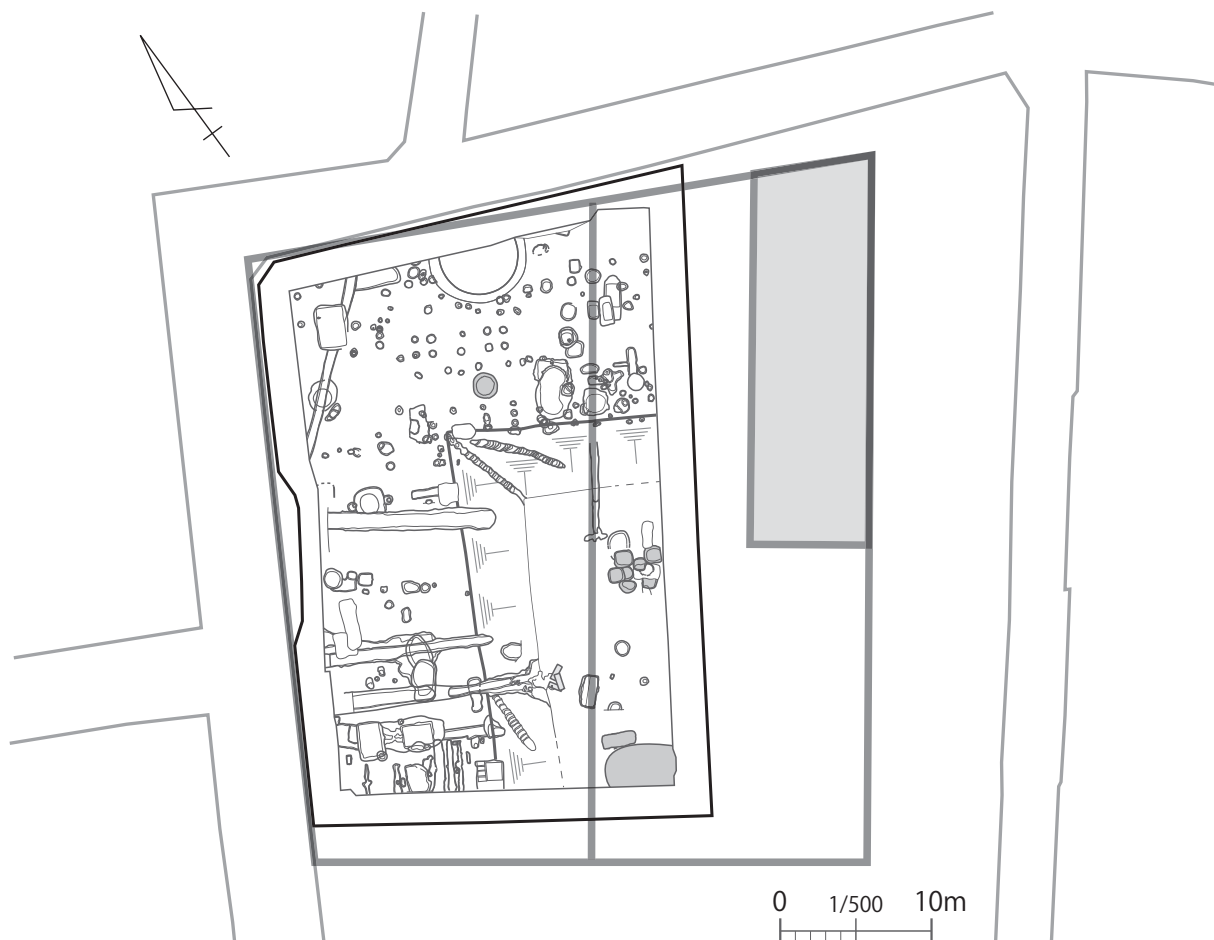
堀田 甚兵衛は、1832（天保三）年に相対替によって調査区東側敷地に居住していた（渋谷：第 1・2 表、275・277 頁）。『江戸風俗惣まくり』（全巻冊）では、「…予彼の大前の屋敷跡に住し頃にて、…」として瘡守稲荷について記している（長沢：294 頁参照）。

「堀田甚兵衛も大前氏と同じく幕府の士人で、特に大前氏の旧邸地に住み、大円寺の依頼について、摂津国島上郡真上村の笠森本祠の縁起を得て、大円寺に与えた人である。」（三田村 鳶魚 1924「二個の笠森稲荷」、1976『三田村鳶魚全集』第 8 巻：157 頁）

大前家敷地に瘡守稲荷が所在していたことは、当時の関係者にはつとに知られていたことであったが、その所在場所が大前家敷地のどこであったかについては明確に記されることはなく、18 世紀末に瘡守稲荷が谷中の大円寺に遷座されると次第に忘却されていったようである。

調査区における屋敷区画については、調査区と『府内場末其外往還沿革図書』などの近世期の絵図と重ね合わせると、御殿堀の埋土に掘り込まれた 66 号遺構（近世 2 溝）がほぼ西側敷地と東側敷地との屋敷境に一致する（第 178 図）。近世 2 面とした御殿堀廃絶後における調査区の西側 3/4 ほどの敷地所有者は、橋本→大前→土山→鶴田・木村→平田・小林と変遷する（渋谷：273 頁）。それに対して調査区の東側 1/4 ほどの敷地所有者は、大前→小川・大前→蔭山→蔭山・丸山→蔭山・小川→堀田・小川→渡辺・小川→長谷川・中内と変遷する（同：274 頁）。

調査区で確認された‘かわらけ’と土玉の大量出土遺構である 2 号遺構はもとより多くの‘かわらけ’と土玉が出土した 7 号遺構・8 号遺構・9 号遺構・12 号遺構のそれぞれは、ことごとく西側の大前家敷地に含まれている。それ以外の‘かわらけ’と土玉の大量出土遺構としては、‘かわらけ’最小個体数が 337 個体、土玉が 3,326 点出土した 87 号遺構（近世 2 井戸）のみが大前家敷地ではない西



第 178 図 調査区屋敷割重ね合わせ図 (1/500)

側の敷地から出土しているが、これも 1733（享保十八）年に大前家が一時的に西側の敷地を預地とした時に廃絶された隣地の井戸に投棄した可能性がある。

瘡守稲荷そのものの所在場所については、今回の調査区からはそれらしき痕跡を見いだすことはできなかった。瘡守稲荷の所在地として最も可能性が高いのが、東側敷地所有者である大前家屋敷地「北東角の 50 坪」（渋谷 274 頁）である（第 178 図：右側大前家敷地スクリーントーン部分）。1768（明和五）年の相対替によって大前家敷地が小川家に移った時に北東部分の 50 坪が残地として大前家に残り、以後 30 年間大前家の所有として維持された（渋谷：第 1 表 268 頁、第 22 図 281 頁）。なお渋谷：第 22 図では、「屋敷渡預絵図証文」をそのままトレースしたため、記載されている数値（横幅「四間」・縦「拾貳間半」）が正確に表現されていない。調査区と屋敷区画を重ね合わせた第 178 図は、渋谷：第 22 図に記載された数値情報および 1854（嘉永七）年「御府内場末往還其外沿革図書」（渋谷：第 12 図）を基に作成したものである。トーンで示した「北東角の 50 坪」が大前家の所有を離れたのは 1797（寛政九）年であり、この年の 5 月 19 日に大前家の瘡守稲荷は谷中の大円寺に遷座している（渋谷：287 頁）。

東側拝領地 250 坪が大前家敷地であった時期（1714（正徳四）年～1767（明和四）年：54 年間）を「大前家瘡守稲荷・前期」として、残地 50 坪が大前家敷地として残った時期（1768（明和五）年～1797（寛政九）年：30 年間）を「大前家瘡守稲荷・後期」とすれば、前期における瘡守稲荷

への奉納物が屋敷地奥の2号遺構所在地に大量に投棄された可能性は高いと考えられる。一方で後期においても北東部に所在したであろう瘡守稲荷への奉納物がすでに大前家の手から離れた小川家の敷地となった2号遺構所在地に引き続き廃棄されたのか、それとも大前家敷地であった「北東角の50坪」の中に限定的に廃棄されたのかについては明らかではない。

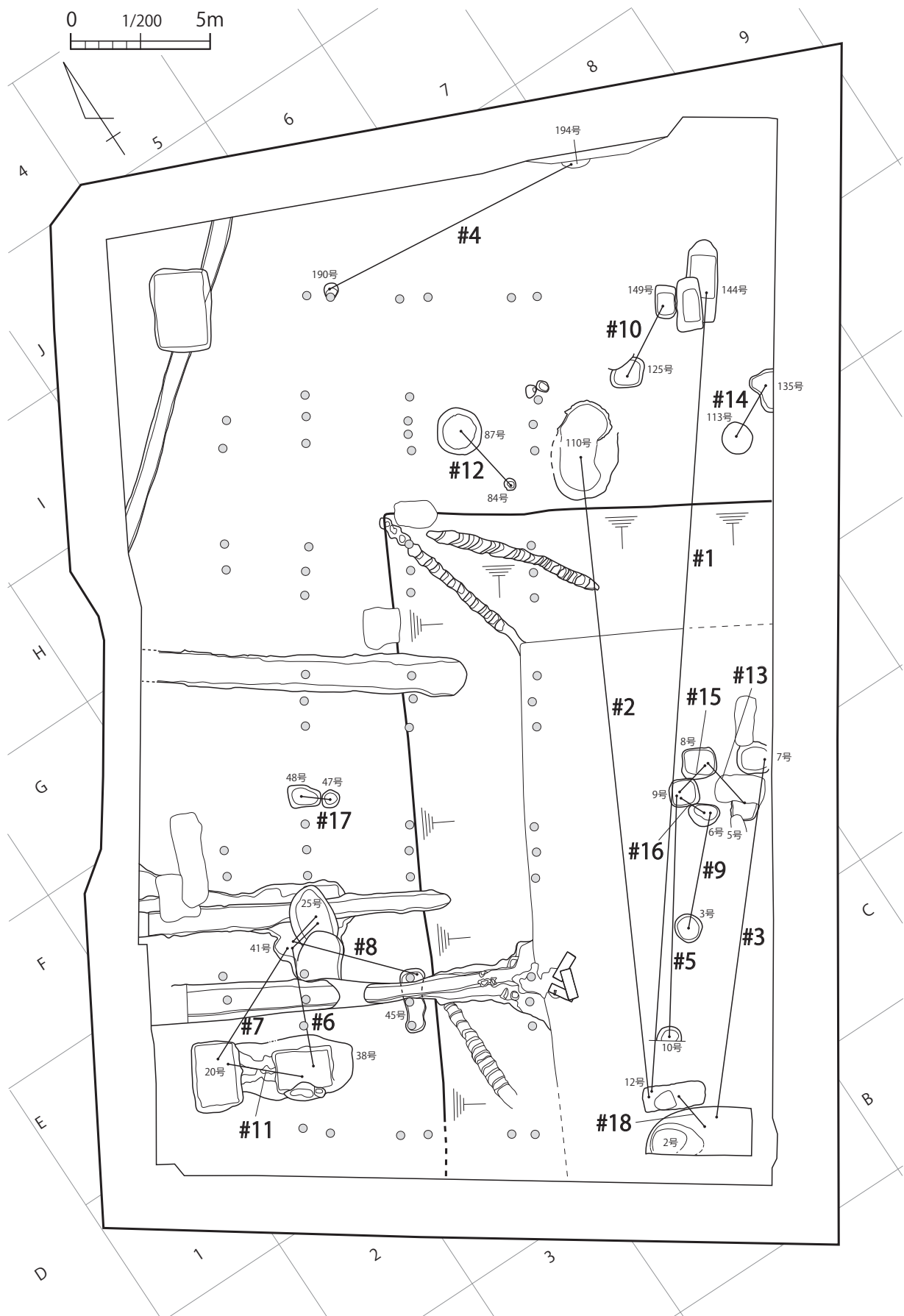
6. 遺構間接合個体

今回の調査区において異なる遺構の間で確認された接合個体は、以下の18個体である(第179図)。

- # 1: 12号(近世2土坑) + 144号(近世2土坑)、29m、焼塩壺(第133図-3)
- # 2: 12号(近世2土坑) + 110号(近世2土坑)、23m、磁器鉢(第124図-18)
- # 3: 2号(近世2土坑) + 7号(近世2土坑)、13.5m、鶴亀松竹吉祥‘かわらけ’(第112図-20)
- # 4: 190号(近代土坑) + 194号(近代土坑)、10m、磁器皿
- # 5: 9号(近世2土坑) + 10号(近世2土坑)、9m、陶器碗(第124図-1)
- # 6: 25号(近世2土坑) + 38号(近世1土坑) + 41号(近世1土坑)、5.5m、磁器仏花瓶(第56図-11)
- # 7: 20号(近世1土坑) + 41号(近世1土坑)、5m、磁器皿(第56図-2)
- # 8: 25号(近世2土坑) + 41号(近世1土坑) + 45号(近世1土坑)、4.5m、陶器鉢(第57図-11)
- # 9: 3号(近世2土坑) + 6号(近世2土坑)、4m、陶器蓋(第121図-7)
- # 10: 125号(近世2土坑) + 149号(近世2土坑)、3m、陶器瓶(第132図-7)
- # 11: 20号(近世1土坑) + 38号(近世1土坑)、2.5m、磁器瓶(第56図-4)
- # 12: 84号(近世2ピット) + 87号(近世2井戸)、2.5m、火鉢(第135図-3)
- # 13: 5～7号(近世2土坑) + 8号(近世2土坑)、2m、磁器香炉(第121図-20)
- # 14: 113号(近世2井戸) + 135号(近代土坑)、2m、磁器カップ(第109図-3)
- # 15: 8号(近世2土坑) + 9号(近世2土坑)、1.5m、陶器碗(第123図-1)
- # 16: 6号(近世2土坑) + 9号(近世2土坑)、1m、磁器猪口(第122図-1)
- # 17: 47号(近世2土坑) + 48号(近世2土坑)、1m、磁器碗(第128図-7)
- # 18: 2号(近世2土坑) + 12号(近世2土坑)、1m、陶器碗(第124図-21)

このほか、1号遺構(近世1御殿堀)と2号遺構(近世2‘かわらけ’・土玉遺構)の接合個体があるが、2号遺構は1号遺構の覆土を掘り込んだ遺構のために遺構間接合とはみなさなかった。また144号遺構(近世1期土坑)と153号遺構(近世1期土坑)あるいは41号遺構(近世1期土坑)と51号遺構(近世1上水路)の接合個体があるが、これも重複切り合い関係にある遺構間のために遺構間接合とはみなさなかった。

遺構間接合18個体のうち、東側(大前家)敷地内の接合関係は9個体(#1・#3・#5・#9・#13・#14・#15・#16・#18)、西側屋敷地内の接合関係は7個体(#4・#6・#7・#8・#11・#12・#17)、東側と西側を跨ぐ接合関係は2個体(#2・#10)である。東側と西側に跨る接合関係は、何れも屋敷境からほど近い遺構同士の接合である。東側敷地内の接合関係は、中央部の‘かわらけ’・土玉遺構群間での近距離での接合関係(#13:5～7号遺構+8号遺構、#15:8



第 179 図 遺構間接合図 (1/200)

号遺構＋9号遺構、#16：6号遺構＋9号遺構）、やや距離を隔てた接合関係（#3：2号遺構＋7号遺構、#5：9号遺構＋10号遺構、#9：3号遺構＋6号遺構）、敷地の北東部から南西部への長距離の接合関係（#1：2号遺構＋144号遺構）に分かれる。西側敷地の接合関係は、屋敷地西側の20号遺構・25号遺構・38号遺構・41号遺構を中心とする中距離の接合関係（#6：25号遺構＋38号遺構＋41号遺構、#7：20号遺構＋41号遺構、#8：25号遺構＋41号遺構＋45号遺構、#11：20号遺構＋38号遺構）が主たるものとなる。調査区北東部での接合関係（#4：190号遺構＋194号遺構）、調査区東部での接合関係（#14：113号遺構＋135号遺構）は、何れも近代の所産である。

7. 阪谷芳郎・備中館・日本実業史博物館

阪谷芳郎（1863-1941）は、岡山県井原市出身の実業家・政治家である。大蔵省入省後、渋沢栄一の娘琴子と結婚し、第一次西園寺内閣大蔵大臣、東京市長、貴族院議員、太平洋問題調査会理事、日本ホテル協会会長、専修大学学長などを歴任した。1898（明治三十一）年に小石川原町126番（現在の白山四丁目7～10番地）の6000坪余りの土地を購入した。阪谷邸の本体は、白山四丁目8番地に所在していた。調査区となった白山四丁目10番地6（旧：原町126番7）は、阪谷邸敷地の北西端に該当し、2018（平成三十）年に発掘調査された日本銀行本店原町家族寮地点（東京都埋蔵文化財センター2020）は敷地の南東端にあたる。今回の調査区について法務局に所蔵されている土地台帳の記載によって、阪谷芳郎から1913（大正二）年に財団法人備中館に寄付され、1950（昭和二十五）年に最高裁判所に売却された経緯が確認された。

備中館は、岡山県出身学生のための寄宿舎として1899（明治三十二）年に設置され、1901（明治三十四）年に阪谷芳郎から369坪の土地が寄付されて学生寄宿舎が建設された（16頁：写真-1、aに掲載された肖像は、阪谷芳郎氏、広瀬1972ほか故阪谷子爵記念事業会1951：638頁に記載あり）。備中館は、1913（大正二）年に財団法人として認可され、1956（昭和三十一年）年に白山四丁目10番地6から南西に134m離れた白山四丁目8番地4に移転し、現在も当地で学生たちの宿舎として利用されている。

阪谷芳郎の義父渋沢栄一が1931（昭和六）年に死去し、嫡孫の渋沢敬三は祖父の願望であった「日本実業史博物館」（アソウ2007）の地鎮祭を1939（昭和十四）年に飛鳥山の地で行なった。しかし戦局悪化のために必要な資材が入手できずに完成に至らなかった。阪谷芳郎も1941（昭和十六）年に死去し、渋沢敬三は嫡子である阪谷芳直から1942（昭和十七）年に原町の阪谷邸を購入して「日本実業史博物館 分館」とした。渋沢敬三は1942（昭和十七）年に日本銀行副総裁に就任したため、開館に備えて第一銀行に保管されていた膨大なコレクションを1943（昭和十八）年に旧阪谷邸の「日本実業史博物館 分館」に収納した（渋沢青淵記念財団竜門社1986：66-67頁、五十嵐卓2002：13頁、大谷2015：146頁、無記名1943：50頁）。しかし戦後になって旧阪谷邸がGHQに接収されたため（阪谷2000：679頁）、「日本実業史博物館」は実現することなく、その収蔵品は「日本実業史博物館準備室旧蔵資料」として大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館で保管されている（山田1996）。

8. 総括

都心部での再開発に伴う発掘調査で検出される遺構群は、調査区内部で完結する遺構と共に、より広がりのある全体的な遺構の一部であることも多い。本調査区で検出された御殿堀（1号遺構）は、そうした部分的遺構の典型例である。上野館林藩下屋敷が綱吉の5代将軍就任に伴って小石川御殿となり、1698（元禄十一）年に全周約二キロに及ぶ壮大な水堀が構築された。今回「原町西」と名付けられた箇所から検出されて「1号遺構」と名付けられたその痕跡は、遺構全体のごく一部に過ぎない。御殿堀の北東部分およそ600mにわたっては、現在も白山4丁目の住宅地の地中に、そして他の部分は小石川植物園の敷地内に遺存していることが明らかになってきた。現在に至るまで、「原町遺跡」、「白山御殿跡遺跡」、「小石川御薬園跡遺跡」とそれぞれの発掘調査がなされるたびに、さまざまな遺跡名称で報告されてきたこれらの遺構は、往時には「御堀の端には桜の大木ありて春は花盛りなり」（太田南畝 1790、1988：554頁）と詠われた巨大な一つの水堀であった。

今回御殿堀の北西法面で確認された千川上水からの取り入れ口についても、同様である。千川上水は、「原町西」から18.6km西方の西東京市と武蔵野市の境界に位置する玉川上水の分水口である堺橋に始まる上水路である。今回は、その長大な遺構の数ある末端部の一部が検出された。

膨大な‘かわらけ’と土玉が出土した2号遺構については、発掘できたのは全体のおそらく半分に過ぎないと思われ、残存部分はさらに南東側の大前家敷地側に広がっている。そもそも膨大な‘かわらけ’と土玉の出自である瘡守稲荷が所在したであろう場所も、調査区南東方向に続く大前家敷地の残余部分になお残されていると推定されている。こうした近世武家屋敷内における神仏公開の様相については、大名屋敷については研究が深まっているが（岩淵 2003、2006、2021）、幕臣屋敷における稲荷信仰の実態については未だ明らかでない（滝口 2019）。

近代になって「小石川原町126番」という広大な敷地を所有した阪谷芳郎邸についても、今回の調査区である「原町西」とされた「126番の7」というエリアは、阪谷邸を構成していた空間のごく一部に過ぎない。

今回の調査対象となった「原町西」と名付けられた土地では、様々な時代に様々な広がりをもった土地利用がなされてきたが、今回の発掘調査によってその一端が明らかになった。（五十嵐）



写真-1：239号遺構出土 兵隊人形
型枠（第157図-10：241頁）

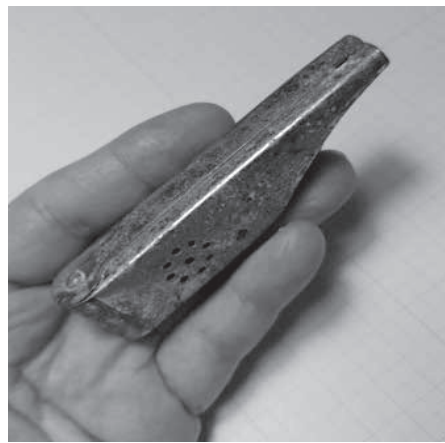


写真-2：包含層出土 金属製携帯歯ブラ
シ（第172図-11：257頁）

【文献】

- 愛知県陶磁美術館 2022『昭和レトロモダン - 洋食器とデザイン画 -』企画展図録
- アソウ・ノリコ 2007「私的な公共 幻の澁澤青洲翁記念実業博物館」『歴史と民俗』
神奈川大学日本常民文化研究所論集 23、35-51 頁
- 五十嵐 彰 2023「遺跡だより 138 文京区 原町西遺跡」『たまのよこやま』第 135 号、東京都埋蔵文化財センター報、4 頁
- 五十嵐 彰 2024a「文京区 原町西遺跡」『遺跡発掘調査発表会 2023（令和 5 年度）発表要旨』
東京都埋蔵文化財センター、5-6 頁
- 五十嵐 彰 2024b「江戸幕府のお堀と江戸庶民の笠森稻荷信仰」『東京の文化財』第 136 号、
東京都教育庁地域教育支援部管理課、4-5 頁
- 五十嵐 彰 2024c「白山四丁目地区（原町西遺跡）」『東京都埋蔵文化財センター 年報（令和 5 年度）』
第 44 号、東京都埋蔵文化財センター
- 五十嵐 卓 2002「渋沢敬三と日本実業史博物館 - 草稿「ひとつの提案」にみる博物館への眼差し -」
『民具マンスリー』第 35 巻 第 7 号、9-14 頁
- 市村 慎太郎 2010「近現代ガラス製目薬瓶の型式学的研究」『大阪文化財研究』第 37 号、31-52 頁
- 岩本 馨 2015「徳川綱吉政権の武家地政策と幕臣編入家臣団の動向」『日本建築学会計画系論文集』
第 80 巻 第 711 号、1213-1221 頁
- 小川 顕道 1814『塵塚談』（神郡 周 校注・解説 1981『塵塚談 俗事百工起源』古典文庫、現代思潮社）
- 及川 益夫 2008『大正のカルチャービジネス - 絵画通信教育と広告イラスト -』皓星社
- 大谷 明史 2015『渋沢敬三と竜門社 - 「伝記資料編纂所」と「博物館準備室」の日々 -』勉誠出版
- 大松 駿一 1996『千川上水三百年の謎を追う』東銀座出版社
- 小川 望 2008『焼塩壺と近世の考古学』同成社
- 奥野 麦生 1989「黒浜式土器の系統性とその変遷」『土曜考古』第 13 号、土曜考古学研究会、
21-55 頁
- 小野 正文ほか 1986『釈迦堂 I』山梨県教育委員会
- 及川 益夫 2008「ホーカー液と堀越嘉太郎」『大正のカルチャービジネス - 絵画通信教育と広告イラスト -』皓星社、205-297 頁
- 梶木 理央 2020「近代ガラス製造業における製瓶技術の発展過程 - 考古学資料の検討から -」『GLASS』
第 64 号、3-15 頁
- 川崎 重恭 編 1917『江戸叢書 巻の八』江戸叢書刊行會編纂
（筆者不詳 1846「江戸風俗惣まくり」全壺冊：15-16 頁）
- 菊地 真ほか 1996『上野忍ヶ岡遺跡国立西洋美術館地点調査報告書』
国立西洋美術館埋蔵文化財発掘調査委員会
- 北区教育委員会 2003『田端不動坂遺跡Ⅴ』北区埋蔵文化財調査報告 30 集
- 久保田 厚子 2011「日本の洋食器史（4）- 富士硬質陶器 -」『岡山県立大学デザイン学部紀要』
第 17 巻 第 1 号、3-6 頁

- 国立大学法人東京大学・文京区教育委員会 2023『国指定名勝及び史跡小石川植物園（御薬園及び養生所跡）第1地点 - 東京大学大学院理学系研究科附属植物園（本園）新温室等新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』文京区埋蔵文化財調査報告書 第147集
- 故阪谷子爵記念事業会 1951『阪谷芳郎傳』
- 小林 凱金・中島 義明 1954『タイルと衛生陶器の知識並施工法』城南書院
- 斎藤 進 2009「型抜きあそび - 夢中になったイロ塗りと得点集め -」『下町風俗史料館 號外』台東区下町風俗史料館、1-3 頁
- 阪谷 芳直 2000「巻末の記 - 祖父阪谷芳郎について -」『阪谷芳郎 東京市長日記』尚友叢書 12、663-683 頁
- 櫻井 清彦ほか 1986『東京都荒川区道灌山遺跡発掘調査報告書』荒川区道灌山遺跡調査団
1988『道灌山遺跡 D 地点』荒川区道灌山遺跡調査団
- 塩野崎 直子他 2008『東京都千代田区 三番町遺跡』加藤建設株式会社
- 渋沢青淵記念財団竜門社 1986「日本実業史博物館設立計画」『竜門社百年史』66-67 頁
- 渋谷 葉子 2023「小石川植物園の土地利用に関する一考察 - 第1地点を中心に -」『小石川植物園（御薬園跡及び養生所跡）第1地点《第4分冊》』75-91 頁
- 清水 司 2020「群馬県内出土の釈迦堂 Z3 式土器について (1) - 新資料の紹介と事例分析を中心に -」『地域考古学』第5号、地域考古学研究会、137-150 頁
- 清水 司 2023「群馬県内出土の釈迦堂 Z3 式土器について (2)」『地域考古学』第7号、地域考古学研究会、101-108 頁
- 清水建設株式会社 2003『青淵文庫保存修理工事報告書』渋沢青淵記念財団竜門社発行
- 縄文セミナーの会 2017『第30回縄文セミナー 縄文前期中葉の型式間交渉の諸問題』縄文セミナーの会
- 鈴木 徳雄 1988「東葛地域における縄紋文化の展開—縄紋前期の遺跡群形成に関する予察—」『東葛上代文化の研究』古宮・下津谷両先生還暦記念祝賀事業実行委員会、17-27 頁
- 鈴木 徳雄 2006「児玉丘陵周辺における縄紋集落の推移 - 宮内上ノ原遺跡の縄紋前・中期集落の位置 -」『宮内上ノ原遺跡Ⅱ - C・D 地点の調査 -』本庄市遺跡調査会報告書第20集、27-35 頁
- 高橋 康雄 1982「田河水泡『凸凹黒兵衛』の主人公・黒兵衛」『アサヒグラフ』第3084号、46-47 頁
- 田中 和之 2008「羽状縄文系土器様式」『総覧縄文土器』アムプロモーション、234-241 頁
- 丹野 祥枝 2018「国指定名称及び史跡 小石川植物園（御薬園及び養生所跡）」『考古学ジャーナル』第710号、27-30 頁
- 千葉 正樹 2005「江戸絵図の論理 - 江戸大絵図小石川地域の分析から -」『江戸の広場』吉田 伸之・長島 弘明・伊藤 毅 編集、東京大学出版会
- テイケイトレード株式会社 2008『東京都文京区 林町遺跡 - 事業用地開発計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - B-63』住友不動産
- 東京航業研究所 2021『白山4丁目126番7（地番）地点埋蔵文化財試掘調査報告書』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004「東京大学構内遺跡発掘調査略報 - 7. 総合研究博物館小石川分館

- 地点発掘調査略報 - 『東京大学構内遺跡調査研究年報』第 4 号
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006 「東京大学構内遺跡発掘調査報告 -1. 理学系研究科附属植物園研究温室地点発掘調査報告 -」 『東京大学構内遺跡発掘調査研究年報』第 5 号
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2008 「東京大学白山構内の遺跡 総合研究博物館小石川分館地点発掘調査報告」 『東京大学構内遺跡調査研究年報 6 -2006 年度 -』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012 「東京大学白山構内の遺跡 理学系研究科附属植物園本園 下水・電源ケーブル埋設枡・埋設溝地点発掘調査報告」 『東京大学構内遺跡調査研究年報』第 11 号
- 東京都埋蔵文化財センター 1996 『多摩ニュータウン遺跡 No.457 遺跡（本文・図版編）』 東京都埋蔵文化財センター調査報告 第 35 集
- 東京都埋蔵文化財センター 1997 『菅原神社台地上遺跡』 東京都埋蔵文化財センター調査報告 第 46 集
- 東京都埋蔵文化財センター 2002 『お茶の水貝塚 - 山楽病院若葉寮地区 -』 東京都埋蔵文化財センター調査報告 第 120 集
- 東京都埋蔵文化財センター 2020a 『田端西台通遺跡 - 東京都市計画事業田端二丁目付近土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 -』 東京都埋蔵文化財センター調査報告 第 349 集
- 東京都埋蔵文化財センター 2020b 『小石川植物園内貝塚・原町遺跡 - 日本銀行本店原町家族寮地点における埋蔵文化財発掘調査 -』 東京都埋蔵文化財センター調査報告 第 351 集
- 東京都埋蔵文化財センター 2024 『元浅草遺跡 - 都立白鷗高等学校附属中学校仮設校舎建設に伴う埋蔵文化財調査 -』 東京都埋蔵文化財センター調査報告 第 386 集
- 土岐 仲雄 1934 「東京市道灌山石器時代遺物包含層発掘報告」 『史前学雑誌』第 6 巻 第 4 号、29-42 頁
- 東洋大学 2006 『東京都文京区 戸崎町遺跡』
- 中野 高久 2000 「型押し文土器皿」 『江戸在地系土器の研究』第 4 号、江戸在地系土器研究会編集、1-11 頁
- 成瀬 晃司 2008 「白山御殿の惣囲いについて」 『東京大学構内遺跡調査研究年報 6 -2006 年度 -』 東京大学埋蔵文化財調査室、171-184 頁
- 白山四丁目遺跡調査会 1981 『文京区 白山四丁目遺跡』
- 濱屋 雅軌 2016 「近現代における田代商店のアメリカ向け輸出陶磁器の意匠」 『比較生活文化研究』第 23 号、日本比較生活文化学会編、21-30 頁（2022 『日本近現代におけるアメリカ向け陶磁器とその周辺 - 意匠を中心に見る -』 130-142 頁所収）
- 濱屋 雅軌 2017 「近現代における松風陶器会社のアメリカ向け輸出磁器の意匠」 『比較生活文化研究』第 24 号、日本比較生活文化学会編、31-40 頁（2022 『日本近現代におけるアメリカ向け陶磁器とその周辺 - 意匠を中心に見る -』 83-96 頁所収）
- 濱屋 雅軌 2018 「近現代における名古屋製陶所のアメリカ向け磁器の意匠」 『比較生活文化研究』第 25 号、日本比較生活文化学会編、1-11 頁（2022 『日本近現代におけるアメリカ向け陶磁器とその周辺 - 意匠を中心に見る -』 144-162 頁所収）
- 濱屋 雅軌 2020 「近現代にアメリカに渡った深川製磁製磁器の意匠」 『比較生活文化研究』第 27 号、

- 日本比較生活文化学会編、41-50 頁（2022『日本近現代におけるアメリカ向け陶磁器とその周辺 - 意匠を中心に見る -』98-114 頁所収）
- 早坂 広人 1999「古入間湾沿岸における黒浜期の様相」『土曜考古』第 17 号、土曜考古学研究会、1-10 頁
- 広瀬 一郎 1972「備中館のあらまし」『しのめ』第 17 号、12-13 頁
- 文京区遺跡調査会 1995『原町遺跡 - 徳島県職員住宅建設に伴う発掘調査報告書 -』
文京区埋蔵文化財調査報告書 第 8 集
- 文京区遺跡調査会 1996『原町遺跡 第Ⅱ地点 - 防火水槽建設に伴う発掘調査報告書 -』
文京区埋蔵文化財調査報告書 第 12 集
- 文京区遺跡調査会 2000a『指ヶ谷町遺跡 - 文部省施設建設に伴う埋蔵文化財調査 -』
文京区埋蔵文化財調査報告書 第 19 集
- 文京区遺跡調査会 2000b『林町遺跡 第Ⅱ地点 - 集合住宅建設に伴う発掘調査報告書 -』
文京区埋蔵文化財発掘調査報告書 第 21 集
- 文京区遺跡調査会 2003a『白山御殿跡ほか - 集合住宅建設に伴う発掘調査報告書 -』
文京区埋蔵文化財調査報告書 第 28 集
- 文京区遺跡調査会 2003b『一行院跡ほか - 集合住宅建設に伴う発掘調査報告書 -』
文京区埋蔵文化財調査報告書 第 30 集
- 文京区教育委員会 2010a『大塚三丁目遺跡 - 筑波大学大塚地区校舎・放送大学東京文京学習センター
棟整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 -』文京区埋蔵文化財調査報告書 第 98 集
- 文京区教育委員会 2010b『千石 1 丁目南遺跡 - (仮称) 文京区千石 1 丁目 4 番地内における
公共施設建築計画に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 -』文京区埋蔵文化財調査報告書
第 102 集
- 文京区教育委員会 2010c『大塚三丁目遺跡 第 2 地点 - 筑波大学大塚地区校舎・放送大学学園
東京文京学習センター棟整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 -』文京区埋蔵文化財調査報告書
第 104 集
- 文京区教育委員会 2012a『白山五丁目南遺跡 - 東洋大学白山キャンパス創立 125 周年記念研究棟
(仮称) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』文京区埋蔵文化財調査報告書 第 110 集
- 文京区教育委員会 2012b『小石川御薬園跡 - 小石川植物園周辺道路第一期整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 -』文京区埋蔵文化財調査報告書 第 118 集
- 文京区教育委員会 2013a『小石川植物園西遺跡 - 白山三丁目 7 番先 (都下水道局・小石川植物園先)
地点事業計画に伴う埋蔵文化財調査報告書 -』文京区埋蔵文化財調査報告書 第 127 集
- 文京区教育委員会 2013b『林町遺跡 第 3 地点 - 事業用地開発計画に伴う埋蔵文化財調査報告書 -』
文京区埋蔵文化財調査報告書 第 132 集
- 文京区教育委員会 2014a『戸崎町遺跡 第 3 地点 - 東洋大学白山第 2 キャンパス工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 -』文京区埋蔵文化財調査報告書 第 131 集
- 文京区教育委員会 2014b『千石一丁目南遺跡 第 2 地点 - (仮称) 千石地域活動拠点施設建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 -』文京区埋蔵文化財調査報告書 第 136 集

文京区教育委員会 2016『白山五丁目南遺跡 第2地点 - 東洋大学白山キャンパス新教室棟（仮称）の

建築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』文京区埋蔵文化財調査報告書 第157集
文京区教育委員会 2017『国指定名勝及び史跡小石川植物園（御薬園及び養生所跡）第2地点 -
小石川植物園西側道路整備工事に伴う埋蔵文化財確認調査報告書 -』文京区埋蔵文化財
調査報告書 第148集

文京区教育委員会 2020『林町東遺跡 - 文京区立明化小学校改築工事に伴う埋蔵文化財発掘
調査報告書 -』文京区埋蔵文化財調査報告書 第177集

文京区教育委員会 2024『林町遺跡 第4地点 - 文京区立林町小学校校舎増築工事に伴う埋蔵文化財
発掘調査報告書 -』文京区埋蔵文化財調査報告書 第191集

町田 聡 2018「2つの小石川御殿図について」『文京区文化財年報 - 平成28(2016)年度 -』
文京区教育委員会、41-57頁

三代 俊幸・小出 匡子 2011「佐賀市における近世土師器一括資料の出土事例と土師器生産について」
『幕藩体制下で例年献上された陶磁器』第1回近世陶磁研究会資料、近世陶磁研究会、
186-294頁

武蔵文化財研究所 2004『原町東遺跡 - 学校法人東洋大学新校舎建築に伴う埋蔵文化財発掘調査
報告書 -』

村山 卓 2024「『白い坏形カワラケ』考」『研究紀要』第38号、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、
153-184頁

山口 佐栄子 2013「『のらくろ』『蛸の八ちゃん』『凸凹黒兵衛』の時代」『ピランジ』第32号、
24-35頁

山田 哲好 1996「日本実業史博物館準備室旧蔵資料」『史料館収蔵史料総覧』国文学研究資料館 編、
269-271頁

吉富 真知子 2015「徳川美術館蔵青磁尊形瓶に関する一考察 - 尾張徳川家の蔵帳にみる名称 -」
『金鯢叢書 - 史学美術論集 -』第42輯、徳川黎明会、43-53頁

渡辺 昭一 2017『東京都北区西ヶ原遺跡群七社神社前遺跡—西ヶ原二丁目14番30・31号地点—』
金子正司・株式会社 Acube

無記名 1943「日本実業史博物館開設に関する寄附金」『龍門雑誌』第652号、50頁

報 告 書 抄 録

ふりがな	はらまちにしいせき							
書名	原町西遺跡							
副書名	最高裁判所旧白山宿舎地区における埋蔵文化財調査							
シリーズ名	東京都埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第 389 集							
編著者名	五十嵐 彰 石崎 俊哉 江口 誠一 鬼崎 華 佐藤 亮太 渋谷 葉子 長佐古 真也 長沢 利明 山根 洋子 渡邊 稜也							
編集機関	公益財団法人 東京都教育支援機構 東京都埋蔵文化財センター							
所在地	〒 206-0033 東京都多摩市落合 1 丁目 14 番 2 TEL 042 - 374 - 8044							
発行年月日	2025 年 8 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
はらまちにしいせき 原町西遺跡	とうきょうとぶんきょうくはくさん 東京都文京区白山 ちようめ ばんち 四丁目 10 番地 8 号	13105	145	35° 43' 21"	139° 44' 38"	20230607 } 20240331	1,154㎡	再開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
原町西遺跡	宅地	縄文時代 近世 近代	竪穴建物跡 御殿堀 上水路 井戸 地下坑 地下室 溝 土坑	縄文時代：土器・石器 近世：陶磁器・土器・土製品・ 石製品・金属製品・瓦 近代：陶磁器・土器・土製品・ 石製品・ガラス製品・ 瓦・衛生陶器			縄文時代前期黒浜式 土器を主体とする竪 穴建物跡 小石川御殿の堀と堀 に接続する千川上水 大前家屋敷内の瘡守 稲荷に伴う‘かわら け’と土玉の大量廃 棄土坑	
要約	<p>原町西遺跡は、小石川植物園の北側に隣接する。縄文時代前期黒浜式土器を伴う竪穴建物跡を確認した。館林藩下屋敷を前身とする小石川御殿の周囲を取り囲む御殿堀を検出した。千川上水から御殿堀に接続する上水路を複数確認した。御殿堀が 1713（正徳三）年に埋め立てられた跡地に構築された武家屋敷に伴う諸遺構が出土した。調査区南側の一角からは、大量の‘かわらけ’と土玉が出土した。当該箇所は、屋敷内に瘡守稲荷が所在した大前家の敷地内であった。出土した‘かわらけ’と土玉は、18 世紀の人々が皮膚病の治癒を願って奉納した供え物と考えられる。‘かわらけ’と土玉が出土した遺構については、ウレタン樹脂系接着剤による剥き取りを行なった。近代以降の当該地は、東京市長などを務めた阪谷芳郎邸の敷地となり、その後氏は氏に関連した学生寄宿舎を経て、最高裁判所宿舎となった。調査区における近世の土地履歴、瘡守稲荷に関する民俗的考察、出土動物遺体の同定、御殿堀堆積物の環境学的分析、‘かわらけ’と土玉の胎土分析を行なった。</p>							

印刷仕様

表紙	レザック	215kg (四六判)
見返し	上質紙	135kg (四六判)
本文	マット系コート紙	90kg (四六判)
印刷方式	オフセット印刷	
使用インク	大豆油インク	
製版線数	150 線 (カラー 175 線)	
本書は永久保存を考慮し、すべて中性紙を使用		

文京区

原町西遺跡

—最高裁判所旧白山宿舎地区における埋蔵文化財調査—

東京都埋蔵文化財センター調査報告 第 389 集

2025 年 8 月 31 日 発行

編集・発行 公益財団法人 東京都教育支援機構
東京都埋蔵文化財センター
東京都多摩市落合一丁目 14 番 2
TEL 042 - 374 - 8044

印刷 明誠企画株式会社
東京都武蔵村山市榎 2-25-2